藝大英居士【墓所】伊勢國津市の近郊刑部村福藏寺【閲歴】代々醫を業とし、士清も青年時代京都に遊學して福井丹波守の敎を受け、その傍ら、垂加流（山崎闇齋派）の神道家玉木葦齋に神道を學んだ。和歌は近衞家について學び、後、有栖川家に學んだ。後年學者として名聲が揚がるに及んで、諸侯の中で召し抱へようとしたが、自由を束縛せらるゝことを虞れて肯じなかつた。但し津の藤堂侯からは客分のやうにして十五人扶持を受けてゐた。士清の後は子士逸、孫士行がその神道說を繼いだが、その後は單に醫として業を繼いだ。

【業績・著書】士清は學和漢を兼ね、「伊勢の淡齋」と稱せられた一世の學者であつたが、その代表的著述は「日本書紀通證」（三十五卷、河北景禎及び藤原實連の序あり。寶曆十二年刊）と「和訓栞」（別項）とである。前者は「日本書紀」の註解で、「日本紀私記」「日本紀纂疏」「神代口訣」、その他の書を參照して成つたもので、頗る詳細を極め、殊に古事熟語等は經史佛書等を引いて出典を明かにしてゐる。尤も士清は垂加流の人であるから、古學家の說とは大に異なるものがあるが、ともかく本書は國語學史上特記すべきものであることは、その第一卷の「倭語通言」と標した條に、國語の用言の活用は五十音圖に從ふべきことを說いてゐるからである。本書は眞淵の「語意考」（別項）よりも二十七年早く刊行されたものであつて、刊行された書物としては、本書は用語研究に於ける最古のものである。勿論その說は不十分なものではあるが、然し五十音圖の第五段に及んでゐるものは雅語にあらずと云つてゐる點は、眞淵の說よりも勝れたものである。後に本居宣長は、士清を語學界の猿田彦と賞めたが、必ずしも溢美の言ではない。次に「和訓栞」は未定稿かとも考へられるが、本書以前の國語辭書は單に言葉を蒐集したもの、或は極めて通俗的な不完全なもの、或は語源の漢字の音訓を記したのみのもの、或は語源の解釋を主としたものであつて、未だ國語辭書としては十分な組織を有するものはなかつた。しかも本書は、その組織が大きく語彙の豐富であること、その解釋が詳しく且つ信賴するに足るものであることは、從前の辭書と同日の談ではない。本書は「雅言集覽」「俚言集覽」（各別項）と共に江戸時代の辭書の代表であり、國語辭書史上に一時期を劃するものである。加之、その大綱の條に、音韻、漢字の音訓、假名、手爾波等について記してゐる事は、國語學上注意すべきものである。以上の兩書の外、「勾玉考」「反古塚記」「鋸屑譚」（各一卷）等の著がある。この他にも著書があつたやうであるが、安永四年（六十七歳）稿本を地下に埋めて反古塚を作つてゐるから、その時に埋沒したやうである。

谷川士清（谷川家藏）

【參考】谷川淡齋肖像附記　平出鏗二郎（言語學雜誌二ノ一）○谷川士清先生傳（谷川士清先生事蹟表彰會編）

言靈指南（ことだまのしるべ）　語學書　二編三册　【龜田】

【著者】黑澤翁滿【刊行】上編一册、嘉永五年刊、中編二册安政三年刊、下編未成。【解說】上編は、活用及び手爾波の呼應を簡單に記したものである。中編の上卷は活用、係結及び假名遣に就いて記してゐるが、活用に於て春庭以來、中二段活と呼んでゐたものを上二段活と改稱した。これは今日も用ひられてゐる名稱である。また加行變格及び佐行變格を三段活と云ひ、奈・良二行の變格を四段活用に收めてゐる。假名遣に於て簡便な記憶法を用ひてゐる事は注意すべきである。中編の下卷は手爾波四百餘を五十音順に列擧し、一々例證を出して語意用法を說いたもので、中には注目すべき說もある。下編は刊行されなかつたが、我が五十音が外國の音に勝れてゐるのを說く豫定であつたと云ふ。

言靈妙用論（ことだまめうようろん）　語學書　二卷二册　【龜田】

【著者】堀秀成【成立・刊行】慶應二年十二月稿成る。明治十年四月の自序があり、同年三月刊。【解說】音義說の由來、及びその概要を書いたものである。先づ我が國は古は言靈のさきはふ國と稱せられた事、假名遣の正しかつた事を記し、次に外國の語は侏離駄舌で鳥獸萬物の聲に近い。例へば、剋・彎・椀は犬の聲に近く、彬・賓・濱は馬の聲に近く、坂・伴は板を打つ音の如く不正不純で、我が國語とは比較にならぬほど劣つてゐるを云ひ、次に中昔漢語を多く用ひる頃になつても、なほ重要な文書は國語で記してゐたが、漸次國語は廢れた。而して元祿の頃契沖が出て、古語の學が開け、次いで東麿・眞淵・宣長・篤胤等が出て、古語古格が明かになつた。而して學界の大勢は、古語の學から音義の學に進んだ。音義學の鼻祖は「雅言音聲考」（「雅語音聲考」の誤り）の著者鈴木朖（あきら）（別項）である。第二代は富樫廣蔭、第三代は自分である。自分の時に至つて、父母の音には一音五義、子音三十六には各々三義ある事を明かにし得た。而してこの學問は今後益々研究せねばならぬものである（以上上卷）。次に人は母の胎內にある時、產靈神から聲音の種を賜はるものである。人は生れて後、見るもの聞くものにつけて心に感じ、それに從つて卽ち音義の原則に依つて言語は生ずる。次に從來阿（あ）の音を諸音の源と云つてゐたが、有（う）の音が根源である事、ウクスツヌフムユルウの開合の事、子音三十六音の分生の次第等を述べてゐる。音義說の概要を知るためには便利なものである。　【龜田】

箏の組歌（ことのくみうた）　音曲　【名義】箏曲用のために、短い歌幾首かを列ねて一つの集團としたの意。【起原】箏の古曲は高雅に過ぎるので、慶安年中俗耳に入りやすいやうに八橋檢校が編成したのに起る。【形式・詩材】組歌にも種類はあるが、何れも今樣（別項）の形に近い歌の、ほぼ同形なるもの數首を列ねて組成し、その各首の間に意味の連絡を缺いてゐる。當時長篇の作をなす人を得難かつたためにかうした事をしたらしい。想卽ち詩材は「源氏物語」「伊勢物語」又は古歌古詩に借りたものが多い。【區分】編成時代の上から見て、古曲・古新曲・中古新曲・新曲の四つに分ける（箏歌參照）。而して中古新曲・新曲からは、曲調も漸く新樣に改まり、歌の上にも多少統合の趣を見出し得た。卽ち飛燕曲が李白の淸平調の絕句三首を意譯したものであり、三つの調が王昌齡の詩意に成るが如きである。又「四季の

戀」や「四季の富士」はその四季といふ點に於て、「六玉川」は玉川といふ點に於て纏められてゐる。檢校等の作といふは曲だけの事で、歌までをいふのではない。歌は恐らく俳人・好事家、稀には堂上方の筆に成るものもあらう。典雅の趣はあつても文意の暢達を缺き、到底妙齡の子女や、目に文字のない者の迎へ得るものでない。これは組歌全體に通ずる弱點である。

【參考】箏曲大意抄山田松黑〇箏曲と地唄の味　ひ方　藤田斗南

後鳥羽院（ごとばゐん）　歌人　【御名】尊成（たかひら）。

【法諱】良然。御追號は初め顯德院、後、後鳥羽院。【御別名】隱岐御遷幸の關係上、多く隱岐院とも申す。【生歿】治承四年七月十四日御降誕、延應元年（一八九九）二月二十二日隱岐國苅田鄕にて崩御。寶算六十。【閱歷】高倉天皇の第四皇子、御母は高倉帝の典侍七條院藤原殖子（ときこ）、贈左大臣信隆女。御文事の才は父君高倉帝より繼承されたものと考へてよい。後鳥羽院が、武家政治創始の時世に際會され給うた御宿命のほど、痛みても餘りあることである。承久三年七月、北條氏討滅の御企て破れて隱岐遷幸の御身となられ、離れ小島の巖窟同樣の御潛居が、實に十九年の長きに及ばれた。法華經を信仰されたとはいへ、「島よりの御文」に見られる如き、呪ひと悶えの中に世を終へ給うたのである。崩御の月二十六日苅田山中に火葬し奉り、故の北面藤原能茂が御骨を首にかけて歸洛、五月十六日大原の勝林院に藏し奉つた。國忌山陵は遺詔により置かない。なほ寶治元年（崩御後八年）に武家が鶴岡山下に後鳥羽天皇祠を建てたと云ふ事によつても、武家の院に對する自責の程を知ることが出來る。

【御業績】院は元曆聖主と尊稱せらるゝほど多能多藝にましまし、歌學の外に、畫道・管絃道・蹴鞠道にも達せられた。畫は聖讃尊像・色紙型歌仙像・御自畫賛墨畫の如き素人離れのした絶品を遺された（扶桑畫人傳）。琵琶は藤原定輔、鞠は藤原雅經を師としてそれ〴〵精通された。しかし歌道の御名譽特に高く、建久九年御脫屐より承久三年の隱岐遷幸に及ぶ約二十ケ年に亙り、歌壇空前の盛時を將來したのは、偏に院の御盛德に因ると云つても過言ではない。かの建仁元年に於ける和歌所再興の事實、元久二年の「新古今集」編纂の偉業、この二事のみを以てするもその大體を察するに足る。次に院の加はり給うた歌會又は御輯歌のものの類從本中、主なるものを列擧する。

正治二年院御百首歌　御集　（續類三八二）
正治二年二度目百首歌　（類　一七〇）
正治二年三百六十番歌合　（續類四〇八）
仙洞十人歌合（正治二年）　（類　一九〇）
老幼五十首歌合（建仁元年）御集　（類　一九一）
新宮撰歌合三十六番（同年）　（類　一九一）
影供歌合十八番（同年）　（類　一九二）
撰歌合五十番（同年）　（類　一九二）
內宮御百首、外宮御百首（同年）御集　（類　四二三）
千五百番歌合（同年）御集　（類　四二三）
五十首御會（同年）御集　（類　四二三）
水無瀨釣殿當座六首歌合（同年）　（類　一九三）
水無瀨殿戀十五首歌合七十五番（同年）　（類　一九三）
水無瀨櫻宮十五番歌合（同年）　（類　一九三）
八幡若宮撰歌合十五番（建仁三年）　（類　一九三）
釋阿九十賀御會歌（同年）御集　（類　四二三）
北野社歌合十五番（元久元年）　（類　一九四）
八幡上賀茂下賀茂住吉各三十首御會（同年）御集　（類　四二三）
元久詩歌合三十八番（同年）　（類　二二三）
日吉三十首御會（元久二年）御集　（類　四二三）
新古今和歌集竟宴和歌（同年）　（類　一七八）
卿相侍臣歌合三十番（建永元年）　（類　一九四）
內宮外宮各三十首御歌（承元元年）御集（類四二三）
鴨御祖社歌合十四番（同年）　（類　一九四）
賀茂別雷社歌合十八番（同年）　（類　一九四）
最勝四天王院障子和歌集（承元二年）（類　一七八）
五人百首（建曆二年）御集　（類　四二三）
建保御百首（建保四年）御集　（類　四二三）
詠五百首和歌（同年）御集　（類　四二三）
撰歌合十番家隆判（嘉祿二年）御集　（類　二二〇）
遠島御歌合八十番（嘉禎二年）（別項）（類　一九九）
時代不同歌合百五十番　（類　二一五）

【御著作】〔御製〕上に掲げた歌集でほぼ盡きてゐるが、一部にまとめられたものとして、「後鳥羽院御集」（別項）がある。勅撰集に入る御製は、新古今集三十五首、續後撰集二十五首、續古今集四十九首、續拾遺集十九首、新後撰集十首、玉葉集十七首、續千載集十四首、續後拾遺集九首、風雅集二十四首、新千載集十首、新拾遺集十二首、新後拾遺集六首、新續古今集十八首。その他、次の諸撰集には何れも御製が採られてゐる。その他「雲葉和歌集」（類從本一五二）、「新三十六人撰」（同一九五）、「自讃歌」（續類從本三七六）等。〔歌論御文章〕後鳥羽院御口傳（別項）〇千五百番歌合勅判序（扶桑拾葉集）〇新古今和歌集跋文（同上）〇島よりの御文（同上）〔御記錄〕後鳥羽院御記（類從本）〇後鳥羽院宸記（改定史籍集覽別記）等。〔御撰集〕主なるものは、「新古今和歌集」（別項）「道助法親王家五十首和歌」（類從一七七）「定家家隆兩卿撰歌合」（類從本二一六）「今古珠玉集」等。

後鳥羽院（傳信實筆）

【御歌風】建仁元年和歌所再興に當り、召された歌人は、源通信・九條良經・藤原定家・源親長・鴨長明等であり、院の歌道御修業は、その前四五年間の御精進によるところ多かつたやうに思ふが、何と云つても時の長老俊成の御影響を疎外することは出來ぬ。建仁三年、俊成九十賀の大會の催されたのも院の思召に出でたもので、俊成調の歌壇に於ける隱然たる勢力を察し得る。

ほのぼのと春こそ空に來にけらし天のかぐ山霞たなびく

見わたせば山もと霞む水無瀨川ゆふべは秋となに思ひけむ

これ等の叙景歌は何れも名歌として（見わたせばの作は、古來三夕歌の一に加へられてゐる）、「新古今集」に選ばれ、謂はゆる新古今調を代表する歌格を有する。併しその初期の御歌集、例へば正治二年に於ける兩種の百首、三百六十番歌合の如きを參照すれば、院には時流に染み給はぬのみでなく、實に多種多樣の御作風の存したのを拜察し得る。語格上の點からのみ見るも、「昔よりいひしはこれか」「なにはの過すかな」の如き御製を拜すると、その暗く低い韻律の中に、無限な御憂愁、凄慘な御心理にひたと接し奉る感あらしめる。（後鳥羽院御集・後鳥羽院御口傳參照）

【參考】百錬抄〇眞鏡〇吾妻鏡〇後鳥羽院御集〇後鳥羽院御口傳〇扶桑畫人傳〇後鳥羽院上皇御卽位記〇後鳥羽院御靈託記〇後鳥羽院熊野行幸記〇後鳥羽院御踐祚次第〇承久御鞠記〇その他の御記宸記　〔齋藤（清）〕

後鳥羽院御集（ごとばゐんぎよしふ）　歌集　【作者】

詠五百首、詠百首、內宮御百首、外宮御百首、八幡・賀茂・鴨・住吉・日吉・內宮・外宮三十首を載せ、この外に春六十首、夏三十五首、秋二十三首、冬五十一首、戀五十三首、雜八十三首を載せてあるが、これは刊本に收めてある建曆二年十二月二十首御會以下の御製及び嘉祿二年撰歌合、嘉禎二年遠島御歌合の御製を部類したものである。

【價値】多藝多能にましました後鳥羽院の御生涯のうち、和歌は特に御好尙が深かつた。本集によつて承久亂以前に於ける院の歌壇的御動向、ふなり詳細な記錄を、たゞよみとる事の御作を僞作することは考へられないことであり、內容から見ても大體に於て正しいと言へる。ただ隱岐御遷幸の以前か以後か明かでないが、多分以前であらう。【諸本】群書類從卷二九二所收。【解說】後鳥羽天皇は本書の初めに、歌の初心者のために至要なる七箇條を擧げて、難題・歌合・當座の會等、歌の一般的知識を說かれ、次にその時代の歌人を批評されてあるが、その御批評には剴切なるものがある。天皇の重んじられたのは、西行・俊成で、その言葉の優にやさしく、心も深いのを賞して居られる。古い時代では、源經信・源俊

見わたせば山もと霞む水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ

これ等の叙景歌は何れも名歌として（見わたせばの作は、古來三夕歌の一に加へられてゐる）、「新古今集」に選ばれ、謂はゆる新古今調を代表する歌格を有する。併しその初期の御歌集、例へば正治二年に於ける兩種の百首、三百六十番歌合の如きを參照すれば、院には時流に染み給はぬのみでなく、實に多種多樣の御作風の存したのを拜察し得る。語格上の點からのみ見るも、「昔よりいひしはこれか」「なにとなく物あはれなる二月の」、「花か雪か問へどしら玉いはねふみ」と云ふ類の自由放膽な表現を次々に求め得べく、等しく季節歌にしても、「何となく過ぎ行く夏のをしきかな花おちはてて花ならねども」といふ類の、斬新獨自な想の詠まれたものを認め得る。又客觀的の歌以外に、抒情主觀の歌が多いので、所謂新古今的幽玄歌に止まつてゐない點を時流に比し、特に推賞申上ぐべきである。これは御歌集よりも却つて「增鏡」の如く、御治績記の中に點出された物を拜誦する方が、その感一層顯著なものがある。

奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせむ

八百萬神もあはれめたらちねのわれ待ちえむと絕えぬ玉の緒

限りあればさても堪へける身の憂さよ民の藁屋に軒を竝べて

これ等の何れを拜誦するも、言々句々崇高の御主觀が迸出して、直に情感の御聲をきくやうである。歌は必ずしもその高調な表現をのみ推すのではない。「遠島御百首」の中の、

すてやらぬ憂き身の果ての悲しさよ嘆きながらもなほ過すかな

の如き御製を拜すると、その暗く低い韻律の中に、無限な御憂愁、凄慘な御心理にひたと接し奉る感あらしめる。（後鳥羽院御集・後鳥羽院御口傳參照）

【參考】百錬抄○增鏡○吾妻鏡○後鳥羽院御集○後鳥羽院御口傳○扶桑畫人傳○後鳥羽院上皇御即位記○後鳥羽院御靈託記○後鳥羽院熊野行幸記○後鳥羽院御踐祚次第○承久御鞠記○その他の御記宸記　【齋藤（清）】

後鳥羽院御集（ごとばゐんぎよしふ）

【編者】未詳　【別名】元暦御集　歌集　【作者】後鳥羽天皇　【成立・由來】不明である。ただ應長元年の寫本の奥書により、家隆の女、小宰相が一本を所有してゐた由を知り得る。【諸本】承應二年刊本（三卷）。續群書類從四二三所收本（二卷）。應長元年十一月寫本一卷。國歌大系所收。

【組織・內容】（一）承應刊本及び續群書類從本。內容は同じである。即ち正治二年八月御百首、同二度目百首、建仁元年三月內宮御百首、外宮御百首、同年六月千五百番御歌合、建保四年二月御百首、詠五百首和歌、建仁元年九月五十首御會、元久元年十二月八幡三十首御會、同月賀茂上社三十首御會、同賀茂下社三十首、同月住吉三十首御會、同二年三月日吉三十首御會、承元二年二月內宮三十首、同外宮三十首、承元二年十一月最勝四天王院御障子名所四十六首、建暦二年十二月二十首御會（五人百首の中）など、百首、五十首、三十首等をほぼ年代順に次第し、この外、正治二年七月北面御歌合以下、承久元年三月・八月水無瀨殿御會までの當座御會の御製を年次に列ね、終りに嘉祿二年撰歌合を收めてゐる。（二）應長寫本。詠五百首、詠百首、內宮御百首、外宮御百首、八幡・賀茂・鳴・住吉・日吉・內宮・外宮三十首を載せ、この外に春六十首、夏三十五首、秋二十三首、冬五十一首、戀五十三首、雜八十三首を載せてあるが、これは刊本に收めてある建暦二年十二月二十首御會以下の御製及び嘉祿二年撰歌合、嘉禎二年遠島御歌合の御製を部類したものである。

【價値】多藝多能にましました後鳥羽院の御生涯のうち、和歌は特に御好尙が深かつた。本集によつて承久亂以前に於ける院の歌壇的御活動の、かなり詳細な記錄を、よみとる事が出來る。いま傳はる御製の大部分をこの中に見ることが出來、また同じ想や言葉を繰返し御用ひになつたので、年次的に見てゆくと「新古今集」等に入つて、特に有名な御製が如何なる推敲を經て成れるかをも知ることが出來、「後鳥羽院御口傳」（別項）の思想を、如實に見ることが出來る。この點からも製作年月を記し、次第してあることは興味深いことである。また本集所收の歌と、承久以後の御歌とを比較すると、おのづから御不遇にましました院の御生涯の變遷が明かにせられるやうに思ふ。

【參考】列聖全集御撰解題　和田英松　【松浦】

後鳥羽院御口傳（ごとばゐんのくでん）

一卷　【著者】後鳥羽天皇　【別名】後鳥羽院口傳抄・後鳥羽院御抄　【成立】群書類從本の奥に、「仁治元年十二月八日、於大原山西林院普賢堂、以敎念上人所持御宸筆本、書寫之畢、頗有由來、尤可爲珍寶之」とあるが、成立年代は明かでない。敎念上人といふのは、後鳥羽院の隱岐御遷幸にも御伴した人とある。本書には書誌學的に多少の疑問はあるが、天皇の御作を僞作することは考へられないことであり、內容から見ても大體に於て正しいと言へる。ただ隱岐御遷幸の以前か以後か明かでないが、多分以前であらう。【諸本】群書類從卷二九二所收。【解說】後鳥羽天皇は本書の初めに、歌の初心者のために至要なる七箇條を擧げて、難題・歌合・當座の會等、歌の一般的知識を說かれ、次にその時代の歌人を批評されてあるが、その御批評には剴切なるものがある。天皇の重んじられたのは、西行・俊成で、その言葉の優にやさしく、心も深いのを賞して居られる。古い時代では、源經信・源俊賴を重んじられ、藤原定家に對してはそのすぐれたことは認めて居られるが、心あるさまを求めず、言葉すがたのえんに優しきを本體とするから人の眞似るべきではないとして居られる。これは後鳥羽院が幽玄美を重んじられたので、定家の有心美を稱せられなかつたためでもあらう。要するに本書の批評は、この時代の歌人の批評を代表するものである。

【史的地位】この書は、この時代の和歌の批評として注意せられるのみならず、「新古今集」の撰定の上に關係の深い後鳥羽院の歌に對する御見解を窺ひ得る點に注意せられる。從つて俊成・定家の歌論を考へる上にも、「新古今集」の性質位置を考へる上にも重要な資料となるものである。

【參考】日本歌學史　佐佐木信綱　【久松】

後鳥羽院御抄（ごとばゐんみせう）　「後鳥羽院御口傳」を見よ。

詞書（ことばがき）

和歌　【名義】和歌の題の比較的長い文章になつてゐるのをいふ。題詞と同じい。「萬葉集」では漢文で記してあるが、「古今集」及びそれ以下は和文である。【解說】

記紀の歌謠の前後にある文は、歌を中心として見ると、詞書のやうな性質を有するが、狹義の詞書は「萬葉集」その他の撰集に於ける歌の説明詞をさす。而して「萬葉集」卷九と卷十六の傳説歌の詞書を比較すると、長歌から短歌に移る過程に於て、長形式の部分が詞書に變化した點もあると見られる。詩歌に於て詞書の力を藉りて初めて理解されるやうな作品は、表現の不完全な歌と言ふべきであらうが、しかし短詩形のために、完全に一の素材を表現することの困難な場合に、詞書の力を藉りることも效果のある場合が多いのである。要するに短歌に於ては、詞書は相當に重要な作用をなしてゐるのである。（題詞參照）

【參考】萬葉集○各勅撰和歌集　〔久松〕

言葉調子（ことばしらべ）「イントネーション」を見よ。

ことばの泉（ことばのいづみ）　辭典　一册　【編者】落合直文　【成立・刊行】明治二十九年稿成り、同三十一年刊。なほ著者は本書刊行後、增補訂正に着手したが、業を終へずに歿したので、嗣子直幸は、著者の門弟と共に增補の業を繼ぎ、五年を費して「大增補日本大辭典ことばのいづみ補遺」一册を明治四十一年に刊行した。補遺の部に收めた語は七萬餘である。大正の初年に至り、更に芳賀矢一が、十萬餘語を增補し、全部に改訂を加へ、「言泉」と題し、本文五卷・索引一卷とし、昭和四年から五年にかけて刊行した。【內容】直文は「ことばの泉」を編纂するに際して二つの目的を有つてゐた。一つは、國語國文に關する一般的な事は、他に辭書を具へなくても、本書だけで事足るやうにといふ事、他の一つは、使用の便宜から、餘り浩瀚にならぬやうにといふ事であつた。その結果、所收の語は古代から現代に及び、語の種類は單に文學書類に見えるもののみでなく、政治・宗教・哲學・醫學・動植物に及び、又人名・地名・書名・年號等一般固有名詞をも含んでゐる。その結果、國語辭書とは云ふものの、一面百科辭書を兼ねたものである。而して大部なものにならぬやうにと計つたから、語釋は自然簡單である。所收の語彙十二三萬、これを五十音順に排列し、用例・出典なども簡單に擧げてゐる。【價値】本書の特徵は、語彙の範圍が頗る廣い點に在る。然しこれは一面本書の缺點でもある。即ち簡單な事は本書で一通りは用を便ずるが、少しく專門的な方面に用ひようとすると、語彙に於ても不十分であり、語釋も要を得てはゐるが、簡單を旨としてゐるから十分とは云ひ得ない。その辭書としての史的地位は、「言海」（別項）に遠く及ばず、內容的價値に於ても「言海」を凌駕してゐるとは必ずしも云ひ得ないが、明治時代に於ける國語辭書としては、「言海」に次ぐものとして注意すべきである。なほ改修せられた「言泉」は頗る面目を改め、語彙の豐富なことは、今日のところ國語辭書中第一である。然しその學術的價値は必ずしも「大日本國語辭典」（別項）の上にあるとは斷言し難い。

【參考】落合直文先生と其歌　早川幾忠（光五ノ七）

詞の緒環（ことばのをだまき）　語學書　二卷　【著者】林國雄　【刊行】天保九年春。天保八年正月の藤原寬海・源瑞雄の序。同七年孟春の自序がある。【由來】本書はもと一册で「詞の綾緒」と云つてゐた。刊本の上卷の部分がこれである。刊行の際に下卷の部を書き加へて題を改めたものである。【內容】上卷は主として「詞の玉緒」「詞八衢」（各別項）の説を補正したものであつて、手爾波の係結、活用に關して記し、下卷は詠歌について、語法、手爾波の係結の記憶法等を記してゐる。先づ上卷には、「詞の玉緒」に「は、も、徒」、「ぞ、の、や、何」、「こそ」の三條に分けて手爾波の格を説いてゐるが、このうち「の」は重き意と輕き意のものとある。前者は「玉緒」の説の如く「ぞ、や、何」と同じ格で、「お、こ、そ、と、の」と横に、五十音圖の第五の音に通ふものであるが、輕い「の」は「は、も、徒」の格で、「な、に、ぬ、ね、の」と縱に通ふものである。即ち「の」と云ふべきところを「な」又は「に」、或は「な」に通ふ「が」と言ひ變へても、意味に變りはないものである。さて重い「の」のことは「玉緒」に讓つて、輕い「の」について記すと言つて、「つゝ」「かな」「けり」「なり」「なし」「なく」「なくに」「べし・べく」「か・かし」「みゆ」「おもほゆ」「……さ」等結辭に依つて分類し、證歌を出して説明してゐる。次に「切るゝ辭より受くるなり、續く辭よりうくるなり」について記し、次に「なん」と「ね」、「ぞ」と「なん」、「つ」と「ぬ」、「つる」と「ぬる」、「する」と「せる」の差別、現在の「ぬ」「ぬる」、過去の「つ」「つる」を説いてゐる。次に活用については、即ち上一段之活、中一段之活、下一段之活の三種に就いて記してゐる。下卷には「歌の文字餘りのあげつらひ」「阿伊宇於は言の下に省く例」等を説き、次に手爾波の係結を歌にして、「てにをはの三つの轉りの大むねはずぬねりるれと替る言靈」「はも徒のてにをは上にありてこそ現在のしに過去のきとしれ」等十二首の歌を作り、一々例證を擧げて説明してゐる。次に「長歌の古調、對句」「長隔句」「れ・せ・等の上にこそとかゝらざる」格」を説いてゐる。【價値】本書の所説中、手爾乎波に關する説には見るべきものがある。即ち「の」の用法の如きは卓見といふべきである（部分的には缺點がある）。又係結の關係を歌にした事は、法則を諳記する上に便利と云はねばならぬ。但し活用に關する説は頗る杜撰である。上一段活は「八衢」の説に依つたものであるから誤りもないが、著者が新に唱へた中一段活は五種の例皆誤りであり、下一段活も「蹴る」を除いて他は皆誤りである。さて下一段の「蹴る」は春庭も義門も逸したのであるが、この活用の發見者は、從來本書の著者國雄であると云はれてゐる。然しこの點については疑問がある。即ち國雄は、「け（將然）、ける（連體）けれ（已然）」の三段を云つたのみで、十分に活用を研究してゐない。加之、宣長の「御國詞活用抄」（別項）の一本には、その二十五會に「ケ・ケル・蹴」とあり、鈴木朗の「活語斷續譜」（別項）（神宮文庫藏）には、二十五會に「蹴・ケル・ケル・ケル・ケ・ケレ・ケ・ケ・ケ」と記してゐる。即ち不完全ながら氣付いたと云ふ點から云へば、宣長、或は朗を推すべきであり、完全に活用を研究したと云ふ點から云へば、宣長も朗も國雄も除外しなければならぬのである。　〔龜田〕

詞通路（ことばのかよひぢ）　語學書　三卷　【著者】本居春庭　【刊行】本居大平の序文は文政十一年秋の日附になつてゐる。「山口栞」の跋等から考へると、天保四五年頃の刊行か。【諸本】本居宣長全集卷六・增補本居全集卷十一所收。【內容】上卷は初めに、詞の「つかひさま」を知る事は、詞の意味を知ることよりも大事であると云ひ、次に「詞の自他の事」と題して、自他の區別を説明して、左の如く六種に區別してゐる。

（一）おのづから然る／みづから然する　――おどろく、しりぞく等。
（二）物を然する――おどろかす、しりぞくる等。
（三）他に然する――つかはす、まかする等。
（四）他に然さする――えさする、しりぞかする等。
（五）おのづから然せらるゝ――えらるゝ、おどろかるゝ等。
（六）他に然せらるゝ――えらるゝ、おどろかさる等。

この六種は、活用の上から見ると左の三種になる。即ち

せしめて、その何活用なるかを知らしめ、（四）次に用言と手爾乎波との連接を歌にして、「んのてには四よりうくるは下二段四段は一の音よりぞいふ」「一段と中二段とは二の音にんのてにをはそへていふなり」（一・二等は五十音圖の第一段、第二段の意）と云ひ、（五）最後に勅撰和歌集から例を取つて、用言の活用の種類を記してゐる。

【價値】「延約」「兼用」「詞てにをはのかゝる所」の説明の如き、その精密な點、組織的な點に於て、頗る注意すべきものであるが、就中、初めの「詞の自他の事」と最後の八衢の教授法

與へてゐる。義門の代表的著作「山口栞」（別項）の奥書にも、「山口栞」は文政の初めに書いたが、天保四年に出版しようと思つて、訂正してゐる時、「詞通路」を見、これと所説の重複してゐる所は省き、又通路に依つて改めた所もあると記してゐる（山口栞參照）。【末書】活語初の栞（一卷。長野義言。刊本。「詞通路」の説を敷衍したもので、詞の自他、延約等の事を説いてゐる）○活語四等辨（一卷。一名「里水抄」。黑川春村著。天保十四年成る。寫本。「詞通路」の説を整理して、詞の自他を四等に分けて説いたもの、即ち一等と二等は四種の活用に渉り、三等は佐行下二段に云ひ、五十音は人がよく知つてゐるからと云つて略し、稱呼及び言語を説いてゐる。先づ稱呼を體言と用言に大別し、體言を（一）物名言、（二）形容言、（三）助體言の三つに分けてゐる。（一）物名言を單稱言（舟・山等）と複稱言（河舟・山川・河の舟等。これを連合言・併列言等と分つ）とし、時日名言（去年・春・今日等）、數量名言（數詞）を物名言の中に入れてゐる。次に（二）形容言は、「又」「猶」「先」「甚」等の類、及び不定言（何・幾・誰・いかに等）、指示言（彼・其・此等）を含むものである。（三）助體言は「語格をさだむるとりもちをなすもの」で、媒介言

してゐる。

(一)おのづから然る／みづから然する——おどろく、しりぞく等。
(二)物を然する——おどろかす、しりぞくる等。
(三)他に然する——つかはす、まかする等。
(四)他に然さする——えさする、しりぞかする等。
(五)おのづから然せらるゝ——えらるゝ、おどろかるゝ等。
(六)他に然せらるゝ——えらるゝ、おどろかさるる等。

この六種は、活用の上から見ると左の三種になる。即ち

(一)同行の活用で自他の分れるもの
解く、解くる。添ふ、添ふる等。
(二)佐行に移りて分れるもの
驚く、驚かす。明くる、明かす等。
(三)羅行に移りて分れるもの
厭ふ、厭はる。添ふ、添はる等。

と説明し、その實例を列擧してゐる。中卷は「詞の兼用の事」及び「詞の延約の事」を説明したもので、兼用とは同音異義の二語を、一語で現はし、而も二義を兼ねしめたもので、例へば、「梓弓はるの山邊をこえくれば道もさりあへず花ぞ散りける」に於て、「はる」は弓を張ると春と二語を兼用してゐる如きものを指すのである。延約は「にあり」を「なり」と云ひ、「きく」を「きかく」と云ふ類で、活用言の延約のみについて記し、これを活用の種類に依つて類別し、説明してゐる。下卷は「詞てに乎波のかゝる所の事」、即ち語句の係結を説き、次に歌を詠むについての心得を述べ、最後に「詞八衢」(別項)の教授法を説いてゐる。即ち八衢を理解するには、(一)先づ五十音圖を十分諳記せしめ、(二)次に四種の活用の辨別を説き、(三)次に用言を任意に取り出し、これを活用せしめて、その何活用なるかを知らしめ、(四)次に用言と手爾乎波との連接を歌にして、「んのてには四よりうくるは下二段四段は一の音よりぞいふ」「一段と中二段とは二の音にんのてにをはそへていふなり」(一・二等は五十音圖の第一段、第二段の意)と云ひ、(五)最後に勅撰和歌集から例を取つて、用言の活用の種類を記してゐる。

【價値】「延約」「兼用」「詞てにをはのかゝる所」の説明の如き、その精密な點、組織的な點に於て、頗る注意すべきものであるが、就中、初めの「詞の自他の事」と最後の八衢の教授法とは注意すべきものである。謂ふ所の「おのづから然る」「みづから然る」は、自動詞を指してゐるので、その中、前者は自動詞中天然に屬するもの、後者は自動詞中人爲に屬するものを指してゐる。「物を然する」は他動詞、「他に然する」は、他動詞中「を」と「に」と二つの目的を要するもの、「他に然さする」は使役、「おのづから然せらるゝ」は可能、「他に然せらる」受身を指してゐる(但し、多少の混同はある)。この時代には動詞と助動詞の區別が出來てゐないから、所説やゝ混雜し、今日から見れば缺點も少くない。併し用言の自他を特に考究したのは、實に本書が初めであり、而もこれ程に組織立つてゐることは、頗る偉とすべきである。又八衢の教授法は、かのヘルバルトの五段教授法(豫備・提示・比較・概括・應用)に相通ずるもので、かくの如き教授法を獨創的に考へ出した事は、國語學史上の一驚異である。【影響】「詞八衢」は、活用の研究として劃期的なものであるが、本書は用言の自他について研究の源泉をなすもので、爾後、自然言・使然言等の語も起り、學界に深い影響を與へてゐる。義門の代表的著作「山口栄」(別項)の奥書にも、「山口栄」は文政の初めに書いたが、天保四年に出版しようと思つて、訂正してゐる時、「詞通路」を見、これと所説の重複してゐる所は省き、又通路に依つて改めた所もあると記してゐる(山口栄參照)。【末書】活語初の栄(一卷。長野義言。刊本。「詞通路」の説を敷衍したもので、詞の自他、延約等の事を説いてゐる)○活語四等辨(一卷。一名「里水抄」。黒川春村著。天保十四年成る。寫本。「詞通路」の説を整理して、詞の自他を四等に分けて説いたもの、即ち一等と二等は四種の活用に渉り、三等は佐行下二段に限り、四等は羅行下二段に限ると説いてゐる)○活語自他捷覽(一帖、横山由清著、安政四年の序あり、刊本。通路の説を整理して圖にしたもので、(一)自然言(シカル コトバ)(二)爲然言(シカスル コトバ)(三)令然言(シカセサスル コトバ)(四)被然言(シカセラルル コトバ)の四種とし、これを更に自と他に分け、(一)は自、(二)(三)(四)は他と標して區別してゐる)○詞の通路頭註(三卷、權田直助著、明治十八年成る。寫本。「詞の通路」に關する諸家の説并に自分の研究を書入れたもの。詞の自他、及び延約の條に最も力を注いでゐる)。【龜田】

詞の組立(ことばのくみたて) 語學書 二卷

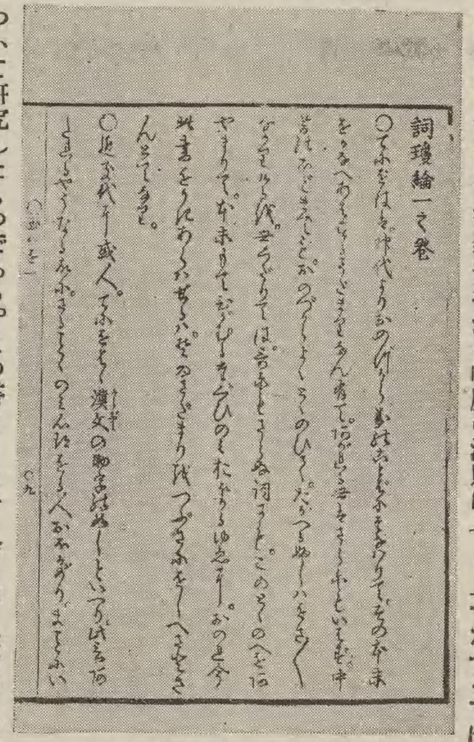
【著者】谷千生【別稱】言語構造式註解【刊行】明治二十二年四月。明治十八年九月の小杉榲邨の序、同二十一年二月の圀方豐正の跋がある。【内容】本書は同じ著者の「言語構造式」(折本一鋪。明治十七年十二月刊)を註解したもので、「日本言語の普通法を示すを專一とし」たのである。著者は國語を聲音・稱呼・言語の三つに大別してゐる。聲音は五十音で、譬へば元素の如し、稱呼は事物の名で、譬へば元素が集つて成る金石木竹等天然物の如し、言語は言葉で、天然物に人工を加へた構造品の如しと云ひ、五十音は人がよく知つてゐるからと云つて略し、稱呼及び言語を説いてゐる。先づ稱呼を體言と用言に大別し、體言を(一)物名言、(二)形容言、(三)助體言の三つに分けてゐる。(一)物名言を單稱言(舟・山等)と複稱言(河舟・山川・河の舟等。これを連合言・併列言等と分つ)とし、時日名言(去年・春・今日等)、數量名言(數詞)を物名言の中に入れてゐる。次に(二)形容言は、「又」「猶」「先(まづ)」「甚(いと)」等の類、及び不定言(何・幾・誰・いかに等)、指示言(彼・其・此等)を含むものである。(三)助體言は「語格をさだむるとりもちをなすもの」で、媒介言とも云ふ。これを名格助言(の・が・と)、備格助言(が・の・を・に・にて・より・ゆる等)、整格助言(も・さへ・だに・とも・よ・や・な・なん・つゝ・しも等)の三種にし、更にこれを四十七種に分けてゐる。次に第二の用言は、(一)作用言、(二)助用言、(三)形狀言の三とし、(一)作用言(動詞)は活用に依つて四段・變格・一段(上一段・中二段・下二段の五種とし、各語を本言(語根)と活言(語尾)とし、活言を續用活・切斷活・續體活・希求活と分け、更に語意に依つて自動言と他動言に分け、これが一轉して被動言・使動言になるとし、再轉して能動言・崇敬言になると説いてゐる。(二)助用言(助動詞)は語意に依つて將言(ん・まし・べし・めり)、不言(ず・じ・まじ)、去言(き・けり)、畢言(なり・ぬ)、竟言(つ・たり)と分けてゐる。(三)形狀言(形容詞)は久活を尋常本格、志久活の志を履言と云つてゐる(以上上卷)。下卷は謂はゆる言語の説明で、これを備言・整言・化言の三つに大別し、備言を基格言と間格言に分け、これ等を更に細分してゐる。基格は主語に當るもので、間格は客語・補語・副語に相當する

ものである。整言は基格と變化格に分け、基格を自動格・他動格・自被動格・自使動格・他被動格・他使動格の六種に分かつ、變化格は三十七種に分けてゐる。謂はゆる整言は備言に述語の加はつたものである。最後の化言は整言を應用して變化したものである。【價値】本書は、その分類が餘りに煩瑣なことと、耳馴れない名稱を多く使用したことは一つの缺點である。又その説に不備誤謬も無いではないが、從前の語學書は、殆ど活用とてにをはに限られてゐたのに、本書は稱呼と言語、即ち單語法と文章法に大別し、單語の形態・效用、文章の組織等を、整然と説いてゐる點は、當時の國語學界から嶄然頭角を拔くものである。特に下卷に於て、係結法の起原を説いてゐるが、これは著者の新説で、而も卓見である。〔龜田〕

言葉の直路（ことばのただぢ）　歌論書　一卷

【著者】松田直兄【成立】文政四年序【刊行】文政六年【解説】最初に古今序發端の解義を掲げ、次に多數作例を掲げて作歌法を説いたもので、その二三を擧げれば、歌よみの出來たことは歌の衰へた初めであること、所謂歌よみと稱するものが眼前に見聞するもの〻歌なることを知らず、徒に古歌など掠めとること、歌よみならぬ者が、徒に歌を難きものと思つて、時に歌を詠んゐることを知らぬことなど、その説は大體に於て眞淵の後を承けてゐるが、なほ進んで歌の道とは他なし、人生れて自然の心を口に言ふ如く、有りのまゝに歌ふのが眞の歌であるとし、ただ言歌（ことうた）の思想を述べ、桂園（香川景樹）の説を批評した。その中に、眞淵の所謂大和は丈夫ぶり山城はたをやめぶりと云つた説を詳説し、萬葉と古今との變化を前時代の帝都の地勢から解かうとした。【價値】自然説を説いたものとして重要なものであるが、就中桂園の「調の説」に對する彼の批評は、多くの反響を當時に於て生み、八田知紀・三宅意誠等は、それ〴〵この説を論難した。〔相原〕

詞の玉緒（ことばのたまのを）　語學書　七卷【著者】本居宣長【略稱】玉緒【刊行】天明五年五月初刊。寛政四年補刻。文政十二年再刻。【諸本】前記の外、年號の記載のない版本が二種ある。明治になつて活版單行本も二種ある。本居宣長全集卷五・增補本居全集卷九に所收。【內容】當時の所謂手爾乎波の呼應の法則について研究したものである。この書よりも八年前、明和八年に作つた「てにをは紐鏡」（別項）は、手爾乎波の呼應を圖に示したのみであるが、本書はこの法則を、例證を擧げて説明したものである。一之卷の物論の中に、「てにをはのとゝのへは、その本末をかなへあはせて、いにしへのさだまりをあやまたぬをなんむねとはすれば、おのれさきに紐鏡といふものを作り出て、三條の大綱を張わたして、此さだまりのかぎりをあらはしたりき。（中略）この三條の大づなをだにとり得てば、むすばれたらんちゞのてにをはも、すぢ〳〵おのづからつはらかにとけわかれて、つゆのみだれもなからむかし」と記してゐる。三條の大綱とは、（一）「は・も・徒（たゞ）」を受けて結ぶ手爾乎波（活用言の終止形）、（二）「ぞ・の・や・何（なに）」の結び（活用言の運體形）、（三）「こそ」の結び（活用言の已然形）を云ふので、この三條を三轉とも云つてゐる。本書の要目を擧げると、〔一の卷〕惣論、三轉證歌（紐鏡に表はした三轉四十三段の手爾乎波の係結について、一々八代集その他から例證を擧げたもの）。〔二の卷〕とまりより上へかへるてにをは。主なるてにをは。變格。本歌にゆつる格。てにをは不調歌。一本に、てにをはを寫し誤れる歌。〔三の卷〕は・ば・も・ぞ・の・が。〔四の卷〕や・か・何の類。〔五の卷〕こそ・と・ど・を・に・て・で・な・み・よ・ね・し・らく・まく・けく・かし。〔六の卷〕むすびことば（き・し・ず・ぬ・ね等）。〔七の卷〕古風部（萬葉集中てにをはたがへる歌、同集中てにをは違へるに似て然らざる歌、同集長歌の一格、同集てにをはの訓。古風の辭―も・ぞ・の・や・か等―）。文章（ふみことば）の部（古今集序、同集詞書、土佐日記、伊勢物語、源氏物語の一部を抄出して、手爾乎波の呼應を記す）等。なほ「詞の玉緒」と云ふ題號の所因を自序に述べて、上代は裝飾として玉を用ひたが、玉が玉としての價値を現はすのは、專ら玉を貫く緒の用ひ方如何に依るものである。そこで言葉を玉と見れば、手爾乎波は緒の如きものである。依つて「詞の玉緒」と題したのであると。こゝに宣長の手爾乎波に對する觀念、手爾乎波を特に重要視する所以を知ることが出來、併せて本書著作の理由を知ることが出來る。



詞の玉緒（初頁）

【價値】手爾乎波の呼應は、平安朝末期から歌學者の間に注意され、「手爾波大概抄」「姉小路式」「春樹顯祕抄」（各別項）「歌道祕藏錄」（寛文十三年刊、著者未詳）の如きがあり、「玉緒」はこれ等の書に負ふところ少くないが、これ等は飽くまでも祕傳々授の書、即ち非公開の書であり、從つて所説は獨斷的傾向を有するが、「詞の玉緒」は自由討究に依つて出來たものであり、その內容は八代集・伊勢・源氏等、平安朝文學の研究から歸納したもので、飽くまでも學術的である。これ本書が國語學史上特に重んぜられる所以である。次に前記の如く手爾乎波に關する書は相當あるが、中古言の手爾乎波の呼應の研究は、本書に至つて初めてほぼ大成の域に達したのである。爾後この種の研究は主として玉緒を土臺にして研究してゐる。その結果、後世に及ぼした影響に於て、從前の研究の上に嶄然頭角を顯はすものであつて、「紐鏡」と共に國語學史上に一時期を劃するものである。

【影響・末書】僅か百年ばかりの間に、七種も版本が出た事は、本書の需要が如何に多かつたかを證するものである。又左記の如く多くの末書が出來てゐる事は、本書を基礎として謂はゆる手爾乎波の呼應の研究が如何に盛んであつたかを示すものである。（玉緒を土臺にして、手爾乎波の呼應を研究する學派を玉の緒派と云ふ）。○林國雄著「詞の緒環（たまき）」（別項）（「玉緒」及「八衢」を補正したもの）○義門著「玉の緒繰分」（五冊。天保十二年成稿。嘉永四年春刊。天保六年千種有功の序及同十二年加納諸平の跋あり。「玉緒」を詳細に補訂し、批判したもので、「玉緒」の內容は勿論、説明の語の一字一句に至るまで、私見を有する點はこれを書き記したものである。「玉緒」の末書の中では、中島廣足の「玉緒補遺」（後出）と共に最も勝れたものである）○富樫廣蔭著「玉の緒解縺」（寫本）（義門の「玉の緒繰分」が、繰分けたのではなくて、却つて縺らしたものであるから、その縺れを解くと云つて著はしたものである）○長野義言著「玉緒末分櫛」（「末分櫛」とも云ふ。三卷。弘化二年刊。「玉緒」の不用の部を捨て、要用の部分の本末」。三卷。刊本。「玉緒」に依つて「ぞ・の・や・か・何・は・も・徒・こ・そ・かな・つゝ、上へかへる手爾乎波」の十二條を立てて、手爾波の呼應を説明したもの。卷末に五十音圖を掲げて所謂かなかへしの法を記してある）○岡本保孝著「詞の玉緒攷」（一卷。況齋叢書第三十八。明治三年成る。「玉緒」を補正したもの。卷首に「詞の玉緒延約」「玉の緒繰分」（各前出）の批評がある）○黑川眞頼著「玉の緒變格辨」（一卷。明治十六年刊。「玉緒」は變格として擧げてある手爾波の結辭を、輕重の二種に分け、それは、一段と二段の結びであることを記したものである）○權田直助著「詞の玉緒頭註」（七卷。明治十六年成春庭の「詞八衢」に丁寧懇切に説いてあるが、同書は義理深幽、且つ詞辭簡約であるから、學者でさへも難解としてゐる。依つて初學者のために「詞八衢」「詞の玉緒」（各別項）の説に依り、これに自分が考へ得た前人未發の説を加へて説くと云ひ、なほ本書を見る前に、「辭玉襷」（後出）に記した言葉の規則を記憶する必要があると云つてゐる。さて本文に入つて、國語は「言」「詞」「辭」の三種に分類すべきである。（一）「言」（こと）とは世間のあらゆる物事を言ひ分つ音で、その語尾は活用しないもの か・しが差別の事」「しし・せし差別の事」「の・がの用格差別の事」「四韻詞古き一格の事」「一韻詞古き一格の事」等。

【價値・影響】本書に於て注目すべきは、品詞の分類である。本書以前に、富士谷成章・鈴木朗・東條義門（各別項）が、品詞分類を試みたが、廣蔭の言（名詞）、詞（動詞・形容詞）、辭（助動詞及手爾波）と三種に分つたのは、前三者の分類に比すれば格段の進歩である。その進歩した點は「辭」の一類を立て、これを動辭と靜辭とに分類した點にある。この分類法は、爾後の學

緒繰分」(五冊。天保十二年成稿。嘉永四年卷刊。天保六年千種有功の序及同十二年加納諸平の跋あり。「玉緒」を詳細に補訂し、批判したもので、「玉緒」の内容は勿論、説明の語の一字一句に至るまで、私見を有する點はこれを書き記したものである。「玉緒」の末書の中では、中島廣足の「玉緒補遺」(後出)と共に最も勝れたものである)○富樫廣蔭著「玉の緒解縺」(寫本)(義門の「玉の緒繰分」が、繰分けたのではなくて、却つて縺らしたものであるから、その縺れを解くと云つて著はしたものである)○長野義言著「玉緒末分櫛」(「末分櫛」とも云ふ。三卷。弘化二年刊。「玉緒」の不用の部を捨て、要用の部分を拔き出し、足らざるを補つたもので、部分的には見るべき説が少くない)○幻裡庵著「詞の玉緒延約」(三卷。刊本。「玉緒」の分類法があまり繁雜で煩はしいと云つて、同類のものは一括し、又「玉緒」は、その引用文の説明を缺くものが多く、又若干記した語意語釋にも、誤つてゐるものがあると云つて、その誤りを正し、語釋のないものを加へたもの)○萩原廣道著「てにをは係辭辨」(一卷。嘉永二年刊。「玉緒」の中の數條を論評したもので、「紐鏡」「玉緒」で、「はも徒」の係りと云ふが、「は・も」の外に、て・に・を・の・ば・ど・で・より・まで・へ等がある事。「そのや何」の「何」は係りで無い事。「玉緒」卷二に、「變格」と名付けて出してある手爾波は、變格ではない事。その他「や・か」「ぞ・こと」「がに・がね」等について記したもの)○八木立禮著「詞の玉緒緣接」(三卷。寫本。嘉永四年の自序あり。「玉緒」に未だ考へ及ぼされないところ、又は、あゞ漏らされた歌の格などを擧げ補うてゐる。その所説、見るべき點が少くない)○中島廣足著「詞の玉緒補遺」(六卷。嘉永七年刊。「玉緒繰分」「玉の緒末分櫛」「てにをは係辭辨」(各前出)等に漏れたことを補ひ、誤れるを正したもので、所説穩健、引證豐富である)○中村尙輔著「玉の緒續添」(三卷。慶應四年。「玉緒」を批評し補訂したもの)○珠阿彌著「詞の八千種」(一名、「詞の本末」。三卷。刊本。「玉緒」に依つて「ぞ・の・や・か・何・は・も・徒・こ・そ・かな・つゝ、上へかへる手爾乎波」の十二條を立てて、手爾波の呼應を説明したもの。卷末に五十音圖を掲げて所謂かなかへしの法を記してある)○岡本保孝著「詞の玉緒攷」(一卷。況齋叢書第三十八。明治三年成る。「玉緒」を補正したもの。卷首に「詞の玉緒延約」「玉の緒繰分」(各前出)の批評がある)○黑川眞頼著「玉の緒變格辨」(一卷。明治十六年刊。「玉緒」は變格として擧げてある手爾波の結辭を、輕重の二種に分け、それは、一段と二段の結びであることを記したものである)○權田直助著「詞の玉緒頭註」(七卷。明治十六年成る。寫本。「玉緒」に關する諸家の説並びに自分の考を書き記したもの)。

以上は主として、本居派の學者の手に成つたものであるが、同派とは系統を異にする學者の手に成つたものに、牛尾養庵の「てにをはしづのをたまき」(一卷。文政年間に成る。刊本)がある。「玉緒」の總論を反駁的に批評し、三條の大綱の誤を正さうとしたものである。橘守部の「助辭本義一覽」(二卷。天保九年刊)は指辭(玉緒の係辭に當る)・受辭(玉緒の結辭に當る)に分けて、「玉緒」を反駁的に批評したものである。守部は音義派の人であるから、學問の立脚點が宣長とは違つてゐる。

【參考】 字音假字用格及詞の玉の緒の刊本につきて 龜田次郎(藝文一七ノ八)○本居宣長及富士谷成章のてにをは研究に就いて 時枝誠記(國語と國文學五ノ二)

詞の玉緒補遺(ことばのたまのをほぎ) 「詞の玉緒」を見よ。 〔龜田〕

詞の玉橋(ことばのたまはし) 語學書 二卷 【著者】富樫廣蔭 【成立】文政九年十二月成る。弘化三年四月訂正。【刊行】明治二十四年。【內容】主として、活用係結の事を研究したものである。初めに、活用については我師本居春庭の「詞八衢」に丁寧懇切に説いてあるが、同書は義理深幽、且つ詞辭簡約であるから、學者でさへも難解としてゐる。依つて初學者のために「詞八衢」「詞の玉緒」(各別項)の説に依り、これに自分が考へ得た前人未發の説を加へて説くと云ひ、なほ本書を見る前に、「辭玉響」(後出)に記した言葉の規則を記憶する必要があると云つてゐる。さて本文に入つて、國語は「言」「詞」「辭」の三種に分類すべきである。(一)「言」とは世間のあらゆる物事を言ひ分つ音で、その語尾は活用しないもので、世に體言と言つてゐるものである。これに形言・樣言の二種ある。詳しく分けると五種になる。(1)形言(物の形を指別つ語、月・花・山・雪等)。(2)樣言(物の樣を指別つ語、物・事・是・故等)。(3)居言(詞の韻を言ひ居るたもの。諸・宿・戀等)。(4)略言(詞の韻を略したもの。歌・長・宿等)。(5)合言(春日・秋風等)これである。次に、(二)詞は萬物の有樣働きを言ふ語で、世に用言と云はれるものである。これに六種ある。(1)四韻詞(舊名四段活)。(2)一韻詞(舊名一段活)。(3)伊紆韻詞(舊名中二段活)。(4)衣紆韻詞(舊名中二段活)。以上四種は正格の活用。(5)變格詞(加行、佐行、奈行、良行の變格)。(6)雜音詞(久活及び志久活)この六種である。次に(三)辭とは物事について思ふ意象を顯はし盡すもので、これに(1)動辭(活用する手爾波。助動詞に當る)と、(2)靜辭(活用せざる手爾波。現在の文典で云ふ手爾波)とがあると云ひ、これ等の一々について説明してゐる(以上上卷)。下卷には上卷の説明の足らざるを補ひ、又一般に文法上誤り易い點について記してゐる。即ち「仰となる詞辭の事」「禁辭二種の差別の事」「俗語に變例ある事」「しか・しが差別の事」「しし・せし差別の事」「の・がの用格差別の事」「四韻詞古き一格の事」「一韻詞古き一格の事」等。

【價値・影響】本書に於て注目すべきは、品詞の分類である。本書以前に、富士谷成章・鈴木朗・東條義門(各別項)が、品詞分類を試みたが、廣蔭の言(名詞)、詞(動詞・形容詞)、辭(助動詞及手爾波)と三種に分つたのは、前三者の分類に比すれば格段の進歩である。その進歩した點は「辭」の一類を立て、これを動辭と靜辭とに分類した點にある。この分類法は、爾後の學界に頗る大なる影響を與へた。明治大正の時代に於て、品詞を體言・用言・助辭の三つに大別する學者は、すべて直接、或は間接に廣蔭の影響を受けてゐるものである。勿論廣蔭の分類にも缺點は必ずしも少くない。「言」を五種に分つ如きは首肯し難いものであり、「辭」の中の「屬」と稱する一類の如きは、その分類に破綻を齎らしてゐるものである。品詞分類の外は、別に注意を拂ふ程のものではない。が、「言」「詞」「辭」と云ふ大綱を立てた點に於て勝れてゐるのである。活用に於ては、四韻詞・一韻詞の如き、新しき名稱を設けたに過ぎない。而して活用を凡て五段にし、動詞・助動詞の類に、命令形を逸してゐるのは大なる缺點である。【末書】堀秀成著「蘿雲」(別項)【附記】廣蔭には「詞八衢捷徑詞玉緒統括辭玉響」と題する一枚刷の圖表がある(文政十二年刊)。著者の所謂「詞」及「辭」の活用及び係結の圖表で本書より前に成つたもので、本書と併せ見るべきものである。 〔龜田〕

詞八衢(ことばのやちまた) 語學書 二卷 【著者】本居春庭 【成立・刊行】文化三年二月成稿。同五年春刊行。【諸本】文化十三年、文政元年、

弘化三年、慶應二年、明治十七年等の刊本あり。本居宣長全集第六卷・增補本居全集第十一卷所收。

【內容】言葉の活用と、その係結を研究したもので、著者は冒頭に、言葉のはたらきと云ふことの忽せにすべからざる事を說き、次に言葉の「活はすべていとおほく、さま〳〵なる中に、四種の活もともそのたぐひさま〳〵ひろく、いとおほくして、これにならぶはたらき他になし」と云ひ、この四種の活きに次いでは、「し・しき・しく」「し・き・く」と活く詞が多いと云ひ、次に四種の活、卽ち四段の活、一段の活（上一段活用）、中二段の活（上二段活用）、下二段の活を說明し、この「四種の活の圖并受のてにをは」の圖を記してゐる。圖には活用形を大體五段に分けてゐない。但し著者は命令形を逸したのではなく、本文中に、「世にいはゆる下知の詞は、四段の活にては、第四音けせてへめれをそのまゝにて、さけ、わたせ、おもへなどいひて、すなはち下知の詞となるを、一段の活にては、第二の音いきにひみゐに、よもじをそへ、（中略）中二段のはたらきも第二の音きちひみいりゐによもじをそへ（中略）、下二段の活は、第四音えけせてねへめえれゑによもじをそ（ふ）（中略）、この三種の活は、かくよもじをそへざれば、下知の詞とはならざるなり云々」と云つてゐる。次に五十音圖の順に從つて、阿行から和行まで、各行についてその活用と、各活用形を受ける辭の圖を記し、同一活用の單語を列擧し、その單語中說明を要すべきものは說明を加へてゐる。而して加行・佐行・奈行には「變格」の活用を記してゐる。本書は主として平安朝の語を材料に用ひてゐるが、奈良朝の語及び口語にも屢々言及してゐる。本書は初めに活用の種類に就いて記してゐるところに、四種の活に次いで多いのは「し・しき・しく」「し・き・く」と活用するものであると云つてゐる。これはやゝ不完全ではあるが、形容詞の活用を指してゐるものである。然るにこの二種の活用に就いては、これ以外に何等の說明をも爲してはゐない。なほ動詞の活用としては、下一段活用を逸して居り、羅行に於ては、「有り」「居り」が四段活用とは少しく異つてゐることを認めながら、これを獨立せしめずに、四段の活に屬せしめてゐる。

【價値】本書は宣長の「御國詞活用抄」「詞の玉緒」（各別項）、鈴木朖の「活語斷續譜」（別項）等を基礎とし、廣く中古言を研究した結果、出來上つたものであるが、これ等の書に比すると、實に同日に談ずることが出來ないほど本書は進步してゐる。卽ち、四段・一段・中二段・下二段・變格等、活用の類別は、實に本書に初めて說かれた事であつて、この類別は大體今日も襲用せられてゐる。又活用形を六段に分つ事（圖には大體五段にしてある）も、本書に源を發するものである。尤も前記の如く、本書は主として動詞に當るものを研究したので、形容詞及び助動詞の大部分には殆ど手を觸れて居らず、下一段活用を逸し、羅行變格についても明確な見解を持つて居らず、この他、微細な缺陷は少からずあるが、活用研究の基礎は本書に於て確立せられたのである。これ本書が國語學史上劃期的の書として、特に重要視せられる所以である。【影響】假名遣及び謂はゆる手爾乎波の呼應の研究は、古く平安朝末期から起つてゐたが、活用の研究は、漸く江戶時代の中期に至つて起つたもので、これを國語學の一部門として獨立せしめたのは、「詞八衢」である。爾來活用を研究する者は、本書を基點として進んでゐる（手爾乎波の呼應を研究する者を「玉の緒派」と云ふのに對し、活用を主として研究する者を「八衢派」と呼ぶことがある）。從つて本書を研究して、その誤を正し、足らざるを補つた書は少からずある。【末書】言葉の八衢疑問（東條義門著、寫本）。この書は二部ある。（一）は「詞八衢」刊行後五年、文化八年に草したもので、「八衢」の誤謬を指摘したものである。（二）は文化十年に草したもので、（一）に書き漏らした事を記したもので共に春庭の處へ送つたものである。なほ義門の「友鏡」（てにをは紐鏡の條）、「和語說略圖」（別項）、「山口栞」（別項）等參照○友鏡底迺影料（二卷。東條義門著、寫本）。義門は「友鏡底迺影」と題する一書を著はす豫定で、その材料として「八衢」に一面に書入れをして置いた（八衢を增補訂正したもの）。而して義門はこの書を著はさずに死んだ。後、小田清雄が、その書入を拔出したのが、「友鏡底迺影料」で、この名は清雄が附けたものである。「八衢」の本旨は勿論、その說明の一言一句まで、訂正し增補したもので、頗る見るべきものである。○詞八衢捷徑（詞八衢捷徑玉緒統括斷玉響）（一鋪。富樫廣蔭著。文政十二年の跋あり。刊本）。「八衢」に記された言葉の活用、「玉緒」に記された手爾乎波の呼應の研究を併せて、一枚の圖にしたもので、活用の種類を、四段・一段・中二段・下二段・變格（羅行變格を加ふ）・音雜（く・く・し・き・けれ。しく・しく・し・しき・しけれ。けく・けく・けし・けき・けけれ）・動辭（ず・ぬ・ね。む・め。ませ・まく・まし・まし・ましか。け・き・し・しか）の七類とし、活用形を未然段・續詞段・斷止段・續言段・已然段の五段にしてゐる。この組織は「八衢」より遙かに進んでゐるが、これは義門の「友鏡」等に負ふこと甚だ多いものである。○八衢大略（一卷。足代弘訓著。安政四年の奥書あり。刊）。「八衢」を土臺にして、その肝要な點を書いたもので二十五章から成る。五十音圖、四種の活用、變格、動詞の自他、形容詞の活用、てにをは、體言等の事に就いて記してある。○八衢補翼（卷數未詳。足代弘訓著。寫本）。活用、音韻變化、てにをは等の事を隨筆風に記したもの。草稿本である。○詞の八衢補遺（一名蔭蹈道。二卷。中島廣足著。安政四年刊）。二卷の中、上卷は「八衢」及び「山口栞」（別項）に漏れた用言についての研究を記したもので、顯書中一頭地を拔くものである。下卷は別書で、附錄として添へたもの（「すさび」と云ふ詞の事、「だに」「さへ」「すら」の使ひ方等の事を記してゐる）。○詞の直路（二卷。山田直溫著）。「八衢」に出てゐる用言の全部を五十音順に列べて、一語づつ活用を記したもの。○詞八衢補正（三卷。岡本保孝著、寫本）。上卷には「八衢」の序文の批評、「八衢」に漏れた動詞等を記し、中卷以下には、四種の活用、受ける詞。略言。延言。「紐鏡」と「八衢」と符同の處。下一段といふ名目。截斷言等の事について記し見るべきものである。○增補漂註詞の八衢（二卷二冊。清水濱臣增補、岡本保孝漂註、加部嚴夫校正。明治十三年刊）。濱臣・保孝二人の書入れを「八衢」の上欄に記し、嚴夫が二人の書入れを批評し、又二人の書き漏らしたと思はれる事を書入れたもの。但し嚴夫の說には最眞の引き倒しに類するものが多い。○詞八衢頭註（二卷。權田直助著。寫本）。「八衢」に關する諸家の說、并に自分の見解を書入れたもの。○言葉のやちまた語釋（二冊。渡邊弘人著。明治十七年刊。同二十五年に「改正詞のやちまた語釋」と題して活版一冊にして刊）。「八衢」の本文は擬古文で記されてゐるから、その難解な所に口語譯を加へ、上欄に單語の解釋、語法上の解釋を加へたものである。（詞通路參照）　〔龜田〕

詞寄（ことばよせ）　連歌・俳諧　【名義】連歌又は俳諧に於てその道に於ける用語を集めたものをいふ。【解說】連歌に於て制作上の必要から詞を集めたので、それには詞のみを集めたもの又はそれに解說を附したものがあり、その詞の種類も一樣ではない。元來連歌の式目書たる良基の「連歌新式」（別項）を初めその系列のものは、指合（別項）・去嫌を規定したものではあるが、それが同時に詞寄の性質を持つてゐる。かく式目と詞とは密接な關係があるので、後に至つても式目と詞寄と合せ收めてゐるものが少くない。又、指合・去嫌に係はりなく詞を集めたものもあるが、詞寄にして指合・去嫌を說いてゐるものもある。併し、四季の季題（別項）を集めたものは、詞寄ではあるが別に季寄（別項）と稱する。【沿革】「梵燈庵主袖下集」及び「宗祇袖下」の如きは、連歌上の歌舞伎狂言をいふ。【解說】江戶歌舞伎の狂言座の櫓、卽ち興行權は世襲の特權であるから、自然とその家格が重んぜられ、その由緒を記念すべき家寶的狂言が保存される。中村座の「猿若」（別項）と「新發意太鼓」、市村座の「海道下り」、森田座の「佛舍利」などが、卽ち三座の壽狂言である。これ等の壽狂言や、脇狂言（別項）の傳統を見る時、初期歌舞伎が能狂言と密接な交涉を有してゐた事が知れる。〔中村座の壽狂言〕中村座の壽狂言は、寬永元甲子年に元祖勘三郎が初めて江戶に歌舞伎狂言座の櫓を許され、それを記念するために、相門の三人の舞臺である。嵯峨の邊の住僧が祕藏の太鼓を殘し、新發意に番させて山向うへ樂の稽古にゆくと、その留守に太鼓を覗つた賊が入り、新發意に酒を振舞ひ、眠らせて盜む。そこで歸つた住僧の怒りを解くため踊拍子で舞ひ出す。賊も浮かれ出して盜品は戻る。そこで傳授事の「猿若」の獅子や太鼓の曲をきかす。これは笛・三味線・唄・大小太鼓の鳴物入りで、寬永元年二月、中橋の猿若勘三郎座に於て興行されたものと傳へられ、就中「猿若」は大正年間まで中村明石の手で上演された現存最古の歌舞伎狂言と稱すべきである。

清原。通稱清助。【號】葦堂【生歿】寶政十年筑前福岡藥院抱安學橋に生れ、明治元年七月二十九日歿す。享年七十一。【法名】葦堂言道居士【墓所】福岡藥院香正寺【家系】舍人親王四代の孫清原通雄が、天延中九州へ貶せられ、その末が豐前・豐後・筑後で二十四家に分れた。大隈家もその一家である。祖父清助の代には零落してゐたが、後、產を起し、父茂助言朝の代となつて益々榮え、福岡で名あ

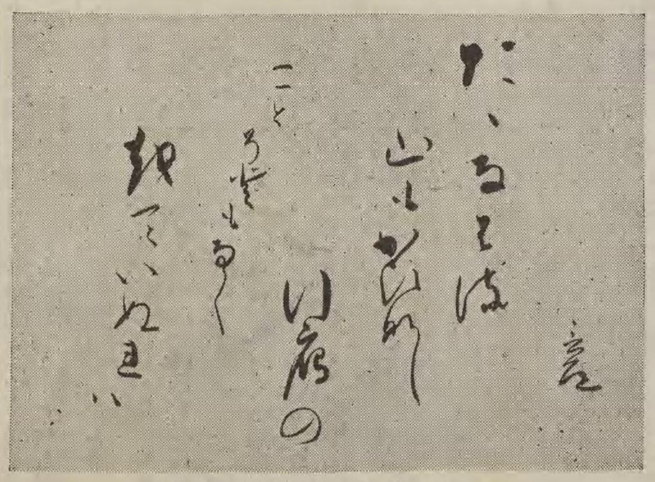
の詞の種類も一樣ではない。元來連歌の式目書たる良基の「連歌新式」（別項）を初めその系列のものは、指合（別項）・去嫌を規定したものではあるが、それが同時に詞寄の性質を持つてゐる。かく式目と詞とは密接な關係があるので、後に至つても式目と詞寄と合せ收めてゐるものが少くない。又、指合・去嫌に係はりなく詞を集めたものもあるが、詞寄にして指合・去嫌を說いてゐるものもある。併し、四季の季題（別項）を集めたものは、詞寄ではあるが別に季寄（別項）と稱する。【沿革】「梵燈庵主袖下集」及び「宗祇袖下」の如きは、連歌上の諸種の用語を集めて解說を加へたものであるが、兼載の「薄花櫻」（別項）の如きは詞の性質を分別しつゝ集めてゐる。榮雅の「連珠合璧集」（別項）の如きは寄合（配合）を標準として詞を集め、宗養の「闇夜一夜」（別項）の如きは付所（如何なる詞には如何なる詞を付けるかの）を標準として詞を集めてゐる。木食應其の「無言抄」（別項）は綜合的なものであるが、その伊呂波詞とあるものは伊呂波によつての詞寄で指合・去嫌をも說き、「四季詞」とあるものは季寄で同じく指合・去嫌をも說いて居り、「連集良材」（寬永八年刊）の如きは、人物故事その他の詞を集めて詳細な解說を施してゐる。俳諧に於ても、德元の「誹諧初學抄」（別項）は四季の詞なる季寄と戀の詞なる詞寄とを含み、西武の「久留流」、貞德の「御傘」、立圃の「はなび草」、重賴の「毛吹草」（各別項）等は、全部又は一部として應其の「無言抄」の系統を引く俳諧に於ける詞寄である。〔志田〕

壽狂言（ことぶききやうげん）　演劇　【別名】家狂言　【名義】江戸歌舞伎の中村座・市村座・森田座の三座が、その家格の由緒を語る先祖傳來の歌舞伎狂言をいふ。【解說】江戸歌舞伎の狂言座の櫓、卽ち興行權は世襲の特權であるから、自然とその家格が重んぜられ、その由緒を記念すべき家寶的狂言が保存される。中村座の「猿若」（別項）と「新發意太鼓」、市村座の「海道下り」、森田座の「佛舍利」などが、卽ち三座の壽狂言である。これ等の壽狂言や、脇狂言（別項）の傳統を見る時、初期歌舞伎が能狂言と密接な交涉を有してゐた事が知れる。〔中村座の壽狂言〕中村座の壽狂言は、寬永元甲子年に元祖勘三郎が初めて江戸に歌舞伎狂言座の櫓を許され、それを記念するために、相續の代替り、或は六十一年目の甲子年などに限り上演されるもので、特に「猿若」狂言は再三高貴の上覽を蒙つた由緒を有してゐる。「猿若」はシテ中村勘三郎と、ワキ大名杵屋喜三郎との二人限りで勤める。シテの猿若が主人の大名に隱れて伊勢參宮から歸り、主人の怒りを抑へるために、道中の名所咄を流行小唄に合はせて聞かすので、切りに「五段獅子」「鶴の舞」といふ猿若家の傳授事を見せる。能の間狂言がかつた脚色である。この狂言を上演の際には、吉例として中村家の家寶を舞臺に陳列して見せる。それは寬永十年幕府の安宅丸江戸入津の際、大音美聲の評判であつた猿若勘三郎が御船手頭向井將監の命によつて音頭取をした賞としての目錄、金の麼及び陣羽織、他に慶安四年、再三千代田城中に召されて猿若狂言を上覽に供した時賜はつた靑地金入の衣裳がある。なほ舞臺に使ふ揚卷は京都の御所で、猿若を高貴の御覽に供した際、羽織の紐を忘れたので、その代用に卽座に賜はつたものである。「新發意太鼓」はシテ新發意中村明石、ワキ僧杵屋喜三郎、ツレ山賊杵屋六左衞門の三人の舞臺である。嵯峨の邊の住僧が祕藏の太鼓を殘し、新發意に番させて山向うへ樂の稽古にゆくと、その留守に太鼓を覗つた賊が入り、新發意に酒を振舞ひ、眠らせて盜む。そこで歸つた住僧の怒りを解くため踊拍子で舞ひ出す。賊も浮かれ出して盜品は戻る。そこで傳授事の「猿若」の獅子や太鼓の曲をきかす。これは笛・三味線・唄・大小太鼓の鳴物入りで、寬永元年二月、中橋の猿若勘三郎座に於て興行されたものと傳へられ、就中「猿若」は大正年間まで中村明石の手で上演された現存最古の歌舞伎狂言と稱すべきである。〔市村座の壽狂言〕「海道下り」は、同座の元祖市村竹之丞が、承應元年江戸村山座（市村座の前身）に下つた右近源左衞門と共に勤めたといふ由緒がある。卽ちシテ伯母右近源左衞門、ワキ長者市村竹之丞、ツレ太郎冠者市村宇左衞門で演じた。某といふ長者、木曾街道を下らうとするが、太郎冠者も路次を知らぬため伯母に聞かうといふ。右近が有名な海道下りを舞ふのである、これにも傳授事を見せる。〔森田座の壽狂言〕「佛舍利」も、萬治三年江戸木挽町で、元祖太郎兵衞といふ者、歌舞伎狂言座を取立て、養子の元祖守田勘彌と共に上演した由緒ある狂言である。シテ某うなぎ太郎兵衞、ワキ長者守田勘彌。某が三條の長者大黑屋から金をかりて佛舍利を預けてあるが、長者から催促をうけたため當惑して、連歌や牡丹花に寄せて長者の機嫌をとり、長者も興のゆくまゝに連れ舞ふといふ筋。やはり「猿若」の祕曲を舞ふ。

【參考】三座家狂言幷由緒書（燕石十種第二收錄）

○猿若に就て中村明石（歌舞伎八八）　〔飯塚〕

言道（ことみち）　歌人　【姓名】大隈氏。本姓は清原。通稱清助。【號】萍堂　【生歿】寬政十年筑前福岡藥院抱安學橋に生れ、明治元年七月二十九日歿す。享年七十一。【法名】萍堂言道居士　【墓所】福岡藥院香正寺　【家系】舍人親王四代の孫清原通雄が、天延中九州へ貶せられ、その末が豐前・豐後・筑後で二十四家に分れた。大隈家もその一家である。祖父清助の代には零落してゐたが、後、產を起し、父茂助言朝の代となつて益々榮え、福岡で名ある商家となつた。父は歌を作り、書をよくした。書は中牟田浙江に學び、門下の中でも高名であつた。母は有名な刀鍛冶屋信國又左衞門光昌の女である。六人の兄弟があつて言道はその四男である。【閱歷】早くより文事に志し、藩士二川相近に和歌・書道の外、繪畫・音樂・篆刻をも學んだ。歌は、特に萬葉と古今とを究め、家集では「山家集」に親しんだ。言道が、歌の上で獨自の見を抱いたのは、三十五



言道筆蹟（佐佐木信綱氏藏）

歳の頃であらう（歌論「ひとりごち」參照）。天保七年（三十九歳）、家を弟に讓つて今泉の池萍堂に隱棲した。歌に沒頭してゐた結果、家業が衰へて來たのと、專心歌に進まうと思ひ立つたがためとである。當時の彼の生活は極めて貧しく、歿する時までそれが續いた。同十一年、豐後の廣瀨淡窓の塾で、主として漢學を學んだ。安政四年（六十歳）難波に移つた。歌風を京阪の間に弘めようと思つたのと、歌集を板にする機緣を見出さうとしたためであつた。彼は難波で筑前藩の勘定奉行生田久繁の保護を受けた。久繁は歌の上での彼の弟子であつて、勤の關係上から難波の富豪たちと交際してゐたのである。言道は、そこに十二年間を送つた。居所は數度變つた。知友には中島廣足・八田知紀・萩原廣道・佐々木弘綱・近藤芳樹・熊谷直好・長澤伴雄などがあり、門人も出來た。久繁が歸藩してからは門人の一人である同じ勘定奉行大岡克俊の保護を受けた。彼は難波の三筆の一人と言はれ、久繁・克俊などの周旋で、揮毫をしてゐたと思はれる。難波に於ける彼の喜びは、遊覽の出來たこととと歌集板行の緒についたこととである。折々京都に遊んだり、又、月が瀨の梅や吉野の櫻などを觀賞した。安政五年（六十一歳）、「戊午集」二卷を撰んだ。これは弘化元年、五十二歳の時から、嘉永元年、五十五歳に至るまでの「甲辰集」から、「己酉集」「庚戌集」「辛亥集」「壬子集」と次を逐つての九年間の歌、一萬首の中から自選したものである。「戊午集」と題したのは、その年に選をした意である。翌萬延元年（六十三歳）の時、「今橋集」を撰んだ。當時今橋に住んでゐたからである。文久元年正月、戊午・今橋二集から抄出した「草徑集」を刊行した。「草徑集」二編の刊行は、豫定のみで果さなかつた。また文久三年から慶應四年までの歌を集めた「續草徑集」も刊行に至らなかつた。元治元年（六十七歳）三月、中風症を發し、慶應三年（七十歳）、鄕里の門人に促されて福岡に歸り、再び池萍堂の人となつた。病の重くなつた頃、言道は筆紙をもとめ、萍堂言道居士と大書した。それが墓碑に刻まれてゐる。

【業績】言道は、古典には據るまいとして自然に古今集風の歌を作つた。その點に於て、彼は蘆庵・景樹（各別項）の系統にある人である。作ばかりではなく、歌論「ひとりごち」を見ても、彼が古今集派の人であることがわかるのである。しかし歌論「ひとりごち」の中には、獨自の論があり、彼は又それを作に移してゐる。彼は「自分は天保の今日只今生きてゐる。だから天保の今日只今の歌を詠まう」といひ、また「或る距離を以て自分を眺める時、はじめて眞實の自分が眺められる、作歌に必要なのは、この距離である」とも言つてゐるが、これは歌の散文化を說いてゐるのである。作例を左に擧げる。

窓に窓むかひあひたる大船の一夜どなりのなつかしげなる
放つ矢のゆくへたづぬる草むらに見いでて折れるなでしこの花

【著書】ひとりごち（別項）○こぞのちり○南樓集○篠屋集○鳥居集等。　〔窪田〕

【參考】大隈言道　佐佐木信綱・梅野義雄共編

子供芝居（こどもしばゐ）　演劇　【別名】ちんこ芝居　【名稱】廣義には子供の出演する芝居の總稱であるが、狹義には子供の見物を對象とする童話劇、又は兒童劇（各別項）と區別して、主として從來の歌舞伎芝居を子供役者本位にして演ぜしめるもの。更に嚴格に言へば、歌舞伎劇初期の男色趣味に基づく若衆歌舞伎及び野郎歌舞伎（各別項）禁制後の子供役者本位の歌舞伎狂言である。ちんこ・中ちんこ芝居とは、その年齡によつて、豆ちんこ等と分ち、大概十五歳以下の子供役者の演ずるものである。

【種類】（一）操芝居の一種たる竹田芝居（別項）の前藝として挿入する舞踊式・笑劇式の子供芝居、（二）操淨瑠璃の人形の代りに子供役者の身振を用ひて、白（せりふ）は床の太夫に語らしめる身振狂言、或は首振り狂言（別項）と稱する子供芝居、（三）獨立して子供役者の一座を組み、成人の役者同樣に歌舞伎狂言を演ずる子供芝居の三種とする。

【沿革】享保の末頃、大阪の機關（からくり）の竹田芝居で餘興の前藝として見せたのが始めで、それから人形を離れた後も俗にこれを竹田狂言と稱した。やがて江戸へも寛保元年三月から九月頃まで竹田近江大掾が下つて堺町で機關と子供狂言とを興行して大當りであつたと「我衣」に傳へる。當時の子供狂言には、獨特の「綾玉踊り」などといふ所作や、「時賴熱田詣」などといふ獨特の笑劇式脚本のあつたことに注目を要する。ついで大阪に於ける竹田座の同業たる石井座・龜谷座でも、子供役者の一座を抱へて、寶曆七年十一月角の芝居で、三座合同數十人の子供役者の一大座で顏見世興行をした。狂言は竹田座の「鬼一法眼三略卷」と「浮名曾根崎」、石井座の「假名手本忠臣藏」と「大塔宮曦鎧」、龜谷座の「御所櫻堀川夜討」「戀女房染分手綱」「源平布引瀧」といふ並べ方で、既に操人形は忘れられて子供狂言が人氣の中心となつた。やがて三座の子供役者等が追々成人するに及んで、十五歳以上の役者が差止められたのは若衆歌舞伎禁制の趣意からである。その後、子供芝居は子供役者の修行機關として加賀屋福之助（後の三代目歌右衛門）の如き名門の子弟も進んで出演するに至り、天明八年夏には堀江市の側此太夫芝居で座元淺尾爲吉を初め、十歳前後の幼兒ばかりの身振狂言の興行あり、「役者髮髮子（ちなんこ）」と稱する評判記まで刊行された。修行過程としての子供芝居の效能に就いては「劇場一觀顯微鏡」にも、「濱芝居や子供芝居があつて、子供の時から段々舞臺數を踏み、その器量に應じ大芝居へも出るので、その修行の次第があるから出世も早く上手の役者も多く出るのだ」と說いてゐるやうに、京阪に於ける子供芝居の傳統はその後も竹田芝居を初めとして大阪座摩稻荷の子供芝居、京都たこ藥師の子供芝居等から幾多の腕達者の名優を產んでゐる。江戸では天保の頃、土佐座で源之助（後に宗十郎）・團三郎（後に團藏）などの子供芝居が當り、その後嘉永年間、中橋の宮芝居佐野松座と向橫丁の壽鶴齋の寄席とで、競爭で子供芝居を興行して、何れも大入りを占め、文久・慶應の頃まで菰張り芝居などで流行つたが維新後は廢れた。明治三十年三月東京歌舞伎座で、丑之助・團子・英太郎・三田八・玉三郎等による復活が意外に好奇心を呼んだのが動機で、同年五月淺草座で、澤村小傳次・中村銀藏・澤村宗之助・中村吉右衛門等を以て子供芝居一座の旗揚げをして、大人も及ばぬ巧者の藝を見せて一時は頗る流行したが、やがて彼等の成人と共に後繼者なく、又九代目團十郎の子供芝居無用論などあつて、程なく廢れた。

小兒養育氣質（こどてかたぎ）　浮世草子五卷　【作者】永井堂龜友　【名稱】小兒養育氣質とも書いてある。　【刊行】安永二年板。

【諸本】氣質全集（帝國文庫）所收。

【解說】所謂、氣質物の一種で、十章の說話を含む端物集である。中京の邊に住む甘崎屋小左衞門は小市郎・小次郎の二人の子を持ち、小次郎の乳母は殊の外の芝居好き、每日のやうに宮芝居を見に行くが、三つになる小次郎に芝居のわかる筈なく、泣き出すと一文菓子を食べさせておく。そのため小次郎は病氣になる。乳母は芝居見物の露顯に氣をもむ。小左衞門はそれを主人思ひのためと誤解して本復すること勸めるので、一時、餘り遠くない島の知合の家へ行くことにした。その島での生活は割合に面白く、珍しく落ちついてゐられたが、間もなく父の計報に接してそこも引上げた。その後は葬式やら跡始末やら、女から受けた病氣の再發などでずる〳〵と暮した。葬式以來、來て泊つてゐる万千子とも少しは感情がほぐれて來た。そして或る夜、もとのやうな關係に戻りさへしたが、以前のやうな感激は湧いて來なかつた。そのうち、四十九日も濟んで、万千子は田舍の家に歸つてしまひ、一方の家に殘つて、母は子を連れて

氣質物の一種で、十章の說話を含む端物集である。中京の邊に住む甘崎屋小左衞門は小市郎・小次郎の二人の子を持ち、小次郎の乳母は殊の外の芝居好き、每日のやうに宮芝居を見に行くが、三つになる小次郎に芝居のわかる筈なく、泣き出すと一文菓子を食べさせておく。そのため小次郎は病氣になる。乳母は芝居見物の露顯に氣をもむ。小左衞門はそれを主人思ひのためと誤解して本復

房、實家で物堅く敎育されて、溫和で愼み深かつた。夫が女中に手を附けて懷妊させたのを知つて、よく世話し、生れた男子の乳母として、一家を和樂ならしめた（卷三の一）。龜屋九四郎といふ櫛細工人、技は秀でたが不身持のため貧乏し、九歲になる男の子を屢々質屋使させたところ、近所に主人の物を盜んで質入した者のあつたのを見て子供心に痛く心配したのを知り、父も改心した。これ母親の心掛け勝れて、子を豫てよく敎育したためであつた（卷三の二）。京の櫻屋醉藏といふ細工人常裝束、卷纓の冠をかぶり、笏を腰に挾み、後參桙（こさんぼこ）を持ち、劍を佩用す。番舞は「團亂旋」。

【沿革】平安朝の初め、高麗の笛師下春といふ者が本邦に傳へたといふ。大槻如電は鳥蘇を鳥蘇利の轉とし、渤海樂舞であらうと言つてゐる。　〔田邊〕

小鳥の巢（ことりのす）　小說　二卷　【作者】鈴木三重吉　【發表】明治四十三年三月より十月まで國民新聞連載　【刊行】四十五年十一月春陽堂。明治大正文學全集（鈴木三重吉篇）所收

【梗概】十吉は大學の卒業を一年の後に控へ

氣質とも書いてある。【刊行】安永二年板。

【諸本】氣質全集(帝國文庫)所收。

【解說】所謂、氣質物の一種で、十章の說話を含む端物集である。中京の邊に住む甘崎屋小左衞門は小市郎・小次郎の二人の子を持ち、小次郎の乳母は殊の外の芝居好き、毎日のやうに宮芝居を見に行くが、三つになる小次郎に芝居のわかる筈なく、泣き出すと一文菓子を食べさせておく。そのため小次郎は病氣になる。乳母は芝居見物の露顯に氣をもむ。小左衞門はそれを主人思ひのためと誤解して本復祝ひに結構な小袖と金子百疋の心付を與へる(卷一の一)。小市郎の乳母は小身ながら、もとは武家の娘、小學の敎に違はぬ兒の師たるべきものであるが、その堅い所が却つて主人夫婦の氣に入らずお暇となる。代りに雇つた乳母は年三十七八、小市郎七歲の腕白ざかりであるが、常に腹痛みて顏の色あしく、毎日嘔吐する。兩親は醫者に診療させるがその效なく、痩せ衰へるばかりである。遊安といふ醫者の診察で一二年積つた酒毒と判明し、乳母が平素隱し酒を飲んだことが露顯して放逐される(卷一の二)。江州八幡の百姓古郡世左衞門は二人の息子を持つてゐるが、商上手に生れついた物領は京都にやり、近江屋八兵衞と名乘つて縞木綿と蠟燭の店を出させ、百姓好きに生れついた弟を仕立ててこれに家督を讓つた(卷二の一)。難波唐物町にて有德なる唐物商唐物屋異左衞門の息子兵之助は、子供の時から一風變つたもの好き。十九の年瘖聾(おし)の女郎に馴染を重ねた。後この女郎は瘖でも聾でもないことがわかつたが、物言ふのもまた格別面白いと妾宅を構へ、その二親をも引取つて圍つた(卷二の二)。京和久屋卷五郎の女房、實家で物堅く敎育されて、溫和で愼み深かつた。夫が女中に手を附けて懷姙させたのを知つて、よく世話し、生れた男子の乳母として、一家を和樂ならしめた(卷三の一)。龜屋九四郎といふ櫛細工人、技は秀でたが不身持のため貧乏し、九歲になる男の子を屢々質屋使させたところ、近所に主人の物を盜んで質入した者のあつたのを見て子供心に痛く心配したのを知り、父も改心した。これ母親の心掛け勝れて、子を豫てよく敎育したためであつた(卷三の二)。京の櫻屋醉藏といふ細工人の娘、派手に育てたため、嫁入りして派手な姑の氣には入つたが、地味な亭主は家のためにならぬと心配し、呪によつて姑嫁の仲を惡くしようとし、邪慳で吝嗇な七十七になる近所の姑の許に袂糞をそれとなく癲癇の藥になるとて貰ひに行つたことが、ふと先方の姑嫁と不和の種となり、遂に詫證文の上、遣ひ物をして事濟みになつた話(卷四の一)。この姑、癲癇の藥を本當と心得、七十七の老婆の袂糞の黑燒を賣出して繁昌し、家が富み榮ゆるに至つた話、卷四の二)。我が子のみを愛して近所の子を虐め、その親より言ひがかりされて喧嘩に及び、樽代出して事濟んだ手前屋勝右衞門のこと、及び近所の多くの子を集めて愛し、五月の節句に、或る貧しい子のために價の高い人形を惠み、且つその親に金を與へた布袋屋德右衞門のこと(卷五の一)。この德右衞門が家の元信筆の布袋の畫の精を僧と現はして、これも子供好きの永井寶順といふ隱居を引合せた話(卷五の二)。

〔藤村・小泉〕

古鳥蘇(ことりそ)　雅樂舞曲　【異稱】高麗拍子曲【性質】高麗樂。新樂、大曲。高麗壹越調曲に屬する。舞があり六人で舞ふ。舞者は常裝束、卷纓の冠をかぶり、笏を腰に挾み、後參緯(こさんばい)を持ち、劍を佩用す。番舞は「團亂旋」。【沿革】平安朝の初め、高麗の笛師下春といふ者が本邦に傳へたといふ。大槻如電は鳥蘇を烏蘇利の轉とし、渤海樂舞であらうと言つてゐる。

〔田邊〕

小鳥の巢(ことりのす)　小說　二卷　【作者】鈴木三重吉【發表】明治四十三年三月より十月まで國民新聞連載【刊行】四十五年十一月春陽堂。明治大正文學全集(鈴木三重吉篇)所收

【梗概】十吉は大學の卒業を一年の後に控へて、神經衰弱のため歸國する。家には盲目の祖母と重い肺病の父とがゐる。十吉の疲れ切つた心には、最早戀をすることそれ自身が苦しくなり、東京で別れて來た戀人にも着いたといふはがきを一本出しただけであつた。すべてが懶い。祖母や父の世話をしてくれてゐる遠緣の小母さへもうるさかつた。しかし故鄕へ歸つて來ると、幼い頃の追憶がそこにもこゝにもまつはつてゐる。幼い頃から一緒に育てられ、やがて戀し合ふ間となつた從姉の萬千子も、嫁入つた先から出戻つてゐるといふ話だつた。十吉が歸るまでは、この家に手傳ひに來てゐたのださうだが、十吉と入れ替りに、小母が歸してしまつたのであつた。しかし十吉としては、あの頃煮え切れない態度を取つて、十吉の家から出て行つてしまつた今の萬千子には、たいした愛着もなかつた。それよりも、滅入るやうな家の中の空氣や、つまらないことにくど〳〵といふ祖母や小母が、十吉の神經を益々いらだたせる。病氣は國へ歸つてから却つて惡くなり、その上、淫賣婦から性の惡い病氣を移されて、頭ががちがちと痛む。病床の父さへ見兼ねて保養に出ることゝを勸めるので、一時、餘り遠くない島の知合の家へ行くことにした。その島での生活は割合に面白く、珍しく落ちついてゐられたが、間もなく父の訃報に接してそこも引上げた。その後は葬式やら跡始末やら、女から受けた病氣の再發などでずる〳〵と暮した。葬式以來、來て泊つてゐる萬千子とも少しは感情がほぐれて來た。そして或る夜、もとのやうな關係に戻りさへしたが、以前のやうな感激は湧いて來なかつた。そのうち、四十九日も濟んで、萬千子は田舍の家に歸つてしまひ、十吉も家を賣つて、祖母と小母を連れて故鄕の町を去つた。

【解說】この作には病父と祖父の人生觀、十吉の戀愛に對する態度等が、自由な筆致で、鮮麗な色感のうちに縷々と描き出されてゐる。そこには深刻な人生の苦惱がある。現實暴露の悲哀といふ言葉は、當時の青年達の合言葉であつた。進步的な知識分子は、懷疑の綱を廣い人生と社會とに投げかけ、偶像破壞の思想は先づ家庭に於ける父子間の對立葛藤となつて現れて來た。この作が「桑の實」(別項)と共に進步的な讀書人に歡迎されたのも、矢張りさういふ理由からであつた。「千鳥」や「山彥」のやうな作品から出發した作者は、この作に於て數段の飛躍を示し、獨自な作風を開拓した。而してこの作も「山彥」などと同樣ネオ・ロマンティシズムの作家としての彼の代表作の一つであるが、「山彥」よりは遙かにリアルであり、又極めて深刻である。主人公のどす黑い苦惱と焦慮とは、明かに世紀末的な頽廢した精神を生々しく表現してゐる。そしてそれは全篇を貫く强烈な情熱と搦み合つてゐる。十分歷史的意義をもつ作品である。

〔江口〕

御内書（ごないしょ）「内書」を見よ。

小中村清矩（こなかむらきよのり）　國文學者【姓名】もと原田氏、幼名は榮之助・金四郎・金右衞門。通稱は將曹。【號】陽春廬（やすむろ）【生歿】文政四年十二月晦日江戸麹町五丁目に生れ、明治二十八年十月十一日東京本郷に歿す。享年七十五。【墓所】東京谷中天王寺【閲歴】幼にして父母を喪ひ、十歳で小中村氏の養子となつた。十八の時養父春矩も死去したので、專ら商業に從事した。從つて定まつた師もなく概ね獨學で進んだ。夙に國史律令の攷究に志し、山田以文の門人村田春野、村田春海の門流伊能穎則などに就いて、官職の事を研究し、本居内遠の推擧で、紀藩の古學館の頭取となり、後、和學講談所で「令義解」を講説する事となつてから、漸くその所志を以て世に立つことを得たのであつた。明治維新の際、太政官制度局に召され、大寶令の古制に基いて、二官八省を立てる官制改革の議に參與して、頗る獻替するところがあつた。後、官國幣社の制定、大賞會の制式、「古事類苑」（別項）の體裁計畫の決定、古典講習科の設置立案等に關して盡す所が尠くなかつた。その古典講習科に對する意見は、歴朝の事實、制度の沿革、古今言語の變遷等を闡明せんとするもので、從來の國學の各派を綜合して悉くこれを研究すべきものとし、その學び得た業を以て今日の實際に運用する事をその主眼とした。【史的地位】明治の初年、歐化主義の上下を風靡する時に當り、國文學研究の命脈を傳へて、古典講習科の經營、「古事類苑」の組織を定めて、後進の俊髦を養ひ、次代の研究に基礎を與へた事は、實に過渡期に於ける國文學界の恩人として尊敬すべき一人たるを失はない。且つその專門が律令の講究に在つて、會々明治政府草創の際で、一般の施設を大寶令に則つて行つた時に當つたのは實に興味あることで、國文學の講究を以て當時の政治の大本に影響を與へたことは、近世に於ては蓋し珍らしい事例であると謂はざるを得ない。その藏書の大部分は南葵文庫に入り、現に東京帝國大學圖書館に收められてゐる。【著書】令義解講義一卷（明治三十六年二月刊）官位令・職員令・神祇令・獄令の講義で、前三令は斯文學會講義錄から採錄し、獄令は遺稿の一部である。○官制沿革略史八卷一册（同三十三年七月刊）東京帝國大學文科大學藏版で、官職の大體を記し、附錄として幕府の職員を擧げ、爵位の條に、冠位以下位勳の制を記したもの。○官職制度沿革史一卷（同三十四年三月刊）法律學校に於ける教授の稿本で、上古から江戸幕府に至るまでの官職の沿革を記したもの。○歌舞音樂略史二卷（同二十一年刊）（別項）上古から江戸時代に至る歌舞音樂の沿革を記したもの。○陽春廬雜攷○國史學の栞等。【參考】小中村清矩先生小傳　中村秋香（高等國文三）　【石村】

湖南の扇（こなんのあふぎ）「黄雀風」を見よ。

子に與ふる文（こにあたふるふみ）　歌論書　寫一卷【著者】加藤枝直【成立】未詳。刊本は無い。自筆本は關根正直家藏。【解説】一子千蔭に與へて、歌の起原及びその史的變遷を述べ、歌の理想、作歌の用意等を説いたものである。即ち今の歌は、皆一つ口から出たやうで面白くない、それは歌の詠み方が規定され、初歩の際から劃一的な教へを強ふるからであるとして、自然眞情の尊むべきことを云ひ、歌の病や式の無用にして、祕事口傳・制詞等のつまらぬ事を指摘してゐる。「俊賴口傳」「悅目抄」等を初め、近世までの當時の巨匠達の歌書も、今の眼で見ると、「いと無下（むげ）に小兒を導くのみの幼きこと」で、百人一首の講釋に百日費し、物語の抄等にくだ〳〵しく古歌を引用して説明する如きことは無益であるとしてゐる。歌の巧みなのは天性であるとも言つてゐるが、併し彼は古歌の勉强、作歌の習練といふ方面を決して閑却してゐるのではなく、假名づかひのみだれた事を慨し、歌學の基礎的方面をも重んじてゐる。而して「歌作る事の上古にもこえ末代にもありかたかりしは、弘仁の後延長の前成るべし」「文治の千載集、元久の新古今集に至りて、ひとへにたくみにけたかく艶にやさしからんとのみたしなむ事には成るめる也」等とあるを見れば、古今の歌風を理想とし、且つ「おのづからなる時世の風調」にひかれるものであるといふ考を支持して、「古今集」の歌風を現代的に生かすことに彼の理想があつたのが知られるのである。【價値】「歌の姿古今を論らふ詞」「答俊仍書」等と共に、この著者の歌論を窺ふべき重要なものである。千蔭等の歌論への影響といふ點からも、又この書が和歌史觀に於て比較的精緻な特色ある見解に富んでゐる事も稱すべきである。なほ「萬葉集」の撰出時代、撰者、研究史等は眞淵の説を繼承した點が多いが、彼が單に歌の時代區分に新見を示したにとどまらず、歌の歴史にも通曉してゐたことが知られる。而して眞淵が「古今集」以前の上代風を理想としたに對し、「古今集」を支持してゐる點は、眞淵の初期の歌論の影響を多く受けてゐると見られるが、とにかく彼一個の見識のあつたことが窺はれる。【參考】日本歌學史　佐佐木信綱　【藤川】

御入部伽羅女（どにふぶきやらをんな）　浮世草子　六册【作者】湯濱・翫水の署名がある。【刊行】寶永七年板【諸本】德川文藝類聚（事實小説）所收【解説】京都の富有な町人で、三井と併稱された大黑屋三世富山九左衞門が一代の榮華を極めて、無謀に家業を擴張したため、晩年破産して僧となつた事實に據つたもので、筋は洛陽長者町の分限者大黑屋宗善は、一子勝久が憂鬱病に罹つたのを氣晴しさせようと遊里に遣つて、幇間宇八を初め十七人の末社に依頼する。勝久は一向氣が浮かず纏まつた緣談さへ破つてしまふ。宇八等は男山八幡に參籠して祈願する。その夜、八幡の鳩が艶女となつて勝久の夢枕に立つ。それより勝久心機一轉して遊里に入り浸るやうになり、豪遊を極める次第を敍したもの。當時浪華に流行した見せ物や、忠兵衞死刑後の梅川の消息などが織り込まれてをり、卷六には、勝久の總揚げした女郎の名寄せが出てゐる等、好色本的色彩が著しく目に立つ。一方、全體としての統一を缺いてゐる。【小泉】

五人男（ごにんおとこ）「青砥稿花彩畫」及び「雁金文七秋の霜」を見よ。

近衞流（このゑりう）　書道【解説】關白左大臣近衞信尹の書流。信尹は太政大臣前久（龜山）の子で、三藐院（さんやくゐん）と號し、和歌繪畫にも巧であつたが、最も書道に於て勝れてゐた。父の前久も詩歌を善くし、青蓮院流（しやうれんゐんりう）（お家流參照）の名手であつたが、信尹に至つては、初め青蓮院流の道澄流を學び、後更に古き上代樣（別項）を本として、定家風の一層遒勁なる書風を發明したのである。世にこれを近衞流、或は三藐院流と云ふ。また本阿彌光悅・松花堂昭乘（光悅流參照）と共に、寛永三筆或は平安三筆と稱せられる。その墨蹟は近衞公爵所藏の自筆日記を始め、書畫共に比較的多く諸方に傳はつてゐる。そして養嗣子内前（應山）が實に能くその書風を傳へて居り、江戸時代には上下共にこれを學ぶものが多かつた。例へば後陽成天皇を始め奉り、豐臣秀頼の右筆和久半左衞門（俊英・是安）、雲州松江の城主堀尾忠晴などそれであるが、また謠本等にも多く應用せられてゐる。（書道參照）【伊木】

木下蔭狹間合戰（このしたかげはざまかつせん）「釜淵双級巴」（かまがふちふたつどもえ）を見よ。

木花開耶姫（このはなさくやひめ）「瓊々杵尊」を見よ。

このほとり　「一夜四歌仙」を見よ。

古俳書文庫（こはいしよぶんこ）　叢書　二十册【編者】藤井紫影監撰【刊行】大正十三年から十五年に至る。續刊の豫定であつたが中止した。大阪天青堂【解説】古俳書中の珍書を主として覆刻集成し、原本に忠實ならんことを期したものである。「菟玖波集」だけは連歌集で、俳諧の前史を知らしめる意味で加へたもので、活版本としては唯一のものであるが、底本が餘りよくないのが遺憾である。文庫全體としての余波（五雲撰）晨野麥人校註　○第十八編白扇集（支考編）、浪化上人發句集（野鶴輯）遠藤桜花校註○第十九編幻の庵（魯九編）、雪の葉（一吟撰）野田別天樓校註○第二十編秋風記（諸九）、諸九尼句集（竹雨・文沙・湖柱編）、諸九尼續句集（其雨編）附、諸九尼考（紫江）田中紫江校註　【志田】

五誹哲（ごはいてつ）　俳諧【名稱・起原】精しくは「貞門の五誹哲」又は「五哲」といふ。江戸に於ける貞德直門の勝れた五人を稱する名稱で、齊藤德元・石田未得・高島玄札・荒木加友・半井卜養（各別項）の五人をいふ。江戸五誹哲、及び五哲の名が、古京の「發句」（別項）に見えて（別項）があり、狐以外の動物では、「玉水物語」「鶴の草子」「鼠の草子」「かざしの姫君」（各別項）、「白猿物語」「雁の草子」等がある。【梗概】山城國木幡の里に、稻荷明神の使者の老狐があつた。數多の子狐の中で、妹姫に當る容顔最も美しいきしゆ御前が十六歳の春の暮、花園を逍遙してゐる三條大納言の子三位の中將を稻荷山から見下して戀慕し、乳母の少納言に謀つて人間の姿に化け、中將に近づいて望の如く契を結んだ。程なく若君誕生あり、大納言の北の方も喜んで對面した。若君

せられる。その業蹟は近衞公爵所藏の自筆日記を始め、書畫共に比較的多く諸方に傳はつてゐる。そして養嗣子内前（應山）が實に能くその書風を傳へて居り、江戸時代には上下共にこれを學ぶものが多かつた。例へば後陽成天皇を始め奉り、豐臣秀賴の右筆和久半左衞門（俊英・是安）、雲州松江の城主堀尾忠晴などそれであるが、また謠本等にも多く應用せられてゐる。（書道參照）　〔伊木〕

木下蔭狹間合戰（このしたかげはざまかつせん）「釜淵双級巴」（かまがふちふたつとものまき）を見よ。

この花（このはな）　詩集　【編者】新詩會【刊行】明治三十年三月同文館　【解說】佐佐木信綱・大町桂月・與謝野鐵幹・正岡子規・武島羽衣・鹽井雨江・杉烏山・落合直文等新詩會々員の詩二十六篇を收めてある。その他、會員として宮崎湖處子・繁野天來の名はあるが、本書に作品は加はつてゐない。純粹の抒情詩よりも叙事詩の多いのが本集の特色である。當時批評に上つた雨江の「深山の美人」、羽衣の「小夜ぎぬた」を初め、信綱の「霜夜の月」、子規の「鹿笛」、烏山の「足柄山」、鐵幹の「郡守の館」、桂月の「浪の花」などが收められてゐる。樣式としては、極めて典雅な七五調で一貫してゐる。ただ子規の作「鹿笛」が少しばかり七五を崩さうと試みてゐるだけである。文章も平安朝以來の短歌や國文脈を踏襲したもので、鐵幹の作だけが、漢詩から來た成語を用ひてゐる。新體詩の過渡時代、一つの系統を代表するものである。概してこの一派の作は新體詩といひ條、叙事詩の場合でもただ長い形式を試みたといふにすぎないので、本質的には新しい詩といふだけの價値を見出し難いものである。　〔河井〕

木花開耶姫（このはなさくやひめ）「瓊々杵尊」を見よ。

このほとり「一夜四歌仙」を見よ。

古俳書文庫（こはいしよぶんこ）　叢書　二十册【編者】藤井紫影監撰【刊行】大正十三年から十五年に至る。續刊の豫定であつたが中止した。大阪天青堂【解說】古俳書中の珍書を主として覆刻集成し、原本に忠實ならんことを期したものである。「菟玖波集」だけは連歌集で、俳諧の前史を知らしめる意味で加へたもので、活版本としては唯一のものであるが、底本が餘りよくないのが遺憾である。文庫全體として、校訂も大體に於て嚴密である上、鼇頭に註解を加へ、解題的の研究も行屆いてゐて、研究者に便益するところが多い。校訂者もその書その書によつて人を得てゐる點も、この文庫の特色であらう。所收の書は次の如きものである。

第一編菟玖波集上（良基・救濟合撰）樋口功校訂○第二編菟玖波集下（同上）同上○第三編芭蕉翁全傳（竹人）、芭蕉行狀記（路通）樋口功校訂○第四編新雜談集（几董）潁原退藏校訂　○第五編其雪影（几董）、續明烏（同上）潁原退藏校訂○第六編奇談夢の棧（行過大人）、高館俳軍記（芝山）勝峰錦風校訂○第七編遊子行（几董）、よし野紀行（同上）潁原退藏校訂○第八編冬の日注解（升六）樋口功校訂○第九編歩月の章（紫曉）、うき草日記（同上）遠藤袞花校訂○第十編秋存分（大江丸）、常磐の香（紫曉編）乾木水校訂○第十一編隨齋諧話（成美）野田別天樓校訂○第十二編正續今宮草（來山）島道素石校訂○第十三編東山萬句（支考撰）藤井紫影校註○第十四編不猫蛇（越人）、削りかけの返事（支考）、露川賣（支考）、猪の早太（越人門人）樋口功後語　○第十五編夢の猪名野（紫曉）伊藤松宇校註○第十六編在岡俳諧遇士傳（百丸）、鉢扣（億麿）鈴木重雅校註　○第十七編風羅念佛（曉臺撰）、もゝちどり（紫曉編）、あきの余波（五雲撰）星野麥人校註　○第十八編白扇集（支考編）、浪化上人發句集（野鶴編）遠藤袞花校註○第十九編幻の庵（魯九編）、雪の葉（一吟撰）野田別天樓校註○第二十編秋風記（諸九）、諸九尼句集（竹雨・文沙・湖柱編）、諸九尼續句集（其雨編）附、諸九尼考（紫江）田中紫江校註　〔志田〕

五俳哲（ごはいてつ）　俳諧【名稱・起原】精しくは「貞門の五俳哲」又は「五哲」といふ。江戸に於ける貞德直門の勝れた五人を稱する名稱で、齋藤德元・石田未得・高島玄札・荒木加友・半井卜翁（各別項）の五人をいふ。江戸五俳哲、及び五哲の名が、沾涼の「綾錦」（別項）に見えてゐるから、それ以前より呼ばれてゐたものと見える。京の七俳仙（別項）に對する稱呼のやうである。

【參考】俳諧家譜拾遺集青木十口〇俳家大系圖　〔萩原〕

木幡狐（こはたぎつね）　御伽草子（二十三部の一）二卷【成立】室町期か。【諸本】古板本は御伽草子本。明治以後は、今泉畠山校御伽草子前編・有朋堂文庫本御伽草紙・日本文學大系第十九卷等に所收【題材】怪婚說話。「日本靈異記」（上卷）「水鏡」（卷上・欽明天皇）等に見えるやうな、人間と狐との結婚傳說の系統をひくもので、後世の信田狐（葛の葉）傳說にまで發展して行くものと見る事が出來る。犬を恐れて遁走するのは狐の本性でもあらうが、「水鏡」のそれと同じく、若に名殘を惜しんで古巢へ歸るのは「葛の葉子別れ」（及びそれの轉化した「百合若大臣野守鏡」の鷹の精立花の子別れや、「三十三間堂棟由來」の柳の精お柳の子別れ）と同型である。結末が剃髮して庵室に行ひすますのが佛道教化の時代色である。御伽草子中に、狐との怪婚說話は、別に「狐の草子」（別項）があり、狐以外の動物では、「玉水物語」「鶴の草子」「鼠の草子」「かざしの姫君」（各別項）、「白猿物語」「雁の草子」等がある。

【梗概】山城國木幡の里に、稻荷明神の使者の老狐があつた。數多の子狐の中で、妹姫に當る容顏最も美しいきしゆ御前が十六歲の春の暮、花園を逍遙してゐる三條大納言の子三位の中將を稻荷山から見下して戀慕し、乳母の少納言に謀つて人間の姿に化け、中將に近づいて望の如く契を結んだ。程なく若君誕生あり、大納言の北の方も喜んで對面した。若君三つの年、中將の乳母中務から玩び物として一疋の犬を獻上すると、身の毛もよだつばかりに驚いた少納言は、急いで姫君を促して館を逃げ出し、姫君も若君に名殘は惜しいが泣く泣く古巢へ歸り、一門の歡迎も嬉しとは思はず、中將父子の事のみ戀しく、遂に嵯峨野へ庵室を結び、綠の髮を剃つて一つ蓮の未來を願つた。管絃の笛の役をすませて七日の後、内裏から歸館した中將は、仰天したが仔細は解らず、その後、後妻も迎へずただこの別れをのみ嘆いた。庵室では若君の榮えをよそながら喜び、一層菩提の道を勤めた。　〔島津〕

小幡小平次死靈物語（こはたこへいじしりやうものがたり）「復讐奇談安積沼」を見よ。

古播磨風筑後丸（こはりまふうちくごまる）　義太夫節段物集　半紙本一册【刊行】卷尾に「右合二十一番之願書并馬驗揃者井上播磨太夫、從二語初一寶永六年春迄不レ殘書集、加二曲節一令二板行一者也」とあるから、多分寶永六年中の出版であらう。大阪上久寶寺町三丁目西澤九左衞門板行。【解說】井上播磨掾の正本中の節事、景事の段を竹本筑後掾の語り傳へたものを集めた繪入細字本で、序跋もなく、すぐに次の如

き目錄が出てゐる。外題の下に「上」の字のあるのは、もとは上下二册各二十丁づつに綴ぢ分けられてゐたのである。

古播磨風筑後丸　上　竹本筑後掾直之正本

目錄

一　日本王代記　▲淨るりもとしのび
二　花山院　きねんのはじめ
三　公平甲論　せいめい神おろし
四　武平宗平　類吉いのりのだん
五　菅原親王　よしむねぐわんじよ
六　仁王之本地　ぐわんじよの段
七　寺社めぐり　ほしまつりの段
八　ふみあらひ　よしつねみやこまはり
九　三浦軍法比　じゆんれいめぐり
十　四天王築紫合戰　七夕まつりの段
十一　月輪親王　いつくしま八景
十二　八幡太郎印揃　くまの〻八景
十三　類光跡目論　諸ぐんぜいはたぞろへ
十四　大友眞鳥　馬ぞろへ
十五　四天王築紫賣　いくさだんぎ
十六　富士牧狩　むしやぞろへ
十七　類吉北國落　かけものぞろへ
十八　入鹿大臣　たうかのまひ
十九　しづか法樂舞　かつこのだん
二十　月輪親王　さい鳥さし
廿一　源平哥論　歌仙のだん

第一は「日本王代記」第三（新墓書類從卷五）、第二は「花山院后諍」第四（近松門左衞門全集第一卷）と同文、第五は「菅原親王」第三（新墓書類從卷九）、第十三は「賴光跡目論」馬ぞろへ（新墓書類從卷五）、第十六は「大曾我」（淨瑠璃稀本集）、第十七は「大掛物十幅對」と同文である。〔藤井〕

小春治兵衞　「心中天の網島」を見よ。

碁盤太平記　淨瑠璃　一段　時代物　【作者】近松門左衞門　【名稱】山科閑居の場で、由良之介が碁盤に石を置いて、瀕死の寺岡平右衞門から師直館の布置を聞き知る件によつて碁盤を据ゑ、太平記の世界なのでこれを續けた。繪入本の內題に、肩書「けんかう法師あとをひ」、並に割書「附師直がさよ衣今は一樣のくろはおり並に大勝四十七目のいし」とある。八行本にはこの肩書なく、九行本には何れもない。【興行】寶永三年六月一日初日、前月の「兼好法師物見車」（別項）の跡追として竹本座に上演。【諸本】八行三十三丁本、九行二十三丁本、繪入細字本等。忠臣藏淨瑠璃集（帝國文庫）・近松傑作全集第二卷・近松淨瑠璃集中（有朋堂文庫）・近松門左衞門全集第四卷・近松全集第七卷・近松名作集上（名著全集）所收。【題材】赤穗義士の仇討を取扱つたもの。

【梗概】（山科大星閑居）鹽谷浪人八幡六郎は大星由良之助と改名して伜力彌と共に山科に裏座敷住ひをしてゐる。鎌倉なる一味の義士連から、仇討の好機到來の密書が屆く。力彌は下男岡平を敵の廻し者と白眼んで斬りつけたが、計らずも彼は師直に味方と見せてゐた寺岡平右衞門で、判官に仕へた足輕平藏の伜であつた。由良之助は瀕死の平右衞門に親子とも一味の中に入れる事を告げた上、碁盤に石を並べて師直館の案內を聽き取つた。昨日着いた由良之助の妻と老母は自刄して、彼の不忠を諫める。由良之助初め一同が判官の墓を中心に割腹して果てる。

繪入本「碁盤太平記」

【解說】場面が多少の變化ある外、誠に簡單な脚色であるが、「兼好法師物見車」で鹽谷判官を護つて師直勢の寄手を討つた家臣八幡六郎が、本曲の大星由良之助の前身となつてゐる等の關係や、「物見車」が上中二段で終つてゐるので、本曲と併せて三段一部に纏まる事や、「物見車」正本に豫告された事等からも、本曲が肩書通りに「物見車」の跡追狂言と考へられる。なほこれに關しては、仇討事件が極めて新しい事實である所から、公儀の咎を蒙つた場合は「兼好法師」一曲をそのまゝ、取留めようとの用意が見られるとの藤井博士の說もある。江戶を鎌倉とし、人名も殊更に變へたのは、幕府の禁令による所であるが、平右衞門の死の動機に技巧を用ひた外は、殆ど事件を如實に描寫した脚色で、そこに却つて事件後五年目の興行としての上演價値が十分首肯せられる。忠臣藏の淨瑠璃は本曲を最初として、海音の「鬼鹿毛無佐志鐙」以後、年々新作を加へて、終に「假名手本忠臣藏」（別項）に至つて大成されたのであるが、「假名手本」の世界と人物とは、殆どこれを本曲に仰いでゐる點に於て本曲の史的地位は高い。但し近松は本曲を成すに當り、虎屋小源太夫正本「鹽谷小次郎夜討對決」に負ふところも尠くなかつたかと察せられる。該曲には、由良之助親子が謀つて鹽谷の遺兒を中心に、二十一人が敵を夜討して本懷を達し、これによつて本領出雲國安堵の上、播磨一國を加增せられたと脚色されてゐる。

【參考】近松全集第七卷解說　藤井乙男　○近松名作集上解說　黑木勘藏　〔守隨〕

御攝勸進帳　脚本　六幕八場　時代物　【作者】初代櫻田治助　【興行】安永二年十一月、江戶中村座上演。

〔役割〕直井左衞門秀國（三代大谷廣治）、駿河次郎清重・下河邊庄司行平（二代市川門之助）、七ツ道具の長兵衞實は備前守行家（初代大谷友右衞門）、義經北方岩手姫（佐野川市松）、富樫妹松風（瀨川雄次郎）、長兵衞女房および實は土佐坊娘敷妙（芳澤崎之助）、三國の傾城若松實はいろう山鶯の替（中村里好）、馬方門出の由松（市川高麗藏、後の五代幸四郎）、是明の君・伊達次郎泰衞（初代中村仲藏）、秀衞娘忍の前（四代岩井半四郎）、鹿島事觸實はお厩の喜三太・富樫左衞門家直・不動明王（五代市川團十郎）、源義經・和泉三郎忠衞（四代松本幸四郎）、武藏坊辨慶・姉輪の平次實は秩父庄司重忠（二代市川海老藏、前の四代團十郎）、川越太郎重頼（中村少長）、藤原秀衞（二代中村傳九郎）。

三幕目安宅關の場は、大薩摩主膳太夫連中。二幕目、淨瑠璃「色手綱戀の關札」富本豐志太夫。【諸本】百萬塔。脚本傑作集下卷（續帝國文庫）・昭和版帝國文庫・顏見世狂言集（日本戲曲全集第三十八卷所收）【題材】文化二年二月、芝神明境內に起つた力士對鳶の者の爭鬪に、「世道用心記」を配し、「双蝶々」へ結びつけたもの。一番目の尼殺しも當時の出來事を當て込んだらしい。

【梗概】「一番目」（序幕）（江の島）本筋に關係なき幕、箱根の閉坊等の活躍。（鶴ケ岡八幡）鬼王新左衞門苦心の結果、逆澤瀉の鎧を取り得た。（箱根權現）祐經と箱王丸の對面。（お照・和田の舞鶴（市川門之助）、曾我五郎時致・南與兵衞實は引窓小僧與五郎・船頭鶯の長吉後に八幡屋與次兵衞（七代市川團十郎）。

【諸本】日本戲曲全集第三十八卷所收【題材】

【梗概】「一番目」（序幕）（江の島）本筋に關係なき幕、箱根の閉坊等の活躍。（鶴ケ岡八幡）鬼王新左衞門苦心の結果、逆澤瀉の鎧を取り得た。（箱根權現）祐經と箱王丸の對面。（お照・和田の舞鶴（市川門之助）、曾我五郎時致・南與兵衞實は引窓小僧與五郎・船頭鶯の長吉後に八幡屋與次兵衞（七代市川團十郎）。

三幕目安宅關の場は、大薩摩主膳太夫連中。二幕目、淨瑠璃「色手綱戀の關札」富本豐志太夫。【諸本】百萬塔。脚本傑作集下卷（續帝國文庫）・昭和版帝國文庫・顏見世狂言集（日本戲曲全集第三十八卷所收）【題材】

幸四郎）、是明の君・伊達次郎泰衞（初代中村仲藏）、秀衞娘忍の前（四代岩井半四郎）、鹿島事觸實はお厩の喜三太・富樫左衞門家直・不動明王（五代市川團十郎）、源義經・和泉三郎忠衞（四代松本幸四郎）、武藏坊辨慶・姉輪の平次實は秩父庄司重忠（二代市川海老藏、前の四代團十郎）、川越太郎重頼（中村少長）、藤原秀衞（二代中村傳九郎）。

三幕目安宅關の場は、大薩摩主膳太夫連中。二幕目、淨瑠璃「色手綱戀の關札」富本豐志太夫。【諸本】百萬塔。脚本傑作集下卷（續帝國文庫）・昭和版帝國文庫・顏見世狂言集（日本戲

れ、眞赤な奴姿の直井左衞門と鹿島の事觸姿のお厩喜三太とを伴にして振事。齋藤次の臣金澤太郎は義經を召捕らうとするが、喜三太はこれを逐ふ。義經は忍の前を直井に託して奧州へ落ちる。〔三幕〕（安宅の關）義經は源八兵衞等九人の山伏姿と共に、關にかゝつたが、關守齋藤次が通行を拒むため、辨慶が勸進帳を讀む。富樫は齋藤次の異議を斥け通行を許したが、辨慶のみは縛られて殘る。やがて義經等の落延びた頃を計り、縛繩をひき切り、とど番卒の首を殘らず引拔き天水桶に打

わかつた。（山中）直井と時助、赤面大廣袖で八龍の鎧を爭ふ。齋藤次と川越太郎・鷲尾三郎等との立廻り。岩倉山の不動明王が現はれて、やがて義經の武運開くべしと託宣がある。〔二番目〕（藤原秀衞館）鎌倉から梶原の名代姉輪平次是宗が義經と岩手姫夫婦の首を受取りに來た。秀衞は娘忍の前と三男和泉三郎との首を義經の身代りに渡した。秀衞の長男錦戶太郎と次男伊達次郎とは、似せ首だと明かした上、義經夫妻を矢襖にかけて討ち取らうとしたが、姉輪事實は畠山重忠は元より義經を助ける心で奮鬪し、終に夫婦は無事な

幸四郎)、是明の君・伊達次郎泰衡(初代中村仲藏)、秀衡娘忍の前(四代岩井半四郎)、鹿島事觸實はお厩の喜三太・富樫左衞門家直・不動明王(五代市川團十郎)、源義經・和泉三郎忠衡(四代松本幸四郎)、武藏坊辨慶・姉輪の平次實は秩父庄司重忠(二代市川海老藏、前の四代團十郎)、川越太郎重頼(中村少長)、藤原秀衡(二代中村傳九郎)。

三幕目安宅關の場は、大薩摩主膳太夫連中。二幕目、淨瑠璃「色手綱戀の關札」富本豐志太夫。【諸本】百萬塔。脚本傑作集下卷(續帝國文庫)・昭和版帝國文庫・顏見世狂言集(日本戲曲全集)所收。【題材】義經奥州落の說話を本筋とし、これに謠曲の「安宅」を中心に、「松風」を取込み、「暫」「道成寺」等をも入れた。

【梗概】〔序幕〕(是明の御殿)竊に天下を窺ふ是明は、堀川夜討の際に、稻毛入道・粕谷藤太等と謀つて朝日の寶劍を掠めた。富樫左衞門の義妹で齋藤次祐家の娘の松風姫と、直井左衞門の妹村雨姫とは共に行平を戀し、花軍で村雨が勝つた。行平・村雨の二人は、粕谷藤太のために打擲され、川越太郎に救はれる。是明は岩手姫を手に入れようとして川越に諫められたが、是明は怒つて義經を隱匿した罪ありとて、川越・岩手姫・行平の三人に死を命ずる。將に太刀を下さうとする時、義經の臣熊井太郎忠基が、暫くと留めに出て三人を助け、朝日の寶劍を取戻す。〔二幕〕(氣比明神)備前守行家は、今は辨慶橋に古鐵買常陸屋となり、七ツ道具の長兵衞といはれたが、鎌田兵衞の一子保丸を締め殺して、義朝が軍勢催促の玉鷄の印を獲た。こゝへ齋藤次祐家が來て、相役富樫を罪にすべき僞勅使の役を長兵衞に賴む。(山中紅葉林の景)廣袖、紫頭巾の義經は女馬士にやつした秀衡の娘忍の前をつれ、眞赤な奴姿の直井左衞門と鹿島の事觸姿のお厩喜三太とを伴にして振事。齋藤次の臣金澤太郎は義經を召捕らうとするが、喜三太はこれを逐ふ。義經は忍の前を直井に託して奥州へ落ちる。〔三幕〕(安宅の關)義經は源八兵衞等九人の山伏姿と共に、關にかゝつたが、關守齋藤次が通行を拒むため、辨慶が勸進帳を讀む。富樫は齋藤次の異議を斥け通行を許したが、辨慶のみは縛られて殘る。やがて義經等の落延びた頃を計り、縛繩をひき切り、とど番卒の首を殘らず引拔き天水桶に打込み、金剛杖二本を持つて芋洗ひの見え。〔四幕〕(富樫館)行平は賴朝の命で、富樫の心を探るため、伊勢三郎は奴時助と名乘り義經の命で馬郎婦の觀音を奪ふため、共々この館に忍ぶ。連れ込まれた娘小富を奪ひ返さうとする行家の妻敷妙と時助の妻お市と、この館に入り込む。勅使中納言義明(實は麻生段八)と井上次郎(實は行家)は直井の妹村雨を縛して來て、不義の咎により行平・松風・村雨を須磨に流罪すべしと告ぐ。時助夫婦は齋藤次から馬郎婦觀音を奪ふ。古鐵買長兵衞と見現はされた井上次郎は、富樫に手裡劍を打つたため行家と知られて、八龍の鎧を乞ふ。富樫は鎧櫃に小富を入れて與へる。敷妙は父土佐坊昌俊が虚の誓紙を書いた祟りで烏、若松はもと鷄籠山の鷄の精で鷄の姿を現はし、素性を明かしたので、富樫、若松に玉鷄の印、敷妙に僞義の小柄を與へる。〔五幕〕(同館)齋藤次、松風を連れ去らうとするのを、富樫然らば觀音を渡せといふ。齋藤次が詮議に引出した時助を富樫が引受けて勅使義明をよぶと、時助が嘗て勢州鈴鹿の盜人頭の頃、その配下にゐた盜人麻布段八で齋藤次に賴まれた僞勅使とわかつた。(山中)直井と時助、赤面大廣袖で八龍の鎧を爭ふ。齋藤次と川越太郎・鷲尾三郎等との立廻り。岩倉山の不動明王が現はれて、やがて義經の武運開くべしと託宣がある。〔二番目〕(藤原秀衡館)鎌倉から梶原の名代姉輪平次是宗が義經と岩手姫夫婦の首を受取りに來た。秀衡は娘忍の前と三男和泉三郎との首を義經の身代りに渡した。秀衡の長男錦戸太郎と次男伊達次郎とは、似せ首だと明かした上、義經夫妻を矢襖にかけて討ち取らうとしたが、姉輪事實は畠山重忠は元より義經を助ける心で奮鬪し、終に夫婦は無事なるを得た。

【解說】この頃の顏見せ狂言の常として、舞臺を華やかに賑かにしただけのもので、筋立は混雜の嫌ひがある。大當りであつたのは役者が揃つてゐたからで、五代團十郎はこの時の評判記で上々吉となつた出世藝である。なほ前年、安永元年に高麗藏となつた後の五代幸四郎が十歲で馬方由松を勤めた。【沼波】

御攝會我閨正月(ごひいきそがうるふしやうぐわつ)

本　六幕十八場　時代世話物【作者】二代瀨川如皐【通稱】め組の喧嘩【名稱】曾我名題へ、その年の閏を利かせた。【興行】文政五年正月二十三日初日、江戸市村座。

〔役割〕工藤祐經・小林朝比奈・關取濡髮長五郎(市川男女藏)、曾我十郎祐成・手代庄八實は山崎與五郎(坂東彦三郎)、箱根畑右衞門・角力駒ヶ嶽馬右衞門(淺尾友藏)、鬼王新左衞門・行司岸守五太夫・南方十次兵衞(市川雷藏)、劍澤郷左衞門・駕籠屋甚兵衞・八幡屋淨閑(澤村四郎五郎)、千葉光月尼・藝者吾妻(澤村璃笞)、時致實は曾我禪司坊・下駄の市(市川茂々太郎)、大磯の虎・下女お早(岩井かほよ)、十次兵衞妻都(吾妻藤藏)、藝者お關・八幡屋娘お照・和田の舞鶴(市川門之助)、曾我五郎時致・南與兵衞實は引窓小僧與五郎・船頭鷲の長吉後に八幡屋與次兵衞(七代市川團十郎)。

【諸本】日本戲曲全集第三十八卷所收【題材】文化二年二月、芝神明境内に起つた力士對鳶の者の爭鬪に、「世道用心記」を配し、「双蝶々」へ結びつけたもの。一番目の尼殺しも當時の出來事を當て込んだらしい。

【梗概】「一番目」〔序幕〕(江の島)本筋に關係なき幕、箱根の閉坊等の活躍。(鶴ヶ岡八幡)鬼王新左衞門苦心の結果、逆澤瀉の鎧を取り得た。(箱根權現)祐經と箱王丸の對面。〔二幕〕(小袋坂)箱根の畑右衞門は捕手に圍まれ逃げる。(千葉家物見)千葉星五郎は許婚の粧姫が光月といふ尼になつたのを憤慨する。光月實は畑右衞門の實子で、千葉家の胤と入れ替へたのは劍澤郷左衞門、それを種に畑右衞門が强請つて郷左衞門に殺される。引窓小僧與五郎、曾我十郎と假裝して來り、色仕掛けで光月尼を騙して殺し、名器三光の茶碗を盜む。山崎與五郎が窺ふ。(裏手)駕籠屋甚兵衞は貧故死なうとするのを引窓小僧が助け、金の代りに三光の茶碗を與へる。〔大詰〕(祐經館)和田舞鶴・十郎・五郎が、常磐津淨瑠璃「通神廓睦言」で三番叟の振事終つて、祐經と吉例の對面。五郎實は箱根の禪司坊、五郎の罪を被て自刄。(奥殿)誠の五郎、鎧を持つて駈け出すを朝比奈の止める草摺引。長唄「正札附根元草摺」。「二番目」〔序幕〕(深川八幡)千葉星五郎が力士駒ヶ嶽の加勢で、藝者お關へ戀慕、八幡屋手代庄八實は山崎與五郎と藝者吾妻の戀仲、力士濡髮長五郎が力添へ。侍ひ南與兵衞が三光の茶碗を番頭權九郎の紹介で二百兩に賣つて行つたが、後で見

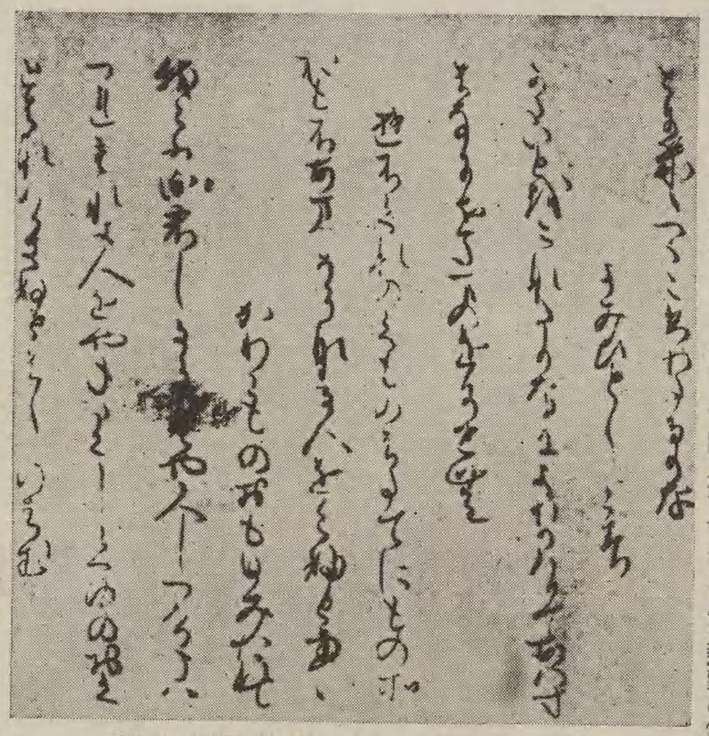
ると贋物。長五郎その茶碗を預かる。（角力場）濡髪と駒ケ嶽の勝負は濡髪の勝となる。濡髪は騙られた忌々しさに土俵で茶碗を碎くと、その破片が見物してゐた船頭鷲の長吉の額に當つて疵がつき、長吉は因縁を附けたが擔ぎ出される。（二軒茶屋）茶碗が割れたと知つた與兵衞、二百兩返しに來て茶碗を受取らうと云ひ出し、一强請りと企んだが、その贋茶碗は無事に戻され、土俵で割つたは濡髪が持用の茶碗と分り、與兵衞實は引窓小僧の正體を現はして逃げる。お關は星五郎が繼慕をうるさがり、濡髪を假の情夫にして一旦は濟ませたが、そのため濡髪は岸守五太夫から預かつた五十兩を手附けに渡す事となる。（永代橋々下）濡髪が船で歸る途中、長吉は水の上で角力場の遺恨を晴らさうとし、喧嘩になつたが、互ひに庄八には義理ある仲と解つて和解。駒ケ嶽はお關を奪つて川へ投げ込んだが、濡髪に救はれる。〔二幕〕（藏前八幡屋）庄八は淨閑に追ひ出されたので、娘の都が詰問に來たが淨閑は取合はぬ。下女お早の手引で庄八は言ひ交した娘お照に逢ひ、夜更に裏から忍ぶ約束をする。淨閑が家督を渡さぬとて、實子長吉は下駄の市と共に蔦口を揮つて暴れるので、五太夫の仲裁で長吉に家を繼がせることになる。（奥座敷）忍び込んだ引窓小僧與五郎を庄八と誤り、お照の忍び逢ひ。長吉は父淨閑の惡事を知つて罪を被るために八幡屋與次兵衞となつたので、三原有右衞門が來て家内に封印を打つ。（多田藥師石置場）お照はお早と共に庄八に逢ひ、間違ひと知つてから畑右衞門の實の娘と明かすので、庄八は敵同士だと怒つて去る。お照自害。與五郎現はれて兄なることを語り、二人を斬つてお照が奪ひ出した三光の茶碗を浚つて逃げる。濡髪來かゝる。〔三幕〕（橋本町駕籠屋）南方十次兵衞の言葉から、藥師前の人殺しが濡髪に疑ひかゝつた事、光月尼を殺した疑ひで入牢した父甚兵衞が今宵死罪にあふ事、庄八が切腹する事等を聞いて、お關は一子白浪勾當と共に、自殺しようとするのを、緣の下に忍んだ引窓小僧が止めて、昔忍び逢つた男と明かし、白浪勾當と親子の名乘り。與五郎の自首で甚兵衞は助かつて歸る。與五郎引かれる。吾妻の手から三光の茶碗戻る。（鈴ケ森）甚兵衞は與五郎が命を助けてくれた恩人と知り、髪を染めて自ら與五郎と名乘り、庄八の前で切腹する。（仕置場）與五郎、引かれ來てお關勾當と水盃。仕置の刹那に庄八駈けつけ、誠の與五郎を討ち取つたと甚兵衞の首を見せるので、與五郎助かる。且つ畑右衞門の密書から、光月尼は入替へ子でお照の姉、與五郎誠は千葉家の胤と解る。（川崎玉林寺）星五郎・郷左衞門の泊つてゐる所へ、與五郎は濡髪と共に駈けつけ、星五郎・郷左衞門の兩人を討つて恨みを晴らす。

【解説】茶碗の騙りの件は、誠によく出來てゐるが、その他は複雜に過ぎ、濡髪と長吉が序幕以後全く不用の人物になるのは拙い。默阿彌はこれを借用して茶碗の件を「繼慕相撲春顔觸」に、與五郎の件を「夢結蝶鳥追」に轉化した。面白いのは茶碗の件であるが、人物としては引窓小僧が最もよく描けてある。これが後に改心し、仇討になるのでは誠に詰らないが、俳優に同情を持たせる作者の技巧で、已むを得なかつたであらう。　〔渥美〕

古筆（こひつ）「古筆切」を見よ。

古筆切（こひつぎれ）古文書學【名義】古筆の斷片を云ふ。中には完全なるものもある。古筆とは古人の筆蹟のことで、主として名家の筆蹟を指して云ふのである。【沿革】古筆鑑賞の風は夙く支那に起つてゐるが、我が國でもその風を承けて、既に奈良朝頃からその事實がある。その後、東山時代に至つて、茶の湯の關係などからして著しく盛んとなり、豐臣時代に至つて極盛に達した。而してこの鑑賞の對象たる名蹟の完全なるものは、實際上容易に得難いものであるので、その斷簡零墨をも珍重し、遂に完本の幾分を切り取つて珍藏愛玩することとなつた。これ即ち古筆切で、これを蒐載したものが古筆手鑑である。彼の東大寺の「賢愚經」、即ち俗に「大聖武」と稱する經文は、もと十卷あつたものが、今は僅に一卷だけ寺に殘り、餘は皆手鑑の種として持ち去られたと云ふことであり、名高い東寺の「風信帖」は、弘法大師から傳敎大師へ贈つた自筆狀であるが、五通のうち二通だけは豐臣秀次に所望せられて割愛したことが、その奥書に依つて知られ、醍醐寺所藏の空海狸毛筆奉獻表は後水尾天皇の叡感に入り、御所望のまゝに、中央の二行を獻上したことが、法務義演の奥書に見えて居り、また同寺所藏開山聖寶（理源大師）の延喜七年の起請も、後半六行は石田三成の懇望に依つて切り取り與へたといふことである。【分類】これ等の古筆切は、聖德太子を初め、天子・皇族・公武の名臣・僧侶・歌人・書家、その他の人物の傳ふべきもの、或は筆蹟の珍奇優美なるもの等であるが、その種類・形狀・内容或は傳來の場所等に依つて、古來それぞれの名稱が附してある。例へば種類の上では、經切（經文の斷片）・切歌（歌書の斷片）・記錄切（日記等記錄の斷片）等、形狀の上では、卷物切・懷紙切・四半切（原本の四分一の斷片）・六半切等、内容の上では、萬葉切・古今切（古今集の斷片）等、原本傳來の上からは太秦切（太秦の廣隆寺に傳來のもの）・本阿彌切・東寺切・高野切・寸松庵切・小倉色紙・本能寺切・平等院切・吉野切・笠置切など色々とある。そしてこれ等の名稱に依り、それが誰の筆蹟であるかといふことが大體分るやうになつてゐる。併しこれは大抵古筆者の付けた名前で、骨董界ではそれで通用してゐるが、名實相伴はぬものが少くない。殊に經切に於てさうである。今左に古來有名なる古筆の名稱を擧ぐれば次のやうである。

聖德太子（太秦切・漢紙切・經切）、聖武天皇（大字經切・大聖武・中字經切）、光明皇后（經切）、嵯峨天皇（經切・卷物切）、空海（東寺切・高野切・心經）、最澄（燒切）、小野道風（本阿彌切・半首切・經切・奈良切・四半切・詩文切）、藤原佐理（通切・筋切・卷物切・四半切）、藤原行成（端白切・針切・四半切・萬葉切・經切・卷物切）、紀貫之（高野切・寸松庵切・興風集切・亭子院歌合切・歌切・古今切）、藤原公任（大色紙・四しきを用とした（玉くしけ）。即ち想は和歌的な優美なものであり、言語表現は通俗な緣語、掛言葉等を用ひて滑稽味を表したのである。この傾向は貞門一般の風であつて、野々口立圃や松江重頼（各別項）の如き、後に師の門を退き一流を起した者でも、本質的にはかゝる風調から出てゐないのである。【價値・影響】從來の俳諧は、やゝもすると卑猥な笑を目的としたものがあつた。貞德出でて想の優美と言語表現の通俗滑稽を旨とした一流を起したので、そこに古風の文學的價値があるとも云へる。併しこれは前代と對して云へるとも云へるが、古筆の鑑定は既に王代から見えて居り、多く文章博士や書家などを煩はしたものである。その後東山時代より古筆の鑑賞漸く盛んとなり、豐臣時代に至つて極盛に達した。その頃、近江西川の人に平澤彌四郎範佐と云ふ者あり、入道して了佐・櫟材と號し、連歌・茶道・書道に秀で、また古來の名蹟を蒐めて愛翫し、その鑑別に巧みであつた。京都に出でて近衞前久に親炙し、その勸めに依つて古筆の鑑定に從事したが、會々豐臣秀次古筆を好み、了佐を愛顧するの餘り、これに古筆の苗字と論を絶たなかつたので、貞德より破門されて一流を起した。殊に重頼は頑固な性質で、貞室・正式とも爭ひ、種々の逸話を殘してゐる。貞室は師貞德より愛せられ、貞德の俳統相續者となつた。西武は幼時より師家の執筆として給侍し、祕訣・故實等を傳授されたといふ。令德もこの二人に次いで師から重んぜられた。七誹仙・五誹哲中のこの外の人々は、各項に讓つてこゝには略する。道節は「もしあらば雪女もや白うるり」の吟によつてしろうるりの道節と呼ばれ、一雪は「茶杓竹」を著して貞室の獨吟と呼ばれ、一雪は「茶杓竹」を著して貞



本阿彌切（傳小野道風筆）

の付けた名前で、骨董界ではそれで通用してゐるが、名實相伴はぬものが少くない。殊に經切に於てさうである。今左に古來有名なる古筆の名稱を擧ぐれば次のやうである。

聖德太子（太秦切・漢紙切・經切）、聖武天皇（大字經切・大聖武・中字經切）、光明皇后（經切）、嵯峨天皇（經切・卷物切）、空海（東寺切・高野切・心經）、最澄（燒切）、小野道風（本阿彌切・半首切・經切・奈良切・四半切・詩文切）、藤原佐理（通切・筋切・卷物切・四半切）、藤原行成（端白切・針切・四半切・萬葉切・經切・卷物切）、紀貫之（高野切・寸松庵切・興風集切・亭子院歌合切・歌切・古今切）、藤原公任（大色紙・四半切・萬葉切・經切）、藤原俊成（住吉切・久安切・補任切・御家切・日野切・了佐切・經切・歌仙書贊・奥書切）、源頼政（平等院切・三井寺切・小四半切）、西行（落葉切・出雲切・江戸切・御裳濯川切・家集切・假名文）、慈鎭（烏丸切・詠草切・中色紙・卷物切・六半切）、寂蓮（右衞門切・大阪切・卷物切・四半切）、藤原定家（小倉色紙・本能寺切・奥入切・三首切・八條殿切・四半切・畫經切・記錄切・大四半切・四半切・類聚切）、藤原家隆（中院切・升底切・祇海切・朗詠切・大六半切）、藤原良經（興福寺切・常知切・折經切・四半切・六半切）、後鳥羽天皇（饅紙・色紙・記錄切・經切・四半切・卷物切）、藤原爲家（北野切・外山切・野路切・箔切・四半切・卷物切）、親鸞（島原切・八尾切・端の坊切・日の丸切）、日蓮（經切・文切・雲敎切）、後醍醐天皇（吉野切・記錄切・歌切）、尊圓親王（卷物切・金澤文庫切・經切・長色切・四半切）、兼好（越前切・熱田切）、頓阿（中國切・紹智切・四半切・白短冊）、淨辨（四半切・白短冊）、慶雲（卷物切・歌合切・半短冊・四半切）、一休（須磨切・ハリ切・卷物切・經切・レンボ切・色切）、東常緣（建仁寺切・四半切）。〔伊木〕

古筆見（こひつみ）　古文書學【解說】江戸時代に於ける古筆即ち昔の名家筆蹟の鑑定家を云ふ。鑑定はまた鑑識或は目利（めきき）とも云ひ、繪畫刀劍を初め、骨董類その他にもあることであるが、古筆の鑑定は既に王代から見えて居り、多く文章博士や畫家などを煩はしたものである。その後東山時代より古筆の鑑賞漸く盛んとなり、豐臣時代に至つて極盛に達した。その頃、近江西川の人に平澤彌四郎範佐と云ふ者あり、入道して了佐・櫟材と號し、連歌・茶道・畫道に秀で、また古來の名蹟を蒐めて愛翫し、その鑑別に巧みであつた。京都に出でて近衞前久に親炙し、その勸めに依つて古筆の鑑定に從事したが、會々豐臣秀次古筆を好み、了佐を愛顧するの餘り、これに古筆の苗字と「琴山」の印とを賜うて、その職業を公認した。これ鑑定家古筆氏の元祖である。そしてその鑑定書たる折紙や極札（きはめふだ）には彼の「琴山」の印を使用したものである。了佐の後、次男一村及び了榮、各々一家を成して家業を繼ぐこととなつたが、一村の孫四代了仲、貞享四年江戸に下つて幕府の古筆見の役となつた。この役は寺社奉行の支配に屬して、古筆の鑑定に任じたものである。また了榮の家は京都にあつたが、子孫多くは江戸に來つてこれに從事し、八代了意に至つてこれ亦幕府の古筆見に採用せられ、了仲の家と共に世々その職を繼いで維新に及んだ。江戸時代に古筆鑑定を業としたものは、右の古筆氏の外にも、畠山牛庵など知名の者があつたが、また僧侶・學者などで、鑑定の依頼に應じた者も少くなかつた。〔伊木〕

古風（こふう）　俳諧【名稱】貞德（別項）流の俳風を稱する語で、延寶七年の中島隨流の「誹諧破邪顯正」（別項）によると、當時談林（別項）が自己の流風を當風と稱する所より、それに對して貞德流の俳風を古風と稱したのに始まつてゐる。貞德の門流としては貞門と稱する。【性質】貞德の俳諧はやさしきを體とし、をかしきを用とした（玉くしげ）。即ち想は和歌的な優美なものであり、言語表現は通俗な緣語、掛言葉等を用ひて滑稽味を表したのである。この傾向は貞門一般の風であつて、野々口立圃や松江重頼（しげより）（各別項）の如き、後に師の門を退き一流を起した者でも、本質的にはかゝる風調から出てゐないのである。【價値・影響】從來の俳諧は、やゝもすると卑猥な笑を目的としたものがあつた。貞德出でて想の優美と言語表現の通俗滑稽を旨とした一流を起したので、そこに古風の文學的價値があるとも云へる。併しこれは前代に對して云へることで、後から見れば大した價値は認められない。又貞德は式目を制定した。これも從來は、多くは一二句の言捨であつて、偶々荒木田守武が俳諧の獨吟千句を試みたものの、式は守武一個の制であつて、一般に準據さるべきものではなかつた。貞德は幼時より連歌の執筆を勸めてゐたから、連歌の式に準じて、一般に則るべき法式を定めたのである。その大成されたものが彼の「御傘（ごさん）」（別項）で、後の俳諧の式の根據となつたのである。尤も談林は多く古風の式を破り、蕉風（別項）も必ずしも古風の式を守らなかつたけれど、大體彼等の法式論は古風を基としたのだから、その感化も大きかつたと云へるのである。併し又談林の反動を呼び、蕉風が必ずしも守らなかつたのは、古風の式がそれ程煩瑣である弊を持つてゐたからでもある。【沿革】古風の俳諧は、開祖貞德の德望によつて、當時非常な勢力であつた。その門葉も殆ど全國的に行き渡つてゐた。門人中、高名な者に、七誹仙・五誹哲（各別項）を初め、荻野安靜・末吉湧節・椋梨一雪・宮川松堅・高瀨道甘・片桐良保等があつた。立圃・重頼は互に爭論を絕たなかつたので、貞德より破門されて一流を起した。殊に重頼は頑固な性質で、貞室・正式（まさのり）とも爭ひ、種々の逸話を殘してゐる。貞室は師貞德より愛せられ、貞德の俳統相續者となつた。西武（さいむ）は幼時より師家の執筆（しふひつ）として給侍し、祕訣・故實等を傳授されたといふ。令德（りやうとく）もこの二人に次いで師から重んぜられた。七誹仙・五誹哲中のこの外の人々は、各項に讓つてこゝには略する。道節は「もしあらば雪女もや白うるり」の吟によつてしろうるりの道節と呼ばれ、一雪は「茶杓竹」を著して貞室の獨吟千句を難じた人である。これ等の直弟からはそれ〴〵多くの逸材を輩出した。即ち立圃門には高井立志・青木鷺水等を出し、重頼門には上島鬼貫・池西言水・高野幽山等を出し、貞室門には榎並貞因・乾貞恕・相淵貞山等、西武門には中島隨流、令德門には芳賀一晶、季吟門には山岡元隣・小西似春・山口素堂・松尾芭蕉等、梅盛門には伊藤信德、未得門には岡村不卜、玄札門には河曲一峰、安靜門には岸本調和・宮尾似船、良保門には田中常矩等を出してゐる。古風の全盛期は明暦・萬治・寛文であつたが、延寶に至り、西山宗因の談林風が天下を風靡するや、古風は漸く衰へて、貞門の宿老幽山・言水・信德・一晶・調和・常矩等皆この風に化せられ、師風を變じたのである。西武門の中島隨流は、古風を守つて最後の奮戰をなしたけれど、大勢の赴く所如何ともする事が出來なかつた。なほ談林の衰微と共に芭蕉の正風が勃興すると、古風・談林の徒が漸く勢力を失ひ、談林化した古風の老將の中には、蕉風に變節する者も出來て、以後古風は益々勢力を失ひ、唯僅かに法式・作法の方面に於て、「御傘」「はなび草」等の說を繰返しつゝ

存在するに過ぎなかつたのである。

【參考】俳諧作者名寄 朝江種寛(俳書大系・系譜邇話集)○綾錦 菊岡沾凉(同上)○俳諧家譜拾遺 青木十口(同上)○俳石(同上)○俳諧家譜早川丈家大系圖 生川春明(同上)○俳諧京羽二重 堀江林鴻(同上)○俳諧貞徳永代記 中島隨流(同上)○歴代滑稽傳 森川許六(同上)○俳論白露(俳諧文庫俳論集)○俳諧略史 大野洒竹(俳諧文庫芭蕉以前俳諧集)○俳諧獨稽古 谷口樓川(俳諧文庫・俳文學大系)○連俳小史 佐々政一○俳諧史の研究 潁原退藏(岩波講座日本文學)　〔萩原〕

古風三體考（こふうさんたいかう）　歌論書　一卷

【著者】近藤芳樹　【成立】天保六年　【内容】短歌・長歌・旋頭歌の三體に就いて考察を試みたもの。その概要を示せば、(一)反歌は短歌と全く同訓同義なること、短歌・長歌は、全く形の長短のみの差で體は同一なること、歌は調とゝのはざるべからず、而して短歌も長歌と同樣に五言七言と續くのが最もとゝのつた調であること、古書に腰句とは第三句なること等。(二)長歌及び長歌の名の起原、長歌は五七を連ねて數十句、或は數百句に至るものもあるが、而も終韻の五七に更に七言一句を加へて結むることは短歌に同じ、從つて後世初韻のみを五七とし、二韻から下を七五七五と連ねるのは誤であること、「古今集」に長歌を短歌と書かれたことの誤、長歌の變調のこと。(三)旋頭歌・混本歌は、同物異名であつて同じく五七七五七七の形である。片歌とは五七七で一首をなすものであるが、形が過小なため二首連ねて問答體となり、結局、旋頭歌の體に變化して片歌は消滅した。旋頭歌には五七五五七七の變體がある等を論じてゐる。

【問題】彼の説は横字部の説に、ほぼ同じであるが、五七調より七五調への變遷の經過が一層詳述されてゐる。組織的に歌格を論じたものとして重要なものである。　〔相原〕

五武器談（ごぶきだん）　故實　二卷

【著者】伊勢貞丈　【名稱】五つの武器談の義で、「保元物語」「平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」「太平記」(各別項)の五軍記物語の武器解説書といふ事である。【成立】短い自序があつて、その中に多賀常政の問に答へて贈つたものである旨を記し、明和八年辛卯十一月十一日とあるが、卷尾には「明和九年壬辰六月伊勢平藏貞丈書」とある。なほ凡例に、「自筆の本は問し人に贈りぬ。是は人に命じて寫しとめたるなり。」とあるのと考へ合はせると、明和八年に起稿し翌九年に脱稿したものであらう。【諸本】帝國圖書館藏本に故榊原芳野納本の岡田光大(みつひろ)藏書印ある寫本がある。又、平家物語抄(國文註釋全書)・平家物語考證の卷尾に收められてゐる。これは内閣文庫本を底本としたものである。【解説】上卷には、保元物語武器談・平治物語武器談・平家物語武器談、下卷には源平盛衰記武器談・太平記武器談を收め、いづれも物語の本文を掲げ、文中の武器・武具を解説したものであるが、ただ「太平記」のみは煩を厭うて、本文を採錄する代りに條目と名目とのみを掲げて、解説を施してある。また凡例に「此書と平義器談(別項)並に鎧色談(安齋叢書所收)とは一種の書なり。これらを參考せば、武器の大體を知るの一助ともなりなんか。」とあつて、書中この兩書に載せてあるものは、その旨を記して、一切解説を省いてある。なほ卷尾に、「おほけなきわがもののふの道芝の露ばかりのみ記す古ごと」といふ一首の和歌が記されてある。　〔石村〕

コブシ　小説　三卷

【作者】小杉天外　【刊行】明治三十九年三月より讀賣新聞に連載、四十一年一月完結。三十九年十月より四十一年七月に亙つて章光閣刊行。

【梗概】新庄政男は父の死後、財産整理の際、異腹の姉が嫁いでゐる折原家に貸した一萬圓の金を督促したが、折原は應じないのみならず、その證書を政男から受取つて破り棄てた。これがために政男は、祖先以來の宅地の外、殆ど無一物になつた。政男の身の上に深く同情したのは日比野家のひとり娘順子である。順子の母は政男の亡父に政男と順子とを夫婦にする事を約束したが、順子の兄が戰死した上に、政男の一身にも變化が起つたので、政男は遠慮し、順子の母も種々考へ込んだが、順子は許婚の關係から政男を夫と定め、その美しい男振に憧れてゐたが、茲に二人の間を割くべき恐ろしい運命が豫定せられてゐた。それは、政男には詛ふべき遺傳——多淫性があることである。彼の母はもと藝妓で、美しくはあるが多淫多情であつたので、政男は母に近づかなかつた。政男は高等商業に在學して一心に勉强し、新庄家の再興に心を傾けたが、遺傳は爭はれず、彼は今年三十二歳といふ豐崎博士夫人節子に挑まれて、脆くも怪しい關係を結んでしまつた。その事いつしか新聞紙の傳ふるところとなつて博士は怒つた。記事は彼女の父深井の手で取消されたが、博士は容易に政男に對する怒りを收めない。直ぐ學校當局へ通知したので、政男は停學を命ぜられ、次いで種々の事情の下に退學となつた。政男はこれに發奮して、渡米を企ててゐたところへ、偶々海外から歸つて來た侯爵桃小路榮子夫人多賀子の柔かい手が、また政男に搦み付いた。多賀子は日比野家の親戚神柳の家に生れ、幼時から順子・政男等と一緒に暮した事がある。その少女時代に政男に戀した多賀子は、いま政男に逢ふと昔の戀が甦つて來た。多淫の遺傳性を有する政男は、その戀を拒絶することが出來ぬ。新庄家再興の事、妹藤子の事、許婚順子の事など氣にかゝらぬではないが、いつか多賀子と深い關係に陷り、多賀子は侯爵家を出て政男と同棲し、その間に一子をさへ設けた。順子はこの事を聞くと心痛のため病を得て死んだ。この前後から政男は頭がわるくなり、狂人のやうになつたが、到頭彼は恐ろしい遺傳性を詛ひ、妹藤子の幸福のため自殺した。彼は拳に固く短刀を摑みながら世を去つたのである。

【批評】本篇は、惡質の遺傳が如何に恐るべきものであるかを説明するために書かれたと言つてよい。しかし遺傳そのものが必ずしも絶對的でなく、教養力によつて、相當調節せられ統御されるといふ事を作者は見逃して了つてゐる。從つて遺傳の型にあて嵌めて主人公政男を描き、興味本位の事件を以て筋を搬んでゐるため、大きな努力の割に藝術味が稀薄になり、調子が低くなつてゐる。　〔高須〕

小伏見物語（こふしみものがたり）　「櫻中將」を見よ。

古風土記（こふどき）　地誌　【名義】風土記(別項)のうち和銅六年の勅命により、或はこれに引續いて撰せられたと認められるものをいふ。【解説】初めは諸國殘らずあつたものと思はれるが、漸次散佚して、今日では「出雲國風土記」「肥前國風土記」「豐後國風土記」「播磨國風土記」(各別項)の各抄本が存してゐるに過ぎない。併し鎌倉時代までは、なほ多くを存してゐたと見えて、

卜部兼方の「釋日本紀」、仙覺の「萬葉集註釋」には、各々多くの「古風土記」の文を引用し、伏見天皇の永仁五年の頃には、伊勢・備後・播磨・常陸・日向・阿波・伯耆・豐後・土佐・肥前等、諸國の風土記を書寫した文獻(高松宮家御藏「袖中抄」古寫本裏面文書)も存してゐる。文體は、略體假字の通用以前の成立に係るので、すべて漢字のみを以て書かれ、純粹の漢文體、文字を顚倒せずに讀む文體、古事記風の文體、宣命體等種々の文體に分れ、一書のうちでもその數種を交へ用ひてゐるものがある。歌謠の部分は多く一字一音を以て書かれてゐるが、中

(別項)及び「古風土記逸文考證」(別項)、木村正辭の「採輯諸國風土記補遺」、及び「逸文風土記捜索」、日本古典全集の「改訂增補採輯諸國風土記」等がある。今これ等の採錄を主とし、筆者の管見を加へて一覽表を作つておく。これ等の遺文のうちには、或は和銅のものならんと思はるゝもあり、更に後のものかと疑はるゝものも存してゐる。又一國にても二種以上を有してゐたらしいのもある。例へば九州に於て筑前・筑後の各國風土記の外に、「筑紫風土記」「西海道風土記」といふものがある。尾張國に就いて、「釋日本紀」「萬葉集註釋」に引用せる

伊勢	伊勢國風土記	稜威道別、日本靈異傳
		釋日本紀、萬葉集註釋、倭姫命世紀、神名祕書、日本書紀私見聞、伊勢內宮拾玉集
志摩	風土記	釋日本紀、萬葉集註釋、詞林采葉抄、塵袋、塵添壒囊抄、
尾張	尾張國風土記	林采葉抄、塵添壒囊抄
	菅清公卿尾州記	塵袋、塵添壒囊抄
三河	參河國風土記	下學集
駿河	駿河國風土記	萬葉集註釋、續歌林良材集
甲斐	甲斐國風土記	和歌童蒙抄、夫木抄
伊豆	伊豆國風土記	鎌倉實記
相模	相模國風土記	續歌林良材集、萬葉代匠記、久保乃須佐備
	播州記	塵添壒囊抄
美作	美作國風土記	伊呂波字類抄、詞林采葉抄
備中	備中國風土記	本朝文粹、萬葉集註釋、諸社根元記、神名帳頭注
備後	備後國風土記	釋日本紀、古事記裏書
紀伊	紀伊國風土記	袖中抄、祕府本萬葉集抄
淡路	淡路國風土記	詞林采葉抄
阿波	阿波國風土記	萬葉集註釋
伊豫	伊豫國風土記	釋日本紀、萬葉集註釋
土佐	土佐國風土記	釋日本紀、萬葉集註釋
豐前	豐前國風土記	釋日本紀、宇佐八幡託宣集、萬葉集註釋、詞林采葉抄、河海抄

卜部兼方の「釋日本紀」、仙覺の「萬葉集註釋」には、各々多くの「古風土記」の文を引用し、伏見天皇の永仁五年の頃には、伊勢・備後・播磨・常陸・日向・阿波・伯耆・豐後・土佐・肥前等、諸國の風土記を書寫した文獻（高松宮家御藏「袖中抄」古寫本裏面文書）も存してゐる。文體は、略體假字の通用以前の成立に係るので、すべて漢字のみを以て書かれ、純粹の漢文體、文字を顚倒せずに讀む文體、古事記風の文體、宣命體等種々の文體に分れ、一書のうちでもその數種を交へ用ひてゐるものがある。歌謠の部分は多く一字一音を以て書かれてゐるが、中には漢文に譯してしまつてゐるものもある。

【價値】風土記は說話を多く含み、又、古詞及び歌謠を含んでゐるので文學上にも注意される。本來地方誌である關係上、その說話の斷片的であるのは缺點であるが、一方には民間に傳承せられた比較的修飾を經ないものが採錄せられてゐると思はれる點は、その强味である。「古事記」「日本書紀」等に見えぬもの、所傳を異にするもの等、何れも有益な資料とすべきである。古詞及び歌謠の部分は、遺存せるもの少き古代文學の形態をも具へ傳ふるものとして、重大な意義がある。

【備考】「古風土記」の本文は多く散佚に歸したが、他書に引用せられて殘つてゐるものがある。多く引用してゐるのは、前記の卜部兼方の「釋日本紀」、仙覺の「萬葉集註釋」の二書であるが、その他にも多少存してゐる。古來學者がこれ等の遺文を蒐集したものとして、彰考館の「風土記殘篇附錄」、今井似閑の「萬葉緯」、吉田令世の「風土記抄」、伴信友の「諸國風土記逸文稿」（別項）、狩谷棭齋の「採輯諸國風土記」（別項）、栗田寬の「纂訂古風土記逸文」（別項）及び「古風土記逸文考證」（別項）、木村正辭の「採輯諸國風土記補遺」、及び「逸文風土記搜索」、日本古典全集の「增訂採輯諸國風土記」等がある。今これ等の採錄を主とし、筆者の管見を加へて一覽表を作つておく。これ等の遺文のうちには、或は和銅のものならんと思はるゝもあり、更に後のものかと疑はるゝものも存してゐる。又一國にても二種以上を有してゐたらしいのもある。例へば九州に於て筑前・筑後の各國風土記の外に、「筑紫風土記」「西海道風土記」といふものがある。尾張國に就いて、「釋日本紀」「萬葉集註釋」に引用せる「尾張國風土記」と、「塵袋」「塵添壒囊鈔」に引用せる「菅淸公卿尾州記」とは、全く別のものである。又「陸奥國風俗」「佐渡國俗記」と稱する如きものもある。これも古い地理書とは見えるが、風土記と同時のものであるかどうかは分らない。その國の風土記の存したことの認められるものには國名を冠し、單に風土記とのみで、その國のであるか否かを明かにし難い場合には、國名を冠せずに置いた。なほ風土記に云ふと明記せるもののみに限つたから、この外に、風土記の遺文と推定せられるものは存するわけである。

【武田】

國名	風土記名	所載書目
山城	山城國風土記	釋日本紀、神名帳頭注、諸社根元記、二十二社註式河海抄、詞林采葉抄、山城名勝志、伊勢內宮
大和	風土記	日本紀纂疏、神代紀口訣、枕詞燭明抄、萬葉集註釋、日本紀抄
攝津	攝津國風土記	釋日本紀、萬葉集註釋、古事記裏書、袖中抄、神社考、續歌林良材集、歌枕名寄、稜威道別、日本紀略傳
伊勢	伊勢國風土記	釋日本紀、萬葉集註釋、倭姬命世紀、神名秘書、日本書紀私見聞、伊勢內宮拾玉集
志摩	風土記	釋日本紀、萬葉集註釋、詞林采葉抄、塵添壒囊抄、塵袋、塵添壒囊鈔、下學集
尾張	尾張國風土記	萬葉集註釋、續歌林良材集、和歌童蒙抄、夫木抄、鎌倉實記
	菅淸公卿尾州記	續歌林良材集、萬葉代匠記、久保乃須佐備
三河	參河國風土記	釋日本紀、萬葉集註釋、詞林采葉抄、袖中抄、萬葉緯、西峯校正神代卷、塵袋、夫木抄、塵添壒囊抄
駿河	駿河國風土記	山槐記、佗山石、中臣祓氣吹抄、鐘の響
甲斐	甲斐國風土記	神名帳頭注
伊豆	伊豆國風土記	袖中抄
相模	相模國風土記	大善院舊記、和歌童蒙抄、袖中抄、古今集顯注密勘、神名帳頭注
常陸	常陸國風土記	釋日本紀、萬葉集西本願寺本、多和文庫所藏文書、古事記裏書、釋日本紀、類聚神祇本源、元々集、萬葉集註釋、瑚璉集、河海抄、武內傳、神名帳頭注、塵袋、塵添壒囊抄、塵添壒囊抄、釋日本紀、詞林采葉抄、釋日本紀、塵添壒囊抄、萬葉集註釋、詞林采葉抄、釋日本紀、塵添壒囊抄、萬葉集註釋、詞林采葉抄、塵添壒囊抄、塵袋、塵添壒囊抄、萬葉集註釋、詞林采葉抄、塵袋、塵添壒囊抄、萬葉集註釋、詞林采葉抄、塵袋、塵添壒囊抄、萬葉集註釋、詞林采葉抄、塵添壒囊抄、萬葉集註釋、詞林采葉抄、塵添壒囊抄、萬葉集註釋、詞林采葉抄

風土記逸文」(別項)に精密なる註釋考證を加へたもの。國別とし、すべて百七十五條を釋してゐる。諸書を博搜して頗る參考に資すべきものがある。〔武田〕

古文こぶん「漢字」を見よ。

小文庫こぶんこ「芭蕉庵小文庫」を見よ。

古文辭こぶんじ　漢詩文　【解說】荻生徂徠が明の前後七子(別項)の說を奉じて唱へ出し遂に一世を風靡したもので、古文辭とは畢竟するに摸擬剽竊である。山本北山の「作文志彀」に、李王の修辭をせんと思はば、それは何でもない事である。數本の小册を作り、平生讀む古書の中からいろ〳〵の語句を拔書し、それを分類整理しておく。そして必要な場合にそれから取出せばよい。一句一字も我より出さず、一々皆古書中より斷抽く。因つて古文辭といふのである。于鱗は白雪樓といふ二階家を作り、文を作る時には何時でもこゝへ上つて梯子を取去り、出來上るまでは自分も下りず人も上げなかつた。それは拔書などの取りひろげてある樣を人に見せないためである。ところが今日の修辭家者流に至つては古書さへも見ず、ただ于鱗・元美・徂徠・南郭等の文集を金科玉條として、只管その成語を抽出して文章を作るのである。修辭の陋極まれりと云つてゐる。以て所謂古文辭なるものの製作方法が分るであらう。だから、叙事・記事の文は作り易いが議論文になると作り難い。因つて「文章は修辭を主とし議論に涉るべからず。修辭の中より意を達するを文の要とす」といふ說を立てた。詩でも同じことで、唐詩中の套語たる陽春・白雪・金樽・萬里・白馬・風塵・紅粉・當壚等の語を好んで用ひ、自ら唐調と稱して得意になつてゐるのである。秋に賓瀨旭莊は當時の詩風を諷つて、「白雲明月字、多ニ於魚卵繁、關山萬里語、恰如ニ玉條懸一、一詩千句孕、千詩出ニ一肝一」といひ、又「詩者人精神、何必立ニ父祖一、可レ芸ニ他家田一、吾詩我爲レ主、莫ニ倩ニ古人一來、逆ニ旅于我肚一」といひ、祇園南海も詩盜判と題する戲文を作つて罵倒し、太宰春臺も晩年自らその非を悟り、古文辭を目して糞雜衣と言つた。徂徠が一たびこの說を唱へ出してから六七十年の間、天下を風靡するほどの大流行となつたが、山本北山・中井竹山(各別項)等が、眞向から古文辭を攻擊し始めてから、いつしか下火になつて、又新しい機運が動いて來たのである。〔佐久〕

古文眞寶こぶんしんぽう　詩文集　二十卷　【編者】未詳。現時の通行本には、元の順宗の至正二十六年の鄭本の序と、明の孝宗の弘治十五年の青藜齋の跋の有るものがあり、鄭序には編者の事に言及せず、ただ林以正なる者が本書を坊間に得て校訂を加へ、註釋を施したものを、その弟子の余某なる者が、鄭本にその本末を敍せんことを請うた由を記すのみであるが、青跋に據れば、本書はもと宋の徐州永陽の黃堅の編するところで、元の林以正の校刪を經たものである。然し黃堅の事蹟は明かでない。林以正は別に「聯新事備詩學大成」三十卷を編したといふ。本書は或は何晦夫の編に係るとするものもあるが、何晦夫の編纂した「古文前後兩集」は、本書とは全く別個の書である。又、明の萬曆十一年の刊本に據れば、神宗の自撰と云ひ、又別に「古文大全」と題するものもあり、又狡賈の輩が謝枋得の「文章軌範」(別項)に倣つて本書を作り、名を託して射利の用に供したものとする者もある。【諸本】現行本は前後兩集各十卷であるが、內閣文庫に藏する朝鮮刊本は、前集十二卷、後集十卷である。又明の葉向高の註釋したものは、「古文大全」と題して、卷數前後各々十卷、「評林註釋古文大全」と題するものは、後集十一卷、又萬曆刊本の「古文大全」は前後兩集合せて八卷に過ぎないが、所收の內容は却つて二十卷本よりも多いと云ふ。【傳來】本書を以て暫く宋人の撰に係るものとしても、已に「明史藝文志」「四庫全書總目提要」等に收錄してゐないのを見れば、恐らくは本國では盛行を見なかつたものであらう。本書の我が國に渡來したのは、足利時代の初期、應永以後で、五山の禪僧の間に盛んに用ひられ、詩文を習ふ者は必ず範をこれに採り、その講誦は日に盛んとなり、江戸時代に至つては、荻生徂徠等がその俗書であることを指摘して排斥に力め、且つその後、謝氏の「文章軌範」(別項)が校刊せらるゝに及んで、編者枋得が宋末の忠臣であるといふので、その人格を景慕するの餘り、海內に流行すると同時に、本書の弘通も漸く衰へたが、謝氏の書の收載するところは、殆ど唐宋の諸家、殊に韓・柳・歐・蘇の文に局限せられてゐるに對して、本書には、上は楚騷から下は唐宋に至るまでの詩文を兼收する等の長所もあり、依然として謝氏の書と相竝んで鄕塾の間に行はれ、語孟の素讀を畢つて後、本書に及ぶのを通例とした。我が國の飜刻は、明初の刊本の覆刻である五山版を最古とし、次いで慶長十四年には活字を以て刊行し、寬永元年には木刻が出で、元祿・延寶年間にも亦刊行せられ、その後明治に至るまで、諸家の校刊したものも少くない。【解說】七國より以後、宋に至る迄の諸家の作を載せ、分つて前後兩集とし、前集は詩を、後集は文を錄してゐる。前集は、(卷一)勸學文・五古短篇、(卷二)五古短篇、(卷三)五古長短篇、(卷四・五)七古短篇、(卷六)七古長篇、(卷七)長短句、(卷八)歌類、(卷九)行類、(卷十)吟類・引類・曲類。後集は、(卷一)辭類・賦類、(卷二)說類、(卷三)序類、(卷四)記類、(卷五)箴類・銘類、(卷六)頌類・傳類、(卷七)碑類・辯類、(卷八)表類、(卷九)原類・論類、(卷十)書類。の如く、體を類別してゐる。しかしその取捨は、齊梁以前は主として「文選」に據つたものらしく、又後集の文も、「文章軌範」と符合するものが二十二篇の多きに上つてゐるのを見れば、編者は一々原集に就いて採選したものではなく、最も手近な數種の選本を本として、更に取捨を行つたものらしい。收載せられてゐるところの詩文は、大抵人口に膾炙する名作であり、前後兩集を一見すれば、ほぼ歷代詩文の代表的作品を誦習し、且つ體制の變遷の概略を知り得るであらう。これが一度我が國に入つて弘く流布して、永く後人に傳誦せられた所以である。【註釋書】古文眞寶前集十二卷後集十卷元宗伯貞晉釋・劉剡校正○魁本大字諸儒箋解古文眞寶前集十卷後集十卷 撰者不詳○古文大全十卷 明葉向高注○新臺閣校正註釋補遺古文大全八卷 清張瑞圖○古文眞寶抄(漢文叢書本)〔宇野・本多〕

語法ごほう「文法」を見よ。

小舞こまい　能狂言　【解說】一般に能狂言に取込まれてゐる小歌を小舞謠と言ふが、多く舞が伴つてゐて小舞と言つてゐる。それはまた狂言から獨立して單獨に歌つたり或は舞つたりされ、更に狂言に取込まれてゐない小歌や小舞をも行つてゐる。隨つて各流とも小舞の名寄に見えない歌舞、例へば「靱猿」の猿歌とか、水汲の小歌とかも、立派に能狂言の中には見出されるし、當然名寄に載せらるべきもので省略せられてゐるものもあり、且つ名寄の中には、雁雁金・餅酒などのやうな能狂言の一部分に相當する小舞謠や、能の小謠小舞も併入されてゐるから、名寄の名だけを見て各流の小舞・小歌を全部であるとする事は許されないのである。大藏流の現行名寄では次の如くなつてゐる。

雁雁金・餅酒・三人夫・松　楪・土車・雪山・泰山府君・紅葉狩・八島・加茂・山姥・躍々・蝶丸・鷺(仁右衞門)流名寄は未見であるから不明である。又和泉流の物は、舊家元と野村家とから刊行されて流布してゐるので玆には略して置く。野村・三宅兩派を通じて、葭の葉・小鼓・藥師・津の國・忍ぶ其の夜などの名が擧げられてゐる。小舞の研究は啻に能狂言研究の一斑たるに止まらず、室町時代と江戸初期との歌謠研究の上からも、閑却し得ない事であるが、未だ見るべきものは成されてゐない。詞章は高野辰之氏編「日本歌謠集成」卷五、藤田德太郎・增進帳　年の寫本に、「業平躍歌」(日本歌謠集成卷六所收)と題したものがある。この書は元和年中、佐渡島歌舞伎座の者から京の北野粥川の加左衞門といふ猿若の名人が傳へたもので、この十六番の歌を揭げてある。又、寶永元年刊の「落葉集」に、古來十六番舞之唱歌と題して、(一)春霞、(二)文がやりたや、(三)君ちとせ山、(四)田舍なれども、(五)そなた思へば、(六)花は折りたし、(七)逢うて戻る夜、(八)まづふみ、(九)二人の君、(十)いとま、(十一)津の國、(十二)いつもより、(十三)織殿へ、(十四)むかふは渡、(十五)たまさか、(十六)たかす通ひ樂ともいふ。高句麗の樂は百濟樂と似たものと見え、その用ひる樂器も相等しく、箜篌(百濟琴)・莫目・橫笛を用ひるのである。併し如何なる曲が存在してゐたかは不明である。その中の數曲は、恐らく後世に改作されて、右方の樂舞の中に入れられて、今日に傳はつてゐるものもあるらしい(雅樂參照)。【沿革】高句麗の樂の我が國に傳はつたのは明かでないが、百濟樂に次いで傳へられたものらしく、欽明天皇の頃には、既に傳來してゐたものと見える。天武天皇の時には高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏されたといふ記錄があるか

つて「文章は修辭を主とし議論に渉るべからず。修辭の中より意を達するを文の要とす」といふ説を立てた。詩でも同じことで、唐詩中の套語たる陽春・白雪・金樽・萬里・白馬・風塵・紅粉・當壚等の語を好んで用ひ、自ら唐調と稱して優雅になつてゐるのである。秋に賞

歌や小舞をも行つてゐる。隨つて各流とも小舞の名寄に見えない歌舞、例へば「軒猿」の猿歌とか、水汲の小歌とかも、立派に能狂言の中には見出されるし、當然名寄に載せらるべきもので省略せられてゐるものもあり、且つ名寄の中には、雁雁金・餅酒などのやうな能狂言の一部分に相當する小舞謠や、能の小謠小舞も併入されてゐるから、名寄の名だけを見て各流の小舞・小歌を全部であるとする事は許されないのである。大藏流の現行名寄では次の如くなつてゐる。

雁雁金・餅酒・三人夫・松楪・土車・雪山・泰山府君・道名寺・海人・鵜飼・景清・放下僧・七ツ成子・宇治の晒・十七八・盃・桑の弓・曉明星・住吉・柴垣

併し大藏流八右衞門派の名寄には、

うさぎ・十七八・掛川・小弓・住吉・七ツ子・柴垣・石工・貝盡・放下僧・海道下・鎌倉・童部舞・萬匠屋・宇治晒・柳の下・瓢簞・小原木・栁の葉

とあるし、茂山千五郎家藏「番外小舞」には、

松竹・春日殿・尼ヶ崎

が記されてゐるから、三十六曲になる譯である。但し水戸家に於ける八右衞門派の名寄はやゝこれ等と異なり、仕舞・小舞・獨吟に區別してあるが、内容は殆ど變りない。鷺流傳右衞門派名寄では次のやうになつてゐる。

雁雁金・餅酒・三人夫・松楪・土車・雪山・泰山府名・道明寺・海人・鵜飼・景清・放下僧・七つになる子・宇治の晒・十七八・曉の明星・盃・桑の弓・住吉・柴垣・府中・いたいけしたる物・鶴龜・若松・勝栗・實瘤取・番匠屋・海道下・兎・石引・鎌倉女郎・末松山・春雨・椙木・小山伏・先文・福神・笠段・玉段・是界・鞍馬天狗・紅葉狩・八島・加茂・山姥・羅々・蝦丸・勸進帳

鷺（仁右衞門）流名寄は未見であるから不明である。又和泉流の物は、舊家元と野村家とから刊行されて流布してゐるので玆には略して置く。野村・三宅兩派を通じて、葭の葉・小鼓・藥師・津の國・忍ぶ其の夜などの名が擧げられてゐる。小舞の研究は啻に能狂言研究の一斑たるに止まらず、室町時代と江戸初期との歌謠研究の上からも、閑却し得ない事であるが、未だ見るべきものは成されてゐない。詞章は高野辰之氏編「日本歌謠集成」卷五、藤田德太郎氏編「校註閑吟集附狂言小歌集室町小歌拾遺集」（岩波文庫）等に載せてある。〔羅田〕

小舞十六番　こまひじふろくばん　舞踊　【名義】

江戸の初世に、幼女の躾として敎へた十六番の舞をいふ。【由來】元祿初年の刊行書「舞曲扇林」によれば、その内の十二番は、小野お通の定めたもので、それを歌舞伎のお郡（阿國）に傳へ、お郡から角助といふ狂言師に、角助から日本傳助といふ狂言師に、傳助から盲太左衞門といふ歌舞伎狂言の鼓打に傳へ、太左衞門が新たに四番を追加して十六番としたものである。左記目錄の十三以下はこの追加に係るもので、これは歌舞伎藝に屬するものであつた。

（一）もしほ草　（二）祈る鹽　（三）寢物語
（四）萬代　（五）ますはな　（六）人ごころ
（七）なにはお　（八）織殿屋　（九）かこち
（十）しののめ　（十一）山崎通ひ　（十二）なぞらへ
（十三）京鹿子　（十四）やゝこ　（十五）さらし
（十六）六拍子

若衆歌舞伎時代にもこれを習はせておしきせと稱へ、姿嬉世小舞などとも書いた。天和元年の寫本に「榮平躍歌」（日本歌謠集成卷六所收）と題したものがある。この書は元和年中、佐渡島歌舞伎座の者から京の北野弼川の加左衞門といふ猿若の名人が傳へたもので、この十六番の歌を掲げてある。又、寶永元年刊の「落葉集」に、古來十六番舞之唱歌と題して、

（一）春霞、（二）文がやりたや、（三）君ちとせ山、（四）田舍なれども、（五）そなた思へば、（六）花は折りたし、（七）逢うて戻る夜、（八）まづふみ、（九）二人の君、（十）いとま、（十一）津の國、（十二）いつもより、（十三）織殿へ、（十四）むかふは渡、（十五）たまさか、（十六）たかす通ひ

を載せ、近くは寶暦十二年刊の「歌舞妓事始」にも出してある。けれども「今人ごとに、しつけ小舞敎ゆれども、小舞の名をさへ知る人稀なり」と「舞曲扇林」にあれば、元祿に入つては次第に廢れたのであらう。但しこの小舞は近代舞踊の基礎となつたものであり、歌は室町から江戸への過渡期に立つものが混在して、注目すべきものが多い。然るに諸書の記載に出入があつて、歌の數は二十を越えるが、「榮平躍歌」の所載が、最も古體を存してゐると思はれる。

【參考】日本演劇の研究高野辰之○近代歌謠集藤田德太郎編〔高野〕

高麗樂　こまがく　雅樂　【異稱】狛樂　【解說】

元來高麗の樂の意であるが、これに二樣の意義がある。一は古く三韓の中の高麗から我が國へ傳はつた樂を指すもので、一に高勾麗樂ともいふ。二は後に至り左方の樂に相對して別種の樂舞を作つたものであつて、その中に朝鮮傳來の曲の改作や、渤海傳來の曲や、又これを摸して我が國で作つた多くの樂舞を總稱したもので、一にこれを右方の樂、又は右樂ともいふ。高勾麗の樂は百濟樂と似たものと見え、その用ひる樂器も相等しく、箜篌（百濟琴）・莫目・横笛を用ひるのである。併し如何なる曲が存在してゐたかは不明である。その中の數曲は、恐らく後世に改作されて、右方の樂舞の中に入れられて、今日に傳はつてゐるものもあるらしい（雅樂參照）。【沿革】高勾麗の樂の我が國に傳はつたのは明かでないが、百濟樂に次いで傳へられたものらしく、欽明天皇の頃には、既に傳來してゐたものと見える。天武天皇の時には高麗・百濟・新羅三國の樂を庭中に奏されたといふ記錄があるから、この時は既に三韓の樂が並び行はれてゐたものらしい。その後大寶令、天平三年の雅樂寮制度、大同四年の制度などには、常に高麗樂師が、他の百濟樂師・新羅樂師と並び記されてゐるから、仁明天皇の頃迄は、古風のまゝの三韓樂が行はれてゐたものらしい。然るに承和の頃に樂制の改革が行はれ、樂舞は凡て左方と右方とに分れ、三韓樂は大改作が行はれて渤海樂などと共に右方の樂に編入されて了つたので、古い高勾麗の樂は兎に角消滅したものと考へられる。（雅樂・舞樂參照）〔田邊〕

駒競行幸繪卷　こまくらべぎやうかうゑまき　繪卷

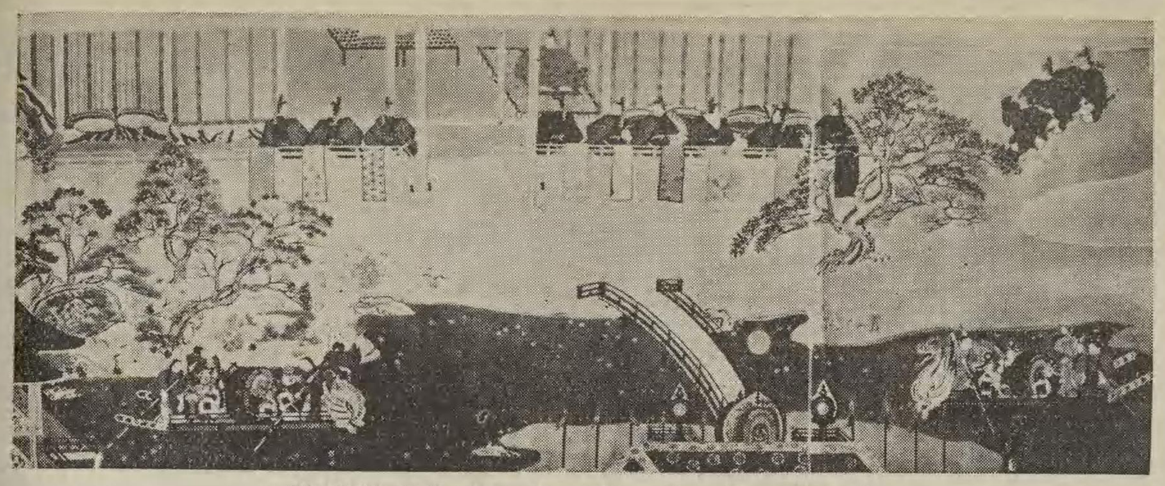
【解說】「榮華物語」駒競べの段を畫いたもので、帝室博物館には天保年間狩野晴川の摸寫したものが二卷あり、外にそれより以前の摸寫本を田中親美氏が所藏してゐるが、この繪卷の原本の殘闕としては岩崎男爵に繪一段、三條公爵に詞と繪と相應して一段ある事が知られてゐるばかりである。前者は高陽院御幸の圖で、後者は京極殿御幸の圖である。筆致は精細で、金銀五彩の色どりも極めて美しい。鎌倉初期の畫家光時筆と云はれてゐるが、そ

語法　「文法」を見よ。

小舞　こまひ　能狂言　【解說】

一般に能狂言に取込まれてゐる小歌を小舞謠と言ふが、多く舞が伴つてゐて小舞と言つてゐる。それはまた狂言から獨立して單獨に歌つたり或は舞つたりされ、更に狂言に取込まれてゐない小

の整美の致に富んだ典型的な大和繪の描寫から見て、鎌倉末期の製作であらう。〔田中(一)〕



駒競行幸繪巻（三條公爵家藏）

小町（こまち）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】小野。一説に玉造【生没】未詳、ただ活動したのは貞觀の頃とも、承和の頃ともいか、又享和は六十九とも九十二ともいふ。【稱呼】小町は三條町・三國町と同じく、宮中の局町に住んだ采女の稱で、固有名詞ではなく、多くの小町がゐたとする說がある。一說には小町の姉も采女で小野町と云ひ、妹を小町と云つたといふ。【家系】出羽國郡司良眞の女で、篁の孫、妹子王の後裔（小野氏系圖）。但し妹子は敏達天皇の御孫とも、孝昭天皇の後裔ともいふ。良眞は良實に作り、一說には當澄、常澄ともいふ。或は良實が大和守に任じて上洛の途中玉造の庄で美少女に遭ひ、これを得て養女にしたとする說や、玉造義景の子とする說がある。【閲歷】「玉造小町壯衰書」中の小町は、天成の美人で、父母の寵愛を受け榮華を盡し、王妃となることを理想として、多くの求婚を斥けた。然るに父母兄弟に死別して俄に零落し、或る獵師に嫁して一子を設けたが、夫や子にも先立たれ、見る影もない乞食となつて、路頭に匍匐し、心中ただ諸佛の救濟を願つたといふ。一方、歌人の小町は、康秀・遍昭・躬恒・業平・安倍清行・小野貞樹等、多くの歌人と歌を贈答してをり、その中には戀愛關係のあつた者もあることが想像され、「小町集」によれば、或る高貴の方と關係があつたことがわかり、「後撰集」卷十八に、小町孫の歌があるから夫をもつたことが分る。宣旨によつて「雨乞の歌を詠んだことは「小町集」にも「小大君集」にも見えてゐる。以上二つの小町は最初は關係のなかつたものと考へられるが、後世では兩者が混同され、數奇の運命を極めた美人といふ概念として、多くの傳說が附會されてゐる。先づ結婚の相手としては大江惟章（親房、古今集序註）、たんおなりさと（經信知顯抄）、井出寺の別當等があり、遍昭に擬せられてゐる深草少將との間には百夜通ひの說話がある。晩年には乞食となつたといふ外、發狂したともいはれる。死處に就いては、井出・相坂等諸說がある。その髑髏は陸奥八十島に横はつてゐて風雨に曝され、その眼から薄が生えてゐたのを業平（又は遣信中將・實方朝臣等）が弔問すると「秋風のふくにつけてもあなめ〳〵」と歌をよんだといふ（江談抄）。歌人小町が陸奥に何かの關係を有してゐたことは陸奥の地名を詠んだ歌、陸奥に下る人を送る歌があるのによつて分る。隨つて父良眞を陸奥國郡司とし、出生地をも陸奥とし、その邸跡には毎年赤い芍藥が九十九輪咲くといひ、その地からは必ず美人が出るが若くて死ぬるといはれてゐる。小町を題材とした謠曲は相當に多く、「卒都婆小町」は乞食の狀を、「關寺小町」は老後の佗住居を取扱つてゐる。【作品】家集に「小町集」（別項）があり、勅撰集に入つてゐる歌は、古今集十七、後撰四、新古今以下凡そ四十二、合計凡そ六十二首、私撰集に入るものは、新撰和歌五、その他傳說的に小町の歌とされてゐるものが數首ある。【批評】小町の歌は情熱的で、奔放不羈であり、自棄的な所さへ見える。反省・沈潛などの方面は、殆ど缺けてをつて、一時に二つの異つた想を持たうとするやうなあわただしさがある。詠みさしのやうな不完全な表現に却つて強い感情が表はれてをり、修辭上の缺陷や不自然な懸詞、散文的な口調は分裂的な彼女の性格を示してゐる。夢と海洋とは、現實に直面する事を避けた彼女が常套的に用ひてゐる素材である。貫之は古今集序に於て、「哀なるやうにて強からず、いはばよき女の惱ある所あるに似たり。強からぬは女の歌なればなるべし」と評してゐるのは、概括的ではあるが適切な評である。鎌倉時代に至つては順德院の御夢に現はれ（八雲御抄）、歌の神の如く信仰されてゐる。左に作例を擧げる。

うたたねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

【參考】小野小町の考（本居內遠）○小野小町論（黑岩涙香）○傳說化されたる小野小町（西下經一）（國語と國文學昭和四ノ一〇）　〔西下〕

小町（こまち）　所作事　【解說】六歌仙に諷はれた小野小町の一生には種々の傳說が多く、七小町等として後世に傳へられ、これ等が戲曲化されて、謠曲に七小町とて七種の小町がある。更にこれ等によつて操淨瑠璃にも作られ、竹田出雲作の「七小町」等が有名であり、歌舞伎では既に元祿六年八月、京都早雲座の「好色傳授」（別項）で竹島幸左衞門が關寺小町の所作を演じてをり、また元祿十年春（？）近松門左衞門の「百夜小町」（別項）や三升屋兵庫（初代市川團十郎）作、元祿十六年四月、江戸森田座所演「成田山分身不動」（別項）の中には「草紙洗小町」「通小町」「關寺小町」等の趣向が見えてゐる。その後、各種各樣に脚色されたが、又舞踊としても、各種各樣の小町物が生れた。【沿革】非變化舞踊では寶曆三年十一月、江戸市村座「冠競和黑主」第一番目「小町あくがれ少將芥川紅葉柵」（作詞、壕越二三治。作曲、佐々木市藏）が古く、常磐津節で、市村龜藏（後の九代羽左衞門）の深草の少將と中村粂太郎の小野小町等で百夜通ひの所作を演じた。變化舞踊としては天明七年三月、江戸桐座「都鳥彌生渡」第二番目大切「七變化繪巻」（作詞、瑞山堂八、[illegible]）で、四代岩井半四郎が七變化所作事の一に、「關寺小町」を演じたのが古い。而して舞踊の小町物は六歌仙（別項）の「小野小町」（業平小町）を別にして「通小町」「關寺小町」「卒塔婆小町」「玉だれ小町」「雨乞小町」「草紙洗小町」「鸚鵡小町」「清水小町」等がある。【諸本】日本歌謠集成卷九・十・十一、歌謠音曲集（日本名著全集）、日本音曲全集第三・九等所收。【主要種目】その主なものを擧げる。

小町集（こまちしふ）　歌集　一卷　【名稱】小野小町集・小野小町歌（家）集ともいふ。【諸本】版本には、群書類從卷二七二所載本・歌仙歌集本・繪入本（中二卷）があり、寫本も二三ある。【成立】本居內遠は、後人が諸書より拾ひ集めたものであらうといつてゐる。但しその時代は、「新古今集」以前と考へられる。【解說】類從本は歌仙歌集本と同系統であるが歌が一首多く、百十七首を收めてゐる。兩本共に二種の異本（一本は北相公本）によつて補つた十六首を卷末に揭げてゐる。繪入本は上卷が歌仙歌集本と同じく、下卷は「小町業平歌問答」とし四年十一月市村座。長唄）○七小町姿絲（前出の中、長唄。狂亂の關寺）等。〔卒塔婆小町〕倭假名色七文字（文化五年十一月森田座。長唄と常磐津との掛合。變化物）○きのふ見た月にめ掛合。變化物）○づらしきさくら哉七枚續花の姿繪（通稱老女、又は卒塔婆小町。文化八年三月市村座。長唄。變化物。曲は傳存、振は廢滅してゐたが、昭和五年五月の花柳舞踊研究會に、能仕立ての趣向で復活）○七小町姿絲（前出の中、長唄。卒塔婆曳）○假名手本忠臣藏（弘化四年三月市村座。長唄。十一段早替り變化物の一）等。〔玉だれ小町〕杜若七重の染衣（寛政四年四月河原崎座。長唄。變化物）○思ひきや今こそ死出の[illegible]妙法蓮[illegible]清元延壽太夫。作曲、清澤萬吉（後の初代清元齋兵衞）、振附、市山七十郎。〔傳來〕曲・振ともに傳存〔題材〕當時江戸市井に姿を見せた女太夫を舞踊化したもの。〔內容〕夕立をいとうて駈け出して來る女太夫（中村松江、後の二代富十郎）、晴間を見て、三味線取出し、白藤源太の四つ竹節の振から、輕いクドキ、二上りの賑やかな手踊に終る。四つ竹節の件が、曲・振ともに傑出、化政度の風俗をよく物語つてゐる。二代中村松江、上阪名殘の所作事として出した七小町やつしのもので、「傾城」「田舍娘」「老女」「鳥さし」「女達」「石橋」と組合せた七變化の一。

二代目川崎藏）で、四代岩井半四郎が七變化所作事の一に、「關寺小町」を演じたのが古い。而して舞踊の小町物は六歌仙（別項）の「小野小町」（業平小町）を別にして「通小町」「關寺小町」「卒塔婆小町」「玉だれ小町」「雨乞小町」「草紙洗小町」「鸚鵡小町」「清水小町」等がある。

【諸本】日本歌謠集成卷九・十・十一、歌謠音曲集（日本名著全集）、日本音曲全集第三・九等所收。

【主要種目】その主なものを擧げる。

通小町（長唄正本）

〔通小町〕芥川紅葉柳（前出）○少將道行百夜車（明和二年七月市村座。長唄）○百夜車の我からと去程戀積り〳〵し花の雪重荷（通稱少將。常磐津。文政二年十一月中村座）○紫陽やつたなきさまの繪の具皿七小町姿絲（通稱少將通小町。文政十年六月市村座。長唄。變化物）等。〔關寺小町〕姿の鏡關寺小町（通稱關寺。明和二年十一月中村座。長唄）○關寺小町通路小町百夜菊色の世中（通稱關寺、又は檜垣。安永五年十一月市村座。富本の名曲。曲は上下の中下卷のみ傳存。また下卷は清元に改調されて現行）○七襲東雛形（前出）○七小町容彩四季（後出の中、長唄。老女）○しん曲關寺小町（文政四年十一月市村座。長唄）○七小町姿絲（前出の中、長唄。狂亂の關寺）等。〔卒塔婆小町〕倭假名色七文字（文化五年十一月森田座。長唄と常磐津との掛合。變化物）○きのふ見た月にめづらしきさくら哉七枚續花の姿繪（通稱老女、又は卒塔婆小町。文化八年三月市村座。長唄。變化物。曲は傳存、振は廢滅してゐたが、昭和五年五月の花柳舞踊研究會に、能仕立ての趣向で復活）○七小町姿絲（前出の中、長唄。卒塔婆曳）○假名手本忠臣藏（弘化四年三月市村座。長唄。十一段早替り變化物の一）等。〔玉だれ小町〕杜若七重の染衣（寛政四年四月河原崎座。長唄。變化物）○思ひきや今こそ死出の旅衣きつゝ南無妙法蓮華經七字の花在姿繪（文化三年二月中村座。長唄。變化物）等。〔雨乞小町〕大津畫雜張浮世繪色入其九繪彩四季櫻（通稱雨乞小町。文化十二年三月中村座。長唄。曲のみ傳存。變化物）○七小町姿絲（前出の中、長唄）○奈良七重ふりし吉野の八重櫻興九重彌生花道（天保四年三月中村座。富本。變化物）○和歌德雨乞小町（明治二十九年四月明治座）等。〔草紙洗小町〕七小町姿絲（前出の中、常磐津。鶴屋小町姿絲（前出の中、長唄）○六歌仙容彩等。〔鸚鵡小町〕七小町姿絲（前出の中、常磐津。仲居のあふむ）等。但し正系のもの見當らず。〔清水小町〕七小町姿絲（前出の中、常磐津。但し正系のものは見當らない。

【七小町容彩四季】清元節〔別名〕雨乞小町。通稱女太夫、又は七小町〔初演〕文化十三年九月二十四日初日、江戸中村座「源平布引瀧」第二番目大切。作詞、福森久助。太夫、初代清元延壽太夫。作曲、清澤萬吉（後の初代清元齋兵衛）、振附、市山七十郎。〔傳來〕曲・振ともに傳存〔題材〕當時江戸市井に姿を見せた女太夫を舞踊化したもの。〔內容〕夕立をいとうて駈け出して來る女太夫（中村松江、後の二代富十郎）、晴間を見て、三味線取出し、白藤源太の四つ竹節の振から、輕いクドキ、二上りの賑やかな手踊に終る。四つ竹節の件が、曲・振ともに傑出、化政度の風俗をよく物語つてゐる。二代中村松江、上阪名殘の所作事として出した七小町やつしのもので、「傾城」「田舍娘」「老女」「鳥さし」「女達」「石橋」と組合せた七變化の一。

【參考】近世邦樂年表○近世江戸舞踊史九重左近○劇代集二代櫻田左交〔秋葉・湿美〕

小町踊　こまちをどり　踊舞【名義】七夕の日に十二三より十七八の女が美しく着飾つて、謠ひ踊つたのをいふ。依つて一に七夕踊ともいふ。【沿革】寛永頃から行はれたらしい。京都では大內をはじめ、町方小路々々や友達の許へ行つて踊をかけた。歌は、

二條の馬場に鶏がふける。何とふけるぞ立ち寄つてきけば、今や御上洛上樣繁昌、花の都はなほ繁昌。

盆々ぼんは今日あすばかり、あしたはよめのしをれ草。

が古い。柳亭種彥は前の方のを、寛永十一年將軍德川家光が上洛の時の歌と考定した（還魂紙料）。後の也延寶頃には行はれてゐた。「續江戸砂子」（享保二十年刊）には、少女が腰帶のやうな物を襟にかけて躍とし、團扇太鼓で拍子をとつて諷つて群れ歩くだけだとある。この頃には、もう踊ることが廢つたらしい。

【參考】還魂紙料　柳亭種彥　○嬉遊笑覽　喜多村信節

小町集　こまちしふ　歌集　一卷【名稱】小野小町集・小野小町歌（家）集ともいふ。【諸本】〔高野〕版本には、群書類從卷二七二所載本・歌仙歌集本・繪入本（中二卷）があり、寫本も二三ある。

【成立】本居內遠は、後人が諸書より拾ひ集めたものであらうといつてゐる。但しその時代は、「新古今集」以前と考へられる。【解說】類從本は歌仙歌集本と同系統であるが歌が一首多く、百十七首を收めてゐる。兩本共に二種の異本（一本は北相公本）によつて補つた十六首を卷末に掲げてゐる。繪入本は上卷が歌仙歌集本と同じく、下卷は「小町業平歌問答」として小町の歌三十二首を掲げてゐるが、後世の僞作である。全卷に部類がなく雜然としてゐるのみならず、重複したものもある。小町姉・小町孫の歌を加へてゐるのみならず、小大君を初め全然他人の歌も混入してゐて、眞に小町の歌は七十首位である。

【參考】小野小町の考　本居內遠〔西下〕

小町草紙　こまちのさうし　御伽草子（二十三篇の一）二卷【別名】小野小町・小野小町物語・小町物語【成立】室町末か。【諸本】古板本は御伽草子本、寛文板（鱗形屋開板）。御伽草子前編（今泉・畠山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷等所收。

【內容】歌物語。本地物。清和天皇の頃、內裏に小町と云ふ歌人で色好の遊女があつたが、老いて容色も衰へ、ただ觀世音の來迎を待つてゐると、在原業平が訪れて歌物語をする。小町は過去の愛慾を懺悔すると、業平は「大悲を賴め」と告げて消え失せる。小町は「成れの果てを見よ」と人々に囁かれる中を漂泊の旅に彷徨ひ出て、逢坂・鏡山を過ぎ、小夜の

中山を越え、富士を眺め、武藏野から奥州へ出て、遂に玉造の小野の露と消えた。歌枕を尋ねて此處へ來た業平は、その跡を弔はうとすると、風に傳はつて「くれごとに秋風吹けばあさな〳〵」と歌の上の句が聞えるので、「おのれとはいはじ芒のひとむら」と下の句を附けると、叢の中から小町の靈が現れて、後世の弔を願ふかとすれば姿は失せ、一叢芒の中に白骨を留めるばかりであつた。小町は衣通姫の流れ、如意輪觀音の化身、業平は十一面觀音の化身と云ふ。

【題材・構想】業平が陸奥の八十島の野中で、「秋風の吹くにつけてもあなめ〳〵」の聲を聞いて、「をのとはいはじ芒生ひたり」と和したと云ふ髑髏傳說（古事談第二・江家次第卷一・袋草紙卷四・和歌童蒙抄第七・無名祕抄下・東齋隨筆・袖中抄第十六・謠曲「通小町」等）と、「玉造小町壯衰書」の記事等から作つたもの。謠曲「卒都婆小町」の素材とも共通してゐる。歌道と佛道とを結び付けてあるのが、謠曲「高砂」の歌道と神道に於けると同樣の時代色で、六歌仙中の業平と小町を相對せしめ、しかも兩者を觀音の化身とするのも亦時代色である。なほ別にこの期の作品として、前掲以外の小町物（草紙洗小町・鸚鵡小町・關寺小町等）、御伽草子「小町歌爭」等がある。

【參考】傳說化されたる小野小町西下經一（國語と國文學昭和四ノ一〇）　〔島津〕

小町物の謠曲

【曲目】世阿彌が能作書に、「女體には伊勢・小町」と推奬してゐる小野小町を主人公とした謠曲に、「草子洗小町」「通小町」「卒都婆小町」「關寺小町」「鸚鵡小町」がある。【諸本】現行諸流諸本。謠曲觀書（芳賀・佐佐木）・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番（日本名著全集）等所收。

【草子洗小町】三番目　〔作者〕世阿彌（能本作者註文）とも觀阿彌（二百十番謠目錄）とも。〔內容〕大伴黑主（ワキ）は明日內裏の御歌合に、小野小町を相手に定められたが、尋常の手段では敵し難いと思つて、小町の私宅に忍び入り、小町（前ジテ）が明日の詠歌を吟じてゐるのを盜み聞き、これを萬葉の草子に書き入れ、古歌と訴へ出ようと企む。當日になつた。內裏では、帝（子方）の御前に紀貫之（ツレ）凡河內躬恒（ツレ）等と共に小町（後ジテ）や、黑主（後ワキ）も侍した。やがて御歌合が始まり、貫之が小町の歌を讀み上げると、黑主はそれは古歌でございますと證據の萬葉の草子を出して訴へた。小町は驚き歎いたが、その草子を見て、これは入筆でございますから、洗はせて戴きたいと願ひ出た。許されて草子を洗ふと、果してその歌は消え去つたので、黑主は面目を失つて自害しようとする。小町がこれを留める。帝もその罪をお赦し遊ばされた。そこで小町がめでたく御代を祝つて舞ふといふ曲。

〔題材〕典據は見當らない。「續古事談」に棟仲が「萬葉集」に證歌があるといつて歌合に勝つたといふ逸話を載せてゐるが、想ふにそれなどから思ひついたものか。二段劇能。五流現行。

【通小町】四番目　〔作者〕觀阿彌改作（申樂談儀。能本作者註文・二百十番謠目錄には世阿彌の作といふ）。〔古名〕「四位少將」〔內容〕八瀨の山里で一夏を送る僧（ワキ）、一人の女性（前ツレ）が毎日木實爪木を持つて來るのを不審に思つてその名を尋ねると、市原野邊に住む姥です、回向して下さいといつて消え失せる。僧は、「秋風の吹くにつけてもあなめ〳〵」小野とはいはじ薄生ひけり」といふ古歌を思ひ起し、小町の亡靈であらうと思つて、市原野に出て回向する。果して小町（後ツレ）が現はれて回向を喜び授戒を乞ふと、後からまた深草少將（シテ）が出て、小町を地獄道に引戻さうとしたが、僧に百夜通ひの樣を示し給へといはれて、小町との戀を遂げたさに、身をやつして九十九夜まで通ひつめたことを語り、唯一念の悟りにて、二人とも成佛を得たといふ曲。

〔題材〕百夜通ひの說話は、「古今集」の「曉の鳴の羽かき百羽かき君が來ぬ夜はわれぞ數かく」から展開したものであり、小町髑髏のことは、「江家次第」等にも出てゐるが、本曲直接の典據は「古事談」であらう。複式夢幻能。五流現行。

【卒都婆小町】三番目　〔作者〕觀阿彌改作（申樂談儀。能本作者註文には世阿彌の作といふ）。〔內容〕高野山の僧（ワキ）が都に上る途次、洛外で乞食の老女が卒都婆に腰かけてゐるのを見て、これを敎化すると、老女は却つて佛理を說く。僧は感歎禮拜して、その名を尋ねると、これこそ小野小町（シテ）のなれの果てであつた。小町は暫く僧と話をしてゐたが、そのうちに四位少將の靈につかれて心が亂れ、百夜通ひの狂態を演じたが、やがて狂氣よりさめて、悟道に入るといふ曲。〔題材〕「玉造小町壯衰書」から出たもので、その原文をも引いてゐる。一段劇能。五流現行。

【關寺小町】三番目　〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄。世阿彌の「音曲聲出口傳」にこの文を出す）。〔內容〕關寺の住僧（ワキ）が稚兒（子方）を伴つて、この山陰に住む老女小野小町（シテ）を訪ねて歌道を聞く。小町はこれを語り、榮華の昔を追懷し、今の落魄を歎く。稚兒は小町を誘つて寺に歸り、今日の七夕祭に童舞を舞ふと、小町も老を忘れて舞を舞ひ、また杖にすがつて、もとの藁屋に歸るといふ曲。〔題材〕小町が關寺に佗住居をしたといふのは作者の創作か。「伊勢物語愚見抄」「鴉鷺記」は謠曲以後のものである。一段劇能。五流現行。

【鸚鵡小町】三番目　〔作者〕不詳〔內容〕新大納言行家（ワキ）が關寺邊に零落してゐる小野小町（シテ）を訪ね、陽成院より賜はつた御憐れみの御歌「雲の上はありし昔にかはらねど、見し玉だれの內やゆかしき」を讀み聞かせると、御歌のやの字をぞとかへて、鸚鵡返しの返歌を奉り、行家に歌道を語るといふ曲。

〔題材〕「阿佛鈔」に據つたのであらう。一段劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【構想】世に傳へられてゐる小町傳說は、大別して三となる。その一は小町が著名な歌人であつた所から展開した美人傳說、二は美人であつたが故に起り易い、かの「古今集」「鳴の羽かき」の歌から展開して行つた百夜通ひ傳說、三はその結果として生ずる「玉造小町壯衰書」から展開して行つた老後落魄傳說、この三である。上揭小町物五曲のうち、「草子洗小町」は第一種に屬し、小町に歌人としての名譽の外に、寬仁の德を具へしめてゐる。「通小町」は第二種のもの、「卒都婆小町」は第三種の傳說を中心として、これに第二種のものを加味したもの。「關寺小町」「鸚鵡小町」は第三種の傳說を本として、これに歌人の面影を殘させたものである。これ等の傳說は謠曲以前に或る程度まで形を具へてゐたが、これをよい文藝にまとめたのは謠曲である。後世の小町物文藝は、すべて謠曲を本として展開して行くのである。

【參考】謠曲評釋　大和田建樹〇謠曲大觀　佐成謙太郎〇謠曲界（二五ノ四小町號）　〔佐成〕

小松屋百龜

【通稱】三右衞門　【號】小松軒。剃髮して百龜　【生歿】未詳。大日本人名辭書には、寬政四年八十餘歲にて歿すとある。【閱歷】元來は浮世繪師として西川祐信に私淑し、畫風も祐信或は鈴木春信の風を摸する所が多かつた。春畫をも書いたが、一方藥種店を營み、文武丸を家傳祕方として賣出した。蜀山人がこれがために板下を書いたこともあつた。江戸時代中期に活躍したひとり。【參考】角田浦園

狛桙

こまぼこ　雅樂舞曲　【名義】高麗の船人が桙を執つて舞ふの意。【異稱】狛鉾・花鈎樂・棹持舞　【解說】高麗樂。新樂、中曲。高麗壹越調曲に屬する。舞があり、二人又は四人で舞ふ。舞人は特殊なる袍を着、袴を付け、細纓の冠をかぶり、長い棹を持つて舞ふ。番舞は「太平樂」又は「打毬樂」。昔高麗より我が國へ渡る時に、五色に彩つた棹を持つ

狛桙

所に節があつて、蟬を附けること和笛と同樣である。笛の頭端は閉塞してあるが、それには先づ頭端から鉛を管中に入れる。その上を蠟で塞ぎ、その外部を木片の上に青地の錦を張つたもので密閉する。音律は筒音（卽ち凡ての孔を塞いだ時の音）は斷金、第一孔を開けば下無、第二孔を開けば双調、第三孔を開けば黃鐘、第四孔を開けば盤涉、第五孔を開けば上無、第六孔を開けば平調の音が出る。この笛の譜は指孔の名を書き列ねるのであるが、その旋律を覺え易くするために、唱歌と稱へるものを添へて用ひることは和笛の場合と同樣である（和笛參照）。この笛は高麗樂に於ては管は多少の改造を行ひ、一樣のものとなしてこれを高麗笛と稱するやうになつた。平安朝の初期には左右相並んで盛んに行はれたが、その後高麗樂は唐樂の盛んなるに及ばず、追々衰態を呈し來り、從つて高麗笛も唐樂に用ひる橫笛ほどには世に行はれず、平安朝の末期となつて著しく衰へて來た。白河法皇は高麗笛の絕えんとすることを歎かせ給うて、當時その統を傳へた者は公光（出家して公滿）及び公延の兄弟のみであるので、公光に命じて博定の師としてこれを傳へしめたといふ事である（體源抄）。近古に至り、玉手公賴その技に達し、中興の祖となつたといふ。

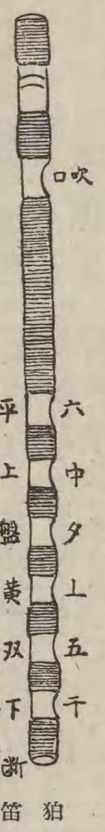
くのである。

【參考】謠曲評釋大和田建樹○謠曲大觀佐成謙太郎○謠曲界（二五ノ四小町號）〔佐成〕

小松屋百龜（こまつや ひやくき）浮世繪師。咄本作者【通稱】三右衞門【號】小松軒。剃髮して百龜【生歿】未詳。大日本人名辭書には、寛政四年八十餘歳にて歿すとある。【閲歴】元來は浮世繪師として西川祐信に私淑し、畫風も祐信或は鈴木春信の風を摸する所が多かつた。春畫をも書いたが、一方藥種店を營み、文武丸を家傳祕方として賣出した。蜀山人がこれがために板下を書いたこともあつた。江戸飯田町中坂に住してゐた。【著書】肉蒲團○ぬくめ夜具○閨上手（別項）。〔小柴〕

高麗笛（こまぶえ）樂器【名稱】狛笛とも書く。【異稱】篇（この字を當てるのは誤である。支那の篇は縱吹の樂器で、尺八に類したものである）。伎横笛。【性質・構造】笛の一種。管を水平にして吹く。吹口は管の側面にあつて、他の指孔と並んでゐる點は和笛に似てゐるが、和笛よりは細くして短い。上古朝鮮より傳來した笛を改造したもので、初めは高麗樂及び伎樂（各別項）を奏するに用ひてゐたが、後に東遊（別項）をも奏するに用ひられる。管の長さ一尺二寸、管の内徑は尾端に於て三分ある。竹で作り、吹口及び指孔のある部分を除き、他の管側を樺で卷くこと、和笛と類似してゐる。指孔も和笛と同じく六個あり、皆特殊なる孔名を持つてゐる。即ち尾端に近いものから順に、第一孔を干、第二孔を五、第三孔を上、第四孔を夕、第五孔を中、第六孔を六と呼ぶ。又尾端から一尺四分許の所に節があつて、蟬を附けること和笛と同樣である。笛の頭端は閉塞してあるが、それには先づ頭端から鉛を管中に入れる。その上を蠟で塞ぎ、その外部を木片の上に青地の錦を張つたもので密閉する。音律は筒音（即ち凡ての孔を塞いだ時の音）は斷金、第一孔を開けば下無、第二孔を開けば双調、第三孔を開けば黄鐘、第四孔を開けば盤渉、第五孔を開けば上無、第六孔を開けば平調の音が出る。この笛の譜は指孔の名を書き列ねるのであるが、その旋律を覺え易くするために、唱歌と稱へるものを添へて用ひることは和笛の場合と同樣である（和笛參照）。この笛は高麗樂に於ては管絃合奏に用ひられ、又東遊に於ては篳篥及び和琴と伴うて、歌の伴奏に用ひられる。【沿革】允恭天皇の時、新羅が樂人を貢し、その後新羅の樂が傳はつたが、それには新羅の笛がある。欽明天皇の頃百濟の樂が傳はつたが、それには百濟の笛がある。推古天皇の頃高麗の樂が傳はつたが、それには高麗の笛があつた。又推古天皇の時伎樂が傳はつたが、それには伎樂の笛が用ひられた。これ等の各笛は、多少その制を異にしてゐたものらしく、大同四年の太政官符には高麗樂・百濟樂・伎樂等のそれぞれの樂師中に、別々にその笛師が定められてゐる。然し平安朝に至り、新羅・百濟・高麗・伎樂等の各樂の區別を廢してこれを一樣に混制し、左方たる唐樂に對して、右方の樂又は高麗樂と總稱するやうになり、その樂器の編制も統一してしまつたので、その笛は多少の改造を行ひ、一樣のものとなしてこれを高麗笛と稱するやうになつた。平安朝の初期には左右相並んで盛んに行はれたが、その後高麗樂は唐樂の盛んなるに及ばず、追々衰態を呈し來り、從つて高麗笛も唐樂に用ひる横笛ほどには世に行はれず、平安朝の末期となつて著しく衰へて來た。白河法皇は高麗笛の絶えんとすることを歎かせ給うて、當時その統を傳へた者は公光（出家して公滿）及び公延の兄弟のみであるので、公光に命じて博定の師としてこれを傳へしめたといふ事である（體源抄）。近古に至り、玉手公賴その技に達し、中興の祖となつたといふ。【名器】天王寺の寶物たる京不見と、竹生島の神寶たる小枝と稱する笛とは、共に横笛と高麗笛とが一對となつてゐる。又源義經の所持したと傳ふる鶯丸といふ狛笛は、後に大神景元の手に入り、同家に傳へられたが、江戸時代になり彦根中將井伊直弼の手に入つたといふ。又吉野山の藏王權現には後醍醐天皇の御物であつた高麗笛（横笛も共に）を傳へてゐる。現今皇室の御物となつてゐるものは二管あつて、一つは鳳凰と稱し、鎌倉時代の物らしく、南都樂人辻家傳來の品であつたが、天明年中から鷹司家に傳はり、それを明治六年に、鷹司輔熙公から獻上したものである（横笛と一對になつてゐて、全面に金雲龍の蒔繪をした所の筒の中に納められてゐる）。他の一つは江戸時代の作品であつて、昌平丸と名づけられ、舊昌平黌の什物であつて、同じく横笛と一對になつて居り、今は上野の帝室博物館に納められてゐる。

【參考】樂家錄第十二卷○續教訓抄卷十一上○振吟要錄中卷○體源抄卷五〔田邊〕



狛桙（こまぼこ）雅樂舞曲【名義】高麗の船人が棹を執つて舞ふの意。【異稱】狛鉾・花鈎樂・棹持舞【解說】高麗樂。新樂、中曲。高麗壹越調曲に屬する。舞があり、二人又は四人で舞ふ。舞人は特殊なる袍を着、袴を付け、細纓の冠をかぶり、長い棹を持つて舞ふ。番舞は「太平樂」又は「打毬樂」。昔高麗より我が國へ渡る時に、五色に彩つた棹を持つて船をさしたので、その棹を持つて舞ふ態を象り、我が國で舞ひ始めたのであるといふ。それは何時の頃からであるか不明である。〔田邊〕

狛桙

古萬葉集（こまんえふしふ）「厚顏抄」「萬葉集」を見よ。

後水尾院御集（ごみづのをゐんごしふ）「鴎巣集」を見よ。

後水尾天皇（ごみづのをてんわう）「鴎巣集」を見よ。

小宮豐隆（こみや とよたか）評論家【閲歴】明治十七年三月福岡縣京都郡犀川村に生れた。同四十一年東京帝國大學獨文科を卒業。一時、慶應大學文學部の講師であつたが、大正十二年文部省留學生として獨逸に留學、同十三年歸朝し、その後東北帝國大學教授として西洋文學第二講座を擔任す。夏目漱石門下の逸材として、阿部次郎・安倍能成等と共に、最も華やかな評論家の一人であつた。【批評】彼の文藝評論の特色は、學究的論理で、書いてつくさざるなしといつた風の周到さと、哲學的背景をもつた重厚味とを有する點である。彼はまた歌舞伎劇に對して雋鋭な批判に富み、

中村吉右衞門の藝術を推薦して斯界の注目を集めたこともある。一般文學、演劇等に普遍する彼の趣味は、ロマンチックな潑剌性よりも、むしろ古典的な整齊美及び傳統の親しみを形態と精神の上に求めるもののやうに見える。【著作】文集には、「演劇評論」「批評集」「傳統藝術研究」の外に、同志の人達と共著の「漱石俳句研究」「芭蕉俳句研究」などがあり、飜譯にはストリンドベリイの「父」「稻妻」「幽靈曲」「父と子」、シュニツレルの「アナトール」などがある。〔平林〕

小室節（こむろぶし）　馬子歌　【名義】發生地の地名による名らしいが不詳。「鄙雜俎」（江戸中世の書、未刊隨筆百種所收）には、信州の小諸から諷ひ出したとある。【沿革】發生年代未詳。萬治年中江戸の日本橋・飯田町・淺草見附の三箇所から吉原の大門迄の駄賃附に、馬子二人こむろぶしうたふ。かざり白馬駄賃と見えてゐる。專ら海道筋で謠つたものらしい。歌は近松の淨瑠璃に見えてゐる。曰く、

扨ても見事なおつづら馬や。七つ蒲團に曲ろくすゑて。蒲團ぼりしてナ小姓衆をのせて。海道百里をはなでやる。（堀川波の鼓）

「鄙雜俎」には、

花はみよしの紅葉は龍田、月は武藏野名が高い。
雲にかけ橋霞に千鳥、われは波間に夜船こぐ。
關の地藏はおらよりましぢや、人も（親も）定めぬ妻をもつ。

の三首をあげてある。又「若綠」（寶永三年刊）や「松の落葉」（同六年刊）に、「おつづら馬」と題した歌を載せてゐる。これは馬子歌かどうか疑はしいが、參考のため揭げる。

おつづら馬
二上りまで小姓衆はおつづら馬から下にゆられて

唐縞の蒲團、蒲團ぼりして小姓衆をのせて、そなた上りかおりや今下る、文をやろにも言傳しよにも、こゝは箱根の山中なれば、筆にや事かく硯すみは持たぬ、もしも水口（みなくち）おとまりならば、札の辻から四五軒目の茶屋で、馬も息災其の身も無事で、やがて上ろというてたもれ。エイコノサンサ。

「守貞漫稿」に「或人云、文政中、山王祭禮に日本橋通り町より葛籠馬を出せしことあり、其時馬士に扮する者島織の手巾をかむり、長き袖無羽折着し、之を唄ふと云へり。當時に小室節僅に傳るか、今は廢絕す」とある。〔高野〕

五明（ごめ）　「奥羽四天王」を見よ。

米倉米倉（こめくらこめくら）　昔話　【解說】昔々正直な親爺が龍宮又は仙鄕に招かれて、打出小槌や如意寶珠などを貰つて來る。欲しい物の名を口に唱へてその寶物を振ると、即座に現はれ出て長者になる。話はこの點までは遠い上代からの、我々の遺產であつたらしく、實際又色々の民族に流布してゐる。但しこれだけでは說話が古臭く、活き活きとしないので、次々に珍しがらるゝ新な想像が附け加へられた。即ち個々の民族の才分はこれに表はれ、時代の社會相も亦この間に反映してゐるのである。通例は、その親爺が後に心弛み、又は連れ添ふ女房が心がけよろしからず、或は隣に物羨みをする强欲爺があつて、强ひてその寶物を濫用して失敗し、また新なる葛藤が始まるのであるが、日本ではそれが夙くから夢を信じない者の「笑ひ話」に變化して行かうとする傾向を見せてゐた。米倉米倉などもその一つの特色ある例である。欲しい物は米と倉だと思つて、頻りにその語を唱へて小槌を打つと、思ひ掛け無く澤山の小盲が飛出して來て、食はせよ〳〵と言つて爺を責殺したといふ話、これなどは單なる口合ひとしても面白かつたらうが、話の改造者が實際は盲人の說話を業とする者であつたので、特に聽衆に大きな興味を與へ、永くこの新しい形態を流布せしめたやうである。盲人で無ければ考へつかなかつた話、もしくは盲人の話なので一層面白く聽かれたといふ話は、注意して見ると數多く殘つてゐる。笑話には更にその例が多く、たとへば座頭の長座を憎んで、召仕の者が出口に才槌を吊して置くと、八人の盲が頭をこれに打付けて歸つて行く。御坊何時であらう。はて今八つの頭を打つたではないかといふ類の落し話、又は吝（しぼ）い亭主が餅を惜しんで旅の座頭に食はせないので、狂歌を詠む。「餅つくと目にはさやかに見えねども、杵の音にぞ驚かれぬる」といふ類の秀句話、色々珍らしいものが傳はつてゐるが、怪談の方も亦彼等の管掌であつたかと思はれて、耳切法一の耳を切られた話、越後折峠で大蛇のために琵琶を彈いた話、それから轉じては狼の尾に縋つて山から降りて來た話（日本昔話集）など、何れも話主をこの盲人としてゐるのである。米倉も必ずその傑作の一と信ずるが、殊に面白いのは民譚の成長が、これを以て終止しなかつたことである。例へば富士の山麓の米倉話は、長者がその多數の盲人の始末に困つて、手毎にコンドシ（篩）を持たせて、加島から土を運ばせたと言つて、そこに長者の菜畠の遺跡があり、後にその盲人が不用になつて、投げ込んで殺したといふ長者が池もあつて、そこには片目の鮒が住んでゐる（甲斐昔話集）。即ちこんな「笑ひ話」すらも、土着して傳說に化しかゝつてゐるのである。或は盲人に片目の鮒は釣合はぬと見たゝ、別に頼朝のために誅罰せられた長者の傳說があり、丁度常陸の袴塚長者と同じやうに、長者の威勢を以て一日の中に千人の片目の人足を揃へたとも語つてゐるが、共に最初簡單なる米倉の昔話が持ち運ばれてゐなかつたならば、發生し得られぬ傳說のやうに思はれる。兎に角、座頭は說話の運搬によつて衣食の資を得べき職業であつたから、改造布衍の趣向は概して自嘲被笑の方針を取つてゐた。それが彼等を中心とした笑話の多くある原因だと思ふ。〔柳田（國）〕

五文字（ごもじ）　雜俳　【別名】略して「五字」ともいひ、又「五字題」ともいふ。【解說】もと冠附の一種であるが、後には字數も區々となり、少きは二三字、多きは十餘字にもなり、附句も亦必ずしも七五調と限らず、字數の一定しない狂俳の如きものである。而して表裏二樣の意味を籠めて作るのが法である。左に略解を附して若干の例を示す。

何も世渡り—このしろを燒いて食ひます
見ともない—行きはお駕で歸りは馬だ
未練—雪隱の際で手を洗ひ
呆れる—酒呑童子が金時をつかみ
人の疝氣—隣の嫁に庚申を知らせ

〔西原〕

薦獅子集（こもじしふ）　俳諧集　一册　【編者】加陽巴水とあつて、加賀の人であることが知られるが、傳は詳かでない。路通の跋に、願主藤井氏某とあるから藤井氏であつたのであらう。【名義】巴水の序によると、短册集版行を思ひ立つて、都鄙遠境の佳句を乞ひ盡し、一集に寫し、「薦獅子」と名づけて住吉明神に奉納したとあるから、薦獅子即ち乞食獅子といふ義かと考へられる。【刊行】元祿六年【諸本】元祿名家句集（俳諧文庫）所收【解說】内に宗因・貞室の句も見えるけれど、大體蕉門の句集である。全篇を生・長・收・藏の各部に分ち、發句三百二十九（芭蕉・去來・史邦・正秀・洒堂・木節・北枝・智月・乙州・丈草（智月・乙州の句が特に多い）等、歌仙二卷（木節・巴水・正秀・探旨・素牛・昌房・乙州七吟一卷、路通・巴水・乙州三吟歌仙一卷）とを收めてゐる。「俳諧平生安穩」「朋友和合」など云つてゐる路通の跋も、住吉奉納の集であるからからしい。〔萩原〕

嫗山姥（こもちやまうば）　淨瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衞門　【名稱】謠曲の「山姥」に據る。小書に、「五百番之內」とあるのも謠曲に擬したのである。【興行】正德二年七月の兼冬の娘澤潟姫は悲歎にくれてゐる。呼び込まれた煙草賣源七がお慰みにと小唄の三味線を彈く。丁度傾城荻野屋の八重桐が築地の蔭でこれを耳にしたが、坂田時行と契つた頃、廓で作つた唱歌であるのに不審を懷き、傾城の右筆と名乘り呼び入れられて見ると、果して源七事時行であつたので、姫の手前は廓話の辯舌面白く聽かせつゝも敵も討てぬ男の不身持を恨むのであつた。妹絲萩が敵を討つたのをこの時知つた時行は、無念の餘り切腹して女の胎內に稀代の勇者を宿さうと誓つた。切口から迸つた焰が、女の口に入るよと見えた時、時行の母が「おのれ、時行が子を孕めば、生まれ出でて、我が家の仇なす者、ことごとく、滅ぼさん」と、言ひ終りて、ばつと、倒れ、時行の子、生まれ出でて、産聲あげ、泣くこと、雷の如し。時行、驚き、産屋に、入りて、見れば、母は、既に、冷たき、屍となりぬ。時行、嘆き、悲しみ、母の、屍を、抱き、涙、流すこと、暫し。時行、思へば、我が、子、生まれ、母、死す、これ、天の、我が、罪、を、罰、せ、給ふ、なり、と、思へば、我が、身、の、罪、深き、ことの、恐ろしさ、と

である。全篇を生・長・收・藏の各部に分ち、發句三百二十九(芭蕉・去來・史邦・正秀・洒堂・木節・北枝・智月・乙州・丈草(智月・乙州の句が特に多い)等、歌仙二卷(木節・巴水・正秀・探旨・素牛・昌房・乙州七吟一卷、路通・巴水・乙州三吟歌仙一卷)とを收めてゐる。「俳諧平生安穩」「朋友和合」など云つてゐる路通の跋も、住吉奉納の集であるからしい。〔萩原〕

嫗山姥（こもち やまうば）　淨瑠璃　五段　時代物

【作者】近松門左衞門　【名稱】謠曲の「山姥」に據る。小書に、「五百番之內」とあるのも謠曲に擬したのである。【興行】正德二年七月十五日初日、竹本座上演【諸本】七行七十六丁本、七行八十四丁本、八行六十四丁本、九行三十九丁本、十行三十三丁本、十行三十五丁本等の版本。近松世話淨瑠璃集(帝國文庫)・近松戲曲集中卷(國民文庫)・近松門左衞門全集第六・近松全集第九・近松名作集下(名著全集)等所收。【題材】謠曲「山姥」に賴光四天王の世界を配し、更に當時の流行を各所に用ひた。【梗概】〔初段〕(本陣菱屋門前)天曆の御代、源賴光は名劍を尋ねて小夜中山の菱屋に宿を決めたが、女院の弟たる淸原高藤と落合つたので、讓つて別宿に避けた。(菱屋座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を賴んだ。これを洩れ聞いた下女小絲こそ忠時の遺兒絲萩である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、絲萩は敵を謀り討つことができた。(賴光宿)二人は落ち延びて賴光に縋り、絲萩は遺品の名劍を賴光に獻じ、喜之助は家臣となつて碓氷貞光と名乘る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に惱まされた。〔二段〕(岩倉大納言兼冬邸)高藤の讒言で賴光が姿を隱したため、婚約中の兼冬の娘澤潟姫は悲歎にくれてゐる。呼び込まれた煙草賣源七がお慰みにと小唄の三味線を彈く。丁度傾城荻野屋の八重桐が築地の蔭でこれを耳にしたが、坂田時行と契つた頃、廓で作つた唱歌であるのに不審を懷き、傾城の右筆と名乘り呼び入れられて見ると、果して源七事時行であつたので、姫の手前は廓話の辯舌面白く聽かせつゝも敵も討てぬ男の不身持を恨むのであつた。妹絲萩が敵を討つたのをこの時知つた時行は、無念の餘り切腹して女の胎內に稀代の勇者を宿さうと誓つた。切口から迸つた焰が、女の口に入るよと見えて女は悶絕した。折から姫を奪はうとする高藤勢が寄せる。すると八重桐は突然起きて寄手を薙ぎ立てた。姿は鬼女の振舞と見えた。〔三段〕(能勢判官館)賴光はこゝに身を隱してゐる。綱・貞光等と共に、賴光は盆の燈籠に秋景を賞す(燈籠の段)。判官の世繼冠者丸は美女御前とて、もと賴光の弟でありながら、不運にも父滿仲とは義絕の間柄なので、母は頻に悔むのであつた。(持佛堂)賴光を討てとの高藤からの命に、判官は冠者丸を身代りにすべき底意を決めた。母は彼の薄命に泣いたが、死に臨した冠者丸の態度に怒つて却つて一討にした。するとその髻から覺悟の遺書が出た。〔四段〕(源賴光道行)無事落ち延びた賴光は深山の中で山賊を從へ、卜部季武と名乘らす。(山姥伏家)信州上路の山奧で、主從二人は路に迷つて山姥の棲家に憩ふ。姥が饗應のためとて筑紫太宰府の栗拾ひに行つた留守中、禁ぜられた奧の間を覗くと、眞赤な男兒が鹿や猿の肉の間に伏してゐた。賴光はやがて姿を現した姥に斬りつけたが、姥こそは八重桐が成れの果てと知れて、一子快童丸は今日から賴光の家臣に加はり、名も坂田公時と名乘らせた。こゝに綱や貞光も來て、主從五人、惡鬼退治に勇み立つ。姥は山から山へ逃げ失せた。〔五段〕(高懸山)名劍の威德と公時の怪力で、一行は江州高懸山の鬼神を大綱で縛し上げた。(內裏廣庭)叡感斜ならず、賴光は鎭守府將軍に任ぜられ、正盛は誅戮、高藤は流罪となる。

【構想】謠曲「山姥」では、山姥が初め遊女百魔山姥と名乘る所から、荻野屋の傾城八重桐といふ當時の歌舞伎名女方の名を點出し、更に金平を山姥の伴とする金平淨瑠璃の解釋によつて、八重桐事、後の山姥の伴を坂田公時となし、よつて賴光四天王の世界に交涉を求め、四天王由來記の如き觀をも呈して、時代物としての落着きをも得たのである。序の、大納言の橫暴や源平の反目等は、金平淨瑠璃に通ずる型に過ぎぬが、仇討を先に出した脚色には多少の興がある。二段目の煙草賣源七は當年新町に實在した名物煙草屋であり、八重桐の雄辯は都萬太夫座「傾城佛の原」(別項)以來の有名な演技で、恐らく人形の操り方も彼の風を摸したのであらう。これ等によつて演出效果はこの場が最も傑出してゐる。勇力を現はす所は五段目高懸山の鬼神の描寫と共に、丹波少掾の語り物「四天王女大力手捕軍」の脚色を想はすものがある。三段目は謠曲「仲光」或はそれに據つた「忠臣身替物語」(別項)の書替へであるが、盆興行を當てて盂蘭盆の燈籠を配したのは名案である。四段目には「山姥」の外に謠曲「安達原」が應用された。かくて局部的には、多く先行曲の姿が指摘されるものの、全曲としての配合の成功は、やはり近松をして名作者たる價値を失はしめぬ。二段目から三段目・四段目へとの脚色の展開は、當に本曲をして不朽の意義あらしめるものと思ふ。

【影響】當時既に河田久四郎の「百魔山姥」に脚色され、歌舞伎狂言の當り作であつたが、二段目が「しやべり山姥」として、四段目が所作事「山姥」(別項)として、獨立して今日に及んでゐる。安永四年冬、京早雲座の嵐小六の山姥は最も名高い。山姥を男に書き替へたのが默阿彌作、明治十八年市村座の「柳櫻靑樓噺」である。その他、他の世界と綯交ぜにした歌舞伎作はかなりに多い。

【參考】近松全集第九解說　藤井乙男〇近松名作集解說　黑木勘藏　〔守隨〕

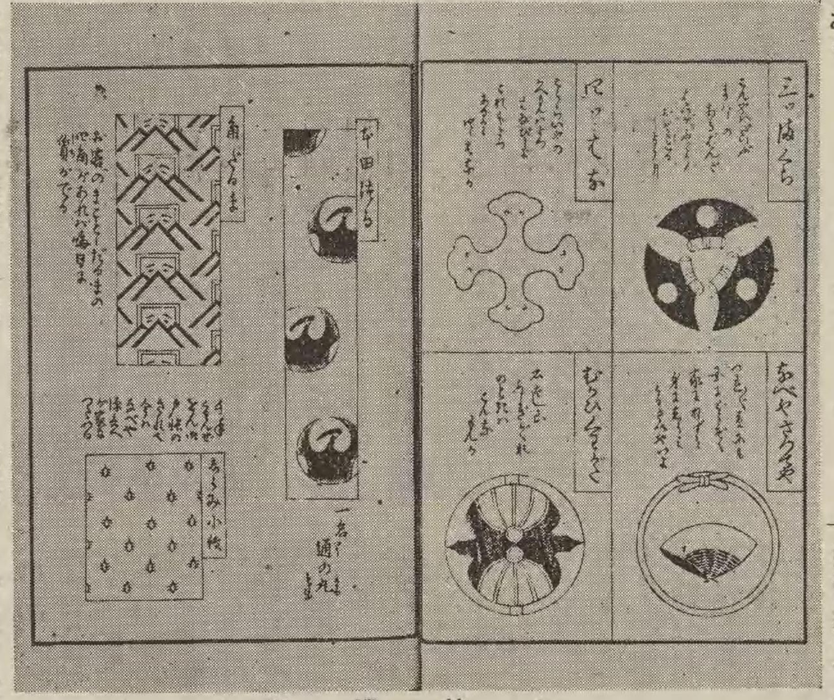
子守（こもり）　所作事　變化物　【沿革】子守が舞踊に取入れられたのは、文化六年四月江戶中村座で、四代瀨川路考が、二代瀨川路考三十七回忌追善の出し物「四季折々手向の風流　邯鄲園菊蝶」の四季所作事の中、長唄で演じたのが古い。その後、七代市川團十郎の五節句所作事「七宮　比翼鳥鐘」(文化十四年三月、江戶河原崎座所演。富本節)の中、子守女、二代市川團之助の雪月花所作事「また花と見るや三つ形紅の彩色」(文化十四年四月、江戶桐座所演。長唄)の中、子守娘、澤村訥升(後の五代宗十郎)の五變化所作事「姿花后雛形」(天保三年六月、江戶市村座所演。常磐津節)の中、子守女、二代尾上多見藏の五變化所作事「大空や三つ瓜松朝霞彩色」(天保十三年正月、江戶河原崎座所演。長唄)の中、子守娘、二代中村福助等の四季の所作事「四季寫手向花籠」(嘉永六年三月、江戶市村座所演。常磐津節)の中、子守など生れたが、現存して行はれるのは左の二種である。

【一寸の杜若あり春の水眞似ごとの葉も不爾な大和い手向五字】〔通稱〕子守〔初演〕文政六年三月十日初日、江戶森

田座「此君雀由縁紋日」第二番目大切。作詞、二代増山金八。曲節、清元節。太夫、初代清元延壽太夫。作曲、初代清元齋兵衛。振附、岩井大助（二代藤間勘十郎）〔傳來〕曲・振ともに傳存。〔諸本〕清元節正本。德川文藝類聚俗曲上卷・清元全集（日本音曲全集第三卷）・日本歌謠集成卷十一・歌謠音曲集（日本名著全集）等所收〔内容〕子を背負つて油揚を買ひに出た子守（岩井紫若、後の六代半四郎）が、子を下して人形を並べて遊びの振から、新内模樣のクドキになり、次いで座頭の手振での滑稽な所作、最後に綾竹を持つて越後節を踊る。

【菊蝶東雛妓】〔通稱〕三つ面子守〔初演〕文政十二年九月一日初日、江戸河原崎座「一谷嫩軍記」第二番目大切。曲節、富本節と長唄との掛合。太夫、三代富本豐前太夫。立唄、三代若村伊三郎。作曲、富本節は三代名見崎德治、長唄は四代杵屋六三郎。作詞、三升屋二三治。振附、四代西川扇藏〔傳來〕曲・振ともに傳存。但し富本節は常磐津節に改調されてゐる。〔諸本〕長唄、富本節正本。常磐津節正本。〔内容〕子守（五代瀨川菊之丞）が三つ面の附いた笹を持ち、子を負うて出る。子を寢かして毬つく振から、お龜・蛭子・鹽吹の面をかぶつて滑稽な踊り分け。　〔渥美・秋葉〕

小紋雅話（こもんがわ）　滑稽本　一册　【作者】山東京傳【名稱】語呂で、むさゝびの一種のもゝんがあを利かして、異樣な小紋の書たる意を表したもの。【刊行】寛政二年【諸本】滑稽本集（日本名著全集）所收。【解說】繪や文字を用ひた小紋の奇拔な圖案である。人の意表に出でて滑稽を表することを期してゐる。浴衣・手拭などに、實際に用ひられるものもあるが、個別に各種滑稽な意味を本として工夫したものである。彼は一面浮世繪師で、意匠の才に富んだ人であるから、紋樣に關する著作は、本書の外にも、「京傳工夫小紋裁」や、「當世雛形小紋新法」や、本書を增補した「新形紺名紋帳」や、「奇妙圖彙」（別項）などがある。



小紋雅話

【參考】滑稽本集解說　山口剛

古文書（こもんじょ）　【名義】現行のものでなく、過去のものとなつた文書を云ふ。文書と云ふ名稱は早くから支那にあつて、官府の書類を指して云つてゐる。日本でも古くはこの義に用ひたもので、所謂「本司文書」「局中文書」「文書内覽」など、皆それである。【解說】かくの如く古くは官府の書類或は公文の意味に多く使はれたものが、段々廣義に用ひられ出し、武家時代以後になつては、公文・私狀、乃至は日記・帳簿等までも總稱し、言はば書類と云ふと同じ事となつた。又古文書と云ふ名稱も、貞永式目その他鎌倉時代頃からの文書記錄等に散見してゐる。此の如く古來文書或は古文書の名稱があつて、公私の書類を指して云つてはゐたが、これに就いて學術的解釋を試み、範圍を論じて定義を定むるなど云ふ事は、近時古文書學が起つてからの事である。而も學者によつて解釋を異にし、未だ必ずしも一定不易の定義があると云ふ譯ではない。歐羅巴でも Diploma とか Urkunde と云ふ言葉の意義に就いては諸說があり、Friedrich Leist は、「古文書は法律的性質の事柄に就いて、これに相應せる形式を以て書かれたるもの」とし、これに對して、Julius Ficker は、「古文書には、時に法律的性質を帶びない ものも少くない。唯その法律的性質を帶ぶるものは、文書としての形式が確實になるだけである」とて、內容よりも形式に重きを置き、Harry Bresslau は、「古文書は人・處・時及び事柄に依つて變化するを免れないけれども、或る一定の形式を具へた書類であつて、法律的性質を帶ぶる出來事の證據となるべきものをいふ」として、更に「古文書は歷史事實の證據となるべき程度の如何に依つて、その價値に輕重を來す」と說いてゐる。そして一般には、裁判の證據物件となるべき性質の書類と考へてゐるものが多いと云ふことである。これ等は何れにしても、法律的羈絆を脫し得ぬものと思はれるが、それは訴訟や法律と密接なる關係を有する、歐羅巴の古文書學の發達上、自然に定められたもので、吾人を以て觀れば、寧ろ狹義に失するかの感がある。翻つて我が古文書學界先輩の諸說を觀るに、久米邦武氏はその著「古文書學講義」に、「古文書は編修著述して人に讀ましむる目的には非ずして、凡そ當時事故の必要によりて書綴りたる文書をいふ」と定義して、「古文書は後の證據となし、若しくは記憶に備ふるために保存し、謄寫しおきたるものなり」、と云ひ、更にその範圍の中に五類を區別して、(一)古文書、(二)古記錄、(三)古日記、(四)古帳簿、(五)古系圖となし、就中、最初の古文書とあるを以て、詔勅・官符以下、書翰など、普通に云ふ古文書であるとの解釋である。又星野恒博士の說も大體同樣で、古文書の類別中に、帳簿・系譜・緣起の類までも取り込めてある。次に黑板勝美氏はその著「國史の研究」に於て、「すべて編纂とか著述とかいふ種類のものでなく、或る境遇に於ける必要上から文字で書くものに二つの種類がある。一つは後日の備忘證明に供するためで、單に覺えて記し置くもの、即ちその日にかけて書くものが日記、事柄を中心として書くのが事書ゝといふ別はあるが、この日記、事書ゝなどは記錄と稱するものである。今一つは、或る必要に應じ、或る事柄を第二者に向つて書いてやるもので、その事柄に關し、これを差出した者と宛名の者との間に或る働きを生ずることとなるのである。これが即ち文書といふべきもので、天皇陛下からお下しになる詔勅の類から、政府の法令・訓令などを初とし、個人間に於ける往復の消息等に至るまで、みた之に屬して居る」と云つて、文書と云ふものを記錄（別項）と對立せしめ更に文書は、その中に書いてあることが過去・現在・未來に亙つてゐて、記錄の如く過去の事柄をのみ書き現はすものではないと說いてある。これ等諸說のうち、久米・星野兩博士の如く、文書と云ふものを比較的廣義に解することは、この言葉の從來の用例から言へば差支

第一者より第二者へ渡さるゝといふことは、必要條件である。言ひ換へれば、差出者と受取者とがなからねばならぬ。而してその受取者は必ずしも現實の人間とは限らない。神佛または團體法人などのこともあるが、何れにするも、差出者から受取者に向つて用事を書いて遣るものであるから、それ相應の樣式が伴ふ。即ち書式の上に、差出書と充書と用件を書いた事實書（用件書）とが普通現されてある（尤も差出書と充書とは、その必要がない場合には略されることがある。例へば、宸翰には多く御署名なく、上表には充書を書かぬ例

雜訴決斷所下文　雜訴決斷所牒　國符　國宣　大府宣　國解　公卿政所下文　勸學院政所下文　御教書　長者宣　社寺下文　武家下文　武家政所下文　武家御教書　御內書　一字書出　下知狀　拳書　施行狀　遵行狀　打渡狀　判物　朱印狀　黑印狀　折紙　充行狀　條目　禁制　觸狀　廻狀　過所　公驗　紛失狀　礼狀　申文　訴狀　陳狀　愁狀　和與狀　問狀　召文　催促狀　請文　注進狀　注文　着到狀　軍忠狀　感狀　度緣　戒牒　願文　寄進狀　勸進狀　奉加牒　契約狀　起請文　賣券　讓狀　處分狀　避狀　付屬狀　借券　皆濟狀　書狀（消息・尺牘）　〔伊木〕

古文書學（こもんじょがく）　【名稱】〔英〕Diplo-

利等でも研究せられ、殊に獨逸では十八世紀半頃から法律學の補助學科として大學の講義に加へられてゐる。これは斯學の發達上當然の事であるが、十九世紀に入り、史學の勃興と共に古文書學を史學に應用する事が始まつた。レオポールド・フオン・ランケ（Leopold von Ranke）一派の史學者が主であるが、古文書目錄を出版したヨハン・フリードリッヒ・ベーメル（Johan Friedrich Böhmer）、また斯學の普及に與つて力があつた。その後、獨逸のミュールバッカー（Mühlbacker）、ウインケルマン（Winkelmann）、墺太利のフイッカー

間に或る働きを生ずることとなるのである。これが即ち文書といふべきもので、天皇陛下から御下しになる詔勅の類から、政府の法令・訓令などを初とし、個人間に於ける往復の消息等に至るまで、みな之に屬して居る」と云つて、文書と云ふものを記錄(別項)と對立せしめ更に文書は、その中に書いてあることが過去・現在・未來に亙つてゐて、記錄の如く過去の事柄をのみ書き現はすものではないと說いてある。これ等諸說のうち、久米・星野兩博士の如く、文書と云ふものを比較的廣義に解することは、この言葉の從來の用例から言へば差支ないかも知れぬが、今日にあつては、著述、編纂物などと共に、一方に於て記錄といふものが認められてある以上は、文書をこれと混同することは避ける方が穩當ではあるまいか。隨つて久米博士の如く廣狹兩義の文書を認むる必要もなく、また歐洲の如く法律關係に束縛さるゝにも及ばず、比較的狹義に解して、記錄たる日記は素より、帳簿・系圖・緣起なども、それが他動的性質のものにあらざる限りは、文書の範圍外に置く方が宜しいであらう。こゝに於て、「文書とは、吾人が或る事柄に關しての感考行爲を記號を以て現し、之を第二者に交附するものである」と云ひたいのである。その事柄は過去・現在・未來に亙つて差支ない。またそれを現すには、普通は文字を以てするが、時には繪畫その他の記號を用ひることもないではない。江戸時代頃に行はれた繪手紙の如きはそれである。またその現し方も、肉筆の外に、木版・印刷・彫刻等に依つても宜しい。なほその記號を跡付ける材料も普通は紙であるが、布帛・板札・皮革・金石等のこともある。併しながら、その現されたものが、第一者より第二者へ渡さるゝといふことは、必要條件である。言ひ換へれば、差出者と受取者とがなからねばならぬ。而してその受取者は必ずしも現實の人間とは限らない。神佛または團體法人などのこともあるが、何れにするも、差出者から受取者に向つて用事を書いて遣るものであるから、それ相應の樣式が伴ふ。即ち書式の上に、差出書と充書と用件を書いた事實書(用件書)とが普通現されてある(尤も差出書と充書とは、その必要がない場合には略されることがある。例へば、宸翰には多く御署名なく、上表には充書を書かぬ例であり、下乘や下馬の板札には差出書・充書共に無く、ただ事實書が二字あるだけである)。それと同時に、またその內容も、第三者に對してはいざ知らず、少くとも第二者にだけは見せらるべき性質のものであらねばならぬ。

【分類】かくの如き文書は、その差出者の資格や事件の內容等に依つて、公文書と私文書とに區別せられる。公文書は政治法律上その他公共的の意味を以て出されるもので、皇室を初め公家の中央政府・地方官・武家政府・公共團體等から出される文書がそれであり、私文書は如何なる位置の人でも、その人が個人として出す場合の文書で、日常往復の書狀を初め、賣買・貸借・讓與等の證文、その他祈願・起請などの文書の如きはそれである。また見方に依つては、上逮・下達・互通と區別することも出來る。最後に我が古來の公私古文書の主なる種類を擧げて置く。

詔書　宣命　勅書　位記　宣旨　口宣案　內侍宣
綸旨　女房奉書　院廳下文　院宣　令旨　太政官
符　太政官牒　官宣旨　省符　表　奏　啓　解
辭　牒　移　勘文　檢非違使廳下文　別當宣
雜訴決斷所下文　雜訴決斷所牒　國符　國宣　大
府宣　國解　公卿政所下文　勸學院政所下文　御
教書　長者宣　社寺下文　武家下文　武家政所下
文　武家御教書　御內書　一字書出　下知狀　拳
書　施行狀　遵行狀　打渡狀　判物　朱印狀　黑
印狀　折紙　充行狀　條目　禁制　觸狀　廻狀
過所　公驗　紛失狀　擧狀　申文　訴狀　陳狀
愁狀　和與狀　問狀　召文　催促狀　請文　注進
狀　注文　着到狀　軍忠狀　感狀　度緣　戒牒
願文　寄進狀　勸進狀　奉加牒　契約狀　起請文
賣券　讓狀　處分狀　避狀　付屬狀　借券　皆濟
狀　書狀(消息・尺牘)　〔伊木〕

古文書學(こもんじょがく)

【名稱】〔英〕Diplomatics〔佛〕Diplomatique〔獨〕Diplomatik. Urkundenlehre

【解說】古文書(別項)に就いて科學的研究を爲す學問。歐羅巴に於ては、中世より文書の僞造盛んに行はれ、これを證據として訴訟を提起したので、その眞僞の鑑別をなす必要を生じ、遂に科學的研究を誘致するに至つた。然るに十七世紀に入り、佛蘭西・獨逸等で、古文書に據つて古記錄を訂正することが始まり、所謂ベラ・ディプロマチカ Bella diplomatica (古文書戰爭)の流行となつて漸次研究の步を進め來つた。就中、南獨逸に出たヘルマン・コンリング(Hermann Conring)、ゼスイット派の僧ダニエル・パペブロホ(Daniel Papebroch)は有名である。これ等獨逸學者と佛蘭西側との論爭の結果、佛蘭西に後世古文書學の學祖と稱せらるゝドム・ジャン・マビヨン(Dom Jean Mabillon. 1632—1707)が現れて、天下を風靡した。併しその後も獨佛の論爭は繼續せられたが、佛蘭西では十八世紀の末大革命の結果、古文書は多く公共有となり、古文書館に保存整理研究せらるゝこととなつた。その他獨逸・墺太利・伊太利等でも研究せられ、殊に獨逸では十八世紀半頃から法律學の補助學科として大學の講義に加へられてゐる。これは斯學の發達上當然の事であるが、十九世紀に入り、史學の勃興と共に古文書學を史學に應用する事が始まつた。レオポールド・フオン・ランケ(Leopold von Ranke)一派の史學者が主であるが、古文書目錄を出版したヨハン・フリードリッヒ・ベーメル(Johan Friedrich Böhmer)、また斯學の普及に與つて力があつた。その後、獨逸のミュールバッカー(Mühlbacker)、ウインケルマン(Winkelmann)、墺太利のフイッカー(Ficker)、シッケル(Sickel)、ブレスラウ(Breslau)、ライスト(Leist)、リーチ(Rietsch)、その他幾多の學者が輩出して、講義に著述に或は摸寫出版等に努力してゐる。

【日本に於ける古文書學】歐羅巴の古文書學が明治二十三年坪井九馬三氏に依つて始めて我が學界に紹介せられ、從來國史・地理・支那史の三科目のみであつた文科大學國史科に古文書學を加へて講義することとなつた。これ實に明治二十五年のことである。尤も我が國に於ても古くより古文書が取扱はれてゐた。それは主として訴訟の證據物件として、鑑賞の對象として、史學及び有職故實學等の材料としてであつた。就中、史料としての研究が最も有力で、漸次科學的に進步し、その基礎準備が出來てゐたので、歐洲の史學研究法の輸入と共に、古文書學が名實共に建設せられたのである。東京・京都・東北の各帝國大學を初め、その他二三の大學に於てこれが講座が設けられてゐる。

【參考】古文書學講義　久米邦武　○史學研究法(古文書學の條)坪井九馬三○國史の研究(同上)

意を表したもの。【刊行】寛政二年【諸本】滑稽本集(日本名著全集)所收。【解說】繪や文字を用ひた小紋の奇拔な圖案である。人の意表に出でて滑稽を表することを期してゐる。浴衣・手拭などに、實際に用ひられるものもあるが、假用よりは寧ろ滑稽な趣味を本として

く、過去のものとなつた文書を云ふ。文書と云ふ名稱は早くから支那にあつて、官府の書類を指して云つてゐる。日本でも古くはこの義に用ひたもので、所謂「本司文書」「局中文書」「文書內覽」など、皆それである。【解說】かくの如く古くは官府の書類或は公文の意味

である」とて、內容よりも形式に重きを置き、Harry Bresslau は、「古文書は人・處・時及び事柄に依つて變化するを免れないけれども、或る一定の形式を具へた書類であつて、法律的性質を帶ぶる出來事の證據となるべきものをいふ」として、更に「古文書は歷史事實の證

ちその日にかけて書くものが日記、事柄を中心として書くのが事書ッといふ別はあるが、この日記、事書ッなどは記錄と稱するものである。今一つは、或る必要に應じ、或る事柄を第二者に向つて書いてやるもので、その事柄に關し、これを差出した者と充名の者との

黑板勝美○古文書學 中村直勝○古文書學概論 勝峰月溪○古文書學概説 伊木壽一○日本古文書學 同上　〔伊木〕

古柳（こやなぎ）　雜藝　【名稱】古柳は本來「小柳」と書くべきで、小柳を詠み込んだ元歌に基いた名稱である。【出典】「梁塵祕抄」（別項）卷一に出づ。【解説】古柳に、蕚古柳（ふじやなぎ）と、ただの古柳の二種がある（梁塵祕抄・口傳集）。歌ひぶりの變遷によつて、この差が生じたものと思はれる。元來朗詠の曲節に似た節で、恐らくは朗詠より出た一體の歌なのであらう。朗詠の源家（雅信參照）には、小柳ぶし八首を傳へたと云ふ（文机談）。その中には、朗詠の文句を取つて歌つたものもあると見える。舊古柳と云ふのは、この朗詠家に傳へた節なのであらう。今殘れる歌は、新しい方の古柳で、俚謠風の歌である。舊古柳と同歌であるかどうかは分らぬ。

そよや、小柳によな、下り藤の花やな、咲き匂へけれ、ゑりな、むつれ戯れや、打靡きよな、青柳のや、や、いとぞ目出度きや、なにな、そよな

この歌が一首だけ見えるが、これが古柳の元歌であらう。「梁塵祕抄口傳集」に「古柳下り藤を歌ふ」とあるのもこの歌であらう。同書に「澤に鶴高くと云ふ古柳」と見えるが、この句のある古柳は今日殘つてゐない。なほ古柳とは、風俗歌の我門の事であらうと云ふ説もあつた（萬葉緯・歌舞品目）。我門の中には「しだる小柳」と云ふ句もあるが、今日では、その説は最早や信じられない。古柳は鐵倉室町時代まで存してゐた。「宴曲抄」の「郢曲講物禮」に「古小柳の聲引（ふしやなぎのこわびき）」とあつて、古小柳は、聲を長く引く歌ひ方であつたらしい。「吾妻屋の草紙」に、「天明年の遊君ども歌り、今様小柳歌ひすましたりけるに」と見える。

古山姥（こやまうば）「山姥」を見よ。　〔藤田〕

古友尼（こいろに）　俳人　【姓】橋本氏　【別號】松承庵　【生歿】未詳。明和・天明時代をその盛時と見るべきであらう。【俳系】馬場存義門　【閲歴】橋本泰里の姉である。泰里は、河上庵と號して存義門であるが、所謂遊俳で點者ではなかつた。空也念佛に親しんで辨阿と稱した。明和六年の初冬、京に上つて五條西洞院の西に假寓を設けて五疊庵と稱し、蕪村一門と交遊を重ね、翌七年、吉野・橋立・大阪にも遊び、同年冬、江戸に歸つて「五疊庵」の一書を編してこの旅行の記念とした。古友は他へ嫁したのであるが、不幸その夫に死別して橋本家へ戻つた。安永八年の二月、姉弟相携へて吉野の花を見て京へ出たが、古友はこの時亡夫の七回忌に當るので、卯月の初め髪を下した。蕪村一門は十餘年ぶりの泰里を欵待した。その秋、木曾路を經て江戸に戻り、文臺の披露をした。古友尼には娘もあり、孫共もあつた事はその句の前書によつて窺はれるが、その歿時享年とも不明である。泰里は文政二年正月二十五日七十九歳で歿してゐるから、姉弟相携へて京に上つた時は、泰里が三十九歳である。さすれば古友尼は四五十の間であらうから、その歿時は寛政年代と考へてよいであらう。泰里が深川富が岡のほとりに住んでゐた事は、田女の「海山」によつて推知され、その菩提所は、淺草本願寺中善照院であつた。（泰里が第二世有無庵存義を稱したのは晩年であらう）。【編著】そのしをり（泰里編、安永八年刊、半紙本二册。上卷を姉の卷、下卷を弟の卷と名づけてある。安永八年の紀行錄）○松かさね（泰里編、天明四年刊、半紙本一册。前半は古友尼が智月尼等六人の女流俳人の句を立句として、存義・泰里等と賦した歌仙六卷と、古友尼の獨吟歌仙一卷とで、存義の序文があり、後半は存義歿後、泰里が古友尼の發句を整理編次して四季發句といふ見出しを附し、跋文を書いたものである）。　〔贄川〕

今宵の少將物語（こよひのしやうしやうものがたり）　御伽草子　一卷　【作者】未詳。「近古小説解題」には、俗僧かと推定してある。【別名】「雨やどり」。「しぐれの緣」（別名「雨やどり」）（別項）とは別本。【成立】室町季世（新編御伽草子解題）。【諸本】新編御伽草子上卷所收。「寛永四年八月十一日寫之」と奥書ある寫本傳存。【題材】戀愛物、靈驗談。初瀨觀音の信仰に繼子物語の要素も加はつてゐる。臣下が遂に帝位を踐む構想の如きは、既に「狹衣物語」にも見える「源氏物語」の惡影響であるが、本書では取替子の形で取扱はれてゐる。雨やどりの機緣に始まるのが別本「雨やどり」一名「しぐれの緣」と共通してゐる。

【梗概】中頃、按察大納言の北の方は美しい姫を殘して世を去つたが、やがて迎へられた後の北の方にも姫が二人生れた。先の姫君は乳母に任せてあつたが、或る日、乳母の勸めで鞍馬に行き、行末の事など祈ると、初瀨へ參れとの御告があつたので、初瀨に詣でて下向する途次、五條邊で驟雨に遭ひ、側の家の門邊に雨を避けてゐると、簾を上げた車が美しい殿上人を乘せて引入れられた。それは大將の一人子の中納言で、こゝはその乳母の許であつた。中納言は才藝比無く、君寵と世望を一身に負ひ、姫を持つ程の人々に聟にと望まれながら、まだ然るべき人も見出さずにゐたが、今立ち濡れてゐる人を一目見て戀し、請じ入れさせて契を結んだ。翌日後朝の歌の贈答あり、中納言は決して歸さぬやう己が乳母に言ひ置いて參内したが、乳母は行末頼もしくもないものを詮のない事と考へ、知る人の許に車を請うて立ち歸る姫君主從を强ひて引留めもしなかつた。女を失つた中納言は神佛に祈るより外はなく、父母から勸められた宰相の君の女にも返事すらしなかつた。姫の乳母は何事も觀音の御計ひと信じながら、姫君のただならぬ御有樣に心を痛め、女御の乳母を勸めてゐる己が姉の許に姫君を伴ふと、その曉のまどろみに、姫君の御懷から月の光のさし出るのを初瀨の別當らしい人が、袖に受けて內へ參ると夢み、夢解きに解かせると、國主が御生れになるのだと云ふ。やがて誕生あつたは若君であつた。同じ頃、內裏に女御の御產あり、まだ春宮もましまさぬので、諸事萬端嚴めしく、人々の期待の中に御出生あつたは鬼子であつた。術なくて、女御の乳母はその御母と計つてかの姫君の御子と取替へてそれと披露した。假親には帥の大納言夫妻が定まり、一の皇子なので總ての儀式まばゆく、女御は中宮に、人々も加階した。家に歸つた姫を繼母は夫に讓言して乳母共々失はうとしたが、中宮方より大納言へ、春宮の御介錯にその姫を參らせるやう御使が立つた。繼母は嫉んだが、姫は華々しく參內し、御匣殿と時めいた。中納言はなほ雨宿りの姫君を思ひ忘れず、月日を過してゐたところ、或る時、この御局を何心なく覗いて、美しい御匣殿を見出し、昔の人とも知らず心を亂し、思案の末、その女房兵部に文を託したが、兵部の扇に書かれてあつた御匣殿の歌からその人であることを知り、乳母の計ひで再會した。後、中宮の御許しで退下し、中納言との間に若君

姫君次々に出生。春宮は十三で御元服、やがて御位に卽かれたが、實妹とも知らずに、中納言の大姫君を床しく思し、度々仰せもあり、御文も遣はされるのを、御匣殿は困じ果てゝゐると、或る夜、女院、乳母共々の昔語りを立ち聞かれた帝は驚いて斷念し、左大臣の御女を女御に召された。今は大納言になつてゐる中納言は御匣殿の口から事情を聞き、辱くも嬉しくも空怖ろしく覺えたが、やがて攝政となり、大姫君は女院の御甥、宮の中納言に嫁ぎ、女御に春宮御誕生、同じく十三にて御錢祚、宮の中納言の姫君入內、人々めでたくある。四卷以外に、古謠集佚篇一卷を加へ、上は「古事記」所載、鎖火詞や古風土記の歌より、現代の俚謠に至るまで、全體で六百頁に達する。唯本書は、初めは各部類分（わけ）の中を年代順に排列する積りであつたらしいが、後は雜然としてゐて、甚だ檢索にも讀過にも不便であるから、もつと整理して完全な書とする必要がある。　〔藤田〕

古葉略類聚鈔（こえふりやくるるじゆうせう）　歌學書　五卷　【著者】未詳　【諸本】流布の寫本の原本は、卷八に建長二年九月十二日、卷九に同年九月二十九日、卷十二に同年十一月二日、卷名不地理及び草木の名によつて分類し、卷十は水より久具都に至る水に關する名稱によつて分類し、卷十二は老より事未詳歌に至る人倫に關する事項によつて分類し、卷名未詳卷は神・水垣より無音信に至る神仙・慶賀及び人倫に關する名稱で分類せられてゐる。その項目の分類は甚だ詳細である。全部で幾卷あつたか不明だが、多分十二卷で終つたものであらう。その題目は殆どすべて「類聚古集」（別項）の短歌の部（第一卷から第十五卷まで）と一致するので、それによつたものらしい。但し「類聚古集」の如く大目は無く、細目のみである。又短と思ひける頃月をみ侍りて、藤原爲經、在明の月より外に誰をかは山路の友にちぎりおくべき」とあるのは撰者の歌か。序文に「老いの身の霜をいたゞけるが齡を忘れて云々」とあるから、本集は晩年の撰修か。【名義】殘れる言の葉を集めたものとの意（序文）【成立】「詞花集」撰修に對しては多くの非難があつたが、別に集を撰して具體的に且つ對抗的に非難したものも出た。本集の如きはその一である。序文によれば「詞花集」は新時代の歌として批評の餘地のあるものがあつたので、改撰の詔が下つてゐたやうであつたが、撰者顯輔が既

姫君次々に出生。春宮は十三で御元服、やがて御位に即かれたが、實妹とも知らずに、中納言の大姫君を床しく思し、度々仰せもあり、御文も遣はされるのを、御匣殿は困じ果てゝゐると、或る夜、女院、乳母共々の昔語りを立ち聞かれた帝は驚いて斷念し、左大臣の御女を女御に召された。今は大納言になつてゐる中納言は御匣殿の口から事情を聞き、辱くも嬉しくも空怖ろしく覺えたが、やがて攝政となり、大姫君は女院の御甥、宮の中納言に嫁ぎ、女御に春宮御誕生、同じく十三にて御踐祚、宮の中納言の姫君入内、人々めでたく榮えた。皆、神佛の御利生である。〔島津〕

古謠集（こえうふ）　歌謠集　【編者】栗田寛【諸本】もと「皇典講究所講演集」第四十六號（明治二十八年三月發行）以下第百八十號に亙つて連載せられたものであるが、佚篇だけは、同誌所載以後に、遺漏を補ふ意味で集められたもの、本卷佚篇共に國學院大學編纂「國文論纂」（明治三十六年刊）に收められてゐる。【解說】目錄によると四卷より成り、卷一は神社歌曲、卷二は田植歌、卷三は雜謠、卷四は今樣及び雜曲であるが、併し本文は必ずしも目錄の如く整然としてはゐない。初めに叙があり、歌謠の沿革にも觸れてゐる。歌詞は古典雜書より拔萃し、又諸方より贈られた報告を併せ載せて、所々自己の考說註解をも加へたものである。故に歌謠集であると共に註解書としても有用である。「中古雜唱集」「巷謠篇」（各別項）に入れる歌も全部を收めて、從來のこの種の書を集大成した感がある。中には前田夏蔭の謠曲「要石」の註解の如きも取入れてある。琉球及び蝦夷の歌謠を收めて詳細なる解說を附した如きは、從來の書に見ざる特徵である。四卷以外に、古謠集佚篇一卷を加へ、上は「古事記」所載、鐵火詞や古風土記の歌より、現代の俚謠に至るまで、全體で六百頁に達する。唯本書は、初めは各部類分の中を年代順に排列する積りであつたらしいが、後は雜然としてゐて、甚だ檢索にも讀過にも不便であるから、もつと整理して完全な書とする必要がある。〔藤田〕

古葉略類聚鈔（こえふりやくるるじゆうせう）　歌學書五卷【著者】未詳【諸本】流布の寫本の原本は、卷八に建長二年九月十二日、卷九に同年九月二十九日、卷十二に同年十一月二日、卷名不詳卷に、同年六月三日書寫の奥書のある書である。縱九寸三分橫七寸三分、仙花紙袋綴の册子で、もと奈良春日若宮の神主千鳥家に傳はり、後四册は奈良市外佐保村の興福院の所藏となり、卷八の一册は京都藤原重浪氏の手に移り、今竹柏園の所藏となつた。水戸彰考館には延寶八年に原本から寫したもの、田中勘兵衞氏も同じ頃の古寫本を藏してゐる。安永年間に江田世恭・井上昌軌・植村禹言の三人が原本から寫して、安永六年十月の江田世恭の序を附したものが世に行はれ、その轉寫本が多い。又卷十と卷名未詳卷とを合せて一册とした四册本や、その他零本の一册本もある。而して現在傳はる建長二年本の脫落や錯簡の箇所が、水戸本や田中本で補訂される所もある。建長二年本は大正十二年帝國學士院の補助を受けて玻璃版に印行され、又同年興福院所藏の四册は國寶に指定せられた。【解說】萬葉集の分類書であるが、卷八・九・十・十二と卷名未詳との五卷が傳存するのみである。卷八は里より綿に至る家屋生活用具に關する事物によつて分類し、卷九は山より木積に至る地理及び草木の名によつて分類し、卷十は水より久具都に至る水に關する名稱によつて分類し、卷十二は老より事未詳歌に至る人倫に關する事項によつて分類し、卷名未詳卷は神・水垣より無音信に至る神仙・慶賀及び人倫に關する名稱で分類せられてゐる。その項目の分類は甚だ詳細である。全部で幾卷あつたか不明だが、多分十二卷で終つたものであらう。その題目は殆どすべて「類聚古集」（別項）の短歌の部（第一卷から第十五卷まで）と一致するので、それによつたものらしい。但し「類聚古集」の如く大目は無く、細目のみである。又短歌・旋頭歌は皆採つたが、長歌は除き去つたものが多い。且つ「類聚古集」の如く歌體による分類をなさず、各項目の中に長歌・旋頭歌をも入れてゐる。歌詞は「萬葉集」の本文のまゝに記して、右傍に片假字で振假字式に訓を書いてあるが、或は訓のみを記し、或は片假字に「萬葉」の漢字を交へて書き、本文のまゝでない類も多い。題詞や左註は「萬葉集」通りに書き、或は意を取つて書いた。

【價値】「類聚古集」に次いで、分類書として古いものであるのみならず、それよりも分類の方法が混雜せず體裁も統一して居り、作歌の參考書としてすぐれてゐる。又「萬葉集」の校勘上貴重なもので、「類聚古集」その他平安朝時代の古寫本と一致して、今日の流布本を訂正すべき箇所が少くない。また他本の缺を補ふ所もある。

【參考】古葉略類聚鈔附卷　佐佐木信綱・橋本進吉○校本萬葉集首卷○同諸本輯影　〔佐佐木〕

後葉和歌集（どえふわかしふ）　私撰集　二十卷一册又は二册【撰者】長門前司爲經（和歌色葉集・八雲御抄私記）。本集雜二に「法師にならんと思ひけるころ月をみ侍りて、藤原爲經、在明の月より外に誰をかは山路の友にちぎりおくべき」とあるのは撰者の歌か。序文に「老いの身の霜をいたゞけるが齡を忘れて云々」とあるから、本集は晩年の撰修か。【名義】殘れる言の葉を集めたものとの意（序文）【成立】「詞花集」撰修に對しては多くの非難があつたが、別に集を撰して具體的に且つ對抗的に非難したものも出た。本集の如きはその一である。序文によれば「詞花集」は新時代の歌として批評の餘地のあるものがあつたので、改撰の詔が下つてゐたやうであつたが、撰者顯輔が既に歿したので改撰の望も空しくなつた。そこで爲經は先づ「詞花集」中から然るべき歌を書き拔き、撰に入るべくして洩れた歌で、空しく朽ち果てて了ふやうなものや、後の撰修の材料ともならうものを書き加へて纏めたものである。私的な興味に依つて撰したので、弘く流布するならば世上の嘲を受けるであらうと比較的穩かに記してはあるが、「八雲御抄私記」には、「詞花集を破る」とあり、清輔は更に「牧笛記」なるものを撰して「後葉集」を難じた程であつたから、勅撰集を認めないといふ意味で、相當に手酷しい攻擊となつたのであらう。然し「詞花集」から多くの歌を採つてゐるのを見れば、全然「詞花集」を認めないといふ程でもなかつたと思はれる。なほ、序に「雁がねのつらね集めたりし人も夕べの空の雲にまじり」とあつて、「詞花集」の撰者顯輔の歿した事を記してゐるから、その歿する久壽二年五月七日（公卿補任）以後の事と考へられる。別に作者名の記し方から考へて、後白河天皇を今上と申し奉つてゐるから保元三年八月十一日以前となり、實行を單に太政大臣としてゐ

るから、保元二年八月九日以前となり、更に實能を内大臣、伊通を大納言、公能を右衞門督としてゐるから保元元年（久壽三年）九月の政變に伴ふ官職移動以前と見ることができ、兩者を合せると久壽二年五月より三年九月以前の一年餘の間となる。假に右の推定に誤謬があるとしても同三年九月より、さほど後ではあるまい。さうすれば「詞花集」奏覽の仁平元年より約三年の後で、顯輔歿後間もなくの事となる。【諸本】群書類從一四七所載本は末の二卷を缺いてゐるが、圖書寮本に依つて校合增補した新校群書類從本は末の二卷を有するのみならず、卷十八までに於ても缺けてゐた歌を補つてゐる。

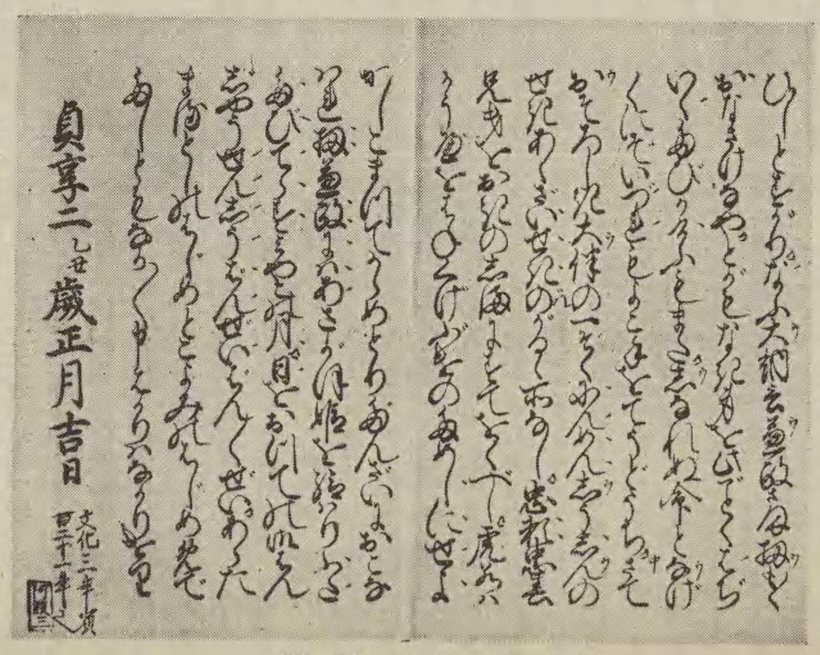
【解說】部類を春（上下）・夏・秋（上下）・冬・賀・別・旅・物名・戀（一・二・三・四）・哀傷・雜（一・二・三・四・五）と分けてゐて大體を古今集のそれに據り、後撰のそれをも參酌してゐる。歌の總數は圖書寮本五百九十三首、類從本にのみあるもの三首、合計五百九十六首となつて、卷の數は二十あつても大きさは古今集の約半分、詞花集よりやゝ大きい位である。作者の總數は凡そ二百二十人、内僧三十一人、女三十七人であるが、大體に於て當代の歌人を中心としてゐる。最も歌の多い作者は俊頼（二十五首）・兼盛（十八首）・基俊（十五首）・忠通（十四首）・待賢門院堀川（十三首）等の順序であるが、新歌人では俊頼・基俊を、舊歌人では兼盛を、女流では堀川を宗としてゐることがわかる。所收の歌は詞花集にあるもの、千載集にあるもの、その他に三分されるが、詞花集が最も多い。成立は千載集より古いから、千載集は撰修に當つて本集を材料としたことが明白である。序文に後の集に採られることを豫想してゐるのは偶然であるのか、或は爲經と俊成との間に特殊な關係があつたのかは明瞭でない。なほ本集から詞花・千載の兩集の歌を取り去れば、拙劣な歌が殘るので、勅撰集を主にすると、本集の存在は影が薄くなる。併し千載集に材料を與へてゐること、詞花・千載の兩集を結びつける中間の集であることは、なほ一つの興味である。（詞花和歌集參照）

【參考】新校群書類從第七卷　〔西下〕

暦（こよみ）　淨瑠璃　五段　時代物　【作者】井原西鶴と推定されてゐる。【興行】正本の刊記通り貞享二年正月上演と推定され、京下りの宇治加賀掾が義太夫に挑戰した興行である。

【諸本】八行四十二丁本。稀書複製會本。淨瑠璃名作集上卷（名著全集）所收。【題材】貞享元年（天和四年）十月二十九日新に貞享暦を頒布した事實を、持統天皇の儀鳳暦採用に假託して脚色。

【梗概】〔初段〕（禁中）天文博士木津良（きつら）の廣信、從來採用の暦の不便を論じ、新に元嘉暦・儀鳳暦を用ふる事の利を奏上するので、持統天皇は前中納言三條兼政を春日に、大伴朝臣忠頼を三輪に遣はし、それ〴〵神慮を伺はしめ給ふ。（朝顔姫住居）先帝に仕へた高橋の宰相吉連の遺兒朝顔姫は、乳母の玉水の手一つに成人し、侘び住みの憂き身を嘲（かこ）つてゐるが、今日しも賤の男に辱しめられ、既に危い所を春日より下向の兼政に救はれ、互に忘るな忘れじと詞を契つて別れる。（大伴忠頼邸）兼政の奏上した儀鳳暦が忠頼の元嘉暦を出し抜いて採用され、且つ大納言に任ぜられる事となり、なほ又富士山に赤銅の柱を立てて三日三夜の晴天を見合せる由を聞いて忠頼は嫉妬するが、朔の豐浦の虎若は、浪人宇右衞門と謀つて兼政自筆の色紙を乞ひ請け、胸中何事かを策しつゝ館を出る。〔二段〕（駿州安倍川の廓）初めに遊女の生活を唄つた節事がある。揚屋蔦屋で虎若と宇右衞門とは、富士山に於て天文觀測中の兼政・廣信なりと詐稱し、以前の色紙を亭主に與へて信用させた上、狼藉を働き、遊女の耳をそぎ取つて逃げる。〔三段〕（富士山）初めに富士山の四季を歌つた節事がある。兼政・廣信兩人は、無事觀測を遂げて下山する。（禁中）朝顔姫は、宮内と名告つて宮仕へに上つてゐるが、今日しも年の暮で衣配りの衣の下見をしてゐる。こゝも節事である。例年三條家に賜はる衣が今年は他家に定められてゐる事から、やがて兼政が配流された事を知り、姫は泣き沈む。（佐保川畔）勅使は、上京の途にある兼政等に出會ひ、勅諚を傳へる。兼政の郎黨岡崎平内・平七兄弟は激怒するが、主に制せられる。兼政・廣信は、そのまゝ配所へ向ふ。〔四段〕（難波梅の濱）兼政と衆道の契りのあつた右丸・左丸の二少年が、供を願つて追つて來るが許されない。船の漕ぎ去つた後、兩人は岩上に坐したまゝ食を絶つて主に殉ずる。（朝顔姫道行）姫は宮仕へを辭し、乳母玉水と共に兼政の跡を追ふ。〔五段〕（施藥院）大和壺坂に溫泉が涌き出でたので、施藥院を設けて諸國の難病人を治療してゐる。その中に僞兼政に耳をそがれた安倍川の遊女も交つてゐた。（禁中）伊勢の遷宮を取行はせられるにつき、古例に解し得ぬ點があるので、兼政・廣信は召還される。兼政は鮮かにその疑義を解く。（檢斷所）三條兼政・木津良廣信と大伴朝臣忠頼・虎若・宇右衞門等との對決。論爭の後以前の安倍川の遊女が呼出されて事明白となり、忠頼等は罰せられ、兼政には朝顔姫を賜はる。



正本「暦」（奥附）

【解說】本曲は、淨瑠璃作者としての井原西鶴を見る上での唯一の作品である點と、この作が近松の「賢女の手習並新暦」（別項）と同時に競演され、加賀掾・義太夫をしてそれ〴〵その眞價を世に問はしめたといふセンセイショナルな記錄を我が操劇史の上に遺した點とで、特に注意される作である。「新暦」との比較の上で指摘されるこの作の特性は、（一）全曲としての構成は、「暦」の方が遙かに緊密であるが、各段・各齣の全曲との結び附きは可なり稀薄である。例へば右丸・左丸二若衆の件、郎黨平内・平七兄弟の件等唐突でもあり、それ自身纏つてもゐない。彼の浮世草子に於ても屢々見出し得る特性であるが、少くもこれは淨瑠璃の場合には失敗である。（二）構想上の複雜性が無い。繁雜な複合的な奸計や蹉跌・齟齬は、一般に近世戯曲構想上の基本的手法であり、近松は既にその方向を取りつゝあつたに反し、「暦」に於てはそれ等が總て一元的で單記述によつて信ぜられ、最近藤井乙男氏もその筆致から西鶴作と推定されてゐる。前述の諸特性やその發想法や筆癖からこの推定に誤りはないやうである。（賢女の手習並新暦參照）

【參考】西鶴の淨瑠璃藤井乙男（江戸文學研究）○西鶴の淨瑠璃「暦」の發見　同上（江戸文學叢說）○淨瑠璃名作集上卷解說　黑木勘藏　○大沂松全集第一卷解說　木谷蓬吟　〔近藤〕

暦摺萬句合（こよみずりまんくあはせ）　川柳集　【解說】これは書籍といふよりは寧ろ表ともいふべき摺物で、前句附等の高點句（拔句又勝句ともいふ）を半紙に摺つたもので、紙數は集

萬句合總高七千四百六十五員　四まひ板行　川柳評

引っ張りにけり〳〵
相印　○すましこそすれ〳〵
仁　▲めっさうなこと〳〵
×きつい事かな〳〵　市谷田町　初瀬
×時鳥二十六字はあんじさせ
▲富士山も駿河は餘り舞臺際　芝宇田川東横丁　近江
牛酔のせまさうに出る仁王門　山下隆秀堂　櫻木
×小百兩灰にする夜のお涼しさ　赤坂一ッ木町　松葉
○御引馬どしやう骨から風おこり　市谷田町　初瀬
○金屏風元が元だと借りにやり　四谷大木戸　かすみ
×御うたゝ寢狆の口へも手をあてる　山下　櫻木

ばかりでなく、「切りたくもあり切りたくもなし」などの如く、單なる十四文字の短句型のこともある。而してその課題の上に天・梅・仁等の文字を附してあるのは、合印といふもので、合印は天・滿・宮・梅・櫻・松・仁・義・禮・智・信・鶴・龜・叶の十四文字から成り、一ヶ年に催さるゝ十四度の定會に配せらるゝのである。一年中の定會といふは八月より十二月まで毎月五の日で、但し十二月に限り最後の二十五日を休會とする例であるから都合十四回になる。そこで、八月五日の分が天、十二月十五日の分が叶といふ合印になる。表示すれば次

上で指摘されるこの作の特性は、(一)全曲としての構成は、「暦」の方が遙かに緊密であるが、各段・各齣の全曲との結び附きは可なり稀薄である。例へば右丸・左丸二若衆の件、郎黨平内・平七兄弟の件等唐突でもあり、それ自身纏つてもゐない。彼の浮世草子に於ても屢々見出し得る特性であるが、少くもこれは淨瑠璃の場合には失敗である。(二)構想上の複雑性が無い。繁雑な複合的な奸計や蹉跌・齟齬は、一般に近世戯曲構想上の基本的手法であり、近松は既にその方向を取りつゝあつたに反し、「暦」に於てはそれ等が總て一元的で單純である。(三)舞臺技巧が少い。例へば「新暦」では流行のカラクリを用ひて、視覺的效果を高めてゐるが、「暦」にはそれがない。(四)人情的要素が少く、且つそれを散文的・概念的に取扱つてゐる。例へば「新暦」に於ける實方・瑠璃姫の戀と、「暦」に於ける兼政・朝顔のそれとを比較しても明かである。以上の諸點は、結局淨瑠璃操とはその鑑賞者層を異にし、傳統を異にする浮世草子の作者としての西鶴の把持するレアリズムの現れであつて、ロマンチシズムを要求する操の看客層に迎合する度合の低かつた點が、「暦」の敗北の主要な原因であつたらう。

【附記】「暦」の存在は從來「操年代記」や「聲曲類纂」などによつて知られてをり、種彦もその節事の部分の拔萃が加賀の語り物集「小竹集」に載せられてゐる事を語つてゐるが、丸本の世に出たのは、大正十二年近松二百年記念事業が朝日新聞社に依つて行はれた際、故竹本越路太夫の藏書中から初めて見出されたのである。なほ「暦」の作者が西鶴であるといふ點には物的な確證はなく、夙く「操年代記」の記述によつて信ぜられ、最近藤井乙男氏もその筆致から西鶴作と推定されてゐる。前述の諸特性やその發想法や筆癖からこの推定に誤りはないやうである。(賢女の手習亜新暦參照)

【參考】西鶴の淨瑠璃藤井乙男(江戸文學研究)○西鶴の淨瑠璃「暦」の發見 同上(江戸文學叢說)○淨瑠璃名作集上卷解說 黑木勘藏 ○大近松全集第一卷解說 木谷蓬吟

暦摺萬句合 こよみずりまんくあはせ 川柳集

【解說】これは書籍といふよりは寧ろ表ともいふべき摺物で、前句附等の高點句(拔句又勝句ともいふ)を半紙に摺つたもので、紙數は集句の多寡によつて一組二三枚から八九枚までの間である。その體裁が假名交りの細字を以て一行一句づつ列記してあつて、何となく伊勢暦に似てゐるといふので、暦摺萬句合と稱せられたのである。これは句會の催される度毎に發行されたもので、「柳樽」の種本であるところの初代川柳選の萬句合は、寶暦七年から寛政元年まで約三十年間に跨り、毎年定期摺が十四回として約四百二十綴、それに臨時摺を加へたら、少くとも五六百綴には達するであらう。【諸本】川柳狂歌集(近代日本文學大系)中に抄錄がある。【體裁】左記の通り最初に開會の年月日、次に寄句の總數、點者の名、合印、その下に前句題を列記し、以下順々に附句を連載し、各附句の下には應吟した組合連の名と所とを附記することになつてゐる。而してその課題の前句と答吟の附句との頭に、○▲×などの如き符號を附して、引合はせて見るに便利なやうにしてある。左にその例として明和六年十月開の一部分を揭げておく。

丑十月五日開

萬句合總高七千四百六十五員　四まひ坂行　川柳評

引つ張りにけり〳〵
相印　○すましこそすれ〳〵
仁　▲めつさうなこと〳〵
×きつい事かな〳〵

×時鳥二十六字はあんじさせ　市谷田町　初瀨
▲富士山も駿河は餘り舞臺際　芝宇田川東裔丁近　江
牛醉のせまさうに出る仁王門　山下薩秀堂　櫻木
×小百兩灰にする夜のお涼しさ　赤坂一ツ木町　松葉
○御引馬どしやう骨から風おこり　市谷田町　初瀨
○金屏風元が元だと借りにやり　四谷大木戸　かすみ
×御うたゝ寢狆の口へも手をあてる　山下　櫻木
×投げるなといふは涼みの相撲也　芝三本榎　水仙
傾城のふみに女のよりたかり　木郷四丁目　北國
奥家老日も夕陽と申上げ　麻布櫻田町　かつら
×朝歸りそりやはじまると兩隣　芝　近江
×僧正は大かみなりが相手なり　同　同
うかゞひの上で家老を胴につき　同　同
内ぶんにしてとふるへる顔二つ　市谷　初瀨
▲本性に成つて三味線ついで見る　同　同
▲やかましいわけは二人が他人也　同　同
○無いふりが金持至極上手なり　同　同
(以下略)

但し讀者自ら句義を考察して、任意に前句と附句とを結び附けるやうに、わざと符號を略してあることもある。題の數は通例前句が四つに冠句が一つであるが、或は前句ばかり五つのことも、四つのことも、前句二つに冠句一つのことも、多い時には前句七つに冠句二つのことも、前句四つに冠一つ沓一つ帶一つといふやうに混題のこともあつて、素より一定の規則といふものはない。又前句附の題は「よいかげんなり〳〵」「きついこと哉〳〵」などの如く、七文字づつの重言式になつてゐるのが本體であるが、これとても必ずしもさうばかりでなく、「切りたくもあり切りたくもなし」などの如く、單なる十四文字の短句型のこともある。而してその課題の上に天・梅・仁等の文字を附してあるのは、合印といふもので、合印は天・滿・宮・梅・櫻・松・仁・義・禮・智・信・鶴・龜・叶の十四文字から成り、一ヶ年に催さるゝ十四度の定會に配せらるゝのである。一年中の定會といふは八月より十二月まで毎月五の日で、但し十二月に限り最後の二十五日を休會とする例であるから都合十四回になる。そこで、八月五日の分が天、十二月十五日の分が叶といふ合印になる。表示すれば次の如くである。

八月五日、天　十五日、滿　廿五日、宮
九月五日、梅　十五日、櫻　廿五日、松
十月五日、仁　十五日、義　廿五日、禮
十一月五日、智　十五日、信　廿五日、鶴
十二月五日、龜　十五日、叶

その他一月から七月までに開かれる句會は不定期で、或は別會と稱し、或は角力句會と稱し、或は追善句會、或は奉納句會等いろ〳〵な名稱があるが、前の定會即ち月並會に對して臨時會とも稱すべきものである(やない筥・川柳傍柳等參照)。又、その句尾に附記してある市谷田町初瀨、上野山下櫻木、芝近江、四谷大木戸かすみなどとあるのは、組合團體の惣名で、その頃は各個人の詠句は最寄々々の組合で纏め、初瀨連とか櫻木組とかいふ名の下に出句したものであつた。今日人口に膾炙してをる名句も多くその吟者の名が傳はつてゐないのは全くそのためである。尤も寛政以後には箇々別々に投吟するやうになつたので、句主の判明してゐる句が自然多くなつた。以上は主として初代川柳萬句合の點式に就いて

述べたものであるが、萬句合の點者は勿論川柳一人ではなく、同時代には露丸だの、机鳥だの、收月だの、白翁だのと實に多士濟々であつて、その點式等にも多少の相違があり、合印の如きも亦、同一でなかつたことは勿論である。〔西原〕

古來風體抄（こらいふうたいせう）　歌論書　二卷

【著者】藤原俊成【成立・由來】式子内親王から、「歌の姿をもよろしと云ひ詞をもいみじと云ふ事は如何なる事ぞ。すべて歌を詠むべき趣を書きて出すべし」との仰せを蒙つて、建久八年生年八十四歳の時執筆し、五年後の建仁元年に奉つたものである。【諸本】元祿三年の刊本五册がある。續群書類從卷四五八に收めたものは、榮雅自筆本の傳本に據り、下卷が闕けてゐるが、經濟雜誌社版は、圖書寮本及び刊本によつて補つて完本としてゐる。【内容】和歌の起りは遠く神代に始まつて、我が國のことわざとなり、代々の帝も氏々の諸人もこれを翫ばない者はない。それにつけ昔も今も「歌式」「髓腦」「歌枕」の類多く出て作歌の指南となつたのであるが、併しこれ等によつて歌の善惡を分別し、歌道の眞意義を傳へる事は困難である。彼の天台止觀も先づ佛道の傳統を明かにする事によつて、それを聞いて尊さも起るやうに、歌に於ても昔から傳はつて撰集などに見えてゐる歌の樣にて深く心を得べきであると言つて、素戔嗚尊の「八雲立つ」以下上古の諸歌を擧げてその由緒を述べ、次に「萬葉」「古今」以下「千載」に至る諸撰集につきその歌風を說明し、秀歌を拔いてまゝ短評を加へたものである。「萬葉集」に就いては、「後拾遺」序に、この集の心は易き事をばかくし難き事をあらはし爲に惑へる者が多いと言つた言葉を難じて、歌の姿・詞は時代の距るに隨つて變つて行くので、當時の人が殊更に難しい事を詠んだ譯でないとし、心もをかしく詞つかひも好もしく見える歌が多く、證歌になる歌も多い事を言つて、百九十五首の多數を拔いてゐる。人麿に就いては「上古、中古、今の末の代までをかがみけるにや、昔の世にも末の世にも皆かなひて見ゆめり」と譽め、「古今集」に就いては「此集の頃ほひより歌のよきあしきも殊に選び定められたれば、歌の本體には唯古今集を仰ぎ信ずべき事なり」と言ひ、「拾遺集」よりも「抄」を揚げ、「後拾遺」については、拾遺以後、公任以下のすぐれた歌人輩出し、面白く聞き近く物に心得たる樣の歌が多かつたのに、撰者の好みから偏へにをかしき風體を採つたので、從來の諸集に比してたけ・かたちが劣つてゐると評し、「金葉集」については撰者に少し時のはなを折る心の進んだ爲か、如何かと思はれる歌があると言ひ、「詞花集」は餘りにをかしき樣のふりで、ざれ歌の多い事を難じ、又己の撰んだ「千載集」では歌を主として人を第二に置いた事を言つてゐる。その他、能因の「玄々集」、良暹の「打聞」等の私撰集にも觸れてゐる。素より簡略ではあるが、和歌の史的記述の初をなすものである。【批評】この書は、論敵清輔・顯昭一派の六條家（別項）歌學が訓釋・考證を事とし、歌學者的立場に立つてゐるのに對し、寧ろ詠歌の實際に卽し、鑑賞批評的に見て行かうとする歌人的な彼の立場を示すものである。長歌・短歌の說につき、「萬葉集の事を云ひながらひとへに卅一（マヽ）の反歌・短歌を長歌と云ふらん髓腦は萬葉集をくはしく見ざるに似たり」と言ひ、又歌病中、同事病のみを認めて他は拘泥すべからずとし、或は和歌聲韻說の無意義な事を言へる如き、主として清輔の「奧義抄」（別項）に對する駁論と考へられ、河社、かびやに關する可なり長い考證は、顯昭の「六百番陳狀」（別項）に對する反擊と見られる。この書の外に「和歌肝要」と題するものがあつて、彼の著として傳へられてゐるが、その假託の書であることは諸家の指摘せる所である。その外に「正治二年和字奏狀」（別項）の如きものがあるが、歌論書としてはこの「古來風體抄」が現在殆ど唯一の纏まつた彼の著であり、彼が判者となつた諸歌合に於ける制詞と共に、二條家（別項）歌學の祖として幽玄體を唱道した俊成の歌論研究上貴重なる資料である。〔中島〕

孤立語（こりつご）　言語學【名稱】〔英〕an isolating language〔獨〕eine isolierende Sprache〔佛〕une langue isolante【解說】言語の形態的分類の一。單語が連つて文を成す時、各單語が、語尾變化又はその他文法上の關係を示す變化を全く有せずして連結せられる形態を「孤立」(Isolation)といふ。幼兒の言語に例へば「パパあつち」(父は彼方にゐる)「ワンワンいや」(予は犬を好まない)等の言ひ方をなすのは孤立の一例である。或る國語に於てその單語が主として孤立の形で文を成す習慣のある時、その國語を孤立語といふ。古代支那語は屢々孤立語の例として擧げられる（膠着語・屈折語・輯合語・抱合語參照）。

【參考】G. v. d. Gabelentz : *Die Sprachwissenschaft*. Leipzig 1901. ‖ H. Sweet : *History of Language*. London, 1901. ‖ E. Sapir : *Language*. New York 1921.〔神保〕

五論碎五體圖（ごろんさいごたいず）「歌祭文」を見よ。

是誰　「玉櫛笥」を見よ。

惟足（これたり）　神道家【姓】吉川【通稱】五郎左衞門【號】視吾堂・湘山隱士【生歿】元和元年（一三五四）（二年とも云ふ）正月二十八日生れ、元祿七年（一三五四）十一月十六日歿す。享年八十。【閱歷】惟足の先は、宇多源氏佐々木源三秀義に出づ。父廣元、江戸に出で、德川氏に仕へようとして果さないで歿した。惟足僅かに九歳。商鋪に養はれ、長じて商賈となつたが、慶安四年、年三十七、鎌倉に退隱し、專ら古典を研究した。偶々京都に吉田流の神道を傳へた萩原兼從あるを聞き、上京、遂に大道不殘附屬の證明を受け、爾來、公卿・諸侯のために道を講じ、殆ど席の溫まる時がなかつた。惟足に道を聽いた者に、正親町實豐・姉小路・富小路の諸卿、紀伊侯頼宣・會津侯正之・稻葉美濃守・淺野因幡守等がある。【著書】神代卷家傳聞書○神代卷惟足抄○神道大意講談○日本學則○吉川視吾堂事記等。【批評】惟足の學說は、頗る多岐に涉つてゐるが、その要を摘まむと、三種の神器については「事を云へば三種の靈寶、理を云へば天子の御心也。三種の靈寶は收まりて胸中にあり、胸中は三種の靈寶に現はる」（神代卷家傳聞書）。これを、更に說明して、「玉は溫潤の德を以て惠み玉ふ。寶劍は只溫惠ばかりにては惡逆の者犯之を罰する也。鏡は其邪正を明白に照して、玉を用所に玉、劍を用所には劍を可用と也」（神代卷惟足抄）と言つてゐる。その說、儒に據つたところが多いが、また時代の要求に應じて、その說を立てたものと見るべきであらう。〔田中（義）〕

是則（これのり）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】坂上【家系】田村麿四代の孫好蔭の子（坂上氏系圖）、望城の父【閱歷】延喜八年、大和權少掾に任じ、同權掾・少監物・中監物・少内記・大内記を經て、延長二年從五位下に叙し加賀介に任じた（古今集目錄）。延喜五年三月二十日仁壽殿に行はれた蹴鞠に、殿上人の外、藤原董之・在原相如・榎井清鄕等と共に召され、二百六度まで連足に蹴つて墮さなかつたので内藏寮の絹を賜はつた（西宮記二十）。延喜七年醍醐天皇の大井川行幸に供奉し、十三年亭子院歌合の作者となつた（家集）。「古今集」卷五・六に、大和國に行き龍田川に遊び、奈良の都を訪れたとあるのは、大和權少掾に任じた延喜八年の頃か。【作品・作風】家集「坂上是則集」があり、勅撰集に入る歌は、古今七、後撰六、そに補せられて從六位となり、同十二年文章博士の稱號を受く。仁壽三年（四十二歳）大學頭となる。貞觀十一年（五十八歳）大江音人・南淵年名等と「貞觀格」を、同十三年大江・南淵・紀安雄等と「貞觀式」を撰進す。元慶三年（六十八歳）從三位となり、同年都良香等と「文德實錄」を編纂す。【人物】幼にして父祖の業を傳へ、十一歳の時殿上して、帝の前に詩を賦し文を讀んだと云ふ。これは道眞が十一歳の時に詩を賦したと等しく、環境と天性の然らしめたものである。長ずるに及び文藻愈々華麗豐富となり、小野篁・春澄善繩・大江音人等と文を以

五・十六・二十・三十八○類題古詩○梅城錄○本朝文粹卷九〔山岸〕

語呂（ごろ）　雜俳【解說】口合（くちあひ）の一種で、天明頃から流行したもの。俚諺・俗語等世にありふれた成句に、聲音の似寄つた別句を寄せて、原句と違つた意義の別句を作成する一種の洒落（しゃれ）（「言海」には、かゝる口合を文にした時は、地口或は語呂といひ、口にした時は洒落といふと區別してある）で、江戸に生れて江戸で發達したものである。口合の一種である點は地口（ぢぐち）（別項）と同一であるが、ただ語呂は地口の一歩進歩したもので、單に聲音の耳に聞いた時、團扇踊の出端に尺八吹十人でこれを奏した。箏にも三味線にも合せたもので、歌は「糸竹初心集」に見えてゐる。

小六ついたる竹のオヲ杖小六。本は尺八中はア・笛小六。すウゑエはホホホンノ〜ホホンホホ。ノンヨヲヲじよんじよ。じよん〜〜女郎衆のノンカカイヤカカ。カカンカカ。ソレソレまことに。ノホンホホヲさあて。筆の軸ワたあアけエ小六。（箏）

小六。生れは西のヲ國小六。そヲだちやホホホンホンホホホホン。ノヲヨヲヲ闘ン。東のノンカカイヤカカ。ソンソレまことにノホンホホヲさアて武藏野にすウむな小六。（三味線）

内記を經て、延長二年從五位下に叙し加賀介に任じた（古今集目錄）。延喜五年三月二十日仁壽殿に行はれた蹴鞠に、殿上人の外、藤原董之・在原相如・榎井清鄕等と共に召され、二百六度まで連足に蹴つて墮さなかつたので内藏寮の絹を賜はつた（西宮記二十）。延喜七年醍醐天皇の大井川行幸に供奉し、十三年亭子院歌合の作者となつた（家集）。「古今集」卷五・六に、大和國に行き龍田川に遊び、奈良の都を訪れたとあるのは、大和權少掾に任じた延喜八年の頃か。【作品・作風】家集「坂上是則集」があり、勅撰集に入る歌は、古今七、後撰六、その他凡そ二十六首、合計凡そ三十九首。「坂上是則集」群書類從卷二四八所載本、歌仙歌集本は同系統のものと思はれるが、歌の數に於て類從本は四十四首にて一首少く、歌仙歌集には補遺六首があり、部類に於て歌仙歌集は部類の名目を揭げ、その下にその部類に屬する歌の題をすべて記し、更にその歌毎に題を揭げてゐること「堤中納言集」の如くである。詠歎感傷の中に客觀描寫の美しさを出してゐるのが、その特色である。

【參考】古今集目錄○歌仙傳○百人一首一夕話〔西下〕

是善（これよし）　漢學者【姓】菅原【生歿】嵯峨帝の弘仁三年に生れ、陽成帝の元慶四年（一五四〇）八月三十日歿す。享年六十九。【家系】野見宿禰の後裔で、その子孫は土師連となり、更に土師宿禰と改め、光仁帝の天應元年六月居る處の地名により、土師を改めて菅原となし、桓武帝の延曆九年十二月に菅原朝臣の姓を賜はつた。宇庭（うにはし）・古人（ふるんど）・清公（きよきみ）と傳はつて、善主・是善はその二子で、道眞は是善の子（清公參照）。【閲歷】承和二年（二十四歳）文章得業生に補せられて從六位となり、同十二年文章博士の稱號を受く。仁壽三年（四十二歳）大學頭となる。貞觀十一年（五十八歳）大江音人・南淵年名等と「貞觀格」を、同十三年大江・南淵・紀安雄等と「貞觀式」を撰進す。元慶三年（六十八歳）從三位となり、同年都良香等と「文德實錄」を編纂す。【人物】幼にして父祖の業を傳へ、十一歳の時殿上して、帝の前に詩を賦し文を讀んだと云ふ。これは道眞が十一歳の時に詩を賦したと等しく、環境と天性の然らしめたものである。長ずるに及び文藻愈々華麗豐富となり、小野篁・春澄善繩・大江音人等と文を以て自他共に許してゐた。篁は當時詩家の宗匠と稱へられ、善繩・音人は在朝の通儒と呼ばれた者である。その門に出入する者は、上卿・良吏・詞人・儒士等、あらゆる知識階級を網羅してゐたかの觀があつた。彼は學を好むこと貪るが如く、天性俗事に累はされるのを好まず、風月を賞し吟詠を樂しんで悠々自適した。殊に佛道を崇信して殺生を好まず、仁愛と孝行とを以て聞えた。思ふに篤實・溫藉・順良の學者であつたのであらう。不幸にしてその詩集は、今傳はらないため、その詩を知る事は難いが、ただ「類題古詩」に載せたものと、「梅城錄」に「菅相公集」より一句を揭げてゐるものが傳はつてゐるだけである。【著作】菅相公集十卷○銀牓輸律十卷○集韻律詩十卷○東宮切韻二十三卷○會文類聚七十卷（以上の書は、何れも「類聚國史」及び「三代實錄」にその名を見るが、現存してゐない）○類聚名義抄十一卷（別項）○文德實錄十卷（別項）○貞觀格十二卷○貞觀式二十卷等。

【參考】扶桑略記卷二十○公卿補任○續日本後紀卷八○文德實錄卷五・十○三代實錄卷五・十六・二十・三十八○類題古詩○梅城錄○本朝文粹卷九〔山岸〕

語呂（ごろ）　雜俳【解說】口合（くちあひ）の一種で、天明頃から流行したもの。俚諺・俗語等世にありふれた成句に、聲音の似寄つた別句を寄せて、原句と違つた意義の別句を作成する一種の洒落（しやれ）（「言海」には、かゝる口合を文にした時は、地口或は語呂といひ、口にした時は洒落といふと區別してある）で、江戸に生れて江戸で發達（ぢ）したものである。口合の一種である點は地口（ぢぐち）（別項）と同一であるが、ただ語呂は地口の一歩進歩したもので、單に聲音の耳に聞いて似通つてゐるのみに止まらず、原語と造語と母音までも一致するやうに作成するもので、カサタナハマヤラワの縱九行の子音が、アイウエオの横五段の母音と相通ずるを要するのである。例へば次の如くである。

原語——ねこにこばん　エオイオアウ
猫　小　判　＝＝＝＝＝＝
造語——ごこにごはん
下戸　御　飯

原語——エンナキシュジョウハドシガタシ　エウアイ
緣　無き　衆　生　は度し難し　＝＝＝＝＝＝＝＝
造語——ネンアキ　ヂョラウ　ハトシマナリ　オアオイアアイ
年　明　女　郎　は年　增なり〔西原〕

小六節（ころくぶし）　流行歌【名義】貞享四年刊「故鄕歸江戸咄」によれば、慶長の頃、西國生れの小六といふ小歌の名人が、江戸の赤坂に住んで、關東小六と呼ばれて馬子をしてゐた。この男のことを謠つた歌の節。【沿革】同書に、年三十年程中絶して三度迄榮えて日本中にはやつたとある。卽ち慶長と寛永と寛文頃とに行はれたものとすべきである。寛永十二年に尾州家から踊を將軍家光の上覽に供した時、團扇踊の出端に尺八吹十人でこれを奏した。箏にも三味線にも合せたもので、歌は「糸竹初心集」に見えてゐる。

小六ついたる竹のオヲ杖小六。本は尺八中はア、笛小六。すウゑエはホホホン／＼ホホンホホ。ノンヨヲヲじよんじよ。じよん／＼女郎衆のノンカカイヤカカ。カカンカカ。ソレソレまことに。ノホンホホヲさあて。箏の軸ワたあアけエ小六。（箏）

小六。生れは西のヲ國小六。そヲだちやホホホンホンホホホホン。ノヲヨヲヲ關ン。東のノンカカイヤカカ。ソ：ソレまことにノホンホホヲさアて武藏野にすウむな小六。（三味線）

元祿十年京都の早雲長太夫座で、江戸から上つた中村七三郎の小六で、「關東小六今樣姿」を興行し、翌十一年三月には江戸の中村座で、「關東小六」と題して四番續の狂言を興行してゐる。又同十六年刊の「松の葉」のさわぎの部にも小六があり、翌寶永元年刊の「落葉集」の中興當流丹前出端の部には、嵐三郎四郎の當り藝として、「關東小六」と題して、右の歌を取入れた一章を收めてゐる。この頃迄はフシも遺つてゐて、その後間もなく絶えたらしい。江戸半太夫節の語り物にも「關東小六」と題したのがあり、江戸長唄に「關東小六後雛形」にも前揭の歌を含めてあるが、古韻を含むかどうか覺束ない。〔高野〕

崑崙八仙（ころんはつせん）　「崑崙八仙」を見よ。

壺蘆圃雜記（ころはざつき）　隨筆　九卷【著者】未詳。壺蘆圃はその堂號であらうが、恐らく幕末の士人で、文化頃から安政頃を盛時とした人であつたと推定される。それは帝國圖書館所藏の一本に、屋代弘賢の補書があるからである。【諸本】本書は稀本の一で、帝國圖書館に一部を藏するのみであつたが、昭

和三年、續隨筆文學選集卷四から卷六までに收錄された。但し校合上の誤りが少くない。

【解說】「壺蘆圃漫筆」（別項）に類したものであるが、江戸時代後半に於ける朝野の出來事を錄すること前者よりも多い。

〔卷一〕おもな記事は、上州館林茂林寺守鶴略傳（守鶴は貉の化僧）、天狗騰雲より稻田喜藏聞書、秀吉・北政所・小野於通の筆蹟等、田村麿・清盛・重盛・正成・信長・秀吉・清正・信玄の肖像等。〔卷二〕では、長崎唐商取締、拔荷賣買の禁制、長崎開基、長崎奉行歷代、その他長崎に係る諸件等。〔卷三〕では、諸地方民謠、寛永三年九月二條行幸記、江戸大火の記等。〔卷四〕では、歌妓分外之衣裳御咎の件、女藝者其外御咎申付候人數書、赤穗義士片岡源五右衞門・堀部安兵衞眞蹟書簡等。〔卷五〕では、唐船漂流并獻上物、野州足利郡上川崎村孝婦傳、日蓮上人佐渡より歸國の免狀、大食大酒の會、鳥鐘を掘り得し事并鐘銘、田沼主殿頭隱居并減祿の事、谷中延命院日道御仕置、太閤等能の次第、いなば小僧召捕一件、越後國地震等。〔卷六〕では、長崎の方言、阿蘭陀船入津、萬國地名考、外國金銀圖等、〔卷七〕では、最樹院御廟穴御蓋石の銘、德川家齊任太政大臣宣下次第等。〔卷八〕では、車塚神鏡、歌舞伎古番附を錄し、多く圖畫を加へてゐる。〔和田〕

壺蘆圃漫筆　隨筆　六卷　【著者】未詳。恐らくは、幕府に仕へた士人であらう。この書と姉妹關係の「壺蘆圃雜記」（別項）に、屋代弘賢の書入した本のある所から見ると、その友人などかとも察せられる。【諸本】昭和三年、續隨筆文學選集卷二・三に所收

【解說】文化度から嘉永・安政度にかけて見聞した事實が多いのによつて、ほぼ撰述の時代を推定し得る。但し全篇を通じて永い時代に亘り、雅俗を分たず文武を別たず、教訓あり信仰あり、評論あり感想あり、見聞雜記あり諸書の抄錄あり、まゝ有職・故實や法令・制度に係る記事もあると云ふ極めて廣範圍で雜駁の隨筆である。殊に武具・家具・文房具等に就いて多數の圖畫を加へて說明してゐる。卷一は食禁差合書より羽子板に至る二十五條、卷二は帶刀考より四十八棚に至る四條、卷三は弓之記より席上諸器に至る七條、卷四は嘉定八朔玄猪の記より烟草に至る三十條、卷五は安政の年號より品物の規則に至る五十二條、卷六は廣忠公御贈位官御追號より香具賣の掟に至る十五條を收めてゐる。〔和田〕

瞽論　隨筆　一卷　寫【著者】淺野長祚【解說】上卷のみ傳はつてゐる。下卷は稿本で世に出ずに終つたのか。官務に携はる者の心得、史上人物の論評等を漫筆的に記したもので、中に天一坊の事、赤穗義士の事、荒木村重の事などを擧げて論斷してゐる。文章も整つて讀むに足る。序跋は見えぬ。別に一本があつて、兩者少許の出入がある。〔和田〕

吼噦　能狂言【別名】釣狐【格式】大習の一で「花子」と同格である。眞の形といふ小書附になると最も重く、一子相傳である。「狂言不審紙」（別項）に、「此狂言極意習事也」とあり、又「五臟六腑の習其外十八ケ條の口傳祕密有。猶委舗は執心して相傳の時を得て尋知べし」とある。【題材】この作は何か基くところがあつたらしい。それは「堺鑑」の釣狐寺の條に、次のやうに記してゐるので推察せられる。

「南莊少林寺ノ塔頭永德年中ニ耕雲庵ト云アリ。其住僧伯藏主ト云リ。此僧鎭守稻荷明神ヲ信仰シテ、毎日法施不レ怠。或時感應有テ、森ノ中ニ三足ノ野狐アリ。抱給テ愛愛ス。此狐ニ有ル靈、通ニ隨化用、追ニ賊難ニ事アリ。其孫々三足ニシテ今ニ至寺內ニ住居ス。稻荷靈驗新也。世ニ云傳釣狐ノ狂言（又吼噦共イヘリ）此寺ヨリ發リ。然バ才覺ナリシ狐感ジ、老翁ニ化シテ狂言ヲ見テ、猶野狐ノ骨髓動ヲロ傳セシトナリ。誠ニ狂言綺語トハ云ナガラ、道ニ達シヌレバ、如レ是奇特モ有事ニヤ。尤家ノ大事トスル狂言也」

この作に、獵師の伯父坊主白藏主とある。藏主は禪僧の役名で、經藏を監する者。

【梗概】山のあなたに住む獵師に、殺生を思ひ止まらせようと、伯父の坊主白藏主に化けた狐、獵師を訪れる。白藏主は狐の執念深いこと、殺生石の故事などを語つて狐釣を思ひとまらせようとし、罠など見せて貫ひいろ〳〵意見する。獵師は伯父の前だけは承知の態にして、罠を仕掛けて置く。狐は、人間はあどけないものだ。伯父坊主に化けて意見をしたら、まんまと騙されたと得意になり、踊り節で勇んで歸る。途中、罠を發見し、鼠の油揚の香餌に心迷ふ。いろ〳〵の所作があつて、遂に正體に立ちかへり、とど罠に掛かつてくわい〳〵と啼く。

【構想】狐が伯父坊主に化け、甥の獵師を諫めると云ふ主要な作意は、おのづから滑稽味を伴はざるを得ない。それは、見たいと所望した罠や餌を眼前に見て、心中大に氣味惡がりつゝ、表面はそれを捨てよと强く出る邊と、狐が諫を聽き入れたと合點して得意になる點とに存する。この作は趣向としては割合に單純であるが、結末の狐の所作の所が藝道上重大で、舞臺上の效果もその出來榮如何に因つて左右せられる。なほ狐の事を狂言に仕組んだものに、「狐家」や「佐渡狐」がある。【影響】釣狐の趣向は山本土佐掾の「信田妻」（別項）以來、淨瑠璃・歌舞伎にも攝取せられ、屢々演じられた。江戸長唄では「釣狐春亂菊」（明和七年正月、中村座）が最も有名で、「工藤の釣狐」と稱せられ、工藤が五郎・十郎を相手に釣狐の對面の趣向を以てしたもので、釣狐物に甚大な影響を與へた。又常磐津の方には「寄罠娼釣髭」（文政八年正月、市村座）がある。通稱「朝比奈の釣狐」、二代櫻田治助作詞、岩澤仲助（五代式佐）作曲である。更に淸元には、「釣狐罠環菊」（弘化五年正月、河原崎座）がある。やはり曾我物に取込んでゐる。併し、狂言そのまゝの筋の物も起つて來た。明治十五年三月春木座で上場した長唄の「今樣釣狐」は、默阿彌の書き下したもので、直接狂言の系統を引いて居り、新歌舞伎十八番の一である。〔野村〕

權記　日記　八册【著者】權大納言藤原行成【名稱】權大納言の日記の意。【別名】權之記・行成卿記【諸本】祕閣本十四册（正曆二年より長德元年までと、長保三年の春夏とを缺いてゐる。別本二册は長德三年五月十九日より十二月十三日までを記してある）。「歷世記錄」所據の本十七册（祕閣本に據り舊白河文庫本及び別本を併せ、凡そ十八年の記事を載せてあると云ふ）。「群書一覽」に十五卷本、長保三年正月より記し始めるとあるが、星野恆博士は、これを論じて、「年紀既に完からず、本文見る所なし、論ずるに足らず」と言つてゐる。【內容】舊白河文庫本は、正曆二年より長德元年まで、長保二年より同四年まで、寛弘元年より同八年まで、都合十七年の記事を載せてある。著者久しく要職に居つて事務に練達してゐたために、記事詳細で頗る參照するに足る。〔石村〕

【參考】歷世記錄考　星野恆「史學雜誌第一集」

根元草摺引　「草摺引」を見よ。

金光教　「神道各派」を見よ。

金剛流　能樂【解說】能樂シテ方の流名。猿樂四座（別項）の一。もと、坂戸氏を稱した。「世子六十以後申樂談儀」には、「金剛は松、竹とて二人鎌倉より上りし者なり、名字なし」といつてゐるが、この流の系譜には、次の如くに傳へてゐる。

兎皇子（繼體帝第二十皇子）―安野王（大和國城下郡坂戸村に住む、故に坂戸といふ）……根麿（天武帝の時眞人姓を賜ふ）……氏明（孫太郎。義滿の時坂戸に貫地を賜はり名人の聞えが高かつた）……を公刊するに及び名聲頓に震ひ、文章を言ふ者まづ指を艮齋に屈するに至つた。四十六歲二本松侯丹羽氏の儒員となり、二本松に下つて藩學の教授となり、嘉永三年（六十歲）昌平黌教授に任じ、師一齋と俱に育英の任に當つた。大正四年十一月從四位を贈られた。

【著作】艮齋文略（別項）○同續編附詩略四卷○艮齋閒話（別項）○艮齋詩稿一卷○列婦傳一卷○史論二卷○見山樓集二十卷等。【批評】その文は詞藻が富贍で落想の奇を以て勝る。重野成齋は、「當時の文章は佐藤一齋を勸進元とし、東の安積艮齋、西の齋藤拙堂を兩大關と銅爲レ兵以下五十七則、中卷に陸放翁爲ニ後賢所ニ愛慕一以下五十七則、下卷に續句成編以下六十八則を收めてある。經史詩文に出てゐる言語の考說及び詩評等が多い。〔和田〕

艮齋文略　詩文集　正續各三卷附詩略一卷七册【著者】安積信（艮齋）【刊行】文略は天保二年、續編と詩略とは嘉永六年【解說】文略上中二卷には序・記・論・辨等、各體の文四十五篇、下卷には「東省日錄」「南遊雜記」が收めてある。日錄は、天保元年の歸省日記で、雜記は同二年正月の房總遊記である。續編には各體の文六十九篇が收めてある。そみ、その手傳ひに出てゐる。助十も助八もその中に交つてゐるが、權三は、おかんを代理に出して自分は樂寢をしてゐる。權三は密かに怯目を感じはしたものの、助十から罵られて今更手傳ふのは癪だと强情を張る。結句家主の六郎兵衞に見つかつて油を取られ、急に働き出す。その騷ぎの中へ、以前その長屋にゐた小間物屋彥兵衞の伜彥三郎が六郎兵衞を尋ねて來る。といふのは、その前年、彥兵衞は馬喰町の米屋といふ旅籠屋の隱居所に忍び込んで、そこの女隱居を殺し金を百兩とつたといふ嫌疑で召捕られ、大岡越前守の手で嚴

根元草摺引（こんげんくさずりひき）「草摺引」を見よ。

金光教（こんくうきょう）「神道各派」を見よ。

金剛流（こんがうりう）　能樂　【解説】能樂シテ方の流名。猿樂四座（別項）の一。もと、坂戸氏を稱した。「世子六十以後申樂談儀」には、「金剛は松、竹とて二人鎌倉より上りし者なり、名字なし」といつてゐるが、この流の系譜には、次の如くに傳へてゐる。

菟皇子（繼體帝第二十皇子）―安野王（大和國城下郡坂戸村に住む、故に坂戸といふ）……根麿（天武帝の時眞人姓を賜ふ）……氏明（孫太郎。義滿の時坂戸に貫地を賜はり名人の聞えが高かつた）……正明（善岳。義政の時金剛姓を名乘る。もと金剛山の兒であつたに因る）―正清（四郎）―氏正（兵衞尉。鼻金剛と呼ばれた。秀吉から八百石の朱印を賜はる）―久次（孫太郎）―康季（又兵衞）―勝吉（右京。家康から三百石拜領）―勝久（三郎）―頼勝（右京）―吉勝（右京）―緣勝（右近）―長頼（又兵衞）―久明（右京）―久則（彌市郎）―氏福（三郎）―氏但（右近）―氏榮（三郎）―氏成（右近）―氏善（兵衞）―右京（現存）。

金剛の分家格に、金剛禎之助（直勝、もと佐々木氏、一度野村姓を冒した）、謹之助（直喜）、巖（現存）があり、京都で名を成した。　〔佐成〕

艮齋（どんさい）　漢文章家　【姓名】安積信（あさか）。字は思順。通稱祐助【生歿】寛政三年三月二日奥州郡山に生れ、萬延元年（一八五一）十一月二十一日昌平黌の官舍にて歿す。享年七十。【閲歴】初め二本松藩儒今泉德輔・八木敬藏に從學し、十六歳、近村の里正今泉氏の婿となつたが、その妻に嫌はれて大に發憤し、翌年單身出奔して江戸に入り、佐藤一齋の學僕となり、二十一歳より林述齋の門に遊び業益々進んだ。二十四歳、神田駿河臺に塾を開き、見山樓と號した。四十一歳、「艮齋文略」（別項）を公刊するに及び名聲頓に震ひ、文章を言ふ者まづ指を艮齋に屈するに至つた。四十六歳二本松侯丹羽氏の儒員となり、二本松に下つて藩學の教授となり、嘉永三年（六十歳）昌平黌教授に任じ、師一齋と俱に育英の任に當つた。大正四年十一月從四位を贈られた。【著作】艮齋文略（別項）○同續編附詩略四卷○艮齋閒話（別項）○艮齋詩稿一卷○列婦傳一卷○史論二卷○見山樓集二十卷等。【批評】その文は詞藻が富贍で落想の奇を以て勝る。重野成齋は、「當時の文章は佐藤一齋を勸進元とし、東の安積艮齋、西の齋藤拙堂を兩大關とすべし」と評した。　〔佐久〕

艮齋閒話（どんさいかんわ）　隨筆　正編二卷・續編二卷　【著者】安積信（艮齋）【刊行】嘉永四年【解説】著者或る時、上總國勝浦の海濱で漁人と農夫と談論するを聞いて、天地の人間を愛養する恩の深厚なるに感じた事から筆を起し、聖人天地に代つて人民を敎化する事、驕奢の戒、治生の急務、足るを知る事、自棄自暴の戒、立志の要、以下數十項に亙り、和漢の實例を引き、以て修養の資としてゐる。文章甚だ整ひ、而も平明懇欵を悉してある。天保十一年近藤忠謹の序があつて、その中に「雖係一時涉筆、聖賢之旨、治亂之迹、錯陳臚列、而於反躬愼獨之功、尤致意焉、議論平正切實、未嘗有閒言語、王侯閱之、可以知齊家治國之道、士庶誦之、可以知守身勤職之方、」と評したのは誤言では無い。　〔和田〕

坤齋日抄（こんさいにつせう）　隨筆　三卷　【著者】西島長孫（蘭溪、又坤齋と號す。江戸の人。【刊行】未詳。但し文政十一年林鵞及び同年安積信の序がある。【解説】漢詩文を以て名ある著者が、漢文で書いた隨筆で、上卷に古者以銅爲兵以下五十七則、中卷に陸放翁爲二後賢所二愛慕一以下五十七則、下卷に續句成編以下六十八則を收めてある。經史詩文に出てゐる言語の考説及び詩評等が多い。　〔和田〕

艮齋文略（どんさいぶんりやく）　詩文集　正續各三卷附詩略一卷七册　【著者】安積信（艮齋）【刊行】文略は天保二年、續編と詩略とは嘉永六年【解説】文略上中二卷には序・記・論・辨等、各體の文四十五篇、下卷には「東省日錄」「南遊雜記」が收めてある。日錄は、天保元年の歸省日記で、雜記は同二年正月の房總遊記である。續編には各體の文六十九篇が收めてある。その文は艶麗富贍で、自ら一家の機軸を出した。四十一歳の時、文略三卷を印行するに及び、大に名を成すに至つた。　〔佐久〕

權三と助十（ごんざとすけじふ）　脚本　二幕二場　【作者】岡本綺堂【刊行】綺堂戲曲集十一卷・明治大正文學全集（戲曲篇第二）所收。【上演】大正十五年七月、歌舞伎座初演。昭和四年九月歌舞伎座に再演、翌年七月新歌舞伎座に三演された。初演の役割を左に揭げる。

〔役割〕權三（市村羽左衞門）、女房おかん（市川松蔦）、助十（市川左團次）、助八（市川猿之助）、家主六郎兵衞（中村吉右衞門）、與助（市川左升）、雲哲（市川荒次郎）、願哲（中村吉之丞）、左官勘太郎（中村鶴藏）、小間物屋彦兵衞（市川紅若）、伴彦三郎（市川壽美藏）、石子伴作（市川八百藏）等。

【梗概】〔一幕〕神田橋本町の裏長屋の一部に駕籠屋の權三と助十とが隣り合つて住んでゐる。權三は河岸の女郎上りの女房おかんと、助十は弟助八と、氣の短い彼等は毎日のやうに一方は夫婦喧嘩を、一方は兄弟喧嘩を繰返してゐる。七月上旬の晴れた午後、今日は井戸替といふので、長屋の者はみんな稼業を休み、その手傳ひに出てゐる。助十も助八もその中に交つてゐるが、權三は、おかんを代理に出して自分は樂寢をしてゐる。權三は密かに怯目を感じはしたものの、助十から罵られて今更手傳ふのは癪だと强情を張る。結句家主の六郎兵衞に見つかつて油を取られ、急に働き出す。その騷ぎの中へ、以前その長屋にゐた小間物屋彦兵衞の伴彦三郎が六郎兵衞を尋ねて來る。といふのは、その前年、彦兵衞は馬喰町の米屋といふ旅籠屋の隱居所に忍び込んで、そこの女隱居を殺し金を百兩とつたといふ嫌疑で召捕られ、大岡越前守の手で嚴しい調べを受けてゐるうち、牢死して果てたのである。彦三郎にすると何うしてもそれが信じられなかつた。死んだものなら仕方がないが、せめてその惡名だけでも雪ぎたい、さういふ望みをもつてはるゞ大阪から出て來たものの、江戸は初めてで、右を見ても左を見ても誰一人頼みになるものはない。力とするのはあなただけと、六郎兵衞に手を合せる。六郎兵衞は彦三郎の心根を思ひやると、そのまゝ突つ放すことも出來ず、思案に盡きてしばらく返辭が出來なかつた。始終の樣子を小蔭で立聞きつゝ、ひそ〳〵囁き合つてゐた權三と助十が二人の前に飛び出して、下手人は豐島町に住む左官の勘太郎に違ひないといつて、その理由を詳しく説明した。六郎兵衞は一策を案じ、長屋のものに手傳はせて、三人を縛る。〔二幕〕前の場。權三と助十とが結局町内預けになつて一ト月ほどしたとき、相變らずの夫婦喧嘩、相變らずの兄弟喧嘩をはじめた最中で助八の口から、二人の證言の甲斐もなく、勘太郎は昨日の夕方無事に釋放されたといふことが話された。權三も助十もび

つくりする。その時、當の勘太郎が面當に角樽と鯣を下げて挨拶に來て、厭味のいひたい方題を言つたので、二人もつひに堪忍袋の緒を切つて摑み合ひを始め、ともゞ〳〵助八も手傳つて勘太郎を袋叩きにする。そこへ大岡越前守配下の石子伴作が來て、勘太郎の罪狀、いよ〳〵明白になつたからとそのまゝ又引立てて行く。權三も助十も呆氣に取られてその後を見送つてゐると、六郎兵衞と彥三郎とが奉行所から歸つて來て本望を達したといふ。わけを聞くと、まだ證據が薄弱なのでわざとまづ勘太郎を釋放し、隱し目附をつけてその後の擧動を探つてゐると、さうと知らない勘太郎は、豫て天井裏に隱して置いた血だらけの金財布を密かに出して來て燒き捨てた。それによつて動きのとれない證據を押へられ、再び彼は御用になつたのだつた。彥兵衞の牢死も實は奉行所の策略で、彥兵衞は生きて歸つて來た。長屋のものは一同その姿を見るなり、驚喜してそのまはりを取卷いた。

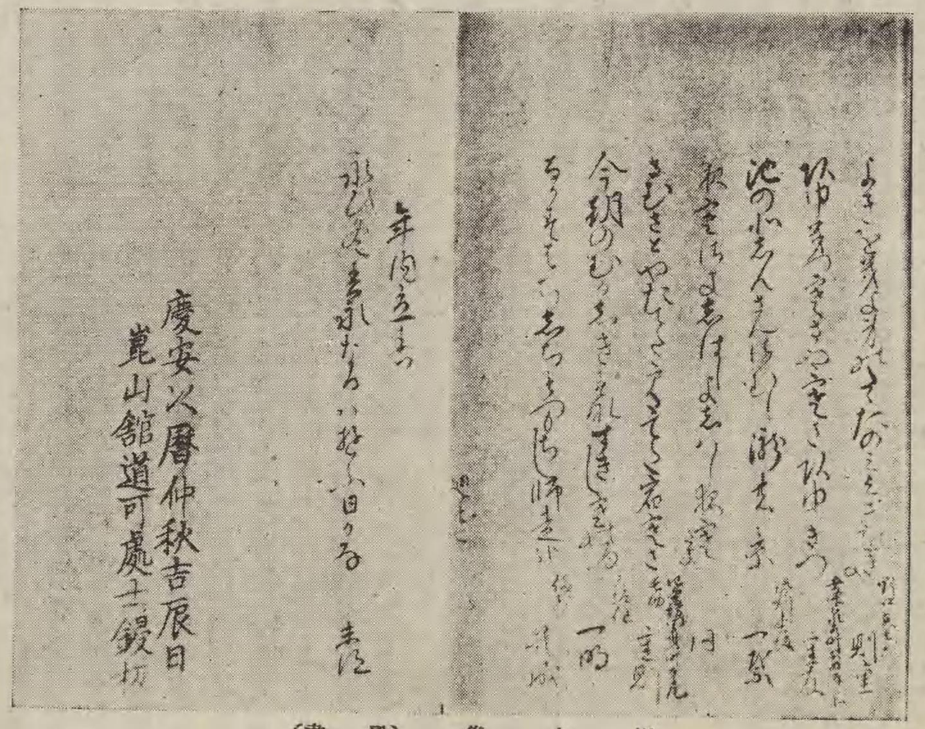
【價値】この作の面白さは、無知で善良な江戸つ子の寄り集りを描いた所にある。卽ち氣の短い癖に度胸のない、横着な癖に正直な、怒りつぽい癖に涙もろい權三・助十・助八・おかん達を描く事によつて、今更殘つてゐる江戸及び江戸人氣質を闡明しようとして見事に成功した。而もそれを彩るにこの作者獨特の季題的詩情を以てした。かうした淡々とした傾向をこの作者が執るやうになつたのは蓋し大正十四五年以後の事で、「勘平の死」「お化師匠」「湯屋の二階」「風鈴蕎麥屋」「おさだの仇討」等に本作との類似を見ることが出來る。こゝに至つて、この作者の世話物は一進轉をしたといつていゝ。

【久保田】

崑山集（こんざんしふ）

俳句集　十三卷・附錄一卷

【編者】鷄冠井良德（後の令德）【名義】講習堂主人昌易、貞德の嫡孫）の漢文叙に「繙、帙則怡然歡、心者、與、夫崑山連璧玩弄而娛、目者、何以異哉矣。因名、之曰、崑山集」とあるので明かである。【刊行】慶安四年冬【解說】第十三卷末の貞德の跋によると、良德が撰者たる望みがあつたので、貞德がこれを許し、その點を經た句を集めたものである。十三卷を、春部・夏部・秋部・冬部の順に分ち、季題別にして俳句を集め、附錄は廻文部で、これも春夏秋冬に分つて廻文の俳句を集めてある。集められてゐる俳句は、大部分貞門の作であるが、各季題の句の初めの方に作者名なしの句があつて、これは良德の跋文に、「抑のする所の犬筑波・竹馬狂吟集其外古き句の作者、あまねく人のしれる事なればしるさず」とあるので、「犬筑波」（別項）や「竹馬狂吟集」中の俳句の採り來られてゐるもののあることが知られ、「犬筑波」中の俳句と比べ見ると、正しく「犬筑波」中の俳句が見出される。また「犬子集」（あの）「發句帳」（各別項）その他と比べ見て、これ等の集と本集と共通する句があり、それ等が本集の作者名なしの部にも、作者名のある部にも見出せるので、跋文に「其外古き句の」と云つてゐる點にも一致する。本集の句は、大部分貞德の晩年の頃の貞門の作を集めたものであるが、右の如く貞門中でも古い句の外に、貞門以前の古俳句をも採つてゐるので、この點から云ふと、「鷹筑波」や「玉海集」（各別項）とはやゝ違つて、「犬子集」や「發句帳」に似た性質のものになつてゐる。句數では貞德の句が頗る多く採られてゐるが、それは前述の貞德の跋に、「あまり句數すくなきとて、丸が昔年稽古に仕置たる發句どもを書」とあるので、その事情が判明する。【價値】本集は「玉海集」と共に貞德が晩年に企圖した撰集の一で、本集が前集、「玉海集」が後集をなすものであることは、「玉海集」の序跋によつて知られる。兩集撰者を異にする關係にもよつて、作者の顏觸にも多少異なる所があり、材料や體裁の上にも異なる所があつて、兩集を合せ見て貞德の晩年頃に於ける貞門の態度及び狀況の全鳥瞰圖が形づくられる。集中作者名の脇に住所姓名の記されてゐることは兩集共に變りはないが、他の同列の集に見られない本集の特色の一は、附錄一卷が全部廻文の俳句であることである（「毛吹草」に、廻文の俳句を集めてゐるが、一卷は與へてゐない。併し本集はこれに暗示されたものかも知れない）。廻文の如きは、今日から見れば甚だしい遊戲的なものに過ぎないが、貞門俳諧の性質や技倆を知る上には恰好の資料と云へる。また宗鑑頃の古俳句を「犬筑波」や「竹馬狂吟集」から採つた事も特色の一で、「犬筑波」との比較によつて、良德等の據つた「犬筑波」を知り得ると共に、從來判然しなかつた「竹馬狂吟集」が全部或は一部俳句を載せるものであることを知り得ることは、俳諧史上重要な資料を提供するものである。特に「玉海集」に、「よしやふれ麥はあしくと花の雨」（前書略）の句に、「是は細河幽齋法印玄旨公の御作なり。竹馬狂吟抄にあり」と後註せると合せ考へて、從來これを宗鑑の集（狂歌集）と傳へ來つてゐる時代よりも、やゝ降らないかの疑問を新たに起させる。「獏物語」「滑稽太平記」「廣益書籍目錄大全」等によると、本集の批言書に南都の追名の「馬鹿集」、是誰の「播磨姫路」のあつた事が知られるが、兩書とも傳存しないやうである。【岩田】



崑山集（奥書）

金色夜叉（こんじきやしや）

小說　【作者】尾崎紅葉【發表】明治三十年一月より讀賣新聞に連載。斷續六年に亙つたが遂に完結を見なかつた。【刊行】明治三十一年七月より同三十六年六月までに、前・中・後・續・新續・續々の六卷を刊行、春陽堂。紅葉全集第六卷所收。

【梗概】高等中學生間貫一と、寄寓先の鳴澤の娘宮とは許婚の仲で、相愛の秀才と佳人との未來の多幸なるべきを、人々に羨望されてゐた。ところが銀行頭取の息子富山唯繼に骨牌會で見染められた宮は、わが美貌に驕り富貴に憧れて、一度求婚されるやこれに應じて許に、ふと貫一と相見て以來は、彼の恨みを解くためにはわが富貴の榮遇をさへ捨てようと思ひ惱むのだつた。そのうちに、貫一は鰐淵が業火に死んだのでその事務一切を繼承し、冷血漢として生くべき初志を飽くまでも續け、同業の赤樫滿枝が色と利の誘ひを以て頻りに口說き立てるも、一顧だにしなかつた。又、宮が悔悟のまごころを綿々と書き送つて來る手紙をも手に取らうともしなかつた。併し彼の親友である荒尾讓介の口から宮の憫むべき心情を傳へられてからは、貫一の冷く堅く閉ざされた胸にも、かすかな動搖が起つて、或るが、時代的な要求に合致したにも依るだらう。しかし五年にあまる鏤腸の苦心にもかゝはらず、彼が自家の米の飯と呼んだ傑作「多情多恨」（別項）に一籌を輸する出來榮えと云はなければならない。なほこの作が雅俗調に歐文脈さへ交へて、しかも渾然たる一種の文體を創めたことは、特筆に値するものと思ふ。

【附記】この作が未完のまゝで、作者は歿したので、小栗風葉は、師の趣向に基き「終編、金色夜叉」を草したが、その文品、師の俤ありと稱された。

【以上水木】

【上演】「金色夜叉」は、新派俳優によつて屢々芝若・大谷馬十等の一座で上演した。この脚色が從前のものより優れた點は、原作の挿話を一切除却して、貫一と宮との性格の變化を示すに必要な場面だけを、統一連續させたのと、原作者の腹案に基いて、貫一が、宮の生ける屍を抱くといふ結末をつけたのとにあつた。この時の役割のうち、伊井の貫一、村田の荒尾、中村の蒲田、井上の遊佐等が好評だつた。その四年後、同じこの一座によつて、新富座に演じられ、その後も屢々上演された。かうしてこの作は、「己が罪」「不如歸」（各別項）等に並ぶ新派劇の古典の一つとなり、更に屢々映

金色夜叉（こんじき　やしや）　小説　【作者】尾崎紅葉【發表】明治三十年一月より讀賣新聞に連載。斷續六年に亙つたが遂に完結を見なかつた。【刊行】明治三十一年七月より同三十六年六月までに、前・中・後・續・新續・續々の六卷を刊行、春陽堂。紅葉全集第六卷所收。

【梗概】高等中學生間貫一と、寄寓先の鴫澤の娘宮とは許婚の仲で、相愛の秀才と佳人との未來の多幸なるべきを、人々に羨望されてゐた。ところが銀行頭取の息子富山唯繼に骨牌會で見染められた宮は、わが美貌に驕り富貴に憬れて、一度求婚されるやこれに應じて許婚を捨てた。悲憤した貫一は熱海の海岸で、「一生を通して、一月十七日は僕の涙で必ず月を曇らして見せる。月が曇つたらば、貫一は何處かでお前を恨んで今夜のやうに泣いてゐると思つてくれ」といふ痛切な言葉を投げて宮と別れ、學業を廢して、行方を晦ましてしまつた。彼は憤怨と絶望とに復讐を思ひ、死を思つた。人心の賴るべからざる事と金に見易へられた事の無念さに胸が湧き返る苦しみをば、われとわが感情を荒ませる事に依つて紛らさうとした。かくて彼は强慾非道な高利貸鰐淵の手代となつて、殘酷な商賣に從つて辛うじてその苦を忘れ、かねて自ら金を積んでやがては恨みを霽さうとするのだつた。併し己を枉げて忍び得ぬ事を敢てする痛苦と、又あまりにも大きい失戀の傷手とは遂に彼を救ふことなく、日ごとに心身を苛んで行くばかりだつた。一方、富山に嫁した宮は、別れて始めて貫一に對する眞實の愛が心奥に潛んでゐるのを自ら覺つた。黃金に眩惑されてこれに就いたものの、充たされぬ胸中の飢はいよいよ烈しくなるばかりだつたが、殊に四年後に、ふと貫一と相見て以來は、彼の恨みを解くためにはわが富貴の境遇をさへ捨てようと思ひ惱むのだつた。そのうちに、貫一は鰐淵が業火に死んだのでその事務一切を繼承し、冷血漢として生くべき初志を飽くまでも續け、同業の赤樫滿枝が色と利の誘ひを以て頻りに口說き立てるも、一顧だにしなかつた。又、宮が悔悟のまごころを綿々と書き送つて來る手紙をも手に取らうともしなかつた。併し彼の親友である荒尾讓介の口から宮の憫むべき心情を傳へられてからは、貫一の冷く堅く閉ざされた胸にも、かすかな動搖が起つて、或る曉の惡夢の裡で悔悟の自害をした宮に、すでに赦すといふ言葉を與へ、その脣をさへ吮つたのだつた。貫一の心は亂れ初めて、益々苦しくなつた時、丁度用事で鹽原へ出向いたが、溫泉宿の隣室で、計らずも男女が心中しようとするのを見、その美しき相愛の情に打たれて、二人を窮境から救ひわが家に引き取つてやる。しかも女は富山唯繼が漁色の餌食たらんとしたものであつたので、貫一は宮が身邊の不幸な消息を知ることが出來た。そしてその宮は前にも增して繁々と思ひのたけを訴へた手紙を貫一の許に寄せて來るのだつた。

【批評】明治大正を通じて、その發表當時この作ほど天下の視聽を集め讀者を心醉せしめた小說はないだらう。一代の文豪が晩年の精力を傾倒した大作でもあり、言々句々彫琢の妙を盡した名文の故でもあるが、第一に作者が新時代の讀者に親しみある社會に取材し、且つ着想の陳套ならざると筋の劇的變化に富めるがためである。そして單なる情痴の世界のみに沈潛せずに、才筆を驅つて當時の世相を描破し、一個の社會小說を成さんとしたことが、時代的な要求に合致したにも依るだらう。しかし五年にあまる鏤腸の苦心にもかゝはらず、彼が自家の米の飯と呼んだ傑作「多情多恨」（別項）に一籌を輸する出來榮えと云はなければならない。なほこの作が雅俗調に歐文脈さへ交へて、しかも渾然たる一種の文體を創めたことは、特筆に値するものと思ふ。

【附記】この作が未完のまゝで、作者は歿したので、小栗風葉は、師の趣向に基き「終編、金色夜叉」を草したが、その文品、師の俤ありと稱された。　〔以上水木〕

【上演】「金色夜叉」は、新派俳優によつて屢々脚色上演された。その第一回は、明治三十年十二月、東京市村座。脚色者は藤澤淺二郎、俳優は川上音二郎一派。この時は、まだ原作の後編までしか出てゐなかつたので、無理に仕組まれたものであつた。次いで、同三十五年二月、宮戸座に花房柳外脚色で、中野信近・千歲米坡等の一座が上演した。これ亦世評を動かすまでには至らなかつた。第三回は、同三十六年六月、東京座で原作者立案、岩崎舜花執筆のものを、高田實・藤澤淺二郎・佐藤歲三・中野信近・山田九州男・守住月華等の一座で上演した。これは、實は紅葉の立案ばかりではなくて、高田が嘗て大阪で演じた餘計な筋をそれに搗き交ぜたものだつた。だから、紅葉は初日が開くに及んで、役者のために狂言の筋を壞して憚らないのは、苟も正劇を標榜するものにあるまじきことだと一方ならず憤慨したが、さういふ紅葉が、高田の荒尾讓介には滿點の出來だとまで稱讚した。第四回はその二年後、同三十八年六月、眞砂座に、小栗風葉の脚色したものを、伊井蓉峰・村田正雄・中村秋孝・井上正夫・河村昶・福島淸・中村芝若・大谷馬十等の一座で上演した。この脚色が從前のものより優れた點は、原作の挿話を一切除却して、貫一と宮との性格の變化を示すに必要な場面だけを、統一連續させたのと、原作者の腹案に基いて、貫一が、宮の生ける屍を抱くといふ結末をつけたのとにあつた。この時の役割のうち、伊井の貫一、村田の荒尾、中村の蒲田、井上の遊佐等が好評だつた。その四年後、同じこの一座によつて、新富座に演じられ、その後も屢々上演された。かうしてこの作は、「己が罪」「不如歸」（各別項）等に並ぶ新派劇の古典の一つとなり、更に屢々映畫化された。　〔以上久保田〕

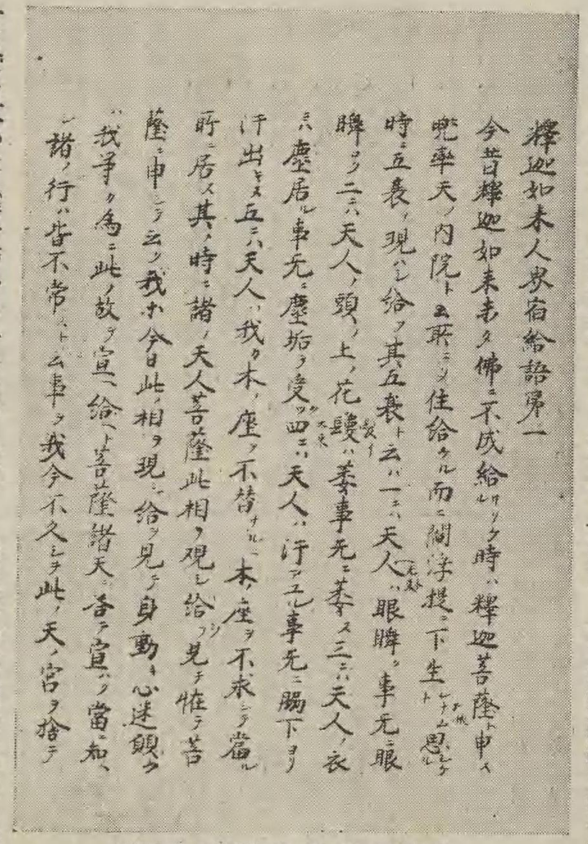
紺紙金泥（こんぢし）「寫經」を見よ。

今昔つれづれ草（こんじやくつれづれぐさ）　隨筆　五卷　寫【著者】橘才（傳未詳）【成立】未詳。但し小宮山昌玄（南梁）の識語の終りに明治戊子（二十一年）八月とある。【解說】江戸時代に於ける江戸內外の世事を見聞のまゝに書き集めたもので、俗事談もあり、和歌・俳諧の風流談もあり、奇聞・怪談もある。本鄕四丁目の裏屋に住んでゐた俗稱掃溜の親仁と云ふ賤しい老夫が狂歌に巧であつた事、肥後の國天草鄕の人小玉八郎兵衞代々長壽の事、吉原に新內節を禁ずる起原など奇聞といふべきであらう。惜しいかな、傳寫に誤脫が多くて意趣の徹せぬ所がある。序跋は無い。　〔和田〕

今昔物語（こんじやくものがたり）　說話集　三十一卷【著者】古來作者を源隆國と傳へてゐる。「本朝書籍目錄」假名の部に、「宇治拾遺物語二十卷」と記して、源隆國作とある。これは、今の「今昔物語」を指したのであらう。隆國は權大納言俊賢の第二子で、長元中參議に任ぜられ、次いで權中納言となり正二位に叙せられた。

後、冷泉天皇の朝、關白頼通の女が皇后に立たれた時に、皇后宮大夫の重職を拜した。治暦三年には權大納言となつたが、承暦元年六月十九日病の故に出家し、七月九日七十四歳で薨じた（公卿補任・大日本史）。彼が機智に富んでゐたといふ逸事が「古事談」に見えてゐる。併し宇治の別莊で往來の者の話を聞書したといふ傳へは勿論信ずべき限りでないが、これに就いて佐藤誠實は、藤原忠文が宇治の別業に請暇避暑した話（江談抄第二）と混じたものであらうと言つてゐる。また坂井衡平氏の如きは、隆國作の說は信憑するに足りないと言つてゐる。又かゝる浩瀚な書が一人の或る一定の時期の作かどうか、後人の增修の跡はないか、といふやうな問題もあるが、本書が佛學の素養があり、博く漢籍・國典にも通じて居り、しかも世故に長けた學究的な人の手に成つたものである事だけは推察に難くない。而して著作の動機を見ても、單に諸說話を蒐集するといふだけでなく、やはり世道人心の誘掖といふことを考慮に入れて居り、その點で、彼の「日本靈異記」（別項）に於ける景戒が、諸惡莫作、諸善奉行の道念を勸めた趣旨が、こゝにも繼承されてゐる。【名稱】「今は昔云々」の冒頭語を以てした物語集であるからこの名がある。本來は「今昔物語集」と稱すべきもので、「今昔物語」は寧ろ俗稱である。【異稱】「宇治拾遺物語」「宇治大納言物語」とも稱せられてゐるが、現存の「宇治拾遺物語」（別項）、「宇治大納言物語」（三卷、續群書類從雜部所收の「世繼物語」も同系統のものである）は別物である。

【諸本】本書は、もと三十一卷あつたが、現存の本は卷八・十八・二十一の三卷を缺いてゐる。主なる古寫本には、內閣文庫本・東京高師本・帝國圖書館本等がある。なほ筆者の藏する一本は、卷一から卷十六まで（二卷缺）の缺本であるが、片假名宣命書の大本で、昌平御庫本・狩谷望之本・鈴木寬本で校合してある。古くこの物語を刊行したのは井澤長秀である。彼は古寫本を改訂纂補し、本朝部三十卷（全部を六十卷としたものに據つた）を享保五年及び同十七年に出版した。併しこれは古本の面目を傳へたものではない。古本を採用したのは丹鶴叢書（別項）本で、本朝部卷十一より卷三十一までを收めた（卷十七・十八・十九・二十・二十一缺）。但し國書刊行會本は增修されてゐる。その外國史大系本・史籍集覽本・芳賀博士纂訂本等がある。國史大系本は天竺及び震旦部を主として押小路家本により、まゝ柳原家本に據つて增訂を加へ、本朝部は主として丹鶴叢書本に基いてゐる。史籍集覽（改定版）本は丹鶴叢書本・國史大系本に缺けてゐる卷十七・十九・二十の三卷を收めてゐる點で注意される。この部分は佐藤博士所藏本及び東京帝大藏の祕本を以て校訂してある。芳賀博士纂訂本は「攷證今昔物語集」と題し、天竺・震旦部（大正二年刊）、本朝部上（同三年刊）、本朝部下（同十年刊）の三册から成る。その本文は東京帝國大學所藏古寫本（田中頼庸舊藏）を底本とし、內閣文庫本等を參考したもので、史籍集覽本などで缺を補つてゐる外に、異本今昔物語（京都鈴鹿氏藏）を以て、第二卷・第十七卷の佚文を補ひ、今昔物語卷二十別本（東京帝國大學所藏）を以て二話を補ひ、また津輕家藏の卷子本を以て、卷十九の一話を加へてある。諸本中最も整つたものである。なほその後、國文叢書本、日本文學大系本等が續出した。抄出した書には、久米邦武の「今昔宇治抄」（明治二十三年刊）、藤岡作太郎博士の「今昔物語選」（名著文庫）等がある。


釋迦如來人界宿給語第一
今昔釋迦如來未タ佛ニ不成給ザリシ時ハ釋迦菩薩ト申ス
兜率天ノ內院ト云フ所ニ住給ケル而ニ閻浮提ニ下生セムト思シテ
時ニ五衰ノ現ジ給フ其五衰ト云ハ一ニハ天人ノ眼瞬ク事无シ眼
瞬ク二ニハ天人ノ頭ノ上ノ花萎ム三ニハ天人ノ衣
ニハ塵居ル事无シ塵垢ノ穢ル四ニハ天人ノ汗ノ出事无シ腋下ヨリ
汗出キメ五ニハ天人ノ我ガ本ノ座ノ不替ザル本座ヲ不求ニシテ當ル
所ニ居ス其ノ時ニ諸ノ天人菩薩此ノ相ノ現ジ給フヲ見テ怪テ苦
薩ニ申シテ云ク我ガ今日此ノ相ノ現ジ給フヲ見テ身動キ心迷ヒ煩フ
我等ガ爲ニ此ノ故ヲ宣ヘ給ヘト菩薩諸天ニ告テ宣ハク當知シ
諸ノ行ハ皆不常ナリト云フ事ヲ我今不久シテ此ノ天ノ宮ヲ捨テ

今昔物語寫本（野村八良氏藏）

【出典】本書は規模が大きく、說話の種類も多種多樣で、その數も頗る多いが、大半はその源泉を先行の資料に仰いでゐる。勿論本朝部の或る種の物は、所謂街談巷語に基いたと想はれるが、概して原典の飜譯若しくは書き直しの部分が多きを占めてゐる。夙にこの問題に注意したのは岡本保孝であり、これを大成しようと企てられたのが芳賀矢一博士であつた。それ等の研究によつても知られる如く、先づ天竺部の五卷は各種の佛典から採つてゐる。一々の原典から直接得て來たのもあらうが、類聚的佛書から間接に得たのも多いらしい。類聚的佛書とは、唐西明寺沙門道世撰の「諸經要集」並に「法苑珠林」の如きである。而して佛陀傳の如きは、因果經や佛本行經に交涉を有し、その他の諸說話も雜寶藏經・撰集百緣經・賢愚經・雜寶藏經等に關係してゐるのであるが、本書に取られてゐる說話は、大部分「法苑珠林」のやうな間接資料に出てゐるものが多いのである。次に震旦部の四卷（一卷缺）も大體典據の求められるもので、初の二卷は特に佛教に關してゐて、「神僧傳」「三寶感應要略錄」「冥報記」などが原典である。中には「法苑珠林」所載のものもある。卷九の孝子傳說は、孝子傳や或は「搜神記」「世說」のやうな說話集から得たであらうが、これ亦「法苑珠林」所載のものもある。終りの方の因果說話は、「冥報記」が原典であらうが、やはり「法苑珠林」に基いたのもあるやうである。地獄巡りの說話も同書に見える。卷十の初の史談は、「史記」「漢書」（各別項）の類が原典である。次の文學的說話は、「白氏文集」（別項）から出たものが可なりあり、孔子や莊子の事は、「莊子」「說苑」の類に基いたものであり、終りの方の諸說話は、「列女傳」「韓非子」「淮南子」等樣々な資料を用ひてゐて、今なほ出典の明瞭でないものもある。卷十一以下本朝部では、卷十一乃至二十（卷十八缺）が佛教傳說であつて、その出典は、「日本靈異記」（別項）を第一とする。同書は殆ど大部分本書に採り込まれてゐる。又「三寶繪詞」（別項）の諸大寺の法會に關する諸條の如きは、本書卷十二の初の方と著しく交涉をもつてゐる。卷十三・十四・十六には、「日本法華驗記」を出典としたものが多く、卷十五の往生談は「日本往生極樂記」に基いたものが數々ある。その他古寺の古緣起類で、本書の資料となつてゐるものもある。卷二十二以下の國史・世俗等の部に至つては、芳賀博士の攷證にも見える如く、確かに典據の認められるのもあるが、それの際立つて著しくないものが多い。出典の不明なのは、口碑若しくは坊間の雜談から得來つたのが尠くないといふ事情に因るわけである。

【內容】天竺（印度）・震旦（支那）・本朝の三部より成る。天竺部は卷一から卷五まで、震旦部な民間說話を集めたもので、最も注意すべき部分である。一角仙人の話、樂老國の話を初め、「師子哀ニ猿子ニ割レ肉與レ鷲語ニ」「天竺狐借ニ虎威ニ被レ責發ニ菩提心ニ語」「龜爲ニ猿被レ謀語」等を含む。卷六は四十八話。總目錄に佛法とある。支那に於ける佛教傳來の事を記す。卷七は四十八話（但し、第三十三話から第四十話までは目次も本文も缺）。これも前卷に續く佛法で、支那に於ける佛法流布に關するもの多く、經文の功德談に富む。卷八は缺本。卷九は四十六話。總目錄に孝養とあり、前半は孝子傳、後半は因果應報談である。卷十は四十話。總藏菩薩の靈驗談が多きを占めてゐるが、卷末の方には、虛空藏菩薩・普賢菩薩・毘沙門天の事もあり、闕文の所には、標題に依つて吉祥天女の事のあつたのも分る。卷十八は缺卷。內容は恐らく佛法であらう（小山田與淸本は、卷二十三の十四話をこゝに收め、卷二十三を缺いてゐる）。卷十九は四十四話（第十五話・第三十四話は本文缺）。これも佛法。第十八話の邊までは、主に發心談であるが、それ以下は因果說話その他の雜談である。因果說話では、「以ニ佛物餅ニ造レ酒見レ蛇語ニ」「龜報ニ山陰中納言恩ニ語」の如きが知られてゐる。卷二十は四十致賴合戰蒙ル告語」第十三話から第二十六話まで十四話である。多くは强力者（女もある）の說話であつて、相撲に關するものが數條存する。卷二十四は五十七話（第十二話・十七話は本文缺）。總目錄に世俗とある。この卷は藝能傳說に關するものを集めてゐる。音樂談・醫術談・陰陽談・詩談・歌談等いろ〳〵で、殊に歌談は第三十一話以下を占めて、全體の半に近い。卷中、「百濟川成飛驛工挑語」「源博雅朝臣行ニ會坂盲許ニ語」等は著名である。卷二十五は十四話（第八話・十四話は本文缺）。目錄に世俗とある。この卷は將門や純友の事から始まつてゐ

本法華驗記」を出典としたものが多く、卷十五の往生談は「日本往生極樂記」に基いたものが數々ある。その他古寺の古緣起類で、本書の資料となつてゐるものもある。卷二十二以下の國史・世俗等の部に至つては、芳賀博士の攷證にも見える如く、確かに典據の認められるのもあるが、それの際立つて著しくないものが多い。出典の不明なのは、口碑若しくは坊間の雜談から得來つたのが尠くないといふ事情に因るわけである。

【內容】天竺(印度)・震旦(支那)・本朝の三部より成る。天竺部は卷一から卷五まで、震旦部は卷六から卷十まで(卷八缺)、本朝部は卷十一から卷三十一までである(卷十八・二十一缺)。天竺・震旦の兩部が五卷づつ一纏めになつてゐるのに比すると、本朝部は卷數が甚だ尠い。そして佛教・國史・世俗の如くほぼ類別され、編纂に意を用ひてゐることは知られるが、果してこの三十一卷を以て完結したものかどうかは遽かに斷じ難い。纂訂本に據つて各卷の概要を次に示す。卷一は三十八話(第二十・二十四話は本文缺)。釋迦の事歷を述べた說話を根幹としてゐる。卷二は四十一話(二十五話以下は異本によつて補はれたもの)。佛陀の父淨飯王の死、母摩耶夫人の昇天の話を初め、多くは佛陀の修行中の出來事、諸々の比丘や長者に關するものである。卷三は三十五話。多く佛弟子の話で、外に禽獸說話、因果應報の說話、佛入涅槃の說話を含んでゐる。卷四は四十一話。總目錄に佛後とあり、佛入涅槃後のことが多い。大小乘經結集・阿育王・優婆崛多(羅漢)・龍樹・無著・世親のことなどが見え、三寶歸依の利益談、觀音・藥師の靈驗談を含む。卷五は三十二話。總目錄に佛前とあり、雜多な民間說話を集めたもので、最も注意すべき部分である。一角仙人の話、棄老國の話を初め、「師子哀二猿子一割レ肉與レ鷲語」「天竺狐借二虎威一被レ責發二菩提心一語」「龜爲二猿被レ謀語」等を含む。卷六は四十八話。總目錄に佛法とある。支那に於ける佛教傳來の事を記す。卷七は四十八話(但し、第三十三話から第四十話までは目次も本文も缺)。これも前卷に續く佛法で、支那に於ける佛法流布に關するもの多く、經文の功德談に富む。卷八は缺本。卷九は四十六話。總目錄に孝養とあり、前半は孝子傳、後半は因果應報談である。卷十は四十話。總目錄に國史とあり、全く史話であるが、史實を主眼としたものではなく、傳說を集めたものである。仙術談・武勇談をも含み、さまざまな世俗談に及んでゐる。卷十一は三十八話(第十七・十九・三十三・三十四・三十七話は本文缺)。總目錄に佛法とある。「聖德太子於二此朝一始弘二佛法一語」を初めとして、我が國に於ける佛法傳播に關する說話である。卷十二は四十話。この卷も佛法とある。造塔、法會、造佛、經文の奇瑞、諸上人の逸事などに關する說話である。卷十三は四十四話。この卷も佛法。初めに苦行談があるが、主に持經者や讀經者の說話で、法華經の功德に關するものが多きを占めてゐる。卷十四は四十五話。これも佛法。前卷に引續いて、殆ど持經・寫經の功德談を以て終始してゐる。卷十五は五十四話。これも佛法。全部往生談である。卷十六は四十話(第四十話本文缺)。これも佛法。全部觀世音菩薩の靈驗談である。中に「仕二觀音一人行二龍宮一得富語」など注意すべきものである。卷十七は五十話(第四十三話以下は本文が缺けてゐたのを異本でほぼこれを補はれた)。これも佛法。概して地藏菩薩の靈驗談が多きを占めてゐるが、卷末の方には、虛空藏菩薩・普賢菩薩・毘沙門天の事もあり、闕文の所には、標題に依つて吉祥天女の事のあつたのも分る。卷十八は缺卷。內容は恐らく佛法であらう(小山田與淸本は、卷二十三の十四話をこゝに收め、卷二十三を缺いてゐる)。卷十九は四十四話(第十五話・第三十四話は本文缺)。これも佛法。第十八話の邊までは、主に發心談であるが、それ以下は因果說話その他の雜談である。因果說話では、「以二佛物餅一造レ酒見レ蛇語」「龜報二山陰中納言恩一語」の如きが知られてゐる。卷二十は四十八話(第八話・十四話は本文缺。別本で二話を補つてある)。この卷も佛法。初めの十條餘は天狗說話で野猪・野干の話がこれに次いでゐるが、更に冥途に行つて還つた話が數條あり、それから因果說話に移つて、惡業によつて惡報を得た話が頗る多く、終りには善因で善果を得たものも併せ載せてゐる。天狗說話では、「染殿后爲二天狗一被二燒亂一語」が著名である。卷二十一は缺本であるが、佛教傳說は上の十卷で纏まつてゐるらしいから、この卷からは、恐らくは國史部でもあらうか。卷二十二は八話。この卷の說話數の少いことは注意を要する。初めからこれだけで獨立した一卷とも考へられぬ。次の卷二十三に「本朝附大織冠」と標した本があつて、而も大織冠の條は、卷二十二に在るのを思ふと、二十二・二十三の兩卷は元來同一の卷であらうといふ考は無理のない推定である(佐藤誠實說)。內容は藤原氏に關する事柄で、「大織冠始賜二藤原姓一語」から淡海公・房前大臣・內麿大臣・冬嗣右大臣以下時平大臣の事までに及んでゐる。卷二十三は現存する本では、卷首が約半分缺けてゐて、「平維衡同致賴合戰蒙レ咎語」(第十三話から第二十六話まで十四話である。多くは强力者(女もある)の說話であつて、相撲に關するものが數條存する。卷二十四は五十七話(第十二話・十七話は本文缺)。總目錄に世俗とある。この卷は藝能傳說に關するものを集めてゐる。音樂談・醫術談・陰陽談・詩談・歌談等いろ〳〵で、殊に歌談は第三十一話以下を占めて、全體の半に近い。卷中、「百濟川成飛驒工挑語」「源博雅朝臣行二會坂盲許一語」等は著名である。卷二十五は十四話(第八話・十四話は本文缺)。目錄に世俗とある。この卷は將門や純友の事から始まつてゐるが、源氏の祖先に關する武勇傳說の一團が主となつてゐる。「春宮大進源賴光朝臣射レ狐語」「藤原保昌朝臣値二盜人袴垂一語」「源賴信朝臣男賴義射二殺馬盜人一語」「源賴義朝臣罰二安陪貞任等一語」等が有名である。卷二十六は二十四話(第六話は本文缺)。總目錄には宿報とある。併し宿命思想も、表面佛教的色彩が淡泊となつてゐる。卷中主要な說話は、「美作國神依二獵師謀一止二生贄一語」「加賀國諍二蛇蜈一島行人助レ蛇住レ島語」「參河國始二犬頭糸一語」の如きものである。卷二十七は四十五話。總目錄に靈鬼とある。鬼類・變化に關する說話である。俗間の迷信の察知せられる一卷で、川原院に融左大臣の靈が住んでゐる話や近江の安義橋の鬼女の話は有名なものである。卷二十八は四十四話。これは卷二十四・二十五と同樣に世俗とあるが、種々な滑稽談が載せられてゐる。賴光の郎等共が紫野に車に乘つて行つた處、搖られて醉つたといふ話を初め、池尾の禪珍と云ふ鼻の長い僧の話などがある。卷二十九は四十話(第十六話は本文缺)。總目錄に惡行とある。大部分盜人の說話である。「羅城門ゐるが、現存の「宇治拾遺物語」(別項)、「宇治大納言物語」(三卷、續群書類從雜部所收の「世繼物語」も同系統のものである)は別物である。

【諸本】本書は、もと三十一卷あつたが、現存の本は卷八・十八・二十一の三卷を缺いてゐる。主なる古寫本には、內閣文庫本・東京高師して押小路家本により、まゝ柳原家本に據つて增訂を加へ、本朝部は主として丹鶴叢書本に基いてゐる。史籍集覽(改定版)本は丹鶴叢書本・國史大系本に缺けてゐる卷十七・十九・二十の三卷を收めてゐる點で注意される。この部分は佐藤博士所藏本及び東京帝大藏の祕本の或る種の物は、所謂街談巷語に基いたと想はれるが、概して原典の飜譯若しくは書き直しの部分が多きを占めてゐる。夙にこの問題に注意したのは岡本保孝であり、これを大成しようと企てられたのが芳賀矢一博士であつた。それ等の研究によつても知られる如く、二十(卷十八缺)が佛教傳說であつて、その出典は、「日本靈異記」(別項)を第一とする。同書は殆ど大部分本書に採り込まれてゐる。又「三寶繪詞」(別項)の諸大寺の法會に關する諸條の如きは、本書卷十二の初の方と著しく交渉をもつてゐる。卷十三・十四・十六には、「日

登二上層一見二死人一盜人語」「袴垂於二關山一虚死殺レ人語」などがある。終りの數條は禽獸傳說で、虎、狗と蛇、鷲と蛇、鷹・猿・蜂、蜂と蜘蛛といふやうな話が相次いでゐる。卷三十は十四話。總目錄に雜事とある。人情傳說が多きを占めてゐる。「信濃國姨母弃山語」や、「人妻化成レ弓後成レ鳥飛失語」のやうな趣の變つた說話も交つてゐる。卷三十一は說話數三十七。これも前卷に引續いて雜事とある。橋供養の事とか、還俗談とか、夢見の話とかいろいろであるが、胡國に行つたり、度羅島に到つたり、酒泉鄕に行つたりした話や漂流譚のあるのは殊に注目すべく、その他、竹取翁の話、大和箸墓本緣、近江の亘木傳說等も交つてゐる。

【解說】本書はこれを說話學的に觀ると、印度說話・支那說話、並に日本說話の一大結集である。先づ佛陀傳を以て始まつてゐる。佛陀の一生は史實と云ふよりも、幾多傳說的要素の添加せられてゐる點に、却つて說話的の興味が存するのである。例へばその降誕の事情が摩耶夫人の夢見に因る神祕的な事、又その出胎にしても、夫人の右脇から生れ、大光明を放ち、天人が手をかけて七步を步ませると、足を擧げるところ、蓮華が生じたといふやうな奇瑞、凡そかう云ふ稀有の事を語るのは、印度說話の最も得意とする所で、これを十二部經の一として未曾有經と云つてゐるのである。さう云ふ神話的叙述は、更に輪廻轉生の思想と結合して摩訶不可思議な因緣談を構成してゐる。それが闍多迦卽ち本生經である。一體古代の印度人は無比の話好きで、種々な民間說話を持つて居つたが、この本生說話の一類は、その最も顯著なものである。本書卷五の「師子哀二猿子一割レ肉與レ鷲語」は、民間說話が佛傳中に取込まれたプロセスの明かに知られるものである。同卷の一角仙人の說話も、一角仙人は佛自身で、婬女は耶輸陀羅であるといふ本生談となつてゐるが、一角仙人の說話自體は古傳說であらう。前生は何々で、それが現身の何々だと云ふ因果談は、善因が善果を生み、惡因が惡報を來すといふ倫理的觀念を伴ふから、これを說法の用に供するのは當然で、利益談や靈驗談や報恩談が多いのである。報恩談は禽獸に關するものがある。禽獸說話も譬喩に富み、寓話に長じた話好きの古代印度人獨得の物とも云へる位で、本書卷三・五にいろ〳〵見えてゐる。彼のパンチャタントラ(Pantschatantra)卽ち五卷書や、その略鈔と云ふべきヒトパデッシャ(Hitopadesa)卽ち嘉訓として歐洲に弘通し、「イソップ」(別項)を生むに至つた所のものが、一方には佛典の漢譯によつて東遷し、遂にこの「今昔物語」に入つたのである。印度說話の支那へ、更に日本への東漸は、說話の比較研究上頗る興味がある。震旦部及び本朝部の佛敎傳說は、大體に於て印度說話とタイプを同じうしてゐる。幾多の高僧傳も往生傳も、畢竟するに佛陀傳を源泉として、摸倣・潤色の迹の著しいものであり、種々な靈驗談・功德談、乃至惡報談も所詮は類型的のものである。支那說話の史話や孝子傳は、彼の土特有の地方色が存するが、夙に漢學の行はれた我が國にはよく傳播し浸潤した。特に白樂天の作による文學的說話の如きは、最もよく消化せられて、平安朝の文學を培養する資となつた。本朝部の世俗談は、民間說話の寶藏とも稱すべく、最も興味ある部分である。卷二十四の藝能傳說、卷二十五の武勇傳說、卷二十七に見える迷信關係のもの、卷二十八の滑稽に富んだ說話、卷三十の人情傳說等、我が國民にしてこれを生み、我が國情として始めて意義があるといふ種類の說話が多い。個々の說話に十分研究の價値のあるものが尠くない。我が歷史と時代と人情とが酵母となつて釀し成された日本說話には、亦自ら世界說話に比較して、際立つた點の存することは閑却せられない。また本書の文章は佛語や漢語を交へた國文體で、各條「今ハ昔云々」と起して、「何々トナム語リ傳ヘタルトヤ」と結んでゐる。そして舊本は宣命書きの書式に據つてゐる(丹鶴叢書本や、纂訂本の如き)。恐らくこれが原本に最も近いものであらう。而して本書の著者は、佛典や漢籍の原文を國文化するに努めた形迹が著しいが、その態度は大體に於て自由譯である。寧ろ飜案に近いものと言へる。而して文體一般に就いて言へば、素樸簡潔といふ點が最も目立つてゐる。これは平安朝末に生れた一つの文體で、「榮華物語」と「平家物語」との中間にあるものの如くである。又その行文は「伊勢物語」に甚だ似てゐる。對話の部分は、語彙が殊に當時の俗談に近いものと想はれる。卷二十八の諸說話に於て特にさうである。【史的地位】本書は文學作品としての價は必ずしも高くないが、一大說話集たる點に於て、國文學史上、獨特の地步を占めるものである。「日本靈異記」「三寶繪詞」「大和物語」(各別項)を先驅とした說話文學が、本書を加へることによつて一層の光彩を添へたといへよう。さうしてこれが機緣となつて、鎌倉時代に、「宇治拾遺物語」「古今著聞集」(各別項)等大小幾多の說話集を起したのである。而して本書は、これを世界屈指の說話文學と比肩せしめても、決して遜色のないものである。なほ本書は、文學研究・傳說研究の秀れた資料たるに止まらず、風俗史料としても重んずべきものである。又芥川龍之介の如きは本書によつて多くの創作を發表してゐる。

【研究史】小山田與淸は、この書の難訓の漢字を集めて、「今昔物語訓」(舊本今昔物語讀)を編んだ。これは黑川家本を元とした國文註釋全書本で弘まつてゐる。併し同じやうな趣の物は、與淸の「松屋筆記」卷百にも、「舊本今昔物語讀法」と題して收められてゐる。兩者は元來同一であつたらう。今見る所では、前者は後者よりもその末の方に語彙が多く加はつてゐる。それから岡本保孝は安政七年に、「今昔物語出典攷」を作つた。況齋叢書(帝國圖書館藏)の第九册に收めてあるが、今は國文註釋全書に編入せられてゐる。これはこの書の各說話の原據を列擧したもので、狩谷棭齋の調べた物が基礎を成してゐる。明治以後では、保孝の「出典考」の研究を更に擴張したものに芳賀矢一博士の「攷證今昔物語集」がある。各條出來得る限りその根本資料を博搜して、原典の本文を收載してある。今日に於ては源泉研究の最も秀れたものである。殊に卷頭の序論一篇は、「今昔物語」の性質及び價値の總括的研究で、博士の學殖の最も能く窺ひ知られるものである。

【參考】今昔物語集の新研究 坂井衡平〇宇治拾遺物語考 佐藤誠實(史學雜誌一二ノ二)〇今昔物語集研究 島田退藏(日本文學講座) 〔野村〕

胡飲酒 こんじゆ 雅樂舞曲 【名義】胡人が酒を飲んで醉ふ態を表はした舞であるからこの名がある。【異稱】醉胡樂・宴飲樂・胡國樂。

【性質】林邑樂。古樂の小曲。壹越調曲に屬する。序(拍子七)二帖、破(拍子十四)七帖。舞があり一人で舞ふ。舞者は胡服を着け、袴をうがち、桴を持ち、大なる異樣の假面をかぶる。桴は恐らく酒器であらうと稱せられる。この舞は、我が國に於て非常に重んじたもので、胡部の舞なれば胡飲酒といふ。もしくは蘇郎中戲の事にや。統秋一名宴飲樂といひしは誤りなり」とあり、又「大日本史」禮樂志には、「按敎坊記、曲名有二胡醉子一、不レ詳二異同一」とあるが、然し酒に醉うて踊る態を表はした舞踊は、世界到るところに無數に存在してゐる。林邑樂を强ひて支那傳來のものと解釋するの證據はない。この舞は仁明天皇の時、大戸淸上及び大戸眞繩が改作してから、多家の家樂となり、多自然麿より八代の孫多政資は頗るこれに堪能であつたが、これを秘事として、に醉りし體を象りし舞也といふ。後、戲樂郎して歌論家としての今川了俊の精力的な努力を見る上に注意すべき書である。

【參考】群書一覽 尾崎雅嘉 〔久松〕

言水 ごんすい 俳人 【姓名】池西則好。通稱八郎兵衞 【別號】紫藤軒・風下堂・洛下童 【生歿】慶安三年に生れ、享保七年(一三八二)九月二十四日歿す。享年七十三 【墓所】京都京極誠心院中、和泉式部の塔の傍にある。【俳系】松江重頼の門人。後、談林に化せられ、又蕉風に近づく。【閱歷】南都の人。初め江戸に出て、談林風を鼓吹した。一とせ「木枯の果はありけり海の音」といふ名句を吐いて、英名天

講過話集)〇俳家奇人談 竹内玄々一(俳諧文庫・俳諧叢書)〇俳家大系圖 牛川春明(俳書大系系講過話集)〇採菊暇筆 九々庵 〔萩原〕

今撰集 こんせんしふ 歌集 一卷 【撰者】顯昭 【名稱】「八雲御抄」には「顯昭法師三卷抄號今撰集」とあり、「今撰和歌集」ともいふ。【成立】二條院の御製を單に御製と、崇德院を讃岐院と記し奉つてゐる點から、二條院御在位中の平治元年から永萬元年までの間の撰と考へられ、伊通(太政大臣)・雅通(源大納言)・實國(中納言)・雅賴(左大辨宰相)・宗家(宰相中將)などの官職名の記し方から推せば永萬元年頃となる。

【性質】林邑樂。古樂の小曲。壹越調曲に屬する。序（拍子七）二帖、破（拍子十四）七帖。舞があり一人で舞ふ。舞者は胡服を着け、袴をうがち、桴を持ち、大なる異樣の假面をかぶる。桴は恐らく酒器であらうと稱せられる。この舞は、我が國に於て非常に重んじたもので、樂家の祕事とされてゐた。大阪四天王寺の舞臺には左右の兩階あつて、左舞は左階より、右舞は右階より昇降する定めになつてゐるが、この舞に限り左階から昇つて右階から降りるのは、醉うて歸路を誤ることを表はしたものである。但し天王寺の舞臺は近來修理して、ただ一階となしてしまつたので、この古例は滅びてしまつた。答舞には「林歌」を用ひる（昔は時として「新靺鞨」を用ひた）。

胡飲酒

胡飲酒假面

【沿革】「林邑八樂」の一。天平八年林邑國の僧佛哲が我が國に傳へた。元來印度の一舞曲であつたものらしい。白石の「樂考」に、「未詳。按ずるに唐散樂部に蘇郎中戲といふあり。後周の世蘇葩といひしもの。酒に醉りし體を象りし舞也といふ。後、戲樂郎胡部の舞なれば胡飲酒といふ。もしくは蘇郎中戲の事にや。統秋一名宴飲樂といひしは誤りなり」とあり、又「大日本史」禮樂志には、「按敎坊記、曲名有二胡醉子一、不レ詳二異同一」とあるが、然し酒に醉うて踊る態を表はした舞踊は、世界到るところに無數に存在してゐる。林邑樂を强ひて支那傳來のものと解釋するの證據はない。この舞は仁明天皇の時、大戸淸上及び大戸眞繩が改作してから、多家の家樂となり、多自然麿より八代の孫多政資は頗るこれに堪能であつたが、これを祕事として、その孫資忠に傳へ、康和二年六月十五日に資忠は殺害され、その子が幼かつたので、傳が絶えんとした。堀河天皇はこれを歎かせ給うて、久我大臣源雅實の、嘗てこの舞を習ひ得たことを聞召され、勅によつてこれを資忠の子忠方に授けさせ給ひ、以て今日に傳へ得たと稱せられる。〔田邊〕

言塵集（ごんじん）　歌論書　七卷　【著者】今川了俊（ごんしゅん）【成立・刊行】第七卷奥書に「應永十三年五月日八十三歳德翁在判今川了俊」とあり、承應三年霜月刊。【諸本】承應の木版本がある。【內容】卷一、序卷として、立春・門松・若菜・若水・氷柱・腹赤・國栖・子日・卯杖・御薪・白馬等、證歌を擧げてこれを證してある。卷二から卷七に至る何れも詞の註であり、卷七には懷紙の事、よみかたの事、連歌の事等がある。【價値】本書は了俊の著書の中では最も大部なものであるが、詞の解釋が多くて彼の見解を見る上には中心とすべき書ではない。從來の歌學書から言へば、「袖中抄」（別項）等の組織を加へたものである。しかし本書は歌人として歌論家としての今川了俊の精力的な努力を見る上に注意すべき書である。〔久松〕

【參考】群書一覽　尾崎雅嘉

言水（ごんすい）　俳人　【姓名】池西則好。通稱八郎兵衞　【別號】紫藤軒・風下堂・洛下童　【生歿】慶安三年に生れ、享保七年（一三八二）九月二十四日歿す。享年七十三　【墓所】京都京極誠心院中、和泉式部の塔の傍にある。【俳系】松江重頼の門人。後、談林に化せられ、又蕉風に近づく。【閱歷】南都の人。初め江戸に出て、談林風を鼓吹した。一とせ「木枯の果はありけり海の音」といふ名吟を吐いて、英名天下に高く、木枯の言水と呼ばれるに至つた。後、京に上り、新町通六角下ル町に住し、九日・二十三日を月並とし、俳諧の點者を業とした。芭蕉の時代に新風を趁うて進んだ作家中、注目すべき一人である。【著作】江戸新道○江戸辨慶○江戸蛇之鮓○東日記（各別項）○後樣麥（天和二年刊）○京日記（別項）○前後園一册（元祿二年刊）○都（みやこ）曲集二册（同三年刊）○初心もと柏一册（享保二年刊）（言水の句集。日本俳書大系の元祿名家句選所收）○京拾遺。

言水筆蹟

【參考】京羽二重　堀江林鴻（俳書大系系譜邇話集）○花見車　高島轍士（俳書大系俳文學大系）○海音集芳澤方設○俳諧家譜　早川丈石（俳書大系系譜邇話集）○俳家奇人談　竹內玄々一（俳諧文庫・俳諧叢書）○俳家大系圖　牛川春明（俳書大系系譜邇話集）○採菊暇筆　九々庵　〔萩原〕

今撰集（こんせんしゅう）　歌集　一卷　【撰者】顯昭　【名稱】「八雲御抄」には「顯昭法師三卷抄號今撰集」とあり、「今撰和歌集」ともいふ。【成立】二條院の御製を單に御製と、崇德院を讃岐院と記し奉つてゐる點から、二條院御在位中の平治元年から永萬元年までの間の撰と考へられ、伊通（太政大臣）・雅通（源大納言）・實國（中納言）・雅頼（左大辨宰相）・宗家（宰相中將）などの官職名の記し方から推せば永萬元年頃となる。さうすると、淸輔撰の「續詞花集」（別項）と殆ど同時代の成立となり、兩集の間に如何なる關係があるかを考へる必要がある。【諸本】群書類從卷一五八所收【內容】「八雲御抄」には三卷抄とあり、「和歌現在書目錄」にも上中下とあるが、類從本は一卷である。歌の數は二百十三首、作者の數は凡そ九十四人、內、僧二十一人、女二十六人である。歌の多い作者は、崇德院・覺性法親王・俊成（各十首）にして撰者は八首、淸輔は七首で、讀人不知は一首もない。作者九十四人の內、凡そ六十人は「續詞花集」の作者と一致し、それ等の作者の歌凡そ三十九首は、同じく「續詞花集」と一致する。又「千載集」は凡そ十一首を本集から採つてゐる。

【批評】顯昭は何の目的で本集を撰したか、或は淸輔が「續詞花集」を撰するに際して助勢の

【參考】今昔物語集の新研究　坂井衡平○宇治拾遺物語考　佐藤誠實（史學雜誌一二ノ二）○今昔物語集研究　島田退藏（日本文學講座）　〔野村〕

胡飲酒（こんじゅ）　雅樂舞曲　【名義】胡人が酒を飲んで醉ふ態を表はした舞であるからこの名がある。【異稱】醉胡樂・宴飲樂・胡國樂。

意味で、自らも本集を撰して材料を提供したとも、或は清輔とは無關係であつて當時の流行によつたものとも考へられ、何れとも決し難い。本集としての特色は乏しく、その歌は調べよりも意味の表現に重きをおいたものが多いやうに見える。〔西下〕

權田直助（ごんだなほすけ）　國學者　【號】名越舍

【生歿】文化六年正月、武藏國入間郡毛呂木郷に生れ、明治二十年六月八日相模國大山にて病歿。享年七十九【墓所】相模國大山町赤松山麓【閲歴】家は代々醫を業とした。直助は十七歳の時（文政八年）父を失ひ業を繼いだが、十九歳の時（同十年）志を起して江戸に出で、幕府の待醫野間廣春院について學び、傍ら安積艮齋に漢學を受けた。天保元年（二十二歳）郷里へ歸つて醫者になつた。同八年（二十九歳）三月、感ずる所あつて平田篤胤の門に入つて國學を修め、別に眼科・外科・産科等の研究をしてゐた。この間、「神遺方經驗抄」「古醫道經驗略」等醫學に關する著がある。この頃から尊王愛國の志に燃えてゐたが、文久二年（五十四歳）に母が歿したので、斷然志を立て、醫道は門人に委ねて、尊王討幕のために東奔西走した。王政復古に及び、明治二年正月、白川神祇伯家の學問を預つて國學を教授し、同年二月刑法官監察使知事に、同年七月大學中博士に任ぜられたが、四年四月故あつて位官返上を命ぜられると同時に職務を免ぜられ、前田侯の邸に一時幽せられた。六年七月縣社阿夫利神社祠官を仰せつけられ、相模國大山町に移住した。爾後神官として漸次昇進し、十七年十月神道本局顧問を命ぜられ、大教正に補せられ、二十年四月には一等學正に補せられた。明治以後、殊に神官になつてからは神道及び國語學に關する著述が多く、相模の大山に於ては私塾「名越舍」を開いて、國語・國文の講義をした。

權田直助

【著述】〔國語及び國文に關するもの〕てにをは品定め　一卷（明治四年夏幽囚せられてゐる時の著で「脚結抄」（別項）に基づいて手爾波を分類して一二の例證を擧げたもの）○詞の經緯圖　一鋪（明治四年成。同七年刊。同八年訂正。同十二年再訂增補）○詞の眞澄鏡　一鋪（明治四年夏成。同七年刊。同八年訂正）○詞の眞澄鏡詞の經緯圖解　一卷（明治四年夏成。同七年刊。同八年訂正）○國文學註　二卷（明治十一年成。同十五年刊）○詞の玉緒頭註　七卷（明治六年成）○詞の八衢頭註　二卷（明治十七年成）○詞の通路頭註三卷（明治十八年成）○童蒙語學問卷答一（同上）○語學自在（別項）二卷（同上、刊）○國文句讀考　一卷（明治二十年十月刊）○形狀言八衢考三卷○文典辨疑○體用辭圖解○漢文和讀例○體言分類○用言分類○助辭分類○日本文典辨謬○形狀言五種活用圖頭註○辭格例證○皇國文規〔神道及び雜〕古傳概略○教書草稿○魂心氣辨○靈魂歸着考證○祭典習禮小言○葬儀式○醫道百首○醫道百種解○疫門講義○古醫道經驗略○くすしの一言○藥能略○古醫道脈論○古醫治則○古醫道治則講義○神遺方經驗抄○關訓神遺方○大同類聚方再考○燈下概言○溫泉日記○東行日記○名越廼舍歌文集。

【參考】慶長以來國學者史傳　逸見仲三郎　〔龜田〕

魂膽色遊懷男（こんたんいろあそびふところをとこ）　浮世草子　横本五册　【作者】色三味線作者とある。色三味線の眞の作者は江島其磧であるが、本書の著者は其磧であるか、八文字自笑であるか不明。【畫工】西川氏筆とある（祐信）。【名稱】題簽には、「榮華遊び出世男」とある本もあり、右に「三ケ津床の樂しみ」、左に「榮華のたましい」と小書きがある。三ケ津は京・大阪・江戸をいふ。【刊行】無刊記（寶永年間）。

【內容】一卷四話、計二十篇より成る。

【卷一】仙女は假寢の雲を枕。奥樣は機嫌のよい榮花枕。大盡に紋日を括り枕。姉の異見耳痛樫木枕。

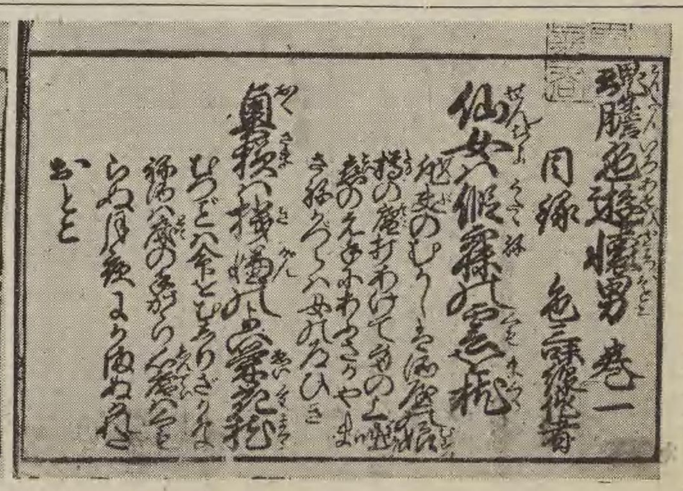
【卷二】嫁入はわたくさい新枕。內儀はまゐる臂枕。妾は船に楫枕。野良に咎を塗枕。

【卷三】女房に鼻の下の長枕。女郎を茶かす中込枕。若後家見せかけ珠數の房付枕。大名屋りに小判でつらをはり枕。

【卷四】太夫をこなす粹の皮枕。おかさまに思ひ出をさし枕。浮氣後家鬱合枕。花嫁を三人一所に入子枕。

【卷五】聲女と見せたはよい手枕。腰元が算用にあはぬ算盤枕。太夫をよはす麥藁枕。奥勤の女中獨寢枕。

都近き山科の里に、その母、馬を呑むと夢みて懷胎し、馬に似たとて「こんだの大豆右衞門」とよばるゝ貧乏な男、一日逢坂山に登りて仙女に出逢ひ、一粒の金丹と一卷の祕傳書を授けられ、この藥を飲みて芥子人形ほどの小男となり、如何なる男にても、その懷に飛び込む時は、魂忽ち入れ替ると敎へられ、蚤の飛ぶが如くに京へ急いだ。そして京・大阪・江戸と巡り歩き、武家・町人の家庭、芝居・色里などの好色的歡樂を御遊して、遂にお大名の局に忍び入つて捕へられ、蟲と間違へられて、すでに爪の先きで押し潰されようとした時、いろ〳〵お願ひ申し殿樣のお耳にも入つて召出され、祕傳書を殿に奉り一生お掃除役として一角（つの）の御奉公勤めの身と出世した。



魂膽色遊懷男（目錄・挿畫）

【解說】隱身術によつて好色行脚をする趣向は、元祿六年の「浮世榮花一代男」（別項）を濫觴とし、同八年の「好色赤烏帽子」（別項）がある。「一代男」も「赤烏帽子」も業平に祈つて、前者は花笠、後者は赤烏帽子を授かつてゐるが、本書は神樣も大津の酒屋の浮氣娘が家出し仙人と契り、自ら仙女と化したもので、萬一の事もあらば、人命にも關はる事との豆右衞門の悔恨の情より出たもので、この不義を許さぬとの趣向が又構想上の波瀾を生み、命に背いたための災難などが點出される。「眞實伊勢物語」（別項）が「伊勢物語」の業平が成功談ばかりなのを失敗談とした趣向と似て、兩書の關係が想像される。本書の滑稽が更に滑稽本位と發展して行つたものに「魂膽夢輔譚」（別項）がある。なほ隱身術の趣向は、黃表紙方面にも大きな影響を與へてゐる。「潤色二代娘」の序の次に、左の如き系圖がある。これは一方本書の系統と主人公の變遷を示す資料と

魂膽夢輔譚（こんたんゆめすけばなし）　滑稽本　五編十五册　【作者】一筆庵可候　【名稱】敎訓の滑稽の角書がある。本書は趣向の一部に八文字屋本の「魂膽色遊懷男」（別項）を摸した關係から、魂膽の二字を冠したものらしく、夢輔は本書の主人公の名である。【刊行】初編三册は天保十五年。以下續刊し、第五編三册は弘化四年。

【諸本】滑稽名作集上（帝國文庫）・滑稽文學全集第六所收。【題材】奪魂鬼・縛魄鬼などによつて、魂を交換する神仙譚から出たかと思はれる。「懷男」の豆男に材を得て、これに勸善懲惡の敎訓風を加味したのである。

三十兩の金をとつて仲間の圓部六に手渡しをして、漸く金を儲けたが、隱居の魂の入つた夢輔は妾宅へ遊びに行き、盜人扱ひにされて失敗する。俳人の會へ、蛙と魂を入替へて行き、得意に俳論をやり、皆を驚かしたが、蛙の魂の入つた夢輔は、水中へ飛び込まうとして人々に抱き止められ啞扱ひにされる。次いで夢輔が易者兼醫者を思ひ立ち、無言見立看察療治の看板を掲げ、適宜魂を取換へて治療をし、非常な繁昌を極めたが、詐欺にかゝつて金を奪はれたりする。そこへ、夢輔の故郷から、伯母の遺言で百兩の金を贈るといふ飛脚

局に忍び入つて捕へられ、蟲と間違へられて、すでに爪の先きで押し潰されようとした時、いろ〳〵お願ひ申し殿様のお耳にも入つて召出され、祕傳書を殿に奉り一生お掃除役として一角の御奉公勤めの身と出世した。

【解說】 隱身術によつて好色行脚をする趣向は、元祿六年の「浮世榮花一代男」（別項）を濫觴とし、同八年の「好色赤烏帽子」（別項）がある。「一代男」も「赤烏帽子」も業平に祈つて、前者は花笠、後者は赤烏帽子を授かつてゐるが、本書は神樣も大津の酒屋の浮氣娘が家出して仙人と契り、自ら仙女と化したもので、隱笠・隱蓑の趣向も一粒の丸藥と變つてゐる。本作は餘程世間の歡迎をうけたと見え、爾來盛んに類書の刊行を見、「榮花遊二代男」「同三代男」「同世繼男」「色道後日男」「色道修行男」等有名であり、豆右衞門の名は一世を風靡した概があり、更に女性に移されて、「潤色榮花娘」「同二代娘」等に發展して行つてゐる。本書は單に性慾描寫を目的としたものでなく、人格の轉換から來る錯誤のための失敗、意表に出づる場面の展開、魂の替つた間に於ける祕密の暴露等によつて巧に滑稽化されて醜惡な感を起させない。この奇拔な滑稽は、「二代男」に至つて更に噴飯を禁じ得ないものとなつてゐる。それより後は次第に描寫も趣向も下落して行つてゐる。「二代男」の題名は「浮世榮花一代男」の名を襲つたものであるが、內容は本書の續編として書かれたものである。これは豆右衞門を祈つて丸藥を授かるが、豆右衞門から道ならぬ好色を禁ぜられる。その故は、豆右衞門卷一の「姉の異見耳痛樫木枕」の中で、姉弟と知らずして弟に魂を取り替へ姉に不義をしかけて失敗してゐるが、これが萬一の事もあらば、人命にも關はる事との豆右衞門の悔恨の情より出たもので、この不義を許さぬとの趣向が又構想上の波瀾を生み、命に背いたための災難などが點出される。「眞實伊勢物語」（別項）が「伊勢物語」の業平が成功談ばかりなのを失敗談とした趣向と似て、兩書の關係が想像される。本書の滑稽が更に滑稽本位と發展して行つたものに「魂膽夢輔譚」（別項）がある。なほ隱身術の趣向は、黃表紙方面にも大きな影響を與へてゐる。「潤色二代娘」の序の次に、左の如き系圖がある。これは一方末書の系統と主人公の變遷を示す資料と思はれる。

男女氏系圖（まめうぢ）

開祖

∴昔男豆先生　奈良の京春の里

- 元祖一代男 大豆右衞門　都山科の邊り　改名豆休先生　行狀こんたん懷男
- 二代男 作藏　鎌倉雪の下　行狀榮華遊二代男
- 三代男 豆之進　實は元祖大豆右衞門から子孫　三河國八ツ橋の里　行狀神靈麥わら笠
- 豆娘一代目 お豆　京清水の邊り　改名おかべ　行狀潤色榮花娘
- 二代目 お豆　豆之進お豆が實子懇領　行狀榮花二代娘

なほ支那小說「燈草奇緣」（一名和尙奇緣）は、一種の怪異譚であるが、變身術によつて閨房の祕を說く。描寫も露骨で支那式に亂倫なものであるが、この書が日本へ舶載されてゐたか否かが本書との關係を解く鍵となる。〔城戶〕

魂膽夢輔譚（こんたんゆめすけばなし）　滑稽本　五編十五册　【作者】一筆庵可候　【名稱】敎訓の滑稽の角書がある。本書は趣向の一部に八文字屋本の「魂膽色遊懷男」（別項）を摸した關係から、魂膽の二字を冠したものらしく、夢輔は本書の主人公の名である。【刊行】初編三册は天保十五年。以下續刊し、第五編三册は弘化四年。【諸本】滑稽名作集上（帝國文庫）・滑稽文學全集第六所收。【題材】奪魂鬼・縛魄鬼などによつて、魂を交換する神仙譚から出たかと思はれる。「懷男」の豆男に材を得て、これに勸善懲惡の敎訓風を加味したのである。

【梗概】浮世夢輔が自分の慾心を充すため、福祿壽に願立をすると、福祿壽が夢中に現はれ、祕呪によつて自由自在に魂の入替の出來る方法を授けた。そこで、先づ猫と魂を入れ替へて見る。夢輔の體に猫の魂が入つた所へ、遊樂仲間の阿波九郎が遊びに來る。夢輔は知らぬ顏で日向ぼつこをしてゐる。借りた小判を返さうとしても見向きもしないで、ただニヤア〳〵と言つてゐる。おまけに竈で糞をしたりするので阿波九郎も氣味惡がり、お化騷ぎとなつて近所の者も見物に來る。夢輔の魂の入つた猫は、又猫で失敗し、漸く魂を取戻して正氣となる。次いで名鳥茶屋で鸚鵡と魂を取換へ、夢輔の魂の入つた鸚鵡は人語をベラベラ喋つて大當りを取つたが、夢輔の體には鸚鵡の魂があるため、途中で借金の催促をされても口眞似ばかりで埒があかない。次いで殿樣と魂を取換へ、御納戶金を引き出し、榮華を極めようとすると、殿樣の生活は案外窮屈なもので、金を引き出す事も失敗に終る。殿樣の魂の入つた夢輔は橫柄な言葉遣ひから散々な目に逢ふ。福德屋の隱居と魂を替へ、三十兩の金をとつて仲間の圓部六に手渡しをして、漸く金を儲けたが、隱居の魂の入つた夢輔は妾宅へ遊びに行き、盜人扱ひにされて失敗する。俳人の會へ、蛙と魂を入替へて行き、得意に俳論をやり、皆を驚かしたが、蛙の魂の入つた夢輔は、水中へ飛び込まうとして人々に抱き止められ啞扱ひにされる。次いで夢輔が易者兼醫者を思ひ立ち、無言見立看察療治の看板を揭げ、適宜魂を取換へて治療をし、非常な繁昌を極めたが、詐欺にかゝつて金を奪はれたりする。そこへ、夢輔の故鄕から、伯母の遺言で百兩の金を贈るといふ飛脚が來たが、夢輔の身に狐の魂が入つてゐて、埒が明かない。漸く正氣に返つた時には飛脚は戻つた後なので、口惜しがつて阿波九郎同道で飛脚の宿を尋ね、探し當てて手紙を持つて戻る途中、手紙を鳶にさらはれる。そこで猿廻しの猿と魂を入れ替へて、輕業小屋の上まで追ふ。夢輔の體には猿の魂が入つてゐるので、果物店の桃を取つたり、水菓子屋の道具をこはしたりしたため大勢に打たれる。一方、猿が取つた手紙ほしさに阿波九郎は猿曳の家に行き、猿と親子の契りをなし、漸く貰つて戻る。なほ夢輔は女と魂を取換へ、男姿で女湯に入つて大騷ぎをやつたり、或は侍と魂を替へて舟中仇呼はりされて閉口したりする。さて伯母の遺言に基き百兩の金を得るため、上州二連木に赴く前日、旅立の振舞酒に醉つて眠つてゐる夢枕に布袋和尙が立ち、旅中決して魂を入れ替へる惡戲をするなと言つて姿を消す。翌日阿波九郎をつれて上州に向ふ。途中の旅宿でいろ〳〵の失敗を重ね、妙義山の麓の二連木村を尋ねたが、その村は見當らず、そこへ幸ひに飛脚の親爺が來、二人

を案内してくれる。百兩の金を貰ふため、その家を訪ふと、異香芬々として起り、出て來た主人は福祿壽であつて、慾心のために失敗するが如き事なきやう懇々と誡め、百兩の金を立替へてやる故、これを資本として正道に就けと言はれ、夢輔もこゝに迷の夢覺めて、眞面目な人間となつた。

【構想】滑稽本時代も漸く末期へ入つて、趣向に行詰りが生じ、題材に種切れの觀を呈して來た時、滑稽本の筆を執ることは作者にとつて可成り困難な事であつた。一筆庵も滑稽を滑稽として描く寫實主義に留めることが出來ず、かうした奇拔な空想的な趣向に、漸く眼先きの新しさを見出したのである。この趣向は、單に興味といふ點には相當の效果を齎したと思はれる。形と精神との不調和の極端に取扱はれたことによつて、相當讀者の笑を贏ち得たと思はれる。〔小柴〕

コント 〔佛〕Conte 【解說】元は短篇小說の意である。フランスでは長篇を Romain 中篇を Novelette と云ふに對して、短篇にこの語が用ひられてゐる。今でもそれに變りはないが、併し歐洲大戰前あたりから、又別樣な意味が派生して來た。と云ふのは一頁か二頁の極めて緊迫せられたスペースの上に、物語を纏める新樣式を生じて來たのである。短いが併しそれはスケッチではない。首・中・尾の短篇の約束はきちんと具備してゐるのである。それは多く愉快な、氣のきいた、鋭利な、併し皮肉ではない作品だつたので、Conte gai（愉快な小咄）と呼ばれてゐたのが、いつの間にかコントと呼びなさるゝやうになつて了つたのである。日本へは岡田三郎が初めて移入して、震災後一二年間流行したことがある。又それより以前、芥川龍之介の「枯野抄」や、廣津和郎の「線路」などに、批評家から小咄文學の名稱を與へられた事があつた。コントは言はば小咄である。殊に江戸小咄は、巴里ッ子のコントと非常に多くの共通點をもつやうに思ふ。一時掌篇小說の譯字も宛てられてゐた。

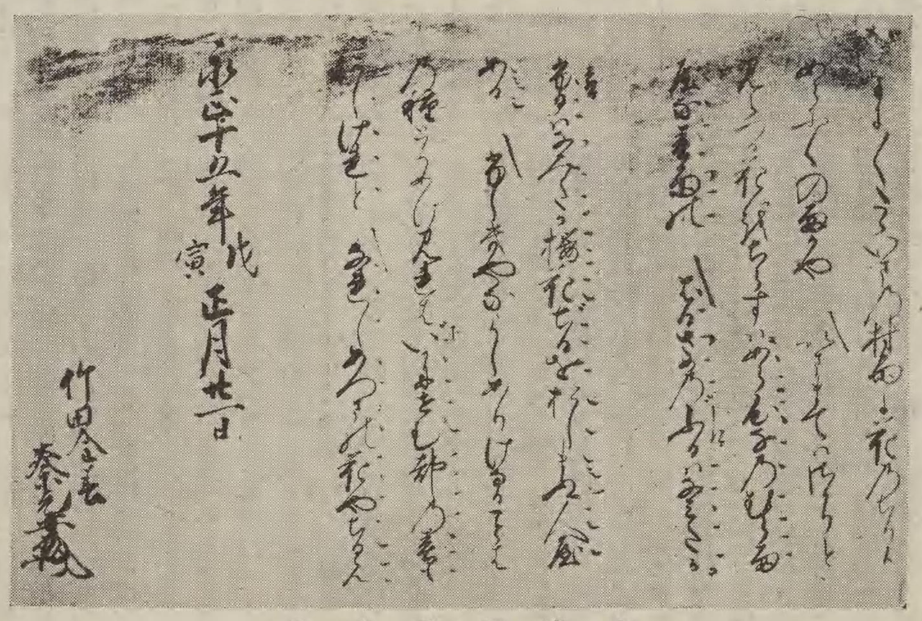
【參考】文藝六講　木村毅　【木村】

混沌軒國丸 こんとんけんくにまる 「玉雲齋貞右」を見よ。

蒟蒻本 こんにやくぼん 「洒落本」を見よ。

金春禪竹 こんぱるぜんちく 能役者・謠曲作者 【姓名】秦姓。金春氏。式部大夫氏信、若名彌三郎 【生歿】應永十二年に生れ、應仁二年（一四二八）歿す。享年六十四。文明六年七十で歿したといふ說は信じ難い（圓滿井座法式參看）。【法名】禪竹（禪又善に作る） 【閱歷】大和猿樂の首座圓滿井座の太夫。金春三郎の子で、宗家毘沙王次郎の養子となり、世阿彌の女を娶る。よく岳父の敎を祖述して、「五音次第」（享德四年七月）、「歌舞髓腦記」（康正二年正月）、「六輪一露」（同上）、「拾玉得花」（同九月）、「五音三曲集」（長祿四年十一月）、「至道要抄」（同じ頃）、「禪竹文正應仁記」（文正應仁の頃）、「圓滿井座法式」（應仁二年頃）を著はし、謠曲の制作も二十數番あり、相當學識文才のあつた人で、一條兼良・一休禪師等當時の貴人高僧に殊遇せられたが、一座の勢力は遂に觀世音阿彌座に及ばなかつたらしい。

【著作】前記の外、謠曲の制作は、「能本作者註文」によれば、「矢立加茂」「芭蕉」「小鹽」「四行櫻」「鍾馗」「雨月」「小督」「葵上」「千手重衡」「楊貴妃」「龍田」「虎送」「定家」「白髭」「西王母」「六浦」があり、觀世元章の「二百十番謠目錄」には、なほこの外に「竹生島」「江口」「紫式部」「蘆刈」「山姥」「安達原」「大會」「放下僧」「昭君」「谷行」「熊坂」を禪竹の作として擧げてゐる。



金春禪鳳筆蹟

【參考】能樂古典 禪竹集 吉田東伍 ○金春十七部集 野々村戒三 【佐成】

金春禪鳳 こんぱるぜんぽう 能役者・謠曲作者 【姓名】秦姓。金春氏。八郎元安 【生歿】享德三年に生る。歿年未詳。但し永正二年に五十二歲であつたことは、「粟田口尊應淮后猿樂記」に明記されてゐる。【法名】桐林禪鳳（禪又善に作る）。 【閱歷】金春禪竹（別項）の孫、元氏宗鈞の子。父の跡を承けて、よく祖父の業蹟を繼述し、「毛端私珍抄」「禪鳳習道目錄」を著はし、又謠曲數番を作つてゐる。應仁の後、京都は戰亂の巷と化したが、なほ且つ永正二年二月（五十二歲）、粟田口で盛大な勸進能を興行した。この事は「粟田口尊應淮后猿樂記」に委しく見えてゐる。【著作】前記二書の外、謠曲の制作は、「能本作者註文」に據れば、「東方朔」「生田」「一角仙人」「嵐山」「初雪」があり、「二百十番謠目錄」には、「野守」をも禪鳳の作として擧げてゐる。

【參考】能樂古典 禪竹集 吉田東伍 ○金春十七部集 野々村戒三 【佐成】

金春流 こんぱるりう 能樂 【名義】能樂シテ方の流名。猿樂四座（別項）のうち最も藝系の古いもので、世阿彌の「花傳書」に、聖德太子の時、申樂を始めたといふ秦河勝を遠祖とし、村上天皇の時、「散樂對策」を書いた秦氏安を中興の宗としてゐるが、この流の系譜には、更に古く秦大津父に溯り、且つ能樂の大成者で、當流の興隆に力のあつた氏信の舅、世阿彌を系圖に加へてゐる。古く圓滿井氏といひ、後、今春とも稱した。

【系譜】初代秦大津父―二代廣隆―三代河勝―二十一代氏安―五十七代清實（金春八郎）―五十八代勝清（彌三郎。氏信の兄）―五十九代氏清（元清世阿彌）―六十代氏信（禪竹、別項）―六十一代元氏（六郎、號宗印）―六十二代元安（八郎、號禪鳳又作善鳳。能作あり、その他著書を遺す）―六十三代氏照（七郎、號宗隨）―六十四代喜勝（八郎、號遠）―六十五代安照（八郎、秀吉に用ひられる）―六十六代氏勝（七郎、號禪曲）―六十七代重勝（七郎、號稱本）―六十八代元信（八郎、號宗竹）―六十九代重榮（七郎）―七十代重休（八郎）―七十一代信尹（十次郎）―七十二代氏綱（七郎）―七十三代隆康（八郎）―七十四代氏政（十郎）―七十五代安親（八郎）―七十六代元照（七郎）―七十七代廣成（式部）―七十八代八郎―七十九代廣運（七郎、分家より入る）―八十代光太郎（現存）。

明治時代の太夫は七郎廣運で、熊本から出た櫻馬伴馬（後左陣）がこれを助け、光太郎は奈良に居り、伴馬の子金太郎が東京で斯道に力めた。石柝の主なる惡行、悉く天照大神の御耳に達したため日の少宮に召寄せられ、そこの掃除の司となる。石柝その微官なるを憤慨して去る。また召し還されて田守の神となる。石柝大神の供御である三千年に一度實を結ぶ米もて製れる餅と酒を出雲大社で盜み食ひ、なほ醉にまかせて月讀尊の都に亂入する。〔二編〕石柝、月宮殿を荒して己が故里に還る。神兵これを伐つも及ばず、日本武尊に助力を請ふ。神道兩部の宮の八幡大菩薩は日本武尊の孫であるが、祖父の御身を案じて觀世音の助勢を乞ふ。觀世音、尊に助力して石柝を捕虜にす山の白狐、清行を害せんとして退治される。〔三編〕近江の海の龍王の弟小龍王金鱗等、また清行を害せんとして、日の神の御使に抑へられ、小龍王は知久良が沖に逐はれる。淨藏は延喜の帝の御惱を拂ひ、その功によつて父の勅勘を赦して戴く。後、帝病再び起つて崩御、地獄廻りをして道眞を罵つた者が皆苛責に遇うてゐるのを見給ふ。帝蘇生し給ひ道眞に天滿天神を贈られる。帝は閻魔王に抹香を贈られる約束を果すために、死を願ふ者に黃金を與へてその使者にする人を求められる。道眞の舊臣、菅秀才文時の傳竹田日藏は、文官のもとに宿る。その家の娘に變化の者聟となつて通ふ事あり、伽毘羅坊、娘に變じてその怪物を待ち、これを捕へんとする。變化は熊手、伽毘羅坊は如意棒を手にして暫く鬪ふ。變化、淨藏の一行なるを知り、前に觀世音の敎化によりて淨藏に隨從する考でゐたことを告げる。その者淨藏から八戒の稱を受ける。一行、なほ途を急いで黃風洞の魔王の難に遇ふ。伽毘羅坊、大黑天の助力によつて征服する。龍沙河に悟定を得る。これ罪を得てこの河に流された天津登々根命、前に觀世音の敎化により一行を待つてゐた者、こゝに沙和尙

勝（七郎、號禪曲）―六十七代重勝（七郎、號精本）―六十八代元信（八郎、號宗竹）―六十九代重榮（七郎）―七十代重休（八郎）―七十一代信尹（十次郎）―七十二代氏綱（七郎）―七十三代隆庸（八郎）―七十四代氏政（十郎）―七十五代安親（八郎）―七十六代元照（七郎）―七十七代廣成（式部）―七十八代八郎―七十九代廣運（七郎、分家より入る）―八十代光太郎（現存）。

明治時代の太夫は七郎廣運で、熊本から出た櫻馬伴馬（後左陣）がこれを助け、光太郎は奈良に居り、伴馬の子金太郎が東京で斯道に力めてゐる。〔佐成〕

金毘羅船利生纜（こんぴらぶねりしやうのともづな）

雙紙　合卷　八編　初編より五編まで六册合二册　六編以下八册合四册　【作者】曲亭馬琴　【畫工】溪齋英泉　【名稱】金毘羅神の利生記を金毘羅詣の船中で物語る筋立にしたための命名。【刊行】初編文政七年、二編八年、三編九年、四編十年、五・六編十二年、七編天保元年、八編同二年、泉市版。【題材】支那の稗史「西遊記」の飜案。

【梗概】〔初編〕火神軻遇突智の神の生れ出でた時、父の伊弉册尊これを斬る。その血凝つて二つの石となつたのを尊遠くへ擲つ。一つは日本讃岐に落ちて象頭山となり、一つは无邊无量國の方便山に落ちる。方便山の石數萬年の後自ら裂けて一柱の神を化生す。石柝神これである。石柝神、天狗どもを征服して威如大王と稱す。日本に來り役行者に就いて仙術を修練し、また龍宮に赴いて如意棒を奪ふ。これは伸縮自在の鐵棒、石柝この武器を得て勇力益々加はる。後、石柝、命數盡きて閻魔の廳に召喚される。暴力を揮つてその黑鐵の帳を訂正して、勝手におのが壽命を全うする。石柝の主なる惡行、悉く天照大神の御耳に達したため日の少宮に召寄せられ、そこの掃除の司となる。石柝その微官なるを憤慨して去る。また召し還されて田守の神となる。石柝大神の供御である三千年に一度實を結ぶ米もて製（つく）れる餅と酒を出雲大社で盜み食ひ、なほ醉にまかせて月讀尊の都に亂入する。〔二編〕石柝、月宮殿を荒して已が故里に還る。神兵これを伐つも及ばず、日本武尊に助力を請ふ。神道兩部の宮の八幡大菩薩は日本武尊の孫であるが、祖父の御身を案じて觀世音の助勢を乞ふ。觀世音、尊に助力して石柝を捕虜にする。斬罪に處するもその身に刄が立たない。よつて釋迦如來はその背に大磐石を載せてこれを懲らす。釋迦はこの者こそ日本に誕生した名僧を守護して、その國に未だ傳はらない經文を傳へさすべきであると觀世音に告げられる。釋迦のいふ日本の名僧とは宇多天皇の御宇に三善清行が得た卵生の子、幼にして出家した淨藏のことである。實は役行者の再來である。淨藏、諸國を行脚し、出雲の大社に到り、越前の國大見次官仲起の娘小鮮媛（わかすえ）と緣組し、二人の子を儲ける宿因あることを知る。後果して小鮮媛がその戀人細江水之助の胤を宿して、二人共々心中せんとするを助け、しかも水之助に代つて密通の罪を身に負ふ。水之助發心して、淨藏の弟子となつたが病死する。淨藏は媛が生める雙生兒を貰ひ受けて僧侶とする。その頃延喜元年淨藏の父清行、藤原時平のために都を追はれ、大津で賣卜を業としてゐる。淨藏、父のために赦免を祈禱する。もと菅家の從僕二人、一人は三上山の獵夫となり、一人は瀨田の漁夫となつてゐたが、共に清行の卜によつて海山の幸を得る。伊吹山の白狐、清行を害せんとして退治される。〔三編〕近江の海の龍王の弟小龍王金鱗等、また清行を害せんとして、日の神の御使に抑へられ、小龍王は知久良が沖に逐はれる。淨藏は延喜の帝の御惱を拂ひ、その功によつて父の勅勘を赦して戴く。後、帝病再び起つて崩御、地獄廻りをして道眞を罵つた者が皆苛責に遇うてゐるのを見給ふ。帝蘇生し給ひ道眞に天滿天神を贈られる。帝は閻魔王に抹香を贈られる約束を果すために、死を願ふ者に黃金を與へてその使者にする人を求められる。道眞の舊臣、菅秀才文時の傳竹田日藏は、文時のためにする金策に頭を惱してゐたが、帝の仰せに從つて縊死し使命を果す。而も命數盡きずして蘇生する。かくて日藏の苦心報いられて文時は朝官となる。道眞の靈なほ鎭まらず、雷雨屢々起る。觀世音現はれて淨藏に金毘羅神王を迎ふべき旨を諭される。〔四編〕延喜十年、淨藏勃海國の船に便乘して朝鮮に渡り、唐土の西のはづれ福原寺に宿り、虎の怪に二人の弟子を食はれ、淨藏また危き折柄、太宰府の雜色の難船して土着した者の伴勇部綾彥のために救はれる。石柝神また觀世音の約に從つて淨藏の弟子となり、その守護の任に當る。名を伽毘羅坊と改める。さきに知久良の沖に流された小龍王金鱗また龍馬と化して淨藏の乘物となる。淨藏、日本に於て觀世音から釋迦如來傳ふる所の袈裟を授かつてゐたが、觀音院の住寺廣念上人に奪はれる。伽毘羅坊、祕術人また黑風大王に奪はれる。伽毘羅坊、祕術を盡して戰へども思ふに委せない。觀世音の助力によつて征服する。大王は熊の怪であつた。〔五編〕淨藏等難船して土着した土師連の子孫の住む土師村に入る。大百姓土師太郎宮のもとに宿る。その家の娘に變化の者智となつて通ふ事あり、伽毘羅坊、娘に變じてその怪物を待ち、これを捕へんとする。變化は熊手、伽毘羅坊は如意棒を手にして暫く鬪ふ。變化、淨藏の一行なるを知り、前に觀世音の敎化によりて淨藏に隨從する考でゐたことを告げる。その者淨藏から八戒の稱を受ける。一行、なほ途を急いで黃風洞の魔王の難に遇ふ。伽毘羅坊、大黑天の助力によつて征服する。龍沙河に悟淨を得る。これ罪を得てこの河に流された天津登々根命、前に觀世音の敎化により一行を待つてゐた者、こゝに沙和尙の名を與へる。八戒、或る家の美しい娘達に誘惑されて、聟となつて縛されることがある。觀世音が、彼の道心を試みられたのである。〔六編〕西域第一の仙山の鎭、元子與世同君の愛護する人參果草還丹の果實を、伽毘羅坊と八戒が竊み食ふばかりか、伽毘羅坊はその樹をさへ倒す。同君怒つて淨藏を捕へる。伽毘羅、祕術を以て師を庇ふ。同君が樹を舊に復せば赦すといふので、伽毘羅坊は福祿壽に助力を乞ふ。福祿壽は日本の木花咲耶姫に願へといふ。姫は觀世音に願へといふ。伽毘羅、當惑の折柄、觀世音の武藏淺草寺に在るのを知つて歎願す。樹、蘇つて淨藏も赦された。伽毘羅坊、八戒の讒に遭うて淨藏から勘當を受け、故鄕方便山に還つた留守、淨藏は波月洞の主黃袍老怪のために捕へられる。老怪に誘拐されて妻となつてゐる寶象國の王女によつて、辛うじて救はれる。王女は淨藏等に託して救を乞ふ旨の手紙を父王に渡す。國王、八戒を賴んで老怪を伐つ、勝たず。しかも老怪は魔術もて淨藏を虎に變身させる。伽毘羅坊また迎へられて、王女に變身し、虛を窺う

て老怪を擊つ。老怪の正體は牽牛星、王女は織女星であつた。〔七編〕三燈山の玉面魔王・銀面魔王等、稻花洞に在つて淨藏等を食はうとする。銀面老尼と變じ、伽毘羅坊の背に負はれ、山を移す術で日本の富士山を移して伽毘羅坊を壓へつける。伽毘羅、土地の神に救はれて難を免れ、分身の術もて敵の武器を奪ひ、また奪ひかへされ、互に祕術を盡して鬪ふ。遂に食稻魂の神によつて二魔王征服される。二魔王はその社頭の石狐、武器は皆社の祭器であつた。〔八編〕淨藏、寶林寺に宿つた夜、夢に烏鷄國王の亡靈出現して道士金眞が我を殺し、我が姿と變じて王位を奪つてゐることを告げる。伽毘羅坊、師命により密にその旨を烏鷄國の太子に知らせる。伽毘羅、また八戒をして王の屍を井中より取り出させ、なほ日本大和なる三輪明神の救によつてこれを蘇生させる。さて伽毘羅は金眞を攻める。金眞、魔術を以て防いだが遂に及ばなかつた。金眞は文殊菩薩が乘物としてゐる獅子であつたが、烏鷄國王が佛法を信ぜず、僧侶を虐待するので、佛は王を懲らすため、かくは變身させたのであつた。淨藏等一行は更に道を急ぎ行くほどに、またも火雲洞の紅孩兒のために苦しめられた。伽毘羅は紅孩兒の火焰に敵しかねて、觀世音の助けを願ふ。紅孩兒、觀世音に封ぜられてその徒弟となる。善才童子これである。（未完）

【構想】馬琴が最初の長篇合卷の述作を計畫するに當つて、例のやうに支那小說の飜案を心掛け、しかもその原作の選擇を「西遊記」に取つたことは一面に於て甚だ賢明であると共に、他面に於ては甚だ冒險であつた。原作の傑出してゐる理由は、その舞臺と事件の變化の大さと共に、幽遠な佛敎の思想を童話めいた趣向の中に寓することである。今これを飜案して、たとへば「水滸傳」の「八犬傳」に於けるが如く、日本の舞臺に更めれば、その規模を小にする憾みがあり、婦女の鑑賞のために寓意を斷ちきれば、また何となく物足らぬふしも多い。その點は讀者側よりも、作者馬琴に於て殊に感ずるところであらう。こゝに飜案者は、原作の舞臺と筋を殆どそのまゝに殘しておき、これに日本の人物と筋とを搦ませる半飜案、半飜譯風の態度をとつたのである。かくすることに於て、「西遊記」の飜譯、たとへば「繪本西遊記」の如きものよりも、一段の親しみと、また支那・日本の風俗のとり合はせから來る變化の面白味が將來される筈である。これ等のすべては、最も多く當時民間に於て行はれてゐる金毘羅信仰に筋を撮合せたことに於て效果を擧げ得た。金毘羅の信仰は神佛の混淆から成り、信仰の對象神また對象佛は甚だ渾沌としてゐる。或は須佐之男命、或は大國主命も擬せられてゐる。馬琴は嘗てこれ等の研究を試みたが、世に謂はれてゐるそれ等の說を廣く利用して、更に神佛一體の金毘羅としての解釋の下に、發端の筋を全く我が神代の物語に書きかへたのである。否、原作よりも多くのものを附けそへたのである。これは皆どこまでも日本的興味を加へるためである。故に三輪大神・木花咲耶姫・食魂神などをも、意外の場合に活躍させもしてゐる。更にまた原作に於ける三藏の生立は、割合に簡單に濟ませてあるのを、こゝにおきかへた淨藏に就いては、案外長く書き加へてゐる。淨藏は三藏と名も近いための選びであらうが、三善清行の子であつて高僧の開え高い實在の人である。馬琴はこれを枷につかつて、小野篁の地獄めぐりの巷說などを原作の筋に結びつけて、讀者の豫備知識を迎へようとし、更に原作の唐の太宗を醍醐帝とした關係から、「菅原傳授手習鑑」の筋をも多分にとり入れてゐる。こゝに讀者を漸次原作の筋に馴致させようとする作者の苦心が見られる。かくして第四編以下は、原作と緊密の關係を以て筋を進めたのである。ただ作の中絕のために馬琴がどの程度までその緊密を保ちおほせるか、どういふ風に日本風を加へて、讀者に繪本としての見る眼の變化を期待したかを詳かにすることが出來ないのが遺憾である。尤もこの作が長篇合卷の試金石であり、その成功が草雙紙界に長篇の流行を來した記念作品であることを注意すべきである。

〔山口〕

混本歌（こんぼんか）　和歌　【名義・性質】日本詩歌の一歌體である。その文獻に見えたのは「古今集」の眞名序に歌體として、「長歌・短歌・旋頭・混本之類、雜體非一」と見えたのが始めである。しかし如何なる歌體をさすかは諸說があつて一定しないが、大體三種に分けられる。（一）は四句體と見る說で、「奧義抄」「八雲御抄」等の歌學書には四句體歌說をとり、

朝顏の夕かけ待たず散りやすき花の世ぞかし

を擧げてゐる。（二）は六句體歌と見る說で、旋頭歌の別名と見るのである。この說は平安朝の「喜撰式」にも見えてゐるが、近世になつて殊に盛んになり、本居宣長・橘守部・近藤芳樹は皆旋頭歌の別名と見てゐる。芳樹の「古風三體考」の說明を見ると、「旋頭とは尾句を頭句に旋らして等しきより出たる名なり。混本とは末句を本句に混へて等しきより出たる名なり。旋頭・混本は片歌を二首連れたるにうづなくなむありけむ」と言つて、兩者を異つた方面より見たに過ぎないとしてゐるのである。更に野之口隆正は「六句歌體辨」の中に六句の中の一種で、五句の短歌體に一句の加はつたものであるとして、その一句の挿入される位置によつて、初句混本、腰句混本、末句混本としてゐる。これに依ると謂はゆる旋頭歌は腰句混本に當り、佛足石歌體は末句混本といふことになるのであるが、近世に於ては六句體說が有力であつた。（三）は混本の意を歌の混本要素を混へ含むといふ意に解して、古代の歌體の中で、片歌もしくは五七音連續で結句のない偶數形式の歌をさす說で、五十嵐力博士の說である。この三說の中で、第一說は、四句體の歌が古代歌謠の中で少い（あることはあるが）のが弱點であり、第二說は、混本歌の出典である旋頭混本が長歌・短歌と對してあるのに、混本を旋頭の別名とする事に大きな弱點がある。第三說も第一說と同じ弱點がある。要するに未だ定說を見ないと言ふべきである。

【參考】古今集眞名序○喜撰式○奧義抄藤原清輔○八雲御抄 順德天皇○古風三體考近藤芳樹○六句歌體辨 野々口隆正○國歌の胎生及發達五十嵐力

〔久松〕

昆陽漫錄（こんやうまんろく）　隨筆　正編六卷續編二卷　寫　【著者】靑木敦書　【成立】寶曆十三年の自序によれば、元文年中に「昆陽漫錄」一卷が成立し、後、これを補正したものである。【解說】正編六卷に周易家語序以下三百二十八條、續編二卷に細馬以下百七十六條を收む。凡百の和漢事物名義に關する考案解釋を主とし、和蘭・朝鮮に係る記事もある。著者の學術の博洽さが知られる。挿入挿圖がある。「昆陽漫錄續集」及び「昆陽漫錄補集」は本書の續編である。

【著者小傳】靑木敦書、字は厚甫、通稱文藏、昆陽はその號。江戸の人、市井から身を起して、評定所の儒員となり、後に書物奉行に轉じ、祕庫の藏書を覽ることを得て學益々進み、更に蘭學を學んで泰西の事情にも通じた。「長崎聞書」「和蘭文字略考」「和蘭語譯」等を著はし、又「薯蕷考」を作つて薯蕷の普及を圖り、その他、「經濟纂要」「和蘭貨幣考」「國家金銀錢譜」等を著はした。本草學にも通じ、官命を以て諸州に採藥した時、各地の古文書を採訪

口に萬一を慮り、腰元紅井（宗玄の妹）を姫に、姫を小姓に扮せしめて擧式。宗玄は接待に出た小姓を姫と知らずに、その容色に迷ひ、念者の契を交さうとして雙方暴露（以上二册目）。これと前後して菊池豐後守の弟吉川大領は兄を暗殺し、更に我が子金藤次を殺した上切腹と見せて、入江藏人を欺き、菊池家に預る勘合の印と繼目の綸旨を詐取した上、銃殺して菊池・大友兩家を橫領しようとする（以上三册目）。折琴姫は漁師幸藏（亡主の勘當を受けた渡會前司太郎）に助けられて遁れ、平野巫子町附近の松原で追手を防ぐため、葛籠に入れられた戒僧となつて、執拗に折琴姫に附き纏ふといふ淸玄物の抱合せが構想上注目される。それも宗玄の始末のつけ方は甚だ不手際である。後に歌舞伎で庵室で殺されるやうに改められたのは當然であると思ふ。【影響】操芝居では後に度々繰返されてゐるが、大抵は四册目宗玄庵室の段を中心にした部分的の上演である。歌舞伎へも移入され、江戸では寬政十一年六月森田座で興行、爾來稀には上場されたやうで、近くは大正十一年四月新富座で中村吉右衞門（宗玄）、片岡市藏（胴助）、中村福助（折琴姫）等で演じられた。

下つてゐて、その響は恐らく鳥の鳴聲を摸したものらしい。鶴舞ともいふから鶴に擬したものであらう。四人手を繫いで舞ふ振がある。鶴が天を飛び廻る狀態を示したものらしい。番舞には「北庭樂」、又は「拔頭」を用ひる。【沿革】「樂家錄」に、「崑崙山之仙人、化帝德一而八人來朝、奏二新曲一舞悅之、因號二之崑崙八仙一云々、一說、此舞、神仙傳曰、淮南王劉安好レ仙、八公乃至、鬢眉皓白、云々」とある。この漢の淮南王の說は信ずるに足りない。崑崙山とあるのは大槪如電の說では、「此地は有名なる西域の崑崙山にはあらず、渤海

「昆陽漫錄續集」及び「昆陽漫錄補集」は本書の續編である。

【著者小傳】青木敦書、字は厚甫、通稱文藏、昆陽はその號。江戸の人、市井から身を起して、評定所の儒員となり、後に書物奉行に轉じ、祕庫の藏書を覽ることを得て學益々進み、更に蘭學を學んで泰西の事情にも通じた。「長崎聞書」「和蘭文字略考」「和蘭語譯」等を著はし、又「蕃薯考」を作つて蕃薯の普及を圖り、その他、「經濟纂要」「和蘭貨幣考」「國家金銀錢譜」等を著はした。本草學にも通じ、官命を以て諸州に採藥した時、各地の古文書を採訪した。明和六年十一月十二日歿す。享年七十二。明治に至り、正四位を贈られた。〔和田〕

姻袖鏡（こんれいそでかがみ）　淨瑠璃　時代物　【作者】近松半二・三好松洛・竹田因幡・竹田小出雲・竹田平七・竹本三郎兵衞の連名。【名稱】菊池大友の角書がある。題名は大團圓の「其名も菊池大友の、納りなびく婚禮は、代々の鏡や袖鏡」の句から出てゐ、兩家婚姻を動機とする劇的展開を利かせてゐる。【題材】清玄物の一である「花系圖都鑑」（寶曆十二年三月京蛭子屋座上場近松半二・二歩軒・竹本三郎兵衞等作）の第六北山庵室清玄慘殺の場を飜案して、菊池・大友兩家婚姻の葛藤に取合せたもの。【初演】明和二年九月十二日より竹本座。【梗概】菊池豐後守の子、多門之助は大友左衞門の女折琴姫の聟に取極められたが、島原松葉屋の二の町と深く契つてゐたためにこれを嫌ひ、豫て姫に心ある從兄吉川金藤次に唆かされて失踪する（以上一册目）。菊池の家老入江藏人は、東寺の松原で施餓鬼中の北岩倉の宗玄が、年配容姿多門之助に生寫しなるを奇貨とし、事情を告げて聟入當日替玉になつて貰ふ。大友家は多門之助の素行や金藤次の告口に萬一を慮り、腰元紅井（宗玄の妹）を姫に、姫を小姓に扮せしめて擧式。宗玄は接待に出た小姓を姫と知らずに、その容色に迷ひ、念者の契を交さうとして雙方暴露（以上二册目）。これと前後して菊池豐後守の弟吉川大領は兄を暗殺し、更に我が子金藤次を殺した上切腹と見せて、入江藏人を欺き、菊池家に預る勘合の印と繼目の綸旨を詐取した上、銃殺して菊池・大友兩家を横領しようとする（以上三册目）。折琴姫は漁師幸藏（亡主の勘當を受けた渡會前司太郎）に助けられて遁れ、平野巫子町附近の松原で追手を防ぐため、葛籠に入れられたまゝ奴胴助に託される。一方宗玄は折琴姫と判明しても戀慕の炎は强まるのみで、北岩倉の庵室に姫の繪像をかけて日夜焦れてゐる。こゝへ姫が避難したので必死と附き纏ふ。胴助は宗玄が幼少の時出家した弟と知り、父母の位牌と金藤次の手にかゝつて、姫の身代りとなつた妹の位牌を出して折檻し、辛うじて姫を助けて幸作の跡を追ふ（以上四册目）。九州呼子の浦の漁師仁太夫の入聟となつてゐる幸作は女房を犧牲としてまで、姫を匿つて折を待つてゐた（以上五册目）。跡を慕つて來た宗玄が執念深く附き纏ふので、胴助は遂に殺す（以上六册目）。その後、幸作は僞せ盲人瀧波檢校となり、姫は侍女となつて大領の館に入り込んで隙を窺ひ、姫を手に入れようとする大領に、宗玄の執念が障碍をなすを幸ひ、同志と大領を滅して、目出たく多門之助と婚禮を果すといふに終る（以上七册目）。

【構想】全體としては、極めて散漫平凡なお家騷動物で、殊に五册目以下は甚だ拙劣であるが、婚姻に雙方替玉を使つたのが却つて間違の元で、これまで道心堅固であつた宗玄が破戒僧となつて、執拗に折琴姫に附き纏ふといふ清玄物の抱合せが構想上注目される。それも宗玄の始末のつけ方は甚だ不手際である。後に歌舞伎で庵室で殺されるやうに改められたのは當然であると思ふ。【影響】操芝居では後に度々繰返されてゐるが、大抵は四册目宗玄庵室の段を中心にした部分的の上演である。歌舞伎へも移入され、江戸では寛政十一年六月森田座で興行、爾來稀には上場されたやうで、近くは大正十一年四月新富座で中村吉右衞門（宗玄）、片岡市藏（胴助）、中村福助（折琴姫）等で演じられた。

【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）○義太夫狂言時代物集（日本戲曲全集）〔黑木〕

崑崙八仙（こんろんはつせん）　雅樂舞曲　【名稱】崑崙山の八仙の舞の意。古は「ころはせ」と訓み、八仙・鶴舞等の異稱がある。【性質】高麗樂。新樂、小曲。

崑崙八仙

高麗壹越調曲に屬す。舞があり四人で舞ふ。舞者は魚の模樣の付いた袍を着、帽子をかぶり、羽を擴げたやうな甲をその上にかぶり、鳥の面に似た異樣の假面をつける。その假面の嘴の下に小さな鈴が下つてゐて、その響は恐らく鳥の鳴聲を摸したものらしい。鶴舞ともいふから鶴に擬したものであらう。四人手を繋いで舞ふ振があるは、鶴が天を飛び廻る狀態を示したものらしい。番舞には「北庭樂」、又は「拔頭」を用ひる。【沿革】「樂家錄」に、「崑崙山之仙人、化帝德而八人來朝、奏新曲舞悅之、因號之崑崙八仙云々、一說、此舞、神仙傳曰、淮南王劉安好仙、八公乃至、鬢眉皓白、云々」とある。この漢の淮南王の說は信ずるに足りない。崑崙山とあるのは大槻如電の說では、「此地は有名なる西域の崑崙山にはあらず、渤海十洲記に、山有三角、其一名崑崙とあり、天平中遣唐使平群廣成の漂着せし崑崙は此地ならん。黃海中の島嶼なるべし、云々。此曲も渤海樂とすべし」とあるのは信ずべき說である。この地方には鶴が多く棲んでゐるから、鶴を仙禽と呼ぶ、故にこれは、渤海の崑崙に住む鶴の舞をいふのであらう。〔田邊〕

さ

財翁（さいをう）　能狂言　【格式】本神文濟相傳の部（大藏流）【題材】當代の民間說話に據つたらしい。「沙石集」卷四、上人子持事（しやうにんこをもつこと）に同じやうな話が見られる。

【梗概】或る有德の祖父を持つた三人の孫どもが、祖父の息災なうちに烏帽子を着せて貰はうと言つて、祖父の財翁を訪ね、物領から順に、興がり・陽がり・面白うといふ烏帽子名を貰ひ、祝の酒宴を開いて、皆々が舞ひ浮かれる。

【解説】徹頭徹尾めで度き祝言物で、各流とも脇狂言に數へてゐる。大藏・和泉では祖父の名が財寶になつてゐるが、大藏流でも古くは西應などと書かれてゐるから、鷺流の如く西翁と呼んだものが、音轉により財寶に附會されたものであらうと思ふ。つまり有德の翁を財翁と稱したものに相違ない。同樣の趣向の物は、三番叟の替問對の中にもあつて、十人の子寶と云ふ小書になつてゐる。この方は、「落葉集」の芋之子踊や、また常磐津の子寶三番叟などに訛つて流用されてゐる。〔瀧田〕

西翁十百韻　さいをうとつびやくゐん　俳諧集　一册

【作者】西山宗因【名義】西翁は西山宗因で、十百韻は百韻を十卷集めた意味である。【刊行】延寶元年【諸本】芭蕉以前俳諧集（俳諧文庫）所收。【解説】獨吟百韻十種で、最初の百韻には前書がなく、その他は「岩城にて」「梅の花見に」「江戸ニ而、前書略ス」「奥州へ遣す」「西國にて」「伊勢にて」「前書有、略ス」「大坂にて」「戀俳諧」の如く標記されてゐる。各々百韻の卷かれた年代は記してないが、中には內容によつて、制作年代の推定されるものがある。「江戸ニ而」の前書のある百韻の中に、「何おもひても六十の秋」の句があるから、これは多分宗因が岩城からの歸途、江戸で越年して寛文三年の春、五十九歳の時の作かと思はれる。「奥州へ遣す」の前書あるものの中に、「乘かけを催すむまの年越て」の句や「寛文六年きく時鳥」の句があるから、これは丙午の年なる寛文六年の作であらう。「前書有、略ス」とあるものの中に「六十三を今はこえたり」の句があるから、寛文七年頃の作かと思はれる。「大坂にて」とあるものの中に「當年は五月二つの廻りあひ」の句があるから、閏五月のあつた寛文四年の作であらう。殘り六卷のものは年代を推定すべき手がかりがないが、以上の四卷と合せ考へて、これ等十卷のものは寛文の初め頃から延寶に接近する頃迄の間に成つたものと考へられる。これ等十卷のものを見渡すと、卷々によつて多少の差異は認められるが、概括して云ふと、古風（別項）の作に比べて餘程斬新にも奇拔にもなつてゐるが、後の談林調に見るやうな惡謔放埒なものにはなつてゐず、式目上から見ても、古風の規格に必ずしも拘泥せず、指合（別項）・去嫌の如きは必ずしも拘泥しないが、主要な規格は寧ろ守られてゐる。即ち古風の反動者たる宗因の特色、談林調の態貌は既に備はつてゐると云ふべきで、これが如何に發展すべきかの契機を藏するものと云へる。かくしてこの十百韻は談林派の第一聲となり、又第一聲たるにふさはしいものであつた。〔志田〕

西王樂　さいわらく　雅樂曲　【異稱】西王母【性質】左方樂。古樂、中曲。黃鐘調曲に屬する。序二帖（各七拍）。破（拍子十）。初め舞があつたが後に絕えた。【沿革】仁明天皇の御作で、犬上是成が舞を作つた。この曲の序は催馬樂の「葦垣」に合ひ、破は「鷹山」の歌に合ふ。舞は後に絕えてしまつた。〔田邊〕

彩霞園柳香　さいかをんりうかう　戲作者【姓名】初は雜賀。後、廣岡。名は廣太朗。【別號】豐州・東洋太郎【生歿】安政四年に生れ、明治三十五年五月二十三日歿す。享年四十六。【閱歷】大阪の人、假名垣魯文の門より出でて、いろは新聞・有喜世新聞・開化新聞を初め、各新聞に記者生活を送り、後、狂言作者となつて、川上音二郎などと地方巡業をもした事があり、後、病を得て大阪の旅宿で歿したといふ。【著作】二十數種ある中で、「蓆旗群馬嘶」（九册、明治十四年刊）は、群馬縣下榛名山麓の農民暴動事件を扱つた際物小說だけに、忽ち數萬册を賣つたといふ。また「冬楓月夕榮」（九册、同年刊）は、十三年もかゝつて父の仇一瀨直久（當時東京上筆裁判所詰判事）を京橋三十間堀黑田邸で討つた筑前秋月藩の臼井六郎といふ青年の事件を書いて、當時評判が高かつたもの。又その他、比較的勝れたものに「川衞天網船」等がある。

【參考】寫實主義以前の小說石川巖（日本文學講座）〔石川（巖）〕

西鶴　さいかく　俳人・浮世草子作者【本名】平山藤五（伊藤梅宇著「見聞談叢」の說）【號】初め鶴永、後、西鶴又井原西鶴（西鶴置土產には鶴を「くはく」と訓んでゐる）、元祿の初め頃一時西鵬ともいつた。松壽軒・二萬翁・二萬堂等の別號もある。【生歿】寛永十九年生れ（歿年より算定）、元祿六年八月十日歿の說（「西鶴置土產」卷頭所揭の辭世の句の年月日附を歿年月日と見たる說、及び同書の跋文、誓願寺の墓石の記に據つた說）と同年十月はじめ歿の說（「西鶴俗つれ〴〵」北條團水の序に依る說）とがある。享年五十二。〔辭世〕浮世の月見過しにけり末（後）二年【墓所】大阪八町目寺町（東區上本町四丁目）誓願寺に在る。碑は門人下山鶴平・北條團水の建立、仙皓西鶴と刻してある。【像】芳賀一晶の畫いたもの最も信ずるに足る。世には、「西鶴置土產」と「西鶴彼岸櫻」とに載せた法體の二種の像が最も多く知られてゐる。その他、「鶴の跡」「西鶴傳授車」にも法體像が見えてゐる。「大坂俳歌仙」には若い頃の俗體の像がある。【筆蹟】現在知られてゐるものの著しいものには、俳諧「鯛骨」の百韻一卷（藤井紫影氏會本の摸刻本あり）、紀州某氏藏の自註百韻一卷、信州某氏藏の各句詞書を附した十餘句の一卷等である。【俳系】宗因門【閱歷】大阪の町人であつた。家は有福であつたが、妻は早世し、一女も盲目で夭死した。彼は家業を手代に讓つて自由に暮し、諸國を遊歷して半年も家に歸らないことがあつた（見聞談叢）。〔俳諧師時代〕彼が俳道に入つたのは、明曆二三年頃即ち十五六歲の頃であつた。句の今日傳へられてゐる最古のものは、寛文六年（二十五歲）の作で、鶴永とある。恐らく當時の彼は貞德流の俳諧を學んだものであらう。宗因に入門した年は詳かでないけれど、延寶三年宗因判の「大坂獨吟集」上卷に百韻が入つてゐるし、延寶四年盛水の「梅の牛」に「西山梅翁庵にて」と前書して、「此度や師の笠を着て梅の花　西鶴」の句が入つてゐるから、この頃は既に宗因門下であつたと見える。西鶴號を用ひ出したのもその頃からのやうである。延寶七年、「雅俊雀」

く時鳥」の句があるから、これは丙午の年なる寛文六年の作であらう。「前書有、略之」とあるものの中に「六十三を今はこえたり」の句があるから、寛文七年頃の作かと思はれる。「大坂にて」とあるものの中に「當年は五月二つの月のあつた年」の句があるから、「閏五月のあつた寛

治三十五年五月二十三日歿す。享年四十六。

【閲歴】大阪の人、假名垣魯文の門より出で、いろは新聞・有喜世新聞・開化新聞を初め、各新聞に記者生活を送り、後、狂言作者となつて、川上音二郎などと地方巡業をもしたことがあり、後、病を得て、大阪の旅宿で、寂しくなつた。

土産」と「西鶴彼岸櫻」とに載せた法體の二種の像が最も多く知られてゐる。その他、「鶴の跡」「西鶴傳授車」にも法體像が見えてゐる。「大坂俳歌仙」には若い頃の俗體の像がある。

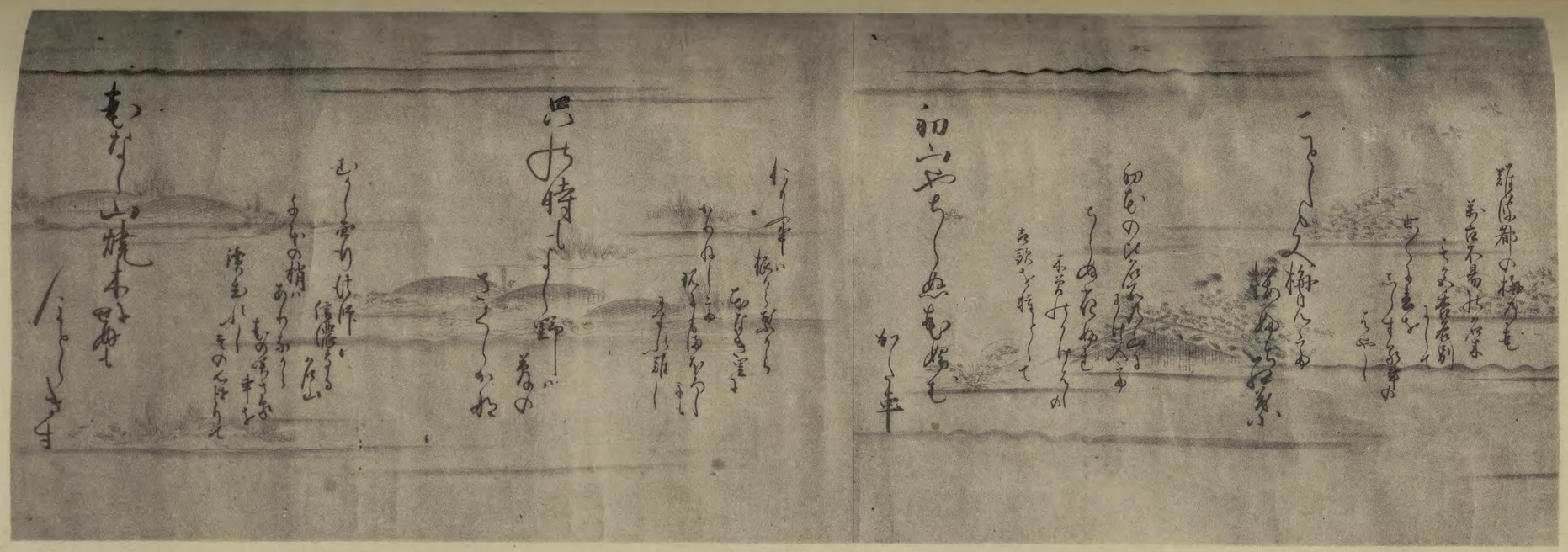
【筆蹟】現在知られてゐるものの著しいものには、俳諧「鶴亭」の百韻一巻（宝暦六年）、「浪華百

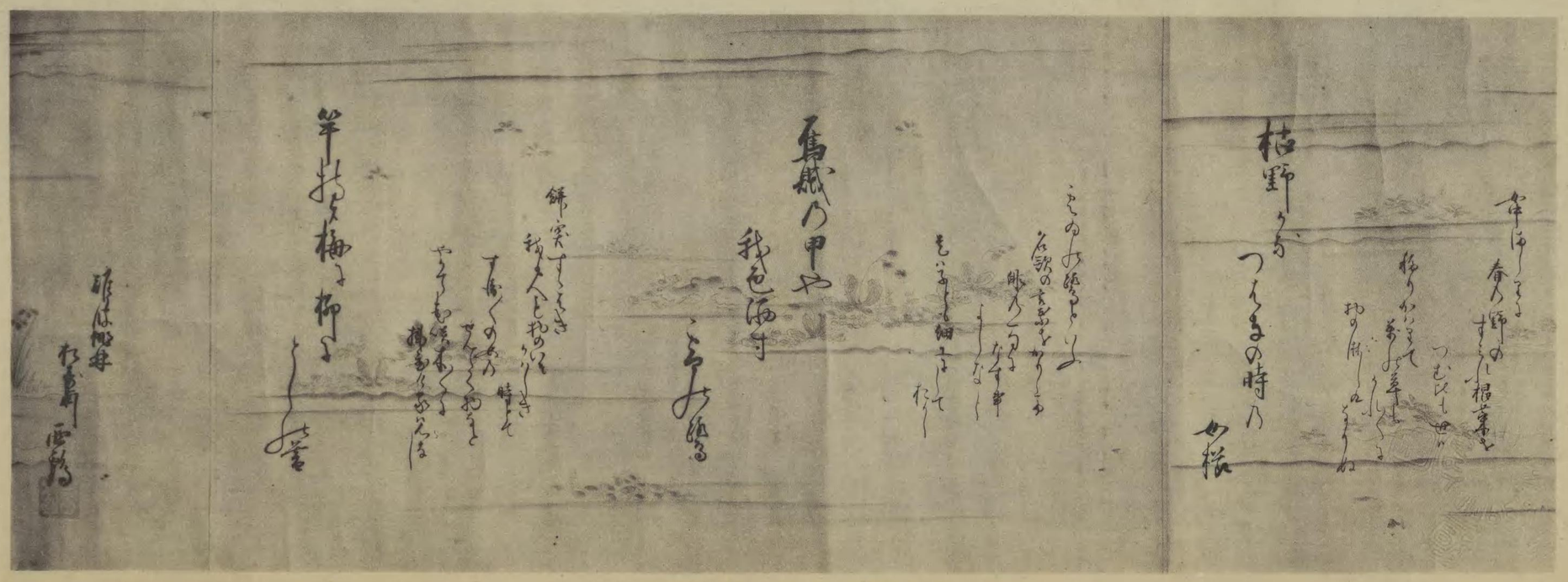
が入つてゐるから、この頃は既に宗因門下であつたと見えゐる。西鶴號を用ひ出したのもこの頃からのことであらう。宝暦七年、「浪華百

像肖鶴西原井
（載所仙歌俳坂大）

碑墓鶴西
（寺願誓町寺目町八阪大）

像肖鶴西原井　筆晶一賀芳
（藏所氏貢保久）





井原西鶴筆蹟（藤澤正益氏藏）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鳥ひたすらに鳴の國と見ニ々光の鄙

ことしはなにてシタ樂ヲ写
ハ〜ケ　蕭々の國の花の樂
の　鶴　蕭々の國見廣浄寺

ガラの夢ひたひたに蛙水ハ〜ラ蛙

ナたルの船ニ子ハ〜ラ家ラ
鳥ルイ〜ラ國生活
蕭の屋生活の手

代ガ〜ニ三の水木

花
の蕭の事の恐
ハ〜ラ蕭の屋
ニ名ガ〜ラ蕭

蛙ハ〜ルの水ガ代ガ〜ニ三

ハ〜ラ蕭の屋
ハ〜ラ蕭の屋
ハ〜ラ蕭の屋

に「俳諧點者鯰屋町井原西鶴」とあるが、點者になつたのも或は改號の頃であつたかも知れない。延寶五年(三十六歳)五月二十五日、彼は大阪生玉本覺寺に於て獨吟一千六百句を興行した。これは有名な矢數俳諧(別項)の最初である。同六年彼は江戸から來た田代松意を迎へ、京の葛宿の庵に於て三吟三百韻を催した。同七年三月大淀三千風が仙臺の梅睡庵で獨吟三千句を吐いたので、これを壯とし、その「仙臺大矢數」(別項)に跋を贈り、傍ら紀子が南都極樂寺で、獨吟一千八百句を興行した事を否定し、且つその卷に點をかけた惣本寺高政を罵つた。併し彼はこれ等の人々に凌駕された事に憤慨して、同八年(三十九歳)五月七日やはり生玉の本覺寺に於て獨吟四千句の二度目の大矢數を興行し、暫く四千翁と名乘つてゐた。

〔浮世草子作者時代〕天和二年(四十一歳)三月宗因が歿した。この時彼は始めて浮世草子に筆を染め、「好色一代男」を書いた。一説に彼は宗因の死に一期を劃して俳壇を退いたやうに云ふがさうではない。同三年彼は大阪高津南見庵に宗因の一周忌法要を營み、宗因の「詠むとて」の句を立句として脇起し百韻を本式目によつて興行した。翌貞享元年(四十三歳)六月五日には住吉の社前に於て第三回の矢數俳諧を催し、一晝夜獨吟二萬三千五百句を興行し、これより二萬翁又は二萬堂と自稱した。但しその獨吟は今日には傳はつてゐず、唯發句だけが知られてゐるに過ぎない。又この興行は餘りに飛び離れた多數であるから眞僞を疑つてゐる人もあるが、團水の「こゝろ葉」の序や其角の「二萬句の蠅」の句等によつて確定的のものとされてゐる。この年「諸艶大鑑」(好色二代男)を出した。貞享二年彼は「凱陣八島」「暦」以下四五の淨瑠璃を收めた「小竹集」を編み、「西鶴諸國はなし」を出した。この頃淨瑠璃作者として近松と競爭したといふ說がある。同三年「好色一代女」「好色五人女」「本朝二十不孝」「近代艶隱者」等の作があつた。「艶隱者」は老莊の虛無的思想を表したものである。同四年「男色大鑑」「武道傳來記」等が出た。彼の作の題材の轉換期はこの頃である。卽ち從來遊里などの好色生活を描いた彼は、武家物・町人物等に筆を轉じて、武士の義理生活や町人の物慾生活の描寫に向つたのである。「武家義理物語」「新可笑記」「日本永代藏」等は、翌元祿元年の作であつた。併し、「色里三所世帶」「好色盛衰記」等を彼の作とすれば、好色本の作もあつたのである。西鵬と改めたのはこの頃であつた。この改號に就いて將軍綱吉の女鶴姫の名を憚つたためであらうといふ說もあるが信じられない。同二年「本朝櫻陰比事」「一目玉鉾」の作があつた。前者は「棠陰比事」に倣つたもので裁判物、後者は地誌・旅行記の類である。元祿三四年には、彼の晩年の俳諧・俳論として團水との兩吟半歌仙二卷があり、可玖の「物見車」(別項)を駁した「石車」を出した。半歌仙二卷は團水の「俳諧團袋」に見えてゐるが、昔時の俤はなく、全然沈思的に、むしろ蕉風に近いものである。「石車」(別項)は松魂軒といふ號で發表されたもので、可玖の痛罵に憤慨し、團水の返答を待たずして、自らその難詰に當らうといふ往年の意氣を見せたものである。元祿五年彼は「世間胸算用」「難波土產」を出した。これ彼が生前に於ける最後の出版であつた。前者は「永代藏」「織留」などと共に町人物の傑作で、商人の理想を表し、金錢萬能の町人階級の世相を描いたものである。

業績〔俳諧師として〕宗因門下の一鬼才であつた彼は、阿蘭陀流といふ旗幟の下に、遠慮なく句を吐き散らした。貞門末期の闘將中島隨流が、「大坂西鶴は西翁より放埒拔群に勝れ」とか、「江戸は不知大坂にて阿蘭陀西鶴」とか指摘したやうに、彼の名聲は三度の大矢數によつて全國に轟き、口拍子の輕き事天下第一の榮冠を贏ち得たのである。門人は多かつたやうであるが、中で水田西吟・北條團水・椎本才麿がその尤なる者であつた。西吟は落月庵と號し、櫻塚の西吟として高名であつた。淨瑠璃作者でもあつた。團水は師に忠實な人で、西鶴歿後七年間、師の舊庵を守り、「置土產」「織留」「俗つれ〴〵」「名殘の友」等の西鶴の遺稿を出版し、自分も亦西鶴を學んだ浮世草子の作を成した。西鶴の俳風を承けて獨自の句境を拓いたものは才麿であつた。彼は淺草の觀音堂に一日萬句の興行をして西鶴の口拍子に倣つてゐる。江戸談林は才麿系の宗匠によつて、後世まで傳はつたのである。

〔浮世草子作者として〕彼は浮世草子(別項)の創始者と目されてゐるが、浮世草子の內容・題材・文體等は、明暦・萬治・寛文の假名草子(別項)にその端を發してゐる。好色に關するものは、「色道大鑑」「浪花鉦」(各別項)、「遊女評判記」等に得たものがある。旅行物には、「東海道名所記」「浮世物語」(各別項)等があり、諸國咄には、神仙・怪異物の「百物語」「御伽婢子」(各別項)等があり、敎訓物には「誰が身の上」「大和二十四孝」(各別項)等があつて、既に西鶴物の先蹤をつけてゐたのであるが、多くは古文の摸倣や古典の飜案で、新興の平民文學といふ色彩は濃厚でなく、又寫實にも忠實でなかつた。尤も西鶴の作にも「源氏物語」の飜案や「伊勢物語」「徒然草」の摸倣と思はれるものもあるけれど、その鋭敏な觀察と印象的な省筆表現の下に、現實の世相・人情、殊に肉の世界、金の世界を痛切に穿つて、人性の眞實に達した所は、何人の追隨をも許さない古今獨步の觀がある。彼の作がいかに世人の嗜好に投じ、流行を見るに至つたかは、所謂西鶴本といふ名の下に、例へば、「西鶴冥途物語」「小夜嵐」「西鶴傳授車」(各別項)等の僞作が出た事でも分るのである。又彼の筆致を眞似た團水・與志・月尋堂等の作が、元祿・寶永の小說界を賑はしたり、延いては八文字舍本(別項)の中にまで同系統の作を見るまでになつたことも、いかに彼の感化力の偉大であつたかを示してゐる。彼は昔から毀譽褒貶の多かつた人である。先づ隨流の「誹諧破邪顯正」(別項)、梅薗堂の「元祿太平記」(別項)にその無學を罵られ、芭蕉に「淺ましく下れる姿あり」とたしなめられたといふ傳說、朱拙に好色の書を作つて活計の謀とした罪人と罵られ、下つては瀧澤馬琴に文盲と譏られたけれど、反つて其角は彼の俤をなつかしがり、柳亭種彦や「奇人談」の著者には尊ばれ、明治に入つて淡島寒月の紹介推奬に次いで、紅葉・露伴二大家の尊崇する所となつたが、特に樋口一葉に大きな感化を與へた。

【作風】新しくする、口拍子を輕くする、故事をもぢつて道化た事をいふ、併し首尾變化の跡、道理分明に聞えるのでなくてはならぬといふのが、彼の句作上の主義であつた。殊に遊蕩趣味は彼の作に最も多く見る所であつた。彼は現實に卽して世相を穿つてはゐるが、誇張的の所があり、想像が手傳つてゐる所もある。連想の速かなる事は、前句の主格を探つ

てゐるうちに、早や次の句の主格を考へ出さなければならぬ程である。俳諧が法式に拘泥しないやうに、文章も文法・語格を無視してゐる。鋭い印象が閃くまゝ、ただそれを次々に投げ出してゐるかのやうである。彼の句作の態度は幾分浮世草子の述作態度の上にも通じてゐる。彼の浮世草子は連句的であるといはれるが、それは彼の浮世草子の多くは斷章の集まりで、好色物ならば好色で、町人物ならば物慾で全篇を括めてゐるだけで、一般小說のやうな一貫した筋がない所にも、唯部分々々を聯想で繫いでゐるものの多い所にも、その各章に一貫した筋道が立つてゐない所にも、文章が律語的・印象的・聯想的で難解である所にも、談林の連句に共通するものがある。彼の作は漫然たる寫實ではない。その直觀の鋭さは何等か人間性の眞實を摑んでゐる。併しテーマ小說などのやうにそれを敷衍し、表現するに飽くまで忠實であるともいへない。そこに彼の浮世草子の特殊な世界があつて、讀む人によつて、淺くも深くも取られて、評論研究の種が盡きないのである。

【著作】〔全集〕西鶴全集(帝國文庫)二冊(明治二十七年刊)○元祿時代小說集(國民文庫)二冊、同四十四年刊)○西鶴全集二冊(同四十年刊平民書房)○西鶴文粹二冊(同四十三年刊春陽堂)○西鶴文集一冊 藤井乙男校(文藝叢書)○西鶴文集(有朋堂文庫)二冊 塚本哲三編○新撰西鶴全集二冊 石川巖○校訂西鶴全集二冊 梅澤和軒○井原西鶴集(近代日本文學大系)一冊○西鶴全集(日本古典全集)十一冊 與謝野寛・正宗敦夫編○西鶴名作集(日本名著全集)二冊 山口剛校○井原西鶴集(新編日本文學叢書)一冊 土井重義編〔俳書〕俳諧獨手鑑(別項)一冊(延寶四年刊)○柾木葛(同上刊)○大句數(別項)二冊(延寶五年刊)○三鐵輪一冊(延寶六年刊、新撰西鶴全集所收)○虎溪の橋一冊(同年刊、同上所收)○新吟物種集一冊(同上)○胴骨一冊(延寶六年刊、一部は自筆本によつて複製されてゐる)○博多百合(同上刊)○五德一冊(同年刊)○西鶴五百韵(別項)一冊(同七年刊)○俳諧四吟六日飛脚一冊(同年刊)○句箱(同上)○俳諧女歌仙一冊(延寶九年刊)○大矢數(別項)五冊(天和元年刊、新撰西鶴全集所收)○難波色紙百人一句(同年刊)○精進膾一冊(天和三年刊、新撰西鶴全集所收)○石車(別項)三冊(元祿四年刊)○前句點難波土產(元祿五年刊)。〔浮世草子〕好色一代男八冊(天和二年刊)○諸艷大鑑(好色二代男)(貞享元年刊)○西鶴諸國はなし(大下馬)四冊(貞享二年刊か)○好色一代女六冊(同三年刊)○好色五人女(當世女容氣)五冊(同上)○近代艷隱者五冊(同上)○本朝二十不孝(新因果物語)五冊(同上)○男色大鑑(本朝若風俗)八冊(貞享四年刊)○武道傳來記(諸國敵討)八冊(同上)○懷硯五冊(同上)○武家義理物語六冊(元祿元年刊)○新可笑記五冊(同上)○日本永代藏(新長者教)六冊(同上)○色里三所世帶(好色つは者揃)三冊(同上)○好色盛衰記(西鶴榮華咄)五冊(同上)○本朝櫻陰比事五冊(元祿二年刊)○一目玉鉾四冊(同上)○世間胸算用五冊(元祿五年刊)○西鶴置土產五冊(元祿六年刊)○西鶴織留六冊(元祿七年刊)○西鶴俗つれ〴〵五冊(元祿八年刊)○西鶴名殘の友五冊(元祿十二年刊)(以上各別項)

【人物】負け嫌ひな、覇氣に富んだ、力で押して行くやうな性格であつた。理知的だと云はれてゐるが、冷靜な人ではない。幇間的な生活を送つてゐたとも言はれてゐるが、あれだけ遊里の風俗・人情を知つてゐるには、可なりその道に深入りしなければ出來ぬことであらう。感覺の鋭敏な彼が、酒も飲まず遊んでゐたのでは、この里の人情もしみ〴〵と感ぜられた事であらう。其蹟は彼を粹法師と言つてゐる。なる程好色本や「永代藏」「胸算用」等を讀むと、物の分つた粹に碎けた人のやうには感ぜられる。「役者大全」や「根なし草」に、澤村小傳次といふ女形が、一日竹輿にゆられて、血暈が起つたと言つたのを、連れの役者達が男に血暈とは可笑しな話であると笑つた所、そばに西鶴がゐて、子供の時から女のやうにならうといふ嗜みから、假初めの頭痛を血暈と思つたのはしをらしい事であると云つたといふ逸話があるが、いかにも小說家らしい洞察同情があらはれて面白い。西鶴は學問は深くはなかつた。併し「俳家奇人談」の「國學を以て鳴る」も滑稽だが、「元祿太平記」「燕石襍志」のやうに無學文盲にして了ふ事も問違つてゐる。それは月如ㄴ鈎といふ李白の詩句、いのこづちと午膝の同じ物である事も知らなかつたり、曾子の詞を孟子の語と思つたり、「枕草子」の文と「源氏」の文とを混同したりする誤はあつたかも知れないが、彼の作を見ると、源氏・伊勢・日本紀・土佐日記・和漢朗詠集・徒然草・勅選和歌集・謠曲等一通りの古典は讀んでゐたやうに思はれる。

【參考】〔研究書〕列傳體小說史 水谷不倒○近代小說史 藤岡作太郎○上方文學と江戸文學 藤村作○西鶴の新研究 鈴木敏也○近世小說史 上卷 鈴木敏也○西鶴研究 木崎愛吉○井原西鶴 片岡良一○西鶴好色本研究 山口剛(日本文學講座)○西鶴・成美・一茶 山口剛○德川時代の藝術と社會 阿部次郎〔研究論文〕西鶴論 島村抱月(早稻田文學明治二十八年)○西鶴二百十年忌 木崎好尙(明治三十六年大阪朝日所載)○西鶴と大阪 同上(同上)○西鶴の墓改葬 同上(同上)○諸家の西鶴研究書目 石川巖(早稻田文學二〇四)○西鶴自畫の挿繪本に就いて 青木平七(古本屋四號)○西鶴の研究 河井醉茗(文章世界四ノ六)○西鶴小論 田山花袋(文章世界二ノ九、早稻田文學一四〇・二〇三)○西鶴覺之書 藤村作(早稻田文學二〇三)○西鶴殘像 五十嵐力(早稻田文學二〇三)○井原西鶴 幸田露伴(國民之友六ノ八三)○西鶴に就いて 正宗白鳥(改造九ノ五)○西鶴對問 南方熊楠・三田村鳶魚(碧星昭和三年)○西鶴に現れたる近代主義的要素 本間久雄(新小說二〇ノ一二)○西鶴の淨瑠璃 藤井乙男(江戸文學研究)○西鶴の生涯・西鶴本の挿繪・著作年表 水谷不倒(早稻田文學二〇三)○明治に於ける西鶴 幸田露伴(同上)○鴻池新田と文豪西鶴の大下馬 船越政一郎(難波津一〇)○井原西鶴の著作物と他作混入 饗庭篁村(太陽一一ノ五)○鶴西の俳諧 佐々醒雪(早稻田文學三九ノ二)○西鶴の俳歷 鎌原退藏(國語と國文學一七・一八)○人及び藝術家としての西鶴 岡部美二三(國語と國文學大正一三ノ一〇)○俳諧師西鶴の研究 勝峰晋風(枯野大正十一年)

〔集〕遠近集 西村長愛○落花集 高瀧似船○大坂俳歌仙 糸屑 伊勢村重安○大阪獨吟集 西山宗因判○梅の牛 嵐水○無題筌 石齋序○兩吟一日千句 青木友雪○誹諧近來風體抄 岡西惟中○仙臺大矢數 跋 大淀三千風○江戸大坂通し馬 澤井梅朝○俳諧生駒堂 燈外○俳諧團袋 北條團水○こゝろ葉 北條團水○俳諧溫故集 蓮谷○俳諧百回鶴の跡 谷素外〔論〕誹諧破邪顯正 中島隨流○俳諧物見車 可玖○特牛 北條團水○句兄弟 題本其角○けふの昔 朱拙○花見車 宗賀○士鳴 北條團水○元祿太平記 藤井乙男

見聞談叢 伊藤祐宇○今昔操年代記 西澤一鳳○傳奇作書同上○俳諧芭蕉談 文曉○俳諧水滸傳 空阿○西山家連俳系圖○俳家奇人談 竹内玄々一○誹家大系圖 生川春明 【藤村・萩原】

西鶴榮華咄（さいかくえいがばなし）「好色盛衰記」を見よ。

西鶴置土產（さいかくおきみやげ） 浮世草子 五冊

【作者】井原西鶴 【名稱】西鶴歿後の出版ゆゑ、發行者が命じたもので、死後、この世に遺し置くものの義である。【刊行】元祿六年 【諸本】「西鶴彼岸櫻」(五冊、元祿七年、江戸版)は本書の改題本で、卷首の肖像をかへ、追善發句は江戸俳人の句にかへ、挿畫も取りかへ

浮世の月見過しにけり末二年
元祿六年八月十日五十二歳

と記し、その次に追善發句七句を載せてある。又卷四第一話の終りに、「三の卷より是迄西鶴正筆也」とある。卽ちこれまでは西鶴自筆の稿本の儘を刻して印刷したものである。

【梗概】〔卷一〕(大釜の拔き殘し)大阪の藤崎といふ太夫を愛して零落した大盡、或る夜同じ仲間に訪はれ、賣殘しの庭の大釜を拔いて酒を振舞ひ、翌日道頓堀に案內され、一日雇ひの男に、暖簾の風呂敷包みを持たせ着換へと見せて行つたところ、醉うて嗜みを忘れ

西鶴

りや室の腰張りに、太夫の文反古を張つて置いたのを、金太夫にわけある某大盡に見られ、文反古を金子三兩に買はれた話。〔卷二〕(愛宕詣の袖さむし)堺の島長といへる大盡、零落して後、愛宕參りを思ひ立ち、序に島原をよそながら見て昔を偲ばうと、廻り路をして島原を塀の外より覗き、嵯峨に一泊して、宿屋の留め女の元島原の妓であつたのに會ひ、歸り路にも亦この女に戲れて、旅費を費ひ盡し、拾ひ草荳して歸つた話。〔人には

して、土人形屋となつてゐる男に會ひ、これを伴うて吉原に通ひ、二人は高尾・薄雲に戲れて、終に三千兩を費ひ盡し、今は薄雲・高尾が姿の土人形を作つて賣る身に零落したが、な

見聞談叢（伊藤梅宇）○今昔操年代記（西澤一鳳）○傳奇作書同上○俳諧芭蕉談（文曉）○俳諧水滸傳（空阿）○西山家連俳系圖○俳家奇人談（竹内玄々一）○俳家大系圖（生川春明）（藤村・萩原）

西鶴榮華咄（さいかくえいがばなし）「好色盛衰記」を見よ。

西鶴置土産（さいかくおきみやげ）　浮世草子　五册

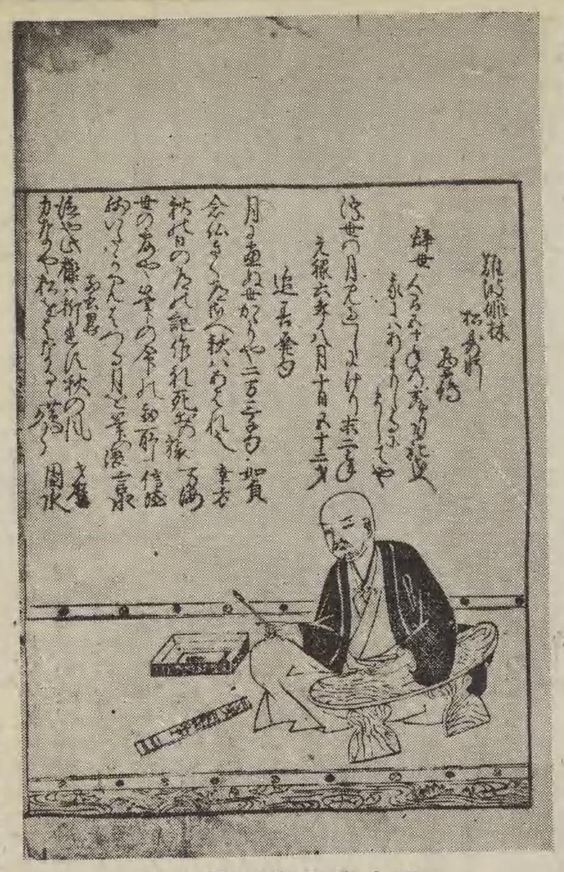
【作者】井原西鶴　【名稱】西鶴歿後の出版ゆゑ、發行者が命じたもので、死後、この世に遺し置くものの義である。【刊行】元祿六年（江戸版）

【諸本】「西鶴彼岸櫻」（五册、元祿七年、江戸版）は本書の改題本で、卷首の肖像をかへ、追善發句は江戸俳人の句にかへ、挿畫も取りかへてある。「風流門出加增藏」（五册、寶永五年、奥村政信畫、江戸版）は、本書の卷一第一話だけを改めたものである。西鶴全集（帝國文庫）・西鶴文集（有朋堂文庫）・西鶴名作集（日本名著全集）等に所收。【體裁】卷一の卷頭に、西鶴法體の肖像を掲げ、その上に、

辭世　人間五十年の究りそれさへ
我にはあまりたるにましてや

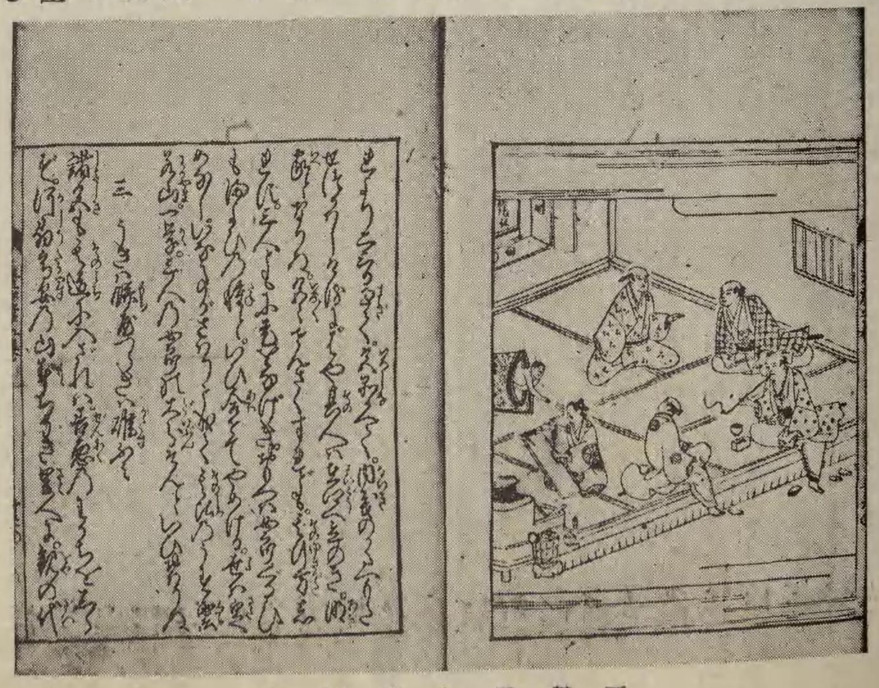
と記し、その次に追善發句七句を載せてある。又卷四第一話の終りに、「三の卷より是迄西鶴正筆也」とある。即ちこれまでは西鶴自筆の稿本の儘を刻して印刷したものである。

【梗概】〔卷一〕（大釜の拔き殘し）大阪の藤崎といふ太夫を愛して零落した大盡、或る夜同じ仲間に訪はれ、賣殘しの庭の大釜を拔いて酒を振舞ひ、翌日道頓堀に案内され、一日雇ひの男に、暖簾の風呂敷包みを持たせ着換へと見せて行つたところ、醉うて嗜みを忘れて寒いと言ひ出し、着換への包みを人々の前に開かれて、からくりの暴露した話。（四十九日の堪忍）京二文字屋の某、父の莫大な遺産を受け、四十九日の忌を終ると、直ぐに遊び出し七十四歳までやめず、その子また七十九歳まで放蕩し、三代二淸に至つて零落したがなほ遊びやまぬので、親類の計らひで、揚屋町の横町に小貸屋を借りて住まはせた處、自然と心の改まつた話。（僞もいひすごして）新屋の金太夫に馴染んだ或る大盡、財産を費ひ果して赤貧洗ふが如き有樣になつた。裏貧屋に住んで窓の反古張りや室の障張りに、太夫の文反古を張つて置いたのを、金太夫にわけある某大盡に見られ、文反古を金子三兩に買はれた話。〔卷二〕（愛宕蔵の袖さむし）堺の島長といへる大盡、零落して後、愛宕參りを思ひ立ち、序に島原をよそながら見て昔を偲ばうと、廻り路をして島原を塀の外より覗き、嵯峨に一泊して、宿屋の留め女の元島原の妓であつたのに會ひ、歸り路にも亦この女に戯れて、旅費を費ひ盡し、拾ひ草鞋して歸つた話。（人には棒振蟲同然に思はれ）江戸の月夜の利左衞門といはれた大盡が零落して、金魚の棒振蟲を取つて辛うじて生活してゐる。妻（元妓吉州）との間に一男がある。或る日、舊友三人に訪はれた。妻はその一人が舊の馴染み客であつたので、家に入るを拒み、亭主は三人の友の惠まうとした金を無理に返した話。（憂きは餅屋つらきは碓ふみ）河内高安の庄屋、堅い男であつたが、或る機會から新町の一夜女郎に馴染んで、遊びの興を覺え、それより太夫買となつて越前に馴染み、終に零落して小さい餅屋となり、その遊び友であつた木半と云つた大盡も、同樣に油屋の碓ふみになつた話。〔卷三〕（思はせ姿）今は土人形）京の或る大盡、江戸吉原の濃紫ゆゑに三千兩を携へて下ると、濃紫は既に身請けされた後であつた。偶々濃紫ゆゑに零落して、土人形屋となつてゐる男に會ひ、これを伴うて吉原に通ひ、二人は高尾・薄雲に戯れて、終に三千兩を費ひ盡し、今は薄雲・高尾が姿の土人形を作つて賣る身に零落したが、なほ日々遊蕩の意氣地を話して暮らす話。（子が親の勘當逆川を泳ぐ）江戸伊勢町の大盃といへる大盡、遊蕩甚しく、千五百兩を息子より貰ひ、これを限りに父子の縁を切る約束をし、見事に費ひ盡くして、小さい魚屋と零落し、なほ息子が若死して、その財産を手に入れて、今一度全盛の遊蕩をしたいと望む話。（算用して見れば一年二百貫目づかひ）奈良



西鶴置土産所載西鶴肖像

浮世の月見過しにけり末二年
元祿六年八月十日五十二歳



西鶴置土産（卷二）

の仙人坊といへる大盡、一年に二百貫目づつ遊女買に費つて財産を皆無にし、身請けした遊女小野島と貧しく暮し、一男を儲けたが、産衣なければ紙衣を着せ、神祭に作つた具足を着せて、社參した話。〔卷四〕（江戸の小主人と京の唐土と）太夫買ひの大盡より落ちて一匁の娼買ふまでに零落した男、遊女を身請けし紙莫入の細工して貧しく暮してゐる内に、四人まで娘を儲けて愈々困り、十一年夫婦の交もせざる話。（大晦日の伊勢參わら屋の琴）三百貫目の身代で太夫吉野を身請けし、七貫目殘して粟田口に住んで、世を風流に暮してゐる大盡がある。こゝに又、太夫左門を請け出して、樂自慢に伊勢參りを思ひ立つた五條の市といふ大盡、吉野夫婦の樣を見て、我にはまだ忙しい所があつて、この夫婦の境地には到り得ないと知つて、引返した話。（戀風は米のあかり、つほねにさがり有）この章には定まつた人物もなく、纏まつた話もなく、古に比べて遊びや大盡の淺ましく變つたことを述べてある。〔卷五〕（女郎がよいといふ野郎がよいといふ）或る大盡零落して大阪長堀の北側の、廓と堺一重外に佗住ひして、三十七で死に、竹林寺の墓所に、施主越後町まんと記した一基の石塔を淋しく遺した話。（しれぬ物は子の親）客の機嫌取りを商賣とする江戸の城俊といふ座頭、客より金を貰ひ勾當の官位を得るために京に上り、偶々客に伴はれて島原に行き、はんじやうといふ遊女の深切に迷ひ、金を費ひ果して官位の望みも捨て、入水しようと覺悟をきめてゐるのを、はんじやう密かに金を惠まうとすれば、避けて大阪に下り、こゝに藝を以て細き煙を立つる話。（朝夫婦の仕立、大阪鳥の里と他住ひして、清貧の生活を樂しんでゐる大盡の成れの果がある。或る日、舊友訪ね來り、物語の末、主人は馳走ぶりに贅澤な獻立を書いて、一人ゐる下人に、いつもの茶屋へ持つて行けといへば、下人は驚いて、日頃の拂ひさへ滯つてゐるのに、持つて行つても無益とばかり應じないので、主客大笑ひになつた話。

【構想】通篇十五説話より成る。いづれも斷章で、遊蕩生活の極、零落した者の上を書いたものである。併し榮華好色の歡樂も一時の夢と過ぎて、覺めた時は夜風の身に沁む紙衣姿となつてゐる哀れさを主題としたものでなく、かゝる人達にも、なほ大盡の意氣・品位を殘すことを多く書いてある。從つて悲哀が全篇の主想であるとばかりは認め難い。なほ身請けされて、男と共に貧窮に窶れた女たちにも、遊女の意氣地を失はないでゐるものも見えてゐる。故に本篇は、寧ろ大盡・遊女の成れのはてに殘るかうした精神の表現を主として作つたものと見るべきであらう。西鶴を研究するものの注意を怠つてはならない主要な作品の一である。

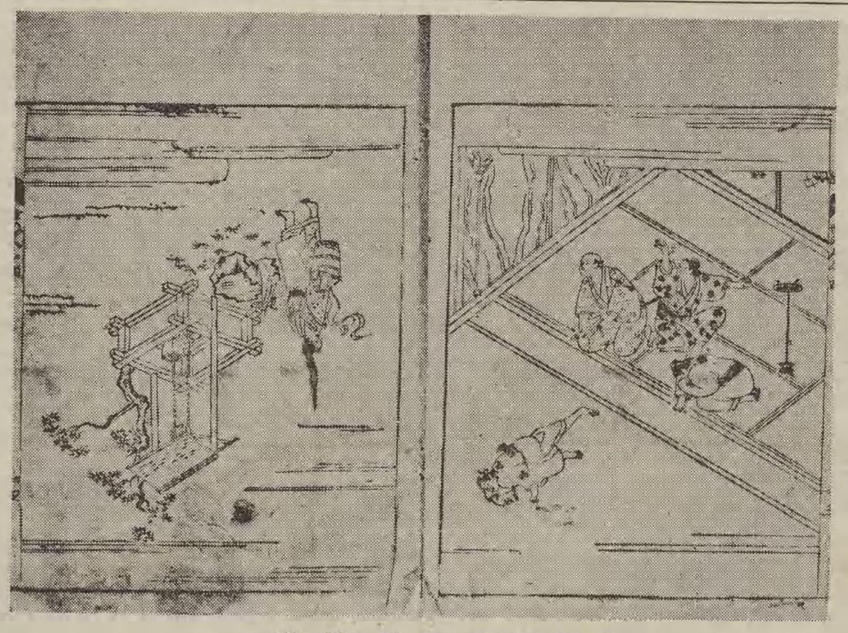
〔藤村〕

西鶴織留（さいかくおりとめ）

浮世草子　六册

【作者】井原西鶴【刊行】元祿七年三月【諸本】正德二年再板。西鶴全集（帝國文庫）・西鶴文集（有朋堂文庫）・西鶴名作集（日本名著全集）等に所收。【解説】門人北條團水の序の中に、「西鶴生涯のうち述作する所の假名草子、棟に充ち牛に汗して、世にはびこる中に、日本永代藏・本朝町人鑑・世の人心、これを三部の書と名づく。……永代藏は其功なりて後、町人鑑・世の人心、半書遺して、過し酉の葉月にこの世を去りぬ。されば兩部の闕たらんにはねしの本意もかなはず、且つは惜しくも思はれるので、未完の二部を取りまとめて一部としたといふ意が書いてある。恐らく、これは信ずべきであらう。即ち本書は、右未完の「本朝町人鑑」と「世の人心」を合綴して、「西鶴織留」の名を題したものであらう。各卷頭の書名に由れば、卷一・二が「本朝町人鑑」で、卷三以下が「世の人心」である。さて「本朝町人鑑」は、元祿二年の執筆であらう。卷二第一話の首に、「本朝は天照大神元年より今元祿二年の初春まで二百卅三萬六千二百八十三年此國豐に續きてなほ君が代の松は久しきためし云々」と見えてゐる。本書はその書名に見ゆる如く、町人の模範たるべき經濟的成功談を綴り集めたもので、「永代藏」の續編と見られる九章から成つてゐる。その九章のうち三章は、慈悲正直の德に依つて成功した話である。「永代藏」の勤勉・節儉・智慧才覺の成功談のみから出來てゐるのに對して注意すべきことである。「世の人心」は、經濟的成功の一面に止まらず、廣く人心の現象・變化に關する十四章の説話より成る。中には主なる人物を設けないで、或は多藝は人の望むべきものでないことを戒め、或は手代を使用する主人の心得を説き、或は奉公人仲宿の有樣を記したものなども交つてゐる。故に形は蕪雜に見えるが、內容は豐富である。一部としては十分の纏まりの附いてゐない作品ではあるが、個々の説話には勝れたものがあり、又西鶴を知るには重要な資料である。（西鶴參照）

〔藤村〕



西鶴織留挿畫（逆繪）

西鶴五百韵（さいかくどひやくゐん）

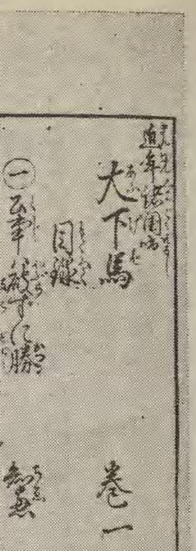
俳諧集　一册

【編者】井原西鶴【刊行】延寶七年三月【諸本】芭蕉以前俳諧集（俳諧文庫）・新撰西鶴全集俳諧篇（石川巖編）所收。【解説】井原西鶴・山本西六・松井西花・水田西吟・山本西友の五吟百韻五卷で、延寶七年三月西鶴の序がある。連衆が西鶴門であるので、西鶴一派の風調を見るによい。西鶴の序からが、「時に華は盛、山は彌生の六日七日八日にすらりと此五百韵、千秋樂には座を立、萬歲樂にはちようちん釣鐘、夜更けて歸るは俳諧師ぞかしと」また西鶴一流の奔放ぶりを遺憾なく發揮してゐる。

西鶴諸國はなし（さいかくしよこくはなし）

浮世草子　五册

【作者】井原西鶴【別名】「近年諸國咄大下馬」、略して大下馬ともいはれてゐる。【刊行】奥附に「貞享二年丑正月吉日　大阪伏見吳服町眞齋橋筋角　池田三郎右衞門開板」とある。【諸本】帝國文庫舊本西鶴全集は、卷四の第二話、忍び扇の長歌までを收め、有朋



ぬ」とあるが、諸國を巡行した作者が、旅中に得た傳説を本としたものであらう。但し中には、支那の傳説や、文獻の傳へた古傳説も交つてゐるかと思はれる。我が傳説文學は古くからあるが、特に浮世草子に先だつて流行した假名草子中の、珍説怪談を集めた諸國物語、百物語に倣つたもので、文學的興味はそれ等に比ぶれば高いものである。

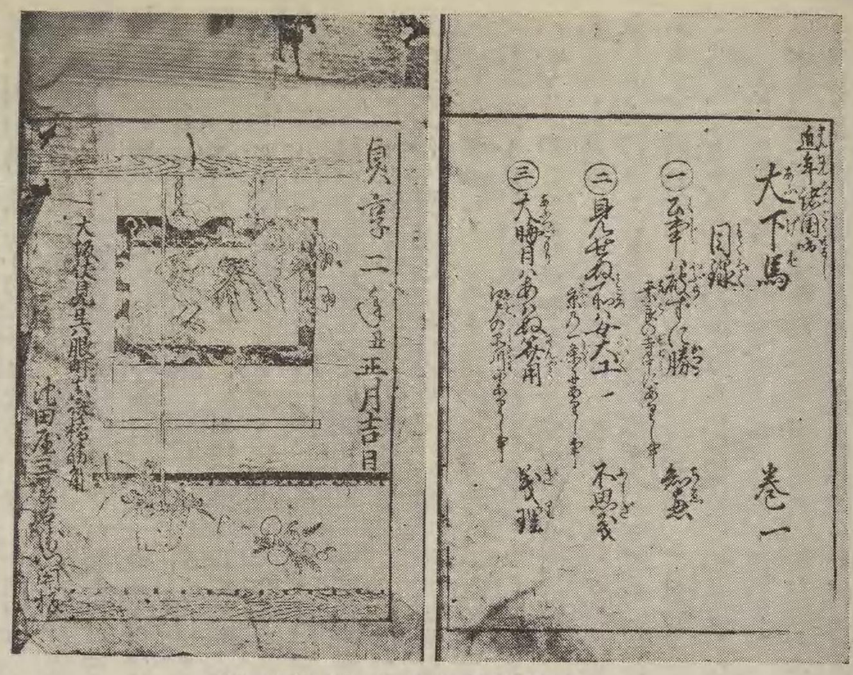
〔藤村〕

西鶴俗つれ〳〵（かくぞくつれ〳〵）

浮世草子　五册

【作者】西鶴（北條團水の序文中古典全集）・西鶴名作集（日本名著全集）・西鶴文集（有朋堂文庫）等所收。【解説】卷一・卷三・卷四の三册は各四話、卷二・卷五の二册は各三話、總べて十八話より成る短篇集である。「俗つれ〳〵」の名が、兼好の隨筆文學の名に取られてゐる通り、隨筆風に編纂されたもので、體裁の整はない觀がある。卷一は、第一話に飲酒の戒めを説き、第二・三・四話何れも飲酒より身を滅ぼし又は失策をしたもののことを綴り、卷二は第一・二話は遊蕩のために身を誤つたもののこと、第三話は多少酒に緣を持ち、酒屋の息子が結婚の秋を期して復命すべきこととする旨を書き、次にその秋、使の者共が歸京し、求め出した美人を一々に品評して、瑕なき完全な美人を選定しようとすること。第三話は、京の北千本念佛の美人について容色風俗を詳しく記述し、第四話は吉野の美人について、同樣に記して鼻孔少しく大に過ぐる難を擧げてある。以上の三章は確かに連續したもので、完結に至つてゐないと思はれる。或は西鶴が遺稿の未完なるものを取り入れたのであらう。これだけで全體の意匠を忖度するならば、かういふ形の下に各章を一人に宛てて、幾人かの美

西鶴諸國はなし（さいかくしよこくはなし）　浮世草子　五册【作者】井原西鶴【別名】「近年諸國咄大下馬」、略して大下馬ともいはれてゐる。【刊行】奥附に「貞享二年丑正月吉日　大阪伏見呉服町眞齋橋筋角　池田三郎右衞門開板」とある。【諸本】帝國文庫舊本西鶴全集は、卷四の第二話、忍び扇の長歌までを收め、有朋堂文庫西鶴文集は卷五を缺いてゐる。全卷を收めたものには、日本名著全集の西鶴名作集と帝國文庫新本の西鶴全集がある。【解説】諸國の珍説怪談を集めて、これを文學化した短章三十五話より成る。序に「世間の廣き事國々を見めぐりてはなしの種をもとめて島原に行き、はんじやうといふ遊女の深切に迷ひ、金を費ひ果して官位の望みも捨て、入水しようと覺悟をきめてゐるのを、はんじやう密かに金を惠まうとすれば、避けて大阪に下り、こゝに藝を以て細き煙を立つる話。



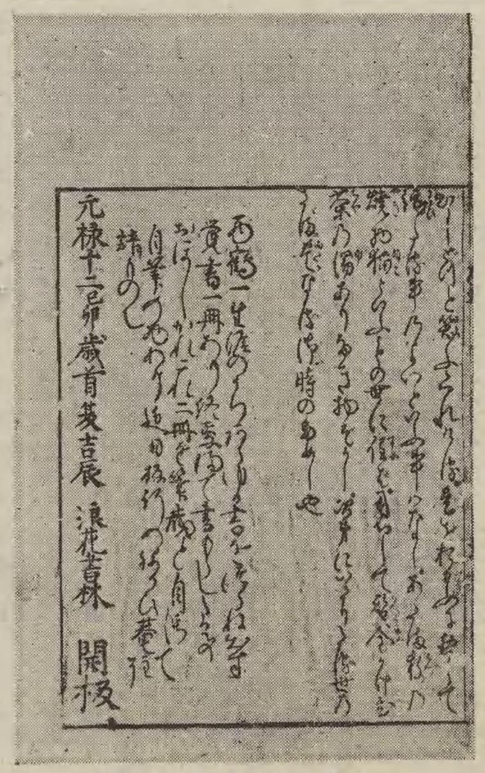
西鶴諸國はなし（目錄・奥附）

西鶴俗つれ〳〵（かくぞくつれ〳〵）　浮世草子　五册【作者】西鶴（北條團水の序文中に、「此俗つれ〳〵をなかきかたみにして松壽西鶴のかきりある今はの時、とりまきれたるさうしの中より、この比見さらえて書林何某にゆつる」とあり、又書林の序文中にも西鶴の遺著たることを述べてある）【刊行】奥附に「元祿八乙亥曆孟春吉日、書林　京洛寺町五條上ル町田中庄兵衞　浪花堺筋備後町　八尾甚左衞門」とある。【名稱】書林の序文の首と各卷目次の首には「西鶴俗つれ〳〵」とあり、題簽には「俗つれ〳〵」とあつて、その上に丸の中に西鶴とあつて、その上に丸の中に西鶴と「俗つれ〳〵」の書名は作者の記してある。又「俗つれ〳〵」の書名は作者の命名でなく、書林の好みで附けたのである。その意は、作中酒に關する話の數條あるに因みて、「徒然草」中に酒の論議のあるよりの思ひつきであることが、書林丼に團水の序文で知られる。【諸本】西鶴全集（帝國文庫・日本古典全集）・西鶴名作集（日本名著全集）・西鶴文集（有朋堂文庫）等所收。【解説】卷一・卷三・卷四の三册は各四話、卷二・卷五の二册は各三話、總べて十八話より成る短篇集である。「俗つれ〳〵」の名が、兼好の隨筆文學の名に取られてゐる通り、隨筆風に編纂されたもので、體裁の整はない觀がある。卷一は、第一話に飲酒の戒めを説き、第二・三・四話何れも飲酒より身を滅ぼし又は失策をしたもののことを綴り、卷二は第一・二話は遊蕩のために身を誤つたもののこと、第三話は多少酒に緣を持ち、酒屋の息子が結婚の夜頓死し、嫁は一旦生家に歸り、兩親の勸めもだしかねて聟を取つたが、聟を說いて表面だけの夫婦となり、兩親死して夫婦出家を遂げた話である。卷三は又酒に緣が深い。第一話は行ひ殊勝なる下女の話であるが、第二話は酒の醉のために客の前に失言した野郎の話、第三話は死んだ親友に代つてその老母を養つてゐた僧が、宿醉のために三日もこの老婆を顧みずに餓死させた話、第四話は醉興より妻の頭髮を切り、醒めて後悔し禁酒した男の話。これまでを通覽すると、飲酒に關する話は一般の弊に始まりて禁酒に終り、自ら順序があり、纏まつてゐるやうであるが、中間に別種の題材の話を混じてゐること上述の通りである。卷四の第一話は老母に不孝をする富める夫婦と、反對によく老父をいたはる貧なる夫婦とを對照してある。第二話以下三章は續きと見える。第二話には、見出しに、「序　嵯峨の邊に隱家好色菴」とあつて、京嵯峨の邊に隱家を作りて住む大富の男が、贅澤の餘り、妻とすべき理想的美人を懸賞して求める。即ち條件を與へて出入の者共を全國に派遣し今、秋を期して復命すべきこととする旨を書き、次にその秋、使の者共が歸京し、求め出した美人を一々に品評して、瑕なき完全な美人を選定しようとすること。第三話は、京の北千本念佛の美人について容色風俗を詳しく記述し、第四話は吉野の美人について、同樣に記して鼻孔少しく大に過ぐる難を擧げてある。以上の三章は確かに連續したもので、完結に至つてゐないと思はれる。或は西鶴が遺稿の未完なるものを取り入れたのであらう。これだけで全體の意匠を忖度するならば、かういふ形の下に各章を一人に宛てて、幾人かの美人盡しを書く豫定ではなかつたらうか。當時繪本などに美人盡しが行はれてゐたから、彼にさうした思ひつきがなかつたとも言はれまい。果してさうだとすると、「好色五人女」卷三の「姿の關守」に示した彼の詳細なる美人の觀察記述に於ける特殊な技倆を十分に見るべき作を成したであらう。卷五は又題材もかはつて、第一話は彼の「置土產」に多く見えてゐる零落しても元の大盡は、流石に大盡の氣品を保つのと違ひ、或る大盡が零落して昔の氣品を失つて物惜しみした話。第二話は纏まりのない章で、大阪新町遊女等のために永代髮油を寄進すべしといふ男のこと、吉原高尾のこと、萬九といつた大盡の身の末などを取集めて書いてある。第三話は親讓りの大財產を遊蕩に費ひ盡した三人の兄弟が生活のために兄は大盡、仲は幇間、弟は太夫と役を分けて、經驗したまゝを芝居にしてゐた。これが評判となつて都萬太夫座に抱へられたが、この遊女買より外には一藝もなし得ないので、解雇されて駕籠舁となつた話である。本卷は幾分「置土產」に相通ずるものがある。かく本書は

未完成の遺稿の幾種かを取集めたものと見ゆる。全體を通じて見れば雜然として整つてゐないが、部分的に見ると、飲酒に關するもの、美人に關するもの、大盡の身の果に關するものなどが、中心となつてをり、各々それ等にはそれ等として見るべき長所がある。〔藤村〕

西鶴傳授車（さいかくでんじゅぐるま） 浮世草子 五册 【作者】天狗堂轉蓬【刊行】享保元年板。【梗概】「浮世の月見すごしにけり末二年」の句を殘して現世を去つた西鶴が、似合はしき有付きもあらばと、風呂敷包みを肩に遠く六道の巷を彷徨（さまよ）つてゐると、小さい鬼が出て來て、「浮世にある頃、小說を作つて諸人に無理酒をのませた科により、酒屋地獄に落す筈のところ、文筆の譽あるによつて、閻魔王特にその罪を赦される」とあつて、地獄の狂言作者となる。「とても極樂には生れもせで、娑婆に變らぬなりのはて、さりとては夢にあふさへ面目なけれど板行屋が昔忘れぬ手向の水思へばうれしうもまたなつかしければ追出しの鐘を限りに冥途の長物語り必ず人に沙汰するなと寢顏につめたい鼻を押付けて」以下西鶴の語る冥土物語となる。一百三十六地獄の總主閻魔王の在す平安城の花の春、牛頭馬頭の獄卒等が鉦打ち叩き三味線引いてぞめき歩くは、大津繪に少しも違ふ所はない。席上に召されて、西鶴は娑婆以來の因みを以て萩野長太夫・片岡仁右衞門の二人を御前に推薦する。大王以下の外に喜び、二人に引出物を賜ふ。以下表面は地獄閻魔王城であつて、實は元祿當時の好色生活の種々相を描いたもの。都の分限者達が鳴物講といふナンセンスな遊びを催してゐると、手代の鮑の片六が諫言して「金銀に迷ふる時あるものなれば若さをかめ美しい娘を探し求め誰方なりとも親分になり大王に奉公に出せば御寵愛あるは知れたこと、その上で太子殿ができさへすれば十萬石はたしかなもの、御知行はつくる時なき子々孫々までの御家督なれば行末めでたく繁昌せん」と申上げる。そこで、片六の近所に住む天竺浪人の娘の十八九ばかりなるをば着飾らせて大王に奉る。果して大王のお氣に入り寵愛ならびなき事になるといふ段（第三卷）と、閻魔王城出入りの呉服屋の手代が、長太夫を葛籠に入れて浮舟の許に通はせるといふ段（第五卷）とは、德川大奥の生活及び繪島生島の一件をあてこんだものである。長太夫のことが現はれたので浮舟は病氣と僞り、然るべき驗者に祈つて貰ふ事になる。そこで長太夫を初めとして、片岡・伊勢野以下十二人作山伏となつて閻魔王城の關所を越える段は、謠曲の「安宅」の文章をそのまゝ並べてある。かくてつひに見目嗅鼻（みめかはな）に嗅ぎ出されて浮舟は浮かれ舟、長太夫はうつほ船、あとの衆は高瀨舟、帷子一つを帆にかけて後白浪と船出する。【構想】最後の一節は「好色一代男」（別項）の最後の趣向にまねたものか、或は生島の遠島を諷したものかであらう。又西鶴を冥土の狂言作者としたのは明かに「西鶴冥途物語」（別項）を踏襲したものであるが、最後は「女房どもの呼聲に目ざめてみれば西鶴翁の繪像のみ」とあつて、一篇を夢物語として結んである。（因みに本書初板本には、第一卷の見かへしに西鶴の繪像と辭世の句とを掛物の形にして刷りこんである）。

西鶴名殘の友（さいかくなごりのとも） 浮世草子 五册 【作者】西鶴か【刊行】元祿十二己卯歲首夏吉辰浪花書林開板（奥付）【名稱】西鶴の作としても、「西鶴名殘の友」といふ書名は、本書を刊行した團水の命名であらう。總目錄本文とも西鶴自筆を板下としたと見えるが、總目錄の首の書名だけは別筆である。西鶴生前の俳友などに關する說話集なるが故に、かく命名したのであらう。【解說】本書は西鶴歿後七年を經て、團水の手で刊行されたものであるから、西鶴の作とするものと、團水の擬作とするものと、西鶴の作に團水が補筆したのだとするものと、いろいろ說があつて定說がない。團水の序には、「洛陽を去て七年、浪花西鶴が草庵を守る雨の夜、跡は消せぬかたみの反古のうちより一書を探り得たり、諸國の新譚例の狂言をしるせり、みづから筆を染ぬれば、故人にあふこゝろはせして函底に籠置折ふしことの寢覺の友とす、これを傳聞書林某來て强て求めけるにまかせて梓に行ふと也」とある。全篇二十七章の說話から成る。皆俳人に關するもので、俳人も有名無名樣々である。その有名なるものを擧ぐれば、貞德・德元・貞室・立圃・德庵・松意・團水・才磨・西鳥などがある。想所も隨つて諸方に亙つてをり、事件も雜多で、必ずしも俳諧に關するものと限られてゐない。即ち本書執筆の動機は、俳諧の精神、俳人の氣質等を表はさうとする所にあつたのでなく、諸國話に於けるが如く、珍說異聞を俳友の中に探つたものであらう。或は巷間の異聞を俳人の上に附會したものがあるかも知れない。說話には、文藝の素材としてつまらぬものもあり、その文藝化の足らないものもあつて、西鶴作としても秀れたものでない。〔藤村〕



西鶴名殘の友（奥附）

西鶴本（さいかくぼん） 浮世草子【異稱】西鶴物【解說】宇義は、井原西鶴が作の浮世草子の義であるが、この名稱は古く用ひられて、今は學問上にも、通俗にも多く用ひられない。西鶴の諸作は、初期の「好色一代男」「諸艶大鑑」（別名好色二代男）「好色一代女」「好色五人女」（各別項）などには署名がない。而して彼の作品一度出でて、彼に摸し、彼に倣ふものが相繼いだが、これ等の作者達は、當時に於て著名でないものも多く、又全く無署名のものもあつたので、自然に西鶴をその代表者として、西鶴本の名稱の下に、浮世草子初期の好色本を初め、當時の浮世草子を包括して考へてゐたやうである。かうした所から、西鶴が作を初めとして、他作家の作までも、この名稱の下に考へるやうになつた。かくて頗る曖昧の中に、この名稱が行はれてゐた。今は多く用ひられないが、

西鶴の作と信ぜられるもの、眞僞決定し難いものを、この名稱の下に收めてゐる。〔藤村〕

西鶴冥途物語（さいかくめいどものがたり） 浮世草子 五卷 【作者】未詳、泡影の署名がある。【刊行】元祿十年【諸本】德川文藝類聚（遍歷小說）所收【解說】京の幻夢といふ俳諧師が、或る日、花見から歸つて來て玄關先で頓死し、冥途に行つて閻魔王の宗匠になつてゐる西鶴に逢ふ。そして西鶴の案内で冥途の俳諧の有樣を聞き、更に現世で俳道を行き違へた俳諧師どもが、樣々の責苦に逢ふ有樣を殘らず見物する（以上卷一より卷三まで）。次に卷四・五にてゐる。坤の卷には遊歷した諸國の門人の發句四百五十八を示し、なほ餘興として芭蕉・支考の發句十八を添へてゐる。【價値】大阪以西に於ける美濃派（別項）の勢力を知るに便利な書である。又表合といふ連句の式及び實例を知るにも調法な書である。〔萩原〕

さいき 御伽草子（二十三篇の一）一卷【名稱】御伽草子本の表題は「さかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき」（さへき）を誤つたものである事は明かである。寛永整版本は、「さいき物語」となつてゐる。【成立】室町末期か。【諸本】古板本は御伽草

惟ふに、それは彼が四國・九州を行脚した歸途であつたらしい。治承四年（六十三歲）伊勢に止錫して福原遷都の事を聞き嘆く。元暦元年（六十七歲）俊成の「千載集」撰述に當り、彼は自詠を高野から送り屆けた。文治二年（六十九歲）東大寺再建勸進を兼ね、再度の奥州行脚を企て、途中鎌倉の賴朝の館を訪うてから平泉の秀衡のもとに赴いた。同五年、都に在つて後德大寺家に出入する日もあつた。この頃、河内の弘川寺を終焉の地と思ひ定めたらしい。御裳濯川歌合を作つて俊成に、宮川歌合を作つて定家にそれ〴〵批判を乞うた。建久元年

音・勢至であると云ふ。室町物ではあるが、主要人物の總てが遁世に終結する所が、上は鎌倉時代の小說に繫り、下は「三人法師」（別項）以下の遁世物に連つてゐる。兩女の出家は平家の祇王・祇女や、佛の發心談などの影響らしくもある。〔島津〕

採菊山人（さいきくさんじん） 「條野採菊」を見よ。

祭儀神話（さいぎしんわ） 「人文神話」を見よ。

西行（さいぎやう） 歌人【姓名】佐藤義淸（のりきよ）（憲淸・則淸ともゝ）【法號】圓位（圓意ともゝ）・西行・大本房・大寶房ともゝ）等。【生歿】元永元年に生れ、建久元年（一八五〇）二月十六日歿す（但し生歿年

西鶴の作と信ぜられるもの、眞僞決定し難いものを、この名稱の下に收めてゐる。〔藤村〕

西鶴冥途物語（さいかくめいどものがたり）　浮世草子五卷　【作者】未詳、泡影の署名がある。【刊行】元祿十年【諸本】德川文藝類聚（遍歷小說）所收【解說】京の幻夢といふ俳諧師が、或る日、花見から歸つて來て玄關先で頓死し、冥途に行つて閻魔王の宗匠になつてゐる西鶴に逢ふ。そして西鶴の案內で冥途の俳諧の有樣を聞き、更に現世で俳道を行き違へた俳諧師どもが、樣々の責苦に逢ふ有樣を殘らず見物する（以上卷一より卷三まで）。次に卷四・五に於ては、極樂に上り貞德禪師・立甫律師かと思はれる人に逢ひ、今の世の附合の非を諭されて蘇生する。一家眷屬、限りなく喜ぶうちにも、幻夢は見聞きした冥途の俳諧の有樣を十分に書き記したいと、先づ難波に下り、西鶴の舊居を弔ひ、それより俳諧修業に諸國行脚をしようと、東國さして發足する事に話は終る。西鶴の冥途話に假託して、當時の俳諧及び俳諧師の弊風を諷したものである。〔小泉〕

西鶴物（さいかくもの）「西鶴本」を見よ。

西華集（さいくわしふ）　俳諧集　二冊　【編者】各務支考【名義】支考は京より東に在る時は東華坊と言ひ、西に在る時は西華坊と言つたが、それによつて東西の二集があるのである。華は榮也、光也とあつて、こゝでは西國へ旅行した時の俳諧を指したのである。【刊行】元祿十二年【諸本】支考全集（俳諧文庫）所收【內容】乾之卷の卷頭に、表合（ひやうあはせ）の目錄六ケ條をあげて內容の大體を略說し、次に攝津・播磨・備前・備中・安藝・豐前・豐後・肥後・肥前・筑前・長門の諸門人と附けた表合（八句）二十六を擧げ、それ〴〵發句・脇・第三の意味・附方を說明してゐる。坤の卷には遊歷した諸國の門人の發句四百五十八を示し、なほ餘興として芭蕉・支考の發句十八を添へてゐる。【價値】大阪以西に於ける美濃派（別項）の勢力を知るに便利な書である。又表合といふ連句の式及び實例を知るにも調法な書である。〔萩原〕

さいき　御伽草子（二十三篇の一）一卷【名稱】御伽草子本の表題は「さかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき」（さへき）を誤つたものである事は明かである。寬永整版本は、「さいき物語」となつてゐる。【成立】室町末期か。【諸本】古板本は御伽草子本、寬永整版本。御伽草子後編（今泉畠山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷所收。【解說】本地物、遁世物。特に淸水の利益譚である。豐前國うだの佐伯と云ふ者、一族に所領を橫領せられ、訴訟のため上洛したが、はかどらぬので、祈願に淸水に參籠して、圖らず美しい女房に逢ひ、遂にその家に赴いて契を結んだ。佐伯は訴訟に勝ち、安堵して本領へ歸つて行つたが、直ぐに迎へ取ると約束しながら三年も徒らに過ぎた。京の女は淸水に祈り訴へ、行脚の僧に託して豐前へ文を遣ると、鷹狩の留守に佐伯の妻が披いて優美の文に感じ、夫の歸宅を待受けて京より妹を迎へ取りたいと謀り使を上らせた。喜び下つた女の餘りの美しさに妻は俄に妬ましくなり、男を見限つて髮を切り家を出た。京の女はその振舞に感動して、男に會へた喜びも本妻の情ゆゑと、已も髮を切り同じ庵室に籠つた。二人の女房に捨てられた佐伯も亦髻を切つて高野へ登り、何れも往生の素懷を遂げた。これも淸水の觀音の御方便で、三人は卽ち彌陀・觀音・勢至であると云ふ。室町物ではあるが、主要人物の總てが遁世に終結する所が、上は鎌倉時代の小說に繫り、下は「三人法師」（別項）以下の遁世物に連つてゐる。兩女の出家は平家の祇王・祇女や、佛の發心談などの影響らしくもある。〔島津〕

採菊山人（さいきくさんじん）「條野採菊」を見よ。

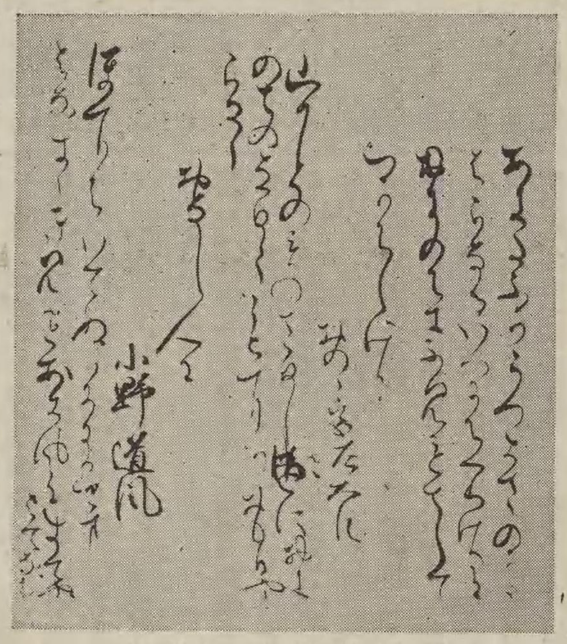
祭儀神話（さいぎしんわ）「人文神話」を見よ。

西行（さいぎやう）　歌人【姓名】佐藤義淸（のりきよ）、憲淸・則淸とも）【法號】圓位（圓意とも）・西行・大本房・大寶房とも）等。【生歿】元永元年に生れ、建久元年（一八五〇）二月十六日歿す（但し生歿年共に異說がある）。享年七十三。【墓所】河內國弘川寺【家系】その先は藤原房前に出で、九世の祖に俵藤太秀鄕があり、その曾祖父公淸に至り佐藤氏を冒した。祖父秀淸、父康淸、ともに衞門大夫、母は監物源淸繼女である。【閱歷】彼は保延元年（二十三歲）從五位、左兵衞尉の官位も妻子も捨てて出家し、嵯峨に入つた。久安二年（二十九歲）恩寵厚かつた待賢門院（鳥羽帝中宮）崩御の跡を尋ねて仁和寺に到つた。西行の紀州・東國方面の行脚は、この過去數年の間に遂げられたものらしく、院の崩御の時も在京しなかつたらしい。保元元年（三十九歲）七月、鳥羽上皇崩御にあたり、御遺骸を安樂壽院に移しまゐらす御伴に加はつた。偶々保元の亂起り、崇德院が仁和寺北院で薙髮せられた所へ彼はお訪ねした。この頃彼は多く高野山にゐたらしい。仁安二年（五十歲）四國行脚を志し暇乞に賀茂へ詣でた。翌年、讃岐白峰陵（崇德院御陵）に參拜し、附近に庵居した。ついで筑紫方面に下つたものらしい。承安元年（五十四歲）には後白河院熊野詣の御途次、住吉へ御幸のところへ參り會うた。惟ふに、それは彼が四國・九州を行脚した歸途であつたらしい。治承四年（六十三歲）伊勢に止錫して福原遷都の事を聞き嘆く。元曆元年（六十七歲）俊成の「千載集」撰述に當り、彼は自詠を高野から送り屆けた。文治二年（六十九歲）東大寺再建勸進を兼ね、再度の奧州行脚を企て、途中鎌倉の賴朝の館を訪うてから平泉の秀衡のもとに赴いた。同五年、都に在つて後德大寺家に出入する日もあつた。この頃、河內の弘川寺を終焉の地と思ひ定めたらしい。御裳濯川歌合を作つて俊成に、宮川歌合を作つて定家にそれ〴〵批判を乞うた。建久元年（七十三歲）弘川寺で入寂（一說洛東双林寺草庵）。以上の事項は、多くの典據から比較的中正と信じ得るものを抄出したまでで、この上、異書により異說を揭げるなら限りがない。歌僧西行の名が後年に及び、益々著明になればなる程、傳記に關する想像說や架空說が無數に附加されて行つた。

【性格】（一）遺傳的精神――武家の出としての西行。彼は父祖の血を享けて、その少年期も多幸な武家的敎育の中に生ひ立つたものらしく、若くして詠歌の道に秀でた彼は、兵衞尉として近侍申した鳥羽上皇の寵幸を受けた。而も彼が出家するに至るまでに、曲折した經過があり、最期の決斷を得るに强い意志を要したことは優に考證し得る。公武の間に漂る暗雲、家人として仕へてゐた西園寺家の策謀、彼を繞る知人の間に打續く訃音――かゝる一般の外的理由が存した外に、種々な副因が彼の無常觀を濃厚ならしめ、それが他方現世執着や煩惱愛と、彼の胸底に於て激しい葛藤を繰返したのであつて、その果てに、「惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは」と云ふ最後の

解決にまで到達し得たのである。これは彼が得道後、引續く忍從的修行によつても十分推測される。難行と云ふこと、また當時に於て必ずしも珍しい事實でも無いのであるが、止觀本位の天台宗の餘勢なほ旺盛な當時にあつては、淨土敎的易行道の流布する餘地は生じて居り、山野を行脚し、岩根を枕とすると云ふ類の悟脫の道は、とかく疎外されがちであつた。而も西行の熊野詣や、大峯入に於ける苦行の跡は、家集中に歷然として傳へられてゐる。「いかになり行くわが身なるらむ」といふ彼の詠嘆の聲には、悲壯以上のものが含められてゐたと解釋してよい。彼は圓頂緇衣の身ながらに、その身中、雄叫びの感じが終始その全血液を支配してゐたもののやうにすら思はれる。かの文覺や賴朝との會見に於て、相手を畏怖せしめ、また弓馬の道を堂々と講じて怯まなかつたといふ傳へは、その資性が偶然にあらはれた一二の場合に過ぎなかつたと思ふ（井蛙抄・東鑑）。「古今著聞集」の中にも、西行を評して「世を遁れ身をすてたれども、心は猶ほ昔に變らず、だて〳〵しかりけるなり」と云ふ一節が傳へられてゐる。

（二）社會的精神――世俗慾・愛憎の情に現はれた西行。出家より入寂まで約五十年の西行は、吉野や高野の山奥に庵居し通した彼でもなければ、あてもない漂泊を續けた一行脚僧でも無かつた。彼は俗世をこそ厭離したが、俊成・定家・家隆・俊惠・慈圓等、時の歌人との



傳西行筆蹟（白川切）

相ふれた情誼は、嗳い人間愛を求め、その中に生きてゐた彼の俤を忍ばしめるに足る。惟ふに、彼も眞實の愛に生きんとしての惱みから遂に妻子を振り捨て、俗社會を逃避した熱情の人であつたと云つてよい。彼は餘りにも眞實であり純情であり過ぎた。その逸話の中に面のあたり主家を罵り、出家の身ながらその從者を毆打し、また知己の態度に對し、兎もすれば憤懣を爆發せしめたと云ふ類の多いのも、敢て無根の事でないであらう。

（三）解脫的精神――自然・藝術・佛の三位を求めた西行。われ〳〵の解脫的要求、證大菩提の求願は、ひろく有爲轉變の現實的繫縛を免れることに存するであらうが、その根據が俗世的名利慾の超越、人間相互の愛慾の絆よりの脫離に存することは否みがたい。彼の自然愛、歌道三味の如き、全く讃佛乘の觀念と相通ひ、時にその心裏に三味の一體をすら實現せしめてゐる。日本の文學は自然の禮讃から始まると云へるなら、故にも西行は典型的の

日本詩人であつたと云つてもよい。西行の花と月とに對する愛着は、全く超人間的と云つてもよい。衆生が三尊の來迎を待つ心にも比すべきである。「思ひ返す悟りや今日は無からまし花に染めおく色なかりせば」と云ふ彼の作は、いかにもよくその點を穿ち得た述懷と云ふに足る。

願はくは花の本にて春死なむそのきさらぎの望月の頃

かうして花月への讃嘆が、彼に於てそのまゝ稱名に等しい事柄ともなつたのであつた。西行の生涯がその信仰生活を度外視して解し難いものであることは勿論、自然禮讃といひ、歌道崇拜といひ、何れも讃佛敬神の思想と斷ち難い關係を持つてゐる。從つて必ずしも一宗一派に偏せず、最初天台止觀の道を學習したが、念佛淨土の敎にも、また眞言祕密の宗旨にも共鳴を見出だし得た。否、彼は敬神の念に於ても人以上に强かつた。

牡鹿鳴く小倉の山の裾近みただ獨りすむわが心かな

吉野山花を長閑に見ましやは憂きが嬉しきわが身なりけり

と云ふやうな觀念歌があり、更に次の如き法身眞證の極致とも云ふべき作も見える。

うら〳〵と死なむずるなと思ひとけば心のやがてさぞと答ふる

【著作】〔和歌〕勅撰集中のもの（千載集十八首、新古今集九十四首、なほ以下十三代集に盡く選入されて、その計百四十二首に及ぶ。特に玉葉集の如きは五十五首の多きを採擇してゐる）○山家和歌集（別項）○西行上人集（西行上人集追加・西行法師家集○山家和歌集參照）○御裳濯川歌合一卷（文治五年伊勢內宮法樂のために作つた自撰三十六番歌合

で、俊成にその判詞を乞ひ、慈圓に淸書さしたので甚だ有名である。十二社歌合の一であると云ふが、他の社の物多く湮滅して傳はらない。群書類從卷二一七に收む）○宮川歌合一卷（右十二社歌合の一で、伊勢外宮法樂の自撰三十六番歌合。この方は定家の判を受けてゐる。「古今著聞集」によれば、この二歌合の卷物を大切にして、常に笈の中に珍藏してゐたと云ふ。群書類從卷二一七に收む）○自讃歌集○撰集抄○夫木抄○四季物語○讃岐歌枕藻鹽草等。〔其他〕贈定家卿文（歌合に關して西行より定家に贈つた書簡、假名文で書かれてゐる。群書類從卷一四三所收）○西公談抄一卷（西行談抄・蓮阿記などとも云ふ。西行述に假託された歌論書とされてゐる。群書類從第三〇〇所載）。

【歌風】（一）短歌旋律の獲得。後鳥羽院が「俊賴が後には釋阿西行俊惠なり」と四歌人を擧げ給ひ、定家が「慈鎭西行などは歌よみ」と兩聖を並稱するも、つまり歌の旋律の中に沈潛し陶醉し得る生得の歌よみなる特色を賞揚したものと云つてよい。順德院の御批評の中にも「ふつ〳〵と言ひたるが聞きよきなり」とあり、俊成の御裳濯川歌合判詞に「ともなくうるはし」とある如き平淡な特長、また敍上の形式を領得した一體一味の呼吸から齎されるものと云つてよからう。（二）修辭上の技巧及び特色。併し彼の作は決して無技巧と云ふ批評で掩ふことは出來ない。勅撰集に選入された謂はゆる名歌と稱されるものには、却つて緣語掛詞等の弊すらが認められる。新奇な着想に對し、新奇な表現に淫した類のもの、また尠しとしない。その他、句法上の特色としては、初句止の多いこと（例へば「わりなしや」「いかにせん」と云ふ類）、命令詞使用の多いことなどは「聞くたびに」などと云ふ如き

提疑法的修辭の目立つこと（例へば「いかゞせん」「いかにぞや」等）、第四句と第五句に於ける並立的句法の使用著しきこと等を揭げ得る。要するに、彼は時代の歌人等と同樣に、修辭上の苦心を嘗めてゐる。自由な用語、豐富な歌詞、放膽に見える句法の如きも、鍛錬後に得たものと見るべきであらう。（三）靜觀長高の風致。次に內面的特長として、一般に主觀的である中にも、悠揚として迫らず、麗朗の趣を具へた作が多い。御裳濯川歌合判詞の中にも「うるはしく長高く見ゆ」と云ふ評語が見えるが、いかにも情熱的內容の作すら何が遙に人麿を凌駕してゐると云つてよい。勿論その歌風には、「おぼろげの人のまねびなんどすべき」（後鳥羽院御口傳）でない超凡性が存するけれど、その精神はわが中世より近世に亙り弘く民族を支配し得たもので、半面、上代精神復興の氣運の中に於てすら、なほ彼に對する崇拜敬仰の思想は絕えなかつたと云つてよい。彼の歌風は新古今調と共に古今調をも含め得てゐる點、屢々貫之と並稱され、却つて俊成・定家の家集以上、後世堂上派から三代集に準じて聖典視されてゐた觀すらある。頓阿・宗祇・芭蕉・似雲等は、殊更、人としての

○西行法師傳 梅澤和軒 ○異本山家集附錄西行論 藤岡作太郎 ○西行法師全集附錄歌僧西行の生涯 尾山篤次郎 ○西行上人歌集新釋附錄系圖年譜地名考研究書目 尾崎久彌筆。

【參考】台記○百錬抄○吾妻鏡○今物語○十訓抄○徒然草○古今著聞集○井蛙抄○耳底記○增鏡○保元物語○本朝通鑑○扶桑隱逸傳○本朝遯史○本朝高僧傳○百人一首一夕話○和漢合運○扶桑拾葉集系圖○大日本史料（四ノ三）○拾玉集○長秋詠藻○拾遺愚草○草庵集○後鳥羽院御口傳○八雲御抄○愚祕抄○東野州聞書○兼載雜談

本は異同甚しく、順序の違ひ、記事の出入等も多い。

〔以上小木〕

【繪卷】この物語の繪卷には數種あるが、時代も古く製作もすぐれてゐるのは、土佐經隆筆と傳ふるもので、もと四卷本らしいが、今は後半を逸して第一卷が尾州德川侯、第二卷が蜂須賀侯の所藏となつてゐる。描寫頗る纖秀

提疑法的修辭の目立つこと(例へば「いかゞせん」「いかにぞや」等)、第四句と第五句に於ける並立的句法の使用著しきこと等を掲げ得る。要するに、彼は時代の歌人等と同樣に、修辭上の苦心を嘗めてゐる。自由な用語、豐富な歌詞、放膽に見える句法の如きも、鍛錬後に得たものと見るべきであらう。(三)靜觀長高の風致。次に內面的特長として、一般に主觀的である中にも、悠揚として迫らず、麗朗の趣を具へた作が多い。御裳濯川歌合判詞の中にも「うるはしく長高く見ゆ」と云ふ評語が見えるが、いかにも情熱的內容の作すら何處となく餘裕が殘され、長高逸脫の調べが現はれてゐる。世外に超出し、無限の愛情を湛へてゐる達人の心の返照が見える。

おのづから月宿るべきひまもなく池の蓮に花咲きにけり

ながむれば袖にも露ぞこぼれける外面の小田の秋の夕ぐれ

かく素材は自然物であらうとも、さうした主觀の滲透が著しい。(四)出離解脫の生活の反映。前項の特色の如き、俊成や定家等にも無いではないが、彼の體驗から生み出された大悟徹底の作に至つては、容易に摸倣追隨を許さない。

訪ふ人も思ひ絕えたる山里の寂しさ無くば住み憂からまし

待たれつる入相の鐘の音すなり明日もやあらば聞かんとすらむ

更けにけるわが世のかげを思ふまにはるかに月の傾きにける

【史的地位・影響】わが文學史上に於ける彼の地位は、かの人麿に匹敵されてゐる。しかもその後世に於ける影響から見れば、西行の方が遙に人麿を凌駕してゐると云つてよい。勿論その歌風には、「おぼろげの人のまねびなんどすべき」(後鳥羽院御口傳)でない超凡性が存するけれど、その精神はわが中世より近世に亙り弘く民族を支配し得たもので、半面、上代精神復興の氣運の中に於てすら、なほ彼に對する崇拜敬仰の思想は絕えなかつたと云つてよい。彼の歌風は新古今調と共に古今調をも含め得てゐる點、屢々貫之と並稱され、却つて俊成・定家の家集以上、後世堂上派から三代集に準じて聖典視されてゐた觀すらある。頓阿・宗祇・芭蕉・似雲等は、殊更、人としての西行の影響を被つた文人である。特に、似雲(別項)は、今西行とさへ諢名された程の西行崇拜の歌人であつた。

【西行の經歷逸話等文學化した作】〔物語〕西行物語(別項)○西行和歌修行三卷(西行自著の體裁で、發心の上、和歌修行に志すまでの經緯を敍したもの。天和二年の板本あるのみ)。〔謠曲〕「雨月」「江口」「西行櫻」「松山天狗」がある(西行物の謠曲參照)。〔假名草子〕西行一代記(寬文十三年刊)〔浮世草子〕西行法師墨染櫻(錦文流作)。〔淨瑠璃〕軍法富士見西行(並木千柳等作)○歌枕隱屏風(宮古路加賀太夫直傳)○傾城旅衣江口の道行(江戸半太夫直傳)○男江口女西行花吹雪富士菅笠(壕越二三治作)○姿のうつし繪(宮古路薗八直傳)○戀計文殊智惠輪(河竹默阿彌作)○時雨西行(同上)。〔讀本・草雙紙等〕雨月物語(白峯)(讀本、上田秋成)○藤簍册子(月の前)(上田秋成)○西行法師一代記(靑本)○富士見西行(赤本)○今戸土產女西行(草雙紙、曲亭馬琴)○賴豪阿闍梨怪鼠傳(讀本、馬琴)○西行法師一代記(讀本、柳亭種彥)○二日物語(小說、幸田露伴)。

【研究書】詩人西行中龍兒○西行法師 大道寺直○西行法師傳 梅澤和軒○異本山家集附錄西行論 藤岡作太郎○西行法師全集附錄歌僧西行の生涯 尾山篤次郎○西行上人歌集新釋附錄系圖年譜地名考研究書目 尾崎久彌等。

【參考】台記○百錬抄○吾妻鏡○今物語○十訓抄○徒然草○古今著聞集○井蛙抄○耳底記○增鏡○保元物語○本朝通鑑○扶桑隱逸傳○本朝遯史○本朝高僧傳○百人一首一夕話○和漢合運○扶桑拾葉集系圖○大日本史料(四ノ三)○拾玉集○長秋詠藻○拾遺愚草○草庵集○後鳥羽院御口傳○八雲御抄○愚祕抄○東野州聞書○兼載雜談○西行法師論 兒山信一(國語と國文學一ノ一)○西行法師に就いて 土居光知(國語と國文學日本精神研究號)〔齋藤(清)〕

西行櫻 さいぎやうざくら 「西行物の謠曲」を見よ。

西行物語 さいぎやうものがたり 【作者】未詳【別名】西行法師繪詞・西行記・西行四季物語・西行一生涯草紙【成立】未詳【諸本】繪卷物に數種ある(後出)。寶永五戊子孟春中旬雒下書肆林正五郎開板の奧書あるものは四卷で、「西行四季物語」と題し、繪卷と大體同樣だがやゝ違つてゐる。「西行物語」とした刊本には、正保三年の二卷本、元祿五年及び寶永二年の三卷本がある。續群書類從卷九四二に二卷として收め、奧書に「文明十二年二月中半記之」とある。水戸彰考館藏本は「西行一生涯草紙」と題して六卷、史籍集覽に收む。

【解說】西行の一生涯の事蹟或は傳說逸話を小說風に記したもので歌を多く入れてゐる。即ち出家の事から、吉野・熊野・伊勢を巡り、中國・四國・東國の旅行、その娘の出家の事、西行の往生等について記してゐる。しかし實記でないことは黑川春村の證がある。その諸本は異同甚しく、順序の違ひ、記事の出入等も多い。〔以上小木〕

【繪卷】この物語の繪卷には數種あるが、時代も古く製作もすぐれてゐるのは、土佐經隆筆と傳ふるもので、もと四卷本らしいが、今は後半を逸して第一卷が尾州德川侯、第二卷が蜂須賀侯の所藏となつてゐる。描寫頗る纖秀なもので、人物の姿態表現など細かなところまで練熟した筆致を以て巧みに描いてをり、殊に山水描寫に大和繪特有の情趣を漂はせ、屋臺引きに素描風の獨自な細線を用ひて整然と畫き現はして行く點など、鎌倉中期の製作として典型的な製作である。而して詩人西行の一期を畫いて、東西漂泊の旅情を表現する

西行物語繪卷(蜂須賀侯爵藏)

に、この作家の技倆は頗る相應しいものであつて、他の繪卷に見られぬほど感覺が清爽で情趣が多い。この傳經隆本の外に、海田采女佑相保の筆といふ四卷乃至五卷本も世に行はれてゐるが、これ等は畫風も時代も下るものである。この海田采女のものを寫した宗達筆の繪卷もまた著名で、毛利公爵所藏の四卷が一般に知られてゐる。帝國圖書館にも五卷の繪卷がある。鎌倉時代は偉人崇拜の思想も盛んで、祖師繪傳なども流行した時で、「西行物語繪卷」も亦、この趨勢の中から生まれたものとおぼしく、その後、足利期以降弘く行はれて、幾種類もこの種のものが出來てゐたらしい。

〔以上田中(一)〕

西行物の謠曲（さいぎやうもののえうきよく）

【曲目】西行法師の和歌又はその作と傳へられてゐる「撰集抄」を題材とした謠曲に、「雨月」「江口」「西行櫻」「松山天狗」がある。【諸本】現行諸流謠本。謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。

【雨月】四番目〔作者〕金春禪竹（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔内容〕西行法師が明神に參詣するため、住吉に來て宿を求めると、老夫婦が、姥（ツレ）は月を愛して板間を殘さうといひ、尉（前ジテ）は雨音を好んで軒端を葺かうといひ、互に言ひ爭つて、思はず「賤が軒端を葺きぞわづらふ」といふ歌の下句を得、西行にこの上句をつければお宿をしようといふ。西行は、「月はもれ雨はたまれとにかくに」とつけた。老夫婦は喜んだ。その夜、住吉社人（後ジテ）に住吉明神が乘り移つて出で、西行の詠歌に感じ、舞を舞ふといふ曲。複式夢幻能。五流現行。

【江口】三番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文）〔内容〕諸國一見の僧（ワキ）が都から天王寺に參る途次、江口の君の舊跡に行んで、西行法師が宿を斷られて詠んだ歌、「世の中を厭ふまでこそかたからめ假の宿りを惜しむ君かな」を口ずさんでゐると、一人の女性（前ジテ）が出て來て、西行の歌を吟ずるほどならば、何故その時の江口君の心持を表はした返歌「世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ」をお吟じ下さらないのですと難詰し、自分はその江口君の幽靈ですと言つて消え失せる。その夜、僧が回向してゐると、江口君（後ジテ）が多くの遊女（ツレ）と共に舟に乘つて水上に浮び出で、歌舞を奏して、やがて歸るかと思ふと、今までの江口君は普賢菩薩となり、舟は白象と化し、白雲に乘つて西の空に昇つて行つたといふ曲。複式夢幻能。五流現行。

【西行櫻】三番目〔作者〕金春禪竹（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔内容〕下京の男達（ワキヅレ）が西山西行庵の櫻見に行く。西行（ワキ）は「花見むと群れつつ人の來るのみぞあたら櫻のとがにはありける」と詠んで、少し不本意には思つたが、その優しい志を愛して、ともに花の木蔭に寢ると、その夜、西行の夢に、櫻の精（シテ）が白髮の老人となつて現はれ、花に咎のない事を申し開いて舞を舞ひ、夜の明け方消え去つたといふ曲。單式夢幻能。五流現行。

【松山天狗】五番目〔作者〕不明〔内容〕西行法師（ワキ）が讃岐國に下り、崇德院の御廟所松山に參拜しようとすると、一老翁（前ジテ）が來て案内をする。西行は院の御最期を悼み涙ながらに詠歌を捧げる。老翁は院のこゝにおはした御時、參内する者はただ天狗ばかりであつたと語つて、影の如くに消え去る。その夜、西行の詠歌に感じて、崇德院（後ジテ）が現はれ給ふと、白峯の大天狗相模坊（ツレ）が小天狗を引連れて出で、院をお慰め申したといふ曲。複式夢幻能。金剛現行。

【構想】以上四曲、いづれも作者の工夫した所が多い。まづ「雨月」では、原據「撰集抄」には江口の老尼が時雨を防がうとして板をもちあぐんでゐるのを見て、西行が下句をいひ出したとあるのを、これには老夫婦の雨月の爭ひとし、場所をも住吉にかへて後段に和歌の守護神住吉明神を出す前提として居り、「江口」では、江口君との贈答歌に、普賢菩薩化現の遊女説話（撰集抄卷六、古事談、十訓抄にも）を結びつけて居り、「西行櫻」では、僅か一首の和歌を本として、前には花に浮かれ歩く都男を出し、後には櫻の精を閑寂な老人姿で出し、對照の興味を加へて居り、「松山天狗」では、天狗を出して、崇德院御憤怒の狀を舞臺化してゐる。「松山天狗」は別として、他の三曲は謠曲全體を通じてのよい作である。

【參考】謠曲評釋大和田建樹〇謠曲大觀　佐成謙太郎

裁許狀（さいきよじやう）「申狀（まうしじやう）」を見よ。

齋宮女御（さいぐうにようご）

歌人（三十六歌仙の一）【本名】徽子女王（きしこのにようおう）【別稱】承香殿女御【生歿】延長七年に御生誕、寛和元年（一六四五）薨去。享年五十七。【閲歷】承平六年から八年間伊勢の齋宮に在任せられ、天慶八年御母の喪にあつて退出された。天曆元年入内して、同三年村上天皇の女御となられた。同八年御父重明親王薨去、應和二年從四位上に敍せられ、貞元元年、御子選子内親王が齋宮の任に就かれた。同年十月二十七日、野宮にて庚申の夜「松風入夜琴」といふ題で、「琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけむ」と詠まれた（拾遺集）。群行には女御も共に下られたが、家集に、「伊勢の後の御くだりのたび昔をおぼしいでて」とある歌を、「拾遺集」では、「圓融院の御時齋宮下り侍りけるに母の前の齋宮もろともに越え侍りて」とあり、別に「新古今集」に「むすめの齋宮に具して下り侍りて云々」とある。家集に「忍びて下り給へれば尼になり給ひぬと聞きて云々」とあるのは後の度であらう。長岡に住んで久しく參内せられぬ頃、主上から御製を頂いたが、御返歌に「秋の都の外に住む身は」とあつたので、時の人が后を望む氣色があると申した。女御は恥ぢて、この歌を御集から除かれたといふ（十訓抄）。

【作品】家集「齋宮女御集」。群書類從卷二七一所載本と歌仙歌集本とは全く等しく、歌の數百二首で、詞書は三人稱で書かれてゐる。馬内侍との贈答歌が二三あり、齋院との御贈答歌もあつて「新續古今集」に選子内親王とある。集中、雛遊の事が見えるが、契沖は、「物にかけるは此れを始めか」と云つてゐる。なほ勅撰集に入つた歌は、拾遺四・後拾遺七、その他凡そ三十一首。

【參考】歌仙傳〇本朝皇胤紹運錄〇大日本史七九〇歌道人物志〇河社　〔西下〕

細君（さいくん）小說【作者】坪内逍遙【發表】明治二十二年一月、「國民之友」。【刊行】同二十三年、民友社（美妙の「蝴蝶」と合册）。逍遙選集別册第一卷・現代日本文學全集（坪内逍遙集）所收。

【梗概】洋行帰りの羽振りのよい某資産家の細君が、里方の繼母の無心が重なり、夫に知られて離緣となつた經路を書いたものである。夫が收入の多いに任せて贅澤な生活をしたので、借金に苦しめられるやうになつたが、世間體をくづさうとはしない。その表面の華やかさを見て、貧しい細君の里方では、なさぬ仲の繼母が時々無心を申込む。多くの場合、細君は間に合せて來たが、度重なると夫の手前さうも云へず、殊に夫の不機嫌な折柄、又四十圓の無心を言ひ出されたので、夫に隱して、小間使お園に旨を含め、夜そつと自分の衣服を質屋に持ち込ませた。是はとふつたが、識に現はれる自然が藝術に現はれるのであるから、嚴格に云へば再現藝術はない。リップスの謂ふ描寫藝術も、それが現はすところの再現的形相は、單に客觀の再生描寫としてでなく、孤立的な理念として理解されるものである。

〔村田〕

西國曲（さいこくぶり）

俳諧集　七册【編者】雲水燕説集・向井氏紫筍撰・久野氏梅風訂・小山氏草合校とあれど、露川の指導の下に成つてゐる事は勿論である。【名義】凡例によれば、西國の風流（ふりう）といふ義である。作者不知として持つてはゐるが、支考の「西華集」（別項）と同じやうな性質のものである。漸次蕉門の故老を失つた享保時代の各地の蕉風の模樣、また露川一派の勢力範圍も知られて、露川研究には北國曲（ほくこくぶり）（別項）と共に、缺くべからざる書である。

〔萩原〕

西國立志編（さいこくりつしへん）

飜譯書　十一册【譯者】中村敬宇【原著】サムエル・スマイルス（Samuel Smiles）の「自助論」（Self Help）。敬宇は「原名自助論」と傍註してゐる。その題名は内容を示したものである。【刊行】明治

ビ學術ヲ勉修スル事ヲ論ズ、（第六編）委業ヲ勉修スル人ヲ論ズ、（第七編）貴爵ノ家ヲ創メタル人ヲ論ズ、（第八編）剛毅ヲ論ズ、（第九編）職事ヲ務ムル人ヲ論ズ、（第十編）金錢ノ當然ノ用及ソノ妄用ヲ論ズ、（第十一編）自ラ修ルノ事ヲ論ズ并ニ難易ヲ論ズ、（第十二編）儀範（又曰典型）ヲ、ズ、（第十三編）品行ヲ論ズ卽眞正ノ君子ヲ論ズ

等である。なほ敬宇が右の中の數册に載せた序跋は、彼の國民指導の思想的根據を見るの一助として注目に値ひする。【影響】影響感化の大なること福澤翁の著譯と並んで空前と

細君が、里方の繼母の無心が重なり、夫に知られて離縁となつた經路を書いたものである。夫が收入の多いに任せて贅澤な生活をしたので、借金に苦しめられるやうになつたが、世間體をくづさうとはしない。その表面の華やかさを見て、貧しい細君の里方では、なさぬ仲の繼母が時々無心を申込む。多くの場合、細君は間に合せて來たが、度重なると夫の手前さうも云へず、殊に夫の不機嫌な折柄、又四十圓の無心を言ひ出されたので、夫に隱して、小間使お園に旨を含め、夜そつと自分の衣服を質屋に持ち込ませた迄はよかつたが、その歸途、お園は盜人に金を欺き取られたので、一切の祕密が夫にわかり、申譯ないとお園が井戸へ投身した事などから、細君は離縁された。そのあとで、夫は洋行中に出來てゐた女がフランスから賴つて來たのを新夫人としたと傳へられた。

【批評】里方の繼母と、夫との間に立つて苦勞する細君の境遇が哀れ深く描かれ、作者の眞摯な心持がこの作を生かしてゐる。田山花袋は「書生氣質」よりも、寧ろ本篇を可とし、より整つた價値があると云つた。短篇小說の少い逍遙には珍らしい作である。〔高須〕

細見（さい）「吉原細見」をよ。

再現藝術（さいげんげいじゅつ）藝術論〔獨〕Wiedergebungskunst【解說】空間的に形成される藝術の中、彫刻・繪畫等の如く、その直觀的な現はれかたが、現實的具體的な感官的形相を再生してゐるか、又はその變形が描出されてゐるとき、それ等を再現藝術と呼び、客觀描寫として吾々は理解するのであるが、しかし藝術に現はされる自然的現實は、全く自然そのものではなく又摸倣でもない。我々の意識に現はれる自然が藝術に現はれるのであるから、嚴格に云へば再現藝術はない。リップスの謂ふ描寫藝術も、それが現はすところの再現的形相は、單に客觀の再生描寫としてでなく、孤立的な理念として理解されるものである。〔村田〕

西國曲（さいこくぶり）俳諧集　七册【編者】雲水燕說集・向井氏紫筍撰・久野氏梅風訂・小山氏草合校とあれど、露川の指導の下に成つてゐる事は勿論である。【名義】凡例によれば、西國の風流（ふうり）といふ義である。作者不知としてその國の方言を讀み入れた句を、一句づつ諸國の曲（ふし）の初めに置いてゐる。【刊行】享保二年【諸本】蕉門俳諧續集（俳書大系篇外）所收【內容】露川・燕說が西國十五ケ國を廻つた俳諧行脚の集である。卷之一には伊勢より周防までの記を揭げ、發句百九、題文八篇を收め、卷之二には長門より筑前・筑後・肥前・肥後・豐前・豐後を遍歷して、再び伊勢に歸るまでの記事を揭げ、發句百四十一、題文九篇を收め、卷之三には攝津國曲・播磨國曲・美作國曲・備前國曲・備中國曲・備後國曲・安藝國曲・周防國曲・長門國曲の連句二十卷（表・三ツ物）、發句百五十五を收め、卷之四には筑前國曲・筑後國曲・肥前國曲・肥後國曲・豐後國曲・豐前國曲の連句十七卷（表・三ツ物）、發句百八十二を收め、卷之五には諸邦發句と題し、東海・東山・奧羽・北越の句三百三十七を採錄し、卷之六には同じく諸邦の發句三百八十二を採錄し、卷之七には連句首尾十五卷（尾張・伊賀・伊勢）を集めてゐる。前僧正早才の序、享保二年二月釋氏燕說の序、凡例七ケ條、跋として享保二年五月七十一老衰杖（杉風）の一文を添へて、首尾の體裁を飾つてゐる。【價値】可なりな內容を持つてはゐるが、支考の「西華集」（別項）と同じやうな性質のものである。漸次蕉門の故老を失つた享保時代の各地の蕉風の模樣、また露川一派の勢力範圍も知られて、露川研究には北國曲（別項）と共に、缺くべからざる書である。〔萩原〕

西國立志編（さいこくりつしへん）飜譯書　十一册【譯者】中村敬宇【原著】サムエル・スマイルス（Samuel Smiles）の「自助論」（Self Help）。敬宇は「原名自助論」と傍註してゐる。その題名は內容を示したものである。【刊行】明治四年七月靜岡にて刊行。同十年二月、洋裝一册の合本が複製された。活字版になつてからも、明治の前半期を通じ絕えず複製されてゐる。僞版も少からず行はれ、今日種々の型の本が坊間に散見する。【由來】原書は明治元年四月、敬宇が倫敦を去る時、友人フリーランドが餞別として贈つたものである。船中、これを耽讀して感激措く能はず、我が國青年の修養訓たらしめんと欲し、世事多端の際、靜岡に在つて學務の傍ら飜譯に從ひ、明治三年十月末、約十ケ月を費して成つた。藩の執政大久保一翁に諮り、藩金若干を得、更に藩校の職員木平謙一郎及び夫人の助力によつて世に送り出された。【內容】飜譯の底本となつたものは、西曆一八六七年版で、從つて譯書には原序二篇を譯載してゐる。木版本には往々原書第一版の序文を缺くものがある。全部が十三編に分れ、每編若干の訓言と數多くの實話とを收めてある。即ち、

（第一編）邦國及人民ノ自ラ助ル事ヲ論ズ、（第二編）新機器ヲ發明創造スル人ヲ論ズ、（第三編）三陶工ノ傳、（第四編）勤勉シテ心ヲ用ヒ恒久ニ耐テ業ヲ作ス事ヲ論ズ、（第五編）幇助即機會ヲ論ズ及ビ學術ヲ勉修スル事ヲ論ズ、（第六編）專業ヲ勉修スル人ヲ論ズ、（第七編）貴爵ノ家ヲ創メタル人ヲ論ズ、（第八編）剛毅ヲ論ズ、（第九編）職事ヲ務ムル人ヲ論ズ、（第十編）金錢ノ當然ノ用及ソノ妄用ヲ論ズ、（第十一編）自ラ修ルノ事ヲ論ズ并ニ難易ヲ論ズ、（第十二編）儀範（又曰典型）ヲ、ズ、（第十三編）品行ヲ論ズ卽眞正ノ君子ヲ論ズ

等である。なほ敬宇が右の中の數册に載せた序跋は、彼の國民指導の思想的根據を見るの一助として注目に値ひする。【影響】影響感化の大なること福澤翁の著譯と並んで空前と稱せられる。第一に立志編といふ名がいゝ。當初彼は「立志廣說」と題して居つたさうだ。この題名では、或はあれほど擴がらなかつたかも知れない。第二にあの名文が當時の人心を魅惑したと云はれる。併し何よりも本書を廣く天下に散布せしめたものは時勢の力である。四民平等自由の世の中となつたとは云へ未だ封建の餘習は殘つてゐる。封建時代では我慢して來たが、新しき御時勢となつては、少しく才力を有する者は何等か進んで事を爲さんと欲するに至るは當然である。其處へ本書が現はれたのである。彼は敎へる、諸君の前に拓かれた約束の地はこの通り廣いと。又言ふ、奮つて起て、如何なる運命でも思ふ儘に開いて行けと。更に敎へて言ふ、幾ら努力しても行先が判らぬなどと言ふな、天は自ら助くる者を助くると。かくて本書は、これ等の道理を單なる抽象的論言の形でなく、今古の歷史上から三百有餘の活きた人物を拉し來つて、具さにその成功の來歷を說いてゐる。今讀んでも、立派な敎訓である。道に志し、行先を識らざる當時の青年が、本書に接して感激措く所を知らなかつたのは想像に餘りあ

る。福澤が明治の青年に智の世界を見せたと云ひ得るなら、敬宇は正に德の世界を見せたものと謂つていゝ。

【附記】明治四年七月公刊された「西國立志編」中の一節が、早くも六年春に劇化された。作者は京都の佐橋富三郎、京都の出身で主として大阪方の作者として活躍し、努めて新作を取入れた當時劇作界の新進である。この人は五年十一月に免許を得、六年一月に「其粉色陶器交易」を開版し、續いて翌二月に「鞋補童教學」を開版した。前者は「立志編」第三編陶工培那德・巴律西の條を、又後者は第十二編の鞋工邦治の事蹟を飜案したものである。各三册より成り、共に極彩色の錦繪を二面づつ口繪として入れてある。可なりグロテスクなものである。而してこれ等の脚本は、前者は京都四條北側の劇場で、市川右團次・片岡我童一派に依つて、後者は同時に南側の劇場で實川延若・市川荒五郎一派に依つて競演されたと云ふが、敬宇と關係深き東京新報の六年三月號はその盛況を報じてゐるから、開版と同時に上場されたものと見える。併しこれは本書の魅力に因ると云ふよりも、佐橋の勢力の結果と見るべきであらう。

【參考】中村正直傳 石井研堂　〔吉野〕

在五中將 「業平」を見よ。

採輯諸國風土記 地誌 一卷 【著者】狩谷棭齋 【組織・內容】「釋日本紀」「萬葉集註釋」以下の諸書に引用せられた「古風土記」の逸文を集め、各國別として九十餘條を錄してゐる。【改訂增補】本書に對して、その遺漏を集錄したものに、木村正辭の「採輯諸國風土記補遺」一卷があり、東洋文庫に藏せられてゐる。これには慶應元年八月の自序がある。棭齋の「採輯諸國風土記」と、正辭の「補遺」とを併せ、栗田寬の「古風土記逸文」と編者の所見とを加へ、漢文の逸文には釋文を添へて、「改訂增補採輯諸國風土記」と稱し、「日本古典全集」の一册として、昭和三年三月に刊行せられた。　〔武田〕

稅所敦子 歌人 【生歿】文政八年三月京都鴨河の東錦織村に生れ、明治三十三年二月四日、東京に歿す。享年七十六。【墓所】青山墓地 【閱歷】京都の林氏に生れ、二十歳で、薩摩藩士稅所篤之の後妻となつたが、二十八歳で夫を亡つた後は、鹿兒島に赴いて姑に孝養を盡した。藩侯齊彬これを賞し、召して世子の傅とした。幾くもなく世子夭死し、敦子悲痛の極殉死しようとしたが、姑に留められて辛うじて止まつた。藩侯久光の女香蘭院が近衞忠房に嫁する際、敦子はこれに傅女となつた。明治八年坤宮才女を召され、敦子は高崎正風に薦められて權掌侍となり、皇后・皇太后に事へまつりて文學和歌の諸務を掌つたが、老年腸を病み、從五位掌侍を以て歿した。歌は幼時より好み、嵯峨の虛空藏尊に參籠して名手たらんことを祈つたのは、その十一歳の時であつた。千種有功これを聞いて侍女とした。後に八田知紀と交り、高崎正風とは最も親しかつた。敦子は又佛敎を信じ、福田行誡師に就いて敎を聽いた。才操兼備の稀に見る婦人であつた。【著作】歌集「みゝ垣の下草」「同拾遺」。　〔以上相原〕

【作風】女史は歌文をよくしたが、特に歌に秀で、明治初期末から中期にかけて、所謂宮內省派として高崎正風・小出粲等と共に、その頃の代表的歌人であつた。歌風は高い婦德と宮廷生活から來る優雅貞淑の趣を具へて、滑かに襟を正して讀むべき作が多い。佛敎に思を潛めたので、それに關する歌、新事物を取り入れた歌も少くない。香川景樹の善き所を承けついで、その派の歌を玉成したものとも言へる。左にその二三を擧げよう。

大君の大御硯になる見れば玉にもまさる石はありけり

雨はれて虹たちわたる夏山の青葉が上になくほととぎす

有明の月しづかなる窓をあけて萩の上葉の露を見るかな

【參考】稅所敦子集附記 佐佐木信綱（現代短歌全集第二卷）　〔以上金子〕

西條八十 詩人 【閱歷】明治二十五年一月、東京牛込に生れた。早稻田中學を經て、大正四年七月早稻田大學英文科卒業、別に東京帝國大學文科大學國文科選科に在學したこともある。大正十年早稻田大學文學部講師となり佛文學佛詩を講じ、その後助敎授となり、又佛蘭西に遊んだ。三木露風の雜誌「未來」に參加して、初め露風一派に屬したが、轉じて雜誌「青盃」（後「假面」と改題）の同人となり、「假面」廢刊後は雜誌「詩人」の同人となり、更に自ら「白孔雀」「愛誦」等を主宰した。【作品】大正八年、詩集「砂金」を公にし、次いで同九年、詩集「白孔雀」と「靜なる眉」とを出し、爾來、「鸚鵡と時計」「空の羊」「見知らぬ愛人」「海邊の墓」「哀唱」「巴里小曲集」「蠟人形」「彼女」「西條八十童謠全集」「西條八十詩集」「丘に想ふ」「赤き獵衣」「美しき喪失」、その他多數の著譯集がある。

【批評】三木露風の傘下から出たが、必ずしもその感化に育まれたのではなく、作風の系統は橫瀨夜雨・伊良子淸白・薄田泣菫のあとを引いてゐる。浪漫的幻想に出立し、終始その傾向の轍の上を趁つてゐて水際立つた展開はない。小曲・童謠等に於ては同じ詩情の反覆再說が試みられるのみで、却つてその本然の詩想の自然の展開の妨げとなつてゐるものが多いが、「砂金」から「美しき喪失」に及ぶその本領とする所の過程を見ると、極めて徐々たる展開がある。心的革命よりも年齡に因つて推移的進展が行はれる性の詩人である。現今では却つて民謠作家として有名である。　〔日夏〕

在津紀事 隨筆 二卷 【著者】賴惟完（春水）【刊行】明治十年 【解說】賴春水が壯時大阪で勤學した頃の事を、三十年後安藝に歸官してから追懷して記したもので、當時師友として交遊した人々の言動・人物等を列擧した漢文の隨筆である。片山北海及び混沌社同人、中井竹山・履軒兄弟、尾藤二洲・葛子琴・江田世恭・古林立菴・山口剛齋・麻田剛立・福原五岳・月岡雪鼎・趙陶齋・韓大年・平井紀宗・木村蒹葭堂・荒井鳴門・小石元俊・龜井南溟・古賀精里・河野恕齋等のことが斷片的に面白く書かれ、また自己が家君に從つて望嶽・觀花の二壯遊をしたことや、書賈菊宗が新古唐本・墨帖類を、盛んに取扱つてゐたことなども記してある。男賴襄の校を經て、その父の「春水遺稿別錄」として刊行されたものを、更に獨立の書として刊行されたのである。卷末に篠崎彌の識語と、明治十年七月、孫賴復の小跋がある。　〔和田〕

採桑老 雅樂舞曲 【名稱】桑を採る老翁を表はした舞であるからこの名がある。「さいしやうらう」とも訓み、又採老子ともいふ。【性質】左方樂。古樂、中曲。盤涉調に屬する。四帖又は五帖の舞子各十二人。舞があり一人で舞ふ。特殊なる白色の裝束を着け、帽をかぶり、老翁の假面をつけ、鳩杖を持ち、行步に堪へない狀をなして舞ふ。舞の途中で四度び詠を唱へる。卽ち「三十情方盛、四十氣力微」「五十鬢毛白、六十行步宜」「七十懸杖立、八十座巍々」「九十得重病、百歲死無疑」であるが、最後の句は忌んで今世では唱へない。答舞には新靺鞨を用ひる。

【沿革】これは起原を支那となす說と、朝鮮となす說と二つある。白石の「樂考」に「景範云、百濟國樂。統秋云、唐に採桑子といふと見えたり。或る人、唐樂相傳樂子名はあれ

裁斷批評 文學論 【佛】La Critique de Jugement 【解說】批評家が或る一定の批評の基準を定めて、この基準に由つて判斷するのであつて、この批評には凡そ二種の區別が考へられる。（I）は文藝的裁斷批評である。これは評者が或る文藝上の規律を定め、文學はかくあるべきもの、劇や詩はかくの如きものと定めて、その標準から觀察してこれに外れてゐるものをば價値なきものとして判定を下すのである。獨斷批評とも呼ばるる所以である。この種の批評のオーソリティは希臘のアリストトルの「詩論」であり、近評を三種に區別して、その一は批評の標準を評者自身の意識に置くもの、その二は標準を批評せらるべき對象の中に置くもの、第三は卽ちその對象物の社會的地位、他との關係に標準を置くものとしてあるが、その第三種の批評こそは、卽ち社會價値的裁斷批評を指してゐるのである。　〔宮島〕

最澄 學僧 【俗姓】三津首氏、幼名廣野 【諡號】傳敎大師（山家大師は天台一家の尊稱）【生歿】神護景雲元年八月十八日近江滋賀郡古市鄕に生れ、弘仁十三年（一四八二）六月四日比叡山中道院に歿す。享年五十六。【閱歷】喜した。かくて益々その敎籍を獲んとし、東大寺鑑眞大和上の將來せる「摩訶止觀」「法華玄義」「法華文句」「四敎儀」「維摩經疏」を得て書寫講究した。その後延曆十二年（二十七歲）より延曆二十一年（三十六歲）までは最澄の經營時代と見るべく、延曆十二年正月文殊堂の慶讚供養、翌十三年九月根本中堂初度の供養あり、桓武天皇親しく臨御あり、大導師善珠以下高僧碩學數多參列した。最澄の聲譽茲に揚り、延曆十六年內供奉に補せられて、近江の正稅を以て山供に充てられた。翌十七年十一月比叡山上に法華十講を修し、二十一年和氣

があり一人で舞ふ。特殊なる白色の裝束を着け、帽をかぶり、老翁の假面をつけ、鳩杖を持ち、行歩に堪へない狀をなして舞ふ。舞の途中で四度び詠を唱へる。即ち「三十情方盛、四十氣力微」「五十鬢毛白、六十行歩宜」「七十懸レ杖立、八十座巍々」「九十得重病、百歳死無レ疑」であるが、最後の句は忌んで今世では唱へない。答舞には新鞆鞨を用ひる。

【沿革】これは起原を支那となす説と、朝鮮となす説と二つある。白石の「樂考」に「景範云、百濟國樂。統秋云、唐に採桑子といふと見えたり。按ずるに、唐宋曲中採桑と云名はあれども、曲によりて起れる所別なり、百濟樂といふ説宜しきに似たり」とあり、又「大日本史」禮樂志に「按、教訓抄・體源抄、並以二本曲一爲二唐樂一、考二唐書通典一、有二採桑曲一、云商人等因二三洲曲一而所レ作也、古樂苑作二採桑度一、又羯鼓錄、太簇角曲、有二涼下采桑一、教坊記有二楊下采桑、採桑二曲一、唯採桑老無二所見一、本曲未レ知二其爲一何曲一」とある。大槻如電の「舞樂圖說」には、「本曲は唐樂・高麗樂の兩説あり。されど樂家錄に用明天皇の御宇、大神公持始傳之とあり、斷續はあれど天王寺の樂として傳へたれば、高麗樂なること論なきが如し。唐樂府に採桑曲あるより、同名を以て左舞に轉ぜしものか」とある。要するに朝鮮樂であつたものを左方に轉じたと見るのが一般の定説のやうである。この舞、多氏の家傳であつたが、寛弘年間、多好茂、天王寺に逃れて、これを天王寺の樂人に傳へた。多家に於ては正方・節資・資忠これを傳へたが、資忠が死んで後永く絶えた。そこで白河院はこれを惜しませ給うて、天王寺の樂人秦公貞を召し、これを多近方に傳へしめられた。〔田邊〕

裁斷批評（さいだんひひやう）　文學論〔佛〕La Critique de Jugement【解説】批評家が或る一定の批評の基準を定めて、この基準に由つて判斷するのであつて、この批評には凡そ二種の區別が考へられる。(1)は文藝的裁斷批評である。これは評者が或る文藝上の規律を定め、文學はかくあるべきもの、劇や詩はかくの如きものと定めて、その標準から觀察してこれに外れてゐるものをば價値なきものとして判定を下すのである。獨斷批評とも呼ばるる所以である。この種の批評のオーソリティは希臘のアリストートルの「詩論」であり、近代歐羅巴では、ボワロオの「詩論」がその代表的なものである。(2)は社會的裁斷批評ともいふべきものである。主として文藝を效果の方面から見て、その文藝が或る時代に於てその時代に如何なる影響を及ぼしたか、若しくは或る階級の代表表現となつてゐるか、その時代或はその階級の社會生活價値と如何なる關係になつてゐるかを判斷する批評である。即ち社會生活價値がその批評の標準となつてゐるのである。(1)の文藝上の裁斷批評は十八世紀の最初からして、文藝が一般社會環境、特に政治形態と併行して發達するものであるといふ主張が盛んになつて來るにつれて、一定標準を豫め定めて、文藝作品を品隲する事は不合理だと考へらるゝやうになり、次第に説明批評、即ち文藝の發生的研究の傾向が盛んになるにつれて、この批評は次第にその權威を失ふやうになつて來たのである。それと同時に、(2)の社會價値を標準としたる別種の裁斷批評が次第に頭を昂ぐるやうになつて來たのである。近代批評の始祖といはるゝ佛蘭西のサェント・ブウヴ(Sainte-Beuve)は、批評を三種に區別して、その一は批評の標準を評者自身の意識に置くもの、その二は標準を批評せらるべき對象の中に置くもの、第三は即ちその對象物の社會的地位、他との關係に標準を置くものとしてあるが、その第三種の批評こそは、即ち社會價値的裁斷批評を指してゐるのである。〔宮島〕

最澄（さいちよう）　學僧【俗姓】三津首氏、幼名廣野【諡號】傳教大師（山家大師は天台一家の尊稱）【生歿】神護景雲元年八月十八日近江滋賀郡古市鄕に生れ、弘仁十三年（一四八二）六月四日比叡山中道院に寂す。享年五十六【閲歷】父は三津首百枝、祖先は應神天皇の朝に歸化した後漢孝獻帝の苗裔登萬貴王である。最澄七歳、村邑の小學に於て學同列に超え、已に佛道に志があつたと云はれてゐる。十二歳近江大國師行表に從ひ、十四歳近江國分寺の僧闕を補つて得度。それより延曆二・三年までは奈良にあつて、南都教學の研鑽に餘念なかつた。當時興福寺行賀は入唐留學七年にして、唯識天台の學書數多を齎して東歸してゐた。最澄は親しく行賀に交はり、大に益するところがあつた。奈良に在ること二・三年にして去り、靜寂の地を求めて比叡山に登つた。時に十九歳。發願文を製して偉大高遠なる理想を宣言してゐる。入山後、日夜、法華・金光明・般若の諸經、「起信論疏」「四教儀」「五教章」等の諸論を讀誦講究して、これ等諸經論を貫流する一乘の思想に隨喜した。かくて益々その教籍を獲んとし、東大寺鑑眞大和上の將來せる「摩訶止觀」「法華玄義」「法華文句」「四教儀」「維摩經疏」を得て書寫講究した。その後延曆十二年（二十七歳）より延曆二十一年（三十六歳）までは最澄の經營時代と見るべく、延曆十二年正月文殊堂の慶讃供養、翌十三年九月根本中堂初度の供養あり、桓武天皇親しく臨御あり、大導師善珠以下高僧碩學數多參列した。最澄の聲譽茲に揚り、延曆十六年内供奉に補せられて、近江の正税を以て山供に充てられた。翌十七年十一月比叡山上に法華十講を修し、二十一年和氣廣世等の請により、高雄山寺に天台宗義を講じた。この講筵の盛況が天聽に達したので、特に和氣入鹿に勅を傳へしめて口宣を賜ひ、最澄に諮問せさせ給うた。最澄は直ちに表を上り、法華一乘の妙旨を究め、且つ天台の章疏を搜さんため、入唐留學生の派遣を請うた。即ち勅許あり、最澄は譯語義眞を伴つて入唐求法に向はうとした。時に延曆二十三年、年三十八歳。入唐中八ヶ月の間は台州龍興寺に道邃の摩訶止觀講筵に列り、又天台山佛隴寺に行滿大德を訪れ、又禪林寺翛然から達磨の付法、牛頭の禪要を受けた。或は行滿より八十餘卷の教籍を受け、且つ天台圓宗の深旨を授かつた。而して又台州國清寺惟象より大佛頂大契曼荼羅の行法を傳へ、順曉阿闍梨より三部の祕法を授かつた。この入唐中、道邃より一心三觀の付法文を授けられ、又圓頓大戒を受けたことは特筆すべきであつた。かくて圓密禪戒四宗を相承し了り、延曆二十四年六月歸朝した。在唐期間は甚だ尠いが、その間の收穫は、極めて重大なものであつた。最澄の齎した學及び教籍は、いたく桓武天皇の

最澄木像（立石寺藏）

本紀」「萬葉集註釋」以下の諸書に引用せられた「古風土記」の逸文を集め、各國別として九十餘條を錄してゐる。【改訂增補】本書に對して、その遺漏を集錄したものに、木村正辭の「採錄諸國風土記補遺」一卷があり、東洋文庫に藏せられてゐる。これには慶應元年八月

垣の下草」「同拾遺」。〔以上相原〕

【作風】女史は歌文をよくしたが、特に歌に秀で、明治初期末から中期にかけて、所謂宮内省派として高崎正風・小出粲等と共に、その頃の代表的歌人であつた。歌風は高い婦德と宮廷生活から來る優雅貞淑の趣を具へて、「帰か

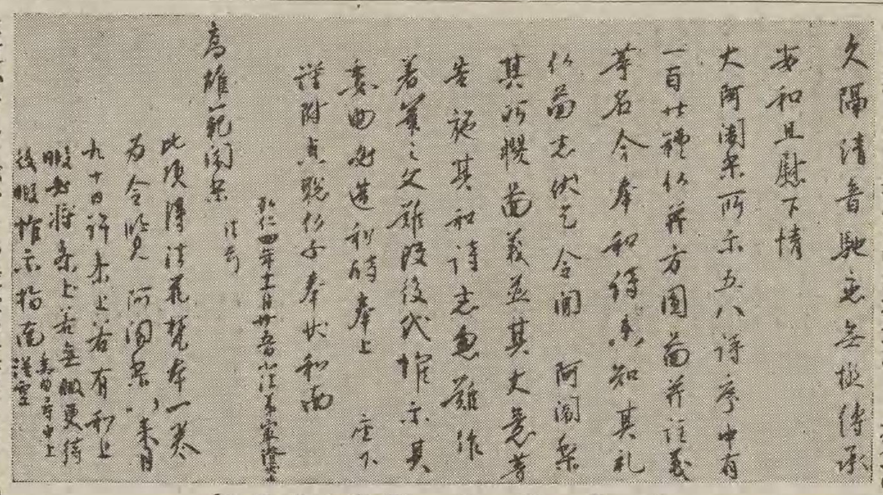
「彼女」「西條八十童謡全集」「西條八十詩集」「丘に想ふ」「赤き獵衣」「美しき喪失」、その他多數の著譯集がある。

【批評】三木露風の傘下から出たが、必ずしもその感化に育まれたのではなく、作風の系統は横瀬夜雨・伊良子清白・薄田泣菫のあとを引

がある。

採桑老（さいさうらう）　雅樂舞曲【名稱】桑を採る老翁を表はした舞であるからこの名がある。「さいしやうらう」とも訓み、又採老子ともいふ。【性質】左方樂。古樂、中曲。盤涉調に調する。四節又は五節（第子各十二）。舞〔和田〕

叡感を得、それより三論・法相の諸學匠を選んで學習せしめた。殊に天皇は眞言の傳來を嘉せられ、最澄を國師となし、灌頂を高雄山寺に行はしめられた。延曆二十五年新に天台法華宗を諸宗の中に加はらしめんとの表を上つて、南都六宗以外に、法華經を正所依とする天台圓宗の開立を奏請して允許あり、玆に天台宗は一宗として公認せられ、年分度者三人を賜はつた。これより漸次台宗の宣揚を計つた。大同四年二月空海が最澄を訪れた。最澄は空海に密敎の敎理を問ひ、又弟子を送つて學習せしめ、自らも兩部の祕法を受けたのであつた。弘仁五年正月十四日嵯峨天皇は天台法華宗の妙旨を聽かんとし給ひ、宮中に講說せしめられた。以後、天皇は最澄を深く叡信遊ばされた。かくて台宗の所依たる法華の妙旨を廣く東西に宣布せんとして行化に席溫まる暇もなかつた。これ等の事は最澄三十九歲より五十歲までの間の事である。信念深く、自信に充ちた最澄はいよ〳〵南都舊宗に對して鐵槌を下すべく立ち、弘仁八年二月、「照權實鏡」一卷を著して論爭を開始した。殊に法相の德一との論戰は目覺しく、論難の著數部を發表した。舊宗に對する巨彈は、實に大乘戒壇建立の一事で、最澄が論爭時代に於て、畢生の努力を以て當つたものである。弘仁九年三月最澄は曾て東大寺で受けた二百五十の小乘戒棄捨を宣言した。この宣言は台宗の獨立を最も强く主張したものであつて、次いで上表して比叡山に戒壇を置き、南都小乘戒壇の受戒を山家の學生は受くるを要せず、天台は獨立に菩薩僧たるべき戒を受くべきであると請うた。南都の僧綱護命以下擧つてこれに反對し、誠中來、大寺書狀「述方示正論」を著して二十八失を數へ激難した。最澄は南都の反對に對して血の出るやうな論爭を行ひ、顯戒論、內證佛法相承血脈、顯戒論緣起等を朝に上つて戒壇獨立の要を說いたが、畢生のこの努力も遂に存生中實現を見ず、弘仁十三年六月四日入寂した。「道心の中に衣食あり。衣食の中に道心なし」が、その最後の遺誡であつた。同月十一日遽かに大乘戒壇獨立の勅許があつた。これは弟子光定が先師の大志により宮中に候し、大に心力を致したためであつた。同年十一月嵯峨天皇は最澄を偲び給ひ、六韻の哭詩を賜うた。寂後四十四年、貞觀八年七月十二日遺誡を宣下せられた。



最澄消息（原富太郎氏藏）

【人物・思想】奈良朝末期の社會狀態を史書に依つて覗ふと、唐代文化の影響に依る我が制度文物の發展は眞に目覺ましいものであつたが、一面社會紀綱の紊亂と庶民の窮苦を伴つた暗黑時代でもあつた。桓武天皇が長岡遷都、更には平安遷都を試み給うたのも、舊來の弊風を打破し、新政治と國民新精神の興起を念とせられたがためであつた。所謂南都六宗、奈良朝佛敎界も、社會の弊風につれて腐敗墮落し、その轉落を支へん術もない狀態であつた。平安遷都と共に必然起るべきは新政治の出現と、國民精神を振起すべき新宗敎の振起に對する要望である。かゝる時代相を背負うて出でた最澄は、夙に舊都の社會及び佛敎の弊を痛感し、こゝ都市の粉飾を斥け、山林の質直を求め、十九歲にして登山した。眞實の宗敎は先づ山林から生れる。かく最澄は感じたのであつた。彼の强き誓願は、化他の念に燃えつゝ、まづ自己の鍛錬をなさんと志したのはその發願文に明かである。桓武天皇の叡信を辱うするに至つたのも、この大誓願を嘉せられたものと云はれてゐる。かゝる理想の下に自行に精進した最澄の心を捉へたものは法華一乘の思想である。入唐上表の文に、法相三論は論宗で經を斥くるに反し、獨り天台のみ經宗に立つ。佛敎は經宗に依つて立たねばならぬと力說してゐる。卽ち哲學宗ではなく法華經に依る眞の宗敎を建設せんとしたに外ならぬ。洵に正しき宗敎の見方であつた。かくて入唐に依つて學んだ最澄の天台宗は、已に支那天台そのまゝではなかつた。天台の中道實相を中軸とし、密禪戒を調和せしめ、理と行との一致を以て、有爲なる國家の人物を育成し、護國利生の實を擧げんとした。弘仁九年小乘戒棄捨の宣言は、まことに一大勇斷であつた。卽ちこの宣言は非實際的な小乘僧を排し、山家の學生をして國家有爲の大乘菩薩僧たらしめんとの志であつた。これは卽ち又時代の新興精神でもある。こゝに天台宗の獨自なる基礎を築かんとした。弘仁九年五月十三日、製する所の天台法華宗年分學生式（弘仁九年八月二十七日製の勸奬天台宗年分學生式及び弘仁十年三月十五日製の天台法華宗年分度者回小向大式と共に山家學生式と稱する）は、實に山家の學生をして大乘菩薩僧たらしめんとし、その育成に關する規範を述べたものである。卽ち最澄は國家の理想的人物を育成せんとするのであつて、そは言行一致の菩薩僧を養成するに外ならぬとするのである。道心の宗敎を力說したのは、まさに時代への新精神鼓吹でもある。弘仁九年五月二十一日上表し、「須く一家の式を造りて後學を勸誨す、大小別居にして澄心の道を爭ひ、山邑心を同じうして護國の忠を竭さん」と誓つてゐる。この精神は大乘戒壇獨立を急務とする。最澄の理想はそれによつて實現するのであつた。顯戒論三卷は實にその要を强說したものである。弘仁十一年の上表文の如き、偉大なる抱負と確乎たる自信に滿ち、以て護國利生の大乘僧養成の願志を奏したのである。大乘戒壇獨立は台宗一家の要のみではなかつた。卽ち國家の緊要事であつた。こゝに最澄の偉大な點がある。資性高潔、且つ剛毅不拔であると共に、溫和な性格であつた。夙に聖德太子を敬慕し、弘仁七年に、「謁四天王寺聖德太子廟詩」を製し、深く鑽仰の誠を致してゐる。最澄の精神は卽ち聖德太子の御精神であつたと云つても過言でない。日本思想史上に於ける一大人物であられる聖德太子を敬慕してゐた最澄も亦非凡なりと言はねばならぬ。門下に逸足多く、義眞・圓澄・光定・仁忠・圓仁・智證等、よく先師の意を體して台宗の興隆に盡した。なほ法然・親鸞・榮西・日蓮等の諸宗祖師、何れも山家大師の遺流を汲まざるはなかつた。特に日蓮は、「日本に此法顯るゝこと二度なり、傳敎大師と日蓮なりと知れ」（開目鈔）、又自ら「根本大師門人日蓮」（法華題目鈔）と稱してゐる。【著作】宗義に關する述作二百數十部と傳へられるが僞撰も亦多い。特に思想史上注意すべき述作は顯戒論三卷及び顯戒論

【著書】〔歌集〕赤光○あらたま（各別項）○朝の螢○齋藤茂吉選集○齋藤茂吉集〔歌論集〕童馬漫語○短歌私鈔（各別項）○金槐和歌集私鈔○短歌寫生の說○童牛漫語○西洋紀行集ドナウ源流行等【作風・傾向】子規の現實的寫生の作風を學び、實相觀入の說を唱へ、寫生卽象徵の說を固守してゐる。ゆゑにその歌風は寫生的萬葉調である。併しその萬葉調も眞淵一派のものとも違ひ、又、子規在生中の萬葉調ともちがつてゐる。泰西近代人の心境と流通してゐるけれども、句々が生活に根ざすべきやうに期するところから、必ずしも流行の藝

齋藤緑雨

チシズムに立脚して藝術上の天才を崇拜し、常に熱烈な文章を「帝國文學」などに書いてゐた。三十七年一月より約一ヶ年間、姉崎嘲風を助けて、雜誌「時代思潮」の記者として努めた。肺を病んで一生娶らず、淸貧の間に研究に沒頭してゐたが、兄樗牛、世を去つて六年、彼も亦同じ病に斃れた。遺稿「哲人何處にありや」は、大正二年十月に刊行された。同書中「亡兄高山樗牛」の一篇は文學資料として注意すべく、又未發表の論文「風景畫家としての北齋及び廣重」は、彼の殆ど最後の稿で、情熱の籠つた好論文である。〔高須〕

えた技倆を認められた。北村透谷は「油地獄」を出色の文學として推奬し、「諷刺と寫實とを兼ねた作家だ」と云ひ、「早稻田文學」もまた讃辭を呈した。その後、「弓矢八幡」「門三味線」「賣茶翁」等を書いたが、何れかといへば、その辛辣な批評ほどには行かなかつたので、その點に氣

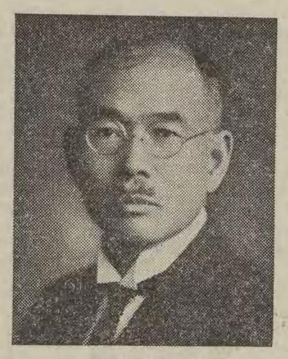
る一大人物であられる聖德太子を敬慕してゐた最澄も亦非凡なりと言はねばならぬ。門下に逸足多く、義眞・圓澄・光定・仁忠・圓仁・智證等、よく先師の意を體して台宗の興隆に盡した。なほ法然・親鸞・榮西・日蓮等の諸宗祖師、何れも山家大師の遺流を汲まざるはなかつた。特に日蓮は、「日本に此法顯るゝこと二度なり、傳敎大師と日蓮なりと知れ」(開目鈔)、又自ら「根本大師門人日蓮」(法華題目鈔)と稱してゐる。【著作】宗義に關する述作二百數十部と傳へられるが僞撰も亦多い。特に思想史上注意すべき述作は顯戒論三卷及び顯戒論緣起二卷、山家學生式一卷等である。文藻は空海に比すべくもないが詩數篇があり、和歌數首「新古今」「續古今」「新拾遺」にあつて、山家の作と傳へられてゐる。筆蹟は端嚴秀麗、自らその人格を彷彿させるものがある。「入唐牒書」「將來目錄」「羯磨金剛目錄」「天台法華宗年分緣起學生式」は延曆寺に、「消息」(高雄範阿闍梨宛)一通は原富太郎氏の所藏として各々現存してゐる。〔鷲尾・筑士〕

【參考】傳敎大師全集○叡山大師傳○傳敎大師行業記○傳敎大師行狀○九院佛閣抄○日本高僧傳要文抄○元亨釋書○本朝高僧傳○叡岳要記○天台霞標○護國緣起○顯戒論緣起○一心戒文○諸宗章疏錄○日本後紀○類聚國史○日本紀略○傳敎大師傳 三浦周行編

在納言(ざいなごん)「行平」を見よ。

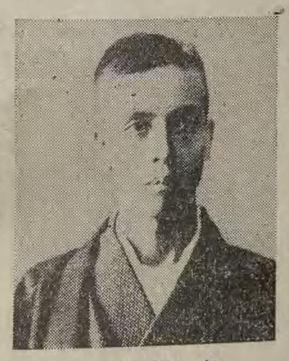
齋藤野の人(さいとうのびと)　評論家　【本名】信策【生歿】明治十一年四月十四日、羽前鶴岡に生れ、四十二年八月二日歿。享年三十二【閱歷】齋藤親信の第四子、高山樗牛の弟。東京帝國大學文科卒業。ケエベル博士に就いてギリシヤ文學を研究したことがある。ロマンチシズムに立脚して藝術上の天才を崇拜し、常に熱烈な文章を「帝國文學」などに書いてゐた。三十七年一月より約一ヶ年間、姉崎嘲風を助けて、雜誌「時代思潮」の記者として努めた。肺を病んで一生娶らず、淸貧の間に研究に沒頭してゐたが、兄樗牛、世を去つて六年、彼も亦同じ病に斃れた。遺稿「哲人何處にありや」は、大正二年十月に刊行された。同書中「亡兄高山樗牛」の一篇は文學資料として注意すべく、又未發表の論文「風景畫家としての北齋及び廣重」は、彼の殆ど最後の稿で、情熱の籠つた好論文である。〔高須〕

齋藤茂吉(さいとうもきち)　歌人　【本名】茂吉(しげよし)【別號】水上守曉・童馬山房主人【出生】明治十五年七月二十七日、山形縣南村山郡堀田村金瓶に生る。【閱歷】明治二十九年、上山町小學校卒業後上京し、齋藤紀一に養はる。開成中學、一高等を經て、同四十三年十二月、東京帝國大學醫科大學を卒業し、精神病學教室助手・東京府巢鴨病院醫員を勤務し、大正六年長崎醫學專門學校教授に任命せられ、同十年文部省在外研究員として、主に獨逸・墺太利に留學し、同十四年一月歸朝。同十五年から青山腦病院長の職をつぐ。醫學博士。明治三十八年、正岡子規遺稿第一編「竹の里歌」を讀んで始めて作歌に志した。同三十九年一月、伊藤左千夫の門に入り、又「アララギ」發刊と共にその同人となり今日に及んでゐる。


齋藤茂吉

【著書】〔歌集〕赤光○あらたま(各別項)○朝の螢○齋藤茂吉選集○齋藤茂吉集〔歌論集〕童馬漫語○短歌私鈔(各別項)○金槐和歌集私鈔○短歌寫生の說○童牛漫語○西洋紀行集ドナウ源流行等【作風・傾向】子規の現實的寫生の作風を學び、實相觀入の說を唱へ、寫生卽象徵の說を固守してゐる。ゆゑにその歌風は寫生的萬葉調である。併しその萬葉調も眞淵一派のものとも違ひ、又、子規在生中の萬葉調ともちがつてゐる。泰西近代人の心境と流通してゐるけれども、句々が生活に根ざすべきやうに期するところから、必ずしも流行の藝術理論に向つて漂動するやうな事はない。これ萬葉調のための萬葉調とちがふ點である。又理論を立てて置いて製作する一派の歌人の態度ともちがふ點である。〔金子〕

齋藤綠雨(さいとうりょくう)　小說家・評論隨筆家【本名】賢【別號】正直正太夫・江東みどり【生歿】慶應三年十二月、伊勢國神戶に生れ、明治三十七年四月十三日肺を病んで歿す。享年三十八。【閱歷】明治十年、父に從つて上京し、本所綠町の藤堂邸內に住んだ。法律に志して明治義塾・明治法律學校(明治大學の前身)等に學んだが、半途でやめた。夙く文學に親しみ、父と親交ある其角堂永機に就いて俳句を學び、更に假名垣魯文に師事した。處女作は明治十九年、今日新聞に載せた「善惡押繪羽子板」だと云はれる。次いで「雨後の狐火」「紅白梅花笠」等を發表したが、特色を認められず、二十二年からその翌年にかけて、「小說八宗」「初學小說心得」「小說評語問答」等を揭ぐるに及んで、先づ皮肉な批評家として知られ、二十四年、小說「油地獄」「かくれんぼ」(各別項)等を公けにし、始めて創作家としての冴えた技倆を認められた。北村透谷は「油地獄」を出色の文學として推奬し、「諷刺と寫實とを兼ねた作家だ」と云ひ、「早稻田文學」もまた讃辭を呈した。その後、「弓矢八幡」「門三味線」「賣茶翁」等を書いたが、何れかといへば、その辛辣な批評ほどには行かなかつたので、その點に氣付いた彼は、次第に諷刺を主とした評論・隨筆に主力を注ぐやうになつた。二十八年頃、「めざまし草」に據り、鷗外・露伴と共に、「三人冗語」の題下に、登仙坊の匿名で各種の創作を批評したが、翌年九月、「めざまし草」第八の卷より三十三の卷まで、創作合評として揭げられた「雲中語」にも彼が一枚加はつて、いつも得意の冷罵と皮肉を發揮した外、「金剛杵」「霹靂車」等の評論を同誌に寄せた。三十一年頃、「文藝倶樂部」「太陽」等に小說を寄稿してゐたが、聘せられて萬朝報に入り、「眼前口頭」を連載した。輕快洒落のうちに、一流の鋭い諷刺を加へた隨筆は、紙上に異彩を放つたが、その中の婦人論が筆禍に罹つたのが原因となり、三十二年萬朝報を退いた。元來、彼の新聞生活は都新聞の前身今日新聞に始まり、國會新聞・東西新聞・江湖新聞・大同新聞・二六新報・時論日報等の各社を經たが、いづれも永くは續かなかつた。彼自ら告白して、東京朝日新聞の創業の時のみは熱心に盡したが、これまた退社するの止むなきに至つたと云つてゐる。新聞生活をやめてからの彼は、「太陽」


齋藤綠雨

を最も强く主張したものであつて、次いで上表して比叡山に戒壇を置き、南都小乘戒壇の受戒を山家の學生は受くるを要せず、天台は獨立に菩薩僧たるべき戒を受くべきであると請うた。南都の僧綱護命以下學つてこれに反對し、就中東大寺普照は法相宗正論一を著して同月十一日遽かに大乘戒壇獨立の勅許があつた。これは弟子光定が先師の大志により宮中に候し、大に心力を致したためであつた。同年十一月嵯峨天皇は最澄を偲び給ひ、六韻の哭詩を賜うた。寂後四十四年、貞觀八年七月十二日諡號を宣下せられた。

「太平洋」等に短文を書いて貧しい生活を續けた。三十三年、宿痾療養のため小田原に移つたが、三十五年出京、淺草に住み、次に本郷千駄木に轉じ、更に三十六年冬、本所横網に移つた。三十七年に入ると病が重つて、到底起てないことを知るや、自分で作つた死亡廣告の文案を友人に賴んで、歿後、新聞に載せた。「僕本月本日を以て目出度死去致候間此段謹告仕り候。四月一日、綠雨齋藤賢」と云ふのだつた。【人物】皮肉・冷笑を事とした綠雨は、往々腹の黑い氣むづかし屋の如く誤解せられたが、その實、溫和小心の人物であつた。その不遇貧窮も、彼が好んで世に拗ねようとした結果で、彼の決心一つでさう終ることはなかつたのである。

【批評】作家としての彼は、內容・思想に云ふに足るものがない。採るべきものは洗練された語句と技巧である。彼はむしろ一代の諷刺家たるところに本領がある。江戸趣味の讃美者であつた彼は、社會であれ、文壇であれ、常に時代の新傾向に反抗し、鋭利に弱點を發見して、得意の諷刺と皮肉で痛罵せねば止まない。彼は又世事に通じ、社會の表裏を知つてゐたので、「あられ酒」(別項)などに所收の文の如く、眼前口頭の些事を捕へても觀察が透徹し、何等かの痛い急所を突かずには止まない。併し彼の諷刺は、人生觀上のニヒリズムから來たのではない。鋭敏な感覺と、激しい好惡感と、頭のよい常識との所產だから、案外、誰にもわかり易い。それに修辭家たる彼の本領はこゝにも現はれて、神經質な彼は一字一句の末まで練りに練り、一句のムダも無いやうに苦心した。彼の皮肉物が、無類に

によるが、またそれがため、修辭に囚はれ過ぎて、却つて效果を失つた點もないではなかつた。

【高須】

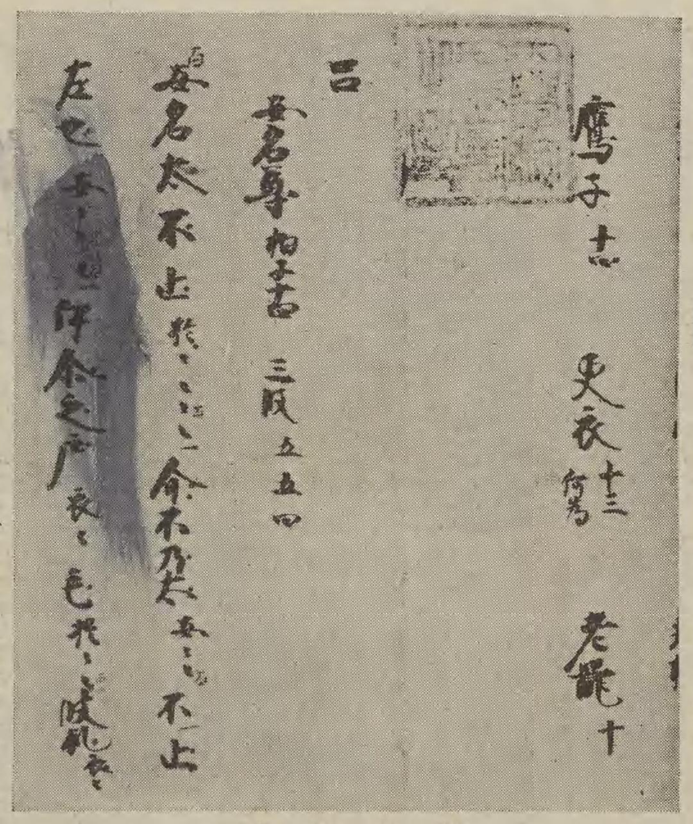
在中將（ざいのちゆう）「業平」を見よ。

催馬樂（さいばら）　歌謠　【名義】名義に就きて次の諸說がある。(一)諸國より朝廷に貢物を運ぶ時に歌つた歌で、文字通りに馬を催す歌の意、馬子歌の意とする說(梁塵愚案抄・催馬樂辨解・日本歌謠史)。(二)「いで我が駒早く行きこそ」と云ふ馬を催す詞が、卷頭の我が駒の歌にあるから出た名稱と云ふ說(體源抄・河社の一說、玉勝間所引長瀨眞幸說、催馬樂入文・催馬樂小說・歌舞音樂略史)。(三)大賞會に神馬を牽き奉れる際に歌つた歌であるから名づけたと云ふ說(和訓栞)。(四)神が馬に召して影向し給ふことを催し奉れるによつて名づけたと云ふ說(河社)。(五)神樂の前張(さいはり)の拍子で歌つたからその名稱を取つたと云ふ說(催馬樂考・北邊隨筆・閑田耕筆・神樂歌新釋)。(六)唐樂の催馬樂の拍子に合せて歌つた歌であるから、その名稱を取つたと云ふ說(郢曲抄・樵窓自語・梁塵後抄・神樂催馬樂通解)。(七)賀茂眞淵・本居宣長・荒木田尙賢の轉寫した催馬樂の古寫本の奧に、薩摩家中の大河原氏の說として、薩摩に「さいばら」と云ふ村があり、催馬樂と書き、又この國の馬子歌は催馬樂の音樂とよく似てゐると記してある。なほ重野成齋の「風俗歌舞源流考」上に、薩摩の白尾國柱の著「鹿兒島名勝考」を引いて、都臺答臘(んただう)、一名鼓川、一名轟小路の西に催馬樂と云ふ昔催馬樂を歌ふ者の住んだ所があると云ふから、これ等の地は、往時薩摩隼人が據つて國風の音曲人の住居したのが地名に殘つたものであらうと說いた。卽ち催馬樂は隼人より出た歌で、隼人と共にさいばら

と云ふ語も、外邦より來つた名稱であらうと云ふ(催馬樂考)。而して近時「さいばる」は西藏語で、地方の戀歌と云ふ意であると云ふ說があるのも、この說に參照すべきである。以上の如き諸說があるが、これを要するに、民間に發生した歌謠で、馬を催す樂と云ふ字義通りに解する說と、外來樂で他の樂曲の名稱が轉訛したものと云ふ說とになる。「和名抄」の唐樂曲の雙調に、催馬樂律我駒、また狹鰭河(さはたかた)曲是也

柳・伊勢海(いせうみ)・庭生(にはにさふる)・我門爾(わがかどに)・我門乎(わがかどを)・大路(おほぢ)・大芹(せり)・淺水・挿櫛・鷹子(たかのこ)・逢路(あはぢみちのくち)・道口(ころもがへいかしぜいとり)・更衣・何爲(なにすれぞ)・鷄鳴(とりなく)・老鼠(おいねずみ)・隱名(かくれのな)。○呂(首三十六首)　安名尊(あなたふと)・新年(しんとしのはじめ)・梅枝(うめがえ)・櫻人(さくらびと)・葦垣(あしがき)・山城(やましろ)・眞金吹(まかねふく)・紀伊國(きいのくに)・葛城(かつらぎ)・竹河(たけかわ)・河口(かはぐち)・此殿者(このとのは)・此殿西(このとのにし)・此殿奧(このとのおく)・鷹山(たかやま)・美作(みまさか)・藤生野(ふぢうの)・妹與我(いもとわ)・淺綠(あさみどり)・青馬(あをうま)・妹之門(いもがかど)・席田(むしろだ)・大宮(おほみや)・總角(あげまき)・本滋(もとしげ)・美濃山(みのやま)・眉止之女(まゆとめのをんな)・酒飲(さけのみ)・田中井戸(たなかのゐど)・無力蝦(むりきのえび)・難波海(なにはのうみ)・鈴之川(すずがはの)・石川(いしかは)・奧山(おくやま)・奧々山(おくおくやま)・我家(わがいへ)。

【沿革】「日本書紀」天武天皇四年の條に、大倭・河內・攝津・山階・播磨・淡路・丹後・但馬・近江・若狹・伊勢・美濃・尾張等の諸國より能歌の男女を貢せしめたことが出てゐる。かくの如くして、古くより地方民謠が宮廷に入つて、貴族の間に行はれてゐたが、この國名は、催馬樂の歌詞の含む國名と殆ど全部一致する事は注意すべき現象である。催馬樂といふ名は「三代實錄」貞觀元年十月二十三日の條に、廣井女王の傳を叙し、催馬樂を善くせられた由記されてゐるのが、史上に於ける初見である。而して催馬樂譜の撰定せられたのは、多分神樂譜と共に、貞觀元年頃が初めてであらうと考へられる。神樂歌參照。それ以前



なる名も擧げてゐるが、これによれば、我駒の曲から催馬樂と云ふ總名が出たとすべきである。而して催馬樂なる字は、外來樂に倣つて、我駒の曲により、この字を選んだのであらうが、「さいばら」と云ふ語は、神樂の前張(さはり)の轉訛とすべきか、又は外來語とすべきか、決定し難い。【曲目】律(二十五首)我駒・澤田川・高砂・夜引・實相・鳥歌・老鼠・北殿・北邊・飛鳥井・青

神樂・催馬樂譜は淡海三船の撰で多氏へ傳へられ、多自然麿を神樂催馬樂の祖とする說が樂家にあり、神樂和琴の血脈も、多氏の祖自然麿を最初に記してゐるが、信ずべき限りではない。ただ多氏が神樂・催馬樂に多く與つたと云ひ得るのみである。貞觀時の催馬樂譜の撰定は神樂譜に附屬して撰定せられたもので、神樂の餘興として使用せられる趣旨が含んでゐた事と思はれる。「宇津保物語」(祭の使)にも「御神樂の召人催馬樂仕うまつるべき」と見える。その中、大賞會風俗歌には貞觀時代以後の陽成天皇の時の歌があるのによれば、貞觀以

では斷絕した曲は呂五曲、律八曲の十數首に及んでゐる(天治本催馬樂抄・吉野吉水院樂書)。又「河口」「紀伊國」の終二段、「此殿西」「此殿奧」「鷹山」「大路」等も、次第に歌はれなくなつた(天治本催馬樂抄)。天祿元年の「口遊」「伊呂波字類抄」の兩書に載せた催馬樂の曲目は三十九曲で、天治本「催馬樂抄」とその廢絕せる曲を異にしてゐるのは、源家の傳でもあらうか。「催馬樂略譜」によると、建久頃、源家では四十三首を傳へてゐた。「仁智要錄」には律に二十曲、呂に三十三曲、合計五十三曲を揭げてゐるのは、同じく源家の傳と思はれる所があ

が存し、又同年に「神樂催馬樂笛譜」が編まれ、鎌倉時代では嘉禎元年の奧書ある本もあり、また弘安本も存し、その頃までは傳へられたが、鎌倉中期以後室町時代に至つて殆ど廢絕し、江戸時代に至つて、寬永三年後水尾院二條行幸の時に再興せられたとも(立坊立后記)、天和三年二月十四日立后御節會の時に再興せられたとも云ふ(樂家錄)。今日は、僅に呂は「安名尊」「梅枝」「山城」「席田」「蓑山」の五曲、律は「更衣」「伊勢海」の二曲、合計七曲を樂家で傳へるに過ぎない。

【樂曲】元は民間の俚謠であるから、調子の如

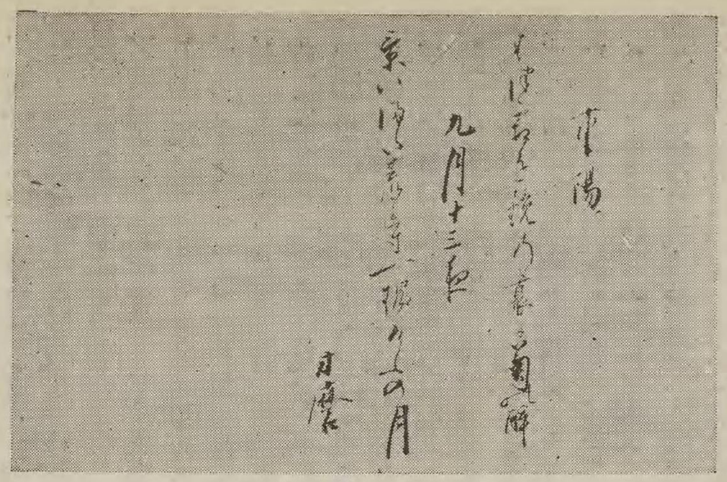
水院樂書」に「神樂は八拍子、催馬樂風俗は五拍子三(度脫カ)拍子」と記せる如く、催馬樂は五拍子のものと三度拍子のものと二種ある。「催馬樂略譜」によると、○呂五拍子十三首、○呂三度拍子十四首、○律五拍子五首、○律三度拍子十一首の四十三曲がかやうに二つの拍子に分たれて傳へられてゐる。但し藤家では、呂の三度拍子の中、「席田」「本滋」「眉止之女」「田中井戸」「酒飲」「蓑山」の六曲が五拍子に屬し、律の三度拍子の中、「我門爾」「我門乎」の二曲を五拍子で歌つた旨を註してある。かやうな差異が源藤兩家でもあつた。又「葛城」

神樂・催馬樂譜は淡海三船の撰で多氏へ傳へられ、多自然麿を神樂催馬樂の祖とする說が樂家にあり、神樂和琴の血脈も、多氏の祖自然麿を最初に記してゐるが、信ずべき限りではない。ただ多氏が神樂・催馬樂に多く與つたと云ひ得るのみである。貞觀時の催馬樂譜の撰定は神樂譜に附屬して撰定せられたもので、神樂の餘興として使用せられる趣旨が含んでゐた事と思はれる。「宇津保物語」(祭の使)にも「御神樂の召人催馬樂仕うまつるべき」と見える。その中、大嘗會風俗歌には貞觀時代以後の陽成天皇の時の歌があるのによれば、貞觀以後にも改修せられた事は明かで、それは神樂と同時に、多分延喜二十年頃に撰定せられたのであらう。「郢曲相承次第」「治國鈔」及び「催馬樂笛譜奧書」等に「或抄」を引いて、延喜二十年勅定によつて右近少將藤原忠房が催馬樂譜を作つた由記してゐるのがその間の消息を語つてゐる。多分この時に現催馬樂譜の形が出來上つたものと考へられる。次いで第三次の改定は一條雅信がなしたもので(奧義抄)、「郢曲相承次第」「袖中抄」「體源抄」その他の樂書に記せる如くである。併しこの時には新たに曲譜を附したのみで、その歌數等は延喜の時に定まつたものと思はれる。なほ雅信は父敦實親王に催馬樂の傳を得たから「治國鈔」「絲管要抄」等、何れも催馬樂は敦實親王より傳はれる旨を記してゐる。又「胡琴敎錄」によれば、催馬樂の笛は、左近少將藤原忠房が延喜の聖勅によつて作り、箏琵琶は中務大輔信明(博雅二男)が譜を作ると記されてゐる。かやうな傳もあつた。かくて源家の祖一條雅信の流と、別に藤家でも譜を傳へて二派に分れた。藤家では四十餘首を傳へ、平安朝末に既にこの流派では斷絕した曲は呂五曲、律八曲の十數首に及んでゐる(天治本催馬樂抄・吉野吉水院樂書)。又「河口」「紀伊國」の終二段、「此殿西」「此殿奧」「鷹山」「大路」等も、次第に歌はれなくなつた(天治本催馬樂抄)。天祿元年の「口遊」「伊呂波字類抄」の兩書に載せた催馬樂の曲目は三十九曲で、天治本「催馬樂抄」とその廢絕せる曲を異にしてゐるのは、源家の傳でもあらうか。「催馬樂略譜」によると、建久頃、源家では四十三首を傳へてゐた。「仁智要錄」には律に二十曲、呂に三十三曲、合計五十三曲を揭げてゐるのは、同じく源家の傳と思はれる所があり、享德元年に記した「催馬樂濫觴」にも、「源藤兩家互不レ傳曲及二五六首一」と記し、「拾芥抄」や「音律具類鈔」には、宸筆本の催馬樂には「我駒」「澤田河」「鷄啼」「陰名」の四首なく、藤家では「貫河」「東屋」「大路」なく、源家では「老鼠」なき旨を註してゐる。「體源抄」にも亦、藤家で傳へざる歌、源家で傳へざる歌を擧げ、兩家で傳へざる歌は、その數次第に多くなつてゐる。「吉野吉水院樂書」の催馬樂目錄には、呂三十六曲は全部を載せてゐるが、律では挿櫛と老鼠の二曲を缺く。兎に角これ等の曲が廢曲となつてゐた。催馬樂の盛時は雅信が出た花山・圓融より一條帝頃で、「源氏物語」その他の物語草子にも屢々これが歌はれた事を記し、「梅枝」「竹河」「總角」「東屋」の如き卷名もこれより出た。五節、大臣大饗、その他の貴族の宴樂や、寺院の法樂等でこれを歌つたのである。催馬樂譜は元來六十一首一團となつてゐたが、「簾中抄」の曲目によれば、後世の大嘗會風俗歌をも加へて、その數を增加したこともあつたやうである。平安朝末では文治二年書寫の「順次往生講式」にも催馬樂の替歌が存し、又同年に「神樂催馬樂笛琴譜」が編まれ、鎌倉時代では嘉禎元年の奧書ある本もあり、また弘安本も存し、その頃までは傳へられたが、鎌倉中期以後室町時代に至つて殆ど廢絕し、江戸時代に至つて、寬永三年後水尾院二條行幸の時に再興せられたとも(立坊立后記)、天和三年二月十四日立后御節會の時に再興せられたとも云ふ(樂家錄)。今日は、僅に呂は「安名尊」「梅枝」「山城」「席田」「蓑山」の五曲、律は「更衣」「伊勢海」の二曲、合計七曲を樂家で傳へるに過ぎない。

【樂曲】元は民間の俚謠であるから、調子の如きも定つてゐなかつたのであらうが、宮中でこの譜が選定せられるに至り、律と呂との二つに分たれた。これは明かに外來樂の旋法によつて改作したもので、催馬樂と云ふ外來樂に似た名稱も、かくして負はされるに至つたのであらう。更に平安朝末には、催馬樂と外來の舞樂の調子の合ふものとを合せて、その管絃の伴奏で歌ふやうな事も行はれた。「和名抄」音樂部の高麗樂曲中に、「拾翠樂律歌有伊勢海曲是也」「地久樂律歌有櫻人曲是也」とあるのがそれである。「絲管要抄」「鳴鳳集」「吉野吉水院樂書」等の所載によつて、催馬樂同音樂の曲を拾ふと二十四種を拾ひ得る。その中、「鷄鳴樂」や「夏引樂」等の如く、催馬樂の曲に對して、外來樂曲の風に作曲したものもあつた。また橫笛譜に、「我駒」を序、「伊勢海」を破、「竹河」を急とし、舞樂の如く序破急とついで、水調の中に屬せしめたものもあつて、外來樂化せられたのである。催馬樂は少きは一段だけ、多くは二三段で、中には「高砂」の如く七段に分れてゐる曲もある。何れもそれぞれに相當する拍子がある。而して「吉野吉水院樂書」に「神樂は八拍子、催馬樂風俗は五拍子三(度脫カ)拍子」と記せる如く、催馬樂は五拍子のものと三度拍子のものと二種ある。「催馬樂略譜」によると、○呂五拍子十三首、○律五拍子五首、○呂三度拍子十四首、○律三度拍子十一首の四十三曲がかやうに二つの拍子に分たれて傳へられてゐる。但し藤家では、呂の三度拍子の中、「席田」「本滋」「眉止之女」「田中井戸」「酒飲」「蓑山」の六曲が五拍子に屬し、律の三度拍子の中、「我門爾」「我門乎」の二曲を五拍子で歌つた旨を註してある。かやうな差異が源藤兩家でもあつた。又「葛城」は特に祕文に屬し、「奧山」と「奧々山」は、大曲として「兩奧山爲二灌頂極祕曲一之間不レ載之在二別紙一」と註した。「青柳」その他風俗歌より出でた催馬樂は、返物歌と云はれて、神樂の中で歌はれる。返物歌は轉調して繰返して歌ふ意味の語である。催馬樂の伴奏は、笏拍子・笙・篳篥・龍笛・琵琶・箏(時として和琴)、その他打物等あらゆる管絃を用ひて、舞樂の樂曲を奏した。今は打物の代りに笏拍子を用ひて歌ふ。なほ呂と律とに分たれる事に就き、天治本「催馬樂抄」「簾中抄」等の曲目は呂律となし、「龍鳴ゆゑ跋に呂を上卷とし、律を下卷とする旨記して居り、「源氏」若菜下にも「物の調曲の物どもはしも、げに律をば次の物にしたるはさもありかし」とあるのによつて、古くは呂律と云ふ順序であつたと云ふ說(花鳥餘情・樂章類語鈔・四譜考)があるが、「口遊」や「伊呂波字類抄」や「仁智要錄」等は、何れも律呂とついでてゐるから、古くからこの二つの順序が行はれたと思はれる。思ふに、藤家では呂律となし、源家では律呂とついでたのであらうか。而して藤家は早く權中納言宗宣の

時に郢曲が亡んで、源家のみ獨り後世にこれを傳へたから、律呂と云ふ順序が「梁塵愚案抄」を初め、諸書に用ひられて今日に及んでゐるのであらう。今日の催馬樂の歌ひ方は、曲によつて本方末方に分れ、或は一組となつて歌ふ。音頭一人が伴奏なく上一句を歌ひ出し、付所から助音が同音に付けて歌ひ、樂器も奏するのである。（樂譜參照）【樂統】源家と藤家とに分れる。「催馬樂師傳相承」に、その樂統が詳しいが、大概は神樂その他の郢曲の源藤兩家の傳と等しい。「吉野吉水院樂書」所載の催馬樂相承も藤家の系譜で、これも大方同じである。「胡琴敎錄」には、催馬樂に三流あり、大納言宗家・資賢・少納言師廣がこれであると記されてゐるが、宗家流は藤家、資賢流は源家である。また多氏も神樂と共に催馬樂風俗を傳へたが、これは源家と同流の別派と思はれて、源家の人々と密接な關係がある。【傳本】天治二年三月の奥書ある「催馬樂抄」（帝室博物館藏、古典保存會複製）が最古の寫本で藤家の賴宗・俊家・宗俊・宗忠四代の所傳の本と云ふ（日本歌謠集成所收）。「催馬樂譜抄」「催馬樂眞字譜」「催馬樂目錄」などと題された轉寫本が多い。鍋島侯爵家所藏「催馬樂」（扶桑珠寶複製）も亦平安時代の古寫本で、律二十四首、呂三十六首を收め、「老鼠」だけがない。次いで「神樂催馬樂笛琴譜」には、文治二年二月五日に、守覺法親王の仰せで授け奉つたと云ふ多近久の奥書があり、この本には綾小路信俊自筆本と云ふ寫本、延享四年の綾小路俊宗の轉寫本（「催馬樂譜信俊卿撰」と記した五册本）等あり、律二十首、呂二十三首より成る。この本が源家の傳本なることはこれで明かである。源家の傳本なることは、これで明かである。源家の傳本なることは、これで明かである。源家の傳本なることは、これ

あれども寧ろ長所でない。師錬は學問博綜にして氣魄がある。こゝにその長所がある。卷十一の詩話は、唐宋等の詩を論ずるところ大に見るべき所がある。我が國で詩話を公にしたるもの、この作者を以て初めとする。卷十二の清言は、教禪を論じ儒佛を論じ末に書道を論じてゐる。卷十四の論は、教說・歷史・人物等を論議してゐる。卷十六以下の通衡は、佛儒老莊等に亙つて論議するところ、益々作者の廣聞博覽を證すべきものである。〔鷲尾〕



オ麿筆蹟

才麿（さいまろ）　俳人【姓名】椎本則武。初め佐々木氏、一說に谷氏、生駒氏とある。字は少文。【別號】初め西丸・松笠軒・狂六堂・舊德翁・繁特小僧【生歿】明暦二年に生れ、元文二年（一三九七）正月二日歿。享年八十二【墓所】大阪西寺町萬福寺【師傳】初め西武（さいむ）門。後、宗因・西鶴に學ぶ。【閱歷】和州宇陀織田山城守の臣といふ。兎に角宇陀の武人で佛門に入り、延寶の末江戸に遊學して還俗し、石町に住す。天和の頃か西鶴の大矢數の向ふを張つて淺草の觀音堂で一日一萬句獨吟をなし、都人を驚かしめると共に、西鶴をして更に發奮せしめて、貞享元年二萬三千五百句を吐かしめた。延寶・天和の頃、蕉門の徒と俳諧を共にしたが、後、大阪天滿に移り、蕉風の下風に立たず、獨自の境地を進めたが、晩年は前句附點者となり寧ろ低下した。併し後人より談林三世の中興と云はれてゐる。【著作】俳諧坂東太郎二冊（延寶七年刊）〇ゑくぼ（元祿四年刊）〇椎の葉（別項）一冊（元祿五年）〇後椎の葉〇椎本先生語類一冊（享保三年）（才麿の俳話を門人推本才尾の記錄したもの）〇伊丹發句合一冊（正德四年刊）（伊丹派の藤岡月尋が自己の句と他の句とを合せたものに才麿が判を下したもの。俳諧文庫俳諧句合集所收）〇舊德翁才麿發句拔萃一冊（谷素外（天明六年刊、俳書大系元祿名家句選）

【參考】花見車高島轍士〇誹諧家譜早川丈石〇はいかい袋大伴大江丸〇西山家連俳系譜谷素外〇俳家奇人談竹内玄々一〇誹家大系圖生川春明（萩原）

最明寺殿百人上臈（さいみやうじどのひやくにんじやうらふ）

淨瑠璃二段　時代物【作者】近松門左衞門【名稱】下卷に、時賴の御臺を初めとして諸大名の奥方勢揃ひの場があるので、これに據つた。【諸本】七行七十一丁本、八行五十五丁本、十行三十一丁本等。近松世話淨瑠璃（帝國文庫）・近松淨瑠璃集上（有朋堂文庫）・近松門左衞門全集第四・近松全集第六卷・近松名作集上（名著文庫）等に所收。【題材】謠曲「鉢の木」、或はそれに據つた所屬未詳の淨瑠璃「佐野源左衞門」（又は「鉢の木」）に主題を仰ぎ、義經含狀・宇治川先陣・逆艪等をこれに配した。【興行】元祿十六年三月四日初日、竹本座。【概略】（上卷）（名越谷法華堂）政所始の儀に當り、北條時賴の嫡男天女丸が賴朝の像の前に悶絶したのを、大江僧正廣辨は天女丸こそ義經の再誕なりと判ずる事。時賴事最明寺道崇は禪定に入ると稱して、密かに諸國行脚に旅立つ事。（宇都宮館）天女丸が宇都宮友平から義經含狀を讀み聞かされる事。「義經含狀」佐野源藤太經景の髻に梶原の髑髏が喰付き、惡靈が宿る事。時賴の舍弟時貞が家寶の三鱗の旗を奪ひ、反逆の兆に、天女丸起つ事。經景と天女丸と逆艪の諍。（濱邊）天女丸は友平と三崎に隱された旗の奪回に腐心するのを、大蛇が海士に化して現はれ、天女丸から鱗形紋の衣を與へられた嬉しさに、その役を果さんと約したが、波に飛入るや、金鱗三十尋の尾を現じた。波音を怪しんだ經景と佐々木廣綱とは三崎を目指して、水中に先を爭つた。時貞に追はれた天女丸は遂に海中に飛込んだが、海士に與へた衣が筏となり彼を救ふ。この時、天女丸には義經の靈が移り、自然の妙を得て寄手を斬り立てた。時貞は射落される。この時、紫金色の耳ある大蛇が磯の松に這ひ上り三鱗の旗を懸け、始めて天女丸の手に戻つた。〔下卷〕「最明寺殿道行」諸國を廻つた最明寺道崇は雪の夕暮佐野鄕に辿りついた。（佐野源左衞門常世宿）常世の留守中、女房が旅僧道崇を勞ふ、鉢の木の趣向。常世は叔父經景のために讓せられて、落魄したのであつた。（北條館）（女勢揃へ）臘月下旬、時賴の御臺所松の御寮は諸大名の奥方を召されて、執權に代つて政を執り、非常時の試みとして諸國の軍勢を催す。恰も時賴の歸館するところとなり、軍勢の中より常世夫婦を呼び出して、本領安堵の上、加賀の梅田、越中の櫻井、上野の松枝三莊を下さる。

【解說】脚色は寧ろ簡單であるが、それにも拘らず、濱邊の條の如き、さすがに作者の老巧を思はすものがある。下卷の女鉢の木は、虎屋小源太夫正本「鹽谷小次郎夜討對決」に負うたかと思はれるが、普通本曲が女鉢の木の典據とされて、後世への影響が大きい。女鉢の木で「北條時賴記」（別項）が非常な評判をとつたが、その五段目は本曲を襲用したに過ぎぬ。「最明寺殿道行」の文中、「蝶の翅の白粉を草にこぼして梢には鶴の霜毛をぬぎかくる雪は花より花多き」の條に就いて、靈元上皇の御感を被つたことは、「南水漫遊」にも傳へられて有名な逸話である。

【參考】近松全集第六卷解說藤井乙男〇近松名作集上解說黑木勘藏（守隨）

最明寺物の謠曲（さいみやうじもののえうきよく）

【曲目】「增鏡」卷十一「草まくら」、「太平記」卷三十五「北野通夜事附青砥左衞門事」に、その片鱗を傳へてゐる最明寺入道時賴の廻國傳說を取扱つた謠曲に、「鉢木（はちのき）」と「藤榮（とうえい）」とがある。

【諸本】現行諸流謠本。謠曲叢書（芳賀・佐佐木）・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著文庫）等所收。

【鉢木】四番目【作者】世阿彌（能本作者註文）。【內容】このほど信濃國にゐた一所不住の僧（前ワキ）は餘りに雪深くなつたので、一先づ鎌倉に歸らうと旅立つて、上野國佐野まで來ると、大雪が降つて來たので、とある家に一夜の宿を求めた。貧しい宿の夫婦（夫前ジテ、妻ツレ）は粟の飯を出し、又祕藏の鉢木、梅松

櫻を切つて火に焚き、心だけのもてなしをした。僧はその人柄に感じて名を尋ねると、宿主は、自分は佐野源左衞門尉常世といふ者で、一族に押領せられてかくの如く零落したが、いざ鎌倉に事ある時には、一番に馳せ參じて、敵陣に斬つて入り討死する覺悟だと武士の意氣を語つた。やがて僧は名殘を惜しんで宿を去つた。この僧、實は最明寺入道時頼であつたのである。鎌倉に歸つた時頼(後ヲキ)は、諸國の軍勢を催した。佐野常世(後ジテ)は、ちぎれた鎧を着、錆びた長刀を持ち、痩せた馬に乘つて、鎌倉に驅けつけた。時頼が軍勢を催促したのは、常世の詞の眞僞を確めたいためであつた。時頼は常世の誠忠を褒め、又雪の日の親切を喜んで、本領を返し與へた上に、鉢木に因んだ三箇莊を加へ與へたといふ曲。二段劇能。五流現行。

【藤榮】四番目〔作者〕不明(能本作者註文。但し、申樂談儀に曲名見ゆ)。〔名稱〕藤永とも書く。〔内容〕最明寺實信(ワキ)は政道を正さんがために、諸國一見の修行者を裝うて西國に下る途次、攝津國蘆屋で一夜の宿を求めて、先地頭藤左衞門の遺子月若(子方)が叔父藤榮に所領を奪はれて、家人(ワキヅレ)に養はれてゐるのを知り、蘆屋藤榮(シテ)が舟遊びに出てゐる所へ行つて、所領を月若に返させた。そして藤榮は死罪にも行はるべき處であつたが、最明寺は慈悲を以てこれを宥し、且つもとの領地をそのまゝ知行せしめたといふ曲。一段劇能。實生・金春・金剛・喜多現行。

【構想】二曲とも、等しくワキ最明寺の仁政を描いたものであるが、出典に依據する所は甚だ少く、大部分作者の自由に創作したもので、面白の作品構想に著しい色彩がある。まづ、

テの人物が、「鉢木」のは忠誠無二のものであるが、「藤榮」は非道な惡人であり、一曲の主題を「鉢木」では零落した武士の厚情と意氣とに置いてゐるが、「藤榮」では惡人の雜藝を興味の中心として居り、舞臺の轉換も、「鉢木」では前段は佐野の佗住居、後段は鎌倉の執權屋敷と、前後を劃然と截別してゐるが、「藤榮」では、一段のうちに不明瞭な間に場所も時も動いてゐるのである。「藤榮」は複雜な内容を持つてゐるが、純一を缺いた整備しない曲であり、「鉢木」はやゝ誇張に陷つた嫌ひはあるが、内容脚色ともによく整つてゐる。「鉢木」は後の文藝に與へた影響が大きい。

【參考】謠曲評釋 大和田建樹 ○謠曲大觀 佐成謙太郎

在民部卿家歌合 ざいみんぶきやうけうたあはせ

〔佐成〕

【諸本】群書類從卷一八〇・國歌大系第九卷所收【解説】現存歌合の中で最古のものである。在民部卿とは在原行平のことで、彼が民部卿の官にあつたのは、「公卿補任」によれば、元慶八年三月九日より仁和三年四月二十三日までの三年間である。隨つてこの歌合も右三年間に行はれたものと推察される。番數は「郭公」を題としたもの十番、「あはぬ戀」を題としたもの二番、計十二番である。歌人・判者ともに不明。端書に、「左には山のかたを洲濱につくり右にはあれたる宿のかたを洲濱につくりてありける」とあるによりて、僅かに席の模樣を想像される。(歌合參照)

〔中島〕

西武 さいむ

俳人【姓名】山本氏。通稱綿屋九郎左衞門【號】もと、名を西武と稱したが、剃髪してこれを音讀して西武と云ひ、この法號を俳諧にも用ふ。別號、無外軒【生歿】未詳。「誹諧系譜」に延寶六年戊午十二月十八日歿とあるが、確否を知らない。隨流の「貞德永代記」の小傳に辭世の句が出てゐて、その傍に「戊三月十二日」とある。享年は永代記・家譜共に七十三とあるが未詳。辭世は、「夜の明て花にひらくや淨土門」【閲歴】七誹仙(別項)の一人で、貞德の愛弟であつた。十一歳より貞德の執筆を仕習ひ、人丸の繪像、玄旨法印自筆の八雲の祕訣、一紙品定、貞德自筆の批點免許の一札、長良集、戴恩記、誹諧式目十首の狂詠、家之集の寫し等を貞德より讓られたといふが、どこまで確實か明かでない。又和歌の會に交つて「源氏岷江」を傳へ、一華堂から古今傳授を受け、貞德に從つては祕訣・故實、悉く傳習したと言はれてゐる。寛永六年十一月下旬京寺町妙滿寺で、西武が亭主となつて俳諧の會席を開き、その時の作が殘つてゐる。貞德も歳且の三物(別項)は正章・西武と組んでゐる。三條東洞院蛸藥師に住し、綿屋を業としてゐた。一説に元は神官で、壬生に屋敷を持ち、數代居住したといふ。【作風】「永代記」の説によると、花なる事を好まず、顔子が高上をあまなひ、南華が滑稽を物の數ともせず、世間の當風に合はないから、諸人は皆下手だと云ふが、心は高標で、丁度佐野源左衞門が古具足を着て、鎌倉殿の御前にかしこまつてゐるやうな趣があるといふ。

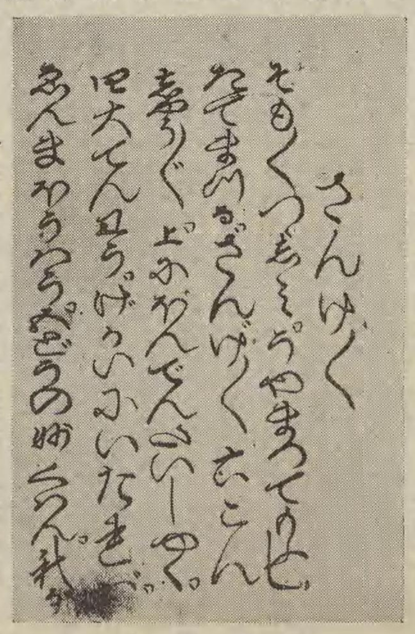
【參考】貞德永代記中島隨流○歷代滑稽傳森川許六○綾錦菊岡沾涼○誹諧家譜早川丈石○誹家大系圖生川春明○俳家奇人談竹内玄々一○滑稽太平記北藤浮生○採菊暇筆九々庵○誹諧名家錄加舍白雄

【著作】鷹筑波集(別項)○久流留(別項)一册(慶安三年刊)○津以居兒(慶安五年刊)○萩花(承應三年刊)○砂金袋六册(明暦三年刊)○阿波々千句(寛文六年刊)○砂金袋後集五册(延寶三年刊)○俳諧秘傳○俳諧西武綱。

祭文 さいもん

【名義】(一)祈願、祝呪、讃歎の意を神佛に奏上する詞章。(二)神佛の靈驗、世俗の戀愛事件等を材として唄ひ物とした歌謠式の祭文の意。歌祭文(別項)とも云ふ。

【解説】もと、陰陽道系統の呪詞であつたらしく、これを儒家も、佛家も、神道家も用ひた。神道では祝詞式の護詞となり、文章も祝詞の系統を引いてゐる。佛家では漢文で唱へられる。儒家の作つた祭文の構造は「維」の語を以て始まり、祭の年月日を次に擧げ、祭主の位記姓名を記し、次いで祭らるゝ神又は人物名を、進んで歎德、讃歎、祈願の意を述べたる句を連ね、最後は神靈に對して「再拜」又は「尚饗」の語を以て結ぶ。神道のは初め儒家の祭文の冒頭の如きものもあれば「謹上再拜謹啓」の語を以て始まつてゐるのもある。佛家のは大樣儒家の式と同じである。神道系統の祭文で異色あるのは、「宮咩參詣祭文」と廣隆寺牛祭祭文の二種である。



山伏祭文

後者は作者を惠心僧都としてゐるが、ずつと後世のものである。儒家の作つたものは「朝野群載」や、「本朝文粹」等に載つてゐる。文學方面に關する祭文に有名な文人を祭る祭文もあれば、歌合の祭文もある。佛家では主として眞言・天台で用ひ、眞言の祭文師は重い役となつてゐる。江戸の歌祭文と稱するのは、これ等祭文が歌謠化されたものであつて、興味本位の内容のものを祭文語と稱する山伏出立ちの藝能者が門附して唄つた。系統から云へば神道系統の祭文である。歌祭文は初め讀むと稱し、後語ると云ふやうになつたが、つがある。同一著者の「東遊記」(別項)の姉妹卷で、西國遊行中見聞の奇談を隨筆風に書き集めた書で、正編卷一の首に、伴高蹊の序及び正編總目次があり、毎卷首にその所收目次がある。又挿圖があるが、「東遊記」ほどに名家の筆のものは無い。正編卷一に檜垣女以下八項、卷二に冷暖玉以下九項、卷三に長江の旅泊以下九項、卷四に篤實以下六項、卷五に天の逆鉾以下十一項を收め、續編卷一に碑文以下七項、卷二に熊膽以下七項、卷三に嬉し野以下九項、卷四に那智の瀑布以下九項、卷五に楓樹以下六項を收む。「東遊記」と併せて世

組織の本を生んだ。即ち第一期の本は、實隆が能登守義綱から「源氏物語」の聞書を所望され、實隆は自己の撰述にかゝる桐壺の抄一册のみ書寫し、以下の各卷は、公條に命じてその聞書を淨書せしめ、大永五年九月から、同八年二月までの間に、全部書寫校閲の事を完成し、前後數回に亙つて、一部分づつ能州に遣したものである。この間の消息は、「實隆公記」大永五・六・七・八年に亙る記錄に見え、「細流抄」桐壺卷の奥にある大永八年の實隆の跋文によつて明かである。即ち第一期の本は、實隆撰述の桐壺の註を實隆自ら淸書したもの

【諸本】前記成立の事情に伴つて、二種の異本が存在するわけである。即ち第一類の本と、第二類の本とである。併してこの兩者の相違は、實隆の「桐壺愚抄」を含むか否かが最も大きい。又帚木以下の諸卷にも、多少條項及び語句の異同がある。桐壺の卷の實隆の「愚抄」と、公條の聞書とは、等しく實隆から出たものであつても、内容に可なりの相違がある。「愚抄」の方には、卷頭に、執柄本奥書とて、治承四年六月二十三日、藤原光長が福原の都に於てこの物語を書寫せし由の記錄を示し、次に「むかしいへることあり云々」の自序を載

後者は作者を惠心僧都としてゐるが、ずつと後世のものである。儒家の作つたものは「朝野群載」や、「本朝文粹」等に載つてゐる。文學方面に關する祭文に有名な文人を祭る祭文もあれば、歌合の祭文もある。佛家では主として眞言・天台で用ひ、眞言の祭文師は重い役となつてゐる。江戸の歌祭文と稱するのは、これ等祭文が歌謠化されたものであつて、興味本位の内容のものを祭文語と稱する山伏出立ちの藝能者が門附して唄つた。系統から云へば神道系統の祭文である。歌祭文は初め讀むと稱し、後語ると云ふやうになつたが、つまり内容の上にも曲節の上にも變化があつたことを意味する。伴奏器も、初めは錫杖・法螺貝を用ひてゐたのであるが、後に三味線に合せるに至つた。この事も祭文の内容・曲節の變化を助長せしめたことであらう。が、これ等の事柄は元祿時代をずつと隔てての事であつて、内容變化に就いては元祿の頃既にあつたのである。歌祭文をよぶに色祭文、心中祭文の語を以てするが、歌祭文の内容の固定して來た事を意味するのである。享保年代には八祭文（歌祭文參照）といつて最も流行したものがある。色祭文の名にふさはしい内容のもののみであつた。この歌祭文は諸地に行はれて大阪祭文・生玉祭文・江戸祭文・壬生祭文・上州祭文等の種類が出來、それぞれ特徴があつたやうで、江戸祭文は白ごゑで、力身を第一としてゐたといふ。ちよんがり節・ちよぼくれ節・法螺祭文などは、やはりこれ等歌祭文の餘流である。（筑士）

西遊記　紀行・隨筆　正編・續編各五册　【著者】橘春暉（南溪）　【刊行】寛政七年より十年に至る。【解説】諸國奇談と角書がある。同一著者の「東遊記」（別項）の姉妹卷で、西國遊行中見聞の奇談を隨筆風に書き集めた書で、正編卷一の首に、伴高蹊の序及び正編總目次があり、毎卷首にその所收目次がある。又挿圖があるが、「東遊記」ほどに名家の筆のものは無い。正編卷一に檜垣女以下八項、卷二に冷暖玉以下九項、卷三に長江の旅泊以下九項、卷四に篤實以下六項、卷五に天の逆鉾以下十一項を收め、續編卷一に碑文以下七項、卷二に熊膽以下七項、卷三に嬉し野以下九項、卷四に那智の瀑布以下九項、卷五に楓樹以下六項を收む。「東遊記」と併せて世に「東西遊記」と稱する。（和田）

細流抄　註釋書　【著者】三條西公條。「野史」「國朝書目」等に實隆となすは正しくない。普通二十卷と云はれるが、諸本いづれも卷數を明記しない。十册に分つ。【名稱】「源氏物語抄」（京都帝國大學所藏本）とも、「公條公聞書」（同上）とも、「祕抄」（岷江入楚に引く）とも、「三西家抄」（同上）とも、略して「三抄」（同上）とも、「帥源氏聞書」（實隆公記）とも呼ばれる。「細流」とは、「河海抄」に對する名稱で、「和漢朗詠集」の「泰山不讓土壤、故能成其高、河海不厭細流、故能成其深（史記季斯上秦王書）」の句によつて、「河海抄」が幾多の細流を集めて大成したといふ意味で名づけられたるに對し、これはその細流の一たるべしと謙遜して名づけられたものであらう。名づけた人は誰であるか明かでないが、「實隆公記」天文二年三月十一日の條に、「能州有狀、細流抄所望事也」とあるから、それ以前に於て命名せられたものであり、恐らく實隆が、公條の聞書を檢閲した時に與へたものか。

【成立】本書の成立は二期に分れ、各々異なる組織の本を生んだ。即ち第一期の本は、實隆が能登守義綱から「源氏物語」の聞書を所望され、實隆は自己の撰述にかゝる桐壺の抄一册のみ書寫し、以下の各卷は、公條に命じてその聞書を淨書せしめ、大永五年九月から、同八年二月までの間に、全部書寫校閲の事を完成し、前後數回に亙つて、一部分づつ能州に遣したものである。この間の消息は、「實隆公記」大永五・六・七・八年に亙る記錄に見え、「細流抄」桐壺卷の奥にある大永八年の實隆の跋文によつて明かである。即ち第一期の本は、實隆撰述の桐壺の註を實隆自ら淸書したものに、公條の聞書、帚木以下各卷を公條の淸書したものを加へて一部となしたものである。實隆が帚木以下を、公條の聞書で問に合せたのは、桐壺以外に、彼自身の執筆した註釋書がなかつたからで、翌享祿二年正月、彼は初めて帚木の抄に取りかゝつたのである（實隆公記）。公條の聞書は、「細流抄」卷末の奥書によつて、永正十年、彼が二十七歳の時、父實隆より庭訓即ち「源氏」の講説を受け、爾後淸書の暇なく放棄せられしを、十五年後に能州刺史の所望を機會に淸書されたものであることが分る。次に第二期の本といふのは、天文二年二月二十二日、能登守から、件の「帥源氏聞書」が火災のために燒失したとて、重ねての書寫を依頼して來たので（實隆公記）、懇切の嚴命默し難く、卒爾淸書にとりかゝり、翌三年冬に至つて全部の書寫校閲を完了し、父子奥書を連ねてこれを再び能州に贈つた（細流抄奥書）。この時、桐壺の註は、前回の實隆の「桐壺愚抄」をやめて、公條の聞書にかへ、全部纏まつたものとして完成したのではないかと思はれる。これが第二期の本である。

【諸本】前記成立の事情に伴つて、二種の異本が存在するわけである。即ち第一類の本と、第二類の本とである。併してこの兩者の相違は、實隆の「桐壺愚抄」を含むか否かが最も大きい。又帚木以下の諸卷にも、多少條項及び語句の異同がある。桐壺の卷の實隆の「愚抄」と、公條の聞書とは、等しく實隆から出たものであつても、内容に可なりの相違がある。「愚抄」の方には、卷頭に、執柄本奥書とて、治承四年六月二十三日、藤原光長が福原の都に於てこの物語を書寫せし由の記錄を示し、次に「むかしいへることあり云々」の自序を載せ（この序文は、中院家本岷江入楚に引く。但し流布本にはなし）、次に作者・發起・大意・題號・源氏姓事・准據・諸本不同・古來稱美等の條目を立て、簡單なる概説を述べ、本文の註釋に及ぶ。註釋の部分は、所謂流布の「細流抄」に比するに大異あつて、同一種の本と見ることは出來ない。卷末に、「桐壺愚抄、大永五十一廿」とある。「實隆公記」大永五年十月九日の條に「源氏桐壺卷注終書功了」とあり、同二十七日の條に「桐壺愚抄、帚木空蟬帥聞書、以上三帖遣之」とある本と同一のものである。この愚抄を含む一類の系統の本は、能州で火災に罹つて失はれたが、公條の手もとに一本複本があり、公條はこれを基にして講義をし、文明二十年の頃まで、度々その家本を修正し加筆した。その草稿本の寫しが二三現存す。これ等の草稿本は、も一度淨書せられて十五册にまとめられた。次に第二類の本は、流布の所謂「細流抄」であつて、卷頭に序文なく、總説なく、直ちに註に入るが、註の内容も第一類に比して少しく簡約である。尤も中院家本の「岷江入楚」には、「細流抄」を祕抄として

引き、これが序文として、前記「むかしいへる事あり云々」の一文を示してゐるから、第二類の本にも「愚抄」の序文を轉載した本があつたらしい。内閣文庫・宮内省圖書寮・東京帝國大學・京都帝國大學・阿波文庫等の所藏本は、いづれもこの系統の本である。名古屋圖書館藏の「細流抄」は、實は「明星抄」である。

【解説】本書は、「弄花抄」と同じく青表紙系統の本文により、「河海抄」「花鳥餘情」等の説を批判し、自説を示したもので、考證的學風より、鑑賞的態度に深まらうとする態度が見える。浩瀚な書ではないが、要領を得た註釋である。實隆の説を知らうとするには「弄花抄」と共に、必ず一覽すべき書である。註釋書としては云ふまでもなく、研究史の上より見ても、重要なる著述である。

【參考】源氏物語弄花抄と細流抄山脇毅（藝文一五ノ四）　〔池田〕

材料感情（ざいれうかんじやう）　藝術論〔獨〕Stoff-Gefühl【解説】藝術的形象を組成する凡ての原料、素材に伴ふ感情。（形式感情・美的材料・材料興味參照）　〔村田〕

材料興味（ざいれうきようみ）　藝術論〔獨〕Stoff-Interesse【解説】藝術表現の材料そのものについての興味である。藝術的形成を經ない以前の現實的興味であるから、美意識にこれが混入するとき觀照を妨げる要素となることが多い。例へばモデル小説の如き、モデルそのものに對する興味は藝術の興味以外に非美的な現實的聯想や現實感情を促し、美的觀照を破壞する。しかし、材料そのものゝ有する意義が、或る觀念の藝術的表現を强めるために役立つことから、特に傾向的文學、或は社會的[illegible]と之等の[illegible]に於ては、材料そのものゝ興味は重要視される。（形式感情・美的材料參照）　〔村田〕

最涼州（さいりやうしう）　雅樂曲【名義】西涼の樂からこの名が來たらしい。【異稱】西涼樂・涼州・涼州曲・功成慶善樂・九功舞・九功・九功樂・王震宮調【性質】唐樂。古樂（又は新樂）の中曲。沙陀調の曲であつたが、今は壹越調曲に屬する。拍子二十。初めには舞があつたが、本邦に傳はらなかつたか、又は傳來して後に絶えたものと見え、今は舞は無い。【沿革】「教訓抄」には、「此樂息長貞秀勝道成久作レ之」とある。「體源抄」にも「此樂息長貞秀勝道文所レ作」とある。併しこれも本邦にて唐樂を改作したものであつて、もと唐から來たことは明かである。白石の「樂考」には、「通典に後魏の太武帝河西を平げてこの樂を得、西涼樂と云と見ゆ。其後新涼州といふと見えたり」とある。「大日本史禮樂志」には、「按唐書云、九功舞者、本名功成慶善樂、太宗宴二群臣於慶善宮一賦レ詩、起居郎呂才被二之管絃一、名曰二功成慶善樂一、又云、涼州曲、本西涼所レ獻也、其聲本宮調、有二大遍小遍一、據レ此卽涼州、九功、本爲二別曲一明矣、今爲二一曲一者不レ詳二其故一、然舊記所レ載、亦或有レ以也、唐書通考並云、坐立二部、唯慶善樂顓用二西涼一、疑由二此等文一、混爲二一曲一也」と述べてゐる。白石の「樂考」にも、「此曲功成慶善樂、九功樂等の名ありといふはあやまれり」とある。要するにこの曲は西涼州の燕樂であつて、九功舞・慶善樂などとは別曲であると見る方が正しいであらう。本邦への傳來年代等は未詳。　〔田邊〕

囀（さへづり）　舞樂【異稱】詠【解説】舞樂に於て舞人が舞踊の最中に自ら詞を唱へることをいふ。囀と詠とは外觀に於て區別されてゐるが、それは習慣上の區別であつて、元來、囀と詠と全然別物ではない。もし幾分の區別を附けるとすれば、詠の方は文句が悉く明瞭であるが、囀の方は不明瞭な所が多いといふに過ぎぬ。いま普通に知られてゐる舞樂曲の囀、又は詠の文句を次に掲げよう。

（安摩）――囀三度
○初音聲本出何所、
○音聲本出南天竺國、佛家種子阿修羅等所作妓樂、
○音聲娛樂佛娛樂貴人之、

（二ノ舞）――詠
○日ハ晩景ニナリニケリ。我ガ行ク先ハ遙カナリ。

（輪臺）――詠
○千里萬里禮拜、奉勅安置鴻臚、
○我此西盤國信三郎、尙侍金魚、
○燕子山裏食殘、莫賀鹽聲平廻、
○共酌保桃美酒、相抱聚踏輪臺、

（青海波）――詠
○桂殿迎初ウ歲、
○社阿盧義果貞觀年、
○折阿花樹梅下、
○蝶阿醍書梁邊、

この他、なほ多くの囀及び詠があるが、今日は普通に用ひてゐない。

【沿革】支那・印度・朝鮮等から我が國に傳へられた舞樂の多くは、もとその國語を以てする所の歌詞があつたもので、初はその原語のまゝで歌はれてゐたのであらう。然るに外國語は歌ひにくく、且つは一般の人の耳馴れないものであるから、その大部分は消えてしまつて純粹の器樂曲になり、その一部分だけが[illegible]日本語に變化して、以て囀又は詠となつて殘つたものらしい。その多くの詠の中で、なほ大部分は今日行はれず、輪臺・青海波・採桑老の如き曲の詠だけは、常に行はれてゐる。又陵王の囀はこれを非常に重んじて容易くは唱へず、勅ある時に限つてこれを唱へる。又安摩・迦陵頻・菩薩・河南浦・泛龍舟・三臺・五常樂・賀王恩・甘州・還城樂・師子・貴德・胡德樂などには詠があるけれども、近世には全くこれを用ひないといふ。　〔田邊〕

塞神（さへのかみ）　神話【名稱】障神とも書く。【解説】邪靈の侵入を防止する神の義である。久那斗神・船戸神に類同した本質と發生心理とを持つた神格であらう。（委しくは「船戸神」、「道俣神」の項を見よ。）松岡靜雄氏は、生人に害を與へる死人の幽鬼を防止するため、柩處卽ち墓地に祭り、石を建てて標とした神であるとなしてゐるが（日本古語大辭典）、俄に信じ難い。塞坐黃泉戸大神（古事記）・泉門塞大神（日本書紀）とあるやうに、古代日本人の他者（他國人でも、邪靈でも、死界の者でも）の侵入に對する恐怖・危惧が產み出した名に於て、漠然たる職能神の一種である。御門祭の祝詞に「四方內外御門爾如二湯津磐村一久塞坐豆」とあり、「古事記」に、天之日矛がその妻を追うて難波に來たとき、「其渡之神塞以不入」とあるやうに、邪靈阻止の欲求は强く廣く古代日本民族を支配し、而して或る神によつて邪靈の侵入から遮斷してもらふ區域も區々であるが、それは大體に於て民衆の生活單位の意識の如何に隨伴したのであらう。家族・氏族・部族・家・村・國等の生活集團のいづれが意識せられるかによつて、塞る範圍が自ら定つたのであらう。併し後代の文化期になると、支那傳來の道祖神なる邪靈神と混淆せられて、これをも「さへのかみ」と訓むやうになり（和名抄・今昔物語）、又「さへ」を「さい」と訛つて、一切の幸福を與へる神と、考へられるやうになり、而してその神體として、しば〳〵生殖器の形をしたものが現はれ、且つその祭儀に木や石の陰陽物を供へる風習が生じた（今昔物語・扶桑拾遺集・倭訓集・小野宮年中行事・東遊記等）。しかし塞神が旅行守護の神、幸福を授ける神、生殖器崇拜に關する神と考へられることが、專ら支那の道祖神との混淆及び「さへ」から「さい」への轉訛等にのみ基くとする考へ方は、正しくないであらう。總じて邪靈障塞を掌る神は

トギス」に發表した多くの作中には、悟道の妙に入り得たものが少くない。【著書】句集「栗の花」「左衞門句集」等。　〔水原〕

堺傳授（さかひでんじゆ）「歌道傳授」を見よ。

堺利彥（さかひとしひこ）　社會運動家【號】枯川、貝塚濱六などとも稱した。【閱歷】明治三年十一月二十五日福岡縣京都郡豐津に生れた。同十五年小學校、十九年中學校を卒業、中村千治の養子となり東京に遊學。同人社に學び、後、共立學校に轉じ、二十年、第一高等中學校入學、翌年退學、二十二年、大阪天王寺高等小學校の英語教師となり、二十五年頃より漸く小櫻長吉（ディツケンズのオリバアトイスト關係）○錐の穗（ショウの非社交的社會主義者）○石炭王（シンクレエア）○赤裸の人（ルッソオ）○女性中心說（ウォード）○唯物史觀略解（ゴルテル）。外にマルクス・エンゲルス全集の若干篇、レニン全集の若干篇。【自著】猫のあくび○賣文集○日本社會主義史○パリコンミューンの話○十一月十七日革命の話○堺利彥自傳。

【批評】萬朝報記者時代から新刊紹介の一部を擔任し、專ら大衆の理解力と興味を標準にして、たとへば衆口一致賞讃した「卽興詩人」「天地有情」（各別項）を難するなど、異色を見せ前小城藩士。東京に遊學して中江兆民の佛學塾に佛語・佛文學を修め、業成つて兆民を助けて雜誌「政理叢談」の發行に從ひ、又佛學塾の事業にも當つた。この頃から既に熱心な民權自由論者であり、政論家として名を馳せた。明治二十三年、佛蘭西に於ける萬國博覽會の際、農商務省の囑託となつて渡佛し、吏務を執る傍ら、「國民之友」に通信し、又社會學を研究して大に得る所があつた。この時の通信で最も有名なものは第一回メーデイに關する「社會黨の運動」及び「五月一日の社會黨運動に就いて」であつた。翌年ブラッセルに開催

そも「さへのかみ」と訓むやうになり（和名抄・今昔物語）、又「さへ」を「さい」と訛つて、一切の幸福を與へる神と、考へられるやうになり、而してその神體として、しば〳〵生殖器の形をしたものが現はれ、且つその祭儀に木や石の陰陽物を供へる風習が生じた（今昔物語・扶桑拾遺集・倭訓集・小野宮年中行事・東遊記等）。しかし塞神が旅行守護の神、幸福を授ける神、生殖器崇拜に關する神と考へられることが、專ら支那の道祖神との混淆及び「さへ」から「さい」への轉訛等にのみ基くとする考へ方は、正しくないであらう。總じて邪靈障塞を掌る神はさうした職能的分化をなす要素を自己に内存させてゐるものであること、他の民族間に於ける這般の現象に徴して明かである。

【參考】祝詞新講　次田潤〇石神問答　柳田國男〇風俗通祀典〇漢書　〔松村〕

左衞門（さゑもん）　俳人　【姓名】吉野太左衞門【生歿】明治十年二月東京府下北多摩郡に生れ、大正九年一月二十二日朝鮮で病歿す。享年四十四。【閲歴】東京專門學校政治經濟科を出で、國民新聞社に入つた。俳句は初め子規に就いて學び、次第に頭角を現はしたが、子規歿後は虚子を助け、「ホトトギス」の同人として同誌のために盡した。後、京城日報社長として渡鮮し、朝鮮俳壇を開拓した功が少くない。性豪宕、頗る俠氣に富み、大正八年末、胃癌を病んで再び起たざるを知るや、死を見ること歸するが如く、從容として句作を樂しみつゝ逝いた。その初期の作は、子規が「俳諧大要」の中に於て、「左衞門は口を衝いて立どころに數百句を成す。句法趣向共に無造作なれども、なか〳〵に俗氣少し」と評した如くであつたが、死の床に横はつてから「ホトトギス」に發表した多くの作中には、悟道の妙に入り得たものが少くない。【著書】句集「栗の花」「左衞門句集」等。　〔水原〕

堺傳授（さかひでんじゅ）「歌道傳授」を見よ。

堺利彦（さかひとしひこ）　社會運動家　【號】枯川、貝塚渚六などとも稱した。【閲歴】明治三年十一月二十五日福岡縣京都郡（みやこぐん）豐津に生れた。同十五年小學校、十九年中學校を卒業、中村千治の養子となり東京に遊學。同人社に學び、後、共立學校に轉じ、二十年、第一高等中學校入學、翌年退學、二十二年、大阪天王寺高等小學校の英語教師となり、二十五年頃より漸く大阪の操觚界に活躍を始めた。二十六年、小説「はだか男」を、二十九年、「破れ羽織」を出版。二十八年、東京に出でて實業新聞の記者となり、二十九年、福岡日々新聞記者に轉ず。三十年福岡を去つて上京、毛利家編輯所に入り、その仕事を終へて萬朝報記者になつた。幸德秋水と机を並べ、安部磯雄・片山潛等とも相知り、社會主義に關心を抱くに至る。日露戰爭の直前、非戰論の故をもつて萬朝報社を去り、社會主義運動機關誌なる週刊平民新聞發行。三十九年、日本社會黨組織。四十年一月、日刊「平民新聞」創刊。四十一年六月赤旗事件の故を以て二ヶ年間入獄。この間に大逆事件あり、四十三年、出獄後賣文社を經營。大正四年、日刊「新社會」發行。九年、山川均等と共に社會主義同盟を組織、大正十二年、第一次日本共産黨事件の指導者の一人として入獄。昭和四年日本大衆黨から推されて牛込區より東京市會議員候補に立ち、最高點にて當選。後、社會大衆黨顧問となる。【著譯】頗る多くパンフレット乙數へたら僂指するに堪へないから主なるもののみを數へる。〔譯書〕勞働（ゾラ）〇小櫻長吉（ディッケンズのオリバトイスト關巻）〇錐の穂（ショウの非社交的社會主義者）〇石炭王（シンクレエア）〇赤裸の人（ルッソオ）〇女性中心説（ウォード）〇唯物史觀略解（ゴルテル）。外にマルクス・エンゲルス全集の若干篇、レニン全集の若干篇。〔自著〕猫のあくび〇賣文集〇日本社會主義史〇パリコンミューンの話〇十一月十七日革命の話〇堺利彦自傳。

【批評】萬朝報記者時代から新刊紹介の一部を擔任し、專ら大衆の理解力と興味を標準にして、たとへば衆口一致賞讃した「即興詩人」「天地有情」（各別項）を難ずるなど、異色を見せた。併し彼の功績の最も輝やかしいものは、大逆事件後根絶させられたかに見えた社會主義運動を獨力で辛くも護り來りて大正中期の社會思想全盛期に引きつぎ、爾後無産政黨運動の發展に身を以て携はつて來た點である。殊に大正初期まで斯界指導者間にも色々の疑惑があつたにも拘らず、彼のみは比較的に迷はないで主としてマルクス及びその思想を祖述し、日本の社會運動をもマルキシズムの軌道の上に載せた事に於ては、最大の貢獻者の一人たる榮譽を有する。その意味から平民新聞に幸德秋水との共譯「共産黨宣言」は、劃期的な文獻であつた。有體に云へば彼が直接文壇と交渉をもつ頁は極めて少いが、併し社會運動の指導者として間接に殊にプロレタリヤ文學の建設に盡した役割は、なまなかの批評家を凌駕すること數等であらう。　〔木村〕

酒井の太鼓（さかゐのたいこ）「太鼓ノ音智男ノ三略」を見よ。

酒井雄三郎（さかゐゆうざぶらう）　評論家　【號】九皐・茫々學人【生歿】安政六年に生れ、明治三十三年十二月歿す。享年四十二【閲歴】肥前小城藩士。東京に遊學して中江兆民の佛學塾に佛語・佛文學を修め、業成つて兆民を助けて雜誌「政理叢談」の發行に從ひ、又佛學塾の事業にも當つた。この頃から既に熱心な民權自由論者であり、政論家として名を馳せた。明治二十三年、佛蘭西に於ける萬國博覽會の際、農商務省の囑託となつて渡佛し、吏務を執る傍ら、「國民之友」に通信し、又社會學を研究して大に得る所があつた。この時の通信で最も有名なものは第一回メーデイに關する「社會黨の運動」及び「五月一日の社會黨運動に就いて」であつた。翌年ブラッセルに開催された社會黨大會に列席して歸朝。二十五年社會問題研究會を設け、その評議員となつた。都築馨六の「民政論」を痛烈に批評した「排曲學論」を公にして世論を沸騰させたのもこの年である。三十三年巴里大博覽會のため、再び農商務省囑託となつて渡佛したが、この時は朝日新聞の特別通信員を兼ねてゐたので、その通信は紙上に異彩を放つてゐた。この年十二月旅舍の窓から墜落して死去。原因は不明だといはれてゐる。【著書】以上の論文の外に、「今世歐洲外交史」「十九世紀歐洲政治史論」「政理新論」（亞哥剌士著）等の譯書がある。

【參考】明治文學展望　木村毅　〔柳田（泉）〕

堺流（さかひりう）　書道　【解説】連歌師肖柏（別項）の書流。肖柏は宗祇に連歌を學んで、同門の宗長と名を齊しうし、また宗長から古今傳授を受けた。これを堺傳授（歌道傳授參照）と云ふ。その書は堺流と稱せられ、飛鳥井流（別項）から出たものである。（肖柏參照）　〔伊木〕

さかき（御伽草子）「さいき」を見よ。

榊原芳野（さかきばらよしの）　國學者　【字】作良【通稱】冨藏【號】琴洲・豐洲・櫻舍・佳園【生

歿】天保三年江戸日本橋住吉町に生れ、明治十四年十二月四日歿す。享年五十【墓所】東京市淺草區今戸町三丁目二十六番地曹洞宗安昌寺【法名】大觀作良居士【學統】父正之助眞茂（號、撝謙又は雲錦堂）は、繪畫俳諧を善くし、母みち（坂内氏）も亦、繪畫和歌を好んでゐたので、幼時からその薫陶を受け、長じて國典を伊能穎則に、佛乘を深川稻荷堂の別當で連歌に長ぜる僧行阿に、本草を水本氏に學んだ。【閲歴】本所石原町に私塾を開いてゐたが、明治二年昌平黌出仕となり、學校教授試補・大學出仕・中教授準席・大學少助教・大學中助教を經て、明治四年文部權大助教となつて文部省編輯寮に勤務、十二年三月古事類苑編纂掛、十四年一月辭任。國典に精しく、傍ら悉曇・本草に通じ、盆畫・挿花・聞香・謠曲・淨瑠璃の如きに至るまで究めざるなく、時人の間に博覽多識を以て重んぜられてゐた。又圖書の蒐集は最も好む所で、屋壞れ雨漏るが如きは敢て意に介しなかつた。かくて得たる圖書七千餘卷は、明治七年すべてを灰燼に歸せしめた。後、また鋭意蒐集に努め、經史子集はもとより國史・國文・言語等頗る多方面に亙りて蒐め、また七千餘卷の多きに達した。歿後、榊原文庫としてその總てを東京書籍館（現帝國圖書館）に寄贈した。

【業績】文部省在任中、木村正辭・横山由清・岡本保孝・小中村清矩・黑川眞頼・間宮永好・塙忠韶等と共に、國語辭書で近代的體裁を備へたるものゝ先驅ともいふべき「語彙」（別項）及びその附錄として明治の初頭より中期に至るまでの間の語法教授の指針となつた「語彙別記」（別項）、雅言と俗言とを對比して用言の活用を[illegible]

國に於ける最初の小學校用讀本である「小學讀本」も亦、彼の編纂に係るものであつた。明治九年米國費府に於て米國百年期博覽會が開催せられ、その教育部に文部省から日本教育資料として出品した「日本教育史略」の第三部「文藝概略」は實に彼の執筆に係るもので、かの「文藝類纂」（別項）は、この「文藝概略」を增補訂正したものであつた。また「古事類苑」（別項）編纂掛となり、浩瀚なる「古事類苑」編纂の方針・計畫等の基礎は、小中村清矩・那珂通世とともに多く彼の定むるところであつた。不幸、酒のために健康を害し、博覽多識を大に用ひることなくして歿した。【著書】文藝概略一卷（日本教育史略第三部）（明治文化全集第十卷所收）○文藝類纂（別項）○小學讀本八卷（明治七年刊）○太古史略五卷○蒔繪集說八卷○醬油集說一卷。

【參考】榊原芳野君墓銘大槻修二撰○榊原芳野大人系圖大槻修二編○那珂通高榊原芳野合傳依田百川撰（譚海卷四）○國學者傳記集成○國學三遷史○名人忌辰錄○古事類苑編纂事歴　〔寛〕

榊山勘助（さかきやまかんすけ）　脚本作者・俳優

【閲歴】本名・生歿・師傳共に不明。元祿期の末、漸く歌舞伎が操に推される時代に出て、主に京都の劇壇のために奮鬪した作者である。正德初年から享保十年頃までに、約三十篇の作が書き卸された。合作者には佐渡島三郎左衞門や中山金藏等がゐる。當時の歌舞伎作者一般の傾向で、舊作の書替へや抱合せ物が多いが、世界の範圍は廣く、時代世話何れも自在であつたらしい。お家騷動や敵討狂言を多く書いてゐる。「愛子若近江八景」（正德五年七月、京、[illegible]

月、京、早雲座。お夏清十郎）、「男模樣二枚雛形」（享保七年十一月、京、早雲座。黑舟）、「弘徽殿姉車」（享保九年正月、大阪、松本芝居。弘徽殿女御）等がある。役者としては道化方專門であつたが傍ら祭文を巧に唄つたと傳へる。　〔守隨〕

阪崎出羽守（さかざきでわのかみ）　戲曲　四幕

【作者】山本有三【發表】大正十年九月、新小說【刊行】現代脚本叢書第五編（新潮社）。日本戲曲全集現代篇所收【興行】大正八年九月尾上菊五郎一座によつて市村座に上演されて以來、同優の當り狂言となり、幾度となく上演された以外、澤田正二郎その他によつても上演された。

【梗概】〔序幕〕時は元和元年五月、大阪落城の日であつた。愈々本丸も落ちるといふ時、家康は秀頼に遣つた孫千姫のことを思ひ、悲しんでゐるのを聽き、それまで後詰に廻され脾肉の嘆に堪へなかつた阪崎出羽守が、自分が必ず助け出さうと進み出た。家康は喜びの餘り、見事救ひ出したら姫を汝にやらうと云つた。かうして、彼は姫を無事に救ひ出したが、猛火のために大火傷を負ひ、顏半分はひきつりて醜い貌となつた。〔二幕〕同年の秋、姫は駿府へ歸ることとなり、警護の任には無論阪崎が當つた。桑名から海路に出た時、船を仕立てた桑名の城主本多美作守の嫡子平八郎忠刻が乘り込んだ。忠刻は阪崎より年も若く、美男で才子で、千姫の心がそれに惹かれるらしい樣子を見、阪崎は嫉妬から苛立たしく、つい競爭的になり、魚釣を勸めたり、白鳥の射合せをしたりするが、焦る餘りいつも失敗して忠刻にのみ名を成さしめた。遂に苛立たしさから劍道の仕合を挑み、これには見事勝つて得意になつてゐると、それが却つて千姫の機嫌を損ねて了つたのであつた。〔三幕〕千姫は本多忠刻に逢つて以來、すつかり氣に入つて了ひ、阪崎への緣組などは斷然拒んでゐる。家康もこれには困つて了ひ、阪崎との口約を思つて種々とすゝめても甲斐がなかつた。で、遂に狡猾な僧金地院崇傳に裁きを任して了ふ。命を受けて金地院は阪崎に會ひ、姫が剃髮して尼になるからとて言葉巧みに阪崎を斷念さして了ふ。が、それも束の間、千姫が本多への輿入れはきまり、阪崎の友柳生但馬が使者となつて宥めに遣はされる。阪崎は鬱憤やる方ないが、遂に思ひ諦めようと決心する時も時、輿入の行列が邸近くの坂を登つて行くのが見える。さしもの彼もカッとなり、槍を手にするや、躍り出て行列に割つて入る。取り抑へられた時、柳生が後日の咎めのないやう、亂心者と言ひ繕つてくれたのも斥け、「亂心者といはれて助かるより正氣の人として死にたい」と、家康の一言に操られた身を怨みつゝ切腹して果てる。

【批評】作者は一字一句をも忽せにしない彫心鏤刻の作風を以て知られてゐるが、これにも、その整然たる本格的調子、周到に用意せられた緊密な舞臺技巧、簡潔で雄勁な會話など、作者の特色のよく表はれてゐる代表作の一つであらう。阪崎といふ一個の武將をとほして、環境と感情の軋み合ひから、吾知らず次々と悲劇的な運命の陷穽に落ち込んで行く徑路が、極めて自然に力强く表現されてゐる。特に些末な事件の連續のうちから、心理的な變化を、層々とたゝみこんで來る技巧、微細な特質をもよく捕へて、鮮かにその人物性格を具現してくる手腕、よく選擇せられた舞臺情景、しかも全篇を通じ包んでゐるとエー[illegible]

ン な感情など、作家としての作者の風貌を示して餘蘊なく、從來の史劇にも、一つの新生面を開いた渾然たる作である。　〔關口〕

坂田藤十郎（さかたとうじふらう）　俳優【俳名】藤貢【生歿】正保二年に生れ、寶永六年十一月一日、京都に歿す。享年六十五。【閲歴】家は越後の出で、父坂田市右衞門は京都で劇場の座元だつた。延寶四年、京都の繩手芝居で「瀧口」の狂言に瀧口の役をつとめ、越中の次郎兵衞に扮せる山下半左衞門と互角の好評をた。「傾城佛の原」（別項）の梅永文藏、「壬生大念佛」（別項）の高遠民部などは、その實例である。稀に大阪へも下つたが、大かた京都の都萬太夫座にゐた。自分でも脚本を作つたが、近松門左衞門に書いてもらつたものが隨分多く、「佛の原」や「壬生大念佛」等はそれである。藤十郎には妹があつて、その子は小唄うたひの名人坂田兵四郎である。又二代目藤十郎の名は、弟分の坂田長左衞門によつて嗣がれたが、先代の摸倣をするばかりで、その技倆は遙かに劣つてゐた。　〔伊原〕

酒月米人（さかつきよねんど）　狂歌師【姓名】榎本治兵衞【別號】狂歌子・吾友軒、後、四方籠

母は皇后乙牟漏。皇子は生誕と共に當時の例によつて乳人の姓神野（日本紀略には賀美野）を以て御名とされた。大同四年四月卽位。弘仁四年六月、万多親王・藤原園人等に「新撰姓氏錄」（別項）を撰集せしめ、同十年藤原冬嗣・同緒嗣等に「日本後紀」修撰をせしめた。天長二年、四十の賀を行はせらる。同四年五月に良岑安世等に「經國集」（別項）を、同十年二月「令義解」を撰進せしめられ、又弘仁格及び弘仁式を撰修せしめられた。帝は御幼時から聰慧で讀書を好まれた。御年長ずるに及び、博く經史に通じ、又詩文に長ぜられ、能書にましました。特に書は晉唐の魏體を傳へて、日本三筆の稱

子廣世の經營した弘文院であり、この頃、多嗣は勸學院を建て、皇后橘嘉智子は學館院を建てた。空海は綜藝種智院を建てて唐の閭塾に擬し、平民の子弟を教育した。後には淳和・奘學院も建てられたが、何れも帝の文教に意を用ひ給うた事に起因してゐる。弘仁格及び弘仁式を撰修せられて、唐の如く律・令・格・式の四書を具へて法制を完備せしめられた。

【參考】凌雲集○文華秀麗集○經國集○續日本後紀○類聚國史卷三十一○續古事談卷一○日本後紀卷二十○嵯峨天皇宸翰李嶠雜詠殘卷（東山御文庫）○祈誓弘仁天皇御厄表○續遍照發揮性靈集卷九　空海　〔山岸〕

ンな感情など、作家としての作者の風貌を示して餘蘊なく、從來の史劇にも、一つの新生面を開いた渾然たる作である。〔鬧口〕

坂田藤十郎（さかたとうじふらう）　俳優　【俳名】藤貢【生歿】正保二年に生れ、寶永六年十一月一日、京都に歿す。享年六十五。【閲歴】家は越後の出で、父坂田市右衞門は京都で劇場の座元だつた。延寶四年、京都の繩手芝居で「瀧口」の狂言に瀧口の役をつとめ、越中の次郎兵衞に扮せる山下半左衞門と互角の好評を得、同六年、大阪新町の名妓夕霧が病死した事實を同地の歌舞伎に脚色し、藤十郎は藤屋伊左衞門に扮して大當りを取り、一年間に四回繰返して演じ、これより急に名聲を高め、元祿時代の京都劇壇を代表する名優となつた。舞踊をよくしなかつた代りに、地藝と辯舌とに長じ、傾城買ひの大盡が後に零落して、下賤の職業をするといふ如き役を最も得意とした。「傾城佛の原」（別項）の梅永文藏、「壬生大念佛」（別項）の高遠民部などは、その實例である。稀に大阪へも下つたが、大かた京都の都萬太夫座にゐた。自分でも脚本を作つたが、近松門左衞門に書いてもらつたものが隨分多く、「佛の原」や「壬生大念佛」等はそれである。藤十郎には妹があつて、その子は小唄うたひの名人坂田兵四郎である。又二代目藤十郎の名は、弟分の坂田長左衞門によつて嗣がれたが、先代の摸倣をするばかりで、その技倆は遙かに劣つてゐた。〔伊原〕

阪田藤十郎の箱崎左衞門（役者萬年曆所載）

酒月米人（さかつきよねんど）　狂歌師　【姓名】榎本治兵衞【別號】狂歌房・吾友軒、後、四方瀧水【生歿】未詳。但し天保の末までは生存し、年齢は八十歳前後であつたといふ。【閲歴】江戸の人。初め本町二丁目に住し、後、日本橋青物町に轉じた。狂歌は蜀山人の敎を受けて四方側の判者に列し、また蜀山風の書をよくし、自著の狂歌集は皆自分で版下を書いてゐる。吾友軒の別號は蜀山より贈られたのであるが、文化十一年にこれを信州松本の門人又香に讓つて四方瀧水と改めた。【著書】狂歌東來集初編（寛政十一年刊）○同二編（同十二年刊）○同三編（享和年間刊）○狂歌題林抄四册（同二年刊）○狂歌千歳集（同三年刊）○狂歌月の都（文化四年刊）○信撰狂歌集（同六年刊）○狂歌水蘆集（同十一年刊）○俳諧歌僻言集（天保三年刊）○職人盡花鳥集二册（天保年間刊）〔野崎〕

嵯峨天皇（さがてんわう）　漢詩人　【御諱】神野【生歿】延暦五年九月七日長岡の宮に御降誕、承和九年（一五〇二）七月十五日崩御。寶算五十七【御陵】山城國葛野郡嵯峨村大字上嵯峨の朝原山。一に御廟山（ごびやうやま）とも稱す。【閲歴】桓武天皇の第二の皇子、平城天皇の同母弟、御母は皇后乙牟漏。皇子は生誕と共に當時の例によつて乳人の姓神野（日本紀略には賀美野）を以て御名とされた。大同四年四月卽位。弘仁四年六月、万多親王・藤原園人等に「新撰姓氏錄」（別項）を撰集せしめ、同十年藤原冬嗣・同緒嗣等に「日本後紀」修撰をせしめた。天長二年、四十の賀を行はせらる。同四年五月に良岑安世等に「經國集」（別項）を、同十年二月「令義解」を撰進せしめられ、又弘仁格及び弘仁式を撰修せしめられた。帝は御幼時から聰慧で讀書を好まれた。御年長ずるに及び、博く經史に通じ、又詩文に長ぜられ、能書にましました。特に書は晉唐の瑰麗を傳へて、日本三筆の稱がある。また卽位の後、幾ばくもなく藏人所を設けて、機密文書及び諸訴の事を掌らしめられる等、御治績が多かつた。崩ずるに臨んで遺詔して、「生きて堯舜の德有る能はず、死して何を以てか國家の費を重ねん云々」（續日本後紀卷十二）とて葬儀を薄くせしめ給うた。【御著作】田村麿傳一卷（坂上田村麿の傳記で、群書類從卷六四・列聖全集第一・御撰集等所收）○嵯峨遺誡一卷（本朝書籍目錄雜部に記してゐるが傳らない）○嵯峨天皇灌頂願文。【詩風】詩人としての帝は天資神敏、詞藻は豐富、自由におはした。殊に詩餘として「漁歌子」の如きものがある事は特筆すべく、記錄に存するものでは、わが國詩餘の濫觴は實に帝に在りと斷言するを得るのである。

【御業績】仁慈の性を以て、諸國の百姓を賑はし給ひ、殊に益田の池を掘つて農事に勵ませられたことは特筆すべきである。又帝自ら文敎にも心を用ひて唐風を學び給うた。學術の隆盛と同時に私學の興隆も當代の如きは稀である。私學の濫觴は和氣淸麿が創立し、その子廣世の繼營した弘文院であり、この頃、冬嗣は勸學院を建て、皇后橘嘉智子は學館院を建てた。空海は綜藝種智院を建てて唐の閭塾に擬し、平民の子弟を敎育した。後には淳和・奬學院も建てられたが、何れも帝の文敎に意を用ひ給うた事に起因してゐる。弘仁格及び弘仁式を撰修せられて、唐の如く律・令・格・式の四書を具へて法制を完備せしめられた。

【參考】淩雲集○文華秀麗集○經國集○續日本後紀○類聚國史卷三十一○續古事談卷一○日本後紀卷二十○嵯峨天皇宸翰李嶠雜詠殘卷（東山御文庫）○祈誓弘仁天皇御厄表○續遍照發揮性靈集卷九　空海　〔山岸〕

嵯峨日記（さがにつき）　俳諧日記　一册　【著者】松尾芭蕉【名義】嵯峨の落柿舍（らくししや）に於ける日記であるから、かく名づけた。【成立】元祿四年【刊行】寶曆三年に魯玉が出版したのが最初である。四部錄本は魯玉本の再版である。

【諸本】魯玉の出版した「ばせを翁嵯峨日記」が古い。又別に城田氏藏の芭蕉眞蹟の摸刻なる「異本嵯峨日記」もある。芭蕉翁文集・芭蕉翁四部錄・蕉門七書・俳諧一葉集・俳諧袖珍鈔・芭蕉翁一代集・芭蕉全集（俳諧文庫）・芭蕉全集（沼波瓊音編）・芭蕉一代集（俳書大系）等所收。

【解說】元祿四年四月十八日、芭蕉は去來の嵯峨の落柿舍に遊んで、五月四日まで泊つてゐたので、その間の日記が「嵯峨日記」である。本文によると、落柿舍は元は作り琢（みが）かれた立派な家で、それが漸く頹破して、今は寂しい草庵となつたとある。「凡兆日記」は落柿舍のことを精しく記してあるが、小說らしい所があつて、どこまで信じてよいか分らない。去來の「落柿舍記」には、柿を人に賣つた所、一夜の中に落ちて了つたので、買手に金を返し

てやり、友人への消息に自ら落柿舍の去來と書き始めたとある。とにかく落柿舍に於ける芭蕉の生活は、極めて清閑であつた。凡兆夫婦・芭蕉・去來・他一人の者凡て五人が一つ蚊屋に入つて寢たけれど眠れず、夜半過ぎから起きて、菓子を食つて明方まで話し明かすなどのことがあり、芭蕉が夢に杜國を見て泣いた事なども書かれてゐる。白氏文集・本朝一人一首・世繼物語・源氏物語・土佐日記・松葉集を座右に置き、蒔繪の五重の器に樣々の菓子を盛り、名酒一壺、盃を添へてある狀など、芭蕉の清閑な生活が如實に現はれてをり、芭蕉の俳文としては簡素な方ではあるが、寂寥を樂しむ氣味を直叙した所に特色を持つ日記である。〔萩原〕

坂上郎女（さかのへのいらつめ）　歌人　【本名】大伴坂上郎女。坂上の名はその住居してゐた地名から出たのであらう。【生歿】不詳。奈良朝の中期に、その青年期以後を送つたか。郎女の作によれば、最も古いものは「萬葉集」卷三、天平五年冬十一月大伴氏の氏神を祭る歌で、最も新しきは同卷十九の天平勝寶二年、彼女の第二女（大伴家持の妻）大伴坂上大嬢に贈つた長歌・反歌である。この間、滿十七ケ年間である。これを以て見ても、彼女が既に老年と云ふべき年に近かつたことが察せられる。【家系】大伴安麿（佐保大納言）の娘、旅人の妹である。家持には叔母に當り、坂上大嬢の母である。【閲歴】「萬葉集」卷四の「千鳥鳴く」の歌の左註に、「右ノ郎女者、佐保大納言卿之女也。初嫁ニ一品穗積皇子ニ、被レ寵無レ儔。而皇子薨之後時、藤原麻呂大夫娉ニ之郎女ニ焉」とある。即ち最初穗積皇子に、次に藤原麻呂に嫁したのである。次に又藤原麻呂の死後、異腹兄藤原宿奈麿に嫁して、三女を生んだ。【作品】すべて「萬葉集」に出てゐる。卷三に、長歌二首・短歌四首。卷四に長歌二首・短歌三十六首・旋頭歌一首。卷六に長歌一首・短歌十首。卷八に短歌二十首。卷十七に短歌四首。卷十八に短歌二首。卷十九に長歌一首・短歌二首。（計算は、年代順作者類別萬葉集―澤瀉久孝・森本治吉共著による。他書の數字はこれと相違してゐる）。計長歌六首・旋頭歌一首・短歌七十七首。作品の多い事、萬葉女流歌人中第一位を占めてゐる。それは、その技倆の勝れてゐたためであるが、また卷三・四・六・八・十七以下の諸卷の編者であつた家持と關係の深い位置に在つたためでもある。【批評】彼女は、萬葉の女流歌人中第一の作家であるのみならず、男女を通じての萬葉の代表作家の一人と言へる。當時の作家、殊に女性が、多くはその情熱や心の純眞さで價値ある作品を作り上げてゐるに對し、勝れた技巧を以て作歌し、本格の歌人たることを示してゐる。即ち、その歌體が長歌・旋頭歌・短歌の三種に亙つてゐるのは、女では坂上郎女のみであつて、歌才の豐さが窺はれる。その歌材の廣汎に亙れる事も當時の女流に全く類がなく、戀愛歌の外に新羅の尼理願を弔ふ有名な挽歌（卷三）、娘大嬢に贈れる數々の母の愛の溢れた歌（卷四・十九）、聖武帝の御獵に扈從して作つた鼈鼠の歌（卷六）等よく種種の歌材、樣々の歌境を自由に詠んでゐる。これは、殊に理願の歌などは、彼女の心が暖くあらゆるものに向つて開いてゐたと云ふ一證であつて、歌風の點のみならず、人としての彼女を窺ふためにも良い資料である。〔森本〕

嵯峨迺舍（さがのやしろ）「矢崎嵯峨迺舍」を見よ。

酒樂歌（さかほがうた）歌謡【名稱】彦神天皇が角鹿（つぬが）より還り上り給うた時、御母神功皇后の御酒を獻じて歌ひ給うた御歌、又武内宿禰が御子に代つて答へ奉つた歌であるから、この名稱を得た。【出典】「古事記」仲哀天皇の條に二首出てゐる。【解說】雅樂寮で教習した大歌の一で、五言七言を交互に重ねた長歌で、末句が五三七と云ふ形式で終り、奇數句より成る形式である。又終末句に「ササ」と云ふ囃子詞を持つてゐるのが特徵である。

この御酒（みき）は　わが御酒ならず　くしの神　常世に　います　岩立たす　少名御神（すくなみかみ）の神壽（かぽぎ）　壽ぎくるほし　豐壽　壽ぎもとほし（書紀所載の歌は、以上四句の上二句と下二句が入れ代る。）祀り來し　御酒ぞ　あさずをせささ

この御酒を　かみけむ人は　その鼓　白に立てて　歌ひつつ　かみけれかも　舞ひつつ　かみけれかも（書紀所載の歌には以上二句なし）この御酒の　御酒の（此の句書紀所載の歌にはなし）あやに　うたた樂しささ。

【備考】「日本書紀」にも同歌が二首出てゐる。少異があるので、歌の形式を考へる上に參考となる。「琴歌譜」（別項）には「十六日節酒坐歌二」として、同歌二首を出してゐる。その歌詞は「日本書紀」の歌と殆ど全く同一である。酒坐歌は酒樂歌の誤寫であらう。それは平安朝時代正月十六日踏歌節會の際に奏せられた大歌と思はれる。又國栖歌の如きも、酒樂歌の一種かと思はれる（國栖歌參照）。神樂歌の酒殿歌も亦酒樂歌の一であらう。大殿祭（おほとのほかひ）の祝詞にも「壽鳥之詞（さかほがひのことば）」と云ふ句が見える。同種の歌を云ふのであらう。〔藤田〕

逆矛（さかほこ）「神事物の謠曲」を見よ。

嵯峨本（さがぼん）「刊本」を見よ。

嵯峨本考（さがぼんかう）　書誌　【著者】和田維四郎　【刊行】大正五年五月　【解說】本書は原物に就いて詳細な研究を遂げた相模・嵯峨本と一括總稱するが、その中にも光悅（別項）の刊行した光悅本と角倉素庵（別項）が出版した嵯峨本との區別ある事を論じたもの。その內容は、（一）諸書に散見せる嵯峨本の記事を批判し、（二）嵯峨本の定義を立て、（三）著者が蒐集又は借覽した嵯峨本に就いての調査を述べ、（四）嵯峨本の特徵を明かにし、（五）光悅本と嵯峨本の區別を論じ、（六）出版の先後、版式等について、（七）光悅本と嵯峨本の優劣、（八）類似本について記してをり、且つ卷末に寫眞玻璃版四十葉を附して光悅・素庵の筆蹟、版式を明かにしてゐる。從來嵯峨本なる名稱はありながら、明確な概念を與へられてゐなかつたが、この書によつて、初めて科學的な研究がなされた。

【備考】本書は用紙に、光悅本及び嵯峨本に使用してゐる雲母摺、又は色變り用紙を摸造したものを用ひ、また光悅の意匠に成つた雲母模樣を摸寫して、薄墨で用紙中に摺り込んでゐる。〔植松・岩淵〕

相模（さがみ）　歌人　（中古三十六歌仙の一）【名義】相模守大江公資の妻であつたため。【本名】乙侍從（袋草紙三）【時代】長元八年（一六九五）の賀陽院水閣歌合及び治曆四年（一一二八）の呂保殿歌合にもその名が見えるから、後一條天皇の頃までは生存してゐたことがわかる。【閲歷】父の名は未詳、母は前能登守慶滋保章の女。「扶桑拾葉集系圖」に、修子內親王の侍女とあり、「歌仙傳」には入道一品宮祐子內親王家女房とある。「後拾遺集」卷十に入道一品の宮薨去の時、小侍從命婦から相模に送つた歌、これに對する相模の返歌があり、同じく卷十九に、入道一品宮の許に敎貞親王が入御あつて、酒など飲み遊ばされたといふ詞書の歌の詞書がある。若し「後拾遺集」にいふ入道一品宮が相模の御仕へした方であるとすれば、「後拾遺集」奏覽前の永承四年薨去の修子內親王が正しくて、「後拾遺」奏覽より凡そ二十年後の長治二年薨去の祐子內親王は誤りである。大江公資が相模守となつた時、共に任國に下り、後に離別した（後拾遺集卷十六題詞による）。家集によれば相模在國中箱根に詣でて百首の歌を奉納してゐる。「袋草紙」三に依れば公資が大外記を所望した時、會議の諸卿は異議なく許さうとしたが、小野宮右大臣は反對して、彼は相模を擁して秀歌を案じてゐる熱の單純な發露をそのまゝに投げ出してゐるのが彼女の歌である。

【參考】袋草紙三〇中古歌仙傳〇百人一首一夕話（西下）

相模川（さがみがは）　御伽草子　二卷　【作者】未詳　【部屬】山崎美成の「歌曲考」には、番外舞曲の一として擧げてあるが、幸若家元にはその傳は無い。【成立】室町末、或は德川初世（寛永六年以前）。【諸本】古板本は山本長兵衞板。近古小說新纂（續輯）所收。寫本では寛永六年の奧書あるもの、同十六年の奧書あるもの、或は奈良繪本等。【題材】相模川の橋供を隱し、雲中には北山から赤旗の四五百騎、西山から白旗の四五十騎が鬨を擧げた。同時に賴朝落馬して人心地無く、重忠の聲に漸く蘇生して怪事の仔細を問ふと、景時は答へ得ず滿座の嗤笑を買ひ、重忠が三個の提子を淸盛・池殿・二位尼の靈魂、天童を安德帝、若武者を敦盛、大蛇を能登守敎經であると說き、赤旗は平家、白旗は御舍弟判官殿と語つた。弟の怨の所因を解し得ぬ賴朝は、重忠に命じて義經の靈を呼び戻すと、靈は讒者の景時を鎌倉中の爲めには第六天の魔王だと訴へて雲に紛れる。續いて伊勢・熊井・龜井・片岡・鈴木或は作者自ら書き集めたものであらう。【諸本】群書類從二七六所載本・圖書寮所藏本・內閣文庫所藏本等があるが、すべて同系統である。序のみは「扶桑拾葉集」六に所收。【解說】部類はなく集團になつた歌や贈答歌が雜然として載せられてゐる。集團としては相模に下つた時、箱根權現に奉納した百首、權現の返歌として山の僧の詠んだ百首、偶々館が穢のために燒けたといふので、更に奉納した百首がある。この百首は何れも題を十二月に採つた上に、幸、命を申す、子を願ふ、憂をのぶ、思、心の中をあらはす、夢、雜の八題を加へて二十題とし、一題五首を詠んだものである。その

の歌の詞書がある。若し「後拾遺集」にいふ入道一品宮が相模の御仕へした方であるとすれば、「後拾遺集」奏覽前の永承四年薨去の修子内親王が正しくて、「後拾遺」奏覽より凡そ二十年後の長治二年薨去の祐子内親王は誤りである。大江公資が相模守となつた時、共に任國に下り、後に離別したが（後拾遺集卷十六題詞による）。家集によれば相模在國中箱根に詣でて百首の歌を奉納してゐる。「袋草紙」三に依れば公資が大外記を所望した時、會議の諸卿は異議なく許さうとしたが、小野宮右大臣は反對して、彼は相模を擁して秀歌を案じてゐるから定めし公務を怠るであらうといつたとある。公資の妻である間に、公任の子定頼と通じ、定頼の家に引きとられたが、再び離別した事は「後拾遺集」卷十一に、「公資朝臣に相具して侍りけるに中納言定頼忍びて音づれけるを」とあり、同十三に「中納言定頼今は更にこじといひて歸りて音もし侍らざりければ」とあり、なほ時代は不明であるが、大貳資通とも關係のあつたことは「金葉集」卷九に、「大貳資通忍びてもの申しけるを」とあるのでもわかる。以上によると、彼女は伊勢や和泉式部の如く相當自由な戀愛生活をなしてゐたやうである。【作品】家集に「相模集」（別項）があり、勅撰集に入る歌は後拾遺集四十、金葉四、詞花四、千載五、新古今十、新勅撰十八、以下凡そ二十七首、合計概ね百八首、なほ私撰集に入るものは玄々集一首、後葉集三首、續詞花集五首である。【批評】彼女は、充實した張り切れるやうな生活意識をもちながら、それを統一しようとはせず、現實生活のまゝに轉々として、奔放に刹那に生きたやうにも見える。歌詠みであることを自覺せずに、情熱の單純な發露をそのまゝに投げ出してゐるのが彼女の歌である。

【參考】袋草紙三〇中古歌仙傳〇百人一首一夕話

相模川（さがみがは）　御伽草子　二卷【作者】未詳【部類】山崎美成の「歌曲考」には、番外舞曲の一として擧げてあるが、幸若家元にはその傳は無い。【成立】室町末、或は德川初世（寛永六年以前）。【諸本】古板本は山本長兵衛板。近古小說新纂（續輯）所收。寫本では寛永六年の奥書あるもの、同十六年の奥書あるもの、或は奈良繪本等。【題材】相模川の橋供養に頼朝が落馬してから病を得て薨じた事實と、景時滅亡の史實とを結付けて作つたもの。「保曆間記」所載の傳說が主な素材となつたかと思はれる。謠曲「相模川」（一名、橋供養）と同材であるが、本書の方が複雜である。判官贔屓と重忠の賢人振りが强調せられてゐる。【梗概】頼朝の天下平定後、鎌倉に住んでゐたしやうはんといふ聖僧は相模川の橋の崩壞を慨き、關東八ケ國に勸進して修理の志を遂げ、盛んな供養を營んだ。導師は若宮の別當、今宮の僧正、將軍も請ぜられて大小名を率ゐて參列したが、嘉例によつて定まつた先陣秩父の重忠を妬んだ梶原景時は、伏木隱の昔、石橋山の舊功を誇り、子息源太の勸めに任せて謀叛を企てた。この由頼朝に聞え、重忠が强ひて君に說いて先陣を讓つたため改めて景時がこれを勸めたが、供養半ばに八幡の屋根から三つの怪光飛來して川に入ると見れば、河水は忽ち五色に變じて逆流し、流れて來た三個の弦の無い提子は龍と化し、猛火と燃えて消失せ、續いて十二三の天童、十六七の若武者、十丈ばかりの大蛇等が替る〳〵顯はれては姿を隱し、雲中には北山から赤旗の四五百騎、西山から白旗の四五十騎が鬨を擧げた。同時に頼朝落馬して人心地無く、重忠の聲に漸く蘇生して怪事の仔細を問ふと、景時は答へ得ず滿座の嗤笑を買ひ、重忠が三個の提子を淸盛・池殿・二位尼の靈魂、天童を安德帝、若武者を敦盛、大蛇を能登守敎經であると說き、赤旗は平家、白旗は御舍弟判官殿と語つた。弟の怨の所因を解し得ぬ頼朝は、重忠に命じて義經の靈を呼び戻すと、靈は讒者の景時を鎌倉中の爲めには第六天の魔王だと訴へて雲に紛れる。續いて伊勢・熊井・龜井・片岡・鈴木の面々、又奥州の泉の三郎等も形を現はして怨を述べ、最後に辨慶は梶原の滅亡を三日以内と豫言した。頼朝は卽座に景時父子三人の誅戮を命じた。驚いた景時は夜に紛れて落ち行く途次、宇都宮彌三郎朝綱（あつつな）の垰（たうげ）の前を乘打して射殺され、源太兄弟は虜となり、由井ケ濱で斬られた。朝綱は、勸賞に伊豫國北郡を賜はり、所知入した。

【參考】番外舞曲相模川　島津久基（國語と國文學　昭和三ノ五）【島津】

相模集（さがみしふ）　歌集　一卷【作者】相模【成立】集中に、或る人が「物思ふ女の集」と題して彼女の歌を集めたものを彼女に示し、この歌どもには覺えがあるだらう、殘りを書き添へて必ず返せといつたとあるから、本集以前に於て「思女集」とも稱すべき集があつたことがわかる。同じく集中に、物語や歌などをはかないものとしてむづかる人が、彼女の物語や歌を盡く搜し出して燒いたとあるが、この場合の歌は、相當にまとまつたものであらう。かくて本集はそれ等の集の後に成立したことになるが、詞書の記述態度から推すと、或は作者自ら書き集めたものであらう。【諸本】群書類從二七六所載本・圖書寮所藏本・內閣文庫所藏本等があるが、すべて同系統である。序のみは「扶桑拾葉集」六に所收。【解說】部類はなく集團になつた歌や贈答歌が雜然として載せられてゐる。集團としては相模に下つた時、箱根權現に奉納した百首、權現の返歌として山の僧の詠んだ百首、偶々館が穢のために燒けたといふので、更に奉納した百首がある。この百首は何れも題を十二月に採つた上に、幸、命を申す、子を願ふ、憂をのぶ、思、心の中をあらはす、夢、雜の八題を加へて二十題とし、一題五首を詠んだものである。その他「いはけなかりしうひ事にかきつけ」た六十六首、天王寺の歌九首、初瀨に詣でた時の六首、天地の歌十六首（四首缺）、「いかにせん……かくれなき身を」の形で詠んだ九首等がある。天地の歌は十六首の頭尾の文字三十二を順に拾つて綴ると、「天地星空山河峯……」の如くなるものにて、「源順集」（別項）にある頭尾の文字を各々横に拾つて綴ると同樣に、「天地星空山河峯……」となるものとはやゝ趣を異にし、且つ文句は峯以下相違する。贈答歌は相當に變化があるが、事件の時・所・人等を明瞭に記してゐないので、作者の生活を知ることができない。歌の數は類從本六〇一首、內連歌五首、長歌一首にて明かに脫落がある。圖書寮本は七首多くて類從本の闕を補ふ所がある。內閣文庫本は類從本と全く等しいが、北相公本に依つて補つた二首を卷末に附してゐる。本集に於ける使用語彙は豐富で、物語に用ひられるやうな表現、複雜な感情を明瞭に言ひ表はす表現、普通には和歌語とされないもの等がある。併し反面には語義が容易に

理解されないものが隨分多い。ありのみ(梨)、紅の雨、子を願ふ、幸、富、寶の山、すべらぎの神、日の本や此のみかど、の如きは目新しい感じがあり、平安朝末期に於ける現實的、意志的な新精神が微かに表現されてゐるやうに考へられる。〔西下〕

嵯峨物語（さがものがたり）　物語　一卷　【作者】未詳【成立】室町中期か。「古物語類字抄」には、文明頃かといひ、又序に「秋の夜の長物語」「松帆の浦物語」を引いた事を記してゐるが、現存本には見えない。【諸本】續群書類從卷五〇九所收。內閣文庫に寫本一卷がある。【梗概】紀中將康則は中納言康直の子で、幼名を松壽君といつた。幼にして才學衆に秀で、又眉目の美しさも並ぶ人がなかつた。父母はただその子の成長をのみ希つて明かし暮してゐたが、十三歳の時、本原の侍從と云ふ人の勸めによつて、佛道にふかく、老莊の學に達し、詩文にも通じてゐるといふ或る寺の僧都に就いて學ぶ事になつた。この寺は深い山の中に在つて、麓に淸い河があり詩趣に富んでゐるので、松壽君は常に心を澄して詩を賦し歌を詠じてゐた。神童の聞え高く、音信を求め交際を願ふ人々も多かつたが、その中に一條郎と云つて、大志を抱きながら世に容れられず、嵯峨のほとりに閑居し、花鳥風月を友としてゐる人があつた。暮春の頃そぞろ歩きにいつかこの山深く入つて夕暮となつた。時にふと美しい稚兒が花を折らうとしてゐるのを慕つて行き、松壽君である事を知る。その夜はこの寺に宿り、僧都・松壽君などと詩歌を作つて遊ぶ。歸つてから、この遊びに同座したが雲湖院の住師を介して松壽君に意を通じたが[illegible]あつたので、喜んで律師の坊に行くと、松壽君は父中納言の病篤く、京に歸つた後であつた。中納言亡せたので、松壽君元服して殿上し、中將康則となる。帝、寵愛し給ひ一條室町に殿を賜ふ。一條郎は思に堪へず、京に出て本原の侍從に會ひ、その手から屢々消息を通じたがその甲斐もない。或る時中將、亡父の佛事に、舊の住居に歸つて見て、懷舊の情に堪へず、荒れ果てた邸を眺めてゐると、本原の侍從が又かの消息を差出した。中將かくてはあまり情知らぬ事と思ひ、その內に訪づれる事を約する。一條かくと聞き、いつか〳〵と待つ程に、八月二十三日の夕暮にふと訪ね來り、それから二人は親しく交つたといふ。〔小木〕

嵯峨樣（さがやう）「光悅流」を見よ。

逆艪（さかろ）「ひらかな盛衰記」を見よ。

佐川藤太（さがはとうた）　淨瑠璃作者・脚本作者【本名】未詳【別名】佐川藤造・佐藤太等とも記す。【生歿】未詳【閲歷】安永以後、大阪の歌舞伎作者として、作名を列ねてゐたが、この方面では立作者の地位を得ずに終り、轉じて淨瑠璃作者となり、文化年中を北の新地芝居、御靈境內の芝居、稻荷芝居等に據つて、操り芝居の末期に奮鬪した。【著作】彼の署名の淨瑠璃作は、文化二年以後十七八篇に及ぶ。その中、數篇は彼の獨作である。合作者としては梅枝軒や吉田新吾がゐる。作は大體舊名作の醜案が多く、極端な駄作もあるが、舞臺技巧のすぐれた點に於て、原作を活かした當り作も相當にある。彼の手腕は一に懸つてこゝにある。名作と思はれるものを次に列擧する。○繪本玉藻前曦袂（文化三年三月、「玉藻前曦袂三番續」）○八陣守護城（文化四年九月、「別項」）居。相馬の古御所）○なほ「桑名屋徳藏入舟物語」（文化九年十一月御靈境內芝居）は、同名題の歌舞伎脚本を淨瑠璃化したものであり、「鎭西八郎譽弓勢」（文化五年十月、北の新地芝居）は、馬琴の讀本「椿說弓張月」（別項）を、「本町糸屋娘」（文化十年九月、稻荷境內芝居）は、同「糸櫻春蝶奇緣」（別項）を脚色した作である。【參考】京攝戲作者考　○近世邦樂年表（義太夫節之部）〔守隨〕

鷺（さぎ）「鳥獸物の諸曲」を見よ。

鷺箱極祕抄（さぎはこごくひせう）「悅目抄」を見よ。

先觸（さきぶれ）「過所」を見よ。

福麿（さきまろ）　歌人【氏姓】氏は田邊、姓は史（ふみひと）【生歿】未詳【閲歷】未詳。契沖は「日本書紀」雄略天皇の條にある田邊史伯孫の子孫かと言ひ、また「續日本紀」聖武天皇天平十一年四月の條の「田邊史難波」を福麿の父かと言つてゐるが、もとより單なる推察に過ぎない。福麿に關する唯一の記錄は、「萬葉集」卷十八の卷頭に、「天平二十年春三月二十三日、左大臣橘家之使者、造酒司令史田邊福麿饗于守大伴宿禰家持館」といふ一文である。これはその頃越中守として任國にゐた家持が、來訪した福麿を饗應したことを指したもので、これによつて福麿が當時酒造司（さけのつかさ）の「令史」の官にあつたことが分る。酒造司は、酒、醴（甘酒の類）、酢を造つてこれを宮中の御食事に配供する役で、賤役であるから、彼の官吏としての地位も自ら察せられる。「橘家之使者」とあるのは、何か橘諸兄の家人と關係があつたのであらう。微官の彼が、歡迎宴を開かれたり、布勢の水海に案內されたり、家持から優遇されてゐるのは、橘家の使者ではあり、又歌人としての交り[illegible]卷九挽歌部に足柄を越えた時の長歌が出てゐるから、この歌を彼の作と信ずれば、東國へも旅したものと思はれる。【作品】全部「萬葉集」に出てゐる。「田邊福麻呂之歌集」（別項）の名が「萬葉集」に傳へられてゐる。それ以外の作品は「萬葉集」卷十八の卷頭にある家持の招宴に於ける詠作十首、布勢の水海の作二首、久米廣繩の館に於ける別離の宴にての作一首、以上計短歌十三首、何れも旅中にての作のみで、これ以外には彼の作は今日傳はつてゐない。【作風】明るい輕快な作のみである。一面から言へば、重厚や眞實を生命とする「萬葉集」の本質とは隔たつた作風で、萬葉末期の傾向の代表的作家と言へる。卷十八の彼の作品及び「福麻呂歌集」の兩方を通じて、この作風を見得るのである。但し技巧に達してゐた事は、卷十八の達者な詠みぶりを見ても、「福麻呂歌集」に、相當に意味の曲折した長歌を、詠み了せてゐる事によつても察せられるが、その技巧の底に流れて讀む者に迫つて來る情熱と眞率とに缺けてゐる。〔森本〕

鷺娘（さぎむすめ）　所作事　變化物　【本名題】柳鷺諸鳥囀（やなぎさぎもろとりのさへづり）【初演】寶曆十二年四月十八日初日、江戸市村座「殘雪林曾我」第二番目大詰〔作詞〕壕越二三治〔曲節〕長唄〔立唄〕富士田吉次〔作曲〕杵屋忠次郎〔振附〕二代西川扇藏【題材】鷺の化けるといふ傳說から想を構へたらしい。【傳來】曲は傳存、振は一時廢滅に近づいたが、明治十九年五月、東京新富座「夢物語蘆生容畫」第二番目大切「古きを補ひ時代蒔繪の月雪花三組杯」で、九代市川團十郎が復活した際、先代花柳壽輔が補綴して附けた。又、現今「鳥娘」といふのを挿入する場合[illegible]

着付に綿帽子を冠り、傘をさして美しい娘に化した白鷺の精（二代瀨川菊之丞）が現はれて、身をはかなむ振から一轉して、地獄に墜ちて修羅の責苦に遭ふ振に終る。瀨川菊之丞・市村龜藏所演、「後面」「傾城」「布袋」などと組合せた變化物の一であつて、その舞臺轉換法として廻り舞臺を用ひたのが江戸での嚆矢と傳へられ、そのため、一層この曲を名高くしてゐる。明治二十五年三月、東京歌舞伎座で、九代市川團十郎再演の折には、前曲として「鴉舞」（からすまひ）が附加された。地は常磐津節、作詞は福地櫻作事中の「十一月、雪の鷺娘」である。【御贔屓の影うつし櫻かな花暦色所八景】〔通稱〕新鷺娘〔初演〕天保十年三月十一日初日、江戸中村座「岩井歌曾我對面」第二番目大切、作詞三代櫻田治助、曲節長唄、立唄二代富士田新藏、作曲十代杵屋六左衞門、振附三藤間勘十郎。〔傳來〕曲は傳存。振は廢滅。〔內容〕前半は前曲に同じく、後半は行列奴で終る。四代中村歌右衞門所演。中村歌右衞門、三代岩井粂三郎（後の八代半四郎）、八景所作事中の「坤に當て花に埋、荻窪に鷺娘の暮雪」である。

を防人司、役人を防人部領使と云ふ。防人となるのは平安中期以前、防人が眞に必要であり、それが途絕えず行はれてゐたと思はれる時代に於ては、殆ど東國地方の人民に限られてゐた。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し九州を守るに堪へたからである。一時東國人をやめて九州人を充てたことがあつたが、稱德天皇の時、太宰府から進言して（續日本紀）、後再び東國人となつた。任期は三年、人員は約千人、每年二月がその交代の期であつた。この東國から九州への旅の途中や、任地で病歿する者などが必ずあるので、防人と家人と

なほ卷十四の「東歌」（別項）には、德川期の註釋家によつて、防人の作であらうと說かれてゐる作もあるが、どれだけ信じ得るものか不明であるので、今すべて除いておく。【由來・內容】卷十四の五首を集めてあるものは、口から口へ作り主の知れぬ防人歌を歌ひ傳へてゐたのを、同卷の歌の原採集者が書きとめたものであらう。卷二十の歌群は、最後の八首及び離れてゐる一首、計九首だけは「昔年防人歌」と記してあつて、天平八年より以前の或人の防人歌を、人が卷二十の編者大伴家持へ知らせたものであらう。殘りの總ては天

着付に綿帽子を冠り、傘をさして美しい娘に化した白鷺の精（二代瀬川菊之丞）が現はれて、身をはかなむ振から一轉して、地獄に墜ちて修羅の責苦に遭ふ振に終る。瀬川菊之丞・市村鶴藏所演、「後面」「傾城」「布袋」などと組合せた變化物の一であつて、その舞臺轉換法として廻り舞臺を用ひたのが江戸での嚆矢と傳へられ、そのため、一層この曲を名高くしてゐる。明治二十五年三月、東京歌舞伎座で、九代市川團十郎再演の折には、前曲として「鵜舞」が附加された。地は常磐津節、作詞は福地櫻痴、作曲は六代岸澤式佐、振付は先代藤間勘

花甑暦色所八景（初演）

作事中の「十一月、雪の鷺娘」である。

【御贔屓の影うつくしき櫻かな花甑暦色所八景】〔通稱〕新鷺娘〔初演〕天保十年三月十一日初日、江戸中村座「若井歌會我對面」第二番目大切、作詞三代櫻田治助、曲節長唄、立唄二代富士田新藏、作曲十代杵屋六左衛門、振附藤間勘十郎。〔傳來〕曲は傳存。振は廢滅。〔內容〕前半は前曲に同じく、後半は行列奴で終る。四代中村歌右衛門所演。中村歌右衛門、三代岩井粂三郎（後の八代半四郎）、八景所作事中の「坤に當て花に埋、荻窪に鷺娘の暮雪」である。

【參考】江戸近世舞踊史九重左近〇長唄常磐津正本〇日本歌謠集成〇歌謠音曲集（日本名著全集）〇近世邦樂年表（長唄之部）〔秋葉〕

防人歌

【解説】「防人」は、「唐六典」の「邊要置防人二爲鎭守」から出てゐる。邦語の「さきもり」は「崎守」で、さきは退きと同語、離れた土地、邊土の意、そこを守る兵士をいふのである。

その起原は詳かでない。「書紀」孝德天皇の大化二年の條に、「初修京師、置畿內國司、郡司、關塞、斥候、防人」とある。但しこれ以前にも邊土防衞の兵士を置いてゐたらうと思はれるが、記錄が殘つてゐない。下つて「書紀」（天智朝・持統朝）、「續日本紀」（孝謙朝・稱德朝）等に防人の事見え、以後、鎌倉時代後宇多朝の弘安十年に至るまで六百餘年間、所々に防人の記事が見えるが、持續したのでなく途中杜切れつゝ續いたものであらう。その最後ははつきりしない。防人に關する法令は、大寶令の軍防令に見える。役所を防人司、役人を防人部領使と云ふ。防人となるのは平安中期以前、防人が眞に必要であり、それが途絕えず行はれてゐたと思はれる時代に於ては、殆ど東國地方の人民に限られてゐた。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し九州を守るに堪へたからである。一時東國人をやめて九州人を充てたことがあつたが、稱德天皇の時、太宰府から進言して（續日本紀）、後再び東國人となつた。任期は三年、人員は約千人、每年二月がその交代の期であつた。この東國から九州への旅の途中や、任地で病歿する者などが必ずあるので、防人と家人との生別は、同時に死別の場合もあつたのである。これ等の人々の歌或はこれ等の人々に關する歌が防人歌である。今日見得るところのものは「萬葉集」に出てゐるものだけである。即ち同書中の防人歌は卷十四の國名不明の歌中の「對馬の嶺は下雲あらなふ上の嶺にたなびく雲を見つつ偲ばも」といふ東國から對馬へ行く時の歌、同卷の終りに近く、「防人歌」と標記してある五首の短歌。第二十卷の中ほどに、「天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌」と題詞のある個所に收められてゐる長歌一首・短歌九十一首、及びこれ等の歌から三首へだてた次にある一首、總計九十九首である。他に第七卷雜歌部に、短歌一首「今年ゆく新防人が麻衣肩のまよひは誰かとり見む」（これは「古歌集」から轉載したもの）。十三卷挽歌部の終りから第三首目の短歌（これはすぐ前の「この月は君來ますむと云云」の長歌の反歌で二首一體として考ふべきであらう）の左に「右二首。但、或云、此短歌者、防人妻所作也。然則應知長歌亦此同作焉。」と註があるが、これは疑問があるので暫く除いて置きたい。なほ卷十四の「東歌」（別項）には、德川期の註釋家によつて、防人の作であらうと說かれてゐる作もあるが、どれだけ信じ得るものか不明であるので、今すべて除いておく。

【由來・內容】卷十四の五首を集めてあるものは、口から口へ作り主の知れぬ防人歌を歌ひ傳へてゐたのを、同卷の歌の原採集者が書きとめたものであらう。卷二十の歌群は、最後の八首及び離れてゐる一首、計九首だけは「昔年防人歌」と記してあつて、天平八年より以前の或人の防人歌を、人が卷二十の編者大伴家持へ知らせたものであらう。殘りの總ては天平勝寶七歲二月防人交替の折に、丁度兵部省の官吏となつてゐて、防人の事務を扱ひに難波に派遣されてゐた大伴家持が、その年の防人の歌を集錄したものである。この九十餘首は、無秩序に雜然と並べられてゐるのではない。各國の防人部領使が奉つたものを一まとめにしたので、各歌の左に、「右一首何郡何某」と郡名と姓名とが記してある。まれに一人で二首のものがあるが、殆ど全部一人一首である。やゝ强制的に歌作させて、國每に役人をして奉らせたものらしい。各國の歌の最後に「二月六日、防人部領使、遠江國ノ史生、坂本朝臣人上、進。歌數十八首、但有拙劣ノ歌十一首、不レ取載之」の如き形式の文がある。これは遠江國の分であつて、それには天平二年遠江の國全部の防人から集め得た歌が十八首あつた。そのうち、拙いのが十一首あつたのはこゝに載せないと云ふ意で、こゝに注意すべきは、明かに選擇（家持の選擇であらう）が行はれて、半分以上の歌が佚してゐることである。他の國々のを順次に見てゆくと、相模國が八首中五首、駿河國が二十首中

十首、上總國が十九首中六首、常陸國が十七首中七首、下野國が十八首中十一首、下總國が二十二首中十一首、信濃國が十二首中九首、上野國が十二首中八首、武藏國が二十首中十二首除かれた。これを總計すると、百四十八首奉つて七十九首除かれたのである。即ち今日見得る天平八年度の防人歌と殆ど同數の作が、選擇のために永久に亡佚したのである。「拙劣ノ歌除く」とあるが、拙劣とは優麗な作を好み作つた家持の目から見た拙劣であつて、他の見方からすれば採るべきものもあつたかも知れない。次にその國々の順序は、東海道の國々を先に、東山道の國々を後にし、二道のうちでは都から近い國を先に、遠い國をあとに排列してゐるやうである。大體卷十四の「東歌」の順序と一致することは注意すべきである。歌は一首の長歌を除いては皆短歌で、方言をまじへた作が多い。内容は全部抒情歌で、父子夫婦の沈痛な哀別を歌つた作が多くて人の涙をそそる。これが防人歌の特色を示すものである。【價値】防人歌の特色は、又その價値である。

防人に立ちし朝けの門な戸出に手離れ惜しみ泣きし子らはも（卷十四）

父母が頭かき撫で幸くあれと言ひし言葉ぞ忘れかねつる（駿河國防人）

松の木の並みたる見れば家人の我を見送ると立たりし如（下野國防人）

防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しさもの思ひもせず（防人妻）

の如き、眞情流露、一讀人の胸を搖するものがある。天平八年と云へば、奈良朝の最盛時で歌壇の大勢はやうやく優美纖麗な作に傾きかけてゐた頃である。その大勢の中に、この眞情の作百首のある事は、注目すべきである。なほ防人歌に現れてゐる東國方言は、古代諸研究の資料として「東歌」と共に大なる價値を有してゐる。〔森本〕

鷺流　「能狂言」を見よ。

咲分五人嬶　浮世草子　五卷

【作者】其磧【刊行】享保二十年、菱屋治兵衞板【諸本】其磧自笑傑作集（帝國文庫）所收。【解說】三莊太夫傳說は、古淨瑠璃に取材されて、山本土佐掾正本の「都志王丸」、岡本文彌正本の「三莊太夫」の如きものがあるが、下つて紀海音の「山椒太夫繰慕湊」（寶永五年十月、豐竹座上場）、竹田出雲の「三莊太夫五人孃」（別項）がある。而して本書の序中に、「山莊太夫が安壽對王の兄弟に邪見にあたりし物語を近き頃浪速にて當風に改め節をこめて竹本が淨瑠璃に語りし趣向を元として云々」とあつて、出雲の淨瑠璃を飜案したものであることは明かである。その筋を見るに陸奥の城主の子安壽姫と對王丸は家の騷動を逃れて、越後まで落ちて來たが、人買商人に騙され、丹後に賣られる。その主山莊太夫と娘達は、安壽・對王を虐使する。忠臣山岡三郎とその妻は兩人を救ひ出し、京の梅津少將を賴つて御家を再興するを得、山莊太夫とその娘達は重科にあふといふのである。【影響】本書以前に山莊太夫傳說の草子化されてゐるものには假名草子の「山椒太夫」（寛文七年）があるが、本書以後にも度々草子化されてゐる。即ち山東京傳の黃表紙「三枡太夫七人娘」（寛政六年）、山東京山の合卷「山莊太夫咲分娘」（文化九年）の如きが主なるものであつて、本書の直接間接の影響を認め得る。〔吉田〕

左金吾　「恭俊」を見よ。

作歌　「箏歌」を見よ。

策彥周良　「周良」を見よ。

作詩志彀　詩論書　一卷【著者】山本北山【解說】荻生徂徠・服部南郭等が、李于鱗の「唐詩選」を金科玉條として盛んに唐詩を鼓吹したのに對し、山本北山は「作文志彀」及び本書を著して、大に徂徠一派の摸擬剽竊を排擊し、その詩文の誤謬を抉摘した。本書の附錄は、專ら徂徠・南郭二子の詩文を糾彈してある。當時の風尙これがために一變するに至つた。〔佐久〕

作者根元江戸錦　黃表紙　二册　十丁十二圖【作者】櫻川慈悲成【畫工】歌川豐國【刊行】寛政十一年【題材】狩野元信、左甚五郎。だいだらぼつちの傳說【諸本】黃表紙傑作集（三星社）・黃表紙集（近代日本文學大系第十二卷）等、いづれも本文のみ所載。日本名著全集第十四卷滑稽本附錄「書物愛」中には準複製として收めてある。【梗概】足利時代に大堂建立の事があり、その彫物は下繪を古法眼元信に、彫刻を左甚五郎に仰付けられた。名人達の作であるから、魂が入り、出來上つた龍がぬけ出す。龍・雲・岩など、そこらを歩き、女を見ると變な顏をするので、人々は恐れる。元信・甚五郎の度々の意見も聞かず、逃げ去つたので、足どめの祈りをする。捕へ歸つて彩色をすると、なほ歩きたがる。足を鎖で留めたがとまらず、龍は雲や岩を伴つて逃走する。思ひのまゝに飛び歩いた龍は、疲勞して富士の嶺から見て、龍の形を色絲で唐人に織らせて、煙草入・鼻紙入にした事から蝦夷錦がはじまる。【構想】前作「御贔屓他之三升」（後出）の趣向を變化したものである。なほ同類の趣向に、「俵藤太振出百藥」（後出）がある。併せて見るべきである。【批評】妙技を誇張して蝦夷錦に落した趣向は面白い。繪も巧である。擬人化した雲・龍・岩の滑稽な姿態、これを捕へる元信・甚五郎の樣、占を賴む圖、龍など上出來である。本書の龍が飯をたく圖によつて、「貧福蜻蛉返」（別項）の天の邪鬼食事の圖は出來てゐるらしい。

【備考】〔御贔屓他之三升〕（寛政元年版櫻川慈悲成作）。左甚五郎は、飲み友達の馬平の背中へ馬の文身をし、又彌吉に路考、豐次郎に團十郎の似顏を彫つたところ、魂が入つたので繪そつくりの顏となる。田舍芝居で矢の根五郎を演じた折、馬平の背の馬が飛び出して見物を踏み倒し、田畑を荒した後、馬平の背中にはひる。三人は甚五郎に賴み、背中の文身をそのまゝ寫し取り、馬には手綱を附けて、所の鎭守へ奉納する。〔俵藤太振出百藥〕（寛政二年版芝全交作）。宿禰王は元信の下繪で、甚五郎に猪熊入道の首と女の首の文身を彫らせる。二つの首が拔け出して色事となり、流浪した末、猪熊は俵藤太に退治された蜈蚣の胴、女は轆轤首の女の胴を買つて入る。宿禰王は提燈に二つの首を畫いて搜してゐる。〔小池〕

作者胎内十月圖　黃表紙　三册　十五丁十七圖【作者】山東京傳【挿畫】北尾重政畫風【名稱】戲作の過程を受胎から分娩に譬ふ。【刊行】文化元年。【梗概】京傳は草雙紙の作を賴まれたが、趣向に盡きて、淺草の因果地藏に草雙紙の種を孕むやうにと願をかける。地藏尊から黃色で臭い香のする玉を貰つて飲み、懷妊する。一月目は腹中に墨・硯・筆等の形が出來、春狂言の親玉、守本尊工藤明王。二月目は德利の形が腹中に出來る、守本尊は作無理如來。三月目は瓢箪鯰の形、守本尊は持病菩薩。四月目は目藥の看板の形、守本尊は工面菩薩。五月目は闇夜に鐵砲を發射する形、守本尊は文字菩薩。六月目は水に月の映つた形、守本尊は見德菩薩。七月目は船の形、守本尊は杓子如來。

作

し、戲作に必要な諸項目を胎兒の發育に伴はせ、且つ又守本尊の諸菩薩に附會してある。【史的地位】本書の先蹤は、作者が跋と挿畫を書いてゐる「是氣虛作種」（天明七年版石山人作、後出）に見出す。「屈伸一九作」（享和二年版、十返舍一九作）、「的中地本問屋」（享和二年版、十返舍一九作）なども類似の趣向を持つ先行の作品であるが、本書はこれ等を集成した位置にある。構想が奇警で、作の諸要項を實虛散の上に纏めて地口十二匁、氣根十匁、趣向・案思各四匁、敎訓畫心各三匁、工夫・橫好各一匁とし、智慧・小文才・故事附等を輕視したなど、作者當りを取る話。

作者店おろし　演劇書　一卷【著者】三升屋二三治【名稱】狂言作者の店卸しの意【成立】天保十四年（序）【諸本】寫本で傳はつてゐたが、新群書類從卷三に收められた。【解說】初代櫻田治助以下三十四人の狂言作者の小傳逸話を記したもの。俳優關係のものに比して、甚だ尠いこの方面の文獻としては屈指のものである。〔增田〕

作者年中行事　演劇書　五卷【著者】三升屋二三治【成立】嘉永元年十一月【諸本】默阿彌所藏の著者手稿本が〔小池〕られた故の名である。【成立】崇德帝の嘉承三年七月頃【諸本】成簀堂本一軸、これは他の書込も一緒にしてゐるから、「作文大體」以外の記事も混入してゐる。順序も卷物なるが故に貼り違ひがあるかも知れない。又同系統のもので順序の異なる本もある。これには嘉承三年の奥書がある。【解說】本書の内容を見るに、卷頭に「擬香山摸草堂記」を掲げ、次に「雜筆見聞」（自抄）、續いて心事部・物事部・雜詞部、訓異兩音字・疊字・兩音字の目を擧げて說いてゐる（心事部以下は貼り違ひか）。次に「諸句體」として、發句・漫句・壯句・緊句・長句・隔句・

目は腹中に鏡・硯・筆等の形が出來、春狂言の親玉、守本尊工藤明王。二月目は德利の形が腹中に出來る、守本尊は作無理如來。三月目は瓢箪鮗の形、守本尊は持病菩薩。四月目は目藥の看板の形、守本尊は工面菩薩。五月目は闇夜に鐵砲を發射する形、守本尊は文字菩薩。六月目は水に月の映つた形、守本尊は見德菩薩。七月目は船の形、守本尊は杓子如來。

作者胎内十月圖

八月目は獨相撲の形、守本尊は勸善恩菩薩。九月目は編笠をかぶつて扇子を手にした形。守本尊は精氣菩薩。斯くて十月目には木から落ちた猿の形が出來、闇陀如來が守本尊である。臨月となつても生れ兼ねたが、或る醫師の案前案後實虛散の效能で產氣附き、阪元の番頭・丁稚・彫師・摺師などが駈け附け、腰を抱き足をかゝへ、大騷動の裡に產み落す。上中下三册の雙紙で、產湯をあびる。

【構想】創作の苦惱を、婦人姙娠中の苦勞に比し、戲作に必要な諸項目を胎兒の發育に伴はせ、且つ又守本尊の諸菩薩に附會してある。

【史的地位】本書の先蹤は、作者が跋と挿畫を書いてゐる「是氣儘作種」（天明七年版石山人作、後出）に見出す。「屈伸一九作」（享和二年版、十返舍一九作）、「的中地本問屋」（享和二年版、十返舍一九作）なども類似の趣向を持つ先行の作品であるが、本書はこれ等を集成した位置にある。構想が奇警で、作の諸要項を實虛散の上に纏めて地口十二匁、氣根十匁、趣向・案思各四匁、教訓畫心各三匁、工夫・横好各一匁とし、智慧・小文才・故事附等を輕視したなど、作者の創作意識を示して面白い。挿繪も女房玉の井の優しさと、京傳鼻の作者の滑稽さとの對照が妙である。京傳食事の圖、產褥にある圖、出產せんとする圖、產湯の圖などの滑稽さなど格別である。きれ地、油紙煙草入、煙管類、讀書丸の廣告を所々に挿入した拔目なさも、彼等の常套の手段であるが、以て當時の作者意識を見るべきである。

【備考】〔是氣儘作種〕京屋傳次郎が草雙紙の作を賴まれて趣向に苦しみ、榮花屋の枕を借りて寢たが獸目。石山人と連れ立つて趣向を搜しに町に出で、作の種と聞いて行つて見ると、大根の種店であるといふ、結局、作者の樂屋を見せた作。「屈伸一九作」一九が草雙紙問屋の主人に雙紙の稿を催促され、腹をあけて空なことを示し、遊里に行つて腹鼓を打破り、智慧をしぼつても趣向は湧かず、楠の智慧、猿智慧等を借りて書いたが、不出來で困つてゐるといふ夢。〔的中地本問屋〕村田屋の主人が、作者・彫師・摺師・丁合取・截ち方・表紙かけ・綴ぢる者などに、それ〴〵故事附の藥を飲ませて、思ひ通りの黃表紙を作り、大當りを取る話。

作者店おろし　演劇書　一卷【著者】三升屋二三治【名稱】狂言作者の店卸しの意【成立】天保十四年（序）【諸本】寫本で傳はつてゐたが、新群書類從卷三に收められた。【解說】初代櫻田治助以下三十四人の狂言作者の小傳逸話を記したもの。俳優關係のものに比して、甚だ尠いこの方面の文獻としては屈指のものである。〔增田〕

作者年中行事　演劇書　五卷【著者】三升屋二三治【成立】嘉永元年十一月【諸本】默阿彌所藏の著者手稿本があり、珍書刊行會叢書第四卷に飜刻されてゐる。【解說】同著者の「樂屋壽々免」（別項）の姉妹篇とも見られるが、書名の示す通り、狂言作者の仕事を特に詳細に記述してあつて、その方面の研究には甚だ重要な位置を占める。同著者の「作者店おろし」（別項）とも對考すべきであらう。第五卷に「作者役者の辨交」として、古來の俳優及び作者の逸話言行を記してゐるのも珍重すべきであらう。〔增田〕

作文志彀　漢文　一卷【著者】山本北山【刊行】安永八年【解說】荻生徂徠一派の文章の誤謬を抉摘したもの。「作詩志彀」（別項）と同性質の書である。〔佐久〕

作文率　漢文　四卷【著者】山本北山【解說】漢文の作法を詳述し、兼ねて自家の文章上に於ける見識を主張したもの。その宗とするところは韓愈・柳宗元に在つて、譯文復文の法則作例も擧げてある。〔佐久〕

作文大體　漢詩作法書　一卷【編著者】中御門右大臣藤原宗忠【名稱】作文の文は、詩をいひ（之に對して散文を筆と稱した）、作文の大體を童蒙に敎へるために編輯せられた故の名である。【成立】崇德帝の嘉承三年七月頃【諸本】成簀堂本一軸、これは他の書込も一緒にしてゐるから、「作文大體」以外の記事も混入してゐる。順序も卷物なるが故に貼り違ひがあるかも知れない。又同系統のもので順序の異なる本もある。これには嘉承三年の奧書がある。【解說】本書の內容を見るに、卷頭に「擬香山摸草堂記」を揭げ、次に「雜筆見聞」（自抄）、續いて心事部・物事部・雜詞部、訓異兩音字・疊字・兩音字の目を擧げて說いてゐる（心事部以下は貼り違ひか）。次に「諸句體」として、發句・漫句・壯句・緊句・長句・隔句・送句に就いて說明してゐる。（この終りに「嘉承三年初秋七夕云云」の奧書がある）。次は「作文作法」で、題目・破題・比喩・述懷・詩賦・銘・頌・箴・讃・弔・諫（以上文）、詔・策・檄・章・奏・書・啓（以上筆）に就いて述べてゐる。その次に、源順の「新撰詩髓腦」を揭げ、以下「作文大體」「四季雜筆詞」の目を擧げ、それぞれ說明してゐる。而して最初の「擬香山摸草堂記」などは恐らくは後から附加されたものであらう。要するに本書は詩文作法書である。文筆に關する書は古來少くなかつた。「文筆眼心抄」（別項）「文鳳抄」、下つては「文筆問答抄」「玉澤不渴抄」などが知られてゐる。「本朝書籍目錄」には「文筆要抄一卷」とあるが今は傳はらない。「作文大體」と稱するものの中にも、本書とは內容を異にするものがある。群書類從卷一三七文筆部一六に收められてゐるものがそれである。この類從本「作文大體」は、卷首に大江朝綱の倭註切韻の序を揭げ、次に朝綱撰と稱する作詩の道十條を擧げ、詩及び文章の作法に就いて記し、卷末に「此抄記二菅江兩流之家說一、非二其家者一輒勿及二披露一云云」の奧書が

ある。思ふに、かゝる類の書は必要に迫られて編輯せられたものであるから、同名の書がこれ以外にもあつたかも知れない。

【著者小傳】宗忠は道長の玄孫に當る。承保元年十一月從五位下に叙せられ、爾來、侍從・辨官・藏人・參議・納言・造興福寺長官・檢非違使別當等に歷任、大治五年二月中宮大夫に任ぜられ、更に內大臣を經て保延二年十二月右大臣となり、同四年正月從一位に叙せられ、翌二月病に依つて出家した。同七年四月二十日八十歲で薨じた。宮廷に仕へること約六十年に及び、儀式典禮に通曉し、又學を好み詩作を喜んだ。「宗忠公記」卽ち「中右記」(別項)は、朝權衰移武家興隆時代の世態風俗を知る好資料である。〔山岸〕

櫻井丹波掾（さくらるたんばのじよう）　淨瑠璃太夫

【本名】未詳　【歿年】貞享頃か　【閱歷】江戶淨瑠璃の開祖といはれる薩摩淨雲(別項)の門に出で、豪壯な江戶の時流に添ひ己が趣味を加へて、荒々しい特殊な一流を語り出したのが、青少年の意外な歡迎をうけ、他の諸淨瑠璃を壓倒して、和泉太夫節とて流行し、承應・明曆・萬治・寬文の江戶隨一の淨瑠璃となつた。初め和泉太夫と稱したが、寬文二年五月【閱歷】詳かでないが、芝神明前三島町【別名】岸田豐治郎【號】杜芳・岸杜芳・櫻杜芳【近名】言葉錢知【歿年】天明八年(一七八八)

丹波掾正本（日本王代記）

た。延寶並に貞享頃の堺町の圖によると、操芝居を興行してゐる。彼の伜も二代和泉太夫と稱へ、共に壯快な語り口であつたといふ。彼の淨瑠璃を主役の名をとつて、金平淨瑠璃(別項)といふ。彼の正本はかなり數多いらしいが、太夫の署名のものに、「愛宕の本地」「公平誕生記」「公平劍のりつくわ」「京今宮御本地」「日本兩武將始」その他傳存する。それらの作者として、古來有名なのは岡淸兵衞であるが、岡五郎兵衞・四宮彌四郎等の名も發見される。(金平淨瑠璃參照)

【參考】繪入淨瑠璃史水谷不倒○金平本全集解題同上○古淨瑠璃研究同上(日本文學講座)○近松研究の序篇前島春三　〔守隨〕

櫻川（さくらがは）「狂女物の謠曲」を見よ。

櫻川慈悲成（さくらがはじひなり）「慈悲成」を見よ。

櫻川杜芳（さくらがはとはう）　黃表紙作者　【本名】岸田豐治郎【號】杜芳・岸杜芳・櫻杜芳【近名】言葉錢知【歿年】天明八年(一七八八)五月【閱歷】詳かでないが、芝神明前三島町に住んでゐた表具師で、分りの良い通人型の江戶ッ子であつたらしい。芝居好きで素人芝居も巧く、劇の方面には明るかつた。印章が六本骨或は三本骨の扇に三桝を畫いた物である事は、彼の趣味の象徵である。俳句・狂歌をも嗜んだ。學識はさほどでないが才氣でよく使ひこなしてゐる。弟子には櫻川慈悲成(別項)の外に吉田魯芳の名が見え、天明二年に作品を出してゐるが、恐らくは幽靈門人であらう。【作品】市川三升圓(別項)○故事附千本花王(淸長畫)○擲打鼻上野(勝春山國信畫)(以上天明二年刊)○草雙紙年代記(別項)○能時花升(市川三升圓を見よ)○通春歲旦開(政演畫)(以上天明三年刊)○狂言好野暮大名(同畫)(以上天明四年刊)○忝茄子(同畫)○御喰爭(同畫)○色男拾人三文(別項)(以上天明七年刊)○無茶修業押强者(豐國畫)(寬政元年刊)○繫升三升繫(草稿、起稿年不明、出版せず)。【作風】趣向のうまい作が多く、初年の作品と末年の作品との間に、優劣の差が割合に尠い。「擲打鼻上野」の如きは、始めて署名した作品で、あれ程まで澄ましきつた手際や態度は、同じ敵討物の「敵討三味線由來」(別項)(楚滿人作・天明三年刊)のとつた態度が黃表紙の埒外であり、後年京傳の「復讎後祭祀」(天明八年刊)の先行を「擲打鼻上野」がなしてゐる事を思ふにつけ、杜芳が黃表紙作者として優秀な技倆を持つてゐた事が知られる。そして天明二年以前は、無名作家として多少創作したのではないかと思はれる。美的鑑賞に必要な假感を實際感情で置きかへた滑稽、時代錯誤、當字片言の流行、自惚、行過等、それ〴〵趣向の捻を見せてゐるが、その根柢として杜芳の杜芳たる點は、黃表紙も演劇方面へ結合せしめんとする傾向、通人の廣い世界から、遊里や實在人物を暗示する處にある。文章は平明、洒落は大味で粗い。附會や飜案の技倆も相當にある。後年に弟子の慈悲成が落語方面に轉ずる前兆であらうか、杜芳の作には落語風の落しが見られ、「忝茄子」の如き末期の作品はそれである。書技は見るべき點が少く下繪も大して巧ではないが、註文が細かく、政演 政美などの筆でいづれも出來がよい。〔小池〕

櫻川杜芳（繫升三升繫草稿）

櫻時雨（さくらしぐれ）　脚本　二幕四場　世話物

【作者】高安月郊　【發表】明治三十九年一・二月「歌舞伎」(舊刊)　【刊行】月郊脚本集第一編(大正五年十月)。明治大正文學全集戲曲篇第二所收　【興行】明治三十八年十二月五日初日初演。京都南座(顏見世)。

〔役割〕吉野太夫後に灰屋三郎兵衞女房お德(中村芝鶴)、此江應山又は近衞應山(嵐吉三郎)、木阿彌光悅(片岡我藏)、與之助又は世之介(中村成太郎)、職人金次又は銀次(片岡松壽)、番頭五兵衞(片岡當十郎)、灰屋三郎兵衞・灰屋紹由(片岡我當)。

好評によつて、文樂座も人形淨瑠璃に改訂上演したが、これは不評であつた。【題材】「傳奇作書」續編中の卷「灰屋紹益吉野の話」より材を取る。その話の冒頭に、「未だ淨瑠璃歌舞伎に後はざる先、幾ばくか世に傳はるにしもあらされば、爰に出だす」とあり。脚本の素材としては、全く劇的に完成した逸話である。

【梗概】〔序幕〕(六條廓揚屋店先)遊客與之助は金にあかしても吉野太夫に逢ひたいと駄々をこね、小刀鍛冶金次は、苦心して稼ぎためた金を投げ出して一目でも同じ太夫に會ひたいと戀ひ焦れてゐる。(同奧座敷)セキシロ大盡實は此江應山は吉野太夫のために名所の花を集めて遊興してゐる。それに張合つて灰屋三郎兵衞は、吉野から取寄せた山櫻で造つた花籠を曳き出し心意氣を見せて吉野太夫を爭ひ、遂に千兩で身請けをする。中に這入つたに來た侍と宿の女の應對を見て、その風流さ、その心のたしなみに紹由は感心してしまふ。そしてその歸るさ、この女性が伜の嫁と光悅から聞いては、三郎兵衞の勘當を許さずにはゐられなかつた。そして立戻つた紹由は伜夫婦と共に幸福に醉ひながら、一時の辛さもこの世の時雨に過ぎないと述懷する。

【構想】作者は灰屋紹益の父親が、伜の住居と知らず、時雨の軒を借りて、その家の女房、卽ち嫁の立居振舞に感心する件から暗示を得て、想を構へたと傳へられる。高雅と派手な寬永時代を背景として、京都、廓、遊女、時

【初代】〔姓名〕蒔田氏、後に田川氏に改めたと傳へる。通稱、笠屋善兵衞。幼名、治三郎、又、喜三郎〔號〕柳川隣・花川戶など。家號、成田屋。俳號、左交〔生歿〕享保十九年に生れ、文化三年(一八〇六)六月二十七日、江戶淺草辨天山に歿す。〔法名〕默了院左交日念信士〔墓所〕下谷蔓店法養寺〔閱歷〕本石町一丁目河岸炭薪商の伜といひ、又は櫻田門外久保町の生れともいふ。櫻田を名乘る所から見れば、後者が正しいかに察せられる。幼時からの芝居好きが狂言作者たらしめ、寶曆三年津打治兵衞に入門、津打治助と名乘つたが、

【作品】脚本・淨瑠璃・長唄等はその數、百を越えるが、主な作のみを左に擧げる。(一)脚本。眞田與市磐土產(明和四年十一月)○男山弓勢競(明和五年十一月)○江戶花陽向曾我(明和六年二月)○敵討忠孝鑑(明和七年六月)○御攝勸進帳(別項)○御誂染曾我雛形(安永三年一月)○國色和曾我(安永七年二月)○伊達競阿國劇場(別項)○戲場花萬代曾我(天明元年四月)○四天王宿直着綿(天明元年十一月)○伊達染仕形講釋(天明二年八月)○大商蛭小島(別項)○江戶富士陽曾我(寬政元年一月)○名歌德三升玉垣(享和元年十一月)○幡隨長兵衞精進俎板(享和三年八

らされば、爰に出だす」とあり。脚本の素材としては、全く劇的に完成した逸話である。

【梗概】〔序幕〕（六條廓揚屋店先）遊客與之助は金にあかしても吉野太夫に逢ひたいと駄々をこね、小刀鍛冶金次は、苦心して稼ぎためた金を投げ出して一目でも同じ太夫に會ひたいと戀ひ焦れてゐる。（同奥座敷）セキシロ大盡實は此江應山は吉野太夫のために名所の花を集めて遊興してゐる。それに張合つて灰屋三郎兵衞は、吉野から取寄せた山櫻で造つた花籠を曳き出し心意氣を見せて吉野太夫を爭ひ、遂に千兩で身請けをする。中に這入つた本阿彌光悦が三郎兵衞に親からの勘當を知らすと、三郎兵衞は仰天し途方にくれる。吉野はそれでこそ心の合つた夫婦生活が出來ると喜び將來を誓ふ。（同廓外）繁華な夜景。眞心に動かされた吉野から杯だけは貰つたものの、金次は身投げしようと書置をする。與之助は吉野への戀に心狂ふ。三郎兵衞の父紹由は、金次の書置を拾ひ、又與之助の姿を見て、伜の身の上を案じ「今のは氣狂ひあちらは身投げ、伜は何にならうやら」と嘆息する。隆達節の靜かな合方が聞えてゐる。〔二幕〕（櫻町侘住居）陶器作りを職としてゐる三郎兵衞と吉野との靜かな生活である。外には傀儡子や心亂れた與之助の鉢叩きなどが來る。浮世を捨てた三郎兵衞には、富貴な灰屋の家も瓦石に等しかつた。漸くこの世の中の眞の味、風雅が分つて來た。意見しに來た實家の手代に却つて浮世の風情を說き、利休の茶碗まで碎いて見せる。間もなく時雨が來る、紹由は伜の家の軒に雨やどりする。吉野は主人の留守に義父とは知らず家に請じ入れて、茶の湯の饗應をする。そこへ利休の茶碗の件で掛合に來た侍と宿の女の應對を見て、その風流さ、その心のたしなみに紹由は感心してしまふ。そしてその歸るさ、この女性が伜の嫁と光悦から聞いては、三郎兵衞の勘當を許さずにはゐられなかつた。そして立戻つた紹由は伜夫婦と共に幸福に醉ひながら、一時の辛さもこの世の時雨に過ぎないと述懷する。

【構想】作者は灰屋紹益の父親が、伜の住居と知らず、時雨の軒を借りて、その家の女房、卽ち嫁の立居振舞に感心する件から暗示を得て、想を構へたと傳へられる。高雅と派手な寛永時代を背景として、京都、廓、遊女、時雨、茶の湯、小倉の色紙、利休の茶碗、粹と侘等々を配合した詩趣に富んだこの脚本は、登場人物總てを淡泊な風雅な色彩で、一刷毛にはいてゐる。そこには構想上に於ける些細の破綻も生じてゐない。【批評】詩人としての月郊は、この脚本に於て眞の風雅とは、樂もあり侘もあり花もあるものと結論し、日本趣味を高調した。それはこれまでの歌舞伎劇の世話物には、表現されない程度の高踏的なものであつた。【備考】明治三十八年十二月京都顏見世の時、白井松次郎は中村鴈次郎と提携、大阪進出を眼前にして、先づ京都歌舞伎座に基礎をかためた。我當（後の仁左衞門）は對抗的に南座に於て、「桐一葉」と「櫻時雨」の二本立で、無人芝居を興行した。この大膽な興行政策にも拘らず、我當の天才的な藝術家的な偏僻な性格が、全然紹由や三郎兵衞に反射して、毎日滿員の盛況であつた。

【參考】南座　堂本寒星　○傳奇作書續篇中の卷（新群書類從卷一）　〔尾澤〕

佐倉宗吾（さくらそごう）「東山櫻莊子」を見よ。

櫻田治助（さくらだじすけ）脚本作者（三代まで）

【名】岸田豐治郎　【號】杜芳・岸杜芳・櫻杜芳　【狂名】言葉綾知　【歿年】天明八年（一七八八）五月　【墓所】浅草明源寺

【初代】〔姓名〕蒔田氏、後に田川氏に改めたと傳へる。通稱、笠屋善兵衞。幼名、治三郎、又、喜三郎　〔號〕柳川隣・花川戸など。家號、成田屋。俳號、左交　〔生歿〕享保十九年に生れ、文化三年（一八〇六）六月二十七日、江戸淺草辨天山に歿す。〔法名〕默了院左交日念信士　〔墓所〕下谷臺店法養寺　〔閱歷〕本石町一丁目河岸炭薪商の伜といひ、又は櫻田門外久保町の生れともいふ。櫻田を名乘る所から見れば、後者が正しいかに察せられる。幼時からの芝居好きが狂言作者たらしめ、寶曆三年津打治兵衞に入門、津打治助と名乘つたが、同七年五月（二十四歲）、市村座に始めて名を揭げた時は田川治助を稱した。この頃から壕越菜陽に附いて、同八年十一月から櫻田治助と改め、以來急速の出世を見せた。治兵衞の歿した同十年上京、上方狂言に習熟して明和元年十一月江戸に下り、森田座に立作者の地位に坐つたが、後、少時スケ等の位置にゐて、三代市川團藏の援助を得て、明和五年顏見世から立作者の位置を確保するに至つた。明和六年春市村座「江戸花陽向會我」が出世作となつて、江戸の人氣を集めた。やがて團藏から離れたが、越えて安永七年七月、中村座「伊達競阿國劇場」の興行に當り、五代市川團十郎が同座を退いたが、この頃から四代松本幸四郎との提携時代に入つた。兩者の性格の投合は、名演出と名脚色を世に紹介させた。世話作者治助の名は、爾來彌々喧傳せられた。寛政以後は、華々しい作は現はれなかつた。四十年の長い作者生活を了へて、幸四郎の祥月命日に彼は歿した。一周忌には、遺言により本所柳島妙見境內に淨瑠璃塚が建てられた。辭世の句、「花淸し散ても浮かむ水の上」。

〔作品〕脚本・淨瑠璃・長唄等はその數、百を越えるが、主な作のみを左に擧げる。（一）脚本。眞田與市磐土產（明和四年十一月）○男山弓勢競（明和五年十一月）○江戸花陽向會我（明和六年二月）○敵討忠孝鑑（明和七年六月）○御攝勸進帳（別項）○御誂染會我雛形（安永三年一月）○國色和會我（安永七年二月）○伊達競阿國劇場（別項）○戲場花萬代會我（天明元年四月）○四天王宿直着綿（天明元年十一月）○伊達染仕形講釋（天明二年八月）○大商蛭小島（別項）○江戸富士陽會我（寛政元年一月）○名歌德三升玉垣（享和元年十一月）○幡隨長兵衞精進俎板（享和三年八月）。（二）淨瑠璃。紅葉雲錦釣夜着　○色手綱戀の關札○十二段君が色香○清十郎道行比翼の菊蝶○半兵衞道行垣根の結綿○長右衞門道行瀨川の仇浪○新曲高尾懺悔○花川戸身替の段○戾駕色相肩　○命懸色の二番目　○道行念玉蔓。（三）長唄・めりやす。敎草吉原雀　○めりやす「かみ心」　○山櫻娄鐘入○めりやす「髮梳十寸鏡」等。

〔作風・人物〕津打治兵衞、壕越菜陽の薰陶を得、殊に菜陽の影響を强くうけて、菜陽風といはれたほど彼の作風は、純江戸式の味を見せた。このために、脚色に對して創作的能力は餘り發見されないが、江戸前の器用を働かせて、まづ巧みな超時代的題材の運用を見せた。やつしの二番目に好評を得たのもこれがためである。三ケ津三日替りの趣向は、寧ろ意外の成功であつたので、且つは時代世話分離の機運を促せる如き效果を收めたものである。また名句を活躍させて對話に圓滑な進行を遂げた事により、柔軟性に富んだ作を完成した。この點は殊に擧後淨瑠璃に著しく現はれた。それ等の淨瑠璃を綴る事が彼の得意で

あつたと共に、彼の作にかゝる淨瑠璃は殆どすべて成功した。勿論、名太夫、名踊手の出現も大に關係したのであつたが、彼の作そのものが又社會の渇仰の的でもあつた。用語の才能は、名題や角書に於ける特殊な風味を示して、所謂櫻田風を後世に傳へた。彼は當時の作者中では學殖があつたが、遊蕩に耽り、一見才の豐かな鷹揚な人物のやうに見えたが、事實はかなり神經質であり、又名利の念も强烈であつたらしい。彼が菜陽時代に次いで櫻田時代を成したのも、作劇の手腕と共に、細心な宣傳法に據る所が多いと思はれる。〔門系〕長い作者生涯を送つたので、門葉は甚だ多い。木村園夫・村岡幸治・笠縫專助(各別項)・松島半二(二代治助)・曾根正吉・清水正七・三升屋二三治(別項)等の立作者級の人々を出してゐる。四代鶴屋南北も、彼の門弟であつたらしい。

【二代】〔生歿〕文政十二年(一八四九)四月十四日歿、享年六十二〔閲歴〕初め笠縫專助の門人で、松島陽介といつたが、後、初代治助に入門松島半二と改めた。初代歿後、やがて二代治助をつぎ左交を稱したが、立作者になつたのは文化十四年である。學識もあり、巧妙な作劇手腕を持つてゐたが、全體としては溫健な作風を得意とした。文政十年松島調夫と改め、悲慘な晩年を送つた。〔作品〕主な脚本と淨瑠璃・長唄等を列擧する。(一)脚本。伊勢平氏攝神風(別項)○千種結色出來櫛(文政二年七月)○仕入曾我雁金染(文政三年正月)○忠孝染分纏(文政三年七月)○歸曲輪花伊達染(別項)○萬歲阿國歌舞伎(文政十年三月)。(二)淨瑠璃・長唄。戀民奇揚合○閨玖姿八景○今樣須磨の浦曲○宝行思案殺○御名殘淨瑠璃文藏○月學花名殘文臺○復新三組盃等。

【三代】〔歿年〕明治十年八月七日歿、享年七十六〔閲歴〕幕末の江戸劇壇に活躍した第一人者で、天保年代から明治初年にかけて、四十年に亙る作者生活を經た。初め音助といつたが、二代治助に入門して、二代松島半二を名乘り、後、三代治助をつぎ、文久二年以後狂言堂左交を稱した。立作者になつたのは天保六年である。當時の人氣役者四代中村歌右衛門との提携によつて勢力を得、一時は三座掛持ちをしたほどであつたが、默阿彌の出るに及んで下火になり、明治初年には、故老として名を列するに過ぎなくなつた。多作者であつたが、脚本は殆ど改作物で、ただ歌右衛門によつて上方狂言が多く輸入されたので、それ等の改作は寧ろ江戸には珍らしく感ぜられたらしい。但し淨瑠璃所作には彼の創案の物が多い。併しこれも踊手によつて好評を得た點が尠くあるまい。〔作品〕主な脚本と淨瑠璃を左に列擧する。(一)、脚本。壽龜荒木新舞臺(天保十三年九月)○靑砥稿(別項)○源氏模樣娘雛形(嘉永四年九月)○新板越白浪(同上)○里見八犬傳(嘉永五年正月)○隅田川對高賀紋(嘉永五年三月)○新造艦奇談(嘉永五年五月)○名譽仁政錄(嘉永五年七月)○花觀臺大和文庫(安政元年三月)○三世相錦繡文章(安政四年七月)○百衞賑曾我(萬延元年正月)等。(二)、淨瑠璃・長唄。來宵蜘蛛線○花觀曆色所八景○道成寺二人鐘入(天保十一年十一月)○乘合船惠方萬歲○神樂諷雲井曲毬○假名手本忠臣藏○名夕顏雨の舊寺等。

【參考】狂言交一代戲淨瑠璃記○傳奇作書西澤一鳳○狂言作者考○狂言作者概略○狂言作者大鑑手鑑根歌藏○所刹役者名書八文舍自笑○戲財錄 並木五瓶○三升屋二三治戲場書留三升屋二三治○作者店おろし 同上 ○作者名目同上○近代日本演劇史 伊原敏郎○演劇脚本 中西貞行編○續歌舞伎年代記○續々歌舞伎年代記 田村成義 〔守隨〕

櫻中將 さくらのちゆうじやう

御伽草子 二卷 【作者】未詳【別名】「櫻中將物語」「小伏見物語」(異本)、又「櫻町中將殿物語」と題した一本があるが、この題名は後人の附したものらしい。「近古小說解題」にこれを「櫻町中納言物語」と題した東大圖書館藏本の由見えてゐるが、これは同解題の著者が「中將殿」の文字を磨滅のためと、恐らく「平家物語」に有名な成範卿の聯想とから「中納言」と誤讀したに據るので、本書の別名ではない。櫻町中將の名も亦成範卿の逸話から移つたものと思はれる。【成立】室町季世か(近古小說解題)。【諸本】古板本は寛文十年板(通油町本問屋開板)。寫本では主人公を花山院の皇子とする二卷本(綱原芳野本)、「櫻町中將殿物語」と題する一卷本、文中の語を取つて「小伏見物語」と題する三卷の奈良繪本等の異本がある。【題材】悲戀遁世物。鎌倉時代小說の套型を承け佛敎色が著しい。「忍音物語」「若草物語」「しぐれの緣」(各別項)等と類した構想を有し、繼子物ではないが、「住吉物語」「ふせやの物語」「秋月物語」「朝顏の露の宮」(各別項)等にも似た所がある。

【梗概】昔二條中納言あさつなの子たかみつの中將は、櫻の中將とも呼ばれた人であつたが、或る年正月十五日の夜の御遊に故大宮大納言の姫君を見初め、仕人阿波局から姫君方のすけの局を通してその意を通じたが、とかくの返事が無かつたので、遂に姫を家にたばり迎へて契を結び、程なく若君を儲けた。その年の八月十五夜、禁中に又管絃の催があり、德大寺大納言・四位の少將・二條中納言父子も參列したが、宴果てて後、大納言と中納言との間に婚姻の約成り、中將は止むを得ず大納言の女の方へ通ふ事となつたが、心は大宮の姫君にあつて、それを看破した父中納言は中將の德大寺殿に赴いた留守の間に若君を欺き奪ひ、武士に命じて大宮の姫君を攝津の浪花の或る尼の許に隱した。歸宅した中將は悲歎に暮れて家を出で、天王寺の觀音に三七日參籠し、靈夢の告げでその難波にあるを知り、漸く尋ね當てたが、既に姫君は歎きの餘り他界して三日を經、すけの局が墨染に身を替へて菩提を弔つてゐたので、已れも世を捨て佛門に入り、父からの追手を逐ひ返したので、中納言は後悔やる方なく、北の方と共に出家した。中將は高野山に登り、奥の院で亡くなつた。年四十二。すけの局は六十三歲でこれも往生の素懷を遂げた。若君は故中將の俤をそのまゝ十六歲で中將となり、めでたく榮えた。

【參考】近古小說解題 平出鏗二郎 〔島津〕

櫻の實の熟する時 さくらのみのじゆくするとき

小說 【作者】島崎藤村 【刊行】前半は大正二年「文章世界」に連載、後、書き改めて大正六年完成、春陽堂より刊行。

【梗概】明治もまだ若い二十年代に、岸本捨吉は高輪臺の基督敎主義の學校で、少年から靑年への日を送つた。彼が世話になつてゐる大川端の田邊の家とは全くちがつた世界に放たれて、自由な浮々した樂しい月日を送つた。いゝ友達を得て勉强もし、多くの敎授達の愛を身に集めもした。しかし年上の繁子との交際に破れて以來、彼はそこの生活にも幻滅と空虛を感じ、これまでの自分に失敗と後悔と羞かしい思ひとを殘しながら、やがて二十の夏には學窓を離れることになつた。その日の校門で、四年の間に形を變へる程に延びた櫻の若木を顧みて、自分の今の憂鬱と過ぎ去つた日の樂しみとを思つて感慨深かつた。落ち散つた櫻の實を拾ひ上げ、若い日の幸福のしるしであるかのやうに、思はずそれを嗅いで見るのであつた。現實の世界に送り出された捨吉の前には、およそ二つの道が用意されてゐた。その一つは、豫め定められた手本があり、踏んで行けばいゝ先人の足跡のある道だは「春」が文壇に實したほどの淸新な劃期的な手法は認められないが、老熟した用意深い筆致がよく靑春期に於ける捨吉の魂の惱ましい行程を寫し出してゐる。殊に當時の文化の先導たりし基督敎の浪漫的空氣と、新しい實業に志してゐる田邊達の世界とを共に描いて、明治二十年代の代表的時代相を巧に傳へ、それ等の背景を交互に色濃くする事に依つて、捨吉の姿を一層はつきり浮み上らせてゐる。かくしてこの作は、大正文壇の記憶すべき收穫となつたが、著者は多艱の年にこれを起草して巴里の客舍に稿を繼ぎ、五年後に完成を

【梗概】〔發端〕〔江の島〕 建長寺の自休は稚兒白菊丸と契つて情死を企てたが、白菊丸のみ死んで自休は死後れる。〔序幕〕(新淸水)前幕より十七ヶ年後。吉田少將は人手にかかつて橫死、都鳥の一卷紛失につき、吉田松若丸と入間惡五郎が家督爭ひに、善惡の家來粟津七郎・松井源吾が口論する。松若の姉櫻姫は、生れて右手の開かぬ病に出家と覺悟して淸玄に剃髮を賴む。淸玄が十念を授けると右手が開いて香箱の片端が出る。淸玄は十七年前の自休で、香箱は白菊丸と取交した物なので因果の恐ろしさに驚く。櫻姫はそれでも剃髮の

て憤死。淸玄と櫻姫は闇の中にそれと知らず行き逢ふ。〔五幕〕(岩淵庵室)局長浦と役僧殘月が、病みほうけた淸玄の世話に困じ果て毒殺を企てる。葛飾のお十が來て櫻姫の子を貰つて行く。判人勘六が櫻姫を捕へ、賣るつもりで連れて來ると、淸玄と偶然逢ひ、淸玄は狂氣のやうに口說く。櫻姫は誤まつて淸玄を殺す。墓掘りとなつてゐた權助が櫻姫を連れて立退く。淸玄の怨念で權助の相好が變る。〔大詰〕(山の宿)櫻姫の子が捨ててある。家主の權助が三兩の金欲しさにその子を貰ふ。惡五郎が來て權助から都鳥の一卷を取返さう

空虛を感じ、これまでの自分に失敗と後悔と羞かしい思ひとを殘しながら、やがて二十の夏には學窓を離れることになつた。その日の校門で、四年の間に形を變へる程に延びた櫻の若木を顧みて、自分の今の憂鬱と過ぎ去つた日の樂しみとを思つて感慨深かつた。落ち散つた櫻の實を拾ひ上げ、若い日の幸福のしるしであるかのやうに、思はずそれを嗅いで見るのであつた。現實の世界に送り出された捨吉の前には、およそ二つの道が用意されてゐた。その一つは、豫め定められた手本があり、踏んで行けばいゝ先人の足跡のある道だつた。しかし大家への養子の口も事業と金の生活も彼の心を牽引するに足らなかつた。彼は言ひ難い恐怖と不安を感じながらも、獨力で開拓すべき道を歩き出さうとするのであつた。田邊の小父が經營する横濱の店の帳場に一夏を送つた後、先輩吉本の經營する雜誌社を頼つて新しい生涯を始めて、本當に自分の生命を延ばさうとした。彼の世界は次第にひらけるやうになつたが、女學校に教鞭を執るに至つて、やがて彼は教へ子の勝子を祕かに戀する身になつた。教師と生徒との關係が彼を苦しめ、眠り難い懊惱の果は最早勝子を見るにも堪へられなくなつた。一切の心の行き詰りを破つて生きる途を見出さうとして、彼は放浪の旅に上つた。東海道を下つて琵琶湖の畔に來ると夕方だつた。「白い綿のやうなやつがしきりに降つて來る中を、あちこちと宿屋を探し廻つた。足袋も草鞋も濡れた。まだ若いさかりの彼の足は、踏んで行く春の雪のために燃えた。

【批評】著者が自傳小説の一つで、名作「春」の前篇と見做すべきものである。その描寫には「春」が文壇に驚したほどの清新な劃期的な手法は認められないが、老熟した用意深い筆致がよく青春期に於ける捨吉の魂の惱ましい行程を寫し出してゐる。殊に當時の文化の先導たりし基督教の浪漫的空氣と、新しい實業に志してゐる田邊達の世界とを共に描いて、明治二十年代の代表的時代相を巧に傳へ、それ等の背景を交互に色濃くする事に依つて、捨吉の姿を一層はつきり浮み上らせてゐる。かくしてこの作は、大正文壇の記憶すべき收穫となつたが、著者は多艱の年にこれを起草して巴里の客舍に稿を繼ぎ、五年後に完成を見たものである。〔永木〕

櫻姫東文章（さくらひめあづまぶんしやう）

十二場　お家物　【作者】四代鶴屋南北　脚本　七幕

【通稱】新櫻姫、釣鐘の權助　【名稱】清玄櫻姫を江戸で新に創作したといふ意味。【諸本】大南北全集第八卷所收　【興行】文化十四年三月七日初日、江戸河原崎座。

〔役割〕建長寺自休後に清水寺清玄法師・釣鐘權助實は信夫の惣太・稻野谷半兵衞（七代市川團十郎）、吉田息女櫻姫後に千代倉の抱へ風鈴お姫（五代岩井半四郎）、稚兒白菊丸・稻野谷半十郎（岩井松之助）、郡治兵衞娘小雛・葛飾のお十（五代瀬川菊之丞）、粟津七郎俊次後に有明の仙太郎（荻野仙花）、入間惡五郎（大谷鬼次）、清水寺殘月和尚（大谷鬼次）、局長浦（惣領甚六）、吉田松若丸（市川茂々太郎）、松井源吾（坂東又十郎）、吉田下部軍助（淺尾勇次郎）、軍助女房おしげ（岩井かほよ）。

【題材】文化四年、品川の某遊女屋にお琴といふ遊女がゐて、自ら京都日野中納言の娘と稱し、評判であつたが、後に追放に處せられた。判決文から想像すると、眞に日野中納言の娘であつたらしい。この事件を吉田の世界へ當嵌めて脚色した。

【極概】〔發端〕（江の島）建長寺の自休は稚兒白菊丸と契つて情死を企てたが、白菊丸のみ死んで自休は死後れる。〔序幕〕（新清水）前幕より十七ヶ年後。吉田少將は人手にかかつて横死、都鳥の一卷紛失につき、吉田松若丸と入間惡五郎が家督爭ひに、善惡の家來粟津七郎・松井源吾が口論する。松若の姉櫻姫は、生れて右手の開かぬ病に出家と覺悟して清玄に剃髮を頼む。清玄が十念を授けると右手が開いて香箱の片端が出る。清玄は十七年前の自休で、香箱は白菊丸と取交した物なので因果の恐ろしさに驚く。櫻姫はそれでも剃髮の念を翻さぬ。松若には奴軍助が附いて出奔する。（櫻谷草庵）櫻姫剃髮の折から惡五郎の使ひに來た中間釣鐘の權助の、腕の彫物を見て櫻姫は驚く。一年前に言ひ交し、子までなした男であつた。二人の密會を惡五郎が騷ぎ立てたが、權助は早くも逃げ失せ、惡五郎は清玄阿闍梨を無理に不義の相手とする。清玄は因緣と觀念して甘んじて濡衣を被る。〔二幕〕（稻瀨川）清玄・櫻姫は追放される。局長浦の計ひで里親へ預けた赤子は返され、櫻姫は途方に暮れる。清玄は今は眞實櫻姫の色香に迷つて口說いたが、惡五郎が邪魔に入つて櫻姫は逃げ、清玄は赤子を抱へて後を追ふ。〔三幕〕（押上植木屋）稻野谷半兵衞は茶店のおしげの案内で山田郡治兵衞を訪ねる。（郡治兵衞住居）半兵衞は弟半十郎を、許婚小雛の父郡治兵衞に預けて置いたが、一年振りに歸つて、小雛・半十郎を無理に不義者と言ひ立てる。小雛は吃りで言譯出來ず、半兵衞は半十郎を討ち、郡治兵衞は小雛を殺す。松若と櫻姫の身替りに立てるためである。松若はこゝに匿まはれてゐる。〔四幕〕（三圍堤）軍助は捕手に圍まれて憤死。清玄と櫻姫は闇の中にそれと知らず行き逢ふ。〔五幕〕（岩淵庵室）局長浦と役僧殘月が、病みほうけた清玄の世話に困じ果て毒殺を企てる。葛飾のお十が來て櫻姫の子を貰つて行く。判人勘六が櫻姫を捕へ、賣るつもりで連れて來ると、清玄と偶然逢ひ、清玄は狂氣のやうに口說く。櫻姫は誤まつて清玄を殺す。墓掘りとなつてゐた權助が櫻姫を連れて立退く。清玄の怨念で權助の相好が變る。〔大詰〕（山の宿）櫻姫の子が捨ててある。家主の權助が三兩の金欲しさにその子を貰ふ。惡五郎が來て權助から都鳥の一卷を取返さうとして殺される。（權助內）小塚ツ原へ女郎に出た櫻姫は、幽靈が出る噂で歸される。代りにはお十が行く。權助は醉つて惡五郎に頼まれ吉田の少將を殺した事を口走る。清玄の亡靈が出る。櫻姫は清玄、權助が兄弟と知り、先づ惡人の胤の赤子を突いて後、權助を殺して都鳥の一卷を奪ひ返す。（三社祭禮）稻野谷半兵衞は、有明の仙太郎實は粟津六郎と力を合せ、櫻姫を伴ひて立退き、捕手と立廻る。

【解說】清玄櫻姫の因果關係を白菊丸の怨念とした事、權助といふ惡人を點出して清玄と二役早替りをさせた事などは、南北らしい案である。小雛半兵衞の件だけは餘りに挿話的であるが、これは主役團十郎に變つた扮裝をさせたいためからであらう。權助を幸四郎型の權化的惡人でなく、醉つて惡事を口走る平凡な惡人にした事、櫻姫が宿場女郎になつて、雅俗の臺詞を交へる趣向は興がある。小雛半兵衞の件も多少の無理はあるが筋は面白い。三圍の場は全く錦繪美の舞臺である。全篇を通じて複雜に偏せず、南北式の無理が割に僅少で、而も技巧に富んだ傑作と云へる。〔渥美〕

櫻姫全傳曙草紙（さくらひめぜんでんあけぼのぞうし）　讀本　五册

【作者】山東京傳　【畫工】歌川豐國　【名稱】外題には「（表紙）櫻ひめ」とある。略稱して曙草紙とも云つてゐる。櫻姫の傳奇であるから、櫻の異名に因んで曙草紙と名づけたと例言に見える。【刊行】文化二年、江戸鶴屋喜右衞門版　【諸本】天保十二年に再摺。繪入文庫（繪入文庫刊行會）・山東京傳集（近代日本文學大系）・讀本集（日本名著全集）等に所收。【題材】作者未詳の書を得て補綴したと例言に云つてゐるが、假託の言で、古くから歌舞伎淨瑠璃に傳へられた清玄櫻姫の說話に據つたものである。作者は引用書目にその材料としたものを擧げてゐるが、その外に、これが趣向をなすに當つては、馬琴の「小夜中山石言遺響」（別項）に暗示を得、支那小說「金翹傳」、李笠翁の「風箏誤傳奇」に材を取つてゐる。

【梗概】後鳥羽院の頃、丹波桑田の長者鷲尾義治は、妻野分に子なきを憂へ、白拍子玉琴を妾とした。玉琴が懷姙するや野分は嫉妬に堪へず、密かに計つて玉琴を慘殺し、死骸を大江山の谷川に沈めた。その後、野分も身重くなつて櫻姫を產んだ。櫻姫十六歲の春、都に遊んで播州の郡士の子伴宗雄を見染め夫婦の緣が定まる。豫て姫に心をかけてゐた信田平太夫が、盜賊蝦蟇丸を引入れて義治を殺したので、野分と櫻姫は別れ〳〵に落ちて行く。姫は病に仆れて、鳥部野の墓守の庵室に日を送る。墓守は玉琴の死體から生れて、鷲尾家の舊臣で今は回國修行者となつてゐる彌陀二郎に救はれて淸水寺に僧となり、一度櫻姫を見てから墮落してしまつた淸玄の成れの果であつた。この時櫻姫は懸垂して、淸玄はこれを挑んだが、偶々來合せた彌陀二郎に殺される。一方野分は蝦蟇丸の手に落ち、先妻を殺さしめてその妻となるが、互の素性が現はれて、蝦蟇丸は鷲尾家の舊臣田島造酒丞に討たれる。さて伴宗雄は舊臣と共に信田平太夫を討つて鷲尾家を再興し、姫と結婚するに至るが、姫が妖氣に襲はれて悶え苦しむので、常照阿闍梨の法力を賴むと、姫は小蛇と化し骸骨に變じた。玉琴の怨靈が野分を苦しめるので、暫し假の姿を現はさせたのであつた。やがて野分は雷火に打たれて死し、宗雄は剃髮して僧となつた。

【構想】櫻姫淸玄の事は多くの類作もあつて、よく聞えてゐるが、これは歌舞伎で最も知られてゐる淸水寺と庵室の場に、多くの材料を補綴したもので、當時の勸懲主義の見解から因果物語を構成しようとして、親子の因緣話に附會したのである。櫻姫と淸玄とが腹がはりの兄弟であつて戀に惱むのも、野分が生き長らへて苦しむのも、玉琴の祟であつた。作者は題するに櫻姫の名を用ひてゐるが、內容は寧ろ野分を中心としたものである。しかも作者は歌舞伎の影を隱して、支那小說の面影を移さうとしてゐる。【史的地位】文壇に競爭的に對立してゐた京傳と馬琴との讀本には互に影響する事が多かつた。本篇は、「石言遺響」と相對するものである。そして文化四年に、馬琴が「雲妙間雨夜月」（別項）を出したのはこれと競つたものと云はれる。また馬琴は文化七年に「姥櫻女淸玄」（勝川春亭畫）といふ合卷を出したが、翌年京傳は「曙草紙」の筋をその儘に合卷にした「櫻姫筆再咲」（歌川豐國畫）を出した。なほ文化五年の「淸水淸玄契約櫻」といふ戯作は、この作を狂言に仕組んだものである。【價値】支那風を裝はうとして、やゝ筋の通らぬところはあるが、大體に細心の工夫があつて首尾貫徹し、說話の組織配合も宜しきを得てゐる。京傳の讀本の才能を代表したものとして注目されるものである。〔笹野〕

【參考】讀本集解說　山口剛（日本名著全集）

左經記（さけいき）　日記　一卷

【著者】源經賴　【名稱】經賴が左大辨であつたので、官と名との一字を取つて命名したものである。一に「經賴記」「糸束記」とも稱した。糸束とは經賴の偏を取つて名づけたものである　【諸本】彰考館藏書目錄には左經記十一本とある。祕閣本十五册は、舊松山藩久松定謨の獻納本に據つて、九條家藏本を補寫したものである。大正四年七月刊行、史料通覽所收。【內容】本記は夙に散佚し、史料通覽本は、長和五年から長元八年までの十五年間の記事を載せ、別に類聚雜例一卷を添へ、長元二年より同九年に至る凶事を記錄してある。これは恐らく後人が本書の散佚前に抄出して置いたものの一部であらう。この本は祕閣本十五册を底本として、それに改元部類記・柳原家本・谷森家藏本等から增補したものである。なほ卷末に脫漏追加として、長和六年四、寬仁五年二、治安四年六・七の數條が附記されてゐる。【價値】經賴が要職に在つて機務に與つてゐた關係上、本書が前後中間に殘缺する所が多くても、當時の事情を知るに足る正確な史料で、「小右記」（別項）と參照して互に不足を補ふことが出來る有益な資料である。〔石村〕

【參考】歷世記錄考　星野恒（史學叢說第一集）

酒上熟寢（さけのうへずぐね）　狂歌師

【姓名】島田友直。字は子諒、通稱左內。【俳名】五陵、後、酒空酒と改む。【生歿】享保十年生れ、天明四年（一七八四）五月十九日歿す。享和六年。【法名】正善院殿深譽孝順居士　【墓所】東京市ケ谷谷町安養寺　【閱歷】市ケ谷左內坂に住し、代々名主を勤め、安永頃より四方赤良等と共に狂歌を詠んでゐた。性酒を好み、狂名を酒上熟寢と呼んだのもそれが爲めで、狂歌師の戲謔的な狂名は、この熟寢に始まつたといふ。後、禁酒して瓢の空酒と改めたが、間もなく酒毒のために病死した。「奴凧」に、「市ケ谷左內坂の名主島田左內酒をたしみて面白き男なりき。狂名を酒上熟寢といふ。安永二年寶合といふ戲をなして狂文を書きし事ありき。牛込原町光惠寺に談義のありし時、此の書院を借りて寶合をなし、長持に寶物といふ札を張りて光惠寺に運びしかば、皆人まことの寶物と思ひてうや〳〵しく拜せしに、あらぬ物どもなればあやしみて歸りしもありき。此の寶合の記一卷市ケ谷左內坂富田屋新兵衞（曾尙堂といふ狂名文屋安雄）板行にして世に傳ふ。今は此の本少し」とある。〔野崎〕

酒上不埒（さけのうへのふらち）

「戀川春町」を見よ。

瑣語（さご）　隨筆　二卷

【著者】五井純禎。蘭洲、又洌庵と號した。大阪の儒者。【刊行】明和四年【解說】漢文隨筆で、博く和漢の書史涉獵の際、會心の事項を抄記して、自家の所感を加へたもの。經義・史話・語源・詩文話等に富む。上卷に天地之中以下百二條、下卷に倭王賛以下九十七條を收めてゐる。我が國の武將碩儒等知名の人に係る評論も少くない。天明四年、中井積德（履軒）の序、同三年、中井積善（竹山）の跋がある。〔和田〕

狹衣（さごろも）　御伽草子　二卷

【作者】未詳　【別名】さごろものさうし。異本は「さごろもの記」と題す（京大本題簽及び佐野藩藏書目錄による）。【成立】室町期か（或は鎌倉末か。刊本は後のもので、少くとも室町期）。【諸本】「さごろものさうし」と題する古寫本二卷が東京帝大圖書館にあつたが大震災で燒失。刊本は「狹衣」と題して明暦三年板の二卷本（寬文五年松會より再板）があるが、詞章人名等を異にし、桓武天皇を欽明天皇、狹衣の父大臣を內大臣きんぶしやう、淸水の僧は三位の阿闍梨、兵衞大夫は兵部大夫と見え、一同出家の事は無く、代りに內大臣は本地普賢とし、又內大臣がよしかたの大將の女を狹衣に配せようとするなどのことがある。「さごろもの記」と題する一卷の京都帝一册又は四册となつてゐる。【成立】天正十八年初冬に書寫の功を終つたと沙彌半醒（紹巴）の署名がある。なほ下卷の終りに天正十九年三月九日、臨江齋法眼紹巴とある。【內容】卷頭に序があり、次に狹衣系圖といふものが載せてある。これは醍醐帝から後冷泉帝に至る十代の御系圖と、師輔・堤中納言の系圖とである。この系圖には、狹衣大將は兼通の子、作者は大貳三位であると考へてゐる。成立時代は確かではないが、「源氏物語」よりも四十年ばかりおくれてゐると云つてゐる。註釋は重要な語句をぬき出して、これに解釋を加へ五年、空しく立歸るより外はなかつた。姫君の生んだ若君は五歲になつた。別當は更に奈良の大佛に一七日參籠し、肝膽を碎いて祈願を籠めると、中將が來合せ、互に喜ぶ折柄、姫君急死の報が齎された。中將は泣く〳〵常磐に行き、若君を連れてその墓に詣でると、別當の祈禱によつて姫は蘇生し、中將からかねたかを使に始終を告げたので、父大臣は倉皇として常磐に來り、一同めでたく歸洛した。帝はこの事を哀れに思されて、若君に皇位を讓られ、中將は父の跡を承けて大臣となり、姫君は北政所と呼ばれ、別當は天台座主となり、本は、四卷全部あるが、卷三までは鎌倉中期頃の書寫、卷四はそれより少し後のものであらう。京都帝大・宮內省圖書寮には注意すべきもの各數點あり、內閣文庫・神宮文庫・東京帝大國文研究室にそれ〴〵一點あるが、何れも室町末より德川期にかけてのものである。その他、大島雅太郎氏藏の一本、高野博士藏の零本等いづれも注意すべきである。古活字本には、元和のものと寬永のものとあつて、四卷をそれ〴〵上下に分けて八册。承應三年の繪入刊本は、本文は古活字本を襲つたものであるが、卷一・二を上下に、卷三・四を上中下に

【成立】室町期か（或は鎌倉末か。刊本は後のもので、少くとも室町期）。【諸本】「さごろものさうし」と題する古寫本二卷が東京帝大圖書館にあつたが大震災で燒失。刊本は「狹衣」と題して明暦三年板の二卷本（寛文五年松會より再板）があるが、詞章人名等を異にし、桓武天皇を欽明天皇、狹衣の父大臣を内大臣きんぶしやう、清水の僧は三位の阿闍梨、兵衛大夫は兵部大夫と見え、一同出家の事は無く、代りに内大臣は本地普賢とし、又内大臣がよしかたの大將の女を狹衣に配せようとするなどのことがある。「さごろもの記」と題する一卷の京都帝大圖書館本は、この刊本の系統の寫本。

【梗概】昔桓武天皇の御代、大臣の子狹衣中將は二十一歳の時内裏からの歸途、清水寺の僧が二條西洞院帥中納言の女飛鳥井の姫の太秦に參籠したのを勾引さうとするのに出逢ひ、これを救つたのを緣に契を結んだが、姫は狹衣中將とは知らないで懷胎した。時に中將が筑紫の太宰府を賜り、その代官として乳母子の兵衛大夫を下すことに定めたが、妻を娶つて同伴せんとする大夫に、飛鳥井の姫君を世話する者があり、姫と狹衣中將との交渉を知らぬ父母も許したので出發となつた。豫て決するところあつた姫は周防の室住の沖で投身した。偶々その兄、筑前安樂寺の別當が上洛の途上にあつてこれを救ひ、兄妹の名告りをし、共に都に歸り、父の許に至つて事の次第を語つたが、中納言夫妻は却つて疑つて親子の緣を絶つと怒り別當を追拂つたので、兄妹は洛西常磐に假住居する事となつた。一方、中將は失せた姫を覓めるために、かねたかといふ隨身一人を連れて、諸國行脚をしてゐたが、別當も亦中將の行方を搜して旅すること五年、空しく立歸るより外はなかつた。姫君の生んだ若君は五歳になつた。別當は更に奈良の大佛に一七日參籠し、肝膽を碎いて祈願を籠めると、中將が來合せ、互に喜ぶ折柄、姫君急死の報が齎された。中將は泣く〳〵常磐に行き、若君を連れてその墓に詣でると、別當の祈禱によつて姫は蘇生し、中將からかねたかを使に始終を告げたので、父大臣は倉皇として常磐に來り、一同めでたく歸洛した。帝はこの事を哀れに思されて、若君に皇位を讓られ、中將は父の跡を承けて大臣となり、姫君は北政所と呼ばれ、別當は天台座主となつた。一旦死して黑髮を身に添ふべきではないと姫君が落飾したので、新大臣も出家し、兩親も世を捨て、皆小倉山にまします先帝に仕へて、往生の素懷を遂げた。

【解說】平安時代の「狹衣物語」（別項）の構想中の一部、飛鳥井姫君と狹衣中將に關する情話を主題として一層近古時代化した作。中將の吹笛、姫君誘拐の難、入水等原作の儘の點もあるが、原作では飛鳥井腹は女子なのを男子としたり、且つ狹衣の代りにその若君が受禪したりなどする改變もあり、人名も父堀河大臣、仁和寺の威儀師、式部大輔道成等がそれ〴〵改められて居り、更に飛鳥井の再生、中將一家の剃髮等に至つては著しい近古色を示してゐる。刊本は本地物的色彩までも加へ、明かに室町期の作たるを思はしめる。

【參考】近古小說解題　〔島津〕

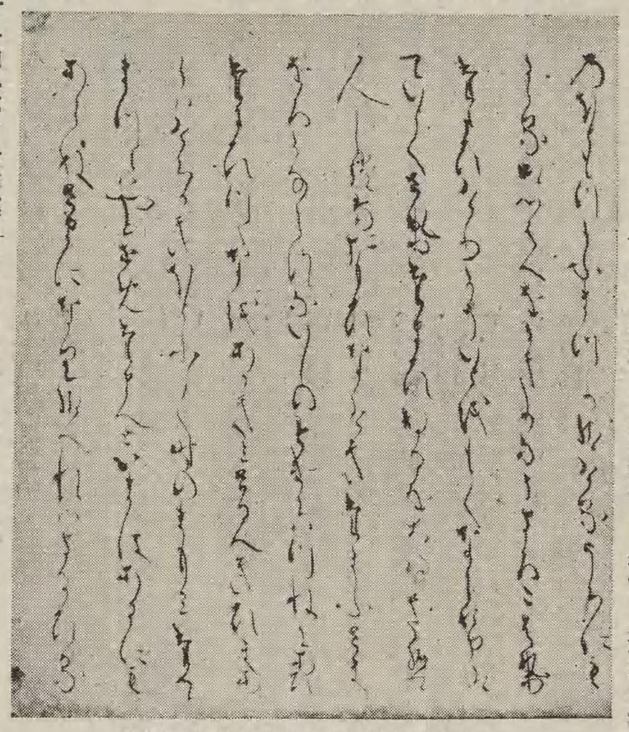
狹衣下紐（さごろもしたひも）　註釋書　【著者】里村紹巴　【名稱】單に「下紐」とも「狹衣抄」とも呼ばれる。　【卷册數】四卷四册。四卷二册、又は四卷一册。寫本は多く二册又は一册となつてゐる。承應三年刊本に添附されてゐるのは、一册又は四册となつてゐる。　【成立】天正十八年初冬に書寫の功を終つたと沙彌牛醒（紹巴）の署名がある。なほ下卷の終りに天正十九年三月九日、臨江齋法眼紹巴とある。　【内容】卷頭に序があり、次に狹衣系圖といふものが載せてある。これは醍醐帝から後冷泉帝に至る十代の御系圖と、師輔・堤中納言の系圖とである。この系圖には、狹衣大將は兼通の子、作者は大貳三位であると考へてゐる。成立時代は確かではないが、「源氏物語」よりも四十年ばかりおくれてゐると云つてゐる。註釋は重要な語句をぬき出して、これに解釋を加へたものである。刊本には卷四の終りに、狹衣系圖を附してゐるが、これは三條西實隆の作である。　【價値】本書は、「狹衣」の註として最も古いものである。序の一節に、「一條禪閤宗祇などのもてあそび給はぬより講釋など絶えたるべし」と云つてゐるやうに、紹巴の時代には註釋は全く無かつたらしい。本書は註として詳細でもなく、たしかでもないが、最初のものとして歷史的價値を有する。　〔池田〕

さごろもの記（さごろものき）　「狹衣」を見よ。

狹衣物語（さごろものがたり）　物語　四卷　【作者】未詳。大貳三位（河海抄）・祿子内親王宣旨（僻案抄）の二說がある。　【名稱】卷一の「色々に重ねては着じ人知れず思ひ初めてし夜半の狹衣」の歌から出てゐる。「和歌色葉集」や「八雲御抄」には、「狹衣大將」とある。　【成立】藤岡作太郎博士は永承・天喜の頃、津田左右吉博士は白河院の頃としてゐる。　【諸本】現存の古寫本中最も注意すべきものは、深川淳一氏藏の、舊西本願寺藏の一本で、鎌倉初期の書寫と思はれ、流布本と對校して甚しい異同がある。但し卷四は缺けてゐる。次に松浦伯家藏の一本は、四卷全部あるが、卷三までは鎌倉中期頃の書寫、卷四はそれより少し後のものであらう。京都帝大・宮内省圖書寮には注意すべきもの各數點あり、内閣文庫・神宮文庫・東京帝大國文研究室にそれ〴〵一點あるが、何れも室町末より德川期にかけてのものである。その他、大島雅太郎氏藏の一本、高野博士藏の零本等いづれも注意すべきである。古活字本には、元和のものと寛永のものとあつて、四卷をそれ〴〵上下に分けて八册。承應三年の繪入刊本は、本文は古活字本を襲つたものであるが、卷一・二を上下に、卷三・四を上中下に分けて十册。外に下紐・系圖・目錄年序を添へて全部で十六册。明治以後、國文大觀・國文叢書・有朋堂文庫・日本文學大系等に收められたが、本文はいづれも承應の刊本を踏襲したものである。この物語の本文の原形が如何なる形であつたかは分らない。清水濱臣の書入本によれば、この物語の古寫本で、發端の異つたものがあつたといふ。即ち「この頃堀河大臣と聞えて關白し給ふは」といふのが、發端になつてゐて、現存の諸本の「少年の春云々」の部分は、後に入つたとの事である。

【梗概】〔卷一之上〕春のくれがた、狹衣は山吹の枝を折つて源氏宮の所へ持つて行く。狹衣は從妹に當る源氏宮に對して、苦しい戀に惱んでゐるが、戀を打明けた場合の源氏宮の思はく、兩親の驚き、世の風評、この三つを慮つて激しい戀情を、弱い意志の力を以て制御しようとして悶々たる日を送つてゐる（以上發端）。狹衣の父堀河大臣は關白で、今上の御弟に當り、二條堀河の大邸宅を三つにしきつて、前齋宮（狹衣の母）・洞院の上・坊門の上の三人の北の方を住まはせてゐた。狹衣は當

時十八歳で、父母の鍾愛は云ふべくもない。源氏宮は故先帝（堀河大臣の父）の晩年に生れたが、三歳の時院も母宮も崩れさせ給うたので、狭衣の母が引きとつて、狭衣に對すると同じ心に育てて來た。十四五歳で容顔竝ぶ者がないほど美しいので、狭衣はいつかこれを戀した。然るに東宮も亦ゆかしく思つて居られるので、狭衣の惱みの種となつた。五月雨の頃、内裏で管絃の御遊があつた。狭衣が笛を吹くと天稚御子が天降つて、狭衣を天上に誘はうとする。帝は驚かれ、袖を控へてお留めになる。帝は女二宮を狭衣に與へる意を仄めかされる。暑い夏の日の事、狭衣は遂に源氏宮に戀を打明ける。併し宮はただ恐しがるばかりであつた。或る日、狭衣は路上で女車に出會つた。その車には仁和寺の威儀師と飛鳥井姫君とが乘つてゐた。威儀師を追拂つて狭衣は姫を家まで送る。その後も屢々姫の所へ通ふが、檢非違使別當の子とのみで、狭衣は本名を告げない。今まで經濟上の保護を與へてゐた威儀師が來なくなつてから、姫の乳母は生活に窮して東國へ下るといふ。狭衣は益々愛しはするが、名さへ明かさぬ人を姫は便りにすることも出來ぬ。さりとて姫は事情を狭衣に語ることも出來ない。〔卷一之下〕洞院の上は子が無いので、堀河大臣の嵐といふ今姫君を養ふ事になつた。狭衣の乳母は大貳の妻で、その間に出來た式部大輔道成は、前から姫を戀してゐた。併し姫の乳母は威儀師から保護を受けてゐる關係上それを許さなかつた。が今は威儀師との關係は絶えたし、檢非違使別當の子と名告るやさ男（狭衣）は氣に食はぬし、結局道成の望に任せようと考へた。狭衣は姫が懷姙した夢を見て心配するが、物忌で外出が出來ない。乳母は東國行を止め、姫を欺いて、道成の筑紫行の舟に載せる。驚きと恐れに泣く姫を、道成は且つ慰め且つ口説くが、姫は泣くばかりである。道成は狭衣から貰つた扇を姫に見せる。見れば忘れもせぬその人の手で歌が書いてある。舟が蟲明の瀬戸を通る時、姫はその扇に今はの歌を書いて入水する。狭衣は夢を見た翌朝、文をやるが姫はゐない。〔卷二之上〕帝は堀河大臣に、女二宮を狭衣に與へたいと云はれる。狭衣はこれを喜ばなかつたが、或る日の事、彼は女二宮と通じて了ふ。母宮は、夏の或る日、眼女の隙から見えるこの人の娘ならば、話に聞いた中將の妹も定めて美しからうと思つた。その後中將に妹を頼んだ。中將は進んでゐたが、母は亡夫の遺言もあり、東宮に上らうと思つてゐた。そして東宮との交通も始まつてゐた。〔卷四之中〕その内に中將の母は病氣になり、出家して龜山の麓に籠つた。狭衣は見舞のため訪れて、中將の妹を見ると、源氏宮に非常によく似てゐたので、何故もつと早く懇望しなかつたのだらうと思つた。母宮は又狭衣の立派な姿を見、何故今までに娘を上げる決心をしなかつたのだらうと思つた。そしてその翌日母宮は



古寫本「狭衣物語」（高野辰之氏藏）

女二宮の黑ずんだ乳房を見て、憂への餘り病氣になつた。そして母宮は四十五六であつた自分が姙娠したやうに云ひなした。かくて女二宮は狭衣に生寫しの若宮を産む。〔卷二之下〕女二宮の出産後間もなく、母宮は突然薨去になつた。女二宮は得道する。或る雪の夜、狭衣は女二宮を訪れると、宮は狭衣の手に衣を殘して逃げる。この頃道成が上京して、筑紫へ下る時伴れて行つた女の入水した事を語り、狭衣から貰つた扇に書添へた女の歌を見せた。それは紛れもない飛鳥井姫君の手蹟であつた。帝はこの頃御病氣のため御讓位があり、入道して嵯峨院に入られる。東宮御即位があつて、源氏宮は女御代から引續いて入内といふ噂である。この頃嵯峨院の御兄一條院が急にお崩れになつた。源氏宮は一夜ならず恐ろしい夢を見る。堀河大臣にも賀茂の神より「神代よりしめ引きそめし榊葉を我より外に誰か折るべき」といふ夢の託宣があつたりしたので、入内は中止になり、源氏宮は齋院になる事になつた。狭衣は源氏宮を訪れては心の中を打明けるが、宮は氣味惡く思ひ、早く齋院へ行きたいと願ふばかりであつた。かくして總ての女を失つた狭衣は、その煩悶を慰めようと、高野・粉川詣でを思ひ立つ。十一月も半、み山颪の吹き荒ぶ中で、狭衣が法華經を誦すると、普賢の尊體があり〳〵と現はれた。この時、飛鳥井姫君の兄に當る隻眼の僧に遇ひ、その僧から、姫は入水したが助けられて尼になつてゐることを聞く。〔卷三之上〕洞院の上は今姫君を入内させようとするが、堀河大臣は贊成しない。狭衣は飛鳥井姫君が亡くなつたことを聞き、忘れがたみに會ひたさに帝祭へ行くと、其處には、例の隻眼の僧もゐて、忘れがたみは今一品宮にゐるとの事だつた。洞院の上の兄宰相中將は、入内の前々日、今姫君と契つてしまつた。興奮した母代が尼になれと叫んだのをその儘に姫は髮を切つて了つた。〔卷三之中〕狭衣はかの忘れがたみに會ひたさに、内裏なる一品宮のあたりを覗つてゐると、かねてから一品宮を戀してゐる權大納言に見つかつた。そして權大納言は「狭衣が一品宮へ通つた」と言ひ觸らした。これを聞いた堀河大臣は、狭衣が今に妻を定めない眞因は、此處に在つたと速斷して願ひ出たので、帝も女院も心進まれなかつたが、終に宮は降嫁された。年たけた一品宮と若く美しい狭衣との結婚生活は勿論うまく行かなかつた。或る日、狭衣は亡き面影をその儘の忘れがたみを見た。狭衣が一品宮へ通つたのは全く忘れがたみに會ふためであつた事も、終に宮に知られてしまつた。〔卷三之下〕嵯峨院で法華八講のあつた時、狭衣は行ひすましてゐる女二宮の側へ忍び寄つて悔いたり泣いたりした。宮も泣いたが動じなかつた。この頃狭衣は愈々出家の志を決して竹生島詣と稱して家を出ようとした。その前日、狭衣は齋院へ行つた。狭衣の母も來てゐて、「この頃は連夜賀茂明神の夢を見る」と云つてゐた。狭衣が齋院の前に在つて琴を奏でると、風が烈しく吹き、神殿鳴動して異香が薫じた。〔卷四之上〕「狭衣が出家しようとしてゐるから疾く止めよ。昨日の琴の音にめでてかく知らせるのである」と緋の裝束嚴めしい人が來て告げると見て、堀河大臣の夢は覺めた。明神の託宣であつたかと驚いて狭衣の出發を未然に止めた。或る日、狭衣は故式部卿宮の前を通ると琵琶の音がしたので、誘はれて中に入ると女

が琴を讀んでゐる。宰相中將の母であらう。

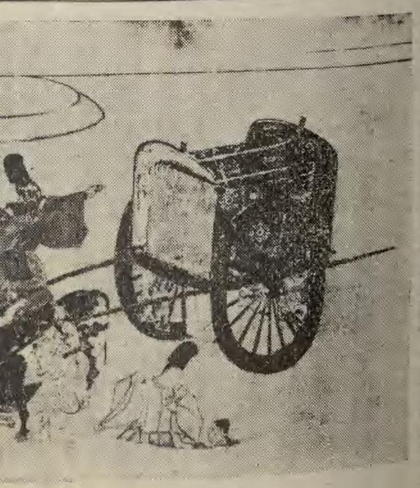
問もなく若宮を産んだ。嵯峨院は御不例で帝（狭衣）は見舞に行かれた。その節、女二宮にもお會ひなされて、例の盡きせぬ物思ひを新たにされた。これは前の世の契であらうか。御前には夕露も重げに秋草が咲き亂れてゐた。

【構想】狭衣大將の戀愛生活を中心とする長篇で、平安後期の諸作中の雄篇である。人物、事件の上に於て「源氏物語」から多大の影響を受けてゐる。即ち狭衣大將は閲歴の上では光源氏に、人間としては薫大將に似てゐる。飛鳥井姫君は、夕顔と浮舟とを一つにしたやうな女であり、狭衣と女二宮との關係は、柏木と女三宮とのそれに似てゐる。而して狭衣の

草子に「狭衣中將物語」（寫一卷、内閣文庫藏）「さごろも」（別項）、草雙紙に「田舍繊紬狭衣」（四編、緑亭川柳作、一陽齋豐國畫。嘉永三年より同五年にかけての刊行）がある。

【註釋書】狭衣系圖（寫）三條西實隆（阿波文庫藏）○狭衣下紐　里村紹巴（承應三年刊）○狭衣文談（寫）著者未詳（靜嘉堂文庫藏）○狭衣物語抄（寫）猪苗代兼壽（帝國圖書館藏）○狭衣物語入紐（寫）河村秀根（名古屋市立圖書館藏）○清水濱臣書入本（無窮會・大阪府立圖書館・帝國圖書館等藏）

【參考】狭衣の作者野々口精一（國學院雜誌一五ノ九）○狭衣作者考櫻井秀（同一五ノ一〇）○狭衣物語解題尾上八郎（日本文學大系五）○全譯王朝



狭衣

後堀河院が狭衣の繪八卷を作製された由が見え、「明月記」にもこれに關聯すると思はるゝ

お經を讀んでゐる。宰相中將の母であらう。この人の娘ならば、話に聞いた中將の妹も定めて美しからうと思つた。その後中將に媒を頼んだ。中將は進んでゐたが、母は亡夫の遺言もあり、東宮に上らうと思つてゐた。そして東宮との交通も始まつてゐた。〔卷四之中〕その內に中將の母は病氣になり、出家して龜山の麓に籠つた。狹衣は見舞のため訪れて、中將の妹を見ると、源氏宮に非常によく似てゐたので、何故もつと早く懇望しなかつたのだらうと思つた。母宮は又狹衣の立派な姿を見、何故今までに娘を上げる決心をしなかつたのだらうと思つた。そしてその翌日母宮は亡くなつてしまつた。その後狹衣は本邸に歸つた中將の妹を訪ねてその夜は其處に泊り、翌朝中將の妹をつれて歸つた。堀河大臣も母宮も喜んだ。これが絆になつて狹衣はいつ迄もこの世に留るであらうと思つた。併しこれ以來一品宮とは益々疎くなつた。中將の妹は不思議なほど齋院に似てゐる。狹衣はそれが嬉しかつたが、又時には齋院を思ひ出して却つて惱む事もあつた。〔卷四之下〕都には疫病が流行する。帝は不思議な夢を度々御覽になり、御心地もおすぐれにならない。その中に、「狹衣に位を讓らば、御命も久しからう。若宮は居られるが、父を措いて子が天子になるといふ法はあるまい」といふ天照大神のお諭しがあつた。帝も大殿も、「早く狹衣に御讓位がなくば惡からう」といふ夢を度々見られた。事は決つて、この世の榮達を望まず、寧ろ出家の本意を果したかつた狹衣は、意外にも天位に登つた。父堀河大臣は太上天皇になつて堀河院と稱せられ、母宮は皇太后宮と呼ばれた。宰相中將の妹は入內して藤壺にゐる。そして間もなく若宮を產んだ。嵯峨院は御不例で帝（狹衣）は見舞に行かれた。その節、女二宮にもお會ひなされて、例の盡きせぬ物思ひを新たにされた。これは前の世の契であらうか。御前には夕露も重げに秋草が咲き亂れてゐた。

【構想】狹衣大將の戀愛生活を中心とする長篇で、平安後期の諸作中の雄篇である。人物、事件の上に於て「源氏物語」から多大の影響を受けてゐる。卽ち狹衣大將は閱歷の上では光源氏に、人間としては薫大將に似てゐる。飛鳥井姫君は、夕顏と浮舟とを一つにしたやうな女であり、狹衣と女二宮との關係は、柏木と女三宮とのそれに似てゐる。而して狹衣の源氏宮に對する關係は、光源氏の槿齋院に對する、薫大將の大姫君に對する關係に似て居り、心情に於ては、光源氏の藤壺に對する關係に似てゐる。これ等を巧に配合し更にその上に變化と波瀾とを與へて、緊密な構想を作り出してゐる。又餘りに波瀾を與へ、奇を好んだ結果、超自然な事件が度々現はれ、一面には官能的描寫を恣にすることになつた。今この物語の骨子、狹衣大將の戀愛生活を大別すると、卷一・二を戀愛生活に對する思慕・追求の時代、卷三・四を戀愛の絕望に終つた後の追憶・煩悶の時代と見ることが出來る。【影響】「苔の衣」「小夜衣」（各別項）の構想その他に、この物語の影響を受けたと思はれる點がある。「宴曲抄」（別項）に、この物語から題材を採つた「狹衣袖」と「狹衣妻」の二篇がある。前者はこの物語の全篇から、歌や辭句を引用してあり、後者は飛鳥井姫君とその腹の姫君との事を以て一篇をなしてゐる。三條西實隆の作に謠曲「狹衣」がある。女二宮をシテに、大臣をワキにしてあり、番外百番の中にある。お伽草子に「狹衣中將物語」（寫一帙、內閣文庫藏）「さごろも」（別項）、草雙紙に「田舍織絲狹衣」（四編、綠亭川柳作、一陽齋豐國畫。嘉永三年より同五年にかけての刊行）がある。

【註釋書】狹衣系圖（寫）三條西實隆（阿波文庫藏）○狹衣下紐 里村紹巴（承應三年刊）○狹衣文談（寫）著者未詳（靜嘉堂文庫藏）○狹衣物語抄（寫）猪苗代兼壽（帝國圖書館藏）○狹衣物語入紐（寫）河村秀根（名古屋市立圖書館藏）○淸水濱臣書入本（無窮會・大阪府立圖書館・帝國圖書館等藏）

【參考】狹衣の作者 野々口精一（國學院雜誌一五ノ九）○狹衣作者考 櫻井秀（同一五ノ一〇）○狹衣物語解題 尾上八郎（日本文學大系五）○全譯王朝日本文學叢書○狹衣物語作者の表象 齋藤淸衞（國語敎育一三ノ一一）○上代日本文學の研究（第二編）久松潛一○狹衣物語 入江相政（岩波講座日本文學）〔入江〕

狹衣物語繪卷（さごろものがたりゑまき）

【解說】殘缺一卷。幕末まで江戶幕府の大奧にあつたことが知られてゐるが、明治元年彰義隊の兵火のため上野山內で卷物の下部を燒損し、その後詞書を逸して、繪も分散して了ひ、今は森川・岸・原・谷森・神田の諸氏及び帝室博物館の六所に各々一段づつ分藏されてゐる。流布本で云へば、その卷一の冒頭から始まり、狹衣が飛鳥井姫を救つて堀河の宿で契を結ぶ段までである。詞伏見院宸翰、繪飛驒守光秀筆といふ所傳の程は確かでないが、その畫致から見れば、製作年代はまづその前後と見るべきであらう。源氏物語繪卷（別項）以來のつくり繪の手法を襲うて、畫格も卑くなく、この種の系統の遺作中でも屈指のものである。もと幾卷のものか詳かでないが、相當卷數の多かつたものかも知れない。「著聞集」には天福元年後堀河院が狹衣の繪八卷を作製された由が見え、「明月記」にもこれに關聯すると思はるゝ記載がある。これを現存のものに該當せしむる程の根據はないが、この繪卷の考察上記憶

狹衣物語繪卷（谷森氏藏）

せらるべき記載である。〔田中（一）〕

笹色猪口暦手（ささいろのちよくはこよみで）　草雙紙合卷　六册合二册　前篇後篇に分つ【作者】柳亭種彦【角書】紅粉屋小萬　經師屋阿三【畫工】前篇、初代歌川豐國、後篇、二代目豐國（豐重）【刊行】文政九年西村板、但し前篇は七年十月、後篇は八年九月脫稿。【名稱】本題の笹色猪口は紅粉の緣でいひ、暦手は原據である「大經師昔暦」の緣でいつてゐる。【諸本】種彦短篇傑作集（續帝國文庫）に本文のみを收む。【題材】近松作「大經師昔暦」及び並木五瓶作「五大力戀緘」（各別項）による。

【梗概】（鎌倉由比濱芝居小屋の前）馴染藝子小萬をつれた勝間源五兵衞、父布太夫に邂逅する。父は拾つた紙入を落主である經師屋意春の手代藻兵衞に返すのを機として、源五兵衞、小萬の二人を藻兵衞のつれ扱ひにし、それとなくおのが苦衷を告げる。布太夫は盜難にかゝつた主家大内家の重寶定家の色紙詮議のため表面浪人となつて鎌倉に來り、軍書講談を稼業として梅柳軒と名乘るのも、鎌倉在番中小萬に溺れたので勘當したわが子に逢つて事の始終を告げ、早く寶を手に入れて主家に歸參させようとする親心故であつた。布太夫は又賊が遺した證據の扇を與へ、更に藻兵衞にも源五兵衞の身の上を賴む。その扇の筆蹟が小萬に執拗につき纏ふ遊客笹野三五兵衞隨伴の幇間醫者越庵のだと知れ、三五兵衞が賊だといふ手懸りを得る。（松葉谷の路傍）人形廻しの貂助娘おかや袖乞をしてゐる。浪人が來て黑頭巾と伊左衞門の人形を借りる。（草名屋の廣座敷）三五兵衞・小萬・意春の一座、小萬が三五兵衞に膝いたと邪推した源五兵衞人形をはじとかし、伊左衞門の人形に乞して面味をいふ。小萬、越庵が書いた三味線の胴の歌を楯に愛想づかしをする。（草名屋別室）意春が見染めた女を惡手代柘植右衞門が手びきして逢はせる。女はまだ主人に對面せぬ藻兵衞の女房お玉であつたが、藻兵衞は近頃の主人の遊蕩を意見しようとして、わざと柘植右衞門に乘じさせたのであつた。藻兵衞、お玉と共に諫言する。越庵は藻兵衞に祕藥を飲ませて假死狀態とし、小萬の着物を掛けたまゝ小萬を駕籠で送る分にして、川の中に投込ませようと謀る。（松葉谷の田圃途）源五兵衞から貰つた小袖を着て家に歸り行く貂助を、三五兵衞が源五兵衞と見違へて斬る。布太夫通りかゝつて介抱する。貂助娘の身の上を賴んで死ぬ。貂助はもと布太夫に仕へた足輕であつた。（田舍江川の邊）源五兵衞、小萬を殺さうとして駕籠を要し、附添ひの惡漢越庵等五人を殺し、ゆくりなく藻兵衞を助ける。その藻兵衞から小萬の心づかひを聞く。三五兵衞に身を任せる風情にしたのは、色紙を他に預けた一札を奪ふため、三味線の胴をつきつけたのは、越庵の筆蹟とあの扇の筆蹟と同じであるのを見せるためだとのこと。なほその一札によつて色紙が意春の手許にあることが知れる。（意春の家お三の座敷）意春、女房お三とお玉の話しをしてゐるところへ、おかやが葛籠を持つて奉公の目見えに來る。（同奥座敷）三五兵衞が意春に色紙を返せといふ、一度は越庵の祕藥で意識を失つた意春も今は正氣に復した事とて、それに應じない。一札を出すか金を出すかせねばと聞き入れない。そこへ又小萬が三五兵衞に愛想づかしをする。（もとの座敷）柘植右衞門、お三に意春がお玉に心あることを告げる。お三は夫に意見するためにお玉と着物を着かへて女部屋に寢る。柘植右衞門は、また藻兵衞にはお玉が女部屋に寢てゐると告げる。藻兵衞を姦通に墮して放逐させようとする腹である。（同女部屋）柘植右衞門間夫呼ばはりをしながら、屏風を開ける。中に源五兵衞と藻兵衞との對坐、源五兵衞は葛籠の中に隱れてゐたが、柘植右衞門に何かの策あるを察し、お三を脇へ逃したのである。意春は以前お玉に惚れたのも、越庵の祕藥のためと告げ、また柘植右衞門が主家横領の意あることを詰つて放逐する。（同小庭）土藏を破つて色紙の箱を盜み出した三五兵衞を源五兵衞等とり圍んで、おかやに敵討をさせる。源五兵衞は色紙を主家に納めて歸參を許され、小萬を妻として家は榮える。

【構想】この作は意春・お三・藻兵衞・お玉關係の筋を「大經師昔暦」から、源五兵衞・三五兵衞・小萬の筋を「五大力戀緘」から得て、綯ひ交ぜにしたものである。作者はすでにその序文に於て「勝間歌の正本に綴り合せし昔暦、其中段のお三が浮名を除くが新手」とあるやうに、原作「昔暦」の骨子であるお三と藻兵衞の姦通を他に轉じさせたところに、得意の趣向があつた。努めて品よくと考へる作者の意圖は、それ以外に於て、例へば意春のお玉に對する態度も越庵の祕藥がさせる業とし、又源五兵衞の殺人も一面藻兵衞に對して活人となるといふやうにしたのである。一篇の中に着物から起る間違ひが二つある。共に趣向として重要な條件をなしてゐる。貂助が三五兵衞に殺されたのは貂助が源五兵衞の着物を着てゐた故であり、源五兵衞が藻兵衞を殺さうとしたのも、小萬の着物を上に掛けてゐたので見誤つたからであつた。その間違ひから一方には敵討の事件を拵へさせ、一方には寶詮議の落着に運ばせるのである。作者はこれを「昔暦」の中、お三とお玉が着物を着かへ合つた結果、お三と藻兵衞の姦通を構成する趣向から學んだのであらう。お三とお玉が着物を着かへる筋は、この作にもその儘用ひられてゐる。けれどお三をも姦通に墮さないとする新しい作意では、その事はさまで重い條件をなさない。そこでその趣向を別樣に飜して、依然として二つの重い位置を趣向の上に占めさせたのであらう。原作に於ける小萬の源五兵衞に對する愛想づかしは、三味線の胴に書いてある五大力に加筆した三五大切といふ文字になつてゐるのを、これでは「うかれ女の浮れてありく旅ゆかたすみつき難きものにぞありける」の、「夫木集」の古歌になつてゐるところに種彦の好みが見られる。この前篇の繪は初代豐國の絶筆として記憶すべきである。〔山口〕

笹川臨風（ささかはりんぷう）【本名】種郎【閲歴】明治三年八月、東京神田末廣町に生る。父は茂潔、幕臣である。父が官吏として諸方へ轉任する毎に彼は伴はれた。第二高等中學を經て、明治二十六年東京帝大國史科に入る。在學中、雜誌「東亞說林」「日本人」「太陽」等に執筆し、その寄宿舍に入つてから樗牛・嘲風・芥舟等と親交があつた。二十九年、帝大卒業、翌年處女出版として「支那小說戲曲小史」を公けにし、三十一年、「日本地氣論」及び「支那文學史」を公刊した。一面俳句を好み、大野洒竹等と筑波會（別項）を起したのはその頃のことである。次いで田岡嶺雲等と雜誌「江湖文學」（別項）に關係し、且つ「防長回天史」の編纂に從事した。當時「支那文學大綱」の一部を讀高して、「社會」「文學」等を執筆し、且つ「帝國文學」の編輯に與つた。三十四年、栃木縣宇都宮中學校長として赴任した。在任六年餘、四十年辭して上京、三省堂の「日本百科大辭典」編纂に從事し、傍ら諸學校に教鞭を執つた。四十三年、萬朝報に「日蓮上人」「山中鹿之助」等の歷史小說を連載し、一面美術批評に精進した。次いで四十三年、南北朝正閏論が起つた時、南朝正統を主張し、「南朝五十七年史」「南朝正統論」を刊行して頗る力むるところがあつた。その後、美術院・明治大學等に關係したが、主として著述に力を注ぎ、大正五年、姉崎嘲風等と雜誌「人文」を編輯發刊した。大正十三年、「東山時代の美術」につ

ゐて雜誌「心の花」（別項）を刊行し、會員の指導に從つた。同三十七年一月、南方支那の旅より歸るや、豫てチャンバレン氏の言に指示を得て着手した和歌の歷史的研究を完成せんと志す。同年七月東京帝國大學文科大學講師を囑託せられ、爾來昭和六年三月まで二十八年間、和歌史・歌學史・歌謠史・國文學書史・萬葉集等を講じた。明治四十四年二月文學博士の學位を受け、大正六年七月帝國學士院から恩賜賞を授けられた。同年十一月御歌所寄人を命ぜられ、明治天皇御集及び昭憲皇太后御集の編纂に從つたが、御集の完成と共に大正十一年十四帖、萬葉集目錄一卷、六百番陳狀完本一册、古今問答二卷、定家筆本更級日記一帖、仙覺律師奏狀一卷、定家所傳本金槐和歌集一帖等を發見し、成尋阿闍梨母日記一帖、類聚古集十六帖、梁塵祕抄二册、西行上人歌集一帖、信生法師集一帖、春日本萬葉集殘簡、飛鳥井雅有日記一册、西本願寺舊藏本萬葉集二十册を紹介し、日本歌學全書、續日本歌學全書、仙覺全集、契沖全集の刊行に携はつた。また萬葉研究の副事業として古典の刊行を企て、「扶桑珠寶」の名のもとに、南都祕笈、萬葉祕寶、聚寶十種の三十部を印行した。歌人としては竹柏會を率ゐ、「心の花」を刊行し、歌を詠じた。その頃古き物語を讀み、雜誌をぬき出して解釋を加へ、「雅言俗解」一卷を著した。後補正して「雅言小解」と改題出版。二十歲の秋、山田なる足代弘訓の門に入る。その寬居塾にあること四年、專ら歌學を修め、塾頭となり、師に代つて人を敎へた。二十九歲の時弘訓歿し、翌年江戸に出でて、井上文雄に歌を學び、黑川春村・間宮永好等と交はる。後、京に上つて河本延之・渡忠秋を友とし、大阪に至つて萩原廣道・中島廣足と交はる。石藥師を支配せる代官多羅尾純門の師となり、津藩主藤堂高猷に國學を講じ、齋藤拙堂と親しくした。明治十年松坂社中の請により同地

し、且つ「帝國文學」の編輯に與つた。三十四年、栃木縣宇都宮中學校長として赴任した。在任六年餘、四十年辭して上京、三省堂の「日本百科大辭典」編纂に從事し、傍ら諸學校に教鞭を執つた。四十三年、萬朝報に「日蓮上人」「山中鹿之助」等の歴史小說を連載し、一面美術批評に精進した。次いで四十三年、南北朝正閏論が起つた時、南朝正統を主張し、「南朝五十七年史」「南朝正統論」を刊行して頗る力むるところがあつた。その後、美術院・明治大學等に關係したが、主として著述に力を注ぎ、大正五年、姉崎嘲風等と雜誌「人文」を編輯發刊した。大正十三年、「東山時代の美術」についての論文により、文學博士の學位を授けられた。現在は京北中學校長たる傍ら、東洋大學・駒澤大學に教鞭を執つてゐる。【著書】以上の外に、日本繪畫史○自然と文化との諧調○江戸情調○現代美術○男性美○江戸と上方○江戸紫○日本帝國史等がある。小說には、舞殿○柳屋お藤などがある。　〔高須〕

佐佐木信綱（ささきのぶつな）　歌人・歌學者

【號】竹柏園【閲歴】明治五年六月三日伊勢鈴鹿郡石薬師村に生る。父弘綱（別項）、母光子。六歳の春父母と京都に遊び、黒谷で讀經を聞いて始めて歌を詠む。その冬、父が鈴屋社の監督を請はれて居を移したため松坂に住し、爾來、父の旅に伴はれて諸國に遊ぶ。十一歳の春東京に移り住む。父の家學を承けた外、高崎正風に和歌を學ぶ。明治十七年東京大學文學部古典科に入學、同二十一年卒業。專ら民間にあつて和歌を普及せんことを志し、「歌の栞」を著はし、父と共に日本歌學全書（別項）を編し、又二十七八年戰役後、歌壇に革新の機運興るや、落合直文・與謝野鐵幹・正岡子規等と新風を唱道した。後、竹柏會（別項）を設けて雜誌「心の花」（別項）を刊行し、會員の指導に從つた。同三十七年一月、南方支那の旅より歸るや、豫てチャンバレン氏の言に指示を得て着手した和歌の歴史的研究を完成せんと志す。同年七月東京帝國大學文科大學講師を囑託せられ、爾來昭和六年三月まで二十八年間、和歌史・歌學史・歌謠史・國文學書史・萬葉集等を講じた。明治四十四年二月文學博士の學位を受け、大正六年七月帝國學士院から恩賜賞を授けられた。同年十一月御歌所寄人を命ぜられ、明治天皇御集及び昭憲皇太后御集の編纂に從つたが、御集の完成と共に大正十一年寄人を辭した。同十三年宮内省御物管理委員會臨時委員を囑託せられて、祕府の典籍精査のことに從つた。又明治四十五年文部省文藝委員會への建議が容れられて、橋本進吉・千田憲・武田祐吉・久松潛一の諸氏と共に、「校本萬葉集」（別項）作成の事業に從事した。【著作】思草（別項）○新月○常磐木○豐旗雲（以上歌集）○日本歌學史○和歌史の研究（別項）○近世和歌史（別項）○歌學論叢○增訂萬葉集古寫本攷○增訂萬葉集選釋○萬葉漫筆○新訓萬葉集○白文萬葉集○分類萬葉集○國文學の文獻學的研究○日本歌選上古之卷○定家歌集○戸田茂睡論○賀茂眞淵と本居宣長○古今集選釋○新古今集選釋○增訂梁塵祕抄【業績】專門の研究としては、和歌及び歌學の歴史的研究と萬葉學の建設とを目的としてゐる。又國文學の文獻學的研究によつて未知の資料及び湮滅した古典籍を發見して紹介し、且つその刊行に携はつたものが多い。眞本歌經標式一册、琴歌譜一卷、承德本古謠集一卷、天治本萬葉集一卷、祕府本萬葉集抄一册、元暦校本萬葉集十四帖、萬葉集目錄一卷、六百番陳狀完本一册、古今問答二卷、定家筆本更級日記一帖、仙覺律師奏狀一卷、定家所傳本金槐和歌集一帖等を發見し、成尋阿闍梨母日記一帖、類聚古集十六帖、梁塵祕抄二册、西行上人歌集一帖、信生法師集一帖、春日本萬葉集殘簡、飛鳥井雅有日記一册、西本願寺舊藏本萬葉集二十册を紹介し、日本歌學全書、續日本歌學全書、仙覺全集、契沖全集の刊行に携はつた。また萬葉研究の副事業として古典の刊行を企て、「扶桑珠寶」の名のもとに、南都祕笈、萬葉祕寶、聚寶十種の三十部を印行した。歌人としては竹柏會を率ゐ、「心の花」を刊行し、和歌の革新と趣味教育としての和歌の普及に力めてゐる。且つ童謠・唱歌・軍歌等にも心を寄せて、その作が少くない。なほ夙に民間にあつて和歌の普及に力めて來た爲め、その門に出づるところの歌人が尠くない。その主なものを擧げれば、石榑千亦・川田順・木下利玄・齋藤瀏・下村宏・橋糸重・大塚楠緒子・片山廣子・柳原白蓮・丸條武子等である。

【參考】佐佐木信綱集（現代短歌全集）附錄年譜　〔久松〕

佐佐木弘綱（ささきひろつな）　國學者

【名】初め時綱。後、師の足代弘訓より一字を與へられて弘綱と改めた。通稱は習之助・重藏。【號】竹柏園【生歿】文政十一年七月十六日伊勢國鈴鹿郡石薬師村に生れ、明治二十四年六月二十五日、東京神田小川町に歿す。享年六十四。【墓所】東京谷中天王寺墓地【閲歴】佐佐木三郎盛綱の裔で、代々備前の兒島、又上野の磯部を領した。天保十二年、十四歳の正月名古屋に行き、叔父庸綱の家の歌會に始めて歌を詠む。十七歳の冬より春にかけて、千首の歌を詠した。その頃古き物語を讀み、雜語をぬき出して解釋を加へ、「雅言俗解」一卷を著した。後補正して「雅言小解」と改題出版。二十歳の秋、山田なる足代弘訓の門に入る。その寛居塾にあること四年、專ら歌學を修め、塾頭となり、師に代つて人を敎へた。二十九歳の時弘訓歿し、翌年江戸に出でて、井上文雄に歌を學び、黑川春村・間宮永好等と交はる。後、京に上つて河本延之・渡忠秋を友とし、大阪に至つて萩原廣道・中島廣足と交はる。石藥師を支配せる代官多羅尾純門の師となり、津藩主藤堂高猷に國學を講じ、齋藤拙堂と親しくした。明治十年松坂社中の請により同地に居を移し、鈴屋社の監督となる。同十五年の春、長子信綱（別項）を伴つて東京に上る。東京大學文學部古典科の講師となり、大學編輯所に入り、又東京師範學校講師をも兼ねた。明治十八年冬、病を得て退き、晩年は專ら著述を事とした。

【著書】竹取物語俚言解二卷（安政四年）○詠歌自在六卷○長歌改良論一卷○竹柏園家集一卷○新題梯一卷○活語全圖一鋪○土佐日記俚言解二卷○伊勢物語俚言解二卷○標註枕草紙五卷○歌詞遠鏡三卷○歌詞遠鏡附錄一卷○雅言小解一卷○歌文要語解一卷○假字遣枕詞辭典一卷○詠歌辭典一卷○位山日記一卷○加越日記一卷【撰集】千船集（萬延元年）○明治開化集二卷○千代田歌集二卷（別項）○寶田集二卷○伊勢名所歌集二卷○月瀨梅風集一卷○位山集一卷○古今今樣集一卷【編纂書】日本歌學全書十二卷○八衢大略一卷○足代翁歌集一卷【影響】日本歌學全書・詠歌自在・千代田歌集等は普く世に行はれて、明治の歌道に齎した功績は少くなかつた。家學は長子信綱に傳へ

たが、門人の主なるものを擧ぐれば、坂倉有周・阿蘇惟敦・近藤幸殖・館忠資・原田嘉朝・相澤求・根岸武香・西升子等がある。

【參考】竹柏園家集序 東久世通禧・福羽美靜等（續日本歌學全書十二編）○國學者傳記集成 ○鈴山年譜 印東昌綱 〔佐佐木〕

小波お伽全集 さざなみおとぎぜんしふ 童話集 十二卷【著者】巖谷小波【刊行】昭和三年六月より千里閣刊【內容】怪奇篇・少女篇・口演篇・歌謠篇・長篇・短篇・對話篇・芝居篇・史談篇・寓話篇・幼年篇・笑話篇の十二卷を以て第一期刊行としてある。明治二十四年「黃金丸」を出してから約四十年に亙る小波の全著作は數百卷に及んだが、本全集はその精髓をすぐつたもので、明治文壇に初めて兒童文學の分野を開拓し、その確立と伸張とに一代を傾倒した著者の全面容を窺ふことができよう。その作風は、古典童話の樣式と江戶時代の傳奇物語の形態による所謂お伽噺風のものに端を發してゐるが、夙に諸外國の童話を普く涉獵して飜譯紹介にも努めたところから自然その長が取入れられ、敎訓と趣味とが融合して、兒童の親しみ易い所に獨自の境地があり、渾然として一派の風をなしてゐる。なほ本書は著者年來の主張に基き、悉く發音通りの假名遣を使用してゐるのは注目すべきである。（童話・童話劇參照）

【參考】小波先生のお伽噺 山內秋生（童話研究昭和四ノ一）

泊洎舍集 さざなみのやしふ 歌集 八卷 四册 〔山內〕【作者】淸水濱臣【成立】文政十二年【諸本】續日本歌學全書の近世名家家集下卷には拔抄が收めてあり、近代諸家集（校註國歌大系）には全部入つてゐる。【梗概】著者の子光房が編したもの。六卷本もある。文政十二年九月三日容安軒主人（關宿侯）、同月源政醇（林田侯）の序文、淸水光房の同月の跋文がある。それによれば、短歌集八卷の次に、長歌・文詞・消息・紀行等を集める豫定であつたらしい。四季・戀・雜等に分類してある。歌風は優雅で、王朝時代の事物を取り入れたりするのが特色である。村田春海の敎を受けたので、「古今」に「新古今」を取り入れた江戶派の歌風を受けついでゐる。左に作例を擧げる。

かたゝくに春の霞の衣配り色もよしある梅がさねかな

みそぎせしあと川柳一葉散り二葉流れて秋風ぞ吹く

【附記】濱臣には本書の外に、「泊洎雜題百詠」があり、又、「淸水濱臣詠草」は、自詠に村田春海の評を加へたものである。

【參考】和歌史の研究 佐佐木信綱 〔佐佐木〕

泊洎筆話 さざなみひつわ 隨筆 一卷【著者】淸水濱臣【名稱】著者の堂號を泊洎舍といつた所から名づけた書名である。【刊行】文化十年【解說】歌人柳瀨美仲・鴛氷申也の作歌、荷田在滿が國歌八論の評、羽倉氏三代の事、賀茂眞淵及び門下名流の事、伊呂波歌、五十韻反切論の弊、山岡俊明の學問、橘枝直・同千蔭父子の逸話、村田春海と荒木田久老の運筆遲速、三島景雄の事、富士山の歌、俳諧歌、契沖・眞淵・宣長・千蔭の評等國文學に關する事項數十を擧げてゐる。奧に文化五年夏五月稿とある。 〔和田〕

笹丸 ささまる 「歌澤」を見よ。

さざめごと 連歌書 二卷【著者】心敬【名義】連歌道に關する私語の義。蓋し謙遜してつけた名であらう。【成立】自序によれば、著者が寬正二年紀伊國田井庄八王子社に參籠中、その地方の連士のために筆を執つたものである。【諸本】群書類從連歌部所收【解說】上卷には連歌の沿革、古代と近代との句風の相違、學書、發句の體、歌道と連歌道との關係、批評褒貶を行ふ可否、創作に當り沈思するの必要、姿及び詞の幽玄、凡俗の句、等類、いりほが、未來記、無心所着、五義・六義・十體につき、和歌と對照して細かに說いてある。下卷には親疎句、人々の庶幾すべき幽玄・有心の體、先達を擧ぶべきこと、境に入りたる好士の句の耳遠き所以、修行は中絕してはならないこと、世に時めく好士を詮とすべきかその身の譽を旨とすべきか、當時の會の傾向の可否、連歌合、連歌の點、法樂の會、相資相反の道、その他歌道・佛道修行等に就き、丁寧に說明してある。兩卷とも各種の問を設け、これに解答した形式は、「筑波問答」（別項）に則つたものである。この書、一面に於ては連歌を和歌と同じものに扱ひ、また一面に於ては、「歌連歌も佛の法・報・應の三身、空・假・中の三諦の等分侍るべくや」といひ、その他、歌・連歌の種々相を一々佛法にあてはめてある。 〔福井〕

ささやき竹草子 ささやきだけのさうし 御伽草子 一卷【作者】未詳。【名稱】神託と詐稱するに用ひた奇具の名に因る。【成立】室町期【諸本】古板本は寬文年間板。奈良繪本としても傳存。【題材】地名說明說話。鞍馬僧正ヶ谷の由來傳說。義經に關係深き鞍馬天狗の緣由を說いたやうなもの。但し義經に關係は無い。墮落僧の失策、佛罰と申子の出世との對照であるが、ささやき竹の奇想と長觀の中の作の喜劇が面白い。【梗概】六十二代の天皇の御代、大旱の患に內裏でをんかの舞が催されたが、天人も感動し降下して笙を吹いた。その頃二條萬里小路に住む左衞門尉に鞍馬毘沙門天の申子の美しい娘があつた。關白に想はれ、素性を知らぬ殿下は安倍なかのりの卜によつて毘沙門に祈願を籠められたが、その鞍馬の僧正西光坊も亦かの娘を戀ひ、ささやき竹といふものを以て左衞門尉夫婦を毘沙門の託宣と詐り娘を鞍馬へ獻ぜしめた。然るに護送の使が途で酒に醉臥して居る間に通りかゝつた關白は長櫃を開いて女を手に入れ、代りに入れて置いた野飼の牛一匹が鞍馬へ屆けられて一山を騷がし、西光坊は天狗に攫まれて死し、その靈がまた天狗となつた。僧正ヶ谷の名はこれに由來する。女は關白に愛せられて榮えた。 〔島津〕

さざれ石 さざれいし 御伽草子（二十三部の一）一卷【作者】未詳【成立】室町期か【諸本】古板本は御伽草子本。今泉畠山校御伽草子後編・有朋堂文庫本御伽草紙・日本文學大系第十九卷等に收めてある。【解說】佛敎物、靈驗談。君が代の和歌の句を取つて藥師信仰に結び付け、その功德を禮讚したもの。成務天皇に三十八人の皇男女がおはしたが、末をさざれ石の宮と申した。美貌で御寵愛最も厚く、十四歲で攝政殿の北の政所となられたが、或る夕月の出る山の端を見て居られると、藥師の使者金毘羅大將が降下し、不老不死の藥の壺を捧げた。壺には、「君が代は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで」の一首が、あり〳〵と讀まれた。藥師の御詠と忝く、これから名もいはほのみやと申した。妙藥を嘗められてふら何の楽しみもなく永久の若さで、淸寧天皇の御代まで八百餘歲の長壽を保たれたが、或る夜、藥師眞言を念じて居られると、如來が出現して淨瑠璃世界に導き、その身を更へず成佛して稀代の例を殘された。 〔島津〕

茶山 さざん 漢詩人【姓名】菅晋帥。字は禮卿。通稱太仲、私諡して文恭といふ。【生歿】寬延元年二月二日備後神邊に生れ、文政十年（一八二七）八月十三日歿す。享年八十【閱歷】年十九の時京師に遊び、那波魯堂に從つて程朱學を受け、次いで中井竹山・西山拙齋・篠崎三島等と交り、歸つて鄕里に子弟を敎授した。三十九項、卷三に知行貫ッモリの事以下三十八項、卷四に水野義風兩乞和歌以下四十五項を收めてゐる。 〔和田〕

指合 さしあひ 連歌・俳諧【名義】指合とは物と物と指合ふ義、卽ち衝突する義で、去嫌と關連していふ語である。去嫌とは指合ふものを避け嫌ふ義で、指合ふ物に指合ふ物をどれだけ去り避けるかを云ふのである。【解說】連歌・俳諧の連句の式目（別項）中に於ける制禁の一で、元來連句に於ては、自然單調を嫌ひ變化を貴ぶ所から、句々に於ける詞と詞との指合を嫌ふやうになり、これを何句程避けるかも式目掟歌（別項）と云はれるものが作られ來つてゐて、それは主として、指合・去嫌の規定を詠んだもので記憶に便ならしめるものであつたのである。宗砌（別項）の式目掟歌などは、砌公嫌物（去嫌の物の義）と呼ばれてゐる。かくて連句を卷く場合、執筆（別項）は一々指合を繰つて連衆に注意する慣習にもなり來つてゐる。併し心敬の「さゞめごと」に、既に「大むねさしあひ嫌物は其筵によるべく哉」と云つてゐるやうに、その席の性質によつて寬嚴宜しく捌きもし、應其の「無言抄」に「貴人少人の句は面などかはりてさしあひなどすこしあか

繪の多くは、木版・石版・亞鉛版・寫眞銅版に複製する關係上（稀れに色彩畫もあるが）、黑一色の濃淡をもつて表現するを原則とするから、その描法も、暗示的・抽象的・寫實的とならねばならぬ。挿繪の畫風は、時代思潮に合致した描法が最も行はれてゐる。江戶時代に例證を求めるなら、國貞の「田舍源氏」の挿繪が、當時の德川の生活をモデルに選び、風俗調度も當時のまゝを表現した如き、北齋の「弓張月」挿繪も、小說の內容とは時代を異にして、文化頃の風俗を平氣で扱つてゐる等、挿繪の多くは、出版當時の風俗を描寫してゐる。

もなく永久の若さで、清寧天皇の御代まで八百餘歳の長壽を保たれたが、或る夜、藥師眞言を念じて居られると、如來が出現して淨瑠璃世界に導き、その身を更へず成佛して稀代の例を殘された。〔島津〕

茶山（さざん）　漢詩人【姓名】菅晋帥。字は禮卿。通稱太仲、私諡して文恭といふ。【生歿】寛延元年二月二日備後神邊に生れ、文政十年（一八二七）八月十三日歿す。享年八十【閲歴】年十九の時京師に遊び、那波魯堂に從つて程朱學を受け、次いで中井竹山・西山拙齋・篠崎三島等と交り、歸つて鄕里に子弟を敎授した。その塾黄葉山に對するを以て、黄葉夕陽村舍と號した。晩年門弟が益々加はつたので、藩に請うて鄕校となし名づけて廉塾といつた。一時賴山陽の師であつたことが有名である。【著作】茶山翁筆のすさび（別項）四卷○黄葉夕陽村舍詩（別項）十卷○室町誌○福山志料○遊藝日記○大和紀行日記。その他、和歌集・文稿等がある。【批評】その詩は韓（退之）・蘇（東坡）に出入し、精錬蒼老、よく人の寫し難きところを寫し縱横の才を發揮した。〔佐久〕

茶山翁筆のすさび（ささんをうふでのすさび）　隨筆　四卷【著者】菅晋帥【刊行】天保七年【諸本】安政三年丙辰三月御免、同四年孟春發兌の刊記があつて、安政丙辰重陽後藤機（松陰）の序文を附した本があるけれど、全く同版である。【解說】茶山の門人木村雅壽の所校。著者が多年見聞した雜事を輯錄したもので、天象・地理より風俗・習慣、さては奇蹟・異聞、史上人物の月旦、字義・語法、異變に處する心得、その他の訓誡等、主として婦幼にも解し易いことを目的としたものである。卷一に月蝕以下三十九項、卷二に道は一なりの條以下三十九項、卷三に知行貫ツモリの事以下三十八項、卷四に水野義風雨乞和歌以下四十五項を收めてゐる。〔和田〕

指合（さしあひ）　連歌・俳諧【名義】指合とは物と物と指合ふ義、即ち衝突する義で、去嫌（さりきらひ）と關連していふ語である。去嫌とは指合ふものを避け嫌ふ義で、指合ふ物に指合ふ物をどれだけ去り避けるかを云ふのである。【解說】連歌・俳諧の連句の式目（別項）中に於ける制禁の一で、元來連句に於ては、自然單調を嫌ひ變化を貴ぶ所から、句々に於ける詞と詞との指合を嫌ふやうになり、これを何句程避けるかを考へるやうになり、これに規定を附するに至つたものが、指合・去嫌である。故に指合と去嫌とは、實は二にして一のもので、指合ふ方を考へるのが指合、指合を避ける方を考へるのが去嫌である。支考は「さし合とはてにはなり。去嫌とは象物の事なり」（白馬奥儀解）の如く分けて考へるのであるが、これは支考一流の考へ方で、連歌以來の規定を見て來ると、こんな風に差別されてはゐない。即ち式目上の用語にもなつてゐる。同季・同字は、勿論指合ふのであるが、類似した詞や緣のある詞も指合の詞と考へるので、かく考へることが指合であり、これ等の詞と詞とを句と句とに續けて使はないとか、二句又は何句以上隔てて使ふとか（これを二句去・嫌打越・三句去、その他何句去と云ふ）、面折（めんぞり）（同折）・見渡し（懷紙參照）には使はないとか（これを嫌面又は面去、嫌折又は嫌同折、又は折去、嫌見渡しなど云ふ）云ふ方が去嫌である。されば良基の「連歌新式」（別項）以來の式目書は、主としてこの指合・去嫌を中心として規定し來つてゐるものと云へる。それ故連歌以來、俳諧に於ても式目掟歌（ぢやうと）（別項）と云はれるものが作られ來つてゐて、それは主として、指合・去嫌の規定を詠んだもので記憶に便ならしめるものであつたのである。宗砌（そうぜい）（別項）の式目掟歌などは、砌公嫌物（去嫌の物の義）と呼ばれてゐる。かくて連句を卷く場合、執筆（しふひつ）（別項）は一々指合を繰つて連衆に注意する慣習にもなり來つてゐる。併し心敬の「さゞめごと」に、既に「大むねさしあひ嫌物は其筵によるべく哉」と云つてゐるやうに、その席の性質によつて寛嚴宜しく捌きもし、應其（いうご）の「無言抄」に「貴人少人の句は面などかはりてさしあひなどすこしちかき事有とも書事あり」とあるやうに、貴人少人或は初心などに對しては寛に捌くといふやうな慣例にもなり來つてゐる。特に指合・去嫌の根本は、元來が機械的であるべきものではないから、芭蕉などは「さし合くりの上手といはれんよりは、誹諧に上手のかたあらまほし」（花實集）と云つてゐるのである。（式目・新式參照）

【參考】さゞめごと心敬○無言抄應其○新增犬筑波集松永貞德○末若葉寶井其角○花實集向井去來（柿晋問答）○十論爲辨抄各務支考○俳諧古今抄同○二十五箇條同（？）○白馬奥儀解同○俳諧獨稽古谷口樓川○澁よつ手鈴木道彦○俳諧提要五乳人鈞雪○連歌の史的研究前篇福井久藏

挿繪（さしゑ）　繪畫【解說】挿繪は文學書・科學書・宗敎書、その他の著作に、說明的・裝飾的、或は本文の一部を現實化して、如實に浮き出させる役目を果す特殊の美術である。併し現在挿繪と呼び慣らされてゐる美術の內容は、小說類の挿繪、その他主として純文學に類する著作に加へる繪畫を指してゐる。挿繪の多くは、木版・石版・亞鉛版・寫眞銅版に複製する關係上（稀れに色彩畫もあるが）、黑一色の濃淡をもつて表現するを原則とするから、その描法も、暗示的・抽象的・寫實的とならねばならぬ。挿繪の畫風は、時代思潮に合致した描法が最も行はれてゐる。江戸時代に例證を求めるなら、國貞の「田舍源氏」の挿繪が、當時の德川の生活をモデルに選び、風俗調度も當時のまゝを表現した如き、北齋の「弓張月」挿繪も、小說の內容とは時代を異にして、文化頃の風俗を平氣で扱つてゐる等、挿繪の多くは、出版當時の風俗を描寫してゐる。又、他の美術には全く缺けてゐる時間的表現を、挿繪に限つては許されてゐる。新聞小說の挿繪、黃表紙の挿繪、草雙紙合卷の挿繪、繪卷物なぞは、長い時間の推移、事件の進展をも描寫する。我が國の挿繪は、古い歷史と多くの名作を遺してゐる點で、他の國に例を求め得られない。

【沿革】〔發祥時代〕挿繪の源流と思はれるものは繪卷物（別項）である。繪卷物は挿繪とはいへないが、又一枚の純粹な繪畫でもない。文學的內容を繪畫の形式で表現したとも思はれる美術だが、挿繪美術の根元は、この繪卷の形式から出發すると解釋してゐる說が近來多くなつた。平安時代の扇面古寫經なぞも、繪卷物の一樣式と見て、挿繪美術の發祥期を其處までもつて行つてもいゝ。殊に古寫經は木版の墨線へ肉筆手彩色を施したその技法から見て、挿繪美術發祥のために重大な役割をもつてゐる。併し經卷であるから、繪畫と本文とは、緣の薄い圖柄ではあるが、文字と繪畫とを巧みに調和させたところなどは、後代挿繪美術發達のために、力强い暗示を與へた

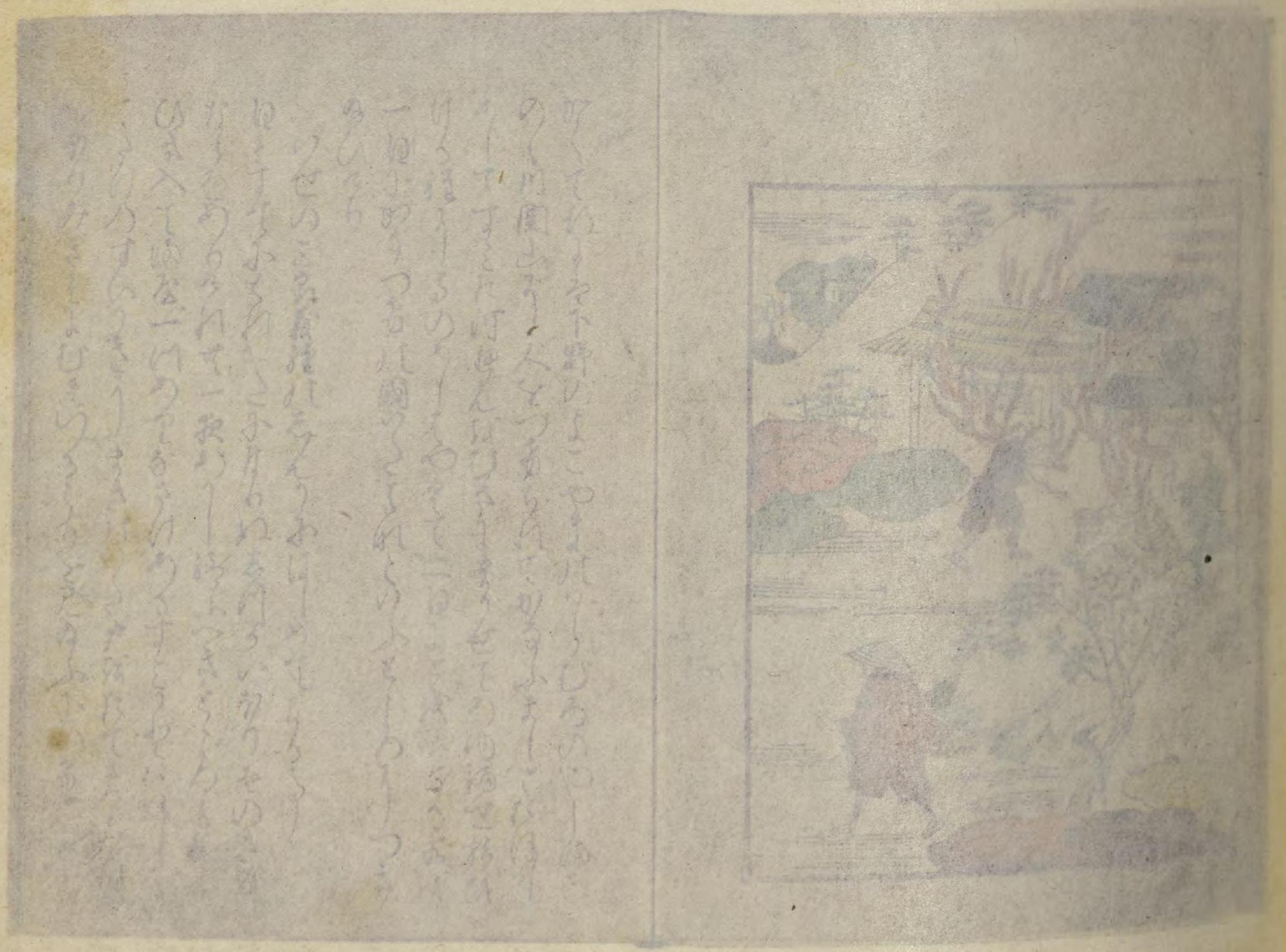
とも思はれる。本格的の挿繪としては、延應元年「首楞嚴經」が挿繪入木版で刊行され、これが我が國最初の挿繪美術となつた。續いて寛元四年「佛制比丘六物圖」がやはり挿繪入木版で出版された。支那では咸通九年「金剛般若經」の扉繪に、木版で佛像を表はしたものがある。これが支那の挿繪としては最古のものといはれてゐる。應永二十一年「融通念佛緣起」二卷、文祿年間には、「弘法大師行狀緣起」十卷が木版手彩色で刊行された。これは册子本ではなく、繪卷物だが、挿繪美術の方からは、重大な參考資料である。我が國初期發祥當時の挿繪美術は、多く支那の摸刻本の挿繪であつたから、支那の挿繪は、我が國挿繪美術のために甚だ關係が深いのである。殊に宗教關係の經文の類とか、醫學・天文の書物等は、支那本の摸刻といふ説だから、これ等の影響は、當時の挿繪界を指導したとも思はれる。室町時代乃至江戸初期あたりに、奈良繪本と稱する肉筆の挿繪入小説本が現れた。この奈良繪本は、繪卷物と木版繪入本との中間に位する如きもので、その起りに就いては暫く措くとして、とにかく挿繪と文學とが、一册の内に互に獨立した立場を守つて、各々その本分を盡してゐる所に、挿繪美術の本領を示したものといへる。奈良繪本の挿繪は、肉筆極彩色で、多く土佐繪風のもので、精巧なものもないではないが、多くは粗雜な描寫と下手モノ的の色調を現はしてゐる。この奈良繪本と木版繪入本との間には、どれだけの關聯があるのか、その邊は詳かにしないが、何等かのつらなりは必ずあると考へられる。奈良繪本の古いのは、何年頃に製作されたものか、[illegible]

もその製作はあつたらしい。これは或は奈良繪本として、終りに近いものかと思はれる。いづれにしても奈良繪本なるものは、繪卷物を平俗化した形式であつて、挿繪美術とは關係甚だ深いものがある。この點、佛教關係の經文や科學書類よりも、一層注意すべきものである。〔江戸初期木版本挿繪〕江戸時代になると木版の技術も進歩して、挿繪入の文學書が旺んに刊行され出した。江戸初期、慶長・寛永の頃は、挿繪を加へた文學、假名草子・舞の本・淨瑠璃・お伽草子・物語（各別項）・歌書・教訓書の類から理科學書までも出版された。殊に挿繪に手彩色を加へた丹緑本の出現した事は、未だ奈良繪本・繪卷物の傳統が遺つてゐたものと思はれ、頗る面白い現象である。挿繪の畫風も、土佐・狩野の影響を明かに傳へてゐて、上品な理想派風を保存するあたり、正に繪卷物系統と見て間違ひない。「源氏物語」「平家物語」「うつぼ物語」、その他平安文學の飜刻が、これ等の挿繪を更に繪卷らしくさせた傾きもあると思ふ。繪入木版本の小説類では、慶長十三年刊の「伊勢物語」等が最初だといはれてゐる。この「伊勢物語」は、光悅の意匠と記されてゐるところから、世に光悅本と呼ばれ、或は嵯峨本とも稱されてゐる。「伊勢」の外に「三十六歌仙」その他がある。木版挿繪入小説類の出版は、これを最初として、寛永から寛文あたりにかけては、非常に多數にのぼつてゐる。併し挿繪の筆者に就いては、未だ明瞭になつてゐない。僅かに雛屋立圃・蒔繪師源三郎・吉田半兵衞・菱川師宣等の名の散見するのみで、確實にその畫風を論評するまでに研究が屆いてゐない。尤も菱川師宣も、寛文頃になると、作品に署名してゐるから、これ

等は論爭の限りでないが、寛文以前の初期の作品は、何れも無記名だから、他の作家と混淆されて判別し難い。とにかく師宣が出て、浮世繪畫派を拓いてからは、挿繪の方も多く、浮世繪畫派の手に任せられた觀がある。師宣の挿繪は、後期になると小説類から別れ、祕戲文學と結びついて、閨房畫を主題とするに至つた。文學の方も、天和・貞享時代から元祿時代にかけて、西鶴の好色本が起つたり、八文字屋本が出たりして、その挿繪には、半兵衞・師宣・西川祐信（或は西鶴自畫もあるといふ説もあるが）等の挿繪界の大家が現れ、ここに挿繪美術を完成するに至つた。西川祐信の八文字屋本挿繪は、出版當時既に世の好評を得たと傳へられてゐるのだから、その傑出した手腕に關西の挿繪界を風靡させたことは言ふまでもない。祐信の作品は、挿繪として立派であるのみでなく、繪畫表現の歷史からいつて、寫實派に進展した時代の代表作と見ることも出來る。祐信の時代に、江戸には奥村政信等がゐて、繪物語に近い本の挿繪や閨房祕戲畫を畫いてゐた。政信の前には、鳥居清信等一派の畫家が、赤本・黑本の挿繪を畫いた。〔祐信以後の挿繪〕西川祐信の歿後は、事實上、關西の挿繪畫家は勢力を失つた。江戸に於ては、奥村政信・鳥居清滿等が、黃表紙・繪本等を畫いてゐたが、歌川豐國・同豐廣が出て、讀本・黃表紙へ細密な描寫を試みて以來、葛飾北齋が現れて、挿繪界を一變させるにいたつた。北齋の挿繪は讀本に多いが、豐國の劇的なそれともちがつて、北齋のは極端な寫實を旨とし、毛筆で表現し得る極限の細描を試みた。北齋は祐信と共に挿繪界の代表的作家と評している。豐國は挿繪に後者の做風を

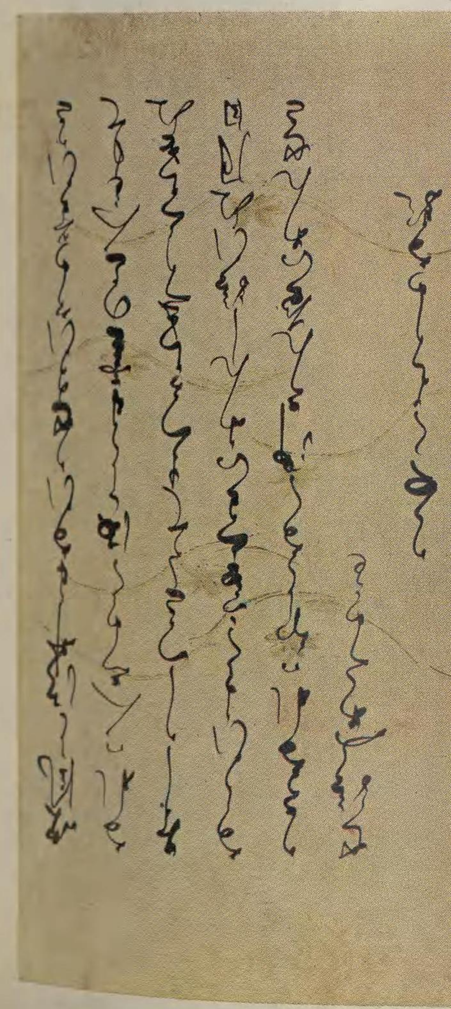
應用して、この方で人氣もあつたし、その作は特色もあるが、挿繪としては北齋に及ばない。豐廣も挿繪畫家として、相當の地位を占めてゐるが特色は強くない。この間に小説家十返舍一九が、漫畫風の挿繪を試みたり、大阪の耳鳥齋が、皮肉な繪を畫いたが、挿繪史の方からは特に彼を擧げる必要を認めない。こゝに注意すべきは、草雙紙・讀本等の挿繪は作者がその圖柄の指定をなしたことである。これは作者と畫家との合作であつて、この傾向は合卷に至つて益々甚だしい。而して合卷に於ける挿繪と本文との關係は非常に密接なものとなり、一種の繪畫小説とも稱すべき特殊な文學となつた。合卷では、歌川國貞の「田舍源氏」の挿繪が最も面白い。春水の人情本挿繪は、主として歌川國直が畫いてゐるが祕戲畫に近い。かくて挿繪界は、寫實派から理想派に轉じかけた時に明治維新に際會した。〔明治以後〕明治の初年には、浮世繪師の仕事として、小説の挿繪と文明開化の錦繪があつた。挿繪の方では、芳幾が頭角を現してゐて、彼の挿繪は單行本や新聞小説に用ひられた。又畫家の名は不明だが、當時の小説類、殊に政治小説などに石版畫の挿繪が流行した。同時に少數ではあつたが、銅版畫の挿繪もあつた。中頃には小林清親が漫畫を畫いて團々珍聞へ掲載したり、曉齋が達筆を揮つたりした。併し挿繪としての名作は、梶田半古が新聞へ連載したものかと思ふ。その他にも優れた挿繪は多い。明治の終り頃には、雜誌へ一條成美・竹久夢二等の女性的な挿繪も出た。大正時代では石井鶴三の新聞挿繪が好評だつた。挿繪が日本畫家の手から、洋畫家の手へと移つて來たのは、[illegible]

奈良絵本「いはやのさうし」（笹野堅氏蔵）



丹緑本「義經記」（笹野堅氏蔵）

モノ的の色調を現はしてゐる。この奈良繪本と木版繪入本との間には、どれだけの關聯があるのか、その邊は詳かにしないが、何等かのつらなりは必ずあると考へられる。奈良繪本の古いのは、何年頃に製作されたものか、それも詳かでないが、とにかく、江戸初期に寛文あたりにかけては、非常に多數にのぼつてゐる。併し挿繪の筆者に就いては、未だ明瞭になつてゐない。僅かに雛屋立圃・蒔繪師源三郎・吉田半兵衞・菱川師宣等の名の散見するのみで、確實にその畫風を論評するまでに研究が屆いてゐない。尤も菱川師宣も、寛文頃になると、作品に署名してゐるから、これ

讀本・黄表紙へ細密な描寫を試みて以來、葛飾北齋が現れて、挿繪界を一變させるにいたつた。北齋の挿繪は讀本に多いが、豐國の劇的なそれともちがつて、北齋のは極端な寫實を旨とし、毛筆で表現し得る極限の細描を試みた。北齋は新信と共に挿繪界の代表的作家と評していい。豐國は挿繪に彼者の似顔を

併し挿繪としての名作は、梶田半古が新聞へ連載したものかと思ふ。その他にも優れた挿繪は多い。明治の終り頃には、雜誌へ一條成美・竹久夢二等の女性的な挿繪も出た。大正時代では石井鶴三の新聞挿繪が好評だつた。挿繪が日本畫家の手から、洋畫家の手へと移つて來たのは、面白い現象である。同時に挿